

---

深 谷 市

---

# 宮ヶ谷戸／根岸／八日市／城西

---

福川河川改修関係埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 9 5

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



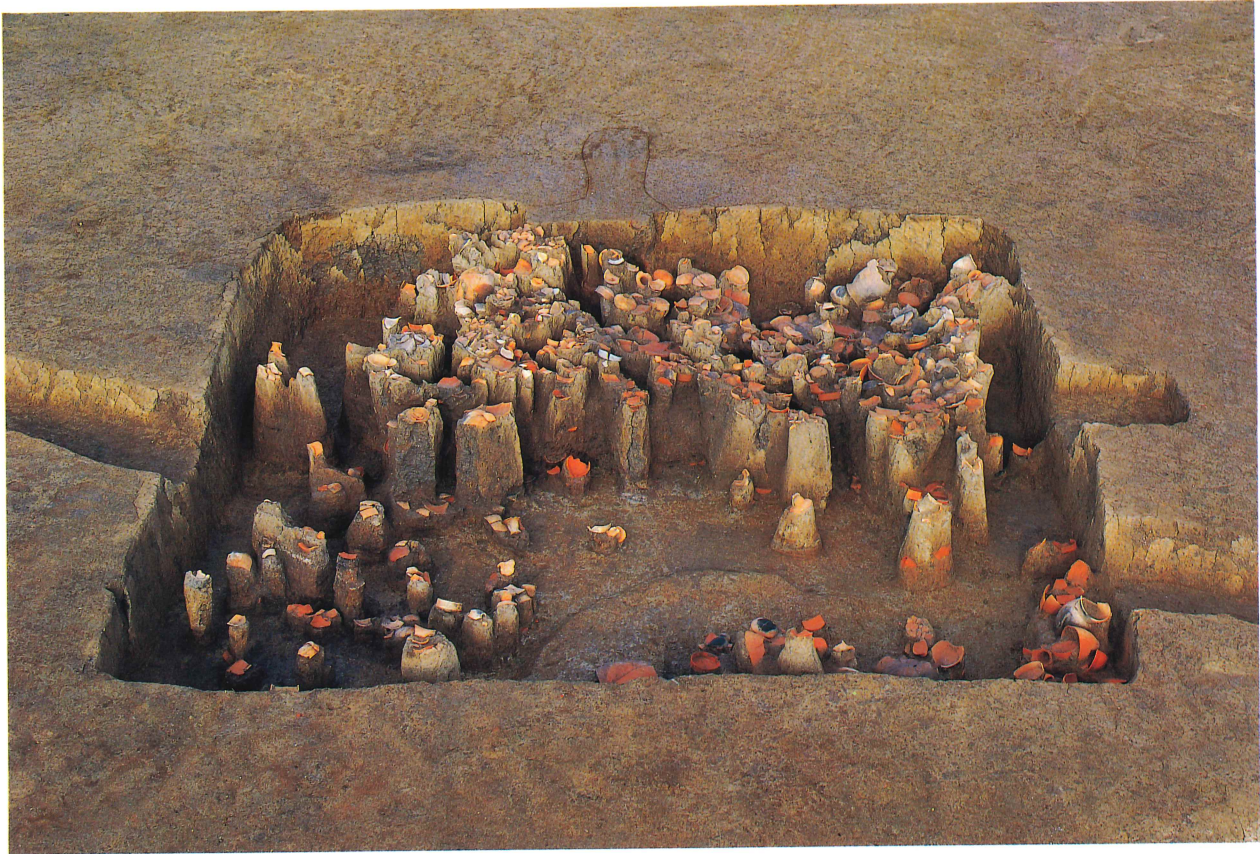
調査区遠景



宮ヶ谷戸遺跡航空写真



八日市遺跡西地区航空写真



八日市遺跡第3号住居跡遺物出土状況(1)



八日市遺跡第3号住居跡遺物出土状況(2)



八日市遺跡第3号住居跡出土遺物(1)



八日市遺跡第3号住居跡出土遺物(2)

# 序

福川は利根川水系の一つで、岡部町岡にある湧水地を源としています。本庄台地の水を集めた福川は、櫛引台地の崖線に沿って蛇行しながら深谷市内を抜け、荒川新扇状地の扇端を東流して行田市酒巻で利根川に合流しています。

福川に沿った多くの地域ではかんがい用の水資源として活用されてきましたが、一方では小河川のため川幅が狭く、大雨のたびに洪水の危険にさらされ、浸水による家屋や農作物などへの災害に見舞われてきました。

そこで県ではこれらの災害を未然に防止するため、逐次河積拡大の改修を進めてまいりましたが、このたび深谷市部分について着工することになりました。

深谷市の事業地内では数多くの埋蔵文化財が確認されました。そこで、関係各機関の間で慎重な協議を重ねられ、どうしても避けることができない遺跡については、当事業団が記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

今回報告いたします4遺跡がある深谷市は、埼玉県の北部に位置し、江戸時代には中山道の宿場町として栄え、また、明治時代以降は東京駅舎や迎賓館などで用いられた赤レンガの製造と「深谷ネギ」の生産等で全国的に知られています。平成6年7月には人口も10万人を超え、更なる発展が期待されています。

また、縄文時代の桜ヶ丘組石遺跡、深谷上杉氏が居城とした深谷城跡、樹齢約600年の大榆で有名な榆山神

社などの学術上貴重な遺跡や史跡も数多くみられます。

発掘調査の結果、宮ヶ谷戸遺跡からは古墳時代から平安時代にかけての集落跡、根岸遺跡からは平安時代の水田跡、八日市遺跡からは古墳時代の集落跡と古代の道路跡、城西遺跡では平安時代の集落跡などが夫々発掘され、多大な成果を収めることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものでありますが、かつて当事業団が行いました深谷バイパス・上武道路の建設事業に伴う発掘調査の成果と併せますと、当時の人々の生活を窺いえるものとして貴重な資料であります。先の調査報告書とともに、埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、教育・普及の資料として広く御活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大な御指導と御協力を賜りました埼玉県生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部河川課、埼玉県熊谷土木事務所、深谷市教育委員会、並びに発掘および整理作業に携われました方々に対し、厚く御礼申し上げます。

平成7年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 荒井 桂

# 例言

1. 本書は、埼玉県深谷市に所在する宮ヶ谷戸遺跡、根岸遺跡、八日市遺跡、城西遺跡の発掘調査報告書である。各遺跡における所在地、および発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知番号は下記のとおりである。

## 《宮ヶ谷戸遺跡》

深谷市東方字宮ヶ谷戸前1563番地他

平成5年6月4日付け 委保第5の425号

平成5年6月8日付け 委保第5の549号

## 《根岸遺跡》

深谷市原郷字椎木1467番地他

平成5年6月4日付け 委保第5の424号

平成5年6月8日付け 委保第5の550号

## 《八日市遺跡》

深谷市原郷字蟹原599番地1他

平成5年10月4日付け 委保第5の1128号

## 《城西遺跡》

深谷市原郷字蟹原535番地他

平成5年10月4日付け 委保第5の1129号

2. 発掘調査は、福川河川改修事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整を経て、埼玉県土木部河川課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3. 発掘調査は、西井幸雄、黒坂禎二、吉田 稔、大屋道則、中山浩彦が担当し、平成5年2月1日から平成6年3月31日まで行った。整理・報告書作成作業は、中山が担当し、平成6年4月1日から平成7年9月30日まで行った。なお、発掘調査と整理・報告書作成作業の組織は、第I章3節に示した。

4. 各遺跡での基準点測量と航空写真撮影は、株式会社日成プランに、口絵の遺物写真撮影は小川忠博氏に、出土土器の胎土分析は株式会社第四紀地質研究所の井上 巖氏に、八日市遺跡の土壌分析は株式会社古環境研究所の早田 勉氏にそれぞれ委託した。

5. 出土品の整理および図版作成は、中山が担当し、吉田 稔、石塚 香の協力を得た。

6. 本書で使用した航空写真以外の発掘調査時の写真撮影は各担当者が、口絵以外の遺物写真撮影は中山が、X線写真撮影は野中 仁が行った。

7. 本書の執筆は、第I章1節を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他を中山が担当した。

8. 本書の編集は、資料部資料整理第1課の中山が行った。

9. 本書にかかる資料は、平成7年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

10. 各遺跡名の略号は下記のとおりである。

宮ヶ谷戸遺跡 MYGYT

根岸遺跡 NGS

八日市遺跡 YUKIC

城西遺跡 JNS

11. 本書の作成にあたり、下記の方々よりご教示、ご協力を賜った。(敬省略)

青木 克尚 古池 晋禄 酒巻 忠史

澤出 晃越 鈴木 敏弘

# 凡例

1. 本書における挿図の指示は以下のとおりである。

- X、Yによる座標数値は、国家標準直角座標第IX系に基づく各座標値を示し、方位は全て座標北をあらわす。

- グリッドは10×10mで設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭名称を用いた。

- 遺構の表記記号は下記のとおりである。

SJ…住居跡 SB…掘立柱建物跡 SD…溝

SK…土塋 P…ピット SX…その他

- 遺構名称・番号には、発掘調査時に付したものをできる限りそのままに報告した。しかし、一部の遺構については新番号を付与した。第1表の新旧対照表を参照していただきたい。

- 遺構・遺物の縮尺は原則として以下のとおりである。それ以外のものに関しては個別に示した。

遺構 住居跡・掘立柱建物跡・土塋 1/60

溝 1/60、1/200 カマド 1/30

遺物 土器 1/4 鉄製品 1/3

土製品 1/2 石製品 1/1

縄文土器拓影図・石器 1/3

- 断面図における数値は、すべて標高を表す(単位m)。各遺跡においてレベル数値を以下のとおり設定し、それ以外のものについてのみ個別に示した。

宮ヶ谷戸遺跡 31.700m

根岸遺跡 31.400m

八日市遺跡 32.800m

城西遺跡 33.600m(東地区)

33.100m(西地区)

- 土層説明文中に使用した土の色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修1990)による。

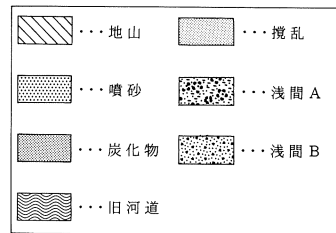
- 遺物分布図におけるドットの記号の指示は以下のとおりである。

●…土師器・縄文土器 ○…須恵器・陶磁器

△…石製品 ▲…石器 □…土製品

■…鉄製品 ★…その他

- 遺構図中のスクリーントーンの指示は以下のとおりである。



- 土器実測図の断面は、土師器を白抜き、須恵器を黒塗り、施釉陶器を網かけ10%で表現した。また、土師器で黒色処理が施されているものについては、その部分を40%の網掛けで表現した。

2. 遺物観察表の記載は以下のとおりである。

- 法量の単位はcmで、( )を付したものは推定値を示す。なお、破片の器高は残存高を示す。

- 胎土は、肉眼で観察できた範囲での含有物を以下のアルファベットで表した。

A…白色針状物質 B…角閃石 C…白色粒子

D…石英 E…長石 F…雲母 G…赤色粒子

H…砂粒子 I…小石(礫) J…黒色粒子

なお、'を付したものは微粒子(径が1mm以下)を表す。

- 焼成は、4ランクに分けた。A-良好、B-普通、C-やや不良、D-不良である。

- 遺物の色調は、上記の『土色帖』を用いた。

- 残存率は5%単位で表した。破片の場合は、実測図に示した部位に対する割合である。



# 目次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 調査の概要	1	(2)古墳時代以降の遺構と遺物	105
1 発掘調査に至る経過	1	VII 城西遺跡の調査	215
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	1 遺跡の概観	215
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3	2 東地区の調査	217
II 遺跡の立地と環境	4	(1)縄文時代の遺構と遺物	217
III 遺跡の概要	9	(2)古墳時代以降の遺構と遺物	220
IV 宮ヶ谷戸遺跡の調査	13	3 西地区の調査	230
1 遺跡の概観	13	(1)平安時代の遺構と遺物	231
2 古墳時代以降の遺構と遺物	16	VIII 結語	235
V 根岸遺跡の調査	89	1 宮ヶ谷戸遺跡	235
1 遺跡の概観	89	2 根岸遺跡	236
2 古墳時代以降の遺構と遺物	91	3 八日市遺跡	236
VI 八日市遺跡の調査	99	4 城西遺跡	237
1 遺跡の概観	99	5 八日市遺跡の道路跡について	238
2 東地区の調査	101	IX 自然科学的分析	245
(1)古墳時代以降の遺構と遺物	101	1 埼玉県深谷市八日市遺跡の火山灰分析	245
3 西地区の調査	102	2 出土土器の胎土分析	251
(1)縄文時代の遺構と遺物	102		

# 挿 図 目 次

第1図	埼玉県地形図	4	第34図	第21・22号住居跡	41
第2図	周辺の遺跡	6・7	第35図	第21・22号住居跡遺物出土状況	42
第3図	遺跡地形図	10・11	第36図	第21号住居跡出土遺物	43
《宮ヶ谷戸遺跡》					
第4図	宮ヶ谷戸遺跡全体図(1)	14	第37図	第22号住居跡出土遺物	44
第5図	宮ヶ谷戸遺跡全体図(2)	15	第38図	第23号住居跡	45
第6図	第1号住居跡および出土遺物	16	第39図	第23号住居跡出土遺物	45
第7図	第2号住居跡および出土遺物	16	第40図	第24号住居跡	46
第8図	第3号住居跡	17	第41図	第24号住居跡P1遺物出土状況	47
第9図	第4号住居跡および出土遺物	17	第42図	第24号住居跡出土遺物	47
第10図	第5号住居跡および出土遺物	18	第43図	第25号住居跡および出土遺物	48
第11図	第6号住居跡・カマド	19	第44図	第26～30号住居跡	50
第12図	第6号住居跡出土遺物	20	第45図	第26号住居跡	51
第13図	第7・8号住居跡および出土遺物	21	第46図	第26号住居跡カマド	51
第14図	第9・11～13号住居跡および出土遺物	22	第47図	第26号住居跡遺物出土状況	52
第15図	第10号住居跡	23	第48図	第26号住居跡出土遺物(1)	53
第16図	第10号住居跡カマド	24	第49図	第26号住居跡出土遺物(2)	54
第17図	第10号住居跡出土遺物	25	第50図	第27・28号住居跡出土遺物	55
第18図	第12号住居跡出土遺物	26	第51図	第29号住居跡および出土遺物	56
第19図	第12・13号住居跡出土遺物	27	第52図	第30号住居跡	57
第20図	第14号住居跡	28	第53図	第30号住居跡出土遺物	57
第21図	第14号住居跡出土遺物	29	第54図	第31号住居跡および出土遺物	58
第22図	第15号住居跡	30	第55図	第32号住居跡および出土遺物	59
第23図	第15号住居跡カマド	30	第56図	第33号住居跡	60
第24図	第15号住居跡出土遺物	31	第57図	第34号住居跡	61
第25図	第16号住居跡	32	第58図	第34号住居跡カマド	62
第26図	第16号住居跡カマド	33	第59図	第34号住居跡出土遺物	62
第27図	第16号住居跡遺物出土状況	34	第60図	第35～40号住居跡	63
第28図	第16号住居跡出土遺物(1)	35	第61図	第35・36号住居跡出土遺物(1)	64
第29図	第16号住居跡出土遺物(2)	36	第62図	第35・36号住居跡出土遺物(2)	65
第30図	第17号住居跡および出土遺物	38	第63図	第37号住居跡出土遺物	67
第31図	第18・19号住居跡	39	第64図	第38・39号住居跡出土遺物	67
第32図	第19号住居跡出土遺物	39	第65図	第40号住居跡および出土遺物	68
第33図	第20号住居跡および出土遺物	40	第66図	第41・42号住居跡	69
			第67図	第42号住居跡カマド	70

第68図	第42号住居跡出土遺物	71	第103図	第1号住居跡出土遺物(1)	109
第69図	第43号住居跡	72	第104図	第1号住居跡出土遺物(2)	110
第70図	第43号住居跡出土遺物	73	第105図	第2号住居跡	112
第71図	第44号住居跡	74	第106図	第2号住居跡出土遺物	113
第72図	第44号住居跡出土遺物	75	第107図	第3号住居跡	114
第73図	第45号住居跡および出土遺物	77	第108図	第3号住居跡カマド	115
第74図	第46号住居跡および出土遺物	78	第109図	第3号住居跡遺物出土状況(1)	116
第75図	第1号掘立柱建物跡	79	第110図	第3号住居跡遺物出土状況(2)	118
第76図	第1号溝	80	第111図	第3号住居跡遺物出土状況(3)	119
第77図	土壙	81	第112図	第3号住居跡出土遺物(1)	120
第78図	土壙出土遺物	82	第113図	第3号住居跡出土遺物(2)	122
第79図	ピット	84	第114図	第3号住居跡出土遺物(3)	124
第80図	ピット出土遺物	85	第115図	第3号住居跡出土遺物(4)	126
第81図	表採遺物	85	第116図	第3号住居跡出土遺物(5)	127
第82図	鉄製品	86	第117図	第3号住居跡出土遺物(6)	128
第83図	石製品	87	第118図	第3号住居跡出土遺物(7)	130
第84図	土製品	88	第119図	第3号住居跡出土遺物(8)	132
《根岸遺跡》			第120図	第3号住居跡出土遺物(9)	134
第85図	根岸遺跡全体図	90	第121図	第3号住居跡出土遺物(10)	135
第86図	第1～11号溝	91	第122図	第3号住居跡出土遺物(11)	136
第87図	第12～17号溝	92	第123図	第3号住居跡出土遺物(12)	137
第88図	第16号溝	93	第124図	第3号住居跡出土遺物(13)	138
第89図	第16号溝遺物出土状況	93	第125図	第4号住居跡	140
第90図	第21・22号溝および出土遺物	94	第126図	第4号住居跡出土遺物	141
第91図	水田跡 第23・24号溝	96	第127図	第5号住居跡	142
第92図	根岸遺跡出土遺物	97	第128図	第5号住居跡カマド	142
《八日市遺跡》			第129図	第5号住居跡遺物出土状況	143
第93図	八日市遺跡全体図	100	第130図	第5号住居跡出土遺物(1)	144
第94図	東地区旧河道	101	第131図	第5号住居跡出土遺物(2)	145
第95図	第8号土壙および出土遺物	102	第132図	第6号住居跡	147
第96図	グリッド出土遺物	102	第133図	第6号住居跡カマド	147
第97図	石器(1)	103	第134図	第6号住居跡遺物出土状況	148
第98図	石器(2)	104	第135図	第6号住居跡出土遺物(1)	149
第99図	西地区住居跡配置図	105	第136図	第6号住居跡出土遺物(2)	150
第100図	第1号住居跡	106	第137図	第7号住居跡	153
第101図	第1号住居跡カマド	107	第138図	第7号住居跡出土遺物	154
第102図	第1号住居跡遺物出土状況	108	第139図	第8号住居跡	155

第140図	第8号住居跡カマド	156	第177図	溝(4)	194
第141図	第8号住居跡出土遺物	156	第178図	溝出土遺物	195
第142図	第9号住居跡	158	第179図	土壙	196
第143図	第9号住居跡出土遺物	158	第180図	ピット群(P 1～14)	198
第144図	第10号住居跡	159	第181図	ピット群出土遺物	198
第145図	第10号住居跡遺物出土状況	160	第182図	ピット(1)	199
第146図	第10号住居跡出土遺物(1)	161	第183図	ピット(2)	200
第147図	第10号住居跡出土遺物(2)	162	第184図	西地区旧河道	201
第148図	第11号住居跡	164	第185図	西地区旧河道遺物出土状況(1)	202
第149図	第11号住居跡遺物出土状況	165	第186図	西地区旧河道遺物出土状況(2)	203
第150図	第11号住居跡出土遺物	166	第187図	西地区旧河道出土遺物(1)	204
第151図	第12号住居跡	168	第188図	西地区旧河道出土遺物(2)	206
第152図	第12号住居跡遺物出土状況	169	第189図	西地区旧河道出土遺物(3)	208
第153図	第12号住居跡出土遺物(1)	170	第190図	西地区旧河道出土遺物(4)	209
第154図	第12号住居跡出土遺物(2)	172	第191図	鉄製品	211
第155図	第12号住居跡出土遺物(3)	173	第192図	石製品	212
第156図	第12号住居跡出土遺物(4)	174	第193図	土製品	213
第157図	第13号住居跡	176	《城西遺跡》		
第158図	第14号住居跡および出土遺物	177	第194図	城西遺跡全体図	216
第159図	第15号住居跡	178	第195図	第1号住居跡	217
第160図	第16号住居跡および出土遺物	178	第196図	第1号住居跡出土遺物	218
第161図	第17号住居跡および出土遺物	179	第197図	土壙	219
第162図	第18号住居跡および出土遺物	180	第198図	石器	219
第163図	第19号住居跡および出土遺物	181	第199図	第2号住居跡および出土遺物	220
第164図	第20号住居跡	182	第200図	第3号住居跡	220
第165図	第20号住居跡出土遺物	182	第201図	第4号住居跡	221
第166図	西地区溝・土壙・ピット配置図	183	第202図	第4号住居跡遺物出土状況	222
第167図	第1号道路跡 第15～19号溝(1)	184	第203図	第4号住居跡カマド	222
第168図	第1号道路跡 第15～19号溝(2)	185	第204図	第4号住居跡出土遺物(1)	223
第169図	第2号道路跡(1) 第45～47号溝	189	第205図	第4号住居跡出土遺物(2)	224
第170図	第2号道路跡(2)	187	第206図	第5号住居跡	225
第171図	第2号道路跡(3)	188	第207図	第5a号住居跡	226
第172図	第1・2号道路跡出土遺物	189	第208図	第5a号住居跡カマド	226
第173図	第1号建物跡	190	第209図	第5b号住居跡	227
第174図	溝(1)	191	第210図	第5b号住居跡出土遺物	228
第175図	溝(2)	192	第211図	鉄製品	228
第176図	溝(3)	193	第212図	第1・2号溝	229

第213図	第1号掘立柱建物跡(1) ……………	230	第219図	表採 ……………	234
第214図	第1号掘立柱建物跡(2) ……………	231	第220図	埼玉県式内社・古代寺院跡分布図 ……	239
第215図	第1号掘立柱建物跡出土遺物 ……	231	第221図	道路跡関連の主な遺跡(1) ……………	240
第216図	第2号掘立柱建物跡 ……………	232	第222図	道路跡関連の主な遺跡(2) ……………	241
第217図	第3号掘立柱建物跡 ……………	233	第223図	道路跡集成図 ……………	242
第218図	ピット ……………	234			

## 表 目 次

第1表	遺構番号新旧対照表 ……………	12	《八日市遺跡》		
	《宮ヶ谷戸遺跡》		第3表	土壙一覧表 ……………	195
第2表	土壙一覧表 ……………	83			

# 図 版 目 次

## 《宮ヶ谷戸遺跡》

- 図版1 宮ヶ谷戸遺跡航空写真  
調査区全景
- 図版2 第1号住居跡  
第2号住居跡、第2号住居跡貯蔵穴  
第3号住居跡、第4号住居跡カマド
- 図版3 第4号住居跡  
第6号住居跡
- 図版4 第7・8号住居跡  
第9～13号住居跡
- 図版5 第10号住居跡  
第14号住居跡
- 図版6 第15号住居跡  
第15号住居跡カマド
- 図版7 第16号住居跡  
第16号住居跡カマド  
第16号住居跡炭化物出土状況  
第16号住居跡カマド遺物出土状況(1)・(2)
- 図版8 第16号住居跡遺物出土状況(1)～(5)
- 図版9 第19号住居跡  
第20号住居跡
- 図版10 第21・22号住居跡  
第21号住居跡遺物出土状況  
第22号住居跡遺物出土状況(1)～(3)
- 図版11 第23号住居跡  
第24号住居跡
- 図版12 第25～30・33号住居跡  
第25号住居跡
- 図版13 第26号住居跡  
第26～30号住居跡遺物出土状況
- 図版14 第26号住居跡カマド  
第26号住居跡遺物出土状況(1)～(3)  
第29号住居跡カマド、第30号住居跡カマド
- 図版15 第31号住居跡  
第32号住居跡
- 図版16 第34～42号住居跡  
第35号住居跡カマド、第36号住居跡カマド  
第35・36号住居跡遺物出土状況  
第39号住居跡カマド
- 図版17 第41・42号住居跡  
第43号住居跡
- 図版18 第44号住居跡  
第41号住居跡耳環出土状況  
第43号住居跡カマド  
第43号住居跡遺物出土状況  
第44号住居跡カマド
- 図版19 第1号掘立柱建物跡  
第1号溝
- 図版20 第1号土壙、第2号土壙、第3号土壙  
第7号土壙、第8号土壙、第9号土壙  
第10号土壙、第11号土壙
- 図版21 第13・14号土壙、第15号土壙、第16号土壙  
第17号土壙、第20号土壙、第32号土壙  
ピット1・2、ピット17
- 図版22 第2・6・8・10号住居跡出土遺物
- 図版23 第12・14号住居跡出土遺物
- 図版24 第14・15号住居跡出土遺物
- 図版25 第16号住居跡出土遺物(1)
- 図版26 第16号住居跡出土遺物(2)
- 図版27 第19～22号住居跡出土遺物
- 図版28 第22号住居跡出土遺物
- 図版29 第23～25号住居跡出土遺物
- 図版30 第26号住居跡出土遺物(1)
- 図版31 第26号住居跡出土遺物(2)
- 図版32 第31・34～36・43号住居跡出土遺物
- 図版33 第44・46号住居跡、土壙、ピット出土遺物
- 図版34 鉄製品、石製品、土製品

## 《根岸遺跡》

- 図版35 東地区確認状況、西地区確認状況  
 第1～11号溝、第16号溝遺物出土状況  
 第21号溝板碑出土状況、水田跡
- 図版36 根岸遺跡出土遺物  
 《八日市遺跡》
- 図版37 八日市遺跡航空写真  
 東地区全景
- 図版38 西地区東側全景  
 西地区西側全景
- 図版39 第1号住居跡  
 第2号住居跡
- 図版40 第3号住居跡  
 第3号住居跡カマド、第3号住居跡貯蔵穴  
 第3号住居跡遺物出土状況(1)・(2)
- 図版41 第3号住居跡遺物出土状況(3)  
 第3号住居跡遺物出土状況(4)
- 図版42 第3号住居跡遺物出土状況(5)～(12)
- 図版43 第5号住居跡  
 第5号住居跡カマド  
 第5号住居跡カマド遺物出土状況  
 第5号住居跡遺物出土状況(1)・(2)
- 図版44 第6号住居跡  
 第6号住居跡カマド  
 第6号住居跡遺物出土状況(1)～(3)
- 図版45 第7号住居跡  
 第8号住居跡
- 図版46 第10号住居跡  
 第10号住居跡貯蔵穴  
 第10号住居跡遺物出土状況(1)～(3)
- 図版47 第11号住居跡  
 第12号住居跡
- 図版48 第12号住居跡遺物出土状況(1)～(5)
- 図版49 第14号住居跡  
 第16号住居跡
- 図版50 第17号住居跡  
 第18号住居跡
- 図版51 第1号道路跡 第15～19号溝(1)・(2)
- 図版52 第2号道路跡(1)  
 第2号道路跡(2) 第46・47号溝
- 図版53 第2号道路跡および第46・47号溝土層断面  
 第2号道路跡(3)  
 第2号道路跡柵列(1)・(2)
- 図版54 第1号建物跡(1)・(2)  
 第1～4号溝、第2～4号溝  
 第5・33～38号溝、第5・33～39号溝
- 図版55 第6号溝  
 第8～14・23・24・29～31号溝(1)・(2)  
 第20～23号溝、第32・42号溝、第43・44号溝
- 図版56 第1号土壙、第8号土壙  
 第9号土壙、第10号土壙  
 ピット群(ピット1～14)
- 図版57 旧河道遺物出土状況(1)～(5)
- 図版58 縄文時代の遺物
- 図版59 第1号住居跡出土遺物
- 図版60 第1・2・4号住居跡出土遺物
- 図版61 第3号住居跡出土遺物(1)
- 図版62 第3号住居跡出土遺物(2)
- 図版63 第3号住居跡出土遺物(3)
- 図版64 第3号住居跡出土遺物(4)
- 図版65 第3号住居跡出土遺物(5)
- 図版66 第3号住居跡出土遺物(6)
- 図版67 第3号住居跡出土遺物(7)
- 図版68 第3号住居跡出土遺物(8)
- 図版69 第3号住居跡出土遺物(9)
- 図版70 第3号住居跡出土遺物(10)
- 図版71 第5号住居跡出土遺物(1)
- 図版72 第5号住居跡出土遺物(2)
- 図版73 第6号住居跡出土遺物
- 図版74 第6～8号住居跡出土遺物
- 図版75 第9・10号住居跡出土遺物
- 図版76 第10号住居跡出土遺物
- 図版77 第11・12号住居跡出土遺物
- 図版78 第12号住居跡出土遺物(1)
- 図版79 第12号住居跡出土遺物(2)

- 図版80 第16号住居跡・旧河道出土遺物  
第4号住居跡遺物出土状況(1)~(3)
- 図版81 旧河道出土遺物  
図版87 第5号住居跡
- 図版82 鉄製品、石製品、土製品  
第5a号住居跡カマド  
《城西遺跡》  
第5b号住居跡カマド  
第5b号住居跡遺物出土状況(1)・(2)
- 図版83 東地区東側全景  
東地区西側全景  
図版88 西地区全景  
西地区全景
- 図版84 第1号住居跡  
第1号土壙、第2号土壙  
第1号溝、第2号溝  
図版89 第1・2号掘立柱建物跡  
第3号掘立柱建物跡
- 図版85 第2号住居跡  
第3号住居跡  
図版90 縄文時代の遺物
- 図版86 第4号住居跡  
第4号住居跡カマド  
図版91 第2・4号住居跡出土遺物  
図版92 第4号住居跡出土遺物、表採埴輪



# I 調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しい92(くに)づくり」を基本理念として、種々の施策を講じている。

県北部の深谷市、熊谷市、妻沼町を流下し利根川に合流する福川は、地域の都市化により流出量が増大したため、昭和37年度から川積の拡大を図る改修工事が継続して実施されてきた。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした開発事業と文化財の保護について関係部局と定期的に協議を重ね調整を図ってきたところであるが、当事業は協議案件からはずれ、深谷市教育委員会からの連絡により事業を把握し、県土木部河川課と協議をもった。平成4年11月24日付け河第666号で河川課長から河川改修事業地における埋蔵文化財の所在と取り扱いについて照会があり、翌日から2日間にわたり所在確認調査を実施した。その結果、古墳時代の住居跡等を確認したので、12月7日付け教文第849号で次の埋蔵文化財包蔵地の所在等について回答した。

遺跡名	種別	時代
宮ヶ谷戸遺跡	集落跡	平安
根岸遺跡	集落跡	古墳・平安

確認調査の結果をふまえた協議では、すでに事業が始まっており、計画変更が不可能であることから改修工事予定地について記録保存の措置を講じることとし財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することとなった。

その後、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、河川課、文化財保護課の三者で工事工程、調査計画、調査期間などについて協議し、平成5年2月から急遽発

掘調査を開始することとした。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が平成5年2月9日付け河第922号で埼玉県知事から提出され、57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から平成5年1月11日付け財埋文第656号及び657号で提出された。届出に対し文化庁から平成5年6月4日付け委保第5の424号及び425号で通知があった。

その後、宮ヶ谷戸遺跡・根岸遺跡の上流工事予定地の埋蔵文化財に所在について河川課長から照会があり平成5年3月1日～5日にわたり所在確認調査を実施した。その結果、古墳～平安時代にかけての遺構等を確認したので、平成5年3月29日付け教文第1361号で次の埋蔵文化財包蔵地の所在等について回答した。

遺跡名	種別	時代
八日市遺跡	集落跡	古墳～平安
城西遺跡	集落跡	古墳～平安

宮ヶ谷戸遺跡・根岸遺跡の発掘調査は平成5年度に継続し、さらに八日市遺跡・城西遺跡の発掘調査に着手した。法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が平成5年7月2日付け河第265号で埼玉県知事から提出され、57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から平成5年4月1日付け財埋文第2号及び3号、6月18日付け財埋文第220号及び221号で提出された。届出に対し文化庁から平成5年6月8日付け委保第5の549号及び550号、10月4日付け委保第5の1128号及び1129号で指示通知があった。

(文化財保護課)

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

### 【発掘調査】

今事業対象の4遺跡（宮ヶ谷戸・根岸・八日市・城西遺跡）は、城西遺跡東地区を除いて台地下の沖積地にあり、増水期には冠水を余技なくされるものと予想された。調査は、現道などで区切られた遺跡内の各地点を単位として行い、地下水位の増減を考慮しつつ、並行、あるいは調査順を逆転させてこれに対処した。  
{平成4年度}

平成5年2月、根岸遺跡の表土掘削と遺構の確認を中心に行い、一部の遺構のトレンチ調査を行った。

3月、宮ヶ谷戸遺跡の表土掘削と遺構の確認を行った結果、古墳から平安時代の住居跡20軒程が検出された。そのうち住居跡2軒の調査にとりかかった。  
{平成5年度}

昨年度に引き続き、宮ヶ谷戸遺跡の発掘調査から着手した。調査は4月から7月までの3ヵ月間を要し、これと並行して同遺跡の未着手部分、八日市遺跡東地区、および城西遺跡の2地点の表土掘削を行った。全ての遺構の調査がほぼ終了した時点の7月上旬には航空写真撮影を行った。

8月からは、調査の進行上、原新田橋の脇にあった現場事務所を八日市橋の脇に移設して、八日市遺跡東地区の調査にとりかかった。調査区内を横断するように福川の旧河道があったが、増水期ということもあり1m程掘り進めたところで湧水が著しく、トレンチによる調査で断念した。中旬からは、今回の調査区内で唯一台地上にあり、増水期でも調査が可能であった城西遺跡東地区の調査に着手した。また、調査と並行して八日市遺跡西地区の表土掘削も行った。

9月中旬には、城西遺跡東地区の調査は終了し、引き続き同西地区の調査に着手し、同月末に終了させるとともに、八日市遺跡西地区の表土掘削も完了した。

10月からは、八日市遺跡西地区に主力を投入するとともに、同月末には排水がままならなかった根岸遺跡も調査が可能となり、並行して作業を進めた。11月末

には根岸遺跡の調査も終了し、器材・休憩棟として残置した原新田橋脇のプレハブを撤去し、以後は調査の対象を八日市遺跡西地区に集中させた。第3号住居跡においては、覆土の上層から床面にかけて約1000点にも及ぶ遺物が出土したため、完掘に至るまでには、年末と年始を挟んで約2ヵ月の期間を要した。

11月、西地区東側の調査がほぼ終了し、道路を挟んだ西側に移った。

1月は、溝・第2号道路跡・旧河道の調査に着手した。2月中旬には、数日前に降雪もあった中で、航空写真を無事に取り終えることができた。

3月上旬には、遺構の調査が終了し、写真撮影、遺構の測量へと作業を移行した。下旬には全ての発掘作業は終了し、器材等の撤収、現場事務所の解体を行った。これをもって福川河川改修に伴う4遺跡の発掘調査は全て終了した。

### 【報告書作成】

整理作業は、平成6年4月から平成7年9月までの1年6ヵ月にわたって実施した。  
{平成6年度}

4月から、遺物については水洗・注記・接合・復元を各遺跡ごとに順次進めていき、形になったものから実測を行っていった。遺構の図面については第2原図を作成した後、トレースに移行した。11月、遺構のトレースが全て終了し、図版作成と遺物のトレースを始めた。2月には、遺物の接合がほぼ終了したので、復元と併せて土器の拓本を行った。

{平成7年度}

昨年度に引き続き、遺物の復元・実測・トレースを行い、それと並行して、遺構・遺物の図版作成を進めた。6月には、遺物の実測が全て終了し、遺物の写真撮影を行った。7月からは、割り付けと原稿の執筆を始めた。9月、原稿の執筆・編集作業が終了し、報告書の印刷に入った。校正を行った後、12月に報告書を刊行した。

### 3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

#### (1) 発掘調査(平成4年度)

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼 管理部長	倉持悦夫
理事兼調査部長 管理部	栗原文蔵
庶務課長	萩原和夫
主査	贄田清
主事	菊池久
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	長滝美智子
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
調査研究部	
調査部副部長	梅沢太久夫
調査第三課長	鈴木敏昭
主任調査員	西井幸雄
調査員	大屋道則

#### (2) 発掘調査(平成5年度)

理事長	荒井桂
副理事長	富田真也
専務理事	横川好富
常務理事兼 管理部長	柴崎光生
理事兼調査部長 管理部	中島利治
庶務課長	萩原和夫
主査	贄田清
主事	菊池久
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	長滝美智子
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
調査研究部	
調査部副部長	高橋一夫
調査第一課長	坂野和信
主任調査員	黒坂禎二
主任調査員	吉田稔
調査員	中山浩彦

#### (3) 整理事業(平成6年度)

理事長	荒井桂
副理事長	富田真也
専務理事	栃原嗣雄
常務理事兼 管理部長	加藤敏昭
理事兼調査部長 管理部	小川良祐
庶務課長	及川孝之
主査	市川有三
主事	長滝美智子
主事	菊池久
専門調査員兼 経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
資料部	
資料部部长	塩野博
資料部副部長兼 資料整理第一課長	谷井彪彦
調査員	中山浩彦

#### (4) 整理事業(平成7年度)

理事長	荒井桂
副理事長	富田真也
専務理事	吉川國男
常務理事兼 管理部長	新井秀直
理事兼調査部長 管理部	小川良祐
庶務課長	及川孝之
主査	市川有三
主任	長滝美智子
主事	菊池久
専門調査員兼 経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
資料部	
資料部部长	塩野博
主幹兼 資料部副部長兼 資料整理第一課長	谷井彪彦
調査員	中山浩彦

## II 遺跡の立地と環境

宮ヶ谷戸遺跡・根岸遺跡・八日市遺跡・城西遺跡の4遺跡は、埼玉県深谷市大字東方、原郷内に所在し、JR高崎線深谷駅から北東へ約2～3km、群馬県との県境を流れる利根川からは約2kmに位置している。これらの遺跡が位置する深谷市の地形は、南半の櫛引台地と北半の妻沼低地とに二分される。

櫛引台地は、荒川によって形成された荒川扇状地が浸食されてできた標高50～80mの洪積台地である。寄居を扇頂とし、西側の櫛引面と東側の一段低い寄居面の二つの段丘面からなり、そのほぼ中間を唐沢川が流れている。台地上には観音山(標高77m)、仙元山(標高98m)などの残丘状の小丘陵が残存している。対岸には江南台地がひろがっており、櫛引台地と違い荒川扇状地面が残った古い洪積台地である。

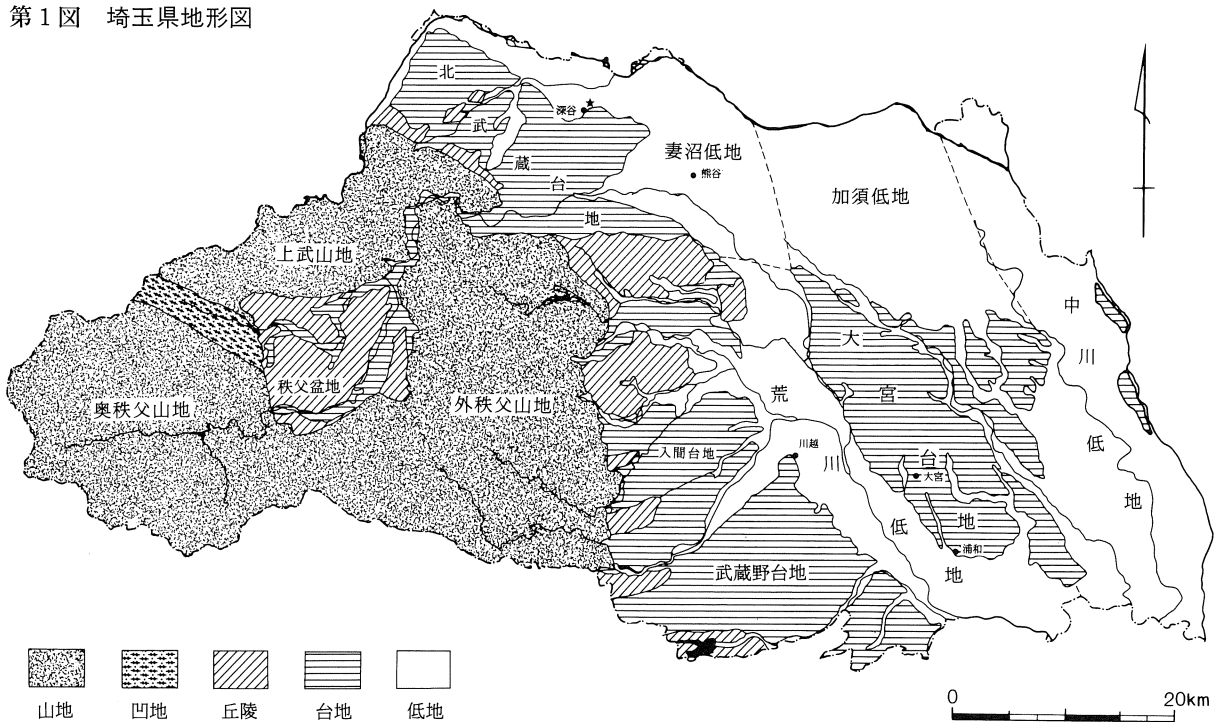
妻沼低地は、利根川や荒川によって形成された沖積地であり、自然堤防および荒川新扇状地による微高地と後背湿地や旧河道から成る。東は加須低地へと続くが、埋没台地の有無によって両者は分離されている。

荒川新扇状地は、荒川が新しく形成した標高25～50mの扇状地で、熊谷市大麻生を扇頂とし熊谷市街の大半を占めている。新扇状地の西側には旧河道と考えられる窪地が多くみられ、それらの一部が深谷市域の低地部にも続いている。

櫛引台地の崖線沿いには今回の調査原因となった福川が流れる。福川は利根川水系の一つで、岡部町岡にある湧泉を源とする。本庄台地や櫛引台地の水を集め蛇行しながら深谷市域を抜け、宮ヶ谷戸遺跡の東で大きく北東に流れを変えたのち、荒川新扇状地の扇端を東流して行田市酒巻で利根川に合流している。

遺跡はこの福川の左右両岸に位置している。城西遺跡東地区が櫛引台地上に位置するのに対し、他の遺跡はすべて妻沼低地上の微高地(自然堤防)や後背湿地に位置する。宮ヶ谷戸遺跡、根岸遺跡、八日市遺跡東・西地区からは古墳時代から平安時代にかけて埋没した旧河道がそれぞれ検出されている。低地部分の遺跡の標高は31～33mで、台地との比高差は約3mである。

第1図 埼玉県地形図



次に本地域における歴史的環境について述べることにする。

### (1)旧石器～縄文時代

深谷市内では旧石器時代の遺跡・遺物は現在のところ確認されていない。

縄文時代草創期には櫛引台地上の東方城跡(38)から尖頭器が出土してはいるが、人々の生活の痕跡が確認できるようになるのは中期以降になってからである。中期になると遺跡数は増加し、多くは台地先端部に位置している。根岸遺跡(2)、深谷町遺跡(44)、小台遺跡(49)などが調査されている。根岸遺跡からは中期中葉の住居跡2軒、土壙9基が検出されている。勝坂式土器と阿玉台式土器が一緒に出土しており、当地域での土器分布圏の重複が確認された点が重要である。

後期になると、桜ヶ丘組石遺跡(47)、小台遺跡、根岸遺跡などの台地上の遺跡に加え、低地部でも多くの

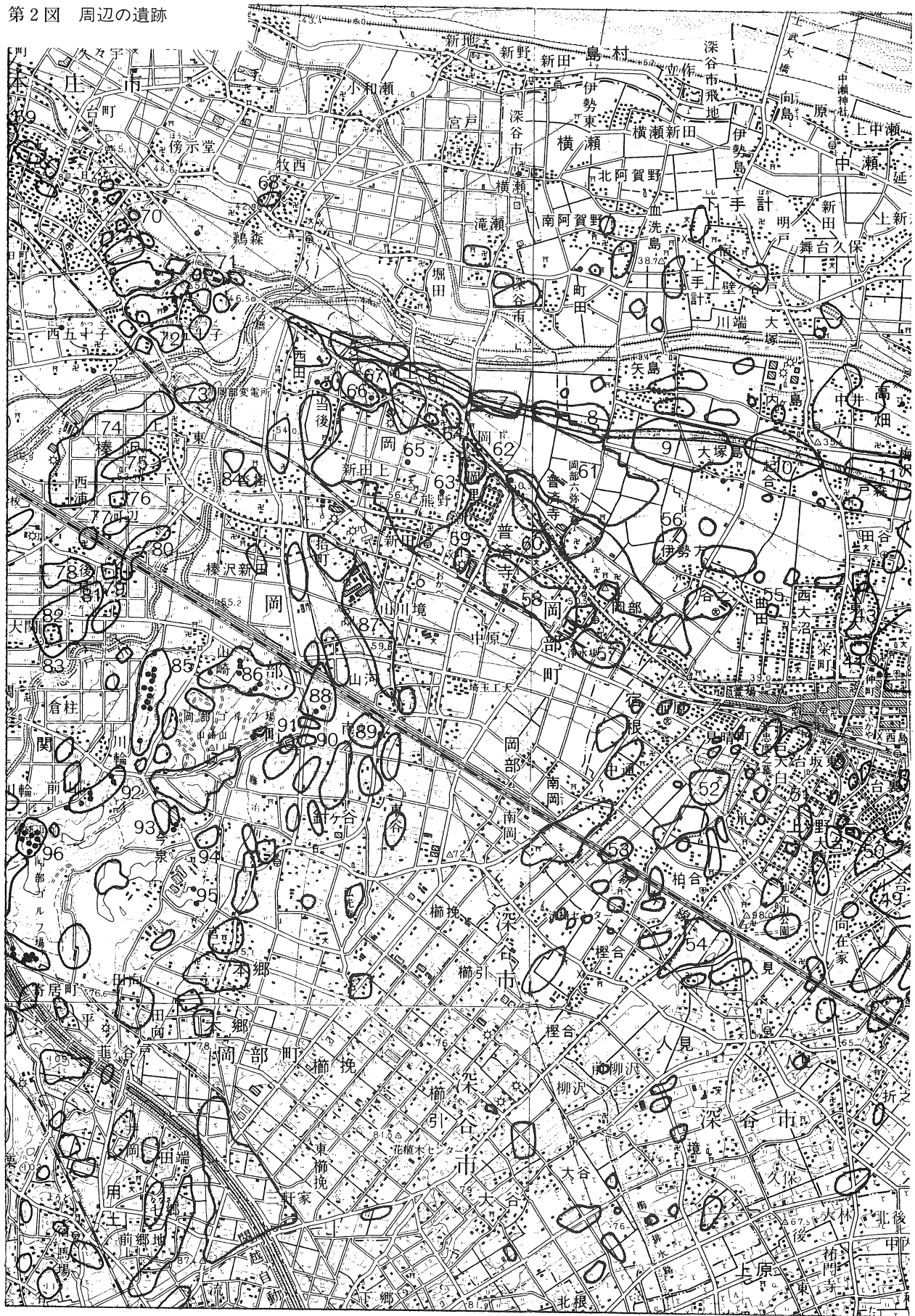
遺跡が確認されている。深谷バイパス建設に伴う発掘調査により本郷前東遺跡(14)、明戸東遺跡(17)、原遺跡(18)から住居跡や土壙が検出されている。そのような後期になると集落が低地部にも進出し、中期と様相を異にする。生活域の移動或いは拡大と考えられている。晩期においてもこの状況は変わらない。

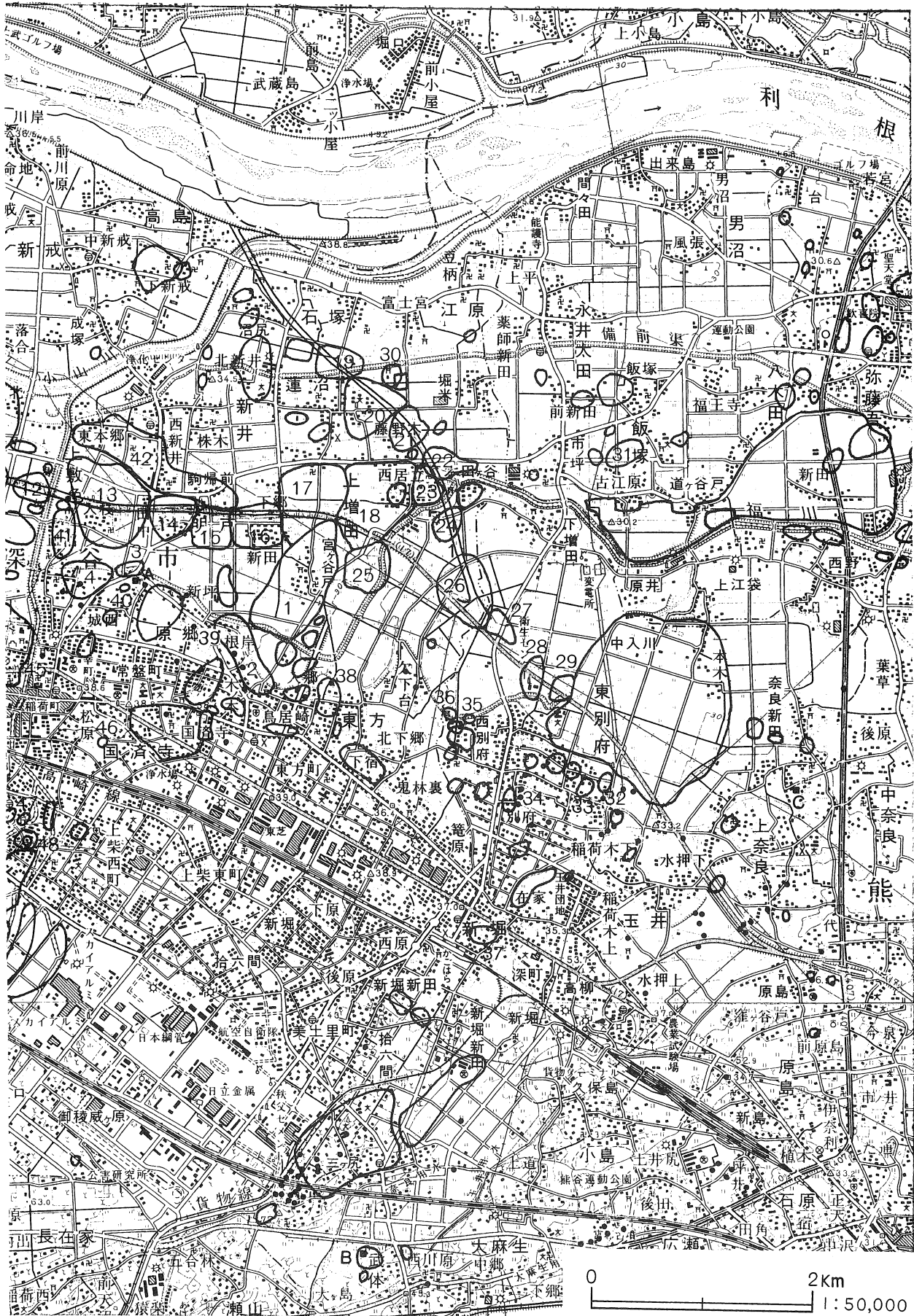
### (2)弥生時代

弥生時代前期から中期にかけての遺跡は台地上には確認されていない。上敷免遺跡(13)からは県内初の出土例である遠賀川式土器の壺の破片に加え、縄文時代晩期終末から弥生時代初頭にかけての土器片が多量に出土した。すべて遺構に伴うものではないが、本地域の弥生時代成立の過程を考える上で無視できない遺跡の一つである。ほかに須和田式期の住居跡4軒、再葬墓2基が検出されている。中期前半の再葬墓は宮ヶ谷戸遺跡(1)、熊谷市横間栗遺跡(28)、妻沼町飯塚南遺

- |           |             |              |               |
|-----------|-------------|--------------|---------------|
| 1、宮ヶ谷戸遺跡  | 28、横間栗遺跡    | 55、桜田馬場跡     | 82、地神祇B遺跡     |
| 2、根岸遺跡    | 29、関下遺跡     | 56、曲田城跡      | 83、関畑館跡       |
| 3、八日市遺跡   | 30、蓮沼氏館跡    | 57、源勝院館跡     | 84、水窪遺跡       |
| 4、城西遺跡    | 31、飯塚南遺跡    | 58、上原古墳      | 85、西山古墳群      |
| 5、原ヶ谷戸遺跡  | 32、別府氏城跡    | 59、内出遺跡      | 86、千光寺古墳群     |
| 6、滝下遺跡    | 33、別府氏館跡    | 60、白山遺跡      | 87、西竜ヶ谷遺跡     |
| 7、砂田前遺跡   | 34、東別府古墳群   | 61、岡部六弥太忠澄館跡 | 88、稻荷塚古墳      |
| 8、樋詰遺跡    | 35、西別府館跡    | 62、岡部町No.3古墳 | 89、上杉館跡       |
| 9、矢島南遺跡   | 36、湯殿神社祭祀遺跡 | 63、熊野遺跡      | 90、水久保遺跡      |
| 10、起合遺跡   | 37、籠原裏古墳群   | 64、中宿遺跡      | 91、西谷遺跡       |
| 11、戸森松原遺跡 | 38、東方城跡     | 65、御手長山古墳    | 92、川輪聖天塚古墳    |
| 12、森下遺跡   | 39、木の本古墳群   | 66、寅稻荷塚古墳    | 93、貉山遺跡       |
| 13、上敷免遺跡  | 40、幡羅太郎館跡   | 67、岡部城跡      | 94、今泉館跡       |
| 14、本郷前東遺跡 | 41、皿沼城跡     | 68、牧西堀の内遺跡   | 95、岡部町No.82古墳 |
| 15、新屋敷東遺跡 | 42、上敷免北遺跡   | 69、本庄城跡      | 96、長坂聖天塚古墳    |
| 16、新田裏遺跡  | 43、大沼弾正館跡   | 70、諏訪新田遺跡    |               |
| 17、明戸東遺跡  | 44、深谷町遺跡    | 71、五十子城跡     |               |
| 18、原遺跡    | 45、深谷城跡     | 72、東五十子遺跡    |               |
| 19、ウツギ内遺跡 | 46、疋鼻和城跡    | 73、六反田遺跡     |               |
| 20、砂田遺跡   | 47、桜ヶ丘石組遺跡  | 74、西浦北遺跡     |               |
| 21、柳町遺跡   | 48、秋元氏館跡    | 75、宮西遺跡      | 式内社           |
| 22、城北遺跡   | 49、小台遺跡     | 76、河辺遺跡      | A、楡山神社        |
| 23、居立遺跡   | 50、割山埴輪窯跡群  | 77、東光寺裏遺跡    | B、田中神社        |
| 24、前遺跡    | 51、鼠裏遺跡     | 78、安保氏陣屋跡    | C、奈良神社        |
| 25、東川端遺跡  | 52、萱場松原遺跡   | 79、榛沢六郎成清館跡  |               |
| 26、清水上遺跡  | 53、島之上遺跡    | 80、伊勢塚遺跡     |               |
| 27、根絡遺跡   | 54、人見館跡     | 81、地神祇B遺跡    |               |

第2図 周辺の遺跡





跡(31)でも確認されている。

中期後半の遺跡は中部高地系の粟林式土器が出土した宮ヶ谷戸遺跡、清水上遺跡(26)が確認されている。しかし、中期前半には県内でもこの妻沼低地に集中していた集落が、中期後半から後期にかけての時期は減少する傾向にある。後期の遺跡は吉ヶ谷式期の住居跡16軒、土壘6基が検出された明戸東遺跡が知られるのみである。

### (3)古墳時代

古墳時代前期になると遺跡数が僅かではあるが増加する。矢島南遺跡(9)、明戸東遺跡、清水上遺跡、根絡遺跡(27)などの集落跡からはS字状口縁台付甕が出土している。また方形周溝墓が、上敷免遺跡で9基、東川端遺跡(25)で5基検出されており、後者からはプレス壺が出土している。何れの遺跡も五領式期でも新しい段階である。

中期後半から後期になると遺跡数は爆発的に増加する。深谷市内の低地部の遺跡でこの時期の遺物が出土しない遺跡はないと言えるほどである。今回調査を行った宮ヶ谷戸遺跡、八日市遺跡(3)も集落の主体を成すのはこの時期である。主なものだけでも岡部町砂田前遺跡(7)、森下遺跡(12)、上敷免遺跡、新屋敷東遺跡(15)、柳町遺跡(21)、城北遺跡(22)、居立遺跡(23)などが挙げられる。何れの遺跡も旧河道に挟まれた狭い微高地上に住居跡が構築されているため重複が著しい。検出された住居跡の数は優に1,000軒を超えるほどである。また本郷前東遺跡からは石製模造品の製品及び未製品が多量に出土している。また、集落の増加と共に古墳の造営も活発になる。古墳は櫛引台地上に大きくひろがる木の本古墳群(39)、妻沼低地上に位置する上増田古墳群が知られる。何れの古墳群も30~40基前後で群を構成し、円墳が主体である。現時点では前方後円墳は確認されていない。古墳群の時期は、発掘調査が行われているものが少ないため詳細は不明であるが、6世紀中葉から7世紀に造営されたものが多いようである。根岸遺跡から八日市遺跡にかけての微高地上にも古墳が存在したと言われている。また、櫛引

台地上には割山埴輪窯跡群(50)があり、古墳群との関連性が注目される。

### (4)奈良~平安時代

古墳時代後期に大規模な開発が行われた妻沼低地において、奈良から平安時代にかけても集落は伸縮しながらも継続していく。集落は竪穴住居跡を主体とし、数棟の掘立柱建物跡が伴う。この時期の集落は、宮ヶ谷戸遺跡、砂田前遺跡、上敷免遺跡、新屋敷東遺跡、柳町遺跡などが確認されている。古代における深谷市周辺は、上秦郷、下秦郷、広沢郷、荏原郷、幡羅郷、那珂郷、霜見郷、余戸郷の八郷から構成された幡羅郡であったことが『延喜式』などに記載されている。幡羅郡と榛沢郡との郡界は唐沢川の旧流路であった可能性が考えられている。また、宮ヶ谷戸遺跡、八日市遺跡、城西遺跡が所在する原郷の大字名は「幡羅郷」に比定されており、八日市遺跡のすぐ南の台地縁辺部には延喜式内社とされる楡山神社(A)が鎮座している。他に南へ約6.5kmに田中神社(B)、東へ約6.1kmには奈良神社(C)などと周辺には式内社が数社位置している。この時期には台地縁辺部にも岡部町白山遺跡(60)、岡部町熊野遺跡(63)、岡部町中宿遺跡(64)、熊谷市湯殿神社祭祀遺跡(西別府祭祀遺跡、36)など著名な遺跡が多い。中宿遺跡からは7世紀末から8世紀代の掘立柱建物跡群が検出されており、榛沢郡の正倉跡と考えられている。また、湯殿神社祭祀遺跡からは馬形・櫛形石製品、有線円板などの石製模造品が約150点以上出土している。この地域には西別府廃寺などの古代寺院などが位置することから、幡羅郡の郡衙が所在したと推定されている。

### (5)中世

中世以降のこの地域は、武蔵七党などの武士団の台頭が顕著である。蓮沼氏館跡(30)、別府氏館跡(32)、東方城跡(38)、幡羅太郎館跡(40)などの城郭や在地武士の館跡が築かれる。14世紀後半になると、深谷上杉氏の祖である上杉憲英が庁鼻和城(46)を現在の国済寺に築城した。15世紀中頃に四代房憲が深谷城(45)を築くまで深谷上杉氏の本拠地であった。



### III 遺跡の概要

福川河川改修工事に伴う今回の発掘調査では、下流から宮ヶ谷戸・根岸・八日市・城西遺跡の4遺跡が確認された。各々の調査区は東西に細長く、発掘調査は川に沿った低地部に大きなトレンチを入れたようなものといえる。4遺跡の中で唯一城西遺跡東地区だけが楡引台地上に位置しており、他の地区はすべて妻沼低地の微高地(自然堤防)上に位置していた。

宮ヶ谷戸遺跡は福川の左岸に位置し、調査面積は3,800㎡であった。右岸部分には遺構・遺物が検出されなかった。西には根岸遺跡が隣接している。

調査の結果検出された遺構は、古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡が46軒、掘立柱建物跡1棟、土壙20基、中世の溝1条、中世から近世にかけての土壙が12基であった。

東寄りに検出された旧河道によって調査区は2分される。一つは第1号溝から東の狭い微高地で、今回検出された遺構の大半が位置していた。もう一方は、旧福川の氾濫原である西側の低地部で、遺構はあまり検出されなかった。

遺物は多量の土師器・須恵器が出土した。須恵器は末野産の製品が多くみられる。土器のほかには耳環・刀子の鉄製品や滑石製の紡錘車などが出土した。

根岸遺跡は、上述した宮ヶ谷戸遺跡から西へ約120mのところの位置していた。調査区は旧福川の氾濫原であったため極めて遺構の確認が困難であり、十分な調査ができなかった。調査面積は2,200㎡であった。調査区は福川に架かる橋を挟んで東と西に分かれる。

調査の結果検出された遺構は、中世から近世にかけての溝が24条、平安時代と思われる水田跡が1面であった。第1～11号溝は、遺構の形状から畑の畝であった可能性が考えられる。

水田跡は浅間B軽石層の直下から検出された。溝は遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。

遺物は古墳時代後期以降の土師器・須恵器、近世の陶磁器が出土したが、どれも摩滅している。

八日市遺跡は、根岸遺跡から北西へ約600mの福川左岸に位置している。調査面積は10,800㎡であった。調査区は県道を挟んで東西の2地区に分離した。県道から西に100mの範囲は攪乱を受けており、遺構・遺物は何等検出されなかった。

調査の結果検出された遺構は、東地区からは旧河道が、西地区からは縄文時代晩期の土壙1基、古墳時代後期・奈良時代の住居跡20軒、土壙10基、旧河道、奈良から平安時代にかけての溝4条、道路跡2ヶ所、中世から近世にかけての土壙11基、溝43条、建物跡が1棟であった。

古墳時代後期の第3号住居跡からは1,000点を超える大量の遺物が出土した。TK47並行の須恵器の蓋と坏がセットで出土している。また第18号住居跡からは帯金具(鉈尾)が出土した。

道路跡は調査区の東と西にそれぞれ検出された。第1号道路跡は両側に側溝を伴うものと思われ、硬化面には波板状の凹凸が認められた。第2号道路跡は西側の側溝が調査区外にかかるため調査できなかったが、砂礫・粘土を含む硬化面と側溝の片側が検出され、側溝の覆土上層からは浅間B軽石層が確認された。また側溝に平行して硬化面には柵列が検出された。

遺物は古墳時代後期の大量の土師器と僅かに須恵器が出土した。また、西地区旧河道の祭祀跡からは石製模造品が出土している。

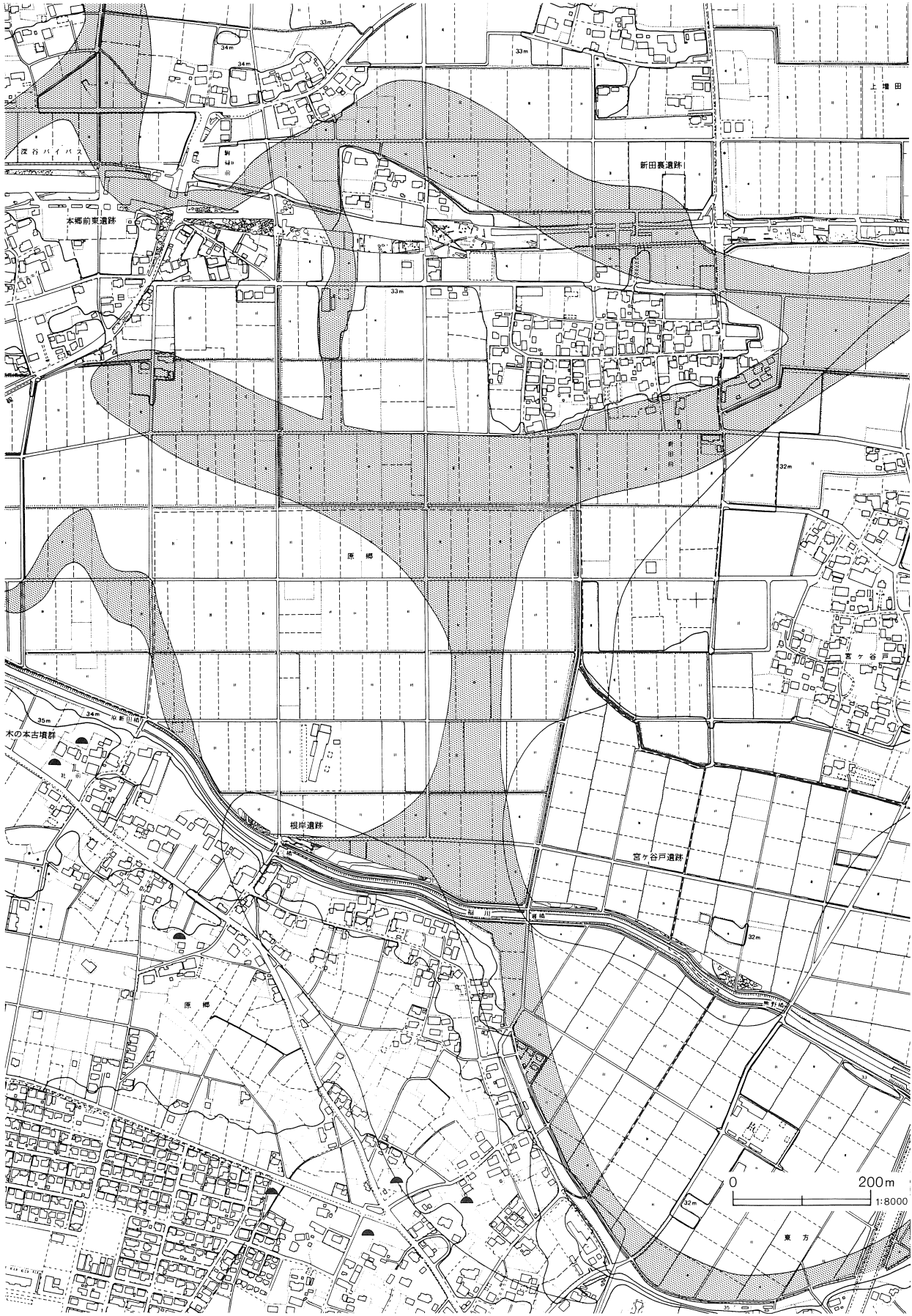
城西遺跡は、八日市遺跡から西へ約40mのところの位置し、調査面積は7,600㎡であった。調査区は福川右岸の東地区と左岸の西地区に分かれる。東地区の調査区両端には谷状の落ち込みが確認された。

調査の結果検出された遺構は、東地区からは縄文時代前期の土壙2基、縄文時代中期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡3軒、近世の溝2条、西地区からは掘立柱建物跡3棟であった。

第4号住居跡からは底部外面に「願恵(?)」と墨書された南比企産の須恵器坏が出土した。

第3図 遺跡地形図





第1表 遺構番号新旧対照表

《宮ヶ谷戸遺跡》

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第1号住居跡	第15号住居跡	第17号住居跡	第7号住居跡	第33号住居跡	第34号住居跡
第2号住居跡	第16号住居跡	第18号住居跡	第8号住居跡	第34号住居跡	第27号住居跡
第3号住居跡	第17号住居跡	第19号住居跡	第9号住居跡	第35号住居跡	第20号住居跡
第4号住居跡	第18号住居跡	第20号住居跡	第1号住居跡	第36号住居跡	第21号住居跡
第5号住居跡	第19号住居跡	第21号住居跡	第11号住居跡	第37号住居跡	第22号住居跡
第6号住居跡	第3号住居跡	第22号住居跡	第12号住居跡	第38号住居跡	第31号住居跡
第7号住居跡	第30号住居跡	第23号住居跡	第35号住居跡	第39号住居跡	第23号住居跡
第8号住居跡	第29号住居跡	第24号住居跡	第47号住居跡	第40号住居跡	第33号住居跡
第9号住居跡	第10号住居跡	第25号住居跡	第39号住居跡	第41号住居跡	第46号住居跡
第10号住居跡	第2号住居跡	第26号住居跡	第40号住居跡	第42号住居跡	第36号住居跡
第11号住居跡	第10号住居跡	第27号住居跡	第44号住居跡	第43号住居跡	第25号住居跡
第12号住居跡	第14号住居跡	第28号住居跡	第43号住居跡	第44号住居跡	第24号住居跡
第13号住居跡	第13号住居跡	第29号住居跡	第41号住居跡	第45号住居跡	第28号住居跡
第14号住居跡	第4号住居跡	第30号住居跡	第42号住居跡	第46号住居跡	第45号住居跡
第15号住居跡	第5号住居跡	第31号住居跡	第38号住居跡		
第16号住居跡	第6号住居跡	第32号住居跡	第37号住居跡		

《根岸遺跡》

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第1号溝	第1号溝東	第9号溝	第9号溝東	第17号溝	第17号溝東
第2号溝	第2号溝東	第10号溝	第10号溝東	第18号溝	第18号溝東
第3号溝	第3号溝東	第11号溝	第11号溝東	第19号溝	第19号溝東
第4号溝	第4号溝東	第12号溝	第12号溝東	第20号溝	第20号溝東
第5号溝	第5号溝東	第13号溝	第13号溝東	第21号溝	第1号溝西
第6号溝	第6号溝東	第14号溝	第14号溝東	第22号溝	第2号溝西
第7号溝	第7号溝東	第15号溝	第15号溝東	第23号溝	第3号溝西
第8号溝	第8号溝東	第16号溝	第16号溝東	第24号溝	第4号溝西

《八日市遺跡》

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第1号住居跡	第1号住居跡	第8号住居跡	第8号住居跡	第15号住居跡	第14号住居跡
第2号住居跡	第2号住居跡	第9号住居跡	第9号住居跡	第16号住居跡	第16号住居跡
第3号住居跡	第3号住居跡	第10号住居跡	第19号住居跡	第17号住居跡	第17号住居跡
第4号住居跡	第10号住居跡	第11号住居跡	第11号住居跡	第18号住居跡	第18号住居跡
第5号住居跡	第5号住居跡	第12号住居跡	第12号住居跡	第19号住居跡	第21号住居跡
第6号住居跡	第6号住居跡	第13号住居跡	第13号住居跡	第20号住居跡	第15号住居跡
第7号住居跡	第7号住居跡	第14号住居跡	第20号住居跡		

《城西遺跡》

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第1号住居跡	第1号住居跡	第3号住居跡	第3号住居跡	第5a号住居跡	第5号住居跡
第2号住居跡	第2号住居跡	第4号住居跡	第4号住居跡	第5b号住居跡	第6号住居跡

## IV 宮ヶ谷戸遺跡の調査

### 1 遺跡の概観

宮ヶ谷戸遺跡は、櫛引台地の縁辺部を蛇行して流れる福川に沿った微高地(自然堤防)上に位置している。本遺跡は南北に広大な範囲を占め、北緯36°12'10"、東経139°19'10"に位置している。南側は現在の福川の流路によって遺跡の一部が破壊されている。現在の集落がある場所がほぼ遺跡の中心であると思われる。北は明戸東遺跡、原遺跡、東川端遺跡に隣接し、西へ約120mのところ今回調査を行った根岸遺跡が位置する。宮ヶ谷戸遺跡は深谷市教育委員会によって数次にわたる調査が行われており、弥生時代中期の住居跡や「原郡」と線刻された紡錘車の出土など数多くの遺構・遺物が検出されている。

今回の調査地点は福川の左岸に位置し、本遺跡範囲の南端にあたる。標高は31.5mで、櫛引台地との比高差は約3mであった。右岸の沖積地も調査の対象ではあったが、河川改修工事によって失われてしまった。調査面積は3,800㎡であった。調査範囲は東西に細長く、東側の微高地を主体に調査を行った。今回の調査区はW～Z-8～11グリッドにかけて検出された旧河道によって東西に二分される。東側は狭い微高地で、水田耕作等により遺構の遺存状態は良くなかった。今回検出された住居跡の大半がその範囲に集中しており重複が激しかった。一方、西側は旧福川の氾濫原であり、また平安時代の地震による噴砂も著しく遺構はあまり検出されなかった。

検出された遺構は、古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡46軒、土壇20基、掘立柱建物跡1棟、中世の溝1条、中世から近世にかけての土壇12基であった。今回の調査では旧石器～古墳時代中期までの遺構・遺物は検出できなかった。

住居跡は調査区東側の微高地部に集中しており、西にいくにつれ密度は薄くなっていった。集落は調査区外に大きく拡がりをもつものと考えられ、今回は集落の西限を確認したことになるとと思われる。

検出された住居跡の中で一番古いのは第14号住居跡である。北側を攪乱に壊されていたため全体像は不明であるが、カマドを付設していなかった可能性も考えられる。遺物から模倣坏の出現前に位置づけられる。他の住居跡はすべてカマド出現以降である。調査区が東西に細長いこともあり、全体を調査できたものは少ない。古墳時代後期の第16号住居跡の床面からは良好な一括の土器と共に、須恵器の甕が出土した。古墳時代後期の住居跡に確実に伴う須恵器はこの1点だけである。出土遺物は土師器が圧倒的に多く、他に第41号住居跡から耳環が出土した。

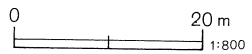
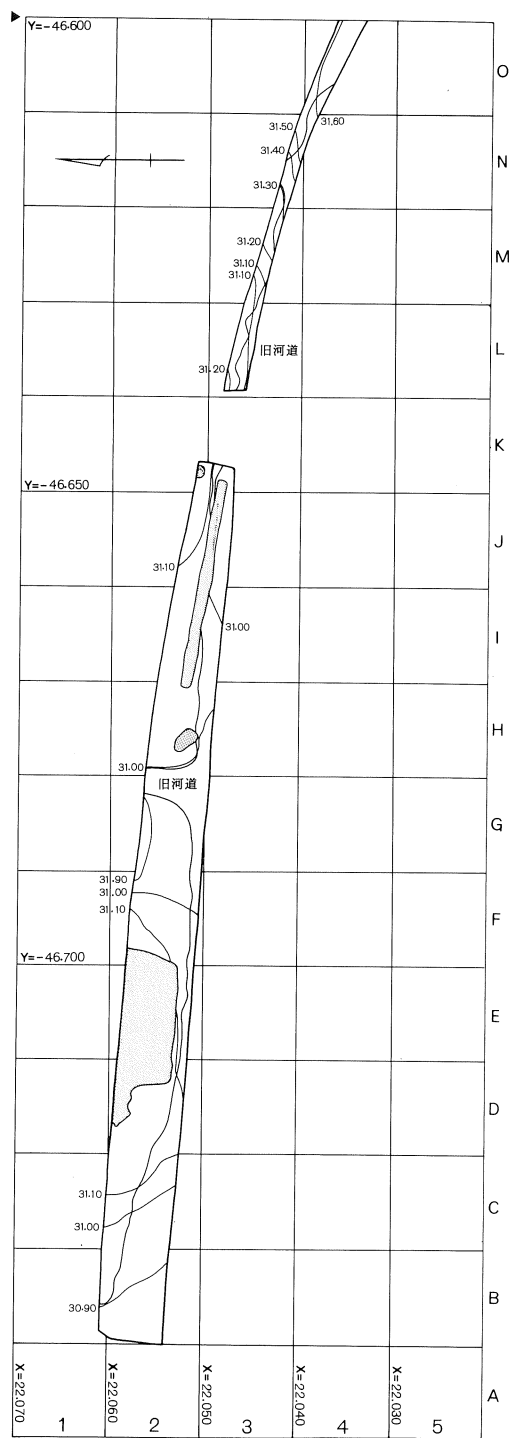
奈良・平安時代の住居跡の傾向としてはカマドを北東方向に向けるものが多い。カマドの支脚は安山岩を用いたものが2基検出された。出土遺物は土師器・須恵器のほかには僅かではあるが灰釉陶器もみられる。須恵器は末野産が主体を占めるが、第35・36号住居跡の坏に限ると南比企産が多くみられる。土器以外では第44号住居跡から「田」と線刻銘のある滑石製の紡錘車が出土した。

掘立柱建物跡は調査区の東側に1棟検出されたが、出土遺物がないため詳細な時期は不明とせざるをえない。古墳時代後期の第32号住居跡を切っていたこともあり概ね平安時代と考えられる。

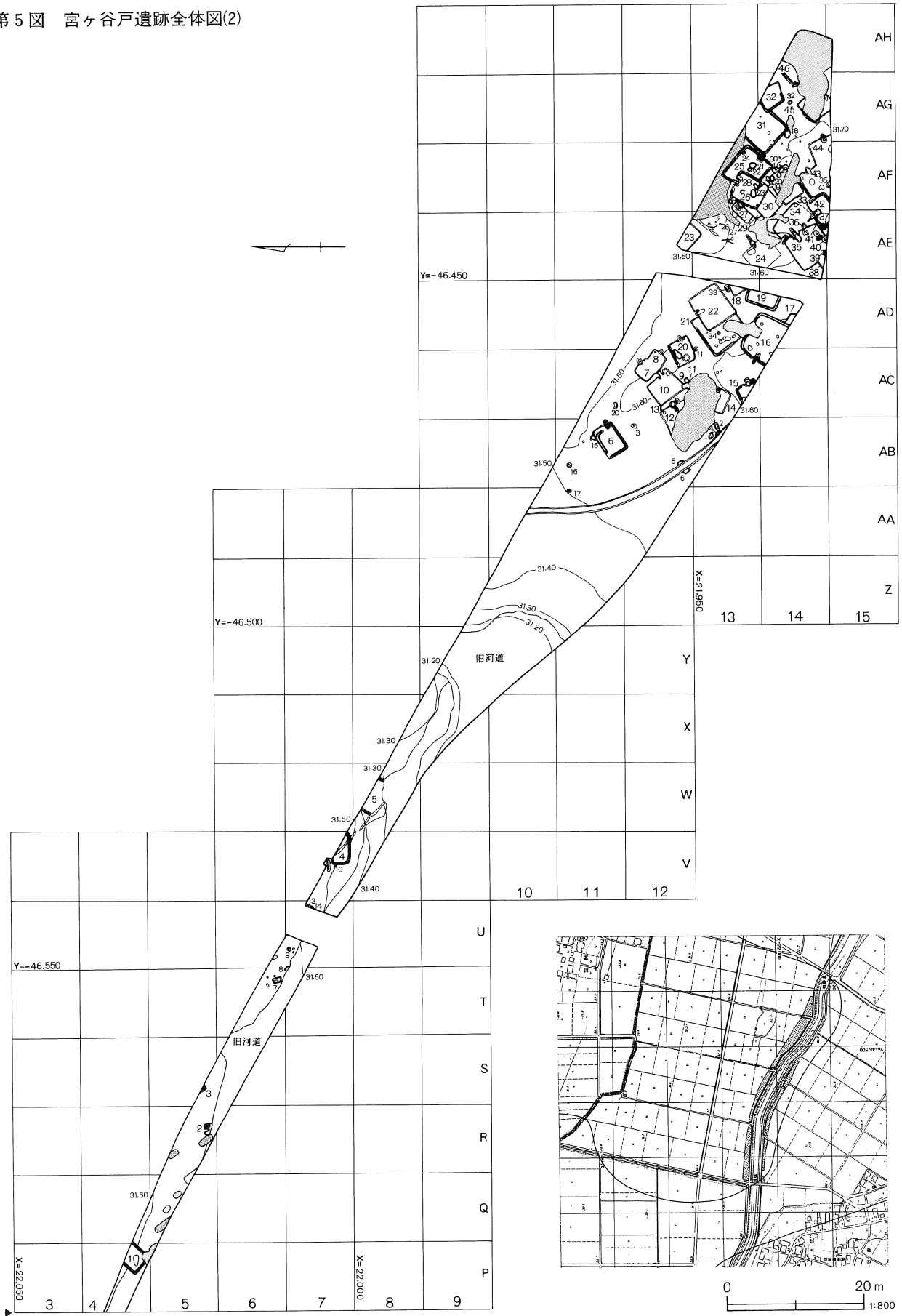
溝は微高地を取り巻くように南一北方向に走行していた。本遺構も遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、覆土の観察から中世に掘削されたものと思われた。

土壇は調査区西側に掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高いものが6基検出された。全て単独で検出されている。そのため調査区外に延びているか旧河道に壊されているものと思われるが、現時点では本遺構の性格は不明である。時期は出土遺物が少なく決め手に欠けるが平安時代と考えられる。他の土壇も出土遺物が少なく時期を明確にできたものは一部である。

第4図 宮ヶ谷戸遺跡全体図(I)



第5図 宮ヶ谷戸遺跡全体図(2)



## 2 古墳時代以降の遺構と遺物

### a、住居跡

#### 第1号住居跡(第6図)

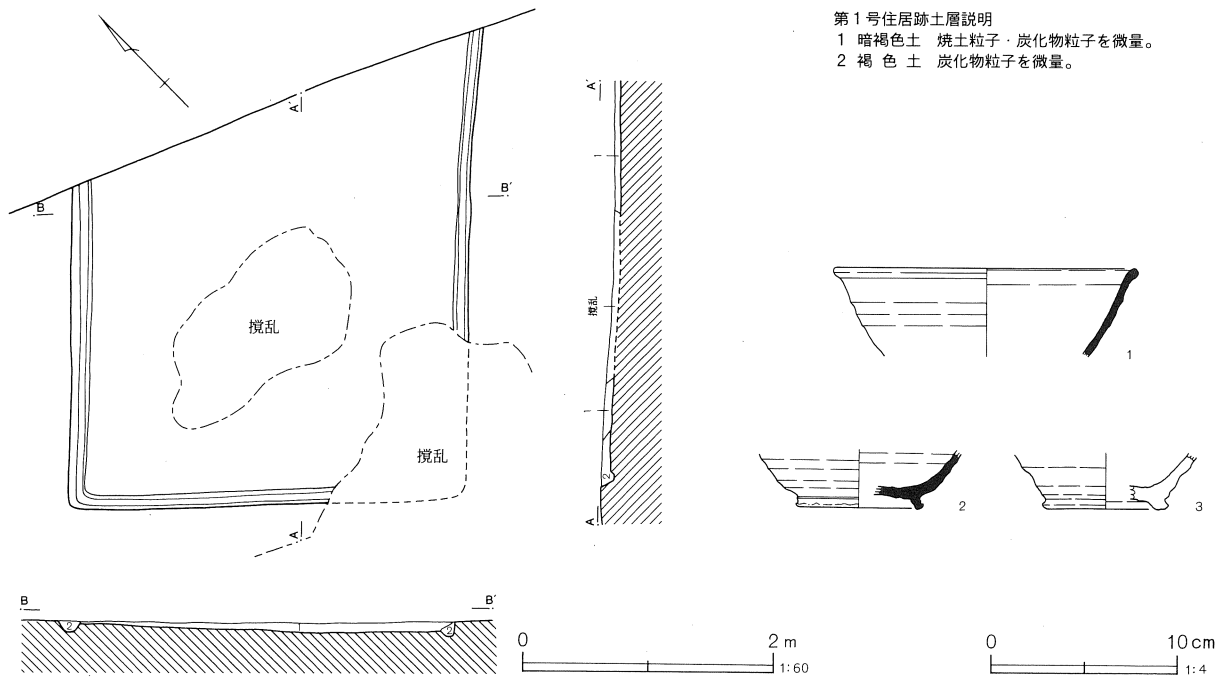
P-4・Q-4グリッドで検出された。今回の調査区内では一番西側に位置していた。北側は調査区外にかかるため規模・形態等は不明である。東西3.18m、

深さ0.07mで、主軸方位はN-46°-Eである。

柱穴は確認できなかった。壁溝は幅約14cm、深さ約6cmで、調査範囲内では全周していた。カマド・貯蔵穴は今回の調査では検出できなかった。

遺物は覆土から少量出土した。

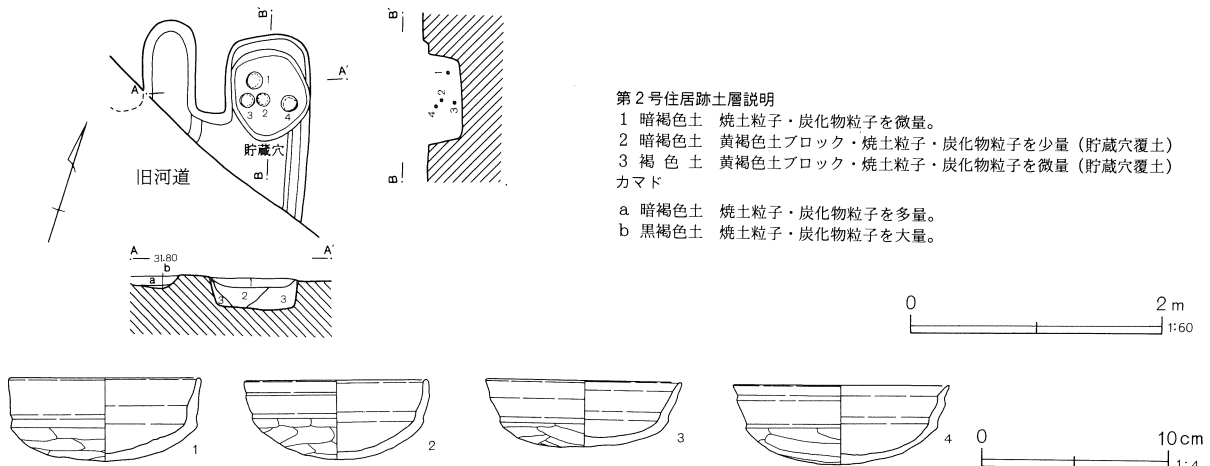
第6図 第1号住居跡および出土遺物



第6図 第1号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(16.2)			C'DEGH'	D	灰	10%	覆土 末野産
2	高台坏			(6.8)	C'DH'	C	灰	20%	覆土 末野産
3	高台坏			(6.8)	BC'DEH	D	にぶい・褐	35%	覆土 末野産

第7図 第2号住居跡および出土遺物





第2号住居跡(第7図)

R-5グリッドで検出された。住居跡の大部分が福川の旧河道によって壊されており、残っていたのはカマドの一部と北東コーナー部分だけであった。深さは0.08mで、主軸方位はN-18°-Wである。

カマドは北壁東寄りと思われる位置で検出された。右袖がろうじて残存していた。袖は地山の削り出し

であった。

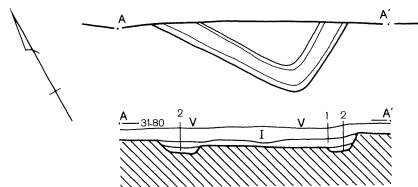
貯蔵穴はカマドの右側の北西コーナーに位置し、長径70cm、短径62cm、深さ27cmであった。覆土からは土師器の小型の環4点が、外側から流れ込んだような状態で出土した。壁溝は幅約17cm、深さ約4cmで巡っていた。

遺物は貯蔵穴から出土した4点だけである。

第7図 第2号住居跡出土土器観察表

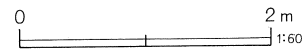
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	環	10.0	4.4		BC'DGH'	A	浅黄橙	95%	No. 1	
2	環	9.8	4.2		BCDGH'	A	黄橙	100%	No. 2	
3	環	10.4	3.6		BC'DGH'	A	橙	100%	No. 4	
4	環	11.4	4.2		BC'DGH'	A	浅黄橙	95%	No. 3	

第8図 第3号住居跡

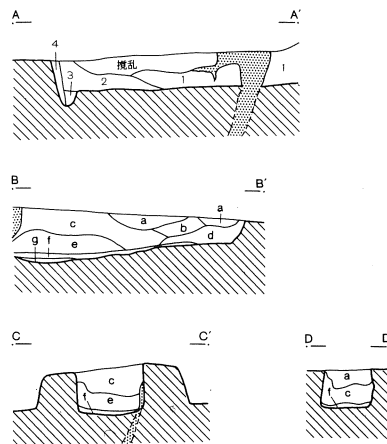
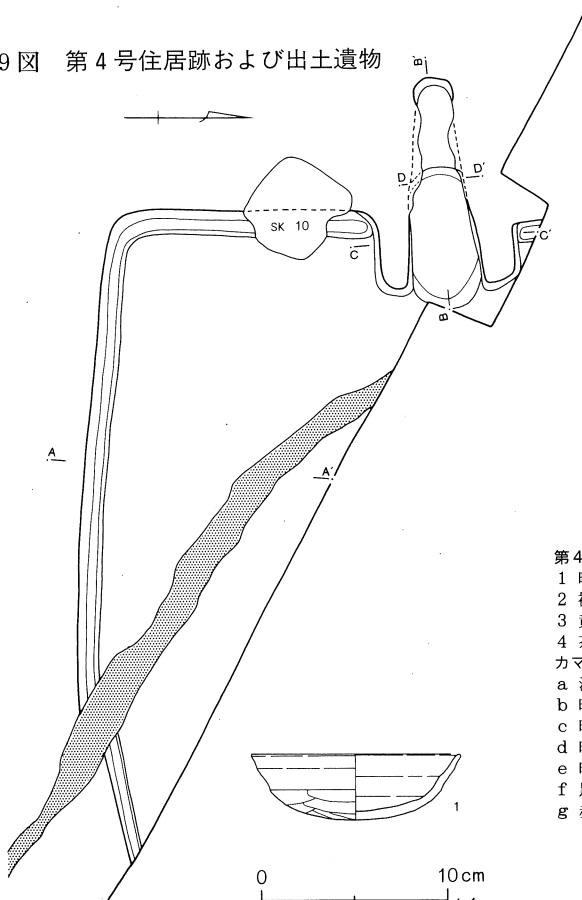


第3号住居跡土層説明

- I 淡褐色土 表土
- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロックを微量。



第9図 第4号住居跡および出土遺物



第4号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を微量。
- 2 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 3 黄褐色土 炭化物粒子を少量。
- 4 茶褐色土 炭化物粒子を少量。

カマド

- a 淡黄褐色土 焼土ブロックを大量、焼土粒子を少量(煙道崩落土)
- b 暗褐色土 焼土粒子を多量、焼土ブロック・炭化物粒子を少量。
- c 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を微量。
- d 暗褐色土 炭化物粒子を少量、焼土粒子・焼土ブロックを微量。
- e 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多量、炭化物粒子を微量(天井崩落土)
- f 黒褐色土 炭化物粒子を大量、焼土粒子を多量、焼土ブロックを微量。
- g 赤褐色土 焼土粒子を大量、焼土ブロックを多量、炭化物粒子を少量。

### 第3号住居跡(第8図)

S-5グリッドで検出された。調査できたのは南西コーナー部分だけであり、大半が調査区外に延びている。深さは0.08mであった。

壁溝は幅約19cm、深さ約6cmで巡っていた。今回の調査区内からはカマド・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

遺物はまったく出土しなかった。

### 第4号住居跡(第9図)

V-7グリッドで検出され、西壁の一部を第10号土壌に切られていた。また、住居跡を横切るように噴砂が走っており、南壁とカマドの一部が壊されていた。その影響で南壁は若干ずれていた。住居跡は大半が調

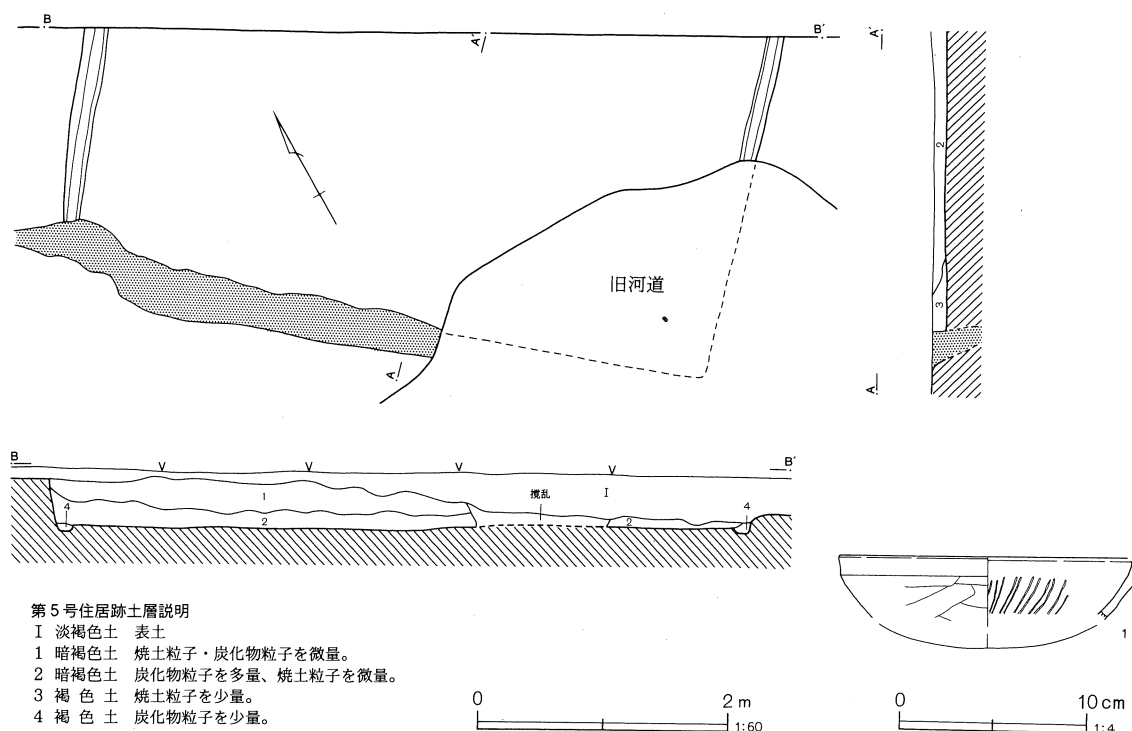
査区外にかかるため、規模・平面形態は不明である。深さは0.25mで、主軸方位はN-95°-Wである。

カマドは西壁に位置し、噴砂により袖の内側の一部が壊されているが、全体の遺存状態は良好であった。袖は地山の削り出して、内側はかなり火を受けて焼土化していた。燃焼部は掘り込みが浅く、最下層には灰層が薄く堆積していた。煙道は壁外に長くのび、緩やかな傾斜をつけて掘り込まれていた。

壁溝は幅約19cm、深さ約11cmで、調査範囲内では全周していた。柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は覆土から少量出土した。1は土師器の坏である。推定口径11.0cmで、胎土に角閃石・砂粒を少量含む。焼成は良好で、にぶい褐色である。残存率15%。

第10図 第5号住居跡および出土遺物



### 第5号住居跡(第10図)

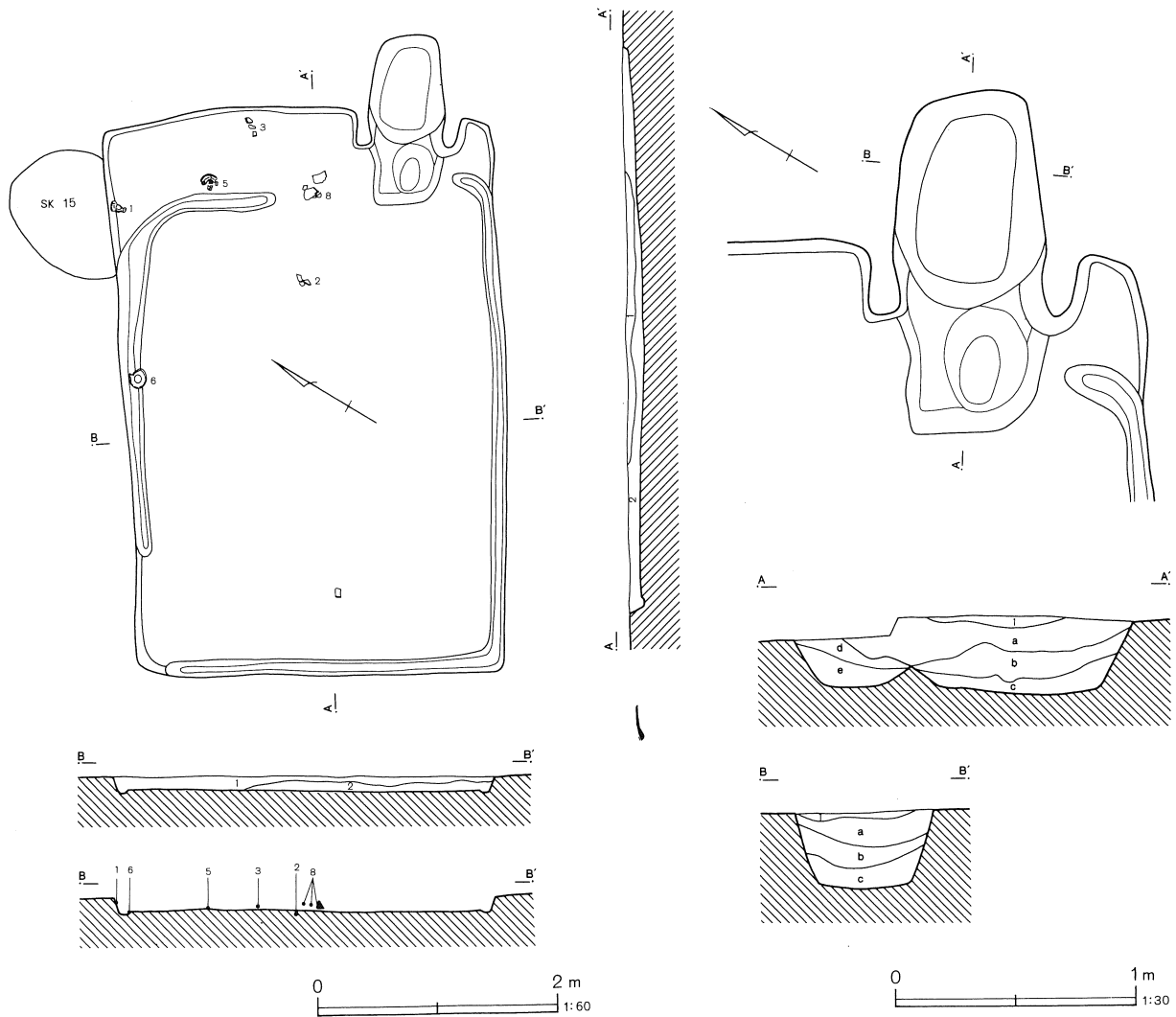
W-8グリッドで検出され、南壁は福川の旧河道と噴砂によって壊されていた。北側は調査区外にかかるため調査はできなかった。東西5.45m、深さは0.36mで、主軸方位はN-40°-Eである。

柱穴は確認できなかった。壁溝は幅約18cm、深さ約

5cmで、調査範囲内では全周していた。カマド・貯蔵穴は今回の調査では検出できなかった。

遺物は覆土から破片が少量出土した。1は土師器の坏である。推定口径15.8cmで、胎土には角閃石・砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は橙色である。残存率10%。内面には暗文がわずかに残る。

第11図 第6号住居跡・カマド



### 第6号住居跡(第11図)

AB-11・12グリッドで検出され、第15号土壌に切られていた。本住居跡は、新旧のカマドと壁溝が内側を巡ることから拡張したものと考えられる。

拡張前の住居跡は、東西3.98m、南北3.20m、深さは不明で、主軸方位はN-59°-Eである。

カマドは東壁南寄りに位置し、掘り方のみが検出された。掘り込みは19cmと深く、底面は平坦であった。

壁溝は幅約13cm、深さ約4cmで、北西コーナー部分を除き全周していた。柱穴および貯蔵穴は確認できなかった。本遺構に確実に伴う遺物は出土していない。

拡張後の住居跡は、東西4.70m、南北3.20m、深さ

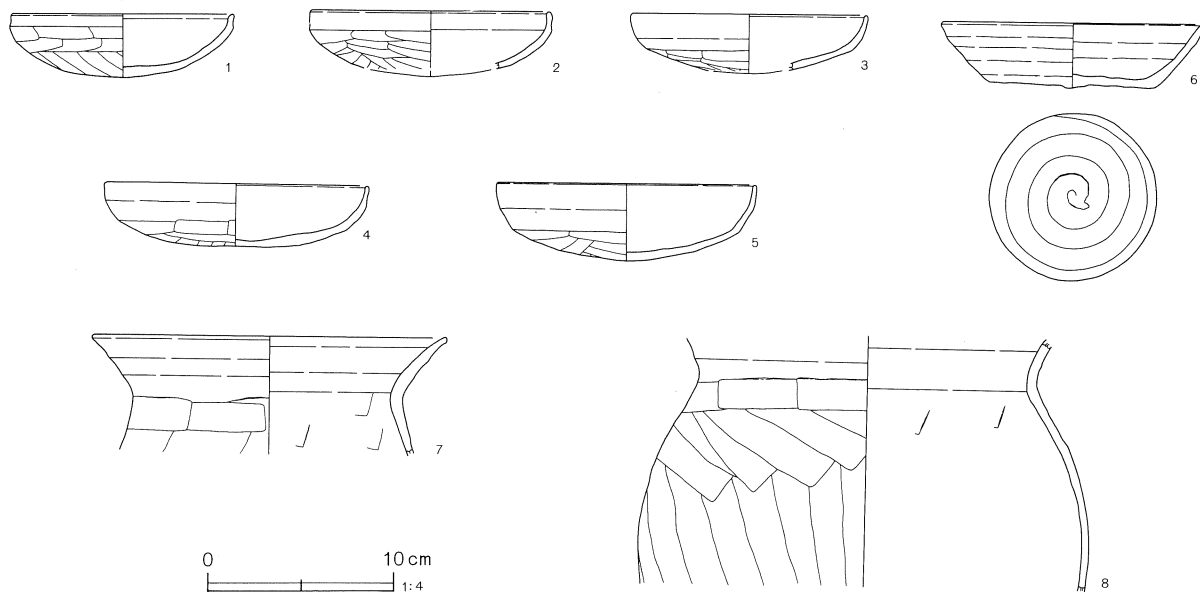
は0.12mで、長方形をしていた。東壁だけを72cm拡張しており、主軸方位は拡張前と変わらない。

カマドは東壁南寄りで、前のカマドの延長線上に位置していた。袖は地山の削り出してあった。

壁溝は拡張する段階で人為的に埋め戻されていた。柱穴および貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は床面から2・3・5・6の土師器坏と8の土師器甕が出土した。6の坏は、底部中央から外に向けて右回りのヘラケズリの調整痕が明瞭に認められる。中央には粘土の余りが生じ、底部の接地面が不安定である。ほかに覆土から砥石が1点出土している。

第12図 第6号住居跡出土遺物



第12図 第6号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	(3.4)		BC'DGH'	A	橙	50%	No. 4
2	坏	(12.8)			BC'DG'H'	A	にふい橙	35%	No. 6
3	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	にふい橙	15%	No. 2
4	坏	(14.2)	(3.3)		BDG'H'	A	にふい橙	35%	No. 7
5	坏	(13.8)	(4.1)		BC'DG'H'	A	橙	65%	No. 3
6	坏	14.0	3.4	8.9	CDGH'	A	橙	90%	No. 5 外面は黒く変色
7	甕	(19.0)			BC'DGH'	A	橙	25%	カマド内一括
8	甕				BC'DGH'	A	橙	15%	No. 8、9、10

### 第7号住居跡(第13図)

AC-12グリッドで検出され、第8号住居跡に切られていた。遺存状態は悪く、遺構確認時の段階ですでに床面の一部が露出していた。規模は南北2.45m、東西2.65m、深さは0.08mで、主軸方位はN-42°-Eである。

カマドは北壁やや東寄りに検出されたが、掘り方しか残存していなかった。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は1の土師器の坏が床面から出土した。

### 第8号住居跡(第13図)

AC-12グリッドで検出され、第7号住居跡を切り、第10号住居跡に切られていた。第7号住居跡同様に遺

存状態が悪く、僅かに浅い掘り込みが残っていただけであった。東西3.00m、南北2.40m、深さは0.08m、主軸方位はN-122°-Eである。

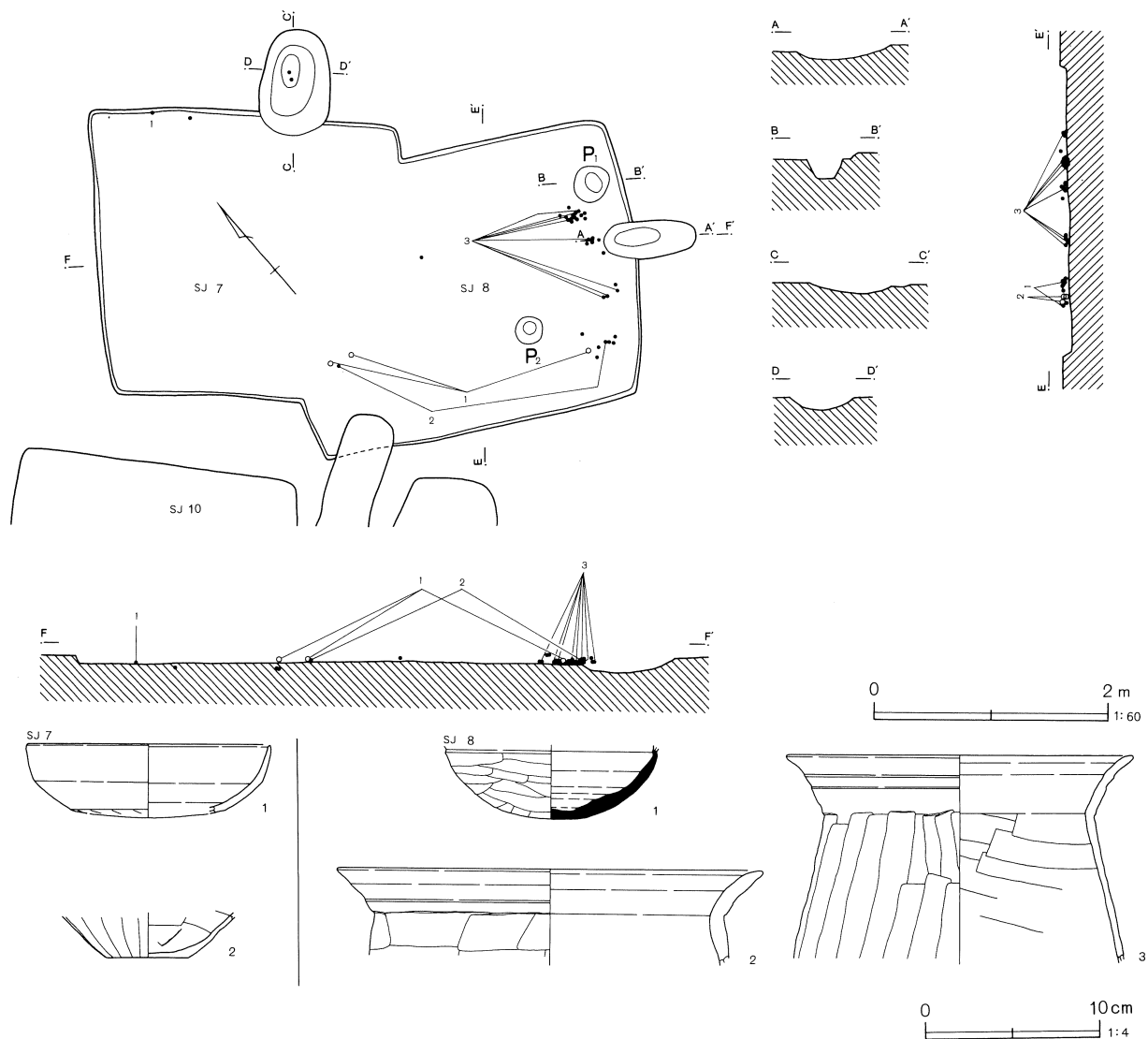
カマドは東壁の中央に位置しているが、検出できたのは掘り方だけであった。

ピットは2本検出された。P1は径30cm、深さ20cmで、P2は径25cm、深さは18cmであった。いずれも主柱穴になるかは確認できなかった。

貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は、床面から1の須恵器壺と2・3の土師器甕が出土した。1の外面はヘラケズリ後平滑にナデられており、口縁部との境には稜をもつ。

第13図 第7・8号住居跡および出土遺物



第13図 第7号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.0)			BC'DH'	A	にふい橙	20%	No. 4
2	甕			(4.6)	BC'DH'	A	にふい橙	50%	覆土

第13図 第8号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺				C'H'J'	A	灰	80%	No. 2, 3, 10
2	甕	(24.2)			BCDFH'	A	橙	25%	No. 4, 8
3	甕	(19.6)			BDEH	A	黄橙	25%	No. 14~16, 19, 23, 27, 32, 33

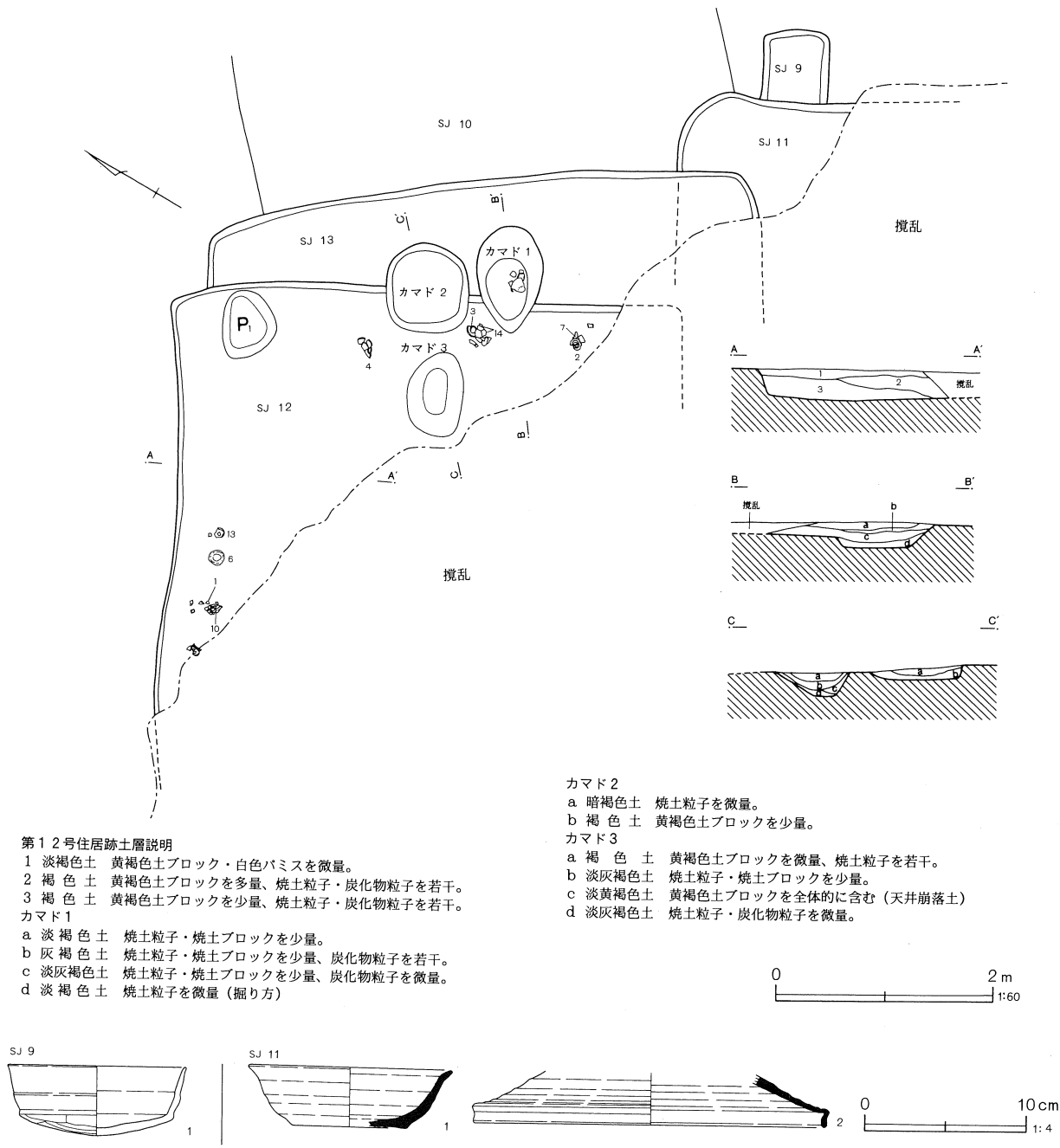
第9号住居跡(第14図)

AC-12グリッドで検出されたが、第11号住居跡と攪乱によって大半を壊されていた。そのため調査できたのはカマドの燃焼部の一部だけであった。

カマドの燃焼部は壁外に突き出るタイプのものと思われる。幅62cm、深さは18cmで、壁面は焼土化していた。

遺物は1の土師器の坏が出土した。

第14図 第9・11～13号住居跡および出土遺物



第12号住居跡土層説明

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロック・白色バミスを微量。
  - 2 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
  - 3 褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- カマド1
- a 淡褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量。
  - b 灰褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量、炭化物粒子を若干。
  - c 淡灰褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量、炭化物粒子を微量。
  - d 淡褐色土 焼土粒子を微量（掘り方）

カマド2

- a 暗褐色土 焼土粒子を微量。
- b 褐色土 黄褐色土ブロックを少量。

カマド3

- a 褐色土 黄褐色土ブロックを微量、焼土粒子を若干。
- b 淡灰褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量。
- c 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを全体的に含む（天井崩落土）
- d 淡灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。

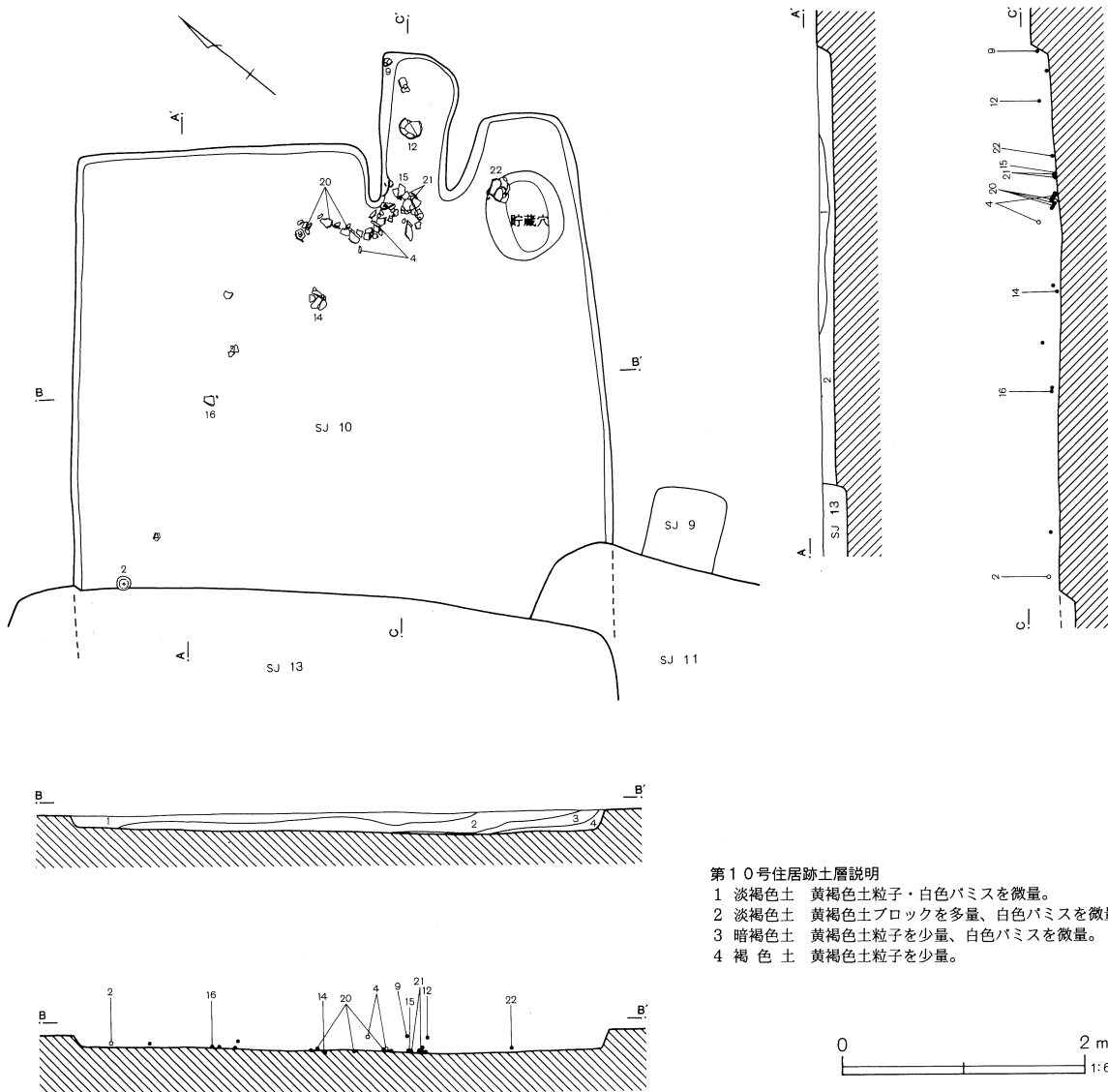
第14図 第9号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.6)	3.6	(7.0)	C'EH	A	暗灰	35%	カマド内 末野産

第14図 第11号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.0)	(4.2)		BC'DH'	A	浅黄橙	25%	覆土
2	蓋	(21.7)			AC'EH'	C	灰褐	15%	覆土 南比企産

第15図 第10号住居跡



### 第10号住居跡(第15・16図)

AC-12グリッドで検出された。第7・8号住居跡を切り、第11・13号住居跡に切られていた。西壁を壊されているため全体の規模等は不明であるが、東西4.14m、南北4.47m、深さは0.17mであった。主軸方位はN-49°-Eである。

住居跡の覆土は南方向から堆積しており、4層からなる自然堆積であった。

カマドは東壁南寄りに位置していた。袖は地山の削り出しであった。燃焼部は掘り込みがなく、最下層には灰層が薄く堆積していた。カマドb層は天井部が崩

落した層と考えられる。

貯蔵穴はカマドのすぐ右側に位置していた。長径73cm、短径63cm、深さは25cmで、底面はほぼ平坦であった。

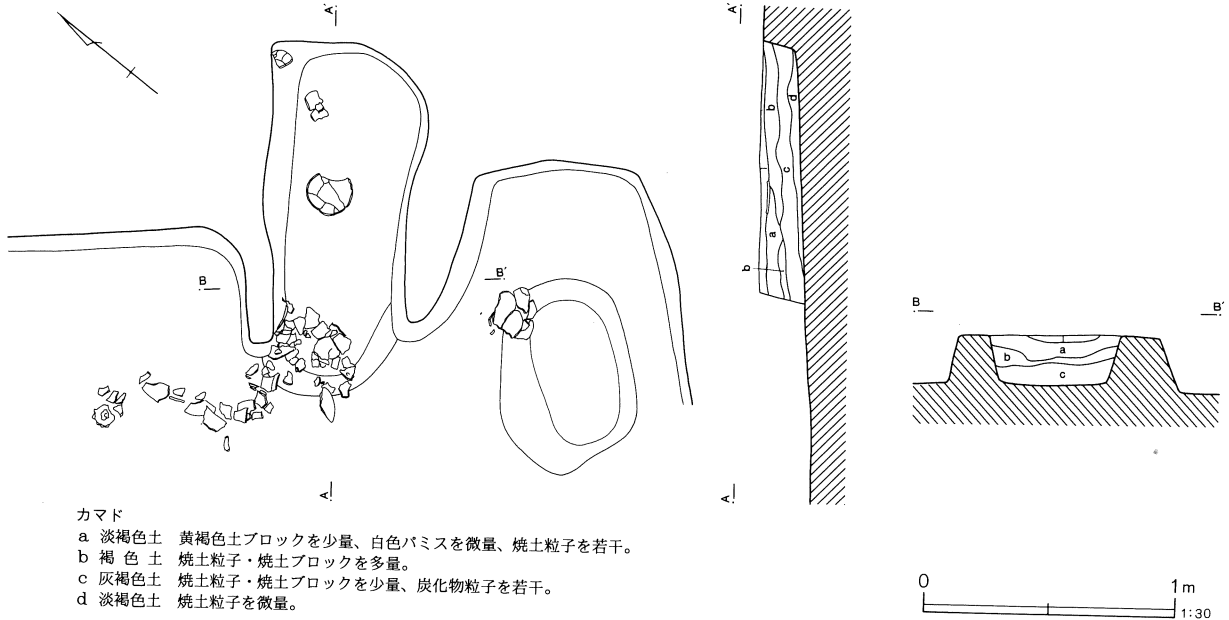
柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物はカマドの燃焼部付近から左袖にかけてまとめて出土した。21の土師器甕は横倒しに潰れており、カマドに掛けられていたものが天井部の崩落に伴い倒れたものと思われる。本遺構は全体の比率から見ても皿の出土量が多く、実測可能であった個体数だけでも7点を数える。全体に残存状態が悪く、13~15・17の

皿も暗文が施されていた可能性がある。カマド内から出土した12は内面に多量の煤が付着する。14は内面に漆状の物質が付着しているが、漆であるのかは遺存状

態が悪く確認不可能である。16は内面にのみ黒色処理が施されている。ほかに覆土から土錘が4点出土している。

第16図 第10号住居跡カマド

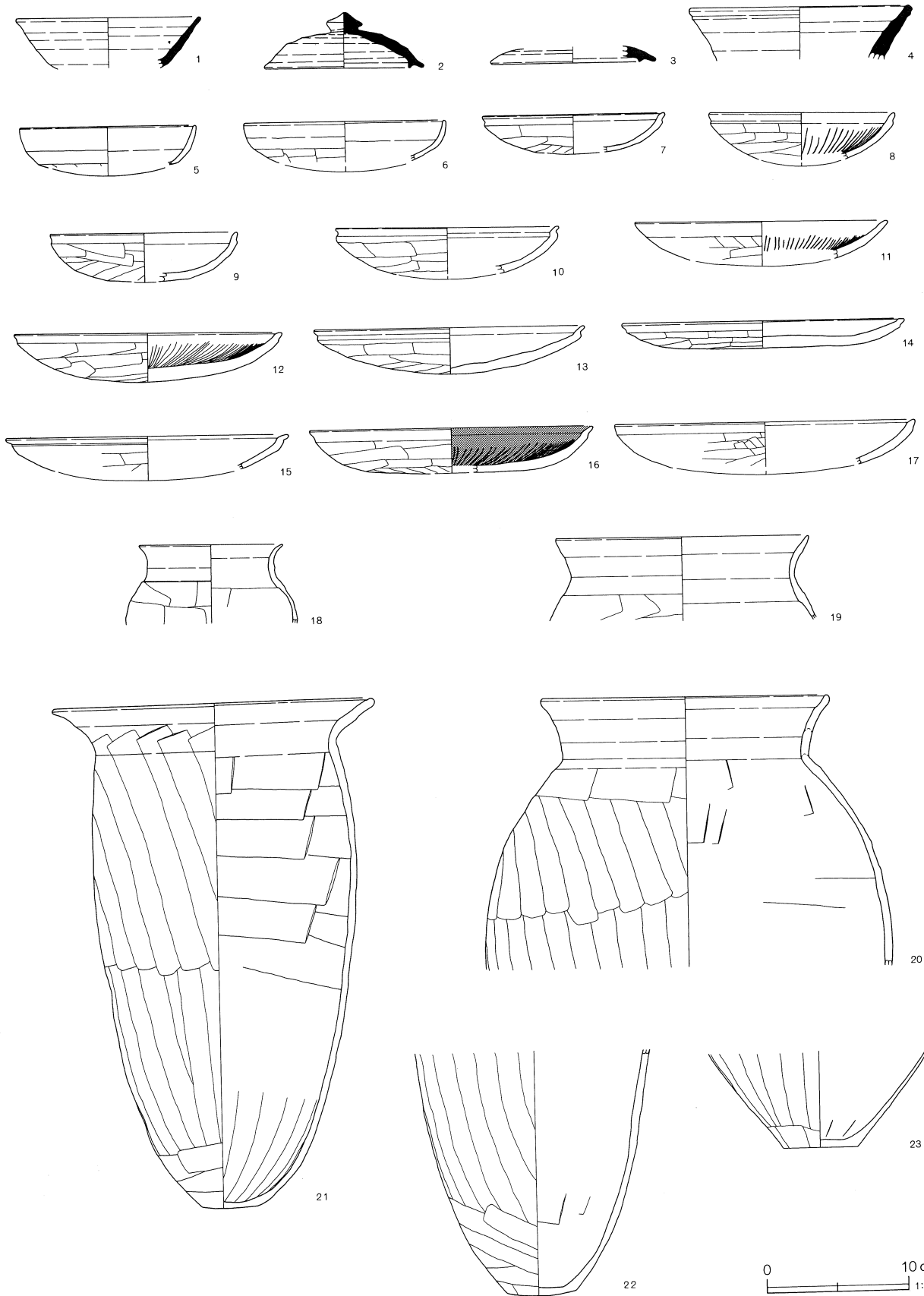


第17図 第10号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.8)			C'DEH'	A	灰白	15%	VI区 末野産
2	蓋	11.2	3.8		BC'H'	A	灰白	100%	No.21
3	蓋	(11.6)			C'H'	A	灰	10%	IV区
4	甕	(15.4)			C'EH'IJ'	A	灰	40%	カマドNo.14, 15 末野産
5	坏	(12.2)			BC'GH'	A	橙	20%	VI区
6	坏	(13.8)			BC'GH'	A	橙	10%	VI区
7	坏	(12.8)			BC'DH'	A	橙	20%	貯蔵穴
8	坏	(12.8)			BC'DG'H'	A	浅黄橙	25%	東ベルト
9	坏	(13.0)			BCDGH'	A	橙	15%	カマドNo. 1
10	坏	(15.4)			BC'DH'	A	橙	35%	IV区
11	皿	(17.6)			BCDH'	A	橙	10%	V区
12	皿	18.6	3.4		BC'DH'	A	橙	80%	カマドNo.3 内面には多量の煤が付着
13	皿	(18.8)	(3.2)		BCGH'	A	黄橙	20%	東ベルト
14	皿	(19.8)	(1.9)		BC'DG'H'	A	浅黄橙	40%	No.16 内面に漆状の物質が付着
15	皿	(19.6)			BC'DH'	A	黄橙	5%	カマドNo.5
16	皿	(19.6)			BC'DH'	A	にぶい褐	15%	No.19 内面黒色処理
17	皿	(20.8)			BC'DH'	A	橙	10%	V区
18	甕	(10.0)			BC'DH'	A	橙	20%	VI区
19	甕	(17.6)			BC'H'	A	黄橙	15%	覆土
20	甕	(20.0)			BC'G'H'	A	黄橙	25%	カマドNo.10~12
21	甕	22.6	34.9	4.0	BC'DH'	A	橙	75%	カマドNo.5、6
22	甕			5.0	BCH'	A	橙	95%	カマドNo.4 底部は煤ける
23	甕			5.2	BC'DH'	A	橙	25%	VI区



第17図 第10号住居跡出土遺物



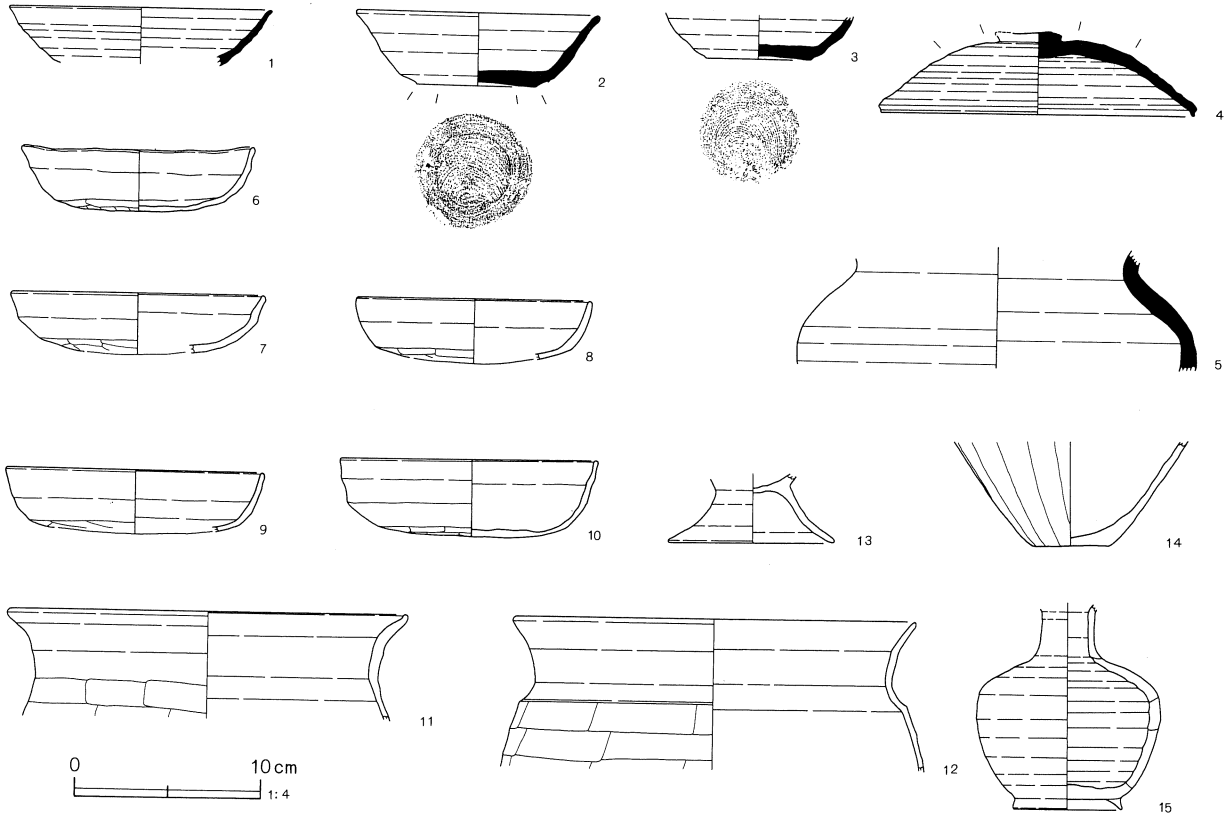
第11号住居跡(第14図)

AC-12グリッドで検出された。調査当初は第9号住居跡のカマドが本遺構に伴うものと思われたが、出土遺物等により別の遺構であることが判明した。第9・10号住居跡を切り、第13号住居跡に切られていた。ま

た、攪乱により大半を壊されており、調査できたのは北東コーナー部分だけであった。深さは0.14mであった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。遺物は須恵器の破片が少量出土した。

第18図 第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡(第14図)

AB-12・AC-12グリッドで検出された。攪乱などにより遺構確認が困難であったため、調査当初は第13号住居跡と共に1軒の住居跡として調査を行ってしまったので、十分な調査ができなかった。後にカマド等の検出により別の遺構であることが判明した。第13号住居跡を切って構築されていた。攪乱に南西部を壊されており、全体の規模は不明である。深さは0.27mで、主軸方位はN-62°-Eである。

カマドは南壁に2基と床面から1基と合計3基のカマドが検出された。3→2→1の順番につけ替えられていた。2と3のカマドは掘り方だけが残っていた。1のカマドの袖は地山の削り出しであった。

ピットは北東コーナー部に1本確認できた。長径97cm、短径50cm、深さ19cmであるが、主柱穴にはならないと思われる。

貯蔵穴・壁溝については確認できなかった。

遺物は前述したように2軒同時に調査を行ってしまったので、確実に本遺構に伴う遺物以外は第13号住居跡とともに報告した。

第13号住居跡(第14図)

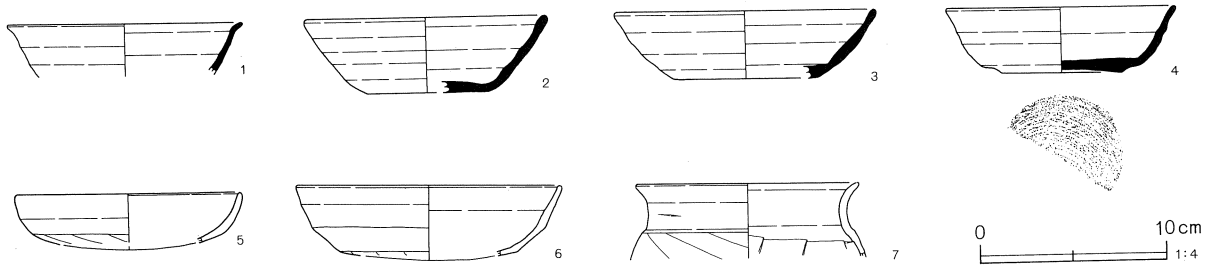
AC-12グリッドで検出された。第10・11号住居跡を切り、第12号住居跡に切られていた。調査できたのは東壁部分だけであり、南壁は攪乱に壊されていた。南北5.08m、深さは0.08mであった。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

第18図 第12号住居跡出土土器観察表

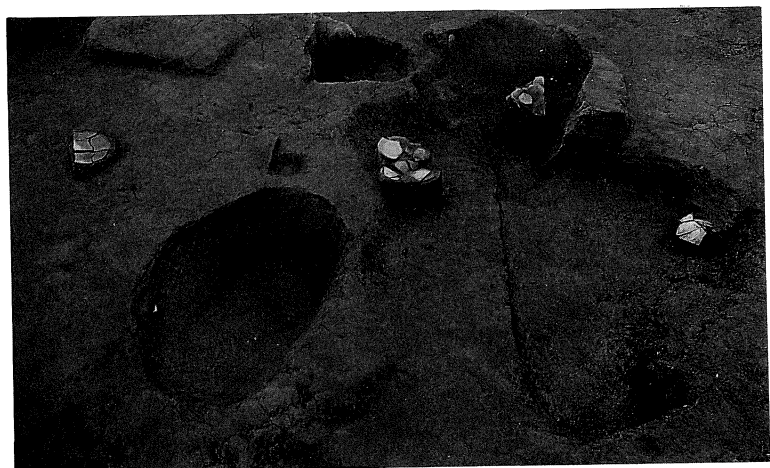
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.0)			C'EH'I	A	灰白	20%	No21 末野産
2	坏	(13.0)	(3.9)	6.3	AC'EH'I	A	灰白	50%	No.1 南比企産
3	坏			5.6	AC'DH'	A	灰	60%	No.8 南比企産
4	蓋	(16.8)	(4.4)		C'GH'I	A	灰白	55%	No.14 末野産
5	甕				C'EH'I	A	灰	10%	No.26 末野産
6	坏	12.4	3.5		BC'DH'	A	橙	100%	No.17 歪みが著しい 内面に付着物あり
7	坏	(13.4)			BC'DH'	A	橙	15%	No.2
8	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	にふい橙	20%	カマド1
9	坏	(13.6)			BC'DGH'	A	にふい橙	30%	カマド3
10	坏	13.6	4.1		BC'H'	A	にふい橙	75%	No.23
11	甕	(21.4)			BC'GH'	A	橙	20%	カマド1
12	甕	(21.6)			BC'H'	A	橙	15%	カマド1
13	甕			(8.9)	BC'DH'	A	橙	85%	No.15
14	甕			4.0	BC'DH'	A	にふい橙	40%	No.11,12 外面に多量の煤が付着
15	壺			5.8	BC'DH'	A	にふい橙	90%	No.25 内外面全体に煤が付着

第19図 第12・13号住居跡出土遺物



第19図 第12・13号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)			C'EGH	A	灰	10%	IV区 末野産
2	坏	(12.8)	(4.0)	(6.2)	ADEH'	A	灰白	15%	IV区 南比企産
3	坏	(13.8)	(3.6)	(7.6)	ADH'	C	灰白	20%	IV区 南比企産
4	坏	(12.0)	3.5	(6.4)	C'EH'I	D	灰褐	35%	III区、IV区 末野産
5	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	黄橙	20%	IV区
6	坏	(14.0)			BC'DGH'	A	橙	25%	III区
7	甕	(11.8)			BC'DH'	A	橙	20%	IV区 内面は煤ける



第14号住居跡(第20図)

AC-13グリッドで検出された。北側の約半分が攪乱によって壊されているため全体の規模や形態は不明である。東西3.40m、深さは0.19mで、主軸方位はN-21°-Eである。

貯蔵穴は北東コーナー部にあたると思われる場所に位置し、北側を攪乱により壊されていた。長径68cm、短径約56cm、深さは33cmで、4層からなる自然堆積であった。覆土の中層からは土師器の下半部を欠いた7の壺が、口縁部が逆さになった状態で出土した。城北遺跡第4・123号住居跡のように貯蔵穴に棒状木材を蓋とし、その上に壺の下半部を欠いた転用器台を置くよ

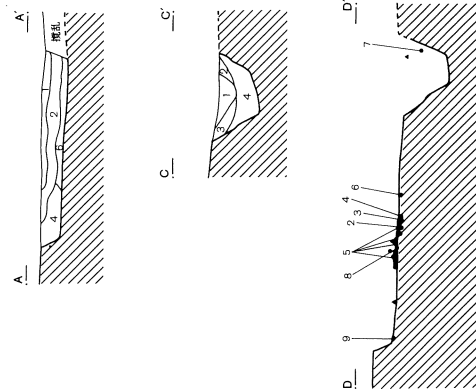
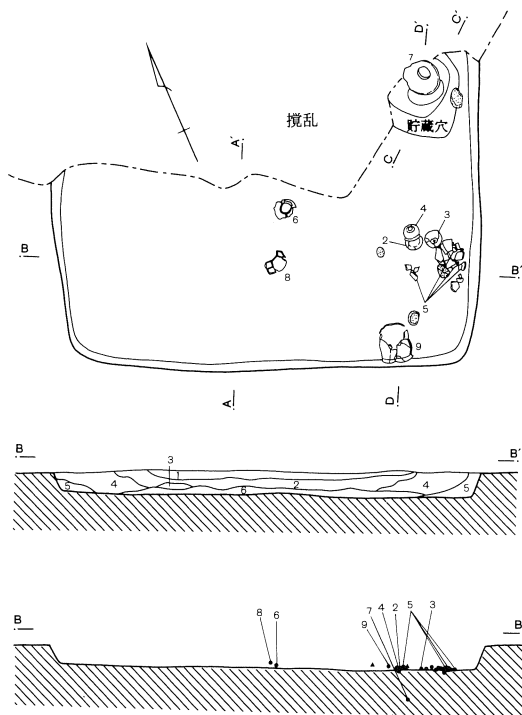
うな類例が明らかになってきた。本遺構の場合も、本来は蓋材の上に置かれた壺が、蓋材の腐食により貯蔵穴内に落ち込んだものと思われる。

カマドは攪乱のため確認できなかったが、出土遺物からみるとカマドを付設していなかったことも十分に考えられる。

柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は、南東コーナー付近の床面からまとまって出土した。3の椀は焼成後に底部を穿孔している。6・7の壺は故意に胴下半を打ち欠かれており、また内面の頸部周辺が摩滅していることから器台として転用されたものであろう。

第20図 第14号住居跡

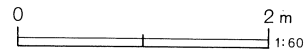


第14号住居跡土層説明

- 1 淡褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土粒子を若干。
- 2 淡褐色土 黄褐色土粒子を少量。
- 3 褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 4 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを主体に含む。
- 5 褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土粒子を若干。
- 6 淡灰褐色土 黄褐色土粒子を少量。

貯蔵穴

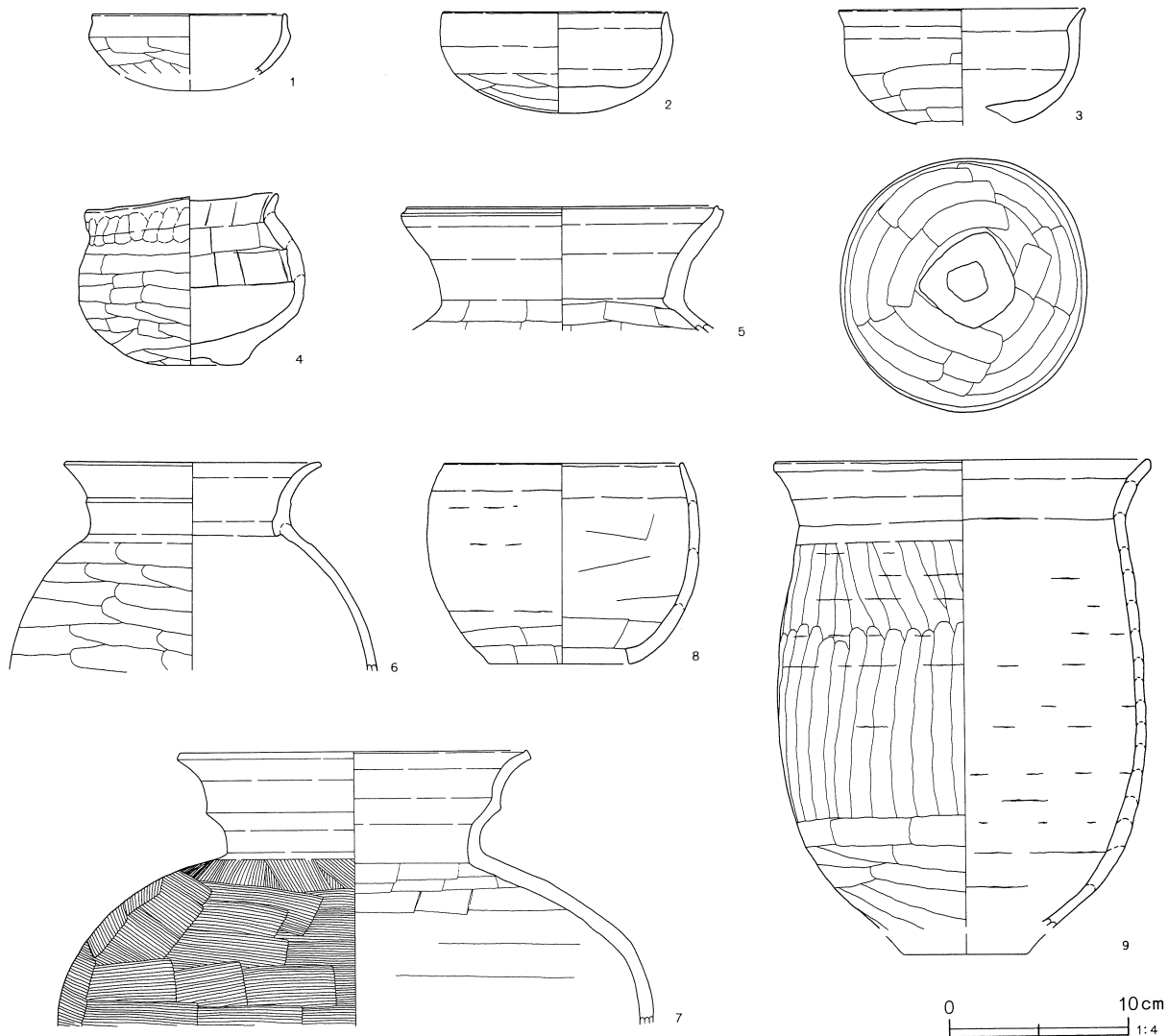
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 2 淡褐色土 黄褐色土粒子・白色パミスを微量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量。
- 4 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。



第21図 第14号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.6)			BCDGH'	A	橙	15%	IV区
2	坏	12.4	5.4		BCDGH'	A	橙	100%	No.3 口縁部は歪んでいる
3	椀	13.6	6.3		BCDGH'	A	橙	100%	No.4
4	鉢	10.8	9.3	5.4	BC'FGH'	A	橙	95%	No.2 上げ底
5	壺	(17.9)			BCDGH'	A	橙	40%	No.5、12、16~18、25
6	壺	14.3			BC'GH'	A	橙	60%	No.28
7	壺	19.5			BCGH'	A	橙	75%	貯蔵穴
8	甑	(13.3)	10.9	(7.8)	C'D'GH'	A	にぶい橙	85%	No.27
9	甕	20.9			BCDGH'	A	橙	85%	No.1 口縁部内面は煤ける

第21図 第14号住居跡出土遺物



## 第15号住居跡(第22・23図)

AC-13グリッドで検出された。南側は福川の河川改修に伴う工事等によって壊されており、全体の規模・平面形態は不明である。また南から北方向に向かって噴砂が走行しており、カマドと壁の一部が壊されているが、床面の段差や歪みは生じていなかった。南北3.33m、深さは0.22mで、主軸方位はN-65°-Eである。

住居跡の覆土は3層からなる自然堆積であった。

カマドは東壁やや南寄りに位置していた。袖は地山の削り出しで、右袖は確認できなかった。燃焼部は皿状に掘り込まれており、床面からの深さは26cmであった。カマドa層は天井が崩落した層と思われ、中に土師器の甕4点の破片が含まれていた。1~4の甕は口

径が20~22cmで、器高が27cm前後とほぼ同じタイプの土器で、天井部の横架材として6、5、7、4の順に重ねて使用されていたと考えられる。6の胴部中位には付着物が認められる。また、底面からは長さ約20cmの炭化材が出土した。

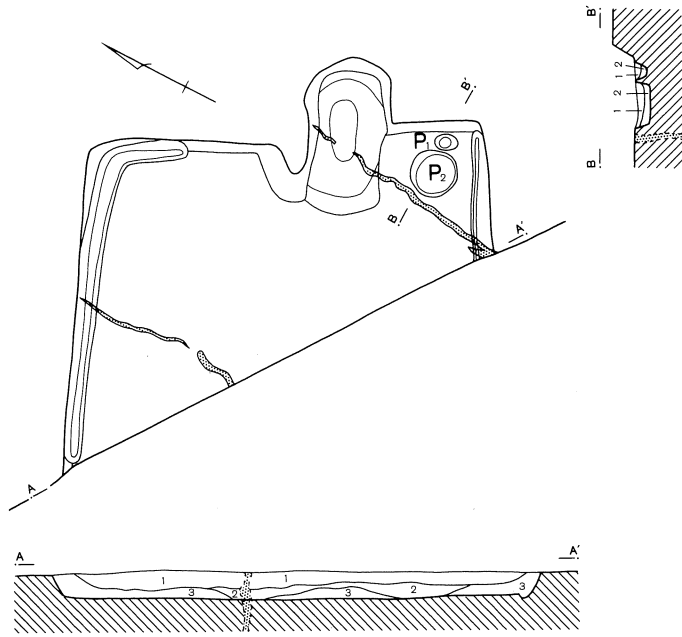
ピットは南東コーナーに2本検出したが、いずれも掘り込みは浅く、柱穴としては考えにくい。P2は貯蔵穴と考えられる。

壁溝は幅約17cm、深さ約3cmで、カマドの位置する東壁を除き調査範囲内では全周していた。

柱穴は確認できなかった。

遺物はカマド天井部の横架材として使用された4~7の甕のほかに、床面からやや浮いて1・2の須恵器

第22図 第15号住居跡



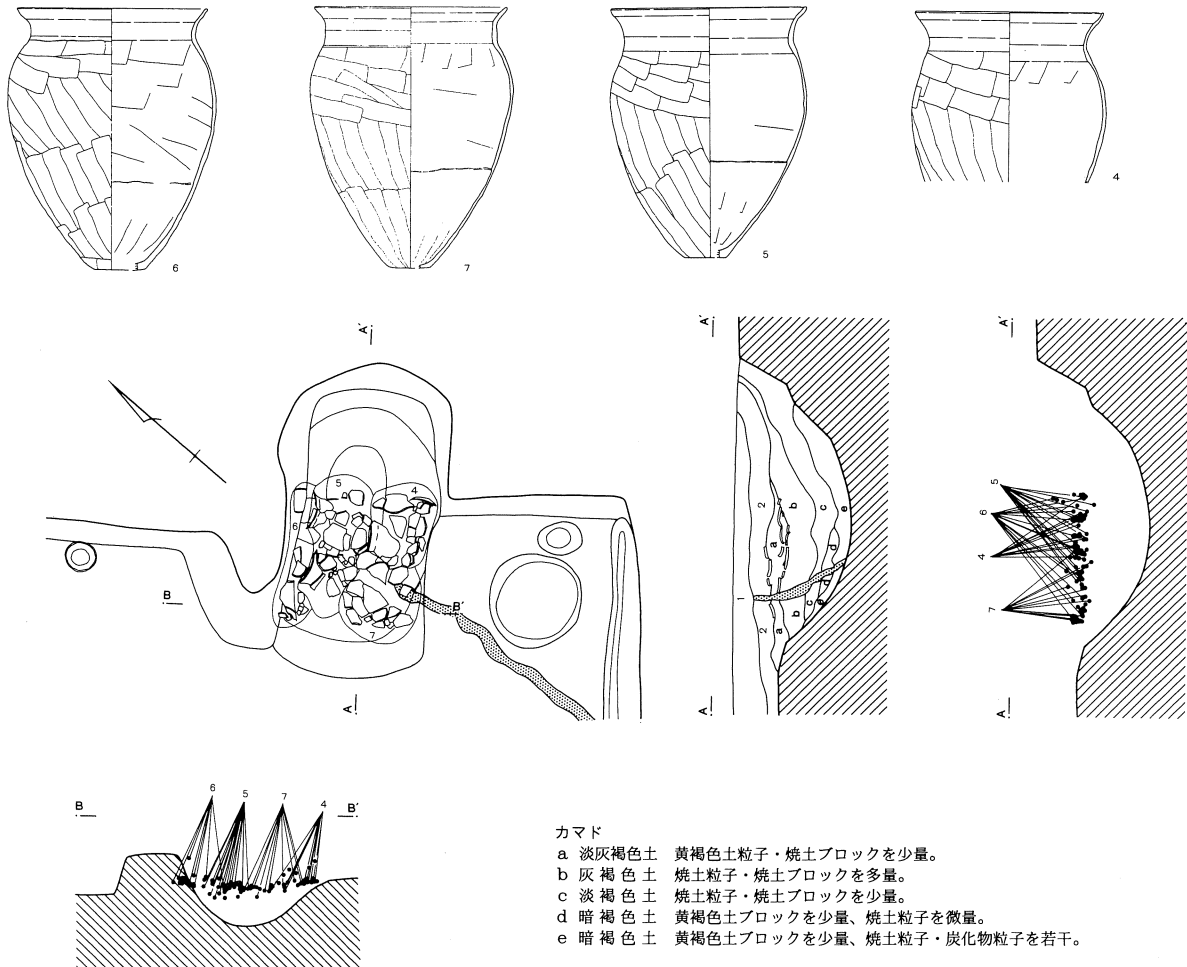
第15号住居跡土層説明

- 1 淡褐色土 黄褐色土粒子・白色パミス・焼土粒子を微量。
- 2 淡褐色土 黄褐色土粒子・白色パミスを微量、焼土粒子を若干。
- 3 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量。

ピット

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを微量。
- 2 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量。

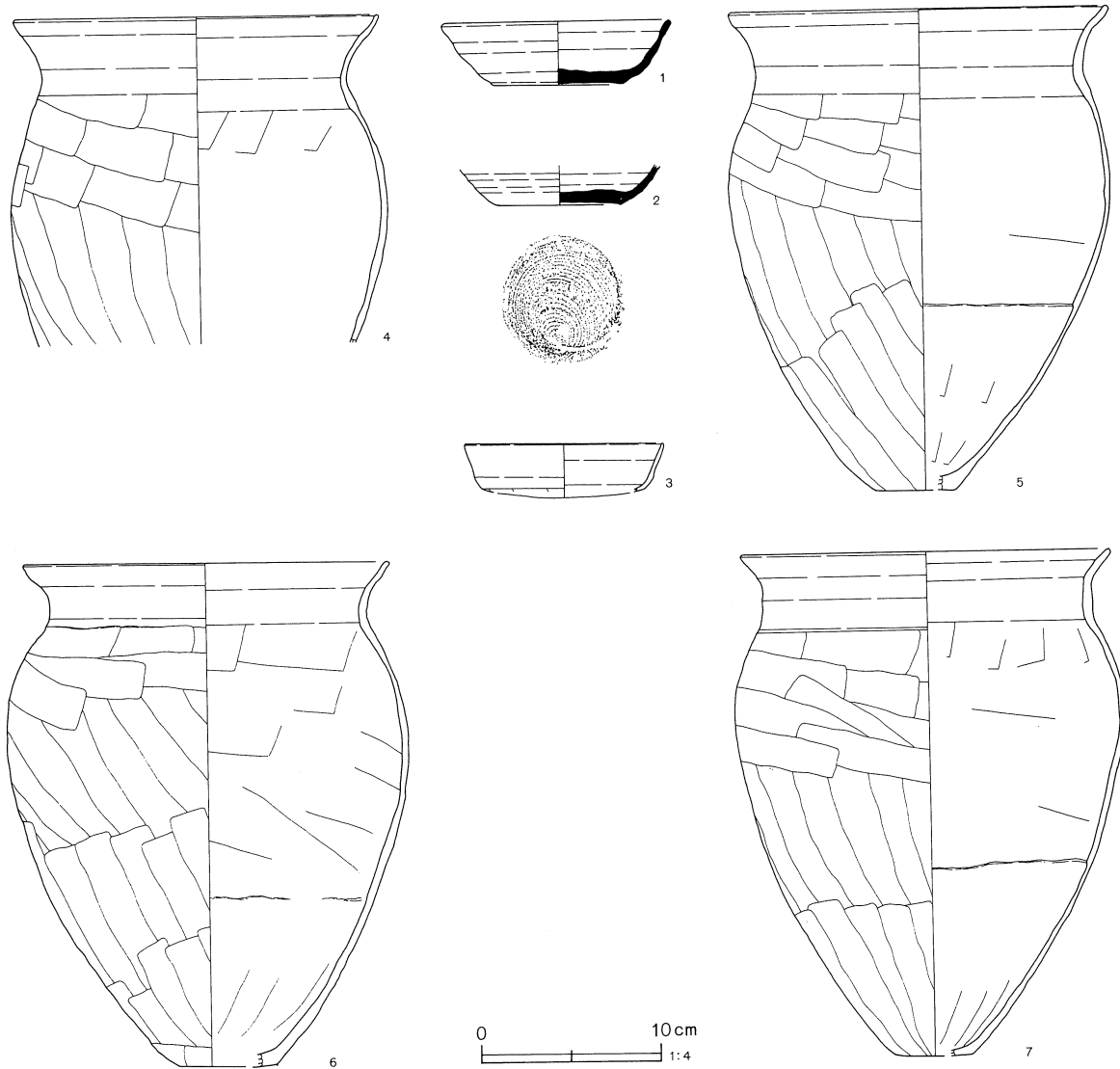
第23図 第15号住居跡カマド



カマド

- a 淡灰褐色土 黄褐色土粒子・焼土ブロックを少量。
- b 灰褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多量。
- c 淡褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量。
- d 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子を微量。
- e 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

第24図 第15号住居跡出土遺物

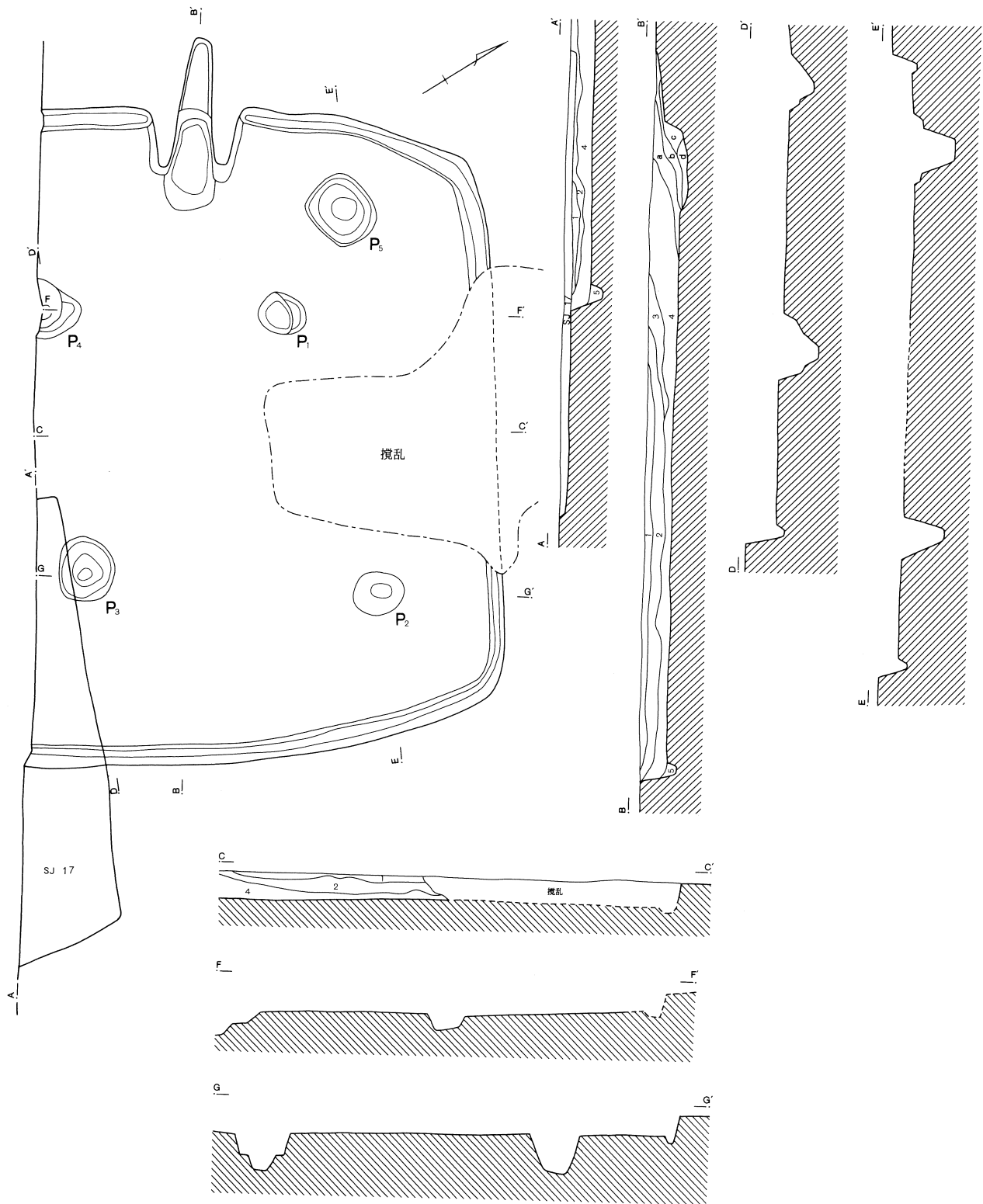


第24図 第15号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.7	3.5	7.0	C'DGH'	D	灰白	100%	No.45
2	坏			6.8	C'DEH	A	灰	60%	No.44
3	坏	(11.0)			C'DH'	A	橙	15%	I区
4	甕	20.0			BC'DH'	A	黄橙	80%	No.2、17~25、30~32、45
5	甕	22.0	26.5	(4.4)	BC'DH'	A	橙	90%	No.33、37~42、48~55、59~62、66~69
6	甕	20.0	27.7	(5.5)	BC'DH'	A	橙	80%	No.56~58、70~80 胴部中に付着物あり
7	甕	(20.4)	27.7	(4.2)	BC'DH'	A	橙	55%	No.1~3、6~13、20、34、35

の坏が出土した。5~7の甕は胴部内面に輪積痕が明瞭に認められる。坏は2点とも底部切り離しが回転糸切りである。

第25図 第16号住居跡



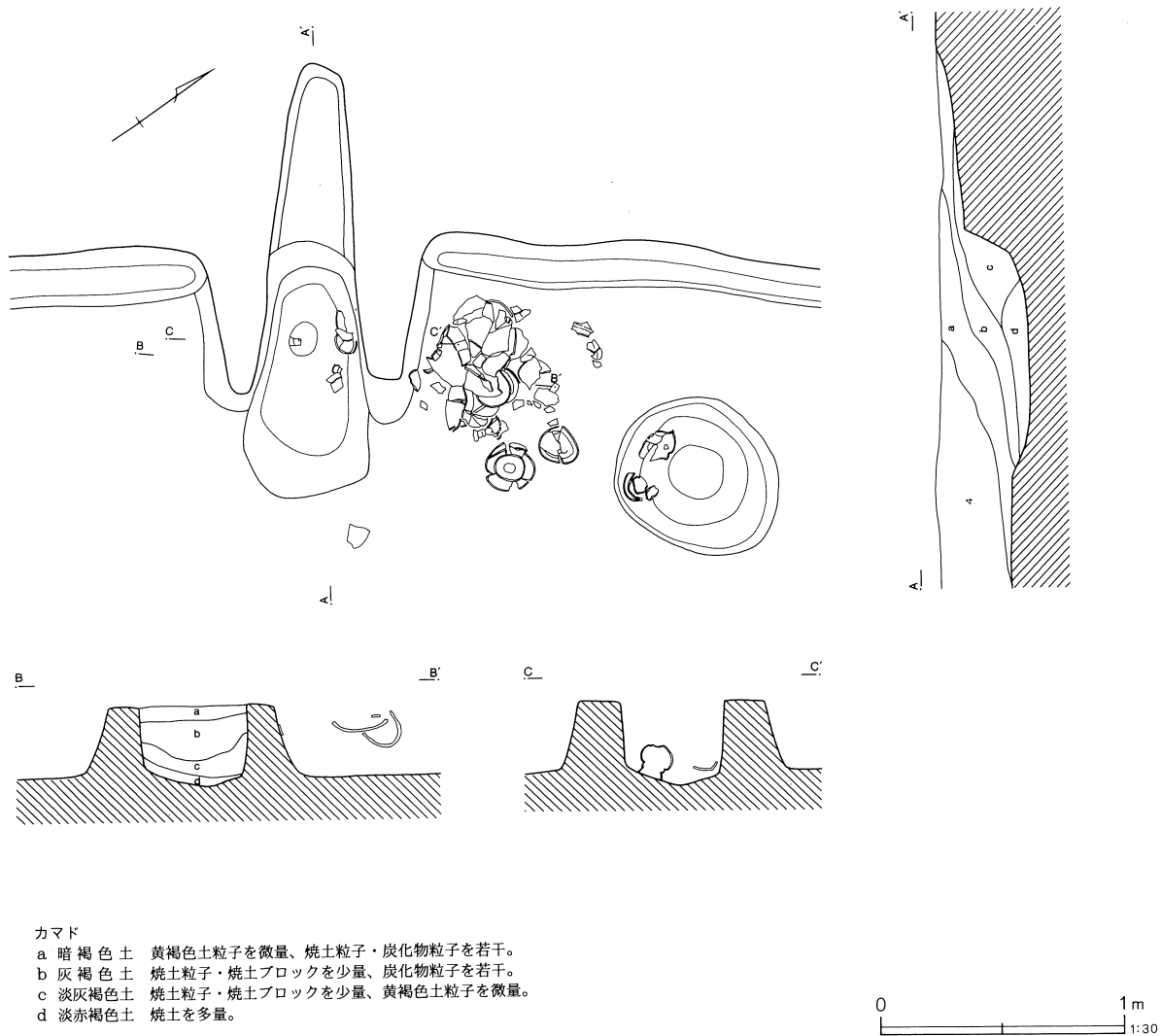
第16号住居跡土層説明

- 1 淡褐色土 黄褐色土粒子・白色バミスを微量。
- 2 淡褐色土 黄褐色土粒子を少量、白色バミスを微量。
- 3 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを主体に含む。
- 4 褐色土 黄褐色土粒子を少量。





第26図 第16号住居跡カマド



カマド

- a 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- b 灰褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量、炭化物粒子を若干。
- c 淡灰褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量、黄褐色土粒子を微量。
- d 淡赤褐色土 焼土を多量。

0 1m  
1:30

## 第16号住居跡(第25~27図)

AC-13・14、AD-13・14グリッドで検出された。東壁を第17号住居跡に、北壁を攪乱によって壊されていた。また南側は福川の河川改修に伴う工事によって壊されているため、全体の規模・形態は不明である。東西6.70m、深さは0.30mで、主軸方位はN-55°-Wである。

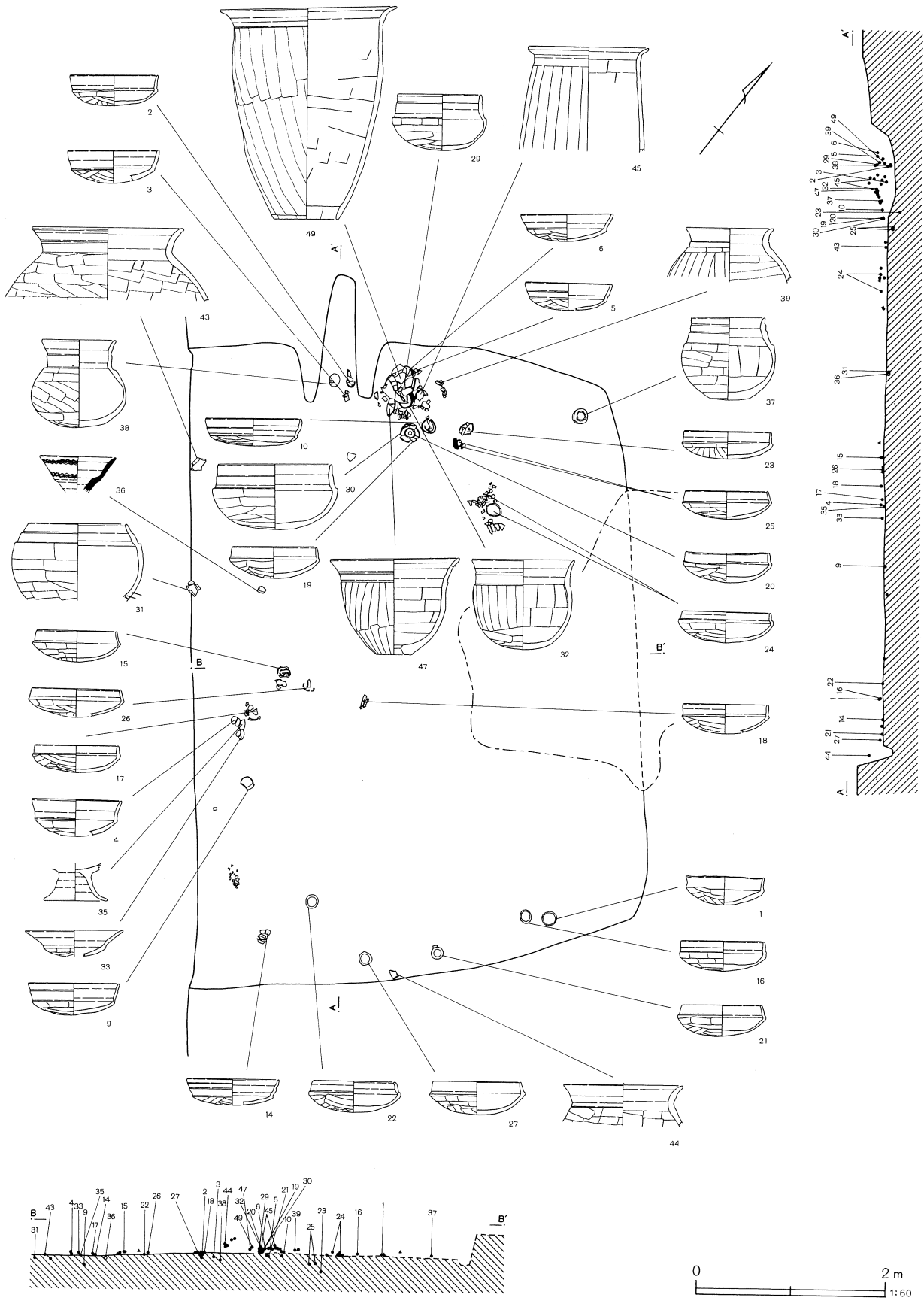
カマドは西壁に位置していた。袖は地山の削り出しで、内側の壁面は焼土化していた。燃烧部は掘り込みが8cmで、最下層には灰層があった。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、煙道に至る。煙道は壁外に長く伸び、緩やかな傾斜をつけて掘り抜かれていた。燃烧部の左寄りには支脚として転用されたとと思われる38の土師器

の小型壺が倒立していた。また、右袖の外側には炭化物が検出された。

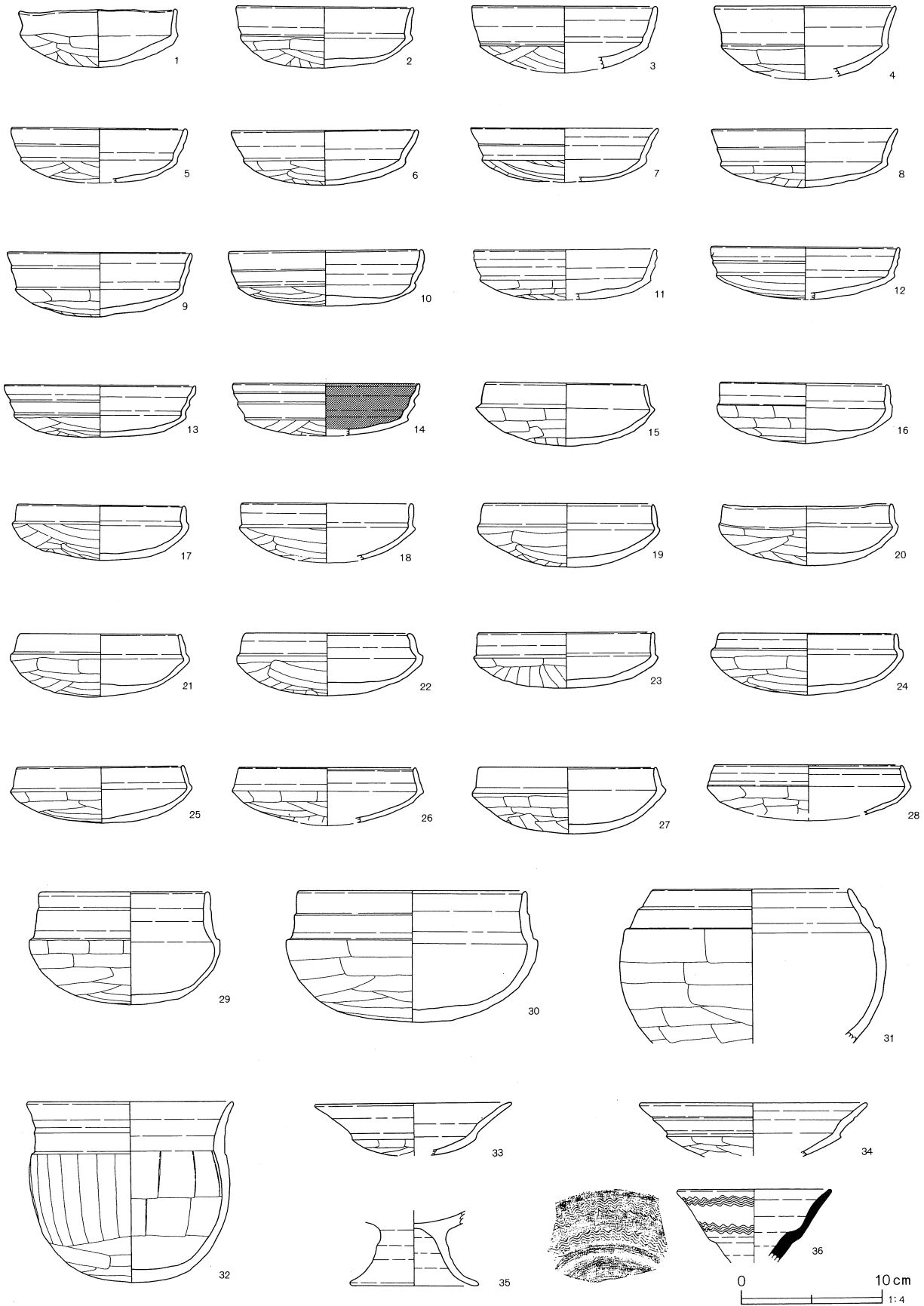
ピットは5本検出できた。P1~4は主柱穴になるものと考えられる。各柱穴の大きさは、P1が49cm×43cm×18cm、P2が52cm×44cm×40cm、P3が66cm×57cm×37cm、P4が60cm×41cm×25cmであった。P1~4の主軸は、住居跡の主軸方位とは一致せず、大きく南に振れる。P5はカマドの右側、北西コーナーに位置し、貯蔵穴と考えられる。長径71cm、短径61cm、深さ43cmで、覆土上層からは23・25の土師器の坏が出土した。

壁溝は幅約23cm、深さ約9cmで、調査範囲内では全周していた。

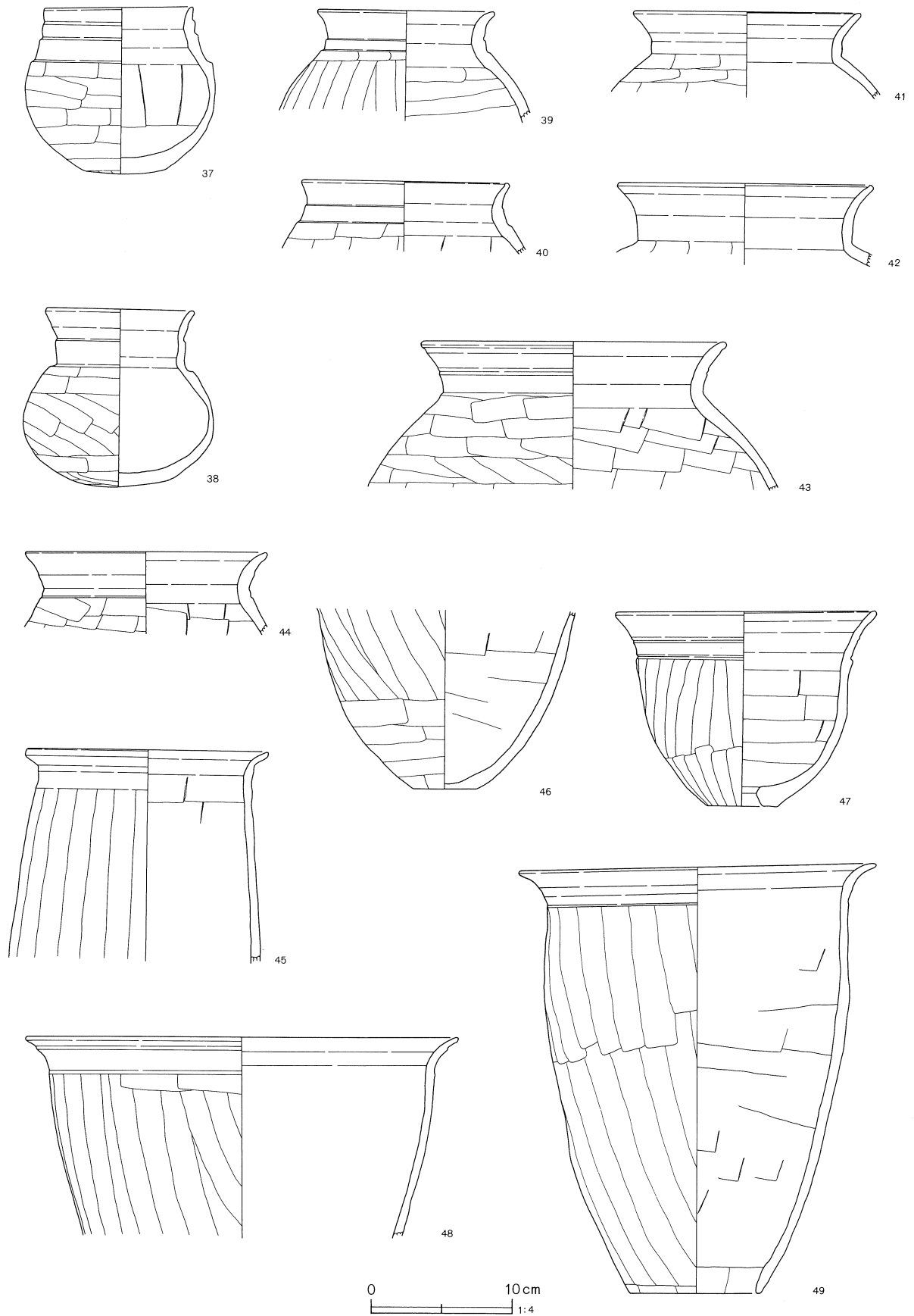
第27图 第16号住居跡遺物出土狀況



第28図 第16号住居跡出土遺物(I)



第29图 第16号住居跡出土遺物(2)



遺物は東壁沿いとカマドの右側から集中して出土した。東壁沿いには、1・16・21・22・27の土師器の完

形の坏5点が床面からやや浮いて出土した。カマドの右側の土器は、炭化物層の上の床面から10cm程浮いた

第28・29図 第16号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.2	4.1		BC'DG'H'	A	橙	100%	No42
2	坏	(12.4)	4.3		BC'DGH'	A	浅黄橙	60%	No.4
3	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	橙	15%	No.2
4	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	橙	20%	No65
5	坏	(12.4)			BC'DGH'	A	橙	35%	カマドNo28
6	坏	13.1	3.8		BCDGH'	A	橙	100%	カマドNo27
7	坏	(13.4)			BC'DH'	A	黄橙	30%	IV区
8	坏	(13.0)	(4.1)		BC'DH'	A	橙	35%	東ベルト、II区
9	坏	13.0	4.5		BC'DGH'	A	橙	80%	No68
10	坏	13.6	4.0		BC'DH'	A	橙	100%	カマドNo13
11	坏	(13.0)			BC'G'H'	A	橙	25%	IV区
12	坏	(13.2)			BCDH'	A	橙	40%	I区
13	坏	(13.4)	(3.6)		BC'DG'H'	A	浅黄橙	40%	III区、IV区
14	坏	(13.2)			BC'DG'H'	A	にふい橙	45%	No35 内面黒色処理
15	坏	11.0	4.4		BC'DGH'	A	黄橙	100%	No60
16	坏	11.5	4.2		BC'DGH'	A	橙	100%	No41
17	坏	11.5	3.9		BC'DH'	A	橙	60%	No64
18	坏	(11.8)			C'DG'H'	A	橙	30%	No58
19	坏	11.8	4.4		BC'DG'H'	A	橙	90%	カマドNo12
20	坏	11.9	4.4		BC'DGH'	A	橙	100%	No33
21	坏	11.2	4.4		BC'DGH'	A	にふい橙	100%	No39
22	坏	11.5	4.4		BC'DGH'	A	橙	100%	No36
23	坏	(12.2)	(3.9)		BC'DG'H'	A	にふい橙	40%	カマドNo31、ピット2
24	坏	12.3	4.4		BC'DG'H'	A	黄橙	95%	No47、52
25	坏	11.5	4.0		BC'DG'H'	A	浅黄橙	95%	カマドNo14、29、30
26	坏	(12.4)			BC'DGH'	A	橙	30%	No63
27	坏	12.3	4.7		BC'DGH'	A	橙	100%	No37
28	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	南ベルト
29	鉢	12.0	7.9		BC'DGH'	A	橙	90%	カマドNo34
30	鉢	16.0	9.3		BC'DH'	A	にふい橙	95%	カマドNo12
31	鉢	(13.7)			BC'DG'H'	A	橙	35%	No56
32	鉢	14.5	12.7		BC'EG'H'	A	橙	95%	カマドNo16
33	高坏	(14.0)			BC'DGH'	A	橙	35%	No67
34	高坏	(16.0)			C'DG'H'	A	にふい褐	10%	IV区
35	高坏			9.0	C'DG'H'	A	橙	70%	No66
36	甗	(10.8)			C'H'J'	A	灰白	30%	No55
37	壺	10.4	11.7		BC'DH'	A	橙	95%	No44
38	壺	10.4	12.4		BC'DH'	A	橙	95%	No.1
39	壺	(12.4)			BC'DH'	A	橙	35%	カマドNo25
40	壺	(14.4)			BC'DG'H'	A	橙	15%	IV区
41	壺	(15.8)			BC'DGH'	A	橙	20%	IV区
42	壺	(17.8)			BC'DG'H'	A	橙	10%	南ベルト
43	壺	(21.2)			BC'DGH'	A	橙	25%	No57
44	甗	(16.8)			BC'DGH'	A	橙	25%	No38
45	甗	16.9			C'DG'H'	A	にふい橙	75%	カマドNo16、17
46	甗			4.4	BEH	A	浅黄橙	40%	II区、東ベルト
47	甗	18.3	13.7	4.9	BC'DGH'	A	橙	95%	カマドNo14
48	甗	(30.2)			BC'DGH'	A	橙	20%	覆土
49	甗	25.2	29.8	9.3	BC'DH'	A	黄橙	90%	カマドNo15

位置で検出されたが、出土状況等から本遺構に伴うものである。32の鉢と47の小型の甑はセットで使用されていたと思われる。また、その2点の土器の上に重なって出土した49の甑も、下半部を欠損した45の甕を器台としていたものが住居跡の埋没の過程で横転したものである。14の坏は内面に黒色処理が施されている。36は須恵器の甕で、口縁部に2段の櫛描き波状文が施されている。38の小型の壺はカマド支脚に転用されたものと思われ、底部は焼成後打ち欠かれている。

### 第17号住居跡(第30図)

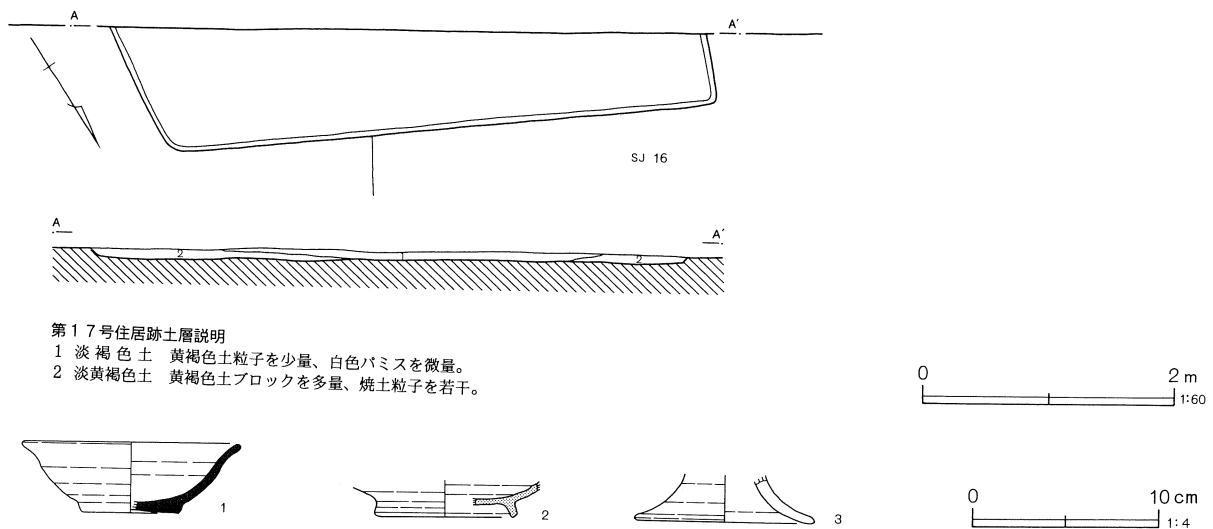
AD-14グリッドで検出され、第16号住居跡の覆土の一部を掘り込んで構築していた。大半が調査区外に延びるため、今回調査できたのは北壁の部分だけであった。東西4.56m、深さは0.07mであった。

覆土は2層からなる自然堆積であった。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は調査範囲内からは検出できなかった。

遺物は覆土から少量出土した。

第30図 第17号住居跡および出土遺物



第17号住居跡土層説明

- 1 淡褐色土 黄褐色土粒子を少量、白色バミスを微量。
- 2 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子を若干。

第30図 第17号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.4)	3.7	(5.2)	BC'DH'	C	灰白	30%	IV区
2	高台坏			(7.6)	C'J	A	灰白	20%	I区
3	甕			(9.6)	BC'DGH'	A	橙	45%	II区

### 第18号住居跡(第31図)

AD-13グリッドで検出された。大半が調査区外にかかり、今回調査できたのは北西コーナー部分だけであった。すぐ南に近接して構築されている第19号住居跡との新旧関係は今回の調査では明らかにすることはできなかった。深さは0.10mであった。

覆土は2層からなる自然堆積であった。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は今回の調査範囲内からは検出できなかった。

遺物は覆土から少量出土したが、実測可能な遺物はなかった。

### 第19号住居跡(第31図)

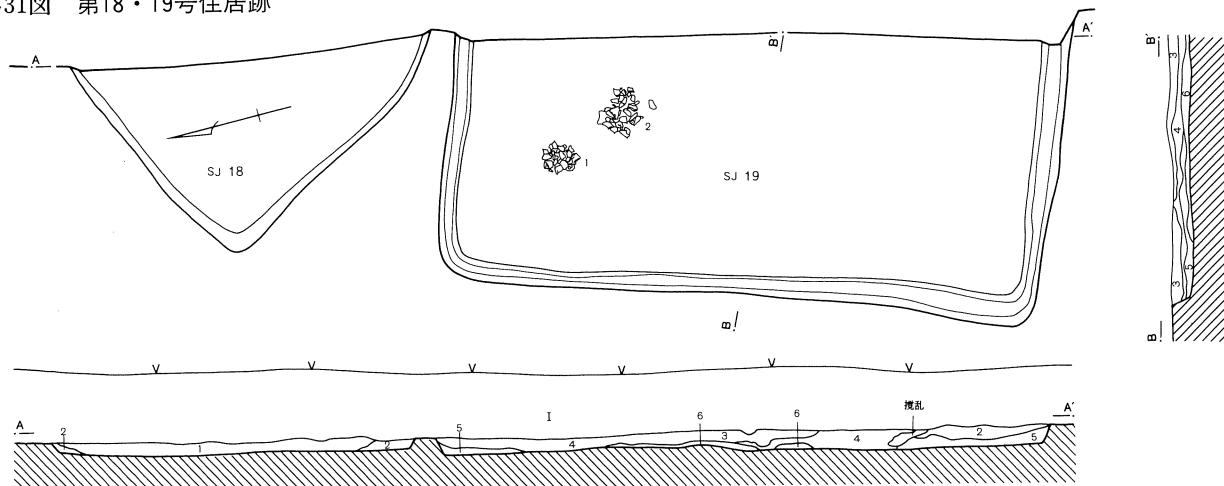
AD-13・14グリッドで検出された。北側20cmの位置には第18号住居跡があるが、調査区外にかかるため新旧関係は不明である。南北4.90m、深さは0.15mであった。

壁溝は幅約22cm、深さ約6cmで、調査範囲内では全周していた。柱穴は確認できなかった。

カマド・貯蔵穴は今回の調査範囲内からは検出できなかった。

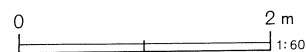
遺物は床面から1・2の土師器の甕が潰れた状態で出土した。2の甕は胴下半部を欠損している。

第31図 第18・19号住居跡

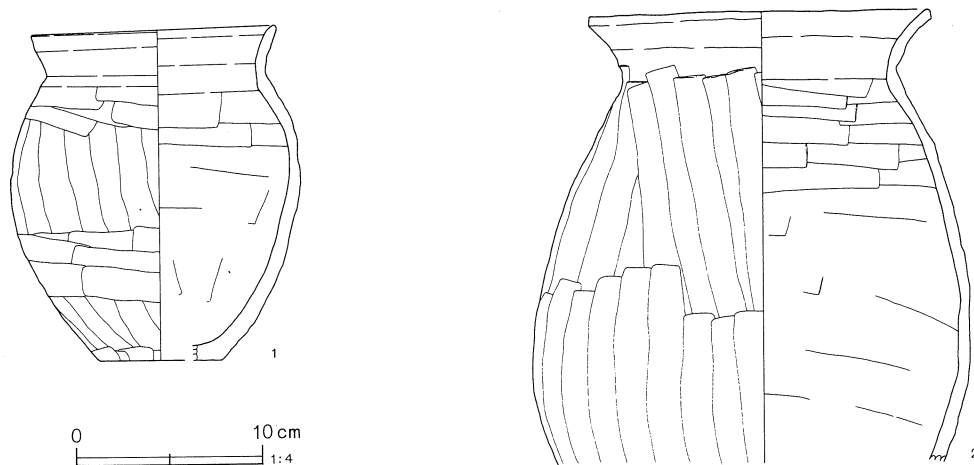


第18・19号住居跡土層説明

- I 淡褐色土 表土
- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、白色バミスを微量。
- 2 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを大量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土粒子・白色バミスを微量。
- 4 褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土粒子を若干。
- 5 淡黄褐色土 黄褐色土ブロック多量、焼土粒子を若干。
- 6 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。



第32図 第19号住居跡出土遺物



第32図 第19号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	13.0	17.7	6.4	C'FGH	A	にふい橙	95%	No 1、2、4～19、21、23
2	甕	18.2			C'DGH	A	にふい橙	75%	No22、25、30、35、36、38、41、45～47、54～56

第20号住居跡(第33図)

AC-12・13、AD-12・13グリッドで検出された。東西3.60m、南北3.13m、深さは0.14mで、平面形態は西辺がやや短く台形に近い形をしていた。主軸方位はN-72°-Eである。地山は南東コーナー付近では黄褐色の粘質土から砂礫層に変化していた。

カマドは東壁やや南寄りに位置していた。袖は左袖の一部が確認できただけであった。

壁溝は幅約25cm、深さ約3cmで、北壁部分にのみ巡っていた。

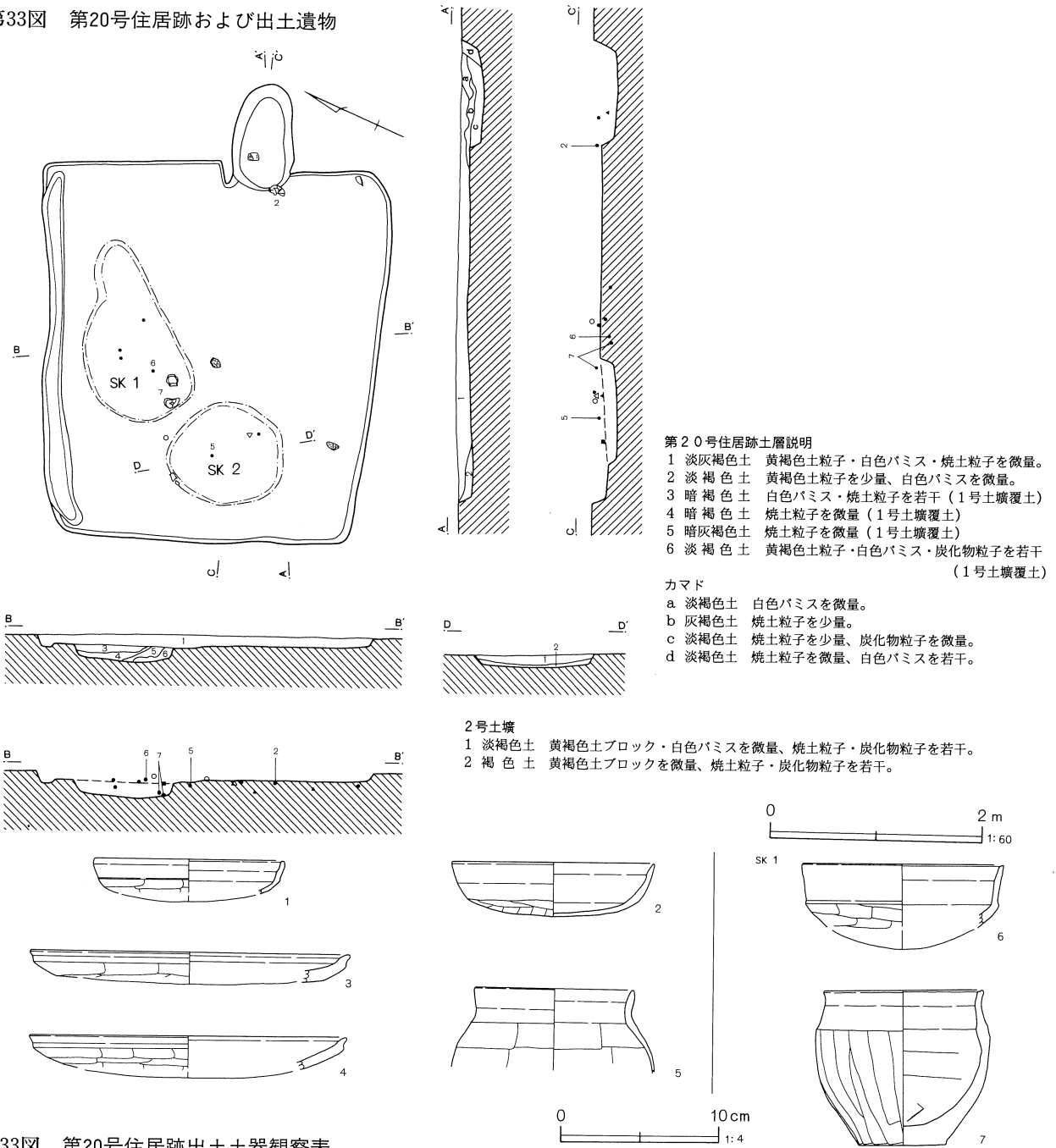
床下からは土壇が2基検出された。1号床下土壇は1.74m×0.93m×0.15mで、不整円形をしていた。2号床下土壇は1.12m×0.95m×0.13mで、楕円形をしていた。2号床下土壇からの出土遺物はなかったが、覆土の観察から1号床下土壇と時期差はそれほど無いものと考えられた。

柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物はカマド焚口付近から2の土師器の坏が出土したが、大半は覆土からの出土である。また、1号床下

土壌からは6の坏と7の小型の鉢が出土した。土器のほかには覆土から刀子・鎌の鉄製品と白玉が各1点出土している。

第33図 第20号住居跡および出土遺物

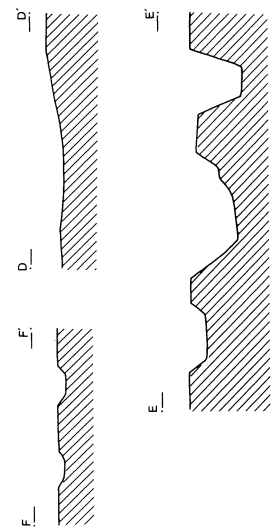
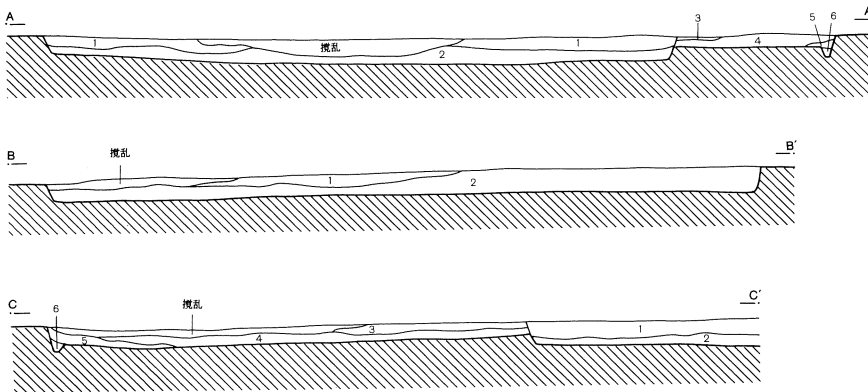
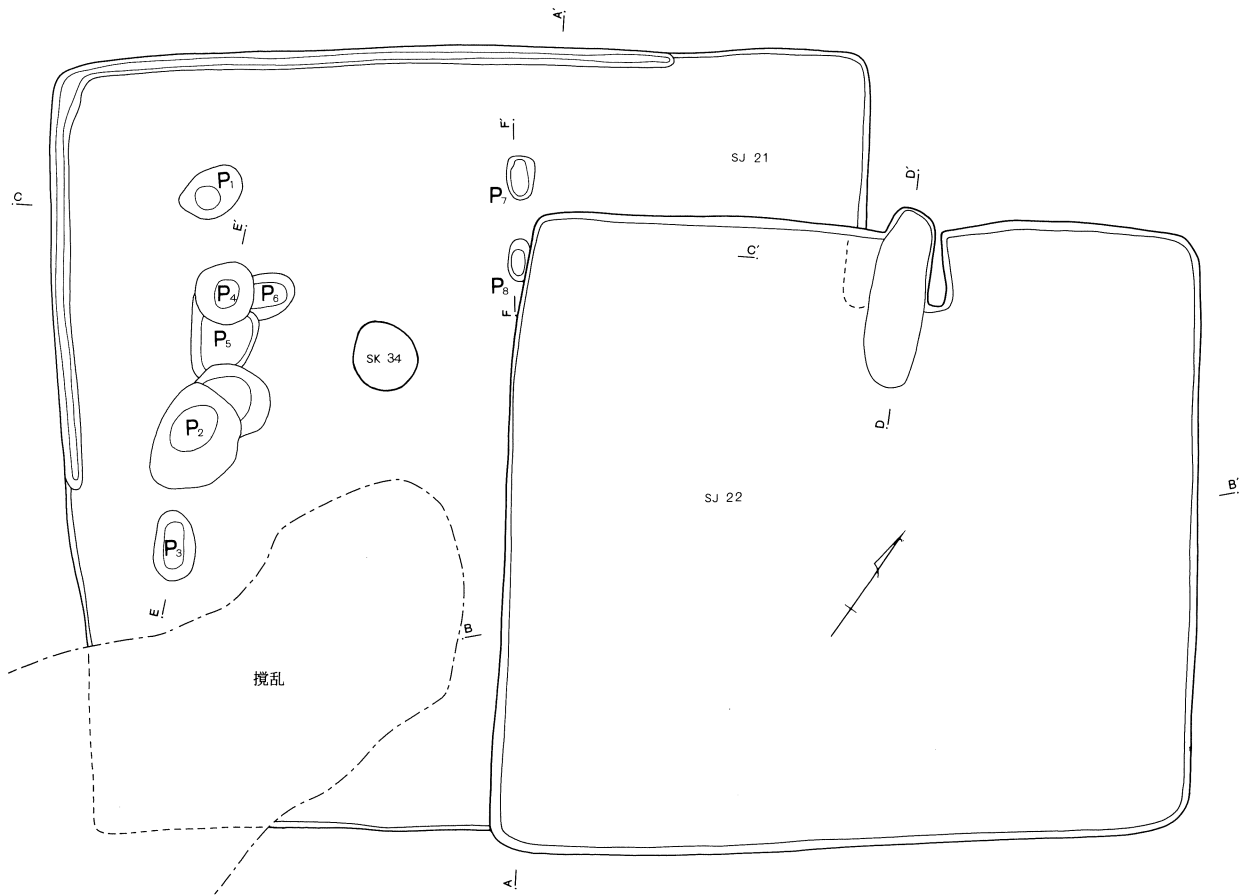


第33図 第20号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	坏	(12.0)			BCH'	A	橙	20%	II区	
2	坏	(12.6)	(3.4)		BC'DH'	A	浅黄橙	60%	No. 2	
3	皿	(20.0)			BC'DH'	A	浅黄橙	10%	III区	
4	皿	(20.0)			BC'DFH'	A	にふい褐	10%	III区	
5	甕	(10.0)			BC'DF	A	橙	15%	No. 6	
6	坏	(12.8)			C'DGH'	A	橙	35%	12、西ベルト、III区	
7	鉢	10.0	9.7	5.5	BC'DGH'	A	橙	95%	No. 3、10、11	

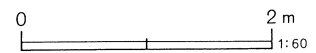


第34図 第21・22号住居跡

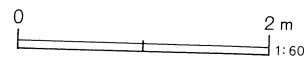
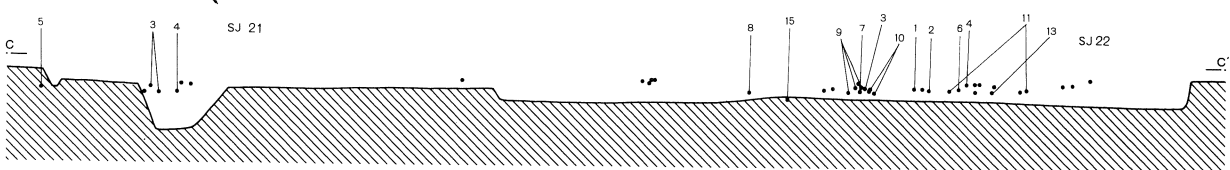
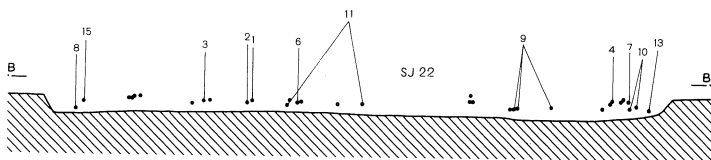
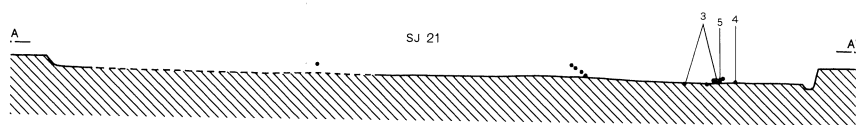
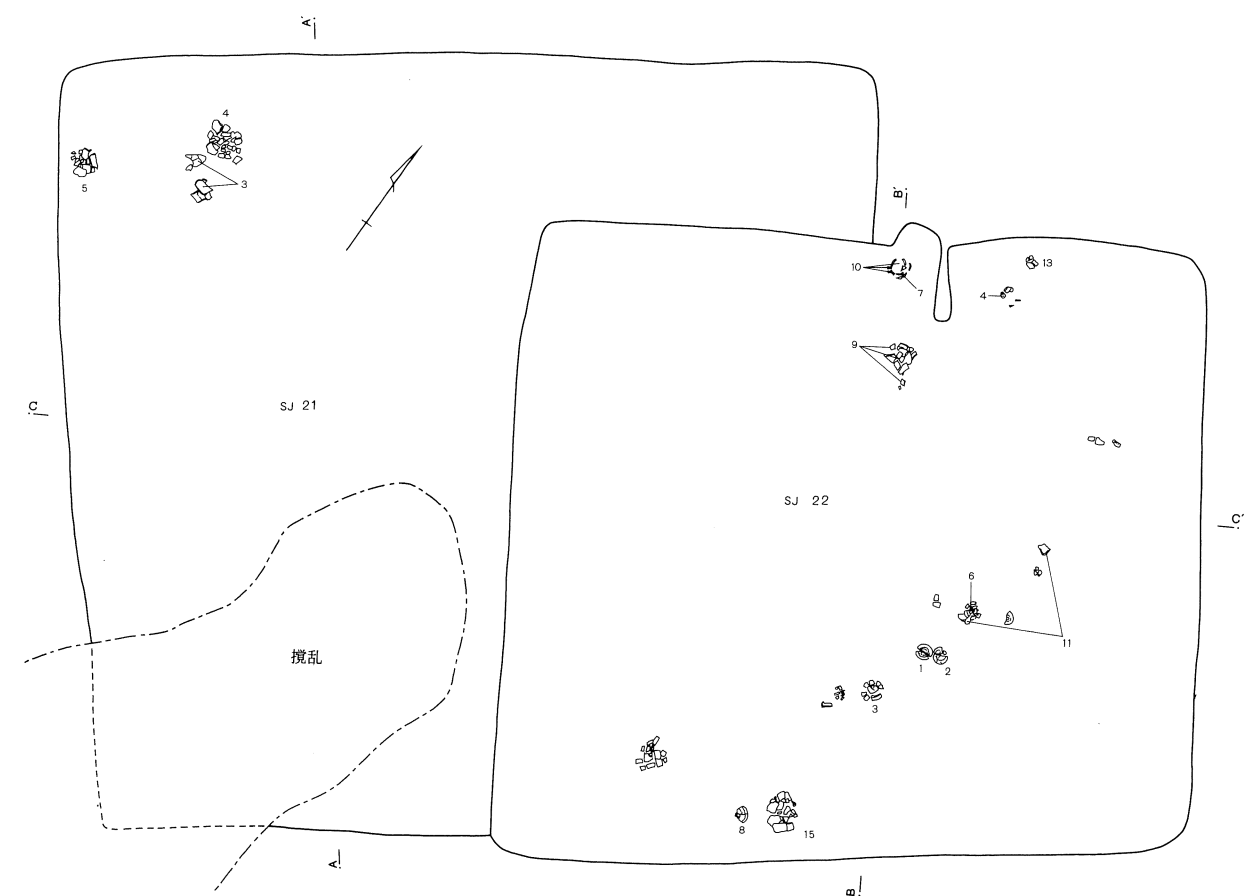


第21・22号住居跡土層説明

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、白色バミスを微量。
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを微量、白色バミス・焼土粒子を若干。
- 4 暗褐色土 黄褐色土粒子・炭化物粒子を微量、焼土粒子を若干。
- 5 褐色土 黄褐色土ブロックを少量。
- 6 褐色土 白色バミスを微量。



第35图 第21・22号住居跡遺物出土状況



## 第21号住居跡(第34・35図)

AC-13、AD-12・13グリッドで検出された。第22号住居跡によって東壁と南壁の一部を、攪乱によって南西コーナー部を壊されていた。また、床面中央は第34号土壙に壊されていた。東西6.52m、南北6.23m、深さは0.13mで、主軸方位はN-35°-Wである。

覆土は4層からなる自然堆積であった。

ピットは8本確認できたが、何れが主柱穴になるの

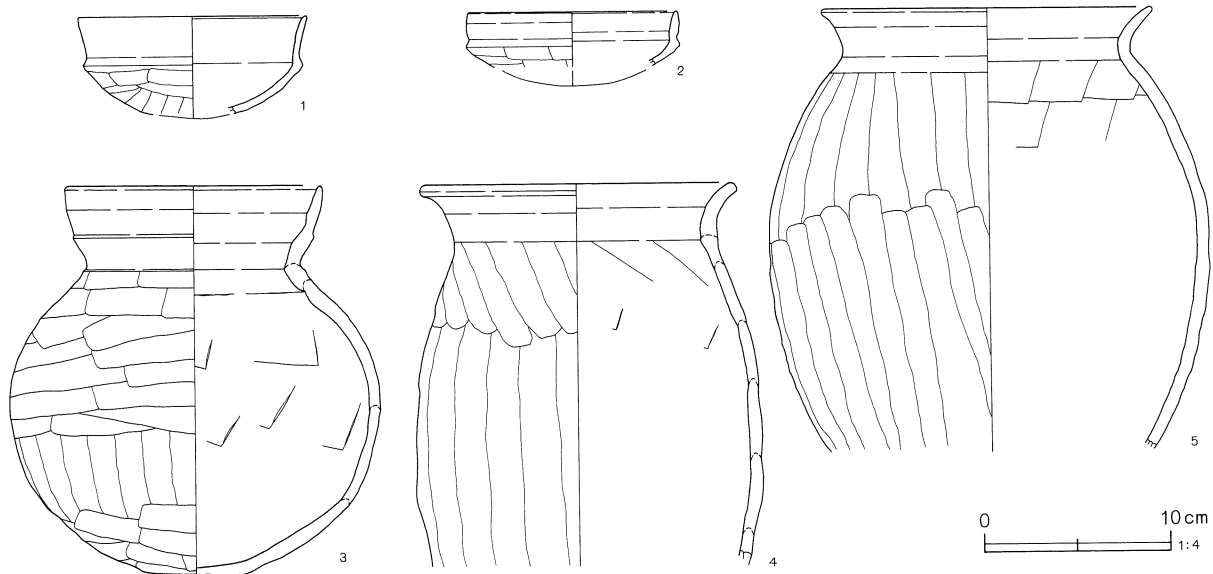
かは確認できなかった。本遺構に伴わないものもあると思われる。

壁溝は幅約16cm、深さ約6cmで、北壁と西壁に巡っていた。

カマド・貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は北西コーナー部の床面から3の土師器の壺と4・5の甕が出土した。ほかに覆土から土錘が1点出土している。

第36図 第21号住居跡出土遺物



第36図 第21号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	II区
2	坏	(11.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	覆土
3	壺	(13.8)	20.3	5.3	C'DGH'	A	黄橙	70%	No. 2, 4
4	甕	16.9			CDGH	A	にぶい橙	65%	No. 5
5	甕	(17.6)			CDGH	A	灰白	35%	No. 1

## 第22号住居跡(第34・35図)

AD-12・13グリッドで検出され、第21号住居跡を大きく切っていた。南北4.90m、東西5.53m、深さは0.18mで、主軸方位はN-29°-Wである。住居跡を掘り込んだ面が砂礫層になるため、床面はかなり凸凹していた。

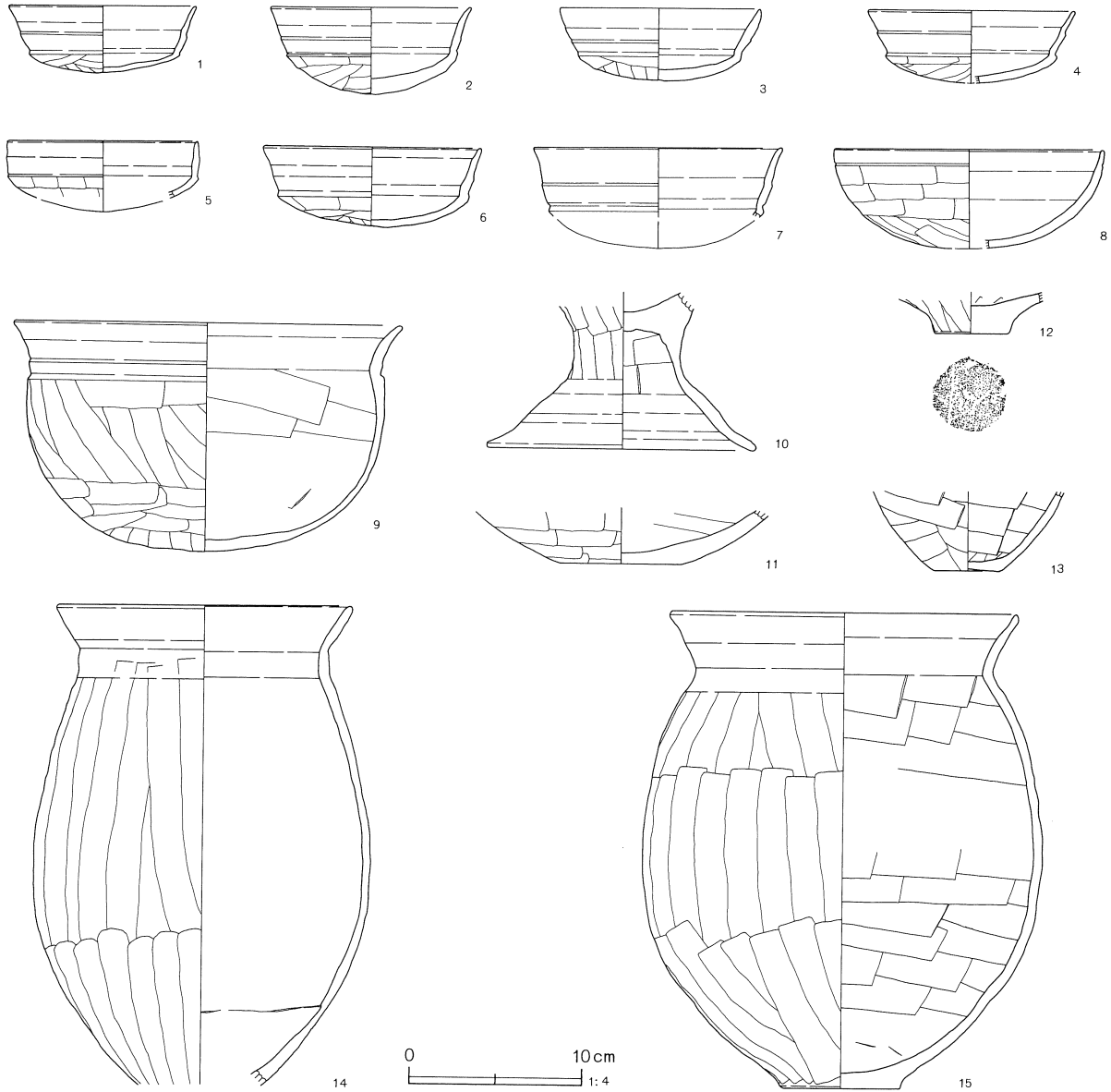
カマドは北壁のほぼ中央に位置していた。袖は地山の削り出して、左袖は確認できなかった。燃烧部の掘り込みは浅く、7の土師器の坏と10の高坏の脚部が出土した。10の高坏の脚部は出土状況から支脚として転

用されたものと考えられる。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物はカマドと床面から出土した。カマド燃烧部からは7・10、焚口からは9の大型の鉢が出土した。10は径3mm前後の小礫を多く含み、器面がザラついている。床面からは1・2・3・6・8の坏と11の壺と15の甕が出土した。1・2・3・6の坏は完形である。8の坏は口縁部と体部の境に浅い沈線が巡っている。12の壺は底部に木葉痕が残る。

第37図 第22号住居跡出土遺物



第37図 第22号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.6	3.9		BC'DH'	A	黄橙	100%	No.21
2	坏	11.4	5.0		BDH'	A	灰白	90%	No.20
3	坏	11.4	4.2		BC'DGH'	A	橙	95%	No.22
4	坏	(11.8)			BC'DGH'	A	浅黄橙	30%	カマドNo.2
5	坏	(11.0)			BCDGH'	A	明赤褐	15%	東ベルト
6	坏	12.6	4.5		BC'DH'	A	灰白	100%	No.17
7	坏	14.2			BC'DH'	A	灰白	65%	No.11
8	坏	(15.2)	(5.7)		BC'DH'	A	橙	50%	No.25
9	鉢	22.2	13.1		BC'DH'	A	黄橙	80%	No.10~12 底部外面は黒く変色
10	高坏			15.4	BC'DEH	A	黄橙	95%	No.10, 12
11	壺			(7.0)	BC'H'	A	浅黄橙	55%	No.14, 18
12	壺			4.3	BCDH'	A	にふい褐	70%	II区 底部に木葉痕
13	甕			(3.8)	BC'DH	A	にふい橙	35%	No.1
14	甕	(17.0)			C'DEGH	A	にふい橙	50%	No.6
15	甕	(20.0)	(27.0)	7.2	BC'D'GH	A	黄橙	50%	No.26

第23号住居跡(第38図)

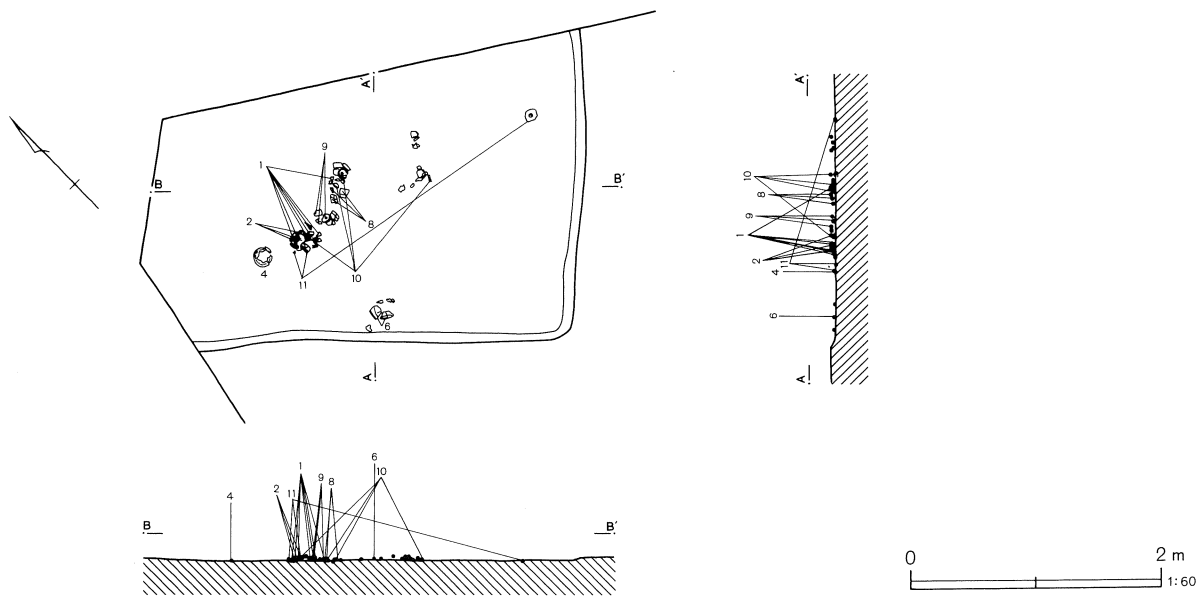
AE-12・13グリッドで検出された。排水溝と住居跡が調査区外にかかることから全体を調査することはできなかった。今回調査できたのは南東コーナー部分についてで、規模・形態は不明である。深さは0.02mであった。掘り込みが浅かったため、覆土の観察はできなかった。床面は第22号住居跡と同様に砂礫層まで掘り込んでいるために凸凹であった。壁は緩やかに立ち上がる。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出することができ

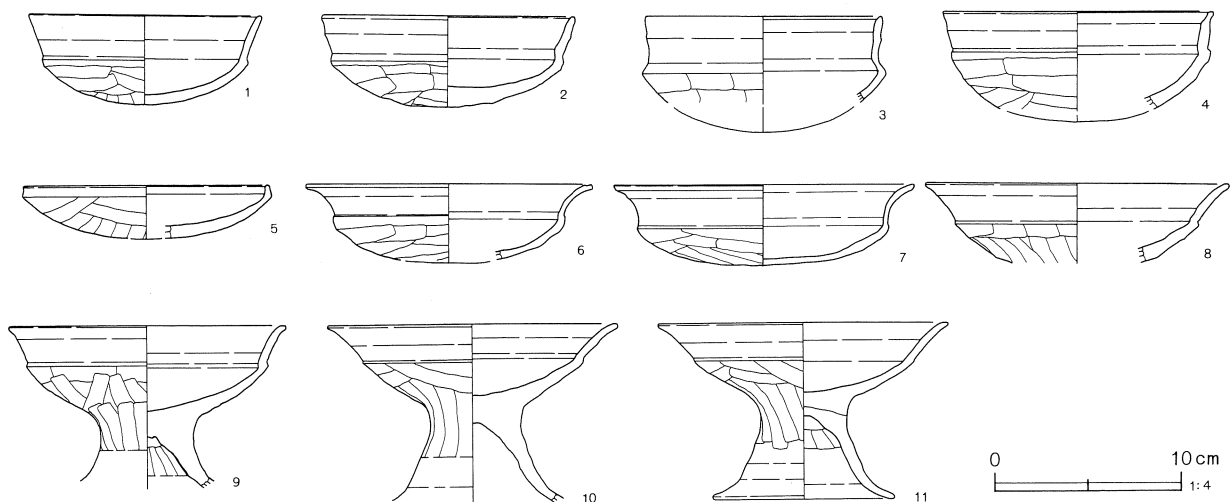
なかった。

遺物は床面から1・2・4の土師器の坏と8・9・10・11の高坏が出土した。2・4の坏は全体的に器壁が厚く、重量感がある。5の坏は覆土から出土しており、本遺構に確実に伴うものかは確信できない。口縁部はヨコナデされて短く内傾し、器高は2.8cm前後と体部が非常に浅いのが特徴である。同じような土器は群馬県新田郡や千葉県市原周辺などに見られる。6・7はいわゆる小針型坏とよばれているものであるが、胎土はほかの土器とあまり変わらない。

第38図 第23号住居跡



第39図 第23号住居跡出土遺物



第39図 第23号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.6)	(4.7)		C'DH'	A	黄橙	45%	No.2、4、10、12~15、26
2	坏	(13.4)	(4.8)		BC'DH	A	黄橙	75%	No.3、5、6
3	坏	(12.6)			BC'DH'	A	橙	10%	覆土
4	坏	14.4			BC'DGH'	A	橙	85%	No.1
5	坏	(13.0)			BC'DEH'	A	橙	15%	覆土
6	坏	(15.4)			C'DEH'	A	橙	45%	No.41
7	坏	(16.0)	(4.3)		C'DH'	A	にふい橙	55%	覆土
8	高坏	16.0			BC'DH'	A	橙	60%	No.19~21
9	高坏	(14.8)			BC'EH'	A	橙	60%	No.16~18
10	高坏	(15.4)			BC'H'	A	橙	75%	No.6、18、22、27、34
11	高坏	(15.4)	(9.2)	(9.6)	BC'DG'H'	A	橙	75%	No.7、11、39

第24号住居跡(第40・41図)

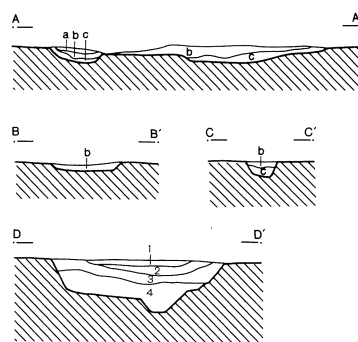
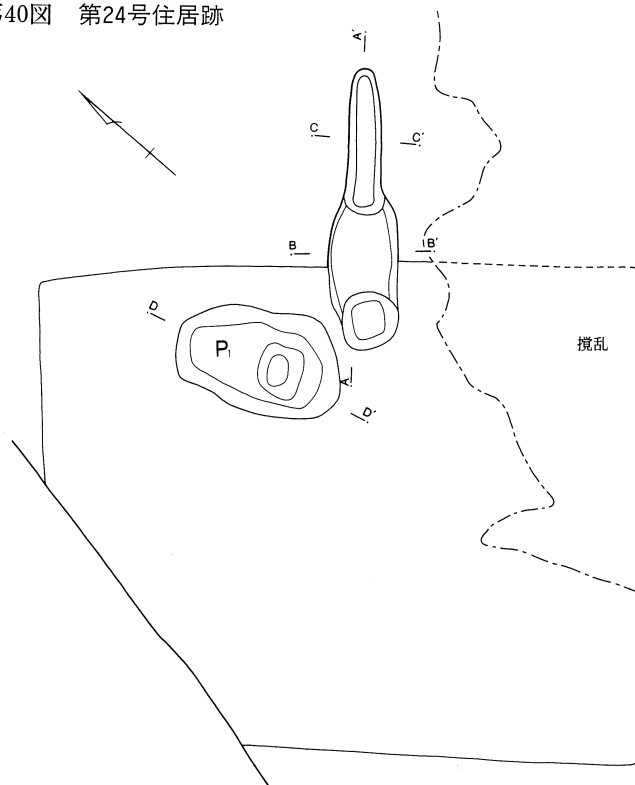
AE-13・14グリッドで検出された。南西コーナーは調査区外にかかるため調査はできなかった。遺存状態は悪く、住居跡の壁はすべて失われていたために、床面の硬化部分が確認できただけであった。北東コーナー一部は攪乱によって壊されていた。掘り込みがなかったため正確な規模はわからないが、床面の範囲からはほぼ東西3.85m、南北4.77mであったと推定される。主軸方位はN-48°-Eである。

床面はほぼ平坦であった。

カマドは北壁のほぼ中央に位置していたものと思われる。袖は検出できなかった。燃烧部は壁外に長く伸び、一段深く掘り込まれた煙道に至る。焚口の部分はピット状に深く掘り込まれていた。

ピットはカマドの焚口のすぐ左側に1本確認できたが、平面形態・覆土の堆積状態から柱穴とは考えにくい。長径120cm、短径83cm、深さは41cmで、覆土には焼土粒子・炭化物粒子を微量に含んでいた。4層中からは多くの遺物が出土しており、その大半が須恵器であった。

第40図 第24号住居跡



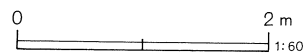
第24号住居跡土層説明

カマド

- a 淡褐色土 黄褐色土ブロックを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- b 淡灰褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量、黄褐色土粒子・炭化物粒子を微量。
- c 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

ピット

- 1 淡灰褐色土 黄褐色土ブロックを微量。
- 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを微量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量。
- 4 褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を微量。

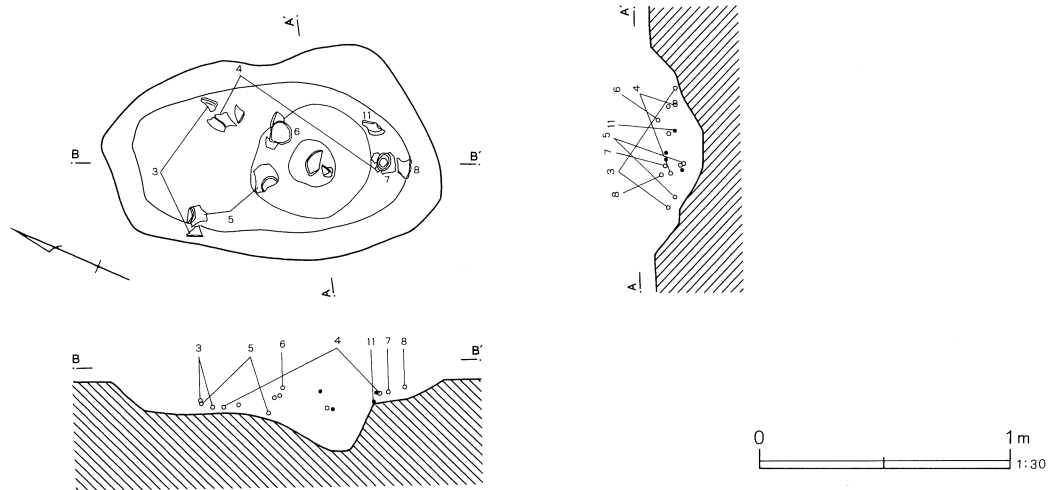


柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

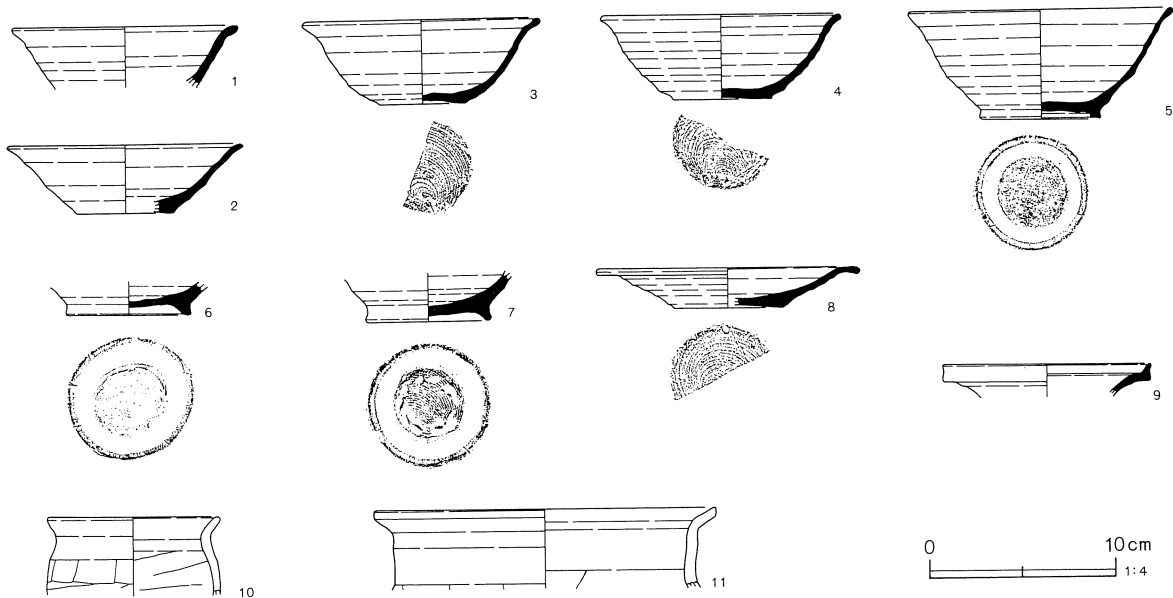
遺物はすべてピットから出土した。1～9は須恵器で、すべて末野産である。底部の切り離しは回転糸切

りである。10・11は土師器である。10は小型の台付甕で、内外面ともに煤が付着している。ほかに土錘が2点出土している。

第41図 第24号住居跡P I 遺物出土状況



第42図 第24号住居跡出土遺物



第42図 第24号住居跡出土土器観察表

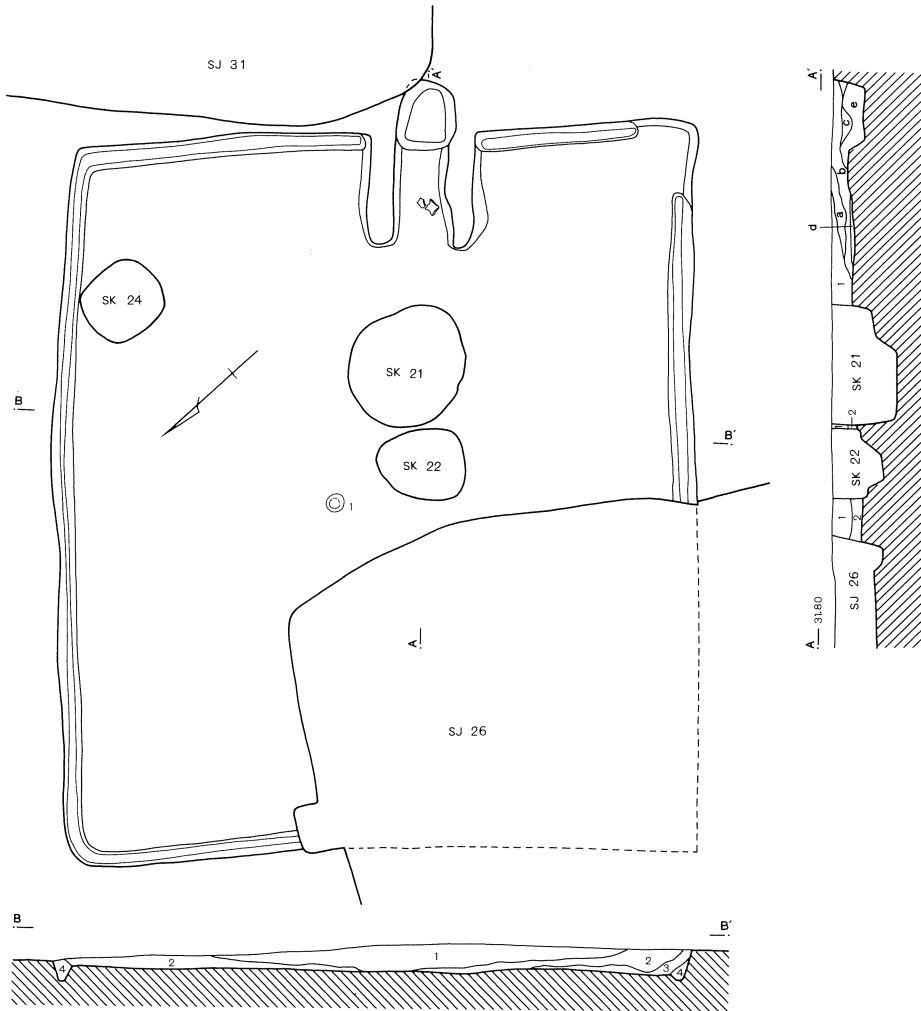
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	坏	(12.0)			C'HI	A	暗灰	20%	ピット1	末野産
2	坏	(12.6)	(3.6)	(5.2)	C'DFH'I	A	灰白	25%	ピット1	末野産
3	坏	12.8	4.5	4.6	CEHI	A	灰黒	55%	ピット1	末野産
4	坏	(12.8)	4.5	5.2	CHI	A	灰黒	50%	ピット1	末野産
5	高台坏	14.0	5.9	6.5	CDHI	A	灰白	90%	ピット1	末野産
6	高台坏			6.6	BC'DGH'	C	淡褐	95%	ピット1	末野産
7	高台坏			6.6	C'EGH'	C	灰	90%	ピット1	末野産
8	皿	(14.0)	(2.1)	(5.8)	CHI	A	灰	30%	ピット1	末野産
9	壺	(11.0)			CDHI	D	灰褐	15%	ピット1	末野産
10	甕	(9.0)			BC'DH'	A	橙	15%	ピット1	内外面ともわずかに煤ける
11	甕	(18.0)			BC'DFH'	A	浅黄橙	15%	ピット1	内面は煤ける

第25号住居跡(第43図)

AF-13・14グリッドで検出された。住居跡の南東部を第26号住居跡に、カマド燃焼部を第31号住居跡にそ

れぞれ壊されていた。第21・22・24号土壇にも床面の一部を壊されていた。東西5.70m、南北5.15m、深さは0.17mで、主軸方位はN-134°-Eである。

第43図 第25号住居跡および出土遺物

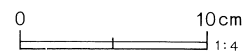
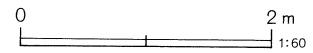
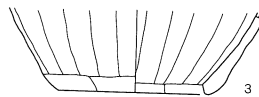
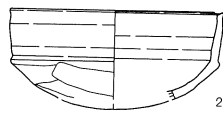
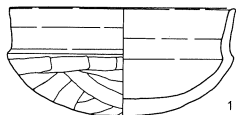


第25号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量。
- 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量。
- 3 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、白色バミスを微量。
- 4 褐色土 炭化物粒子を多量、白色バミスを微量。

カマド

- a 褐色土 焼土粒子を多量、炭化物粒子・白色バミスを微量(天井崩落土)
- b 黒褐色土 焼土粒子を大量、炭化物粒子を多量、白色バミスを微量(灰層)
- c 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量、白色バミスを微量。
- d 褐色土 焼土粒子を多量、炭化物粒子を少量、白色バミスを微量(掘り方)
- e 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、白色バミスを微量(掘り方)



第43図 第25号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	坏	12.0	5.7		BC'DFH	A	黄橙	95%	No. 1	
2	坏	(11.4)			BC'DH'	A	橙	20%	覆土	
3	甑			(8.0)	BC'DH'	A	にぶい橙	10%	覆土	



覆土は住居跡・土壌に掘り込まれているため観察が困難であったが、4層からなる自然堆積であった。覆土4層中には多量の炭化物粒子が含まれていた。

床面はほぼ平坦であった。

カマドは西壁やや南寄りに位置していた。袖は地山の削り出しであった。燃烧部の掘り込みはなく、覆土下層には焼土粒子を大量に含んだ灰が厚く堆積していた。その上層には天井部の崩落土と思われる褐色土が堆積していた。燃烧部の壁外に出る部分については掘り方が深く、ピット状に14cm掘り込まれていた。

壁溝は幅約17cm、深さ約12cmで、南西コーナーと第26号住居跡に壊されている南東コーナー部を除いて全周していた。

柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は床面から1の土師器の坏が出土した。覆土とカマドからも少量出土しており、2・3が実測可能であった。2の坏は口縁端部に平坦面をもち、浅い沈線が巡る。

#### 第26～30号住居跡(第44図)

本住居跡群はAE-13・14、AF-13・14グリッドで検出された。遺構確認時には住居跡のカマドと思われる焼土が1ヶ所確認できたが、攪乱がひどく遺構のプランもつかめないため、住居跡と断定することができなかった。そのためトレンチを2本入れて調査を開始したところ、遺物が多量に出土したため住居跡であることが始めて判明した。その時点で住居跡として確認できたのは第26・27・30号住居跡であり、第30号住居跡についてはカマドが確認できていなかった。掘り進めていった段階で第28・29・30号住居跡のカマドが検出されたため、そこで本住居跡群が5軒の重複であることが判明した。以上の経過から、各遺構については住居跡覆土の観察など十分な調査ができなかった。

本住居跡群は26→27・28→29→30の順で構築されていた。第27号住居跡と第28号住居跡の新旧関係はわからなかった。遺物は古墳時代後期の第26号住居跡からは多量に出土したが、第27～30号住居跡の平安時代の住居跡からはあまり出土しなかった。

#### 第26号住居跡(第45～47図)

AF-13・14グリッドで検出された。南側の大半を第27・28・29・30号住居跡によって切られているが、本遺構よりも掘り込みが浅いためかろうじて住居跡の壁が残っていた。また西壁の一部と床面を第23・27号土壌とピット11によって壊されていた。南北4.80m、東西4.28m、深さは0.22mで、主軸方位はN-31°-Eである。

覆土は3層からなる自然堆積であった。全体的に焼土粒子を多く含んでいた。

床面は平坦であった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは北壁のやや東寄りに位置していた。袖は地山の削り出しで、壁面はあまり焼けていなかった。燃烧部は壁外に少し延び、奥壁から緩やかに傾斜していた。覆土下層には厚さ約9cmの灰が堆積していた。掘り方は深さが14cmで、焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色の土によって埋められていた。煙道は検出できなかった。

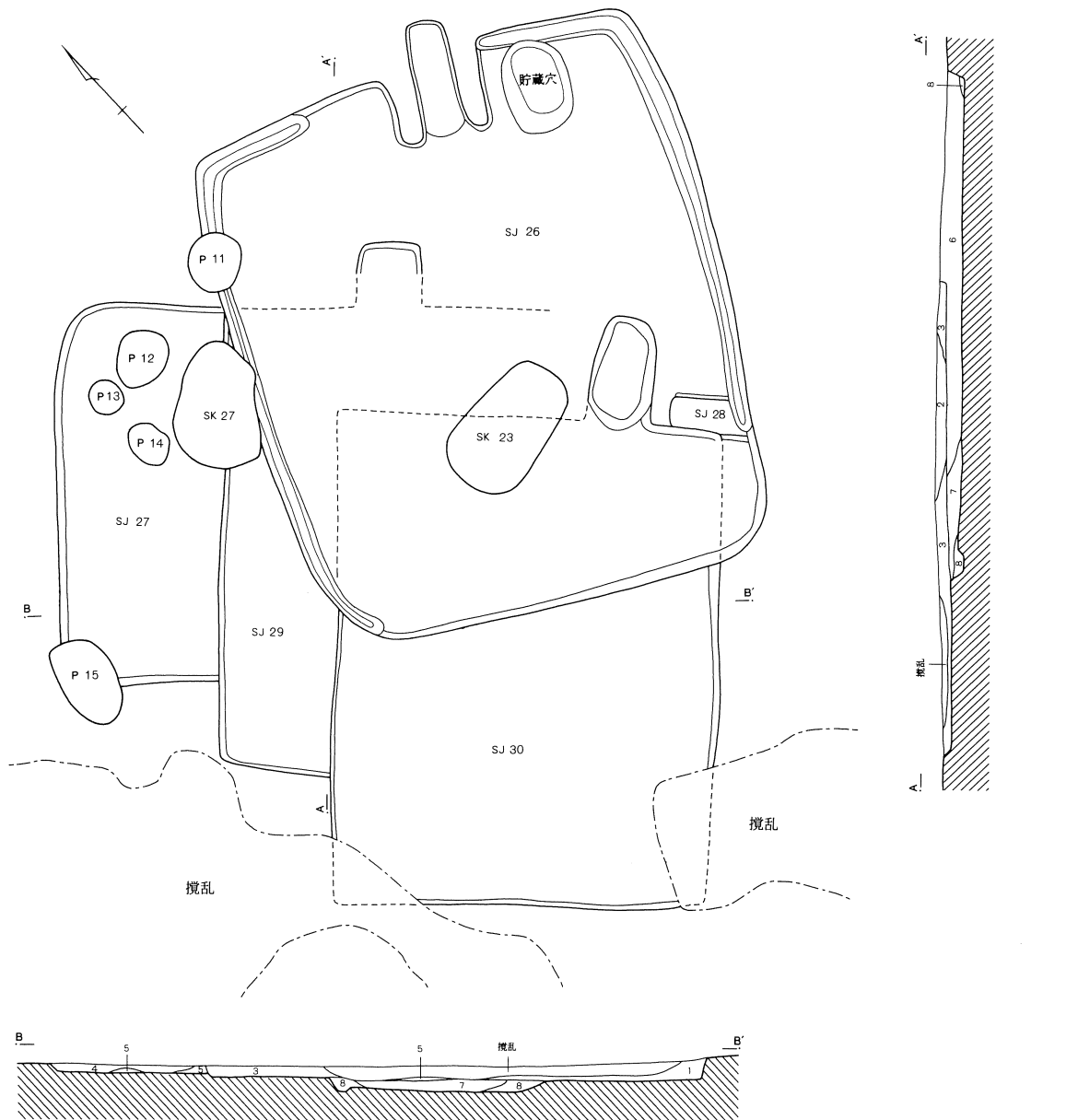
貯蔵穴はカマド右側の北東コーナーに位置し、一部壁溝と重複していた。長径80cm、短径58cm、深さ20cmであった。遺物は出土しなかった。

壁溝は幅約20cm、深さ約5cmで、南壁を除いた部分に巡っていた。

柱穴は確認できなかった。

遺物はカマドを中心として4ブロックにわかれて出土した。出土した土器はすべて土師器である。カマドの右側からは5の小型壺と6の小型甗が重なって出土した。5の外表面と6の内表面はやや幅広の工具によって丁寧にミガかれており、器面は平滑である。2点とも二次的火熱を受けた影響はあまり見られない。左側からは13・14・17の甗が出土したが、農作業等により大半が失われていた。13は内面に輪積み痕が明瞭にみられる。カマド焚口部からは1・3の坏、4の台付鉢、7・8の甗、10の甗が出土した。4は胎土に砂粒を多く含み、器面が粗い。10の甗は出土状況をみると、7の甗に重なっていたものがカマドの廃絶に伴い横倒しになったものと思われる。北西コーナー部からは2の

第44図 第26～30号住居跡



第26～30号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、白色バミスを微量。
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量。
- 3 暗褐色土 焼土粒子を少量、炭化物粒子・白色バミスを微量。
- 4 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量。
- 5 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、白色バミスを微量。
- 6 褐色土 炭化物粒子を多量、白色バミスを微量。
- 7 褐色土 焼土粒子を多量、炭化物粒子・白色バミスを微量。
- 8 黒褐色土 焼土粒子を大量、炭化物粒子を多量。

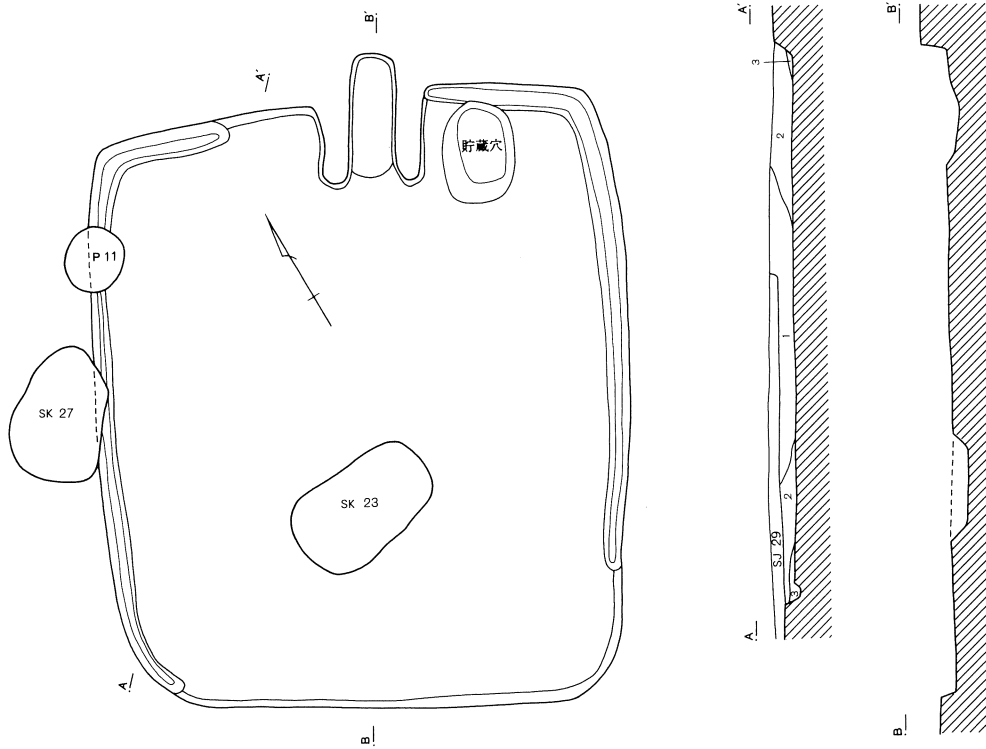
0 2 m  
1:60

坏、9の甑、11・12・15・16の甕が出土した。9の内面は部分的にヘラミガキが施されている。口縁端部には平坦面をもち、浅い沈線が巡る。ほかに覆土から指

頭圧痕が残る棒状の土製品が出土した。

本住居跡は坏類に対し甕・甑類の個体数が多いのが特徴である。

第45図 第26号住居跡

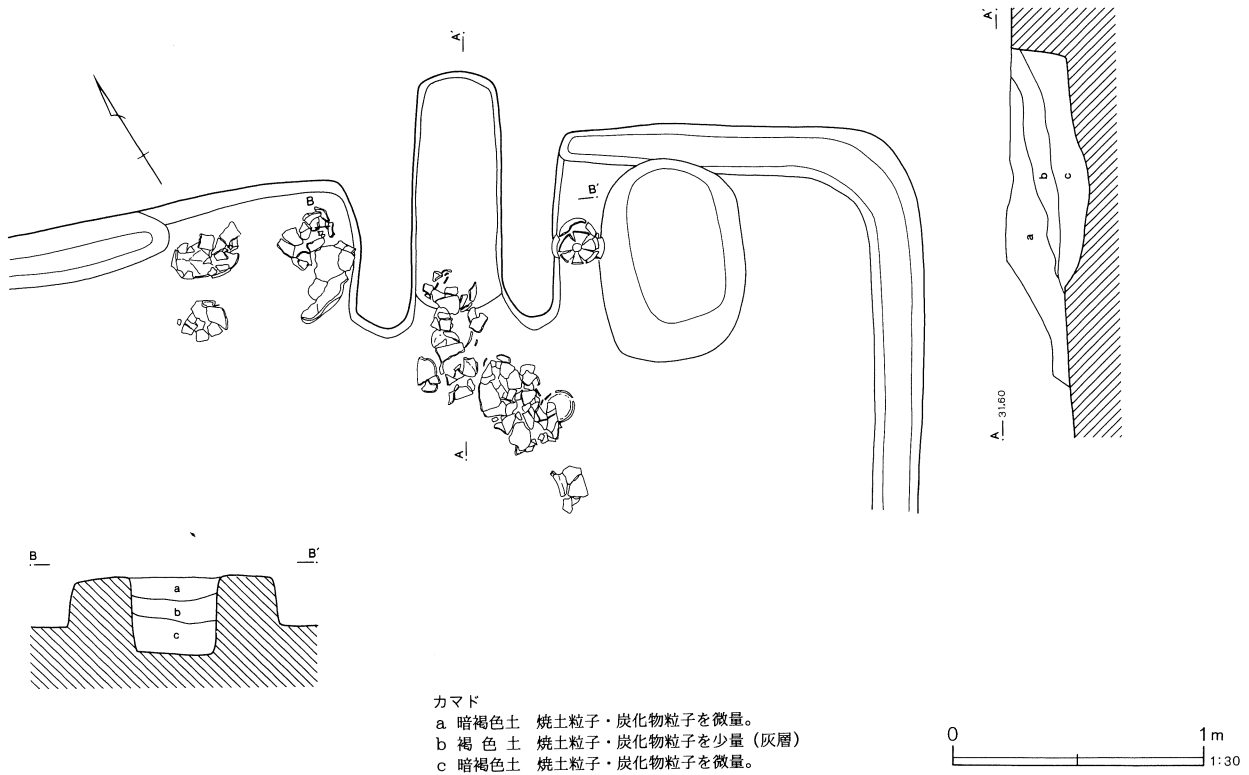


第26号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子を微量。
- 2 暗褐色土 焼土粒子・暗褐色砂を多量。
- 3 暗褐色土 焼土粒子を多量。

0 2 m  
1:60

第46図 第26号住居跡カマド

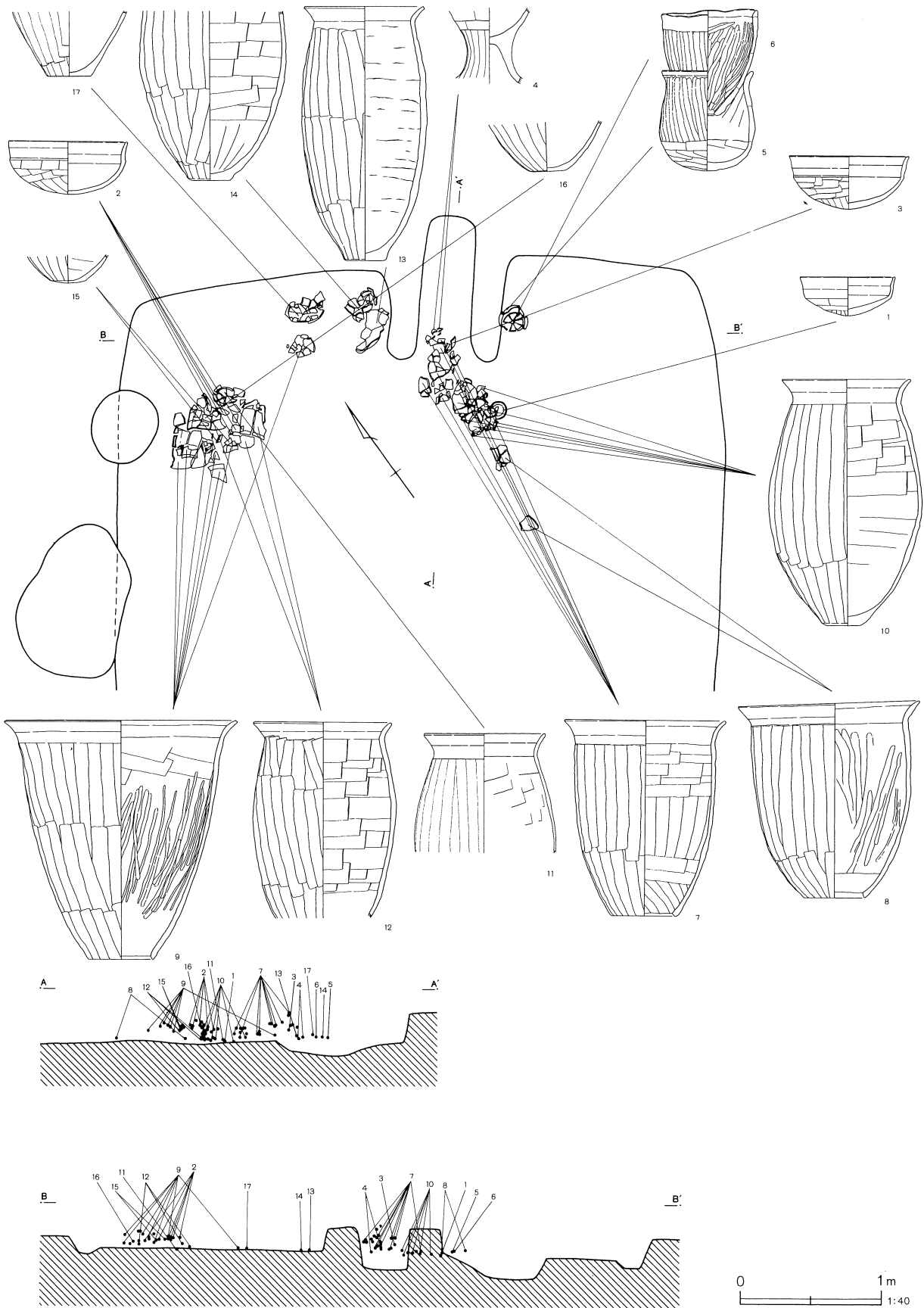


カマド

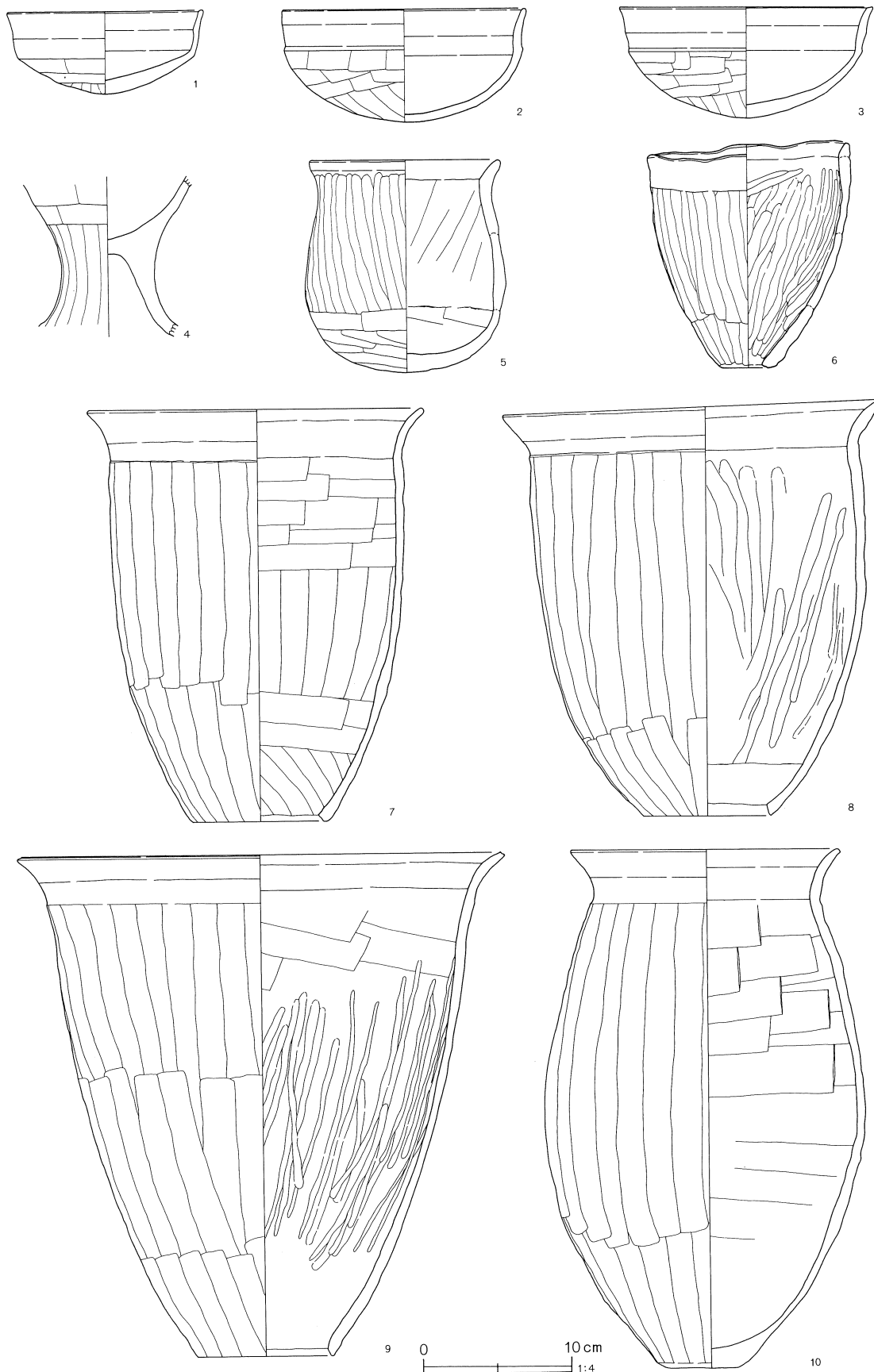
- a 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- b 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量(灰層)
- c 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。

0 1 m  
1:30

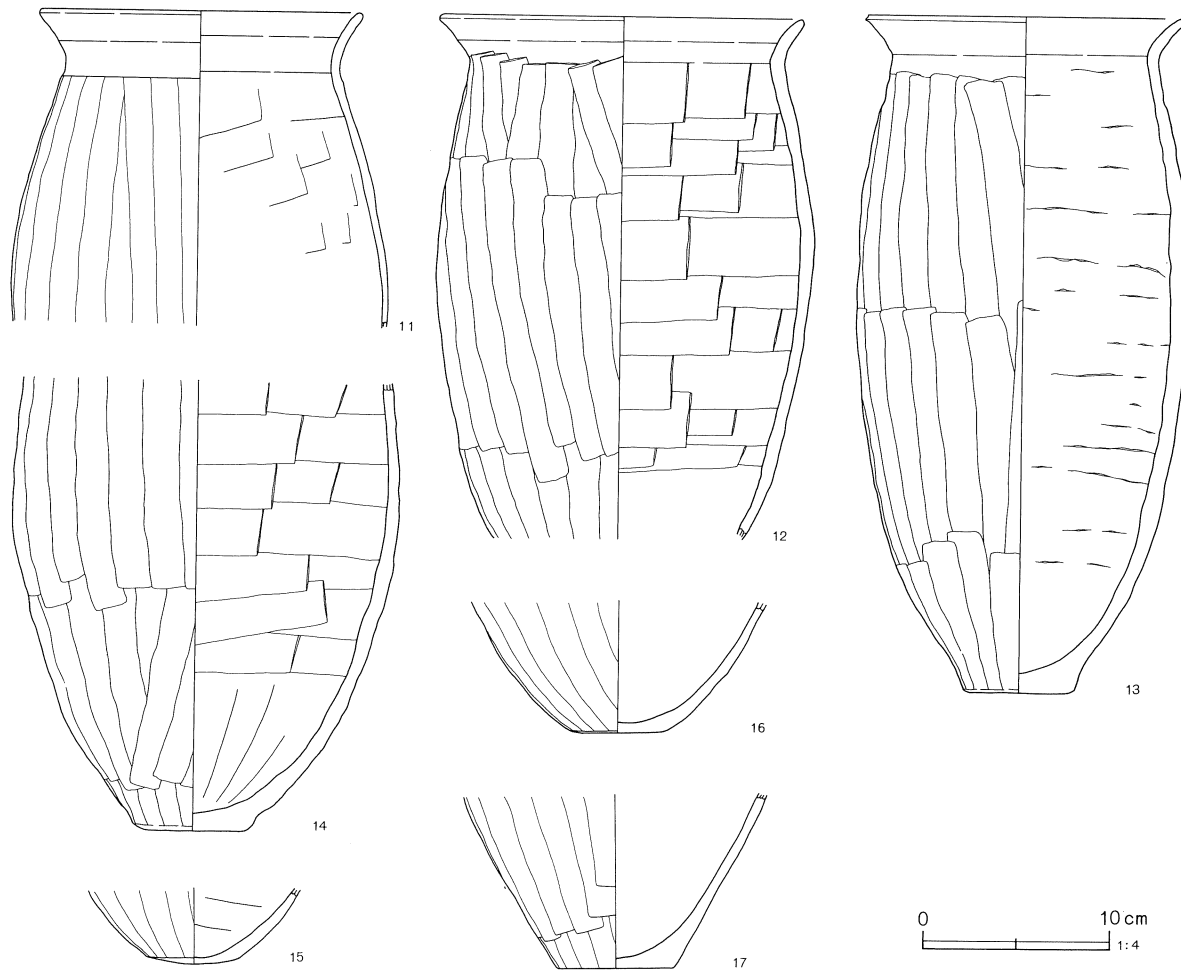
第47图 第26号住居跡遺物出土状況



第48図 第26号住居跡出土遺物(1)



第49図 第26号住居跡出土遺物(2)



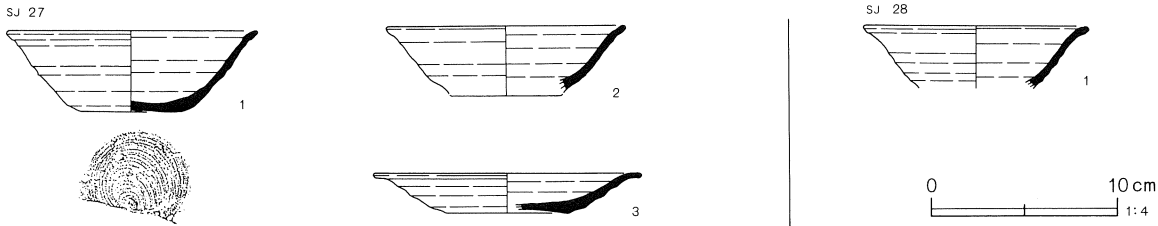
第48・49図 第26号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.2	5.5		BC'EG'H	A	橙	95%	カマドNo.2
2	坏	16.5	7.4		BC'DG'H'	A	橙	95%	No.13~20, 22
3	坏	(17.0)	(7.4)		BC'DH'	A	橙	45%	No.26, 28
4	台付鉢				BCDEH'	A	橙	65%	カマドNo.33, 34
5	壺	13.0	14.0		BC'DGH'	A	橙	95%	カマドNo.40
6	甌	13.7	14.9	3.5	BCEH	A	橙	100%	カマドNo.39
7	甌	(22.5)	(27.7)	(9.0)	BC'DH'	A	橙	80%	カマドNo.7~9, 11, 12, 19~28
8	甌	25.3	27.7	8.6	BC'EH	A	黄橙	90%	No.2, 40, 41, カマドNo.1
9	甌	32.4	33.5	9.0	BC'DH'	A	にぶい褐	60%	No.3~6, 10, 28, カマドNo.38
10	甕	18.0	34.6	5.4	BC'DEH	A	橙	85%	カマドNo.3, 6~10
11	甕	17.3			BC'DGH	A	黄橙	75%	No.18
12	甕	19.2			BC'DH	A	にぶい橙	80%	No.12, 17, 20
13	甕	(16.8)	35.7	6.0	BC'DH'	A	にぶい褐	40%	カマドNo.35
14	甕			6.2	BC'DEH	A	にぶい褐	65%	カマドNo.36
15	甕			5.0	BC'DEH	A	にぶい褐	70%	No.8, 9
16	甕			(5.0)	BC'DEH	A	にぶい褐	25%	No.26
17	甕			6.2	BC'DEH'	A	橙	50%	カマドNo.37

## 第27号住居跡(第44図)

AE-13、AF-13グリッドで検出された。第26号住居跡を切り、第29・30号住居跡によって住居跡の大半を切られていた。そのため今回の調査で検出できたのは西壁部分だけであった。また床面を第27号土壇、ピット12・13・14・15に壊されていた。南北3.27m、深さは0.07mであった。

## 第50図 第27・28号住居跡出土遺物



## 第50図 第27号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.4)	(4.3)	5.4	C'DEH'	A	灰	40%	覆土 末野産
2	坏	(12.6)			C'DH'	A	灰	15%	覆土 末野産
3	皿	(14.2)	(2.1)	(6.4)	C'DEH'	A	灰白	40%	覆土 末野産

## 第28号住居跡(第44図)

AF-14グリッドで検出された。検出できたのはカマド袖と燃焼部の一部だけであった。第26号住居跡の覆土を掘り込んで構築していたために、調査当初は確認することができず十分な調査ができなかった。住居跡

## 第50図 第28号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)			C'EH'	A	灰	15%	カマド周辺 末野産

## 第29号住居跡(第51図)

AE-13・14、AF-13・14グリッドで検出された。第26・27号住居跡を切り、第30号住居跡に住居跡の大部分を切られていた。第28号住居跡との新旧関係はわからなかった。また第23・27号土壇にも切られていた。検出できたのは西壁とカマドの燃焼部だけで、北壁については掘りすぎてしまった。南壁から燃焼部奥壁までの長さは4.60m、深さは0.09mであった。主軸方位はN-43°-Eである。

床面は平坦であった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは北壁に位置しており、確認できたのは燃焼部の奥壁部分だけであった。袖は確認できなかった。

覆土は2層からなる自然堆積であると思われる。

床面はほぼ平坦であった。壁は斜めに立ち上がる。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝の何れの施設も確認できなかった。

遺物は覆土から須恵器の破片が少量出土した。1～3の須恵器はすべて末野産である。底部の切り離しは回転糸切りである。

のほとんどを第29・30号住居跡に切られているため規模・平面形態は不明である。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

遺物は須恵器の破片がカマド周辺から出土したが、本遺構に確実に伴うかは不明である。

奥壁は火を受け、わずかに赤く焼けていた。

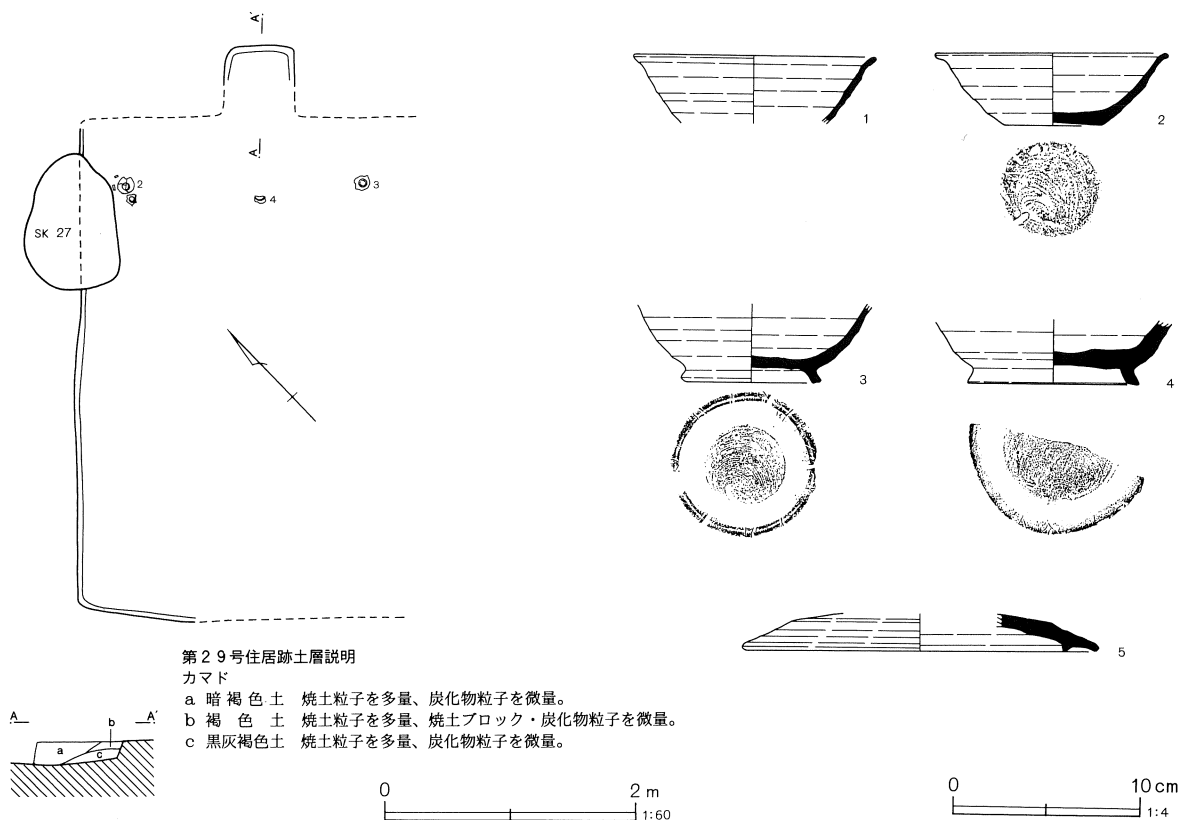
柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は1・2・3・4の須恵器が床面から5～10cm程浮いた状態で出土した。カマドからは出土しなかった。1～4は末野産である。5の蓋は胎土に黒色粒子を多く含んでおり、焼成はあまり良くない。

## 第30号住居跡(第52図)

AE-14、AF-13・14グリッドで検出された。第26号住居跡の覆土を掘り込んで構築していたために、カマドや北壁の検出が困難であった。第26・28・29号住居跡を切り、第23号土壇に切られていた。本住居跡群の中では一番新しい。また南東・南西コーナーを攪乱

第51図 第29号住居跡および出土遺物



第51図 第29号住居跡出土土器観察表

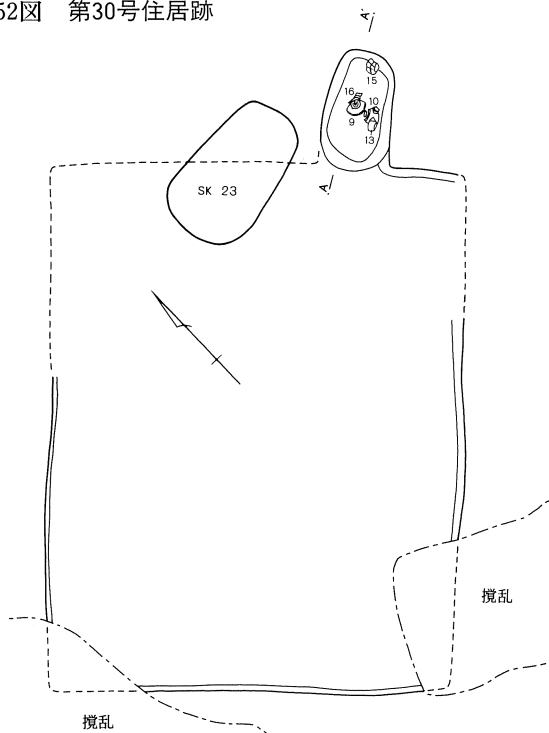
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.0)			C'DH'	A	灰	15%	No.5 未野産
2	坏	12.4	3.8	5.2	C'EH'I	A	暗灰	95%	No.4 未野産
3	高台坏			7.5	C'EGH'I	A	灰	80%	No.1 未野産
4	高台坏			(9.1)	C'EH'I	A	灰	40%	No.2 未野産
5	蓋	(19.0)			C'EH'J	C	灰褐	10%	覆土

第53図 第30号住居跡出土土器観察表

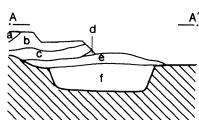
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	(3.5)	(5.0)	C'EH'I	A	暗灰	15%	覆土 未野産
2	坏	(13.0)	(3.7)	(5.2)	C'EH'	A	灰	30%	覆土 自然釉が付着 未野産
3	坏	(12.6)	(4.0)	(6.5)	C'GH'	C	灰褐	25%	覆土 未野産
4	坏	(13.8)			C'EH'J	A	灰黒	15%	覆土 未野産
5	坏			(7.2)	C'EGH'	A	暗灰	25%	覆土 未野産
6	高台坏			(8.2)	C'EH'I	A	灰	30%	覆土 未野産
7	高台坏			7.4	C'DEH'J	A	灰	90%	覆土 未野産
8	皿	(16.0)			BC'DGH'	B	灰褐	10%	カマド 未野産
9	皿	(17.2)	3.6	7.0	C'EGH'	A	灰白	60%	カマドNo.3 未野産
10	甕			(13.8)	AC'H'	A	灰黒	20%	カマドNo.6 内外面とも自然釉が付着 南比企産
11	坏	(10.6)			BCDH'	A	黄橙	10%	覆土
12	坏	(12.4)		(6.4)	BCDGH'	A	黄橙	20%	覆土
13	坏	(13.4)	(4.0)	(7.1)	BC'DGH'	A	黄橙	35%	カマドNo.5 内面黒色処理
14	甕	(18.0)			BC'DFH'	A	黄橙	10%	覆土
15	甕			(4.0)	BC'DH'	A	橙	20%	カマドNo.1
16	甕				BC'DFH'	A	橙	40%	カマドNo.2 内面に煤が付着



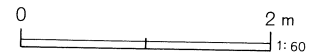
第52図 第30号住居跡



第30号住居跡土層説明  
カマド



- a 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量。
- b 暗褐色土 炭化物粒子を少量、焼土粒子・白色バミスを微量。
- c 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量、白色バミスを微量。
- d 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量、白色バミスを微量。
- e 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量（灰層）
- f 淡褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を微量。



によって壊されていた。南北4.20m、東西3.33m、深さは0.07mで、主軸方位はN-48°-Eである。

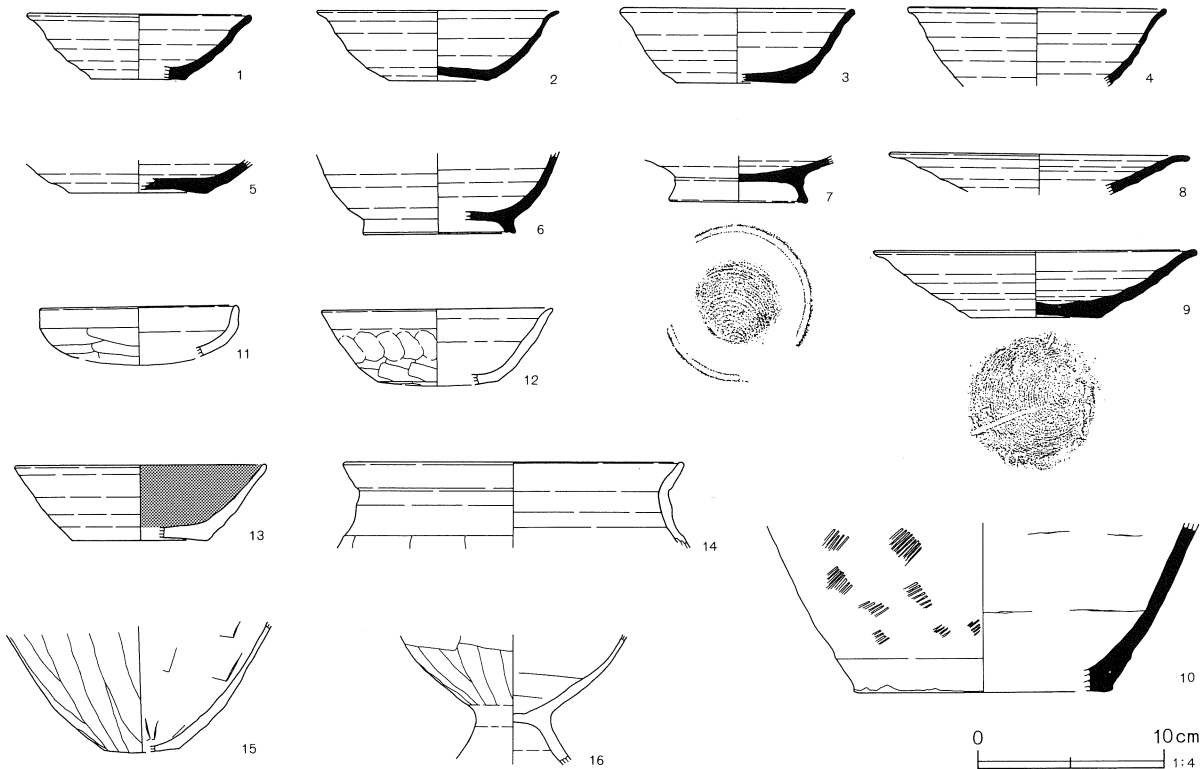
床面は平坦であった。

カマドは北壁東寄りに位置していた。袖は確認できなかった。燃焼部は壁外に長く延び、最下層には灰層があった。遺物は須恵器の皿・甕と土師器の坏・甕が出土した。掘り方は深さが<sup>3</sup>23cmであった。

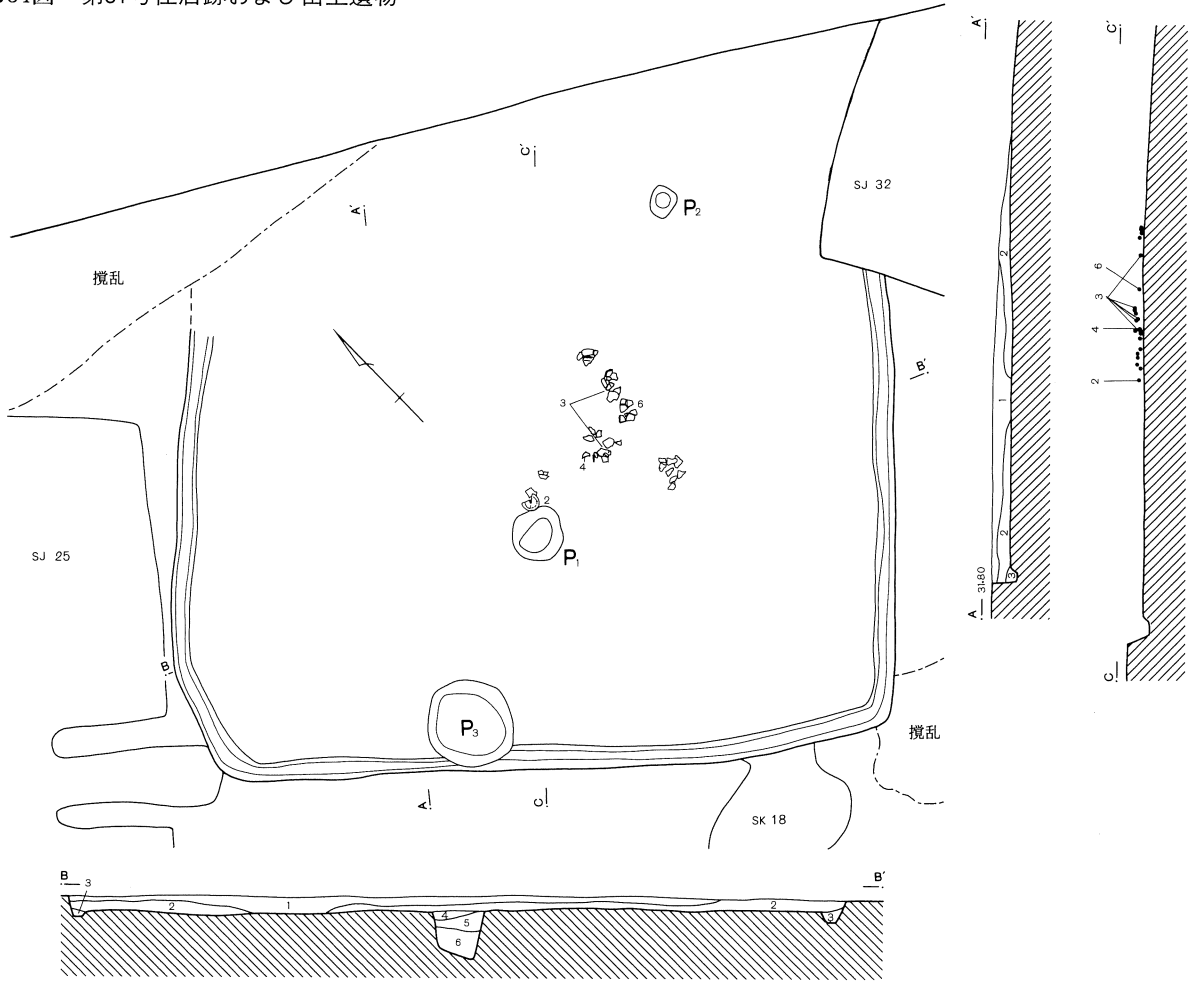
柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物はカマド燃焼部から9・10の須恵器と13・15・16の土師器が出土した。ほかは全て覆土からの出土である。須恵器の1～9は末野産で、底部の切り離しは回転糸切りである。10の甕1点だけが南比企産であった。内外面には自然釉が付着している。外面にはわずかに斜位の平行叩き目が残る。13の坏は内面は丁寧にミガかれており、黒色処理が施されている。ほかに覆土から土錘が1点出土している。

第53図 第30号住居跡出土遺物



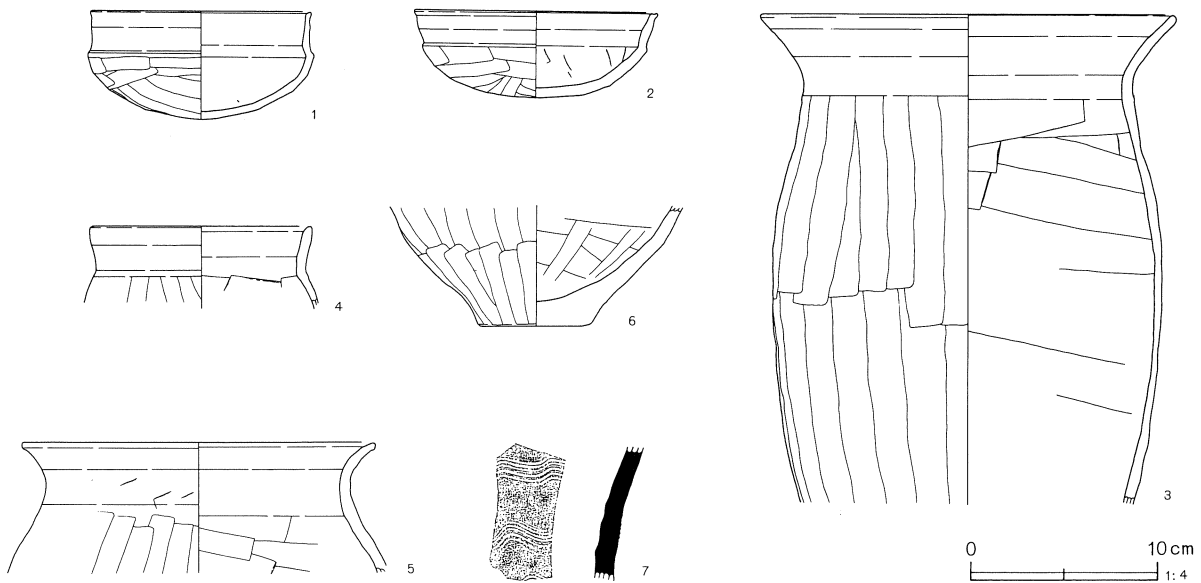
第54図 第31号住居跡および出土遺物



第31号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・白色バミス・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、白色バミス・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・白色バミスを微量。
- 4 淡褐色土 黄褐色土ブロック・白色バミス・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 5 褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 6 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

0 2 m  
1:60



0 10 cm  
1:4

第31号住居跡(第54図)

AF-13・14、AG-13・14グリッドで検出された。北側は調査区外にかかり、また地山も流失していることから本遺構の範囲を確認することはできなかった。第25号住居跡を切り、第32号住居跡・第18号土壇に切られていた。東西5.80m、深さは0.17mで、主軸方位はN-47°-Wである。

ピットは3本確認できた。そのうちP3は本遺構には伴わないと思われる。P1・2のいずれも支柱穴に

なるかは確認できなかった。各ピットの大きさは、P1が43cm×30cm×38cmで、P2が26cm×22cm×16cmであった。

壁溝は幅約16cm、深さ約9cmで、壁が検出できた範囲内では全周していた。

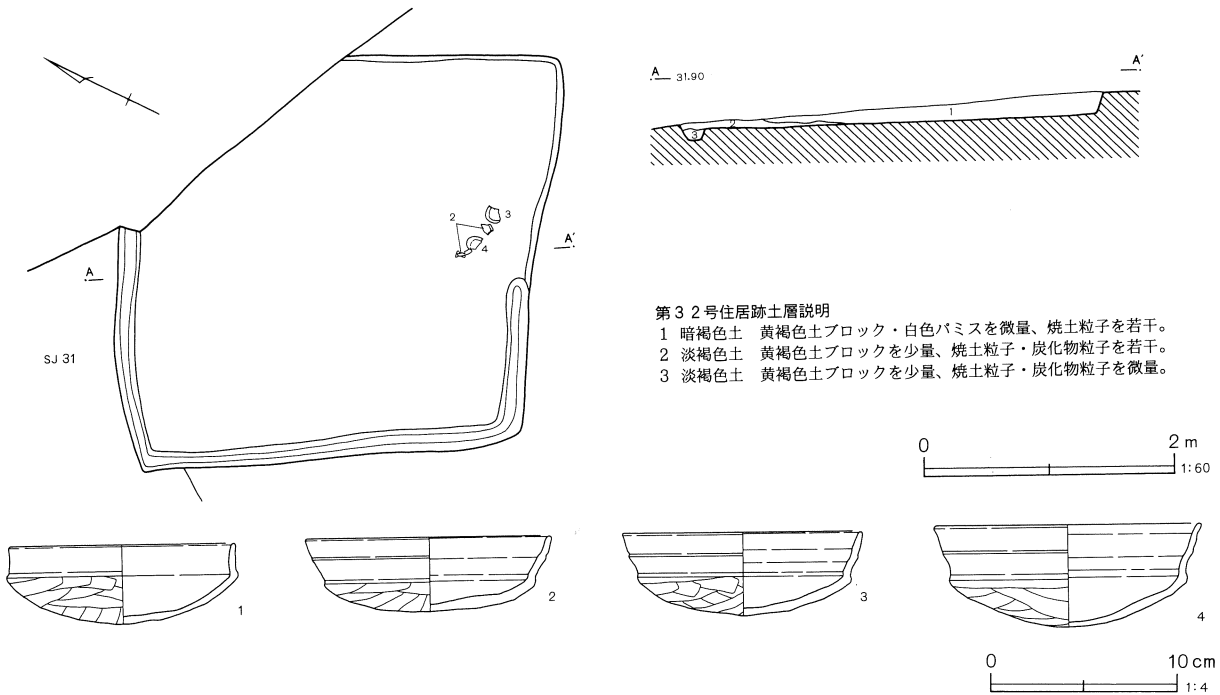
カマド・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は床面から土師器の2の坏、3・4・6の甕が出土した。また覆土からは7の須恵器甕の破片が出土した。3段の櫛描き波状文が認められる。

第54図 第31号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	(5.7)		BC'DH'	A	橙	35%	III区
2	坏	12.9	4.6		BC'DH'	A	橙	95%	No.22
3	甕	(22.0)			BC'DGH'	A	にふい褐	25%	No.5、11~13、16
4	甕	(12.0)			BC'DEH'	A	褐	20%	No.17
5	甕	(18.8)			BC'DEH'	A	浅黄橙	15%	II区
6	甕			6.1	BC'DH'	A	にふい褐	60%	No.6
7	甕				C'DEH'	A	灰		II区

第55図 第32号住居跡および出土遺物



第32号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・白色パミスを微量、焼土粒子を若干。
- 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

第55図 第32号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	(4.2)		BC'DGH'	A	明赤褐	25%	No.7
2	坏	(13.0)	(3.9)		BC'DH'	A	橙	70%	No.2~6 体部外面は黒く変色
3	坏	12.8	4.4		BC'DH'	A	にふい褐	65%	No.1 多量の煤が付着
4	坏	14.0	5.4		BC'DGH'	A	橙	60%	No.3 体部外面は黒く変色

### 第32号住居跡(第55図)

AG-14グリッドで検出された。北東コーナー部は排水溝掘削のために調査することができなかった。北側は地山の流失により壁の一部が削られていた。第31号住居跡を切っていた。南北3.30m、東西3.15m、深さは0.16mで、平面形態は方形に近い。主軸方位はN-67°-Eである。

覆土は3層からなる自然堆積であった。

床面は地山が砂礫層にあたるため、凸凹していた。その砂礫層になる東側の床面は若干高かった。

壁溝は幅約17cm、深さ約9cmで、東壁と南壁の一部を除いた部分に巡っていた。

カマド・柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は土師器が少量出土した。床面からは1~4の坏が出土した。2~4は口縁部は外傾し、中位にヨコナデによる浅い段をもつ。2・4の体部外面は黒く変色しており、3は内面に多量の煤が付着している。

### 第33号住居跡(第56図)

AF-14グリッドで検出された。住居跡の中央部を横切るように攪乱があるため遺存状態は良くなかった。カマドの大部分を第28・30号土壌によって壊されていた。また北東コーナーも第19・29号土壌、ピット16に壊されていた。東西4.85m、南北3.46m、深さは0.11mで、主軸方位はN-55°-Eである。

覆土は遺構の遺存状態が悪く、攪乱もひどいために観察することができなかった。

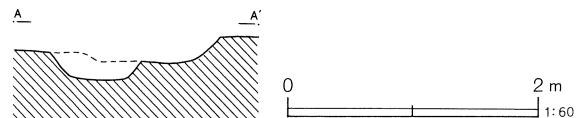
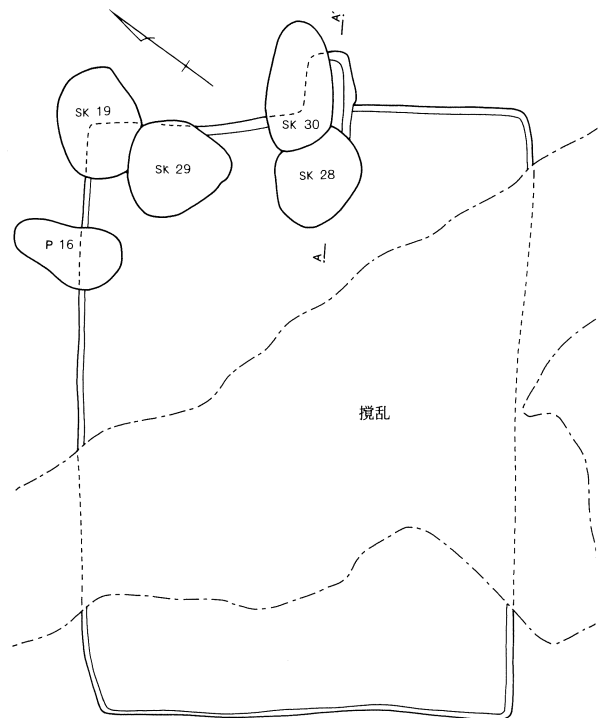
床面は平坦であった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは東壁やや南寄りに位置していた。焚口を第28号土壌、燃焼部左壁を第30号土壌によってそれぞれ壊されていたため、覆土の観察はできなかった。調査で検出できたのは燃焼部の右壁だけであり、袖は確認できなかった。

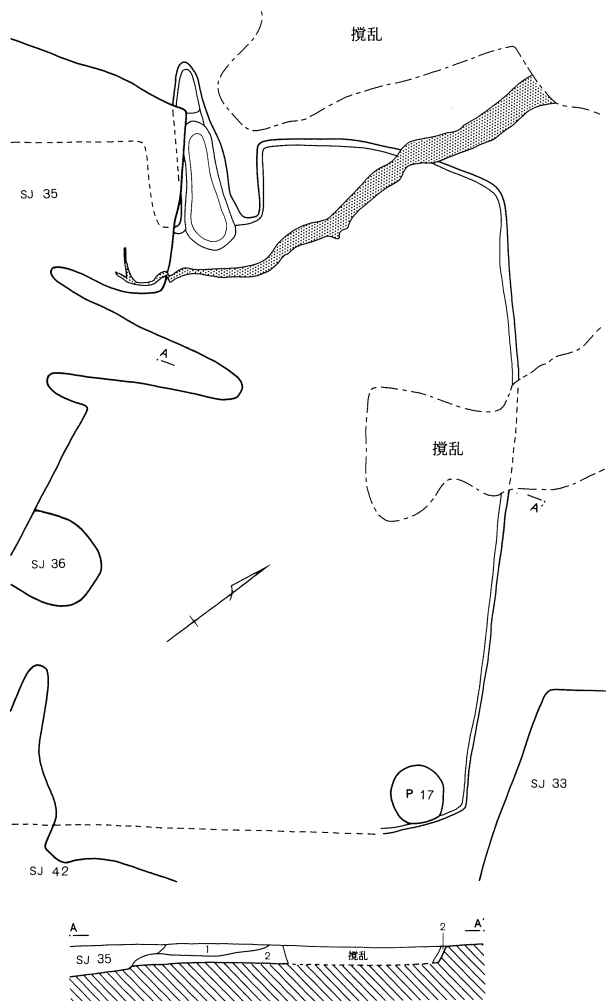
柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

出土遺物は土師器の破片が少量出土したが、図示できるものはなかった。また時期を判断できるような遺物も出土していない。

第56図 第33号住居跡



第57図 第34号住居跡



第34号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。  
2 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。



第34号住居跡(第57・58図)

AE-14グリッドで検出された。平安時代に構築された第35・36・42号住居跡、ピット17によって住居跡の半分近くを壊されていた。また南北方向に走る噴砂の影響で西半分の壁やカマドが歪んでいるようである。噴砂・攪乱により壁の一部を壊されていた。東西5.50mで、南北はカマドを中心と考えた場合4.8m程であったと思われる。深さは0.15mであった。主軸方位はN-62°-Wである。

覆土は2層からなる自然堆積であったと思われる。

床面は住居跡の中央がわずかに高かった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁は攪乱のため確認できなかった。

カマドは西壁に位置していた。左袖は第35号住居跡によって壊されていた。袖は地山の削り出しで、壁面は奥壁にかけて赤く焼土化していた。燃烧部は掘り込みは袖に沿って細長く、深さは12cmであった。壁外で開き気味に一段立ち上がり、そこから傾斜をつけて掘り抜かれた煙道へと至る。燃烧部の覆土下層には厚さ13cmの灰が堆積していた。b層には多量の砂粒子を含んでいた。掘り方は確認できなかった。焚口からは土師器の甕が横倒しになって出土した。

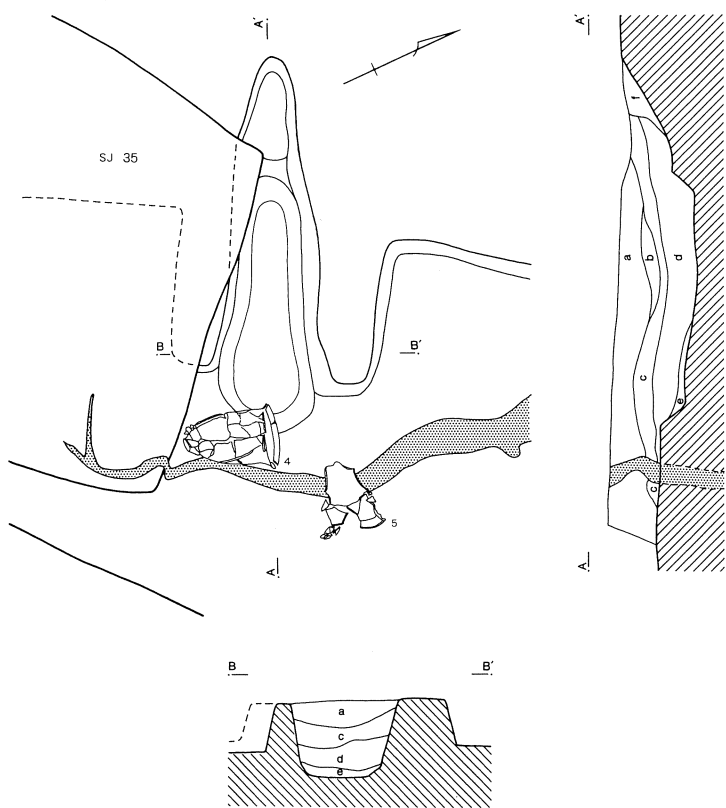
柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土とカマド周辺の床面から出土した。1・2の土師器坏と3の鉢は覆土から出土した。何れも残存率が低い。4の甕はカマド焚口から出土しており、ほぼ完形である。

第59図 第34号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.4)			BC'DGH'	A	橙	15%	覆土
2	坏	(12.4)			BC'H'	A	浅黄橙	25%	I区
3	鉢	(21.6)			BC'DH'	A	浅黄橙	45%	覆土
4	甕	21.1	33.4	5.1	BCEGH	A	橙	95%	カマドNo.1
5	甕	(23.0)			BC'EGH	A	にぶい橙	30%	カマドNo.2

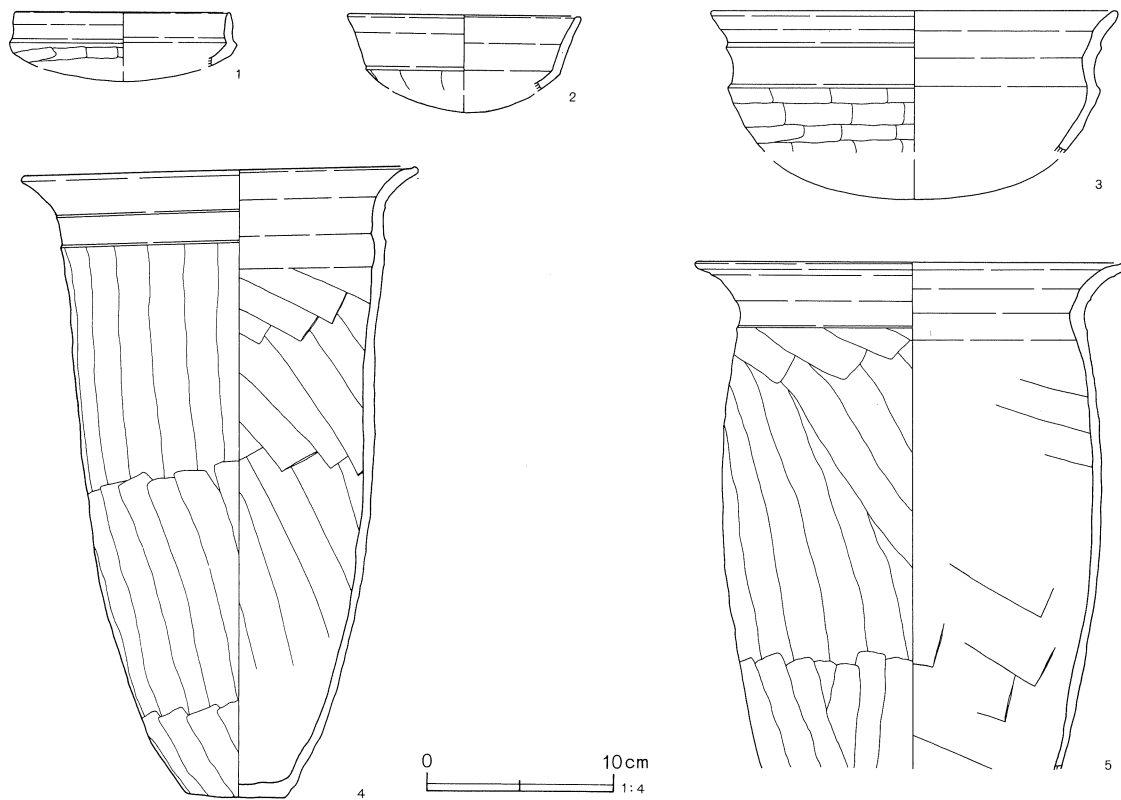
第58図 第34号住居跡カマド



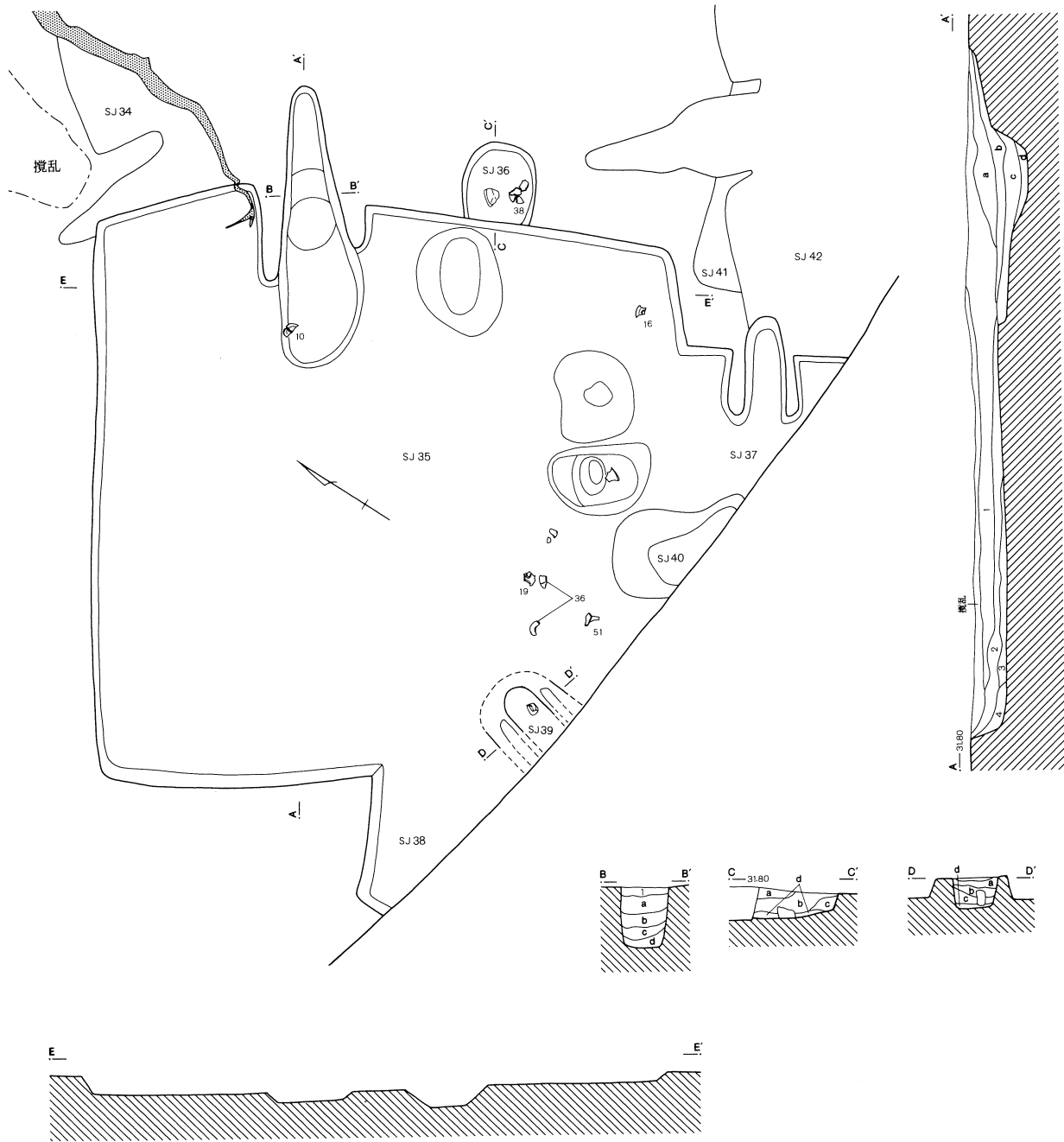
カマド

- a 暗褐色土 白色バミスを多量、焼土ブロックを少量。
- b 暗褐色土 砂粒を多量。
- c 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量。
- d 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多量、炭化物粒子を少量。
- e 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多量。
- f 暗赤褐色土 砂粒・焼土粒子・焼土ブロックを多量。

第59図 第34号住居跡出土遺物



第60図 第35～40号住居跡



第35号住居跡土層説明

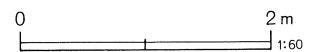
- 1 淡褐色土 黄褐色土粒子・白色パミスを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
  - 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
  - 3 褐色土 砂粒を多量、黄褐色土ブロックを微量。
  - 4 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量。
- カマド
- a 暗褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・焼土ブロックを微量（天井崩落土）
  - b 淡灰褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量、炭化物粒子を微量。
  - c 淡褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量、炭化物粒子を微量（掘り方）
  - d 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子を微量（掘り方）

第36号住居跡土層説明

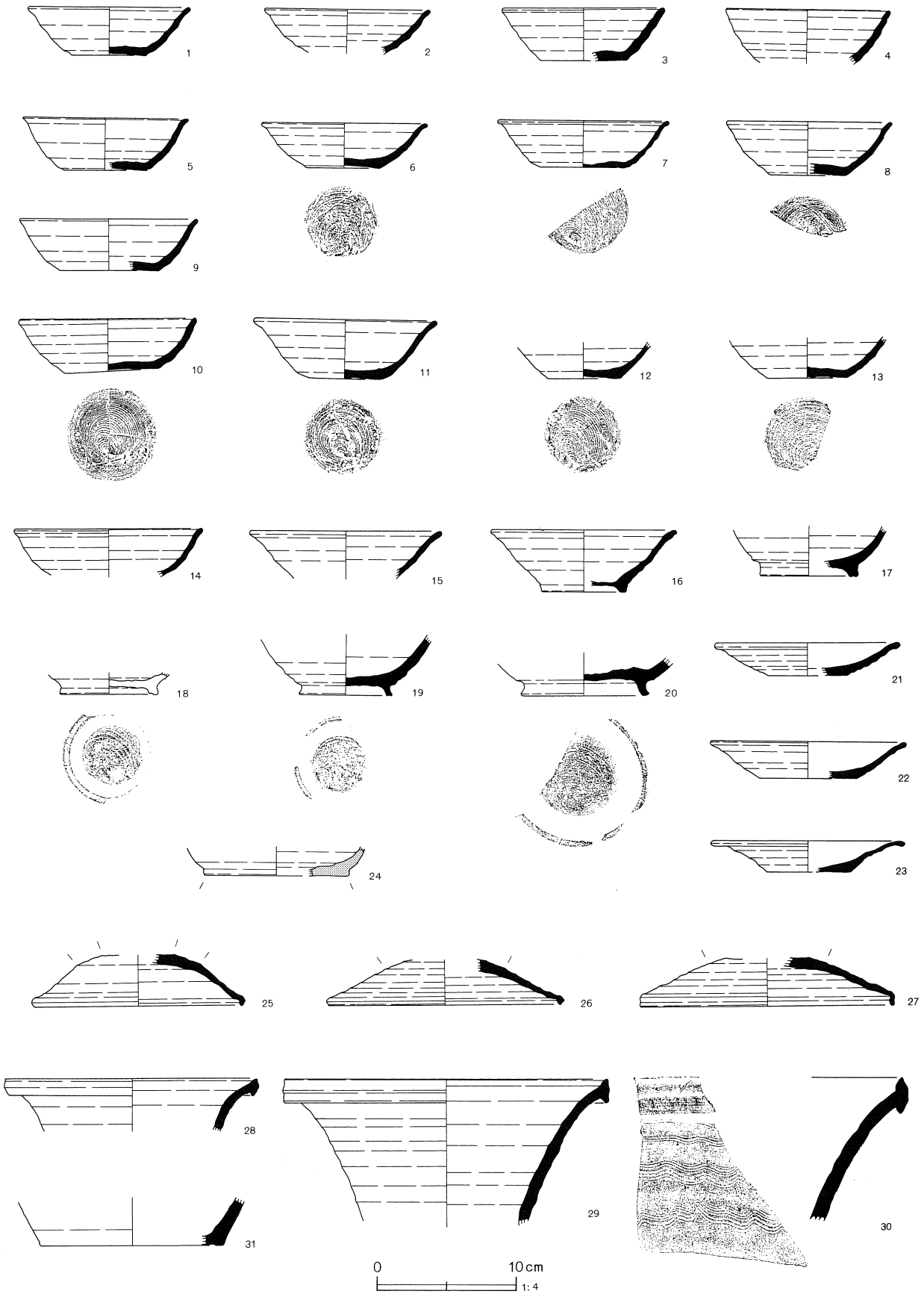
- カマド
- a 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
  - b 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒子を微量。
  - c 暗灰褐色土 白色パミス・焼土粒子を微量。
  - d 暗灰褐色土 黄褐色土粒子・白色パミスを微量（掘り方）

第39号住居跡土層説明

- カマド
- a 暗褐色土 焼土粒子を少量。
  - b 暗褐色土 黄褐色土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を少量。
  - c 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量。
  - d 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子を少量（掘り方）

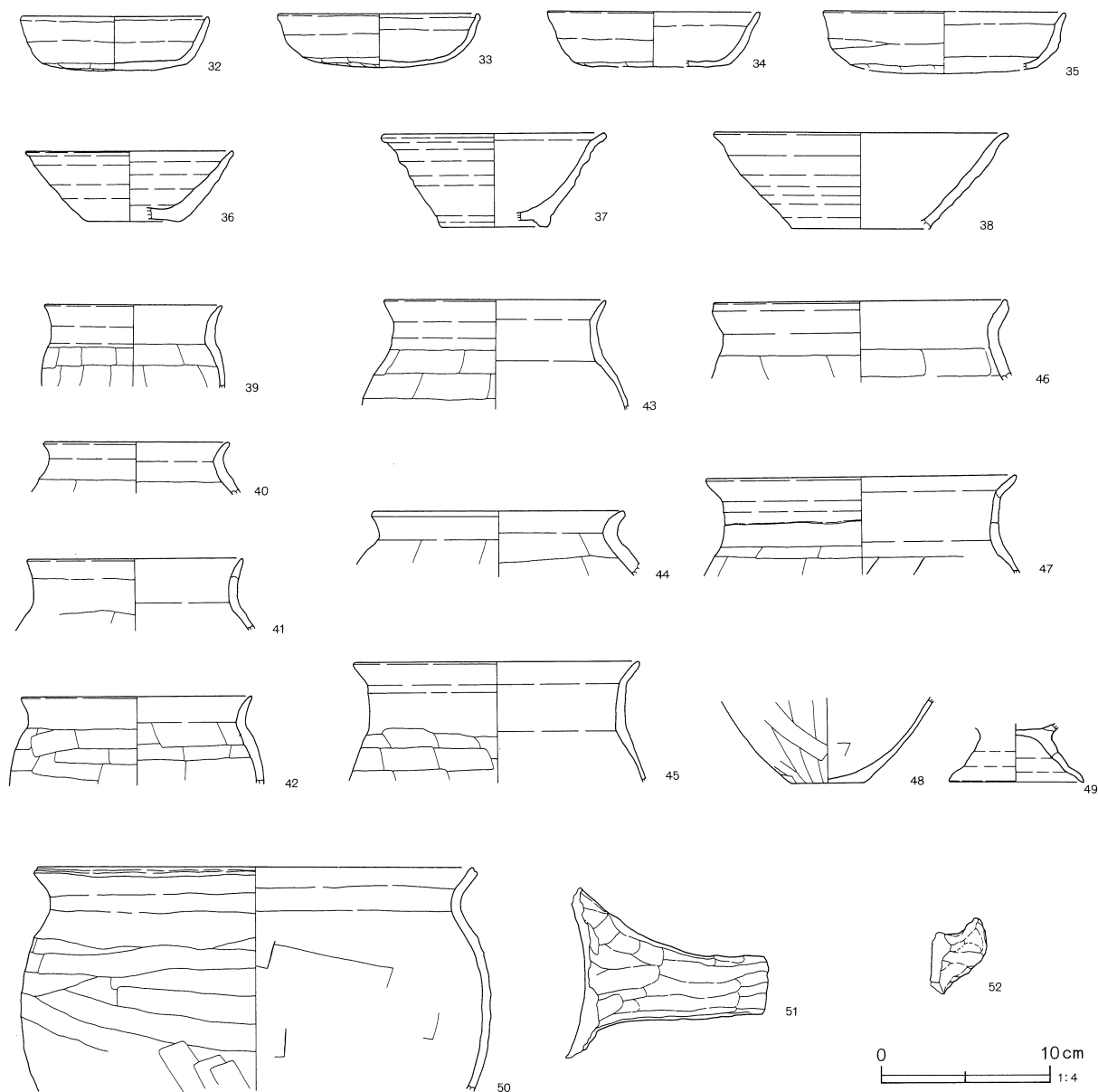


第61图 第35・36号住居跡出土遺物(1)





第62図 第35・36号住居跡出土遺物(2)



## 第35号住居跡(第60図)

AE-14グリッドで検出された。第34・36・37・40号住居跡を切り、第39号住居跡に切られていた。第38号住居跡との新旧関係はわからなかった。東壁の一部は噴砂に壊されていた。東西5.55m、南北5.37m、深さは0.31mで、主軸方位はN-56°-Eである。

覆土は4層からなる自然堆積であった。

カマドは東壁北寄りに位置していた。袖は地山の削り出しで、右袖はよく残っていなかった。燃烧部の掘り込みは浅く、灰層が薄くあった。その上には天井崩

落土と思われる暗褐色土が堆積していた。

ピットは3本確認できたが、掘り込みも浅く何れも柱穴にはならないものと思われる。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土から土師器・須恵器とも多く出土した。第36号住居跡と共に遺物を取り上げてしまったので、本遺構に確実に伴うといえるのは10・16・19・36・51だけである。須恵器は4・5・8~10・13・14・31が南比企産で、ほかは全て末野産である。18・24は灰釉陶器である。51・52は甌の把手と思われる。

第61・62図 第35・36号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.6)	(3.4)	(5.4)	C'H'IJ'	A	暗青灰	20%	カマド 末野産
2	坏	(11.8)			C'EH'	A	灰	20%	覆土 末野産
3	坏	(11.8)	(3.7)	(6.2)	C'H'I	A	灰白	15%	II区 末野産
4	坏	(11.8)			AC'DH'	C	にぶい褐	20%	I区 南比企産
5	坏	(11.8)	(3.7)	(6.0)	AC'DH'	A	灰	20%	覆土 南比企産
6	坏	(12.0)	(3.1)	(5.2)	C'DEH'	A	灰白	35%	II区 末野産
7	坏	(12.0)	3.3	(6.0)	C'EH'I	A	灰	40%	覆土 末野産
8	坏	(11.8)	(3.7)	(5.4)	AC'H'	A	灰	25%	覆土 南比企産
9	坏	(12.8)	(3.7)	(7.0)	AC'H'J	A	灰	15%	覆土 火礫痕あり 南比企産
10	坏	12.6	3.8	6.7	ACDH'J'	A	灰	100%	No.1 内面火礫痕あり 南比企産
11	坏	(13.2)	4.2	5.2	C'EH'IJ	A	灰白	50%	覆土 末野産
12	坏			5.0	C'H'I	A	灰	70%	覆土 末野産
13	坏			(5.6)	AC'DH'	A	灰白	25%	II区 南比企産
14	坏	(13.6)			AC'DH'	C	にぶい赤褐	20%	II区 南比企産
15	坏	(13.8)			C'FH'IJ	A	灰	20%	覆土 末野産
16	高台坏	(13.2)	(4.4)	(6.1)	C'EH'I	A	暗青灰	20%	No.8 末野産
17	高台坏			(7.0)	C'DH'I	A	灰白	25%	II区 末野産
18	高台坏			(7.0)	C'EGH'I	A	茶褐	80%	カマド 末野産
19	高台坏			(6.6)	C'H'J'	A	灰	55%	No.4 末野産
20	高台坏			9.1	C'EH'J	A	灰	50%	II区 末野産
21	皿	(13.2)	(2.3)	(5.6)	C'EG'H'I	C	灰白	10%	覆土 末野産
22	皿	(14.0)	(2.6)	(7.0)	C'DG'H'	C	褐灰	20%	ピット1 末野産
23	皿	(13.9)	(2.2)	(6.0)	C'EH'I	A	暗青灰	15%	ピット1 末野産
24	坏			(10.4)	C'H'J'	A	灰白	20%	II区 末野産
25	蓋	(15.0)			C'H'IJ'	A	灰	40%	カマド 末野産
26	蓋	(16.6)			C'EH'IJ'	A	灰	35%	覆土 末野産
27	蓋	(18.2)			AC'DEH'	C	にぶい褐	50%	カマド 末野産
28	甕	(18.0)			C'DH'J'	A	灰白	20%	覆土 末野産
29	甕	(23.0)			C'EH'I	A	灰	35%	I区 末野産
30	甕				C'DEH'I	A	灰	%	IV区 口縁部に波状文 末野産
31	甕			(13.0)	AC'H'	A	灰	25%	覆土 南比企産
32	坏	(11.2)	(3.1)		BC'DH'	A	橙	40%	覆土
33	坏	(12.0)	(3.1)		BC'DH'	A	橙	35%	カマド
34	坏	(12.6)			BC'DG'H'	A	橙	35%	覆土
35	坏	(14.4)			BC'H'	A	橙	25%	I区
36	坏	12.4	4.1	5.5	BC'DG'H'	A	にぶい褐	85%	No.3
37	高台坏	(13.4)	(5.4)	(6.2)	BC'FH'	A	にぶい橙	20%	II区
38	鉢	(17.4)	(5.6)	(8.2)	BC'DG'H'	A	にぶい橙	40%	No.10
39	甕	(10.6)			BC'DH'	A	黄橙	30%	覆土
40	甕	(11.0)			BDG'H'	A	橙	20%	カマド
41	甕	(12.8)			BC'DH'	A	にぶい褐	20%	IV区
42	甕	(13.6)			BC'DGH'	A	橙	15%	覆土
43	甕	(13.2)			BC'DH'	A	橙	25%	覆土
44	甕	(15.0)			BCDH	A	橙	20%	覆土
45	甕	(17.0)			BC'DG'H'	A	橙	20%	覆土 外面は煤ける
46	甕	(17.4)			BC'DG'H'	A	にぶい褐	15%	カマド
47	甕	(18.4)			BC'DG'H'	A	橙	15%	北ベルト
48	甕			(4.2)	BC'DG'H'	A	橙	20%	カマド
49	甕			(7.8)	BC'DH'	A	にぶい橙	45%	覆土 内外面とも煤ける
50	鉢	(26.2)			BC'DG'H'	A	橙	25%	カマド 外面全体が煤ける
51	把手				BC'DH'	A	橙	No.2	
52	把手				BC'DH'	A	にぶい褐	覆土	

## 第36号住居跡(第60図)

AE-14グリッドで検出された。第35号住居跡に本遺構の大半を壊されているため、検出できたのはカマドの燃焼部だけであった。住居跡の壁は一部第35号住居跡と重複していたとも考えられる。第34号住居跡を切っていた。

カマドの燃焼部は壁外に長く延びていたものと思われる。幅0.68m、深さは0.27mであった。支脚は安山石が用いられ、かなり赤く焼けていた。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

遺物はカマドから38のロクロ調整の土師器坏が出土した。ほかに土錘が2点出土している。

## 第37号住居跡(第60図)

AE-14・15グリッドで検出された。南側は調査区外にかかるため全体を調査することはできなかった。第40・42号住居跡を切り、第35・39号住居跡に切られていた。

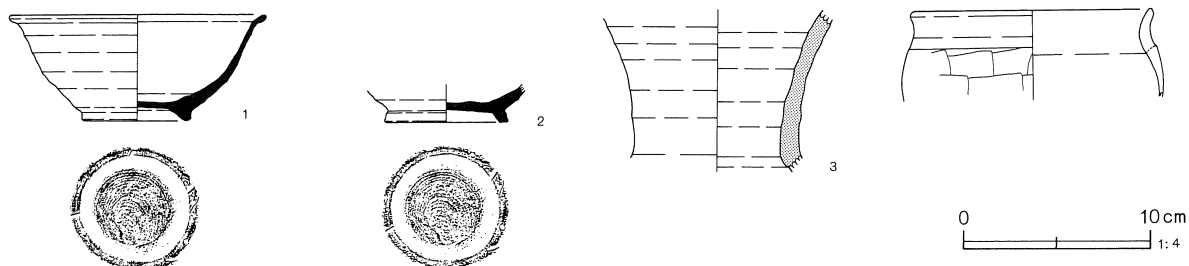
床面は平坦であった。覆土は観察できなかった。

カマドは東壁に位置していた。袖は地山の削り出しであった。燃焼部最下層には灰層が確認できた。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

遺物はカマドから少量出土した。1・2の須恵器は末野産で、底部の切り離しは回転糸切りである。3は灰釉陶器の長頸壺の破片で、胎土はきめ細かい。

第63図 第37号住居跡出土遺物



第63図 第37号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	高台坏	(13.8)	5.6	5.8	C'EG'H'I'	D	褐灰	80%	No. 4	末野産
2	高台坏			6.7	C'EH'I'J'	A	灰白	80%	No. 3	末野産
3	長頸壺				C'J'	A	灰白	15%	覆土	
4	甕	(13.0)			BC'DH'	A	橙	20%	覆土	外面に多量の煤

## 第38号住居跡(第60図)

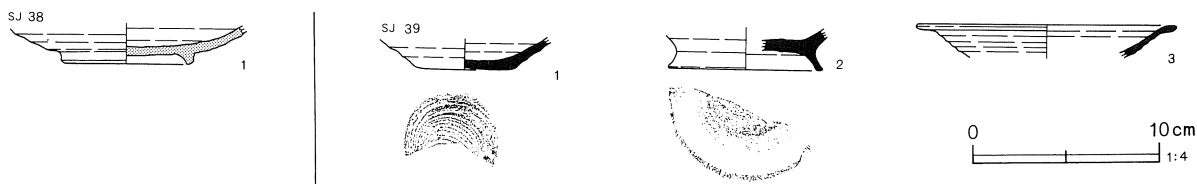
AE-14グリッドで検出された。第39号住居跡に切られていた。第35号住居跡との新旧関係はわからなかった。調査できたのは北西コーナー部分で、深さは0.22mであった。

床面は平坦であった。覆土の観察はできなかった。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は今回の調査区内からは検出できなかった。

遺物は覆土から1の灰釉陶器の高台坏が出土した。焼成は良好で、胎土もきめ細かい。

第64図 第38・39号住居跡出土遺物



第64図 第38号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	高台坏			7.1	C'H'	A	灰白	45%	No. 2	

### 第39号住居跡(第60図)

AE-14グリッドで検出された。住居跡のほとんどが調査区外に延びているため、検出できたのはカマドだけであった。第35・36・37・38・40号住居跡を切っており、本住居跡群の中では一番新しい。

カマドは調査区壁際で検出された。壁際は攪乱を受けていたので、確認できたのは燃焼部奥壁の部分だけ

であった。住居跡壁外に延びていたものと思われ、壁面は僅かに赤く焼けていた。支脚には安山石が使用されていた。覆土最下層には灰があった。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は今回の調査区内からは検出できなかった。

遺物は須恵器の破片が少量出土した。1～3は末野産である。ほかに用途不明の鉄製品が2点出土した。

第64図 第39号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏			(5.4)	C'DEH	A	灰	50%	覆土 末野産
2	高台坏			(8.2)	C'DH'I	A	灰	35%	覆土 末野産
3	皿	(13.8)			C'DH'	A	灰褐	15%	覆土 末野産

### 第40号住居跡(第65図)

AE-14・15グリッドで検出された。住居跡の大半が調査区外にかかるため、全体を調査することができなかった。第35・37・42号住居跡に壊されていた。深さは0.22mで、主軸方位はN-35°-Wである。

覆土は観察できなかった。

カマドは北壁に位置していた。他の遺構に壊されていたため、燃焼部の掘り込みだけが確認できた。深さは

28cmで、最下層には灰が薄く堆積していた。e層は掘り方にあたる。

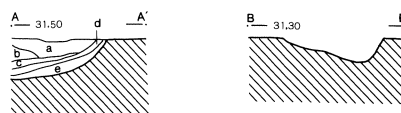
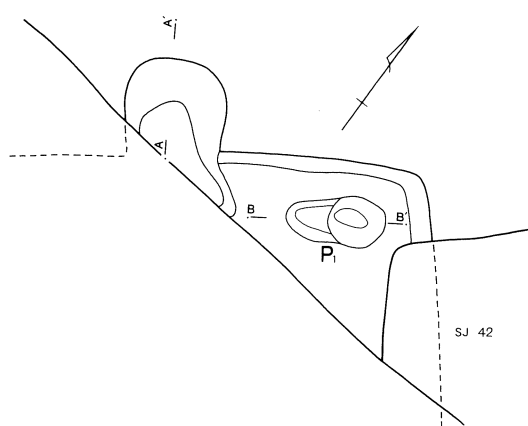
ピットは1本確認できた。長径80cm、短径30cm、深さ20cmであった。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

遺物は覆土から土師器・須恵器片が少量出土した。

1・2は混入品と思われる。1の須恵器高台坏は末野産で、底部の切り離しは回転糸切りである。

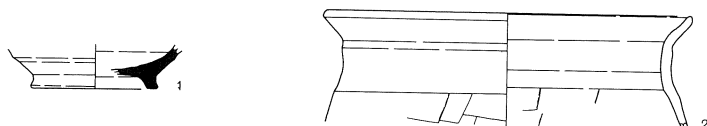
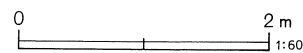
第65図 第40号住居跡および出土遺物



第40号住居跡土層説明

カマド

- a 暗黄褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子を少量。
- b 暗褐色土 黄褐色土ブロック・焼土ブロックを微量。
- c 明褐色土 黄褐色土粒子を多量。
- d 赤褐色土 焼土ブロックを多量、黄褐色土粒子を微量。
- e 暗灰褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子を少量。



第65図 第40号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高台坏			(6.8)	C'DFH'	D	にふい褐	20%	覆土 末野産
2	甕	(19.6)			BC'DGH'	A	橙	10%	覆土

## 第41号住居跡(第66図)

AE-14・15、AF-14・15グリッドで検出された。第42号住居跡に住居跡の大部分を壊されていたため、確認できたのは北壁の一部だけであった。深さは0.12mであった。

床面は平坦であった。覆土は観察できなかった。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は北西コーナーの床面から7cm浮いた状態で銅製の耳環が1点出土した。本遺構からは土器がまったく出土しなかった。

## 第42号住居跡(第66・67図)

AE-14・15、AF-14・15グリッドで検出された。第41号住居跡の覆土を深く掘り込んで構築されていた。第34・37・40号住居跡を切り、第43号住居跡に切られていた。南西コーナーは調査区外にかかるため調査ができなかった。南北3.09m、東西4.25m、深さは0.18mで、平面形態は東西に長い長方形をしていた。主軸方位はN-37°-Wである。

覆土は2層からなる自然堆積であった。

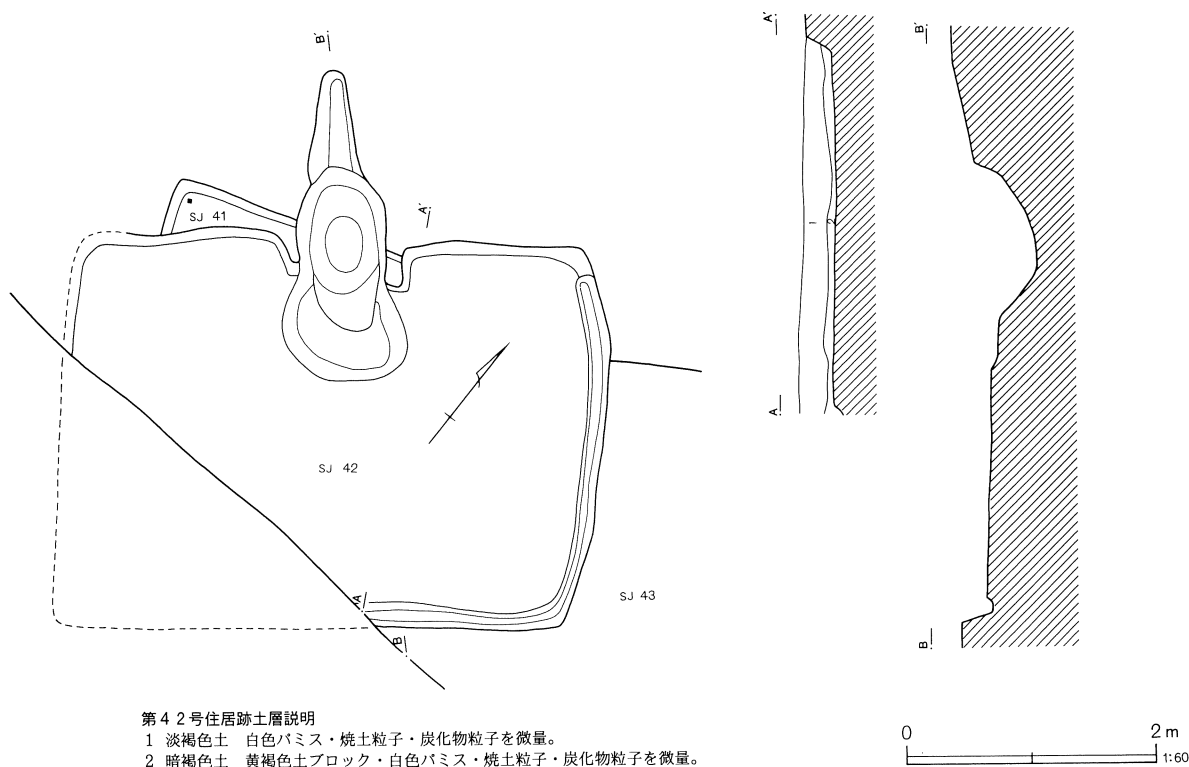
カマドは北壁の中央に位置していた。袖は短く、地山の削り出しであった。燃烧部は住居跡の壁外に延びており、壁面は僅かに赤く焼けていた。掘り込みは浅く、最下層には灰が5~15cmの厚さで堆積していた。煙道は長く、傾斜をつけて掘り抜かれていた。焚口から燃烧部にかけて土師器が少量出土した。掘り方は深さ27cmで、焚口の部分は一段浅かった。

壁溝は幅約17cm、深さ約4cmで、南壁と東壁に巡っていた。

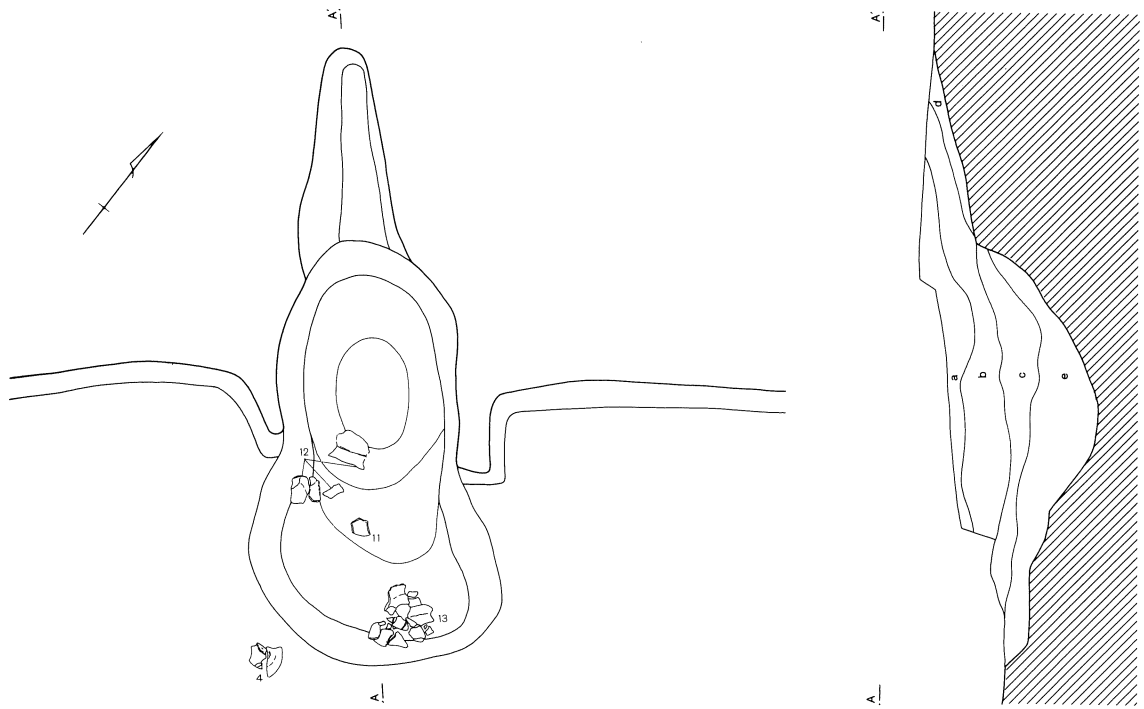
柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物はカマドと覆土から出土した。カマドから出土した土器は4・5の須恵器と8・11~13の土師器である。ほかは全て覆土から出土したもので、残存率が低い。須恵器は1と2が南比企産で、3~5が末野産である。底部の切り離しは回転糸切りである。7・8の土師器の坏は内面に放射状の暗文が施されている。

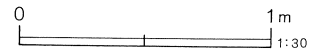
第66図 第41・42号住居跡



第67図 第42号住居跡カマド



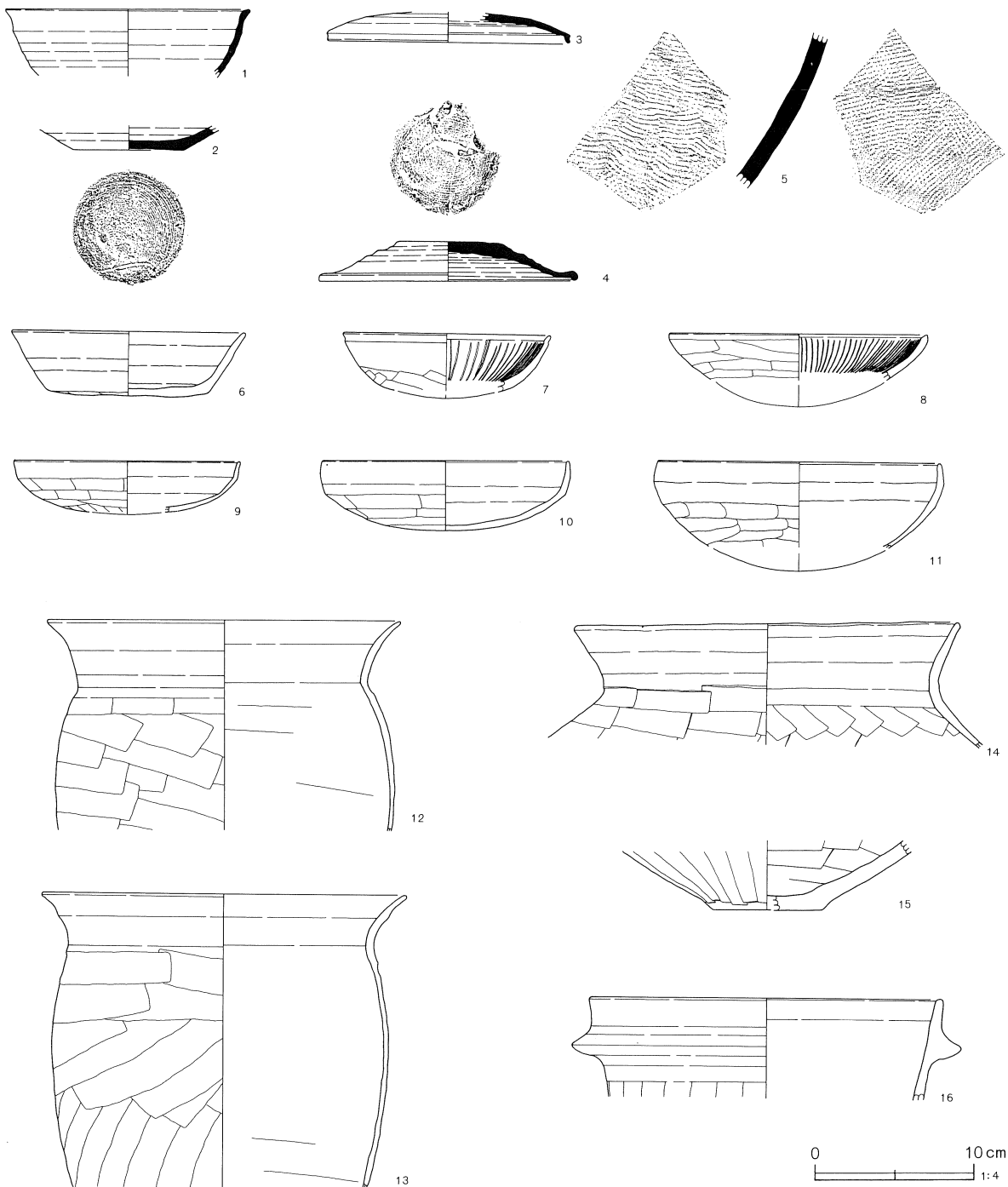
- カマド
- a 淡褐色土 黄褐色土ブロック・白色パミスを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
  - b 淡褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
  - c 淡灰褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を少量。
  - d 淡灰褐色土 黄褐色土ブロックを少量。
  - e 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を若干（掘り方）



第68図 第42号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.2)			AC'DH'	A	灰	15%	覆土 南比企産
2	坏			6.8	C'H'IJ	A	暗灰	80%	覆土 末野産
3	蓋	(15.0)			AC'EH'	A	灰	20%	覆土 南比企産
4	蓋	(16.2)	2.5	(6.6)	C'EH'J'	A	灰	50%	No.5 末野産
5	甕				C'EH'	A	灰		No.9 末野産
6	坏	(14.6)	(4.0)		BC'EG'H	A	橙	25%	覆土
7	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	15%	覆土
8	坏	(16.0)			BC'DG'H'	A	橙	15%	カマド
9	坏	(14.0)			BC'DG'H'	A	橙	35%	覆土
10	坏	(15.2)	4.4		BC'DH'	A	橙	45%	覆土
11	坏	(17.6)			BC'DG'H'	A	黄橙	30%	No.4
12	甕	(22.0)			BC'DH'	A	橙	45%	カマドNo.1~3
13	甕	(22.6)			BC'DH'	A	橙	55%	No.6~8
14	甕	(24.0)			BC'H'	A	橙	40%	覆土
15	甕			(6.8)	BC'EGH'	A	浅黄橙	25%	覆土
16	羽釜	(21.8)			BC'EH	A	橙	10%	覆土

第68図 第42号住居跡出土遺物



## 第43号住居跡(第69図)

AF-14・15グリッドで検出された。南側は調査区外にかかるため全体を調査することができなかった。第42号住居跡を切り、第44号住居跡、第35号土壇に切られていた。北壁は第42号住居跡と重複していたため、壁を壊してしまった。覆土の観察からほぼ破線の位置

であったと思われる。南壁は第44号住居跡に壊されていた。カマド左の東壁は右の壁とくらべ東に44cm大きく膨らんでいた。南北は推定4.33m、深さは0.37mであった。主軸方位はN-57°-Eである。

覆土は3層からなる自然堆積であった。

床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは東壁のやや北寄りに位置していた。袖は地山の削り出して、右袖は確認できなかった。燃烧部は住居跡の壁外に延びていた。掘り込みは浅く、壁面の一部は焼土化していた。すぐ右の床面直上には灰層が薄く堆積していた。

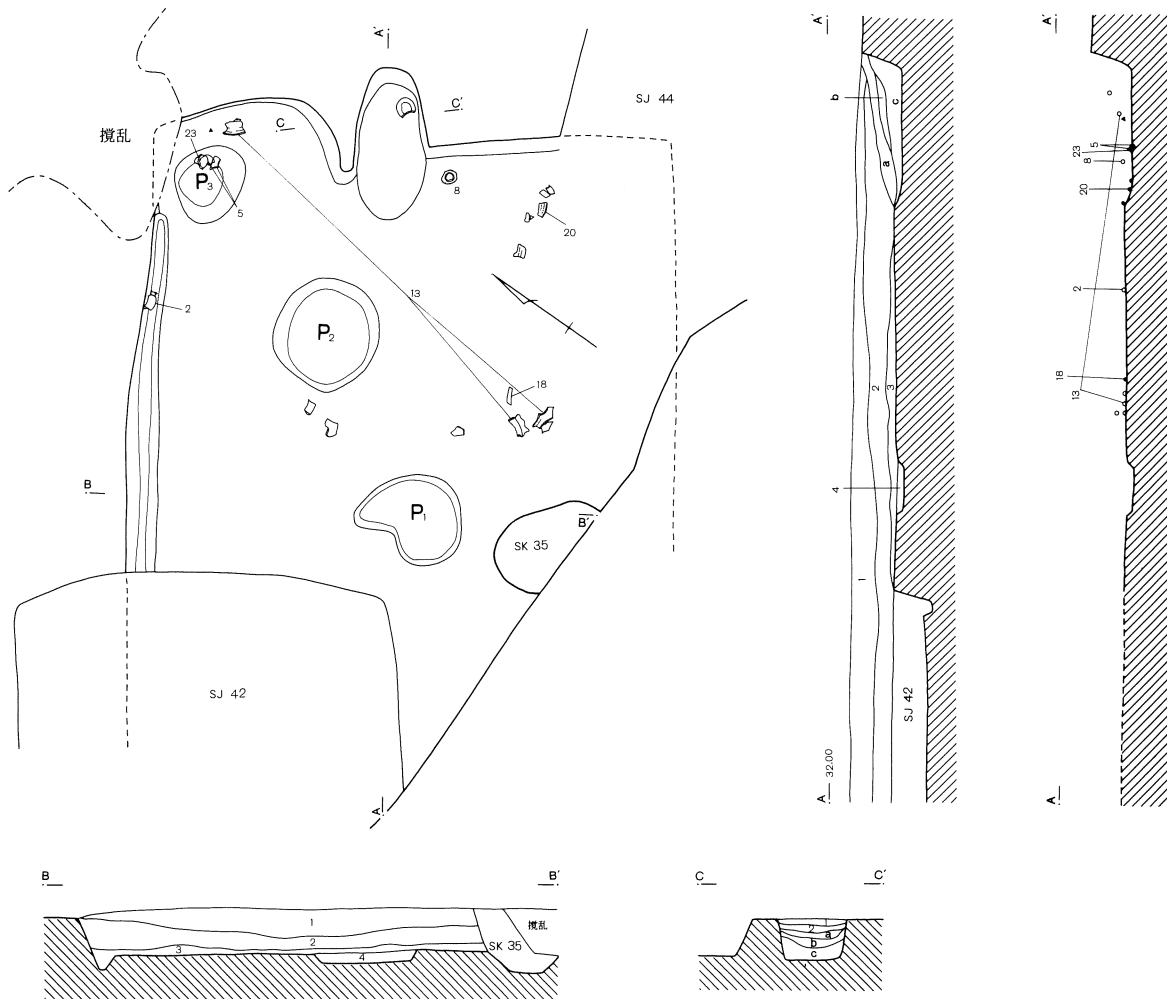
ピットは3本確認できたが、どれも掘り込みが浅く柱穴とは思えない。各ピットの大きさは、P1が85cm×72cm×5cmで、P2が90cm×85cm×10cmで、P3が58cm×55cm×12cmであった。

壁溝は幅約25cm、深さ約12cmで、北壁にのみ巡っていた。

柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は覆土から多く出土した。大半が床面から5～10cm程浮いており、床面から出土したものは2・5・8・13・18・23だけであった。須恵器は11を除いたすべてが末野産で、底部の切り離しは回転糸切りである。11は南比企産である。土器のほかに北東コーナーの床面から滑石製の紡錘車が1点出土している。

第69図 第43号住居跡

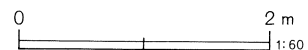


第43号住居跡土層説明

- 1 淡褐色土 白色バミス・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック・白色バミス・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子を微量、炭化物粒子を若干。
- 4 褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

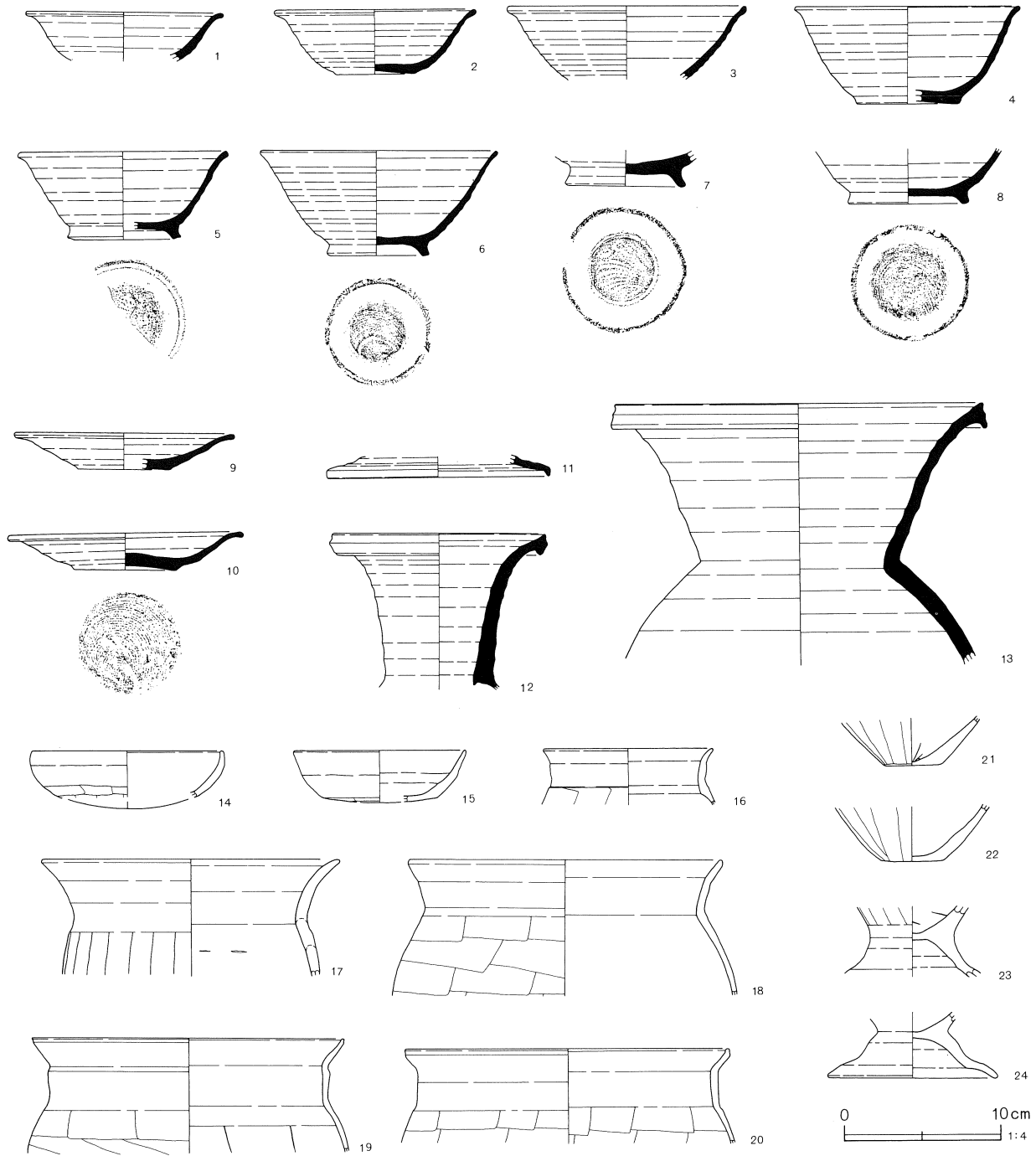
カマド

- a 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- b 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多量。
- c 淡灰褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子を少量、炭化物粒子を微量。





第70図 第43号住居跡出土遺物



第70図 第43号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)			C'EH'I	A	灰	20%	II区 末野産
2	坏	(12.8)	4.0	(5.0)	C'EH'I	A	青灰	50%	No.16 末野産
3	坏	(15.2)			C'EH'J'	A	灰白	10%	覆土 末野産
4	坏	(14.4)	6.1	(6.6)	C'EH'I	A	青灰	45%	II区 末野産
5	高台坏	(13.4)	5.5	(7.2)	C'HI'J	A	青灰	50%	No.3、4 末野産
6	高台坏	15.1	6.6	6.5	C'HI'J'	A	灰	95%	覆土 末野産
7	高台坏			7.6	BC'DH'J	D	黄橙	80%	覆土 末野産
8	高台坏			7.7	C'EGH'I	C	灰褐	80%	No.15 末野産

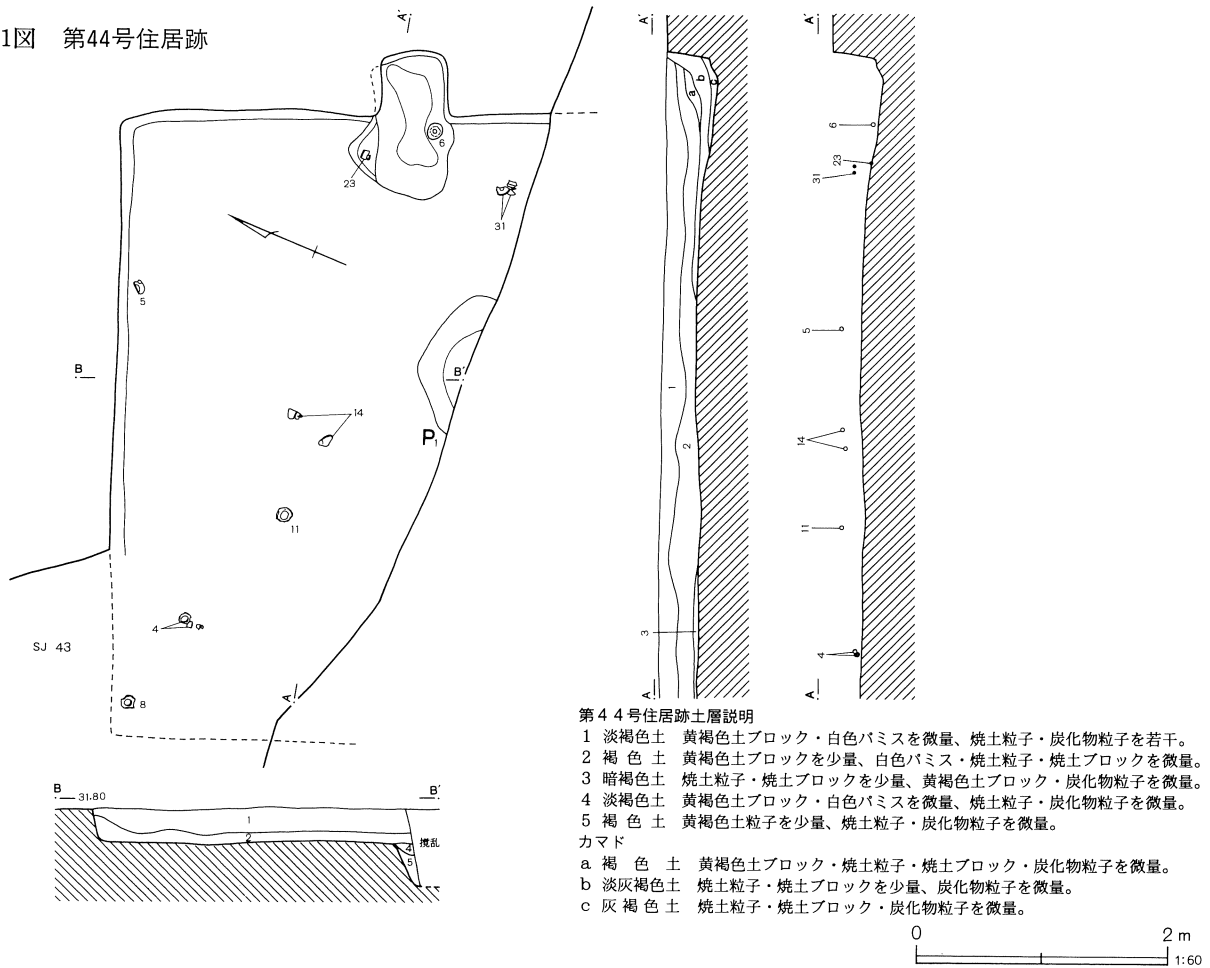
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
9	皿	(14.0)	(2.3)	(5.8)	C7EH'I	A	青灰	40%	覆土 未野産
10	皿	15.0	2.5	6.4	C'H'IJ'	A	青灰	80%	カマド 未野産
11	蓋	(14.0)			C'H'J'	A	灰	10%	覆土 南比企産
12	壺	(13.6)			C'EH'	A	灰黒	20%	III区 未野産
13	甕	(23.0)			C'EH'I	A	青灰	40%	覆土 未野産
14	坏	(12.0)			BC'DG'H'	A	にふい橙	15%	覆土
15	坏	(11.0)			BC'DH'	A	浅黄橙	20%	覆土
16	甕	(10.8)			BC'DH'	A	橙	15%	II区
17	甕	(18.8)			BC'DGH'	A	橙	25%	覆土
18	甕	(19.8)			BC'DFH'	A	橙	30%	No.10
19	甕	19.8			BC'DGH'	A	橙	75%	No.5、8
20	甕	(20.4)			BC'DEH'	A	橙	25%	No.7
21	甕			(3.3)	BC'DG'H'	A	にふい橙	30%	I区
22	甕			(4.0)	BC'DH'	A	橙	30%	III区
23	甕				BC'DGH'	A	橙	80%	No.5
24	甕			(10.8)	BC'DGH'	A	橙	60%	覆土

### 第44号住居跡(第71図)

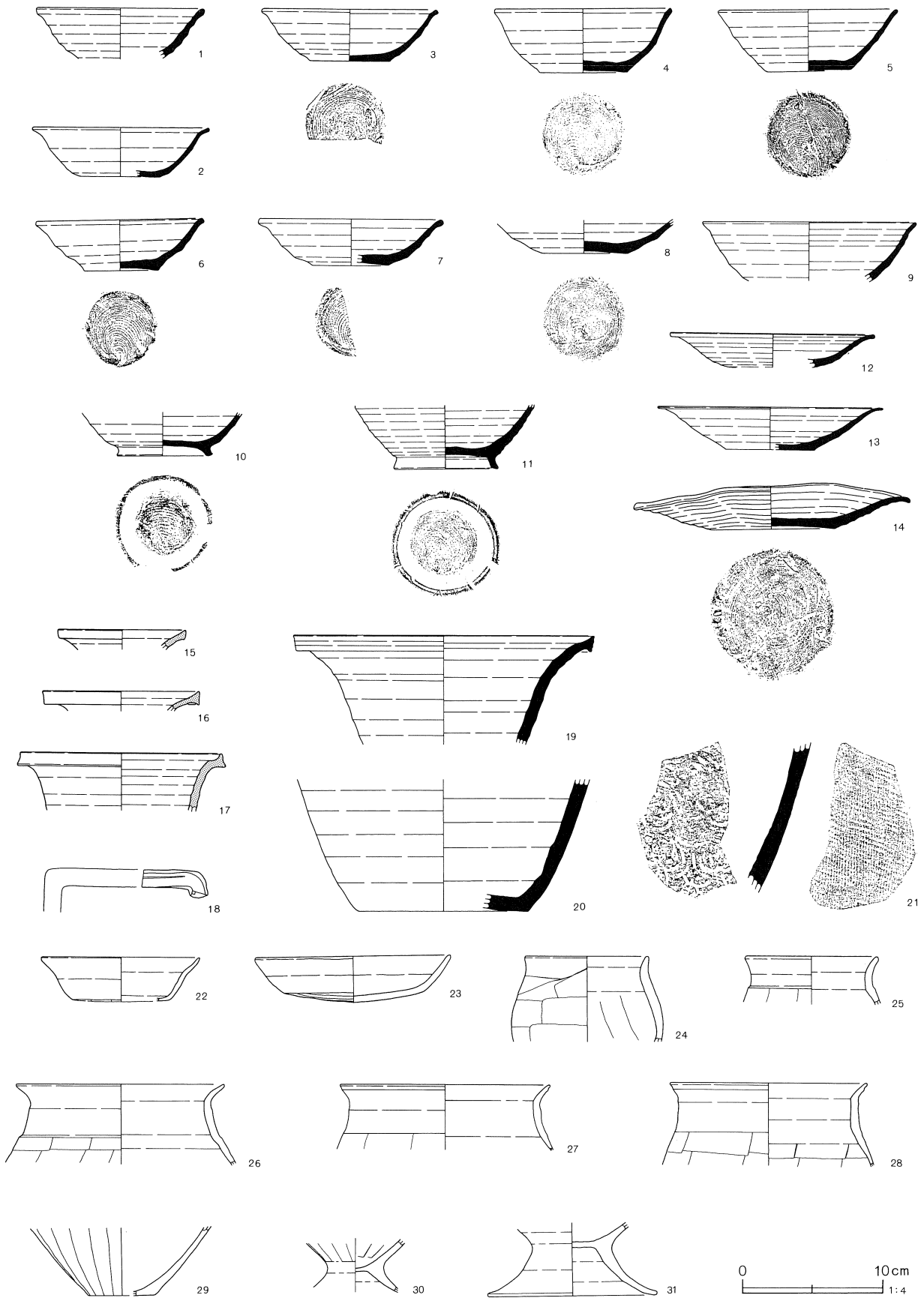
AF-14・15グリッドで検出された。南側は調査区外にかかるため全体を調査することができなかった。第43号住居跡を壊して構築していた。第43号住居跡と重複している北西コーナー部分は、掘り過ぎてしまった

ため壁を確認することができなかった。深さは0.28mで、第43号住居跡の床面の高さともあまり変わらなかった。カマドが東壁の中央にあったと想定すると南北の規模は4.8m前後で、形態は方形に近かったと思われる。主軸方位はN-68°-Eである。

第71図 第44号住居跡



第72図 第44号住居跡出土遺物



覆土は3層からなる自然堆積であった。

床面はカマド燃焼部周辺が僅かに低かった以外は、ほぼ平坦であった。

カマドは東壁に位置していた。袖は確認できなかった。燃焼部は住居跡壁外に延び、天井部が僅かではあるが残存していた。壁面はかなり火熱を受けていたようで焼土化していた。掘り込みはやや深く、最下層には厚さ4~13cmの灰層が堆積していた。掘り方は深さ5cmで、カマドc層がそれにあたる。

ピットは調査区壁際に1本確認できた。径110cm、深さは36cmであった。柱穴とは考えられなかった。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は今回の調査区内からは検出できなかった。

遺物は覆土から多量に出土した。カマド燃焼部の灰層の上から6の須恵器の坏と23の土師器の坏が出土した。遺物は須恵器片の出土量が多く、僅かではあるが灰釉陶器片もみられる。須恵器は5を除いてすべて末野産であり、5の坏だけが南比企産であった。底部の切り離しは回転糸切りである。14の皿はひどく歪んでいる。15~18は灰釉陶器である。15~17は長頸壺の口縁部の破片で、17には濃緑色の釉がかかっている。18は提瓶の把手の部分と思われるが、定かではない。表面には浅い沈線が認められる。26~28は「コ」の字口縁甕で、何れも口縁部の屈曲が強い。土器のほかに覆土上層から「田」の文字が線刻された滑石製の紡錘車と刀子の茎片が出土している。

第72図 第44号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)			C'EH'	A	灰	15%	I区 末野産
2	坏	(12.6)	(3.5)	(5.6)	C'DEH'J	A	灰	15%	ピット1 末野産
3	坏	(12.6)	3.7	5.7	C'EH'	A	灰	30%	IV区 末野産
4	坏	(14.4)	6.1	(6.6)	C'EH'I	A	青灰	45%	II区 末野産
5	坏	12.8	4.3	5.9	ABC'DH'	A	灰白	85%	No.4 南比企産
6	坏	12.0	3.6	5.3	C'EH'I	D	黄橙	100%	No.1 末野産
7	坏	(13.0)	(3.3)	(5.4)	C'EH'I	D	黄橙	20%	西ベルト 末野産
8	坏			6.0	C'EH'I	A	灰	45%	No.4 末野産
9	坏	(15.0)			C'DH'IJ	A	灰褐	10%	覆土 末野産
10	高台坏			6.9	C'EH'J	A	灰	70%	IV区 末野産
11	高台坏			7.4	C'EH'IJ	A	灰白	75%	No.7 末野産
12	皿	(14.4)			C'EH'J'	C	灰褐	35%	覆土 末野産
13	皿	(15.8)	(3.0)	(6.2)	C'EH'J	A	灰白	10%	I区 末野産
14	皿	19.7	3.1	8.7	C'EH'IJ	A	青灰	95%	No.5、6 歪みが著しい 末野産
15	壺	(9.0)			C'H'J'	A	灰	10%	IV区
16	壺	(11.0)			DH'J'	A	灰白	10%	IV区
17	壺	(14.0)			C'H'	A	灰	15%	覆土
18	把手				C'D	A	灰白		覆土
19	甕	(21.4)			C'EH'I	A	暗青灰	25%	覆土 末野産
20	甕			(12.0)	C'EH'I	A	暗青灰	15%	III区、IV区 末野産
21	甕				CEH'I	A	灰黒		覆土
22	坏	(11.2)			BCDFH'	A	にふい橙	30%	覆土
23	坏	(14.0)	(3.2)		BC'DEG	A	黄橙	25%	No.3
24	壺	(8.8)			BC'DH'	A	橙	20%	III区
25	甕	(9.6)			BC'DH'	A	にふい橙	30%	覆土
26	甕	(13.8)			BC'DEH'	A	橙	20%	北ベルト
27	甕	(15.0)			BC'DH'	A	橙	20%	III区
28	甕	(14.6)			BC'DH'	A	橙	25%	カマド
29	甕			(4.6)	BC'DFH'	A	黄橙	30%	覆土
30	甕				BC'DH'	A	橙	60%	III区 内外面とも煤付着
31	甕			(11.9)	BC'DH'	A	橙	50%	No.2

第45号住居跡(第73図)

AG-14・15グリッドで検出された。南西コーナーは調査区外にかかるため調査できなかった。床面の大半は攪乱を受けていた。南北4.26m、東西3.80m、深さは0.03mで、主軸方位はN-37°-Wである。

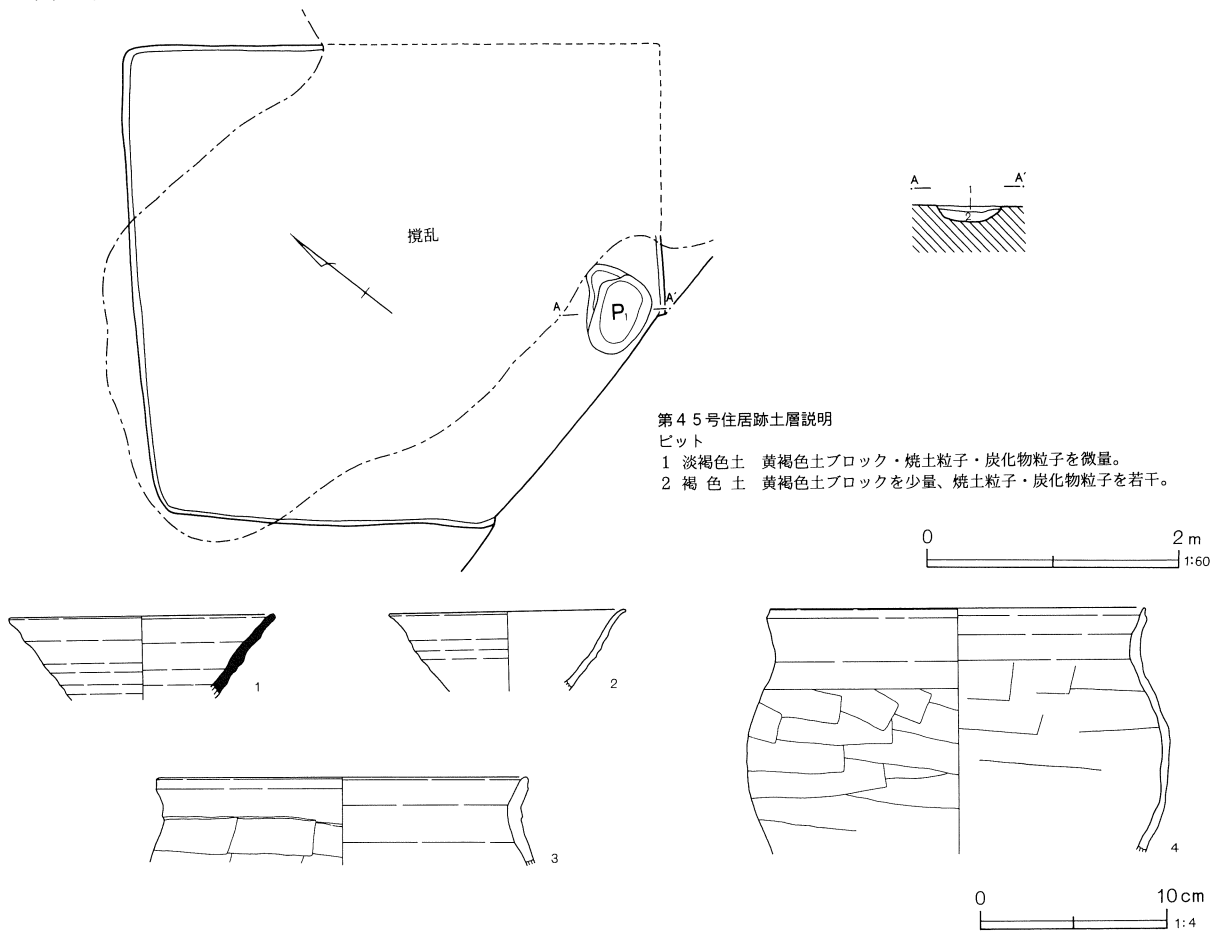
ピットは南壁際に1本確認できた。長径69cm、短径52cm、深さは13cmであった。掘り込みも浅く、覆土の

観察からも柱穴とは思えなかった。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は攪乱を受けていたため検出できなかった。カマドは壊されていた東壁にあったと思われる。

出土遺物は少なく、すべて覆土からの出土である。2はロクロ調整の坏で、焼きが悪い。4の土師器甕は胴部外面に煤が付着している。

第73図 第45号住居跡および出土遺物



第73図 第45号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.0)			BC'DH'	A	灰白	15%	覆土
2	坏	(12.6)			C'DFH	D	淡褐	10%	覆土
3	甕	(19.8)			BC'DG'H'	A	橙	15%	No.2
4	甕	(20.0)			BC'DH'	A	橙	20%	No.1 外面に煤が付着

第74図 第46号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋				C'DEGH'	D	浅黄橙	30%	覆土 末野産
2	坏	(11.0)	(3.2)		BCDGH'	A	にぶい橙	25%	No.4、5
3	坏	11.2	3.5		BC'DFH'	A	にぶい橙	100%	No.3
4	甕	(22.2)			BC'DGH'	A	橙	20%	覆土
5	甕				BC'DEH	A	橙	60%	No.1

第46号住居跡(第74図)

AG-14グリッドで検出された。住居跡の大部分を攪乱によって壊されていたため、検出できたのはカマドと北壁の一部だけであった。東壁は地山の流失により確認できなかった。深さは0.38mで、主軸方位はN-38°-Wである。

カマドは北壁に位置していた。左袖は攪乱を受けていた。右袖の先端には芯材として使用された土師器甕

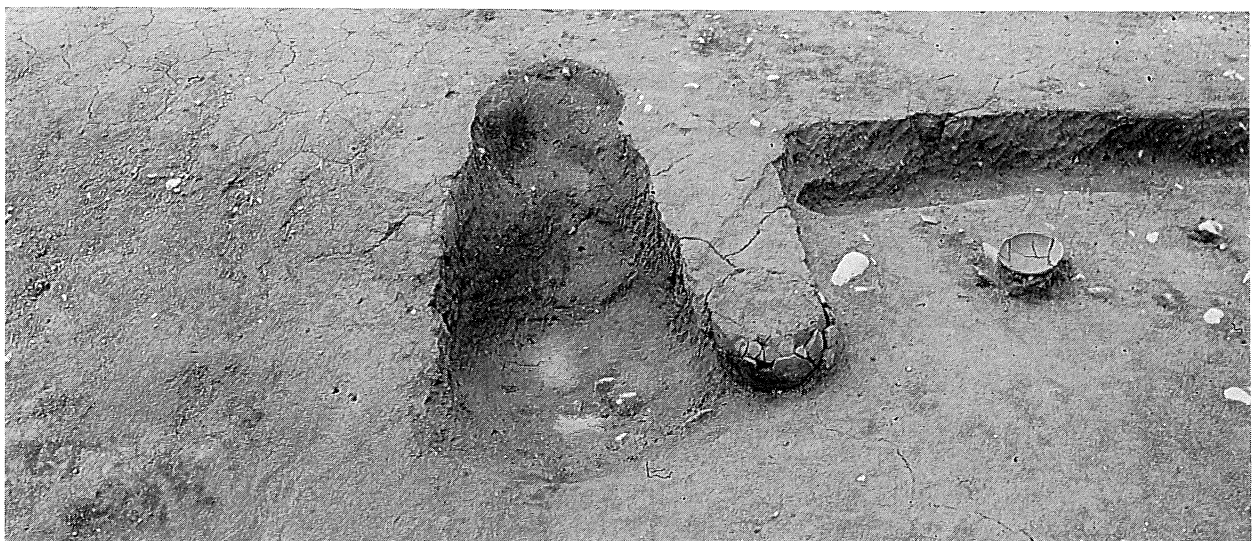
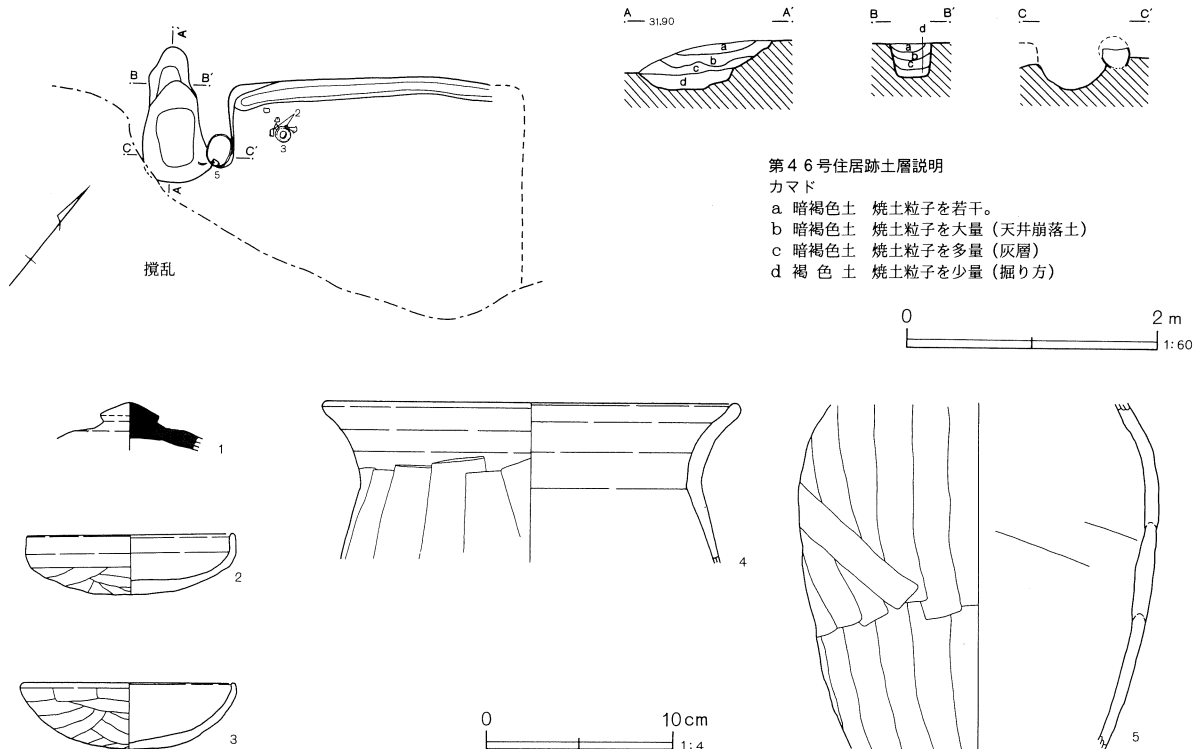
があった。燃焼部の掘り込みはなく、壁面は僅かではあったが赤く焼けていた。最下層には灰が3~10cm堆積していた。

壁溝は幅約17cm、深さ2cmで、壁を検出した範囲内では巡っていた。

柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物はカマド袖から5の甕が、床面から2・3の坏が出土した。5は火を受け脆くなっている。

第74図 第46号住居跡および出土遺物

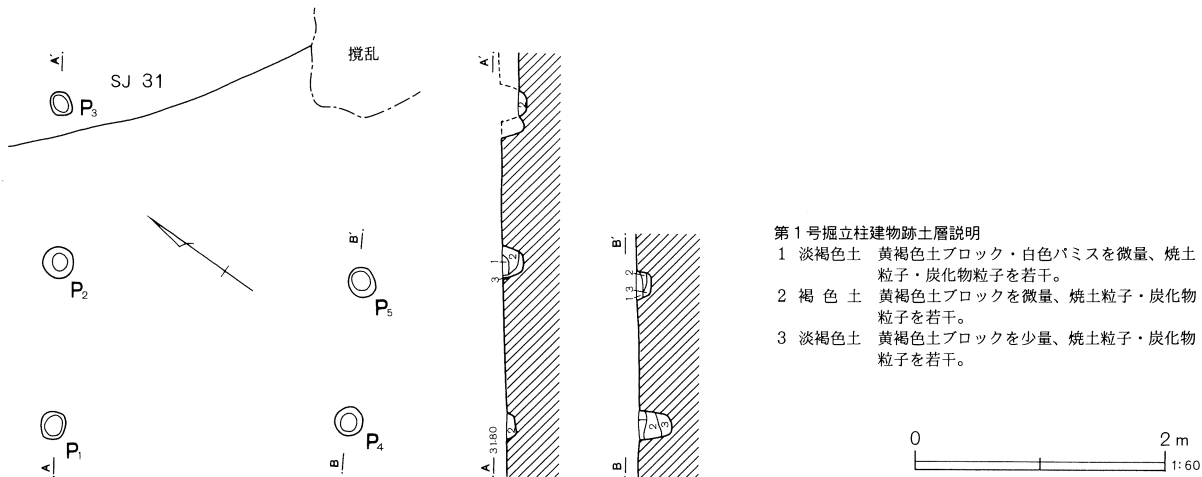


## b、掘立柱建物跡

## 第1号掘立柱建物跡(第75図)

AF-14、AG-14グリッドで検出された。第31号住居跡を切っていた。南東の隅柱は攪乱のため検出できなかった。P3は第31号住居跡の覆土と共に掘り下げてしまったので、掘り方しか確認できなかった。規模は2間×1間で、桁行2.76m、梁行2.60mであった。主軸方位はN-58°-Eである。

第75図 第1号掘立柱建物跡



## c、溝

## 第1号溝(第76図)

AA-10~12、AB-12・13グリッドにかけて検出された。第4・5・6号土壙を切っており、南北は調査区外に延びていた。幅1.00m、深さは0.28mであった。

遺物は出土しなかった。

覆土から中世に開削されたものと思われる。

## d、土壙

今回の調査で検出された土壙の数は32基であった。ここでは時代が判別できた代表的な土壙についてのみ記載した。また形態状・覆土の観察から掘立柱建物跡の柱穴と思われるものが単独で6基検出されており、それらも本項で取り扱うことにした。その他の土壙については一覧表を参照していただきたい。

覆土の断面観察からは柱穴の痕跡が確認できなかったことから、柱を抜き取ったものと考えられる。覆土には僅かではあったが焼土粒子、炭化物粒子を全体に含んでいた。

柱穴の平面形態は円形または楕円形であった。大きさは径16~24cmとほぼ同じだが、深さは8~27cmとばらつきがあった。

遺物はまったく出土しなかった。

## 第3号土壙(第77図)

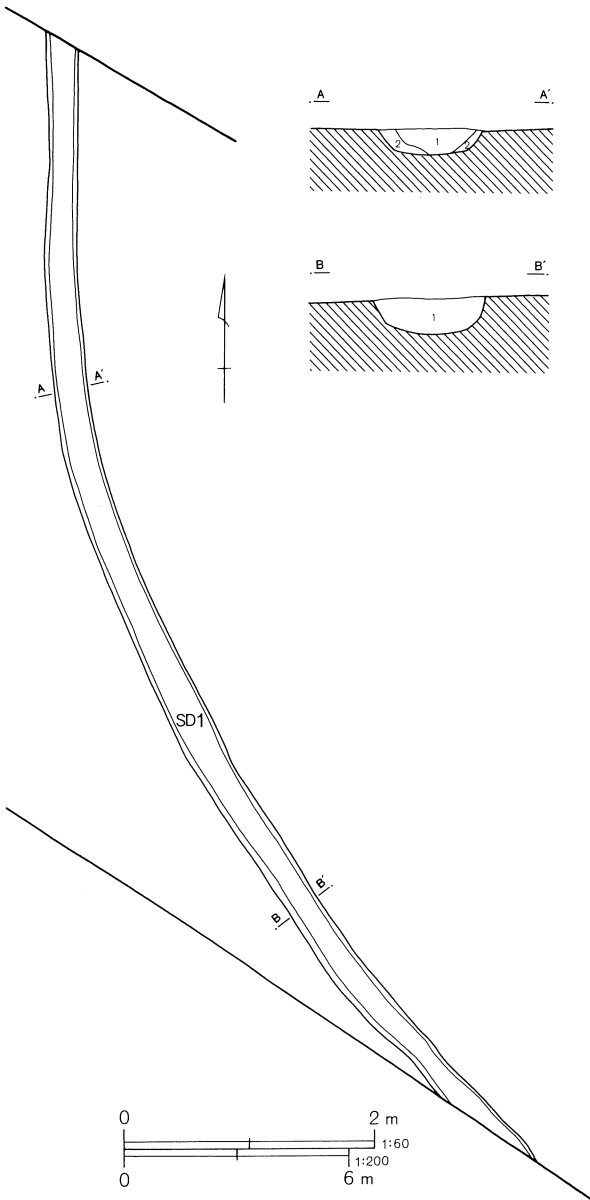
AB-12グリッドで検出された。長軸0.88m、短軸0.75m、深さは0.37mで、平面形態は楕円形であった。住居跡の貯蔵穴である可能性も考えられたので、周辺を精査してみたが何も確認できなかった。覆土下層には焼土粒子、炭化物粒子が少量認められた。

遺物は覆土1層中から1・2・3の土師器が出土した。1の坏は口縁端部に平坦面をもつ。2の壺は内面に煤が僅かに付着している。

## 第7号土壙(第77図)

T-6グリッドで検出された。長軸1.30m、短軸0.86m、深さは0.50mであった。長方形で、主軸方位はN-14°-Wである。覆土全体には大量の黄褐色土ブロックが含まれており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高いが、対応する他の柱穴は検出できなかった。

第76図 第1号溝



第1号溝土層説明

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 2 淡橙褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

第8号土壙(第77図)

T-7グリッドで検出された。長軸0.75m、深さは0.48mであった。南側を福川の旧河道によって壊されていた。覆土の断面には柱痕が認められ、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高い。しかし本遺構と軸を同じにする他の柱穴を検出することができなかった。覆土は人為的に埋め戻されていた。

遺物は平安時代の須恵器片が出土した。

第9号土壙(第77図)

U-7グリッドで検出された。長軸0.76m、短軸0.74m、深さは0.34mであった。不整円形で、主軸方位はN-90°-Eである。第8号土壙同様に断面に柱痕が認められたことから、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高い。本遺構と軸を同じにする他の柱穴は検出できなかった。覆土は人為的に埋め戻されていた。

遺物は平安時代の須恵器片が出土した。

第10号土壙(第77図)

V-7グリッドで検出された。長軸0.74m、短軸0.70m、深さは0.61mであった。形態は方形で、主軸方位はN-56°-Wである。形態・覆土の観察から掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高い。柱を抜き取り埋め戻したものであると思われる。本遺構と軸を同じにする他の柱穴は検出できなかった。第4号住居跡を切っていた。

遺物は出土しなかった。

第11号土壙(第77図)

AC-12グリッドで検出された。長軸0.82m、短軸0.56m、深さは0.48mであった。平面形態は長方形で、底面は平坦であった。

遺物は覆土から4の土師器甕が出土した。

第13号土壙(第77図)

U-7グリッドで検出された。調査区外に延びている。長軸0.56m、深さは0.45mで、平面形態は円形であった。形態から掘立柱建物跡の柱穴と思われ、対応する柱穴は調査区外にあるものと考えられる。

遺物は覆土から須恵器片と土錘1点が出土した。

第14号土壙(第77図)

U-7グリッドで検出された。調査区外に延びている。長軸0.60m、深さは0.23mであった。形態から掘立柱建物跡の柱穴と思われる。

遺物は覆土から須恵器片が出土した。

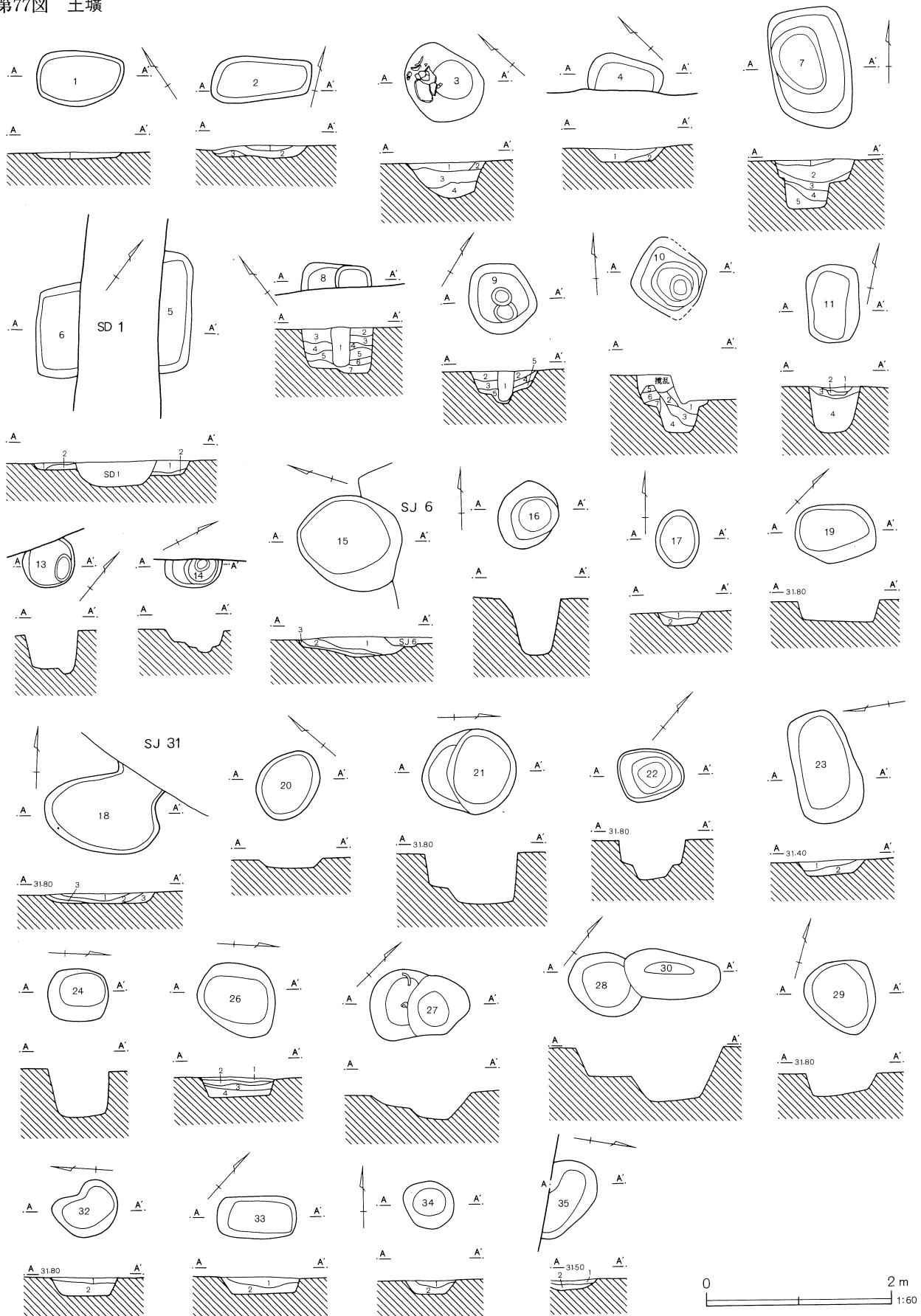
第27号土壙(第77図)

AF-13グリッドで検出された。第26・27・29号住居跡を切っていた。長軸1.06m、短軸0.73m、深さは0.27mで、楕円形であった。

遺物は覆土上層から8・9の土師器甕が出土した。



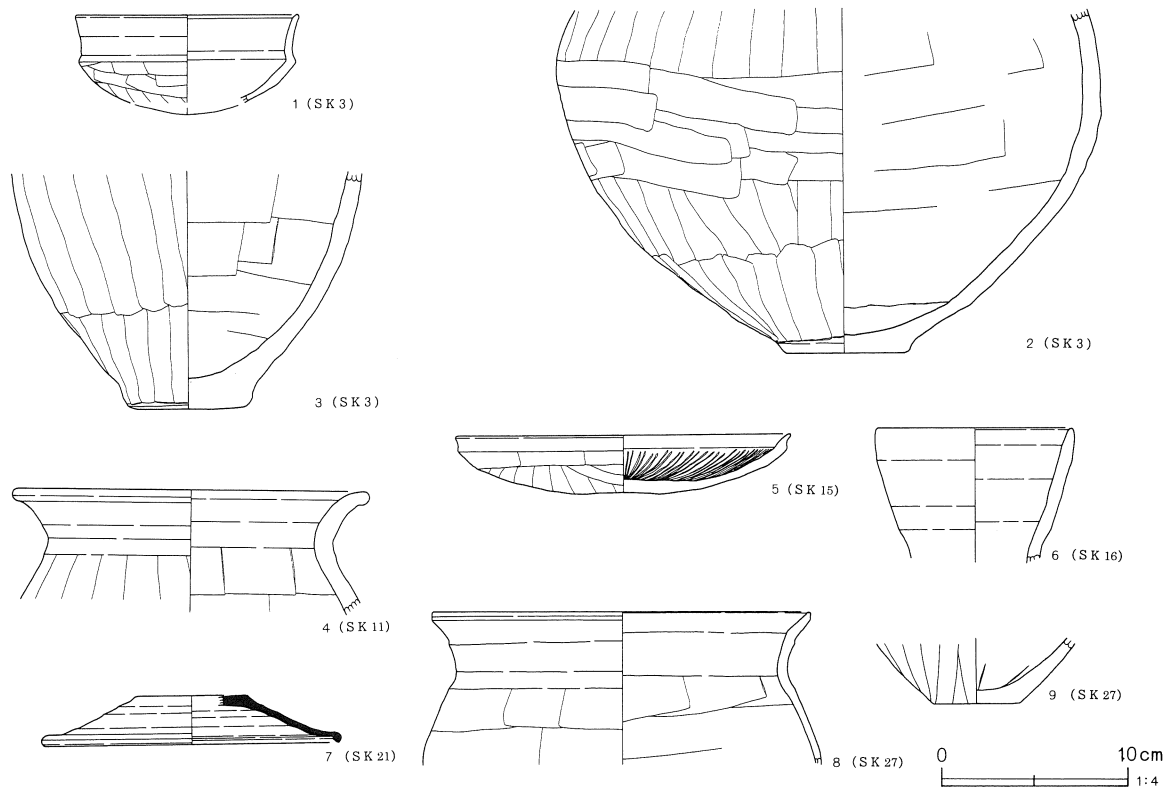
第77図 土壇



- 第1号土壤  
1 淡褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子を微量、白色バミス・炭化物粒子を若干。
- 第2号土壤  
1 淡褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子を微量。  
2 淡褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子を微量。  
3 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを大量。
- 第3号土壤  
1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、白色バミスを微量。  
2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・白色バミスを微量。  
3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。  
4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、黄褐色土ブロックを微量。
- 第4号土壤  
1 淡褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。  
2 淡灰褐色土 黄褐色土粒子を微量。
- 第5・6号土壤  
1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。  
2 淡橙褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子を若干。
- 第7号土壤  
1 暗褐色土 黄褐色土ブロックを微量。  
2 褐色土 黄褐色土ブロックを大量。  
3 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多量。  
4 黄褐色土 黄褐色土ブロックを大量。  
5 暗褐色土 黄褐色土ブロックを大量。
- 第8号土壤  
1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量（柱痕）  
2 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量。  
3 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多量。  
4 黄褐色土 粘性有り。  
5 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量。  
6 黄褐色土 粘性有り。  
7 褐色土 黄褐色土ブロックを大量。
- 第9号土壤  
1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量（柱痕）  
2 暗褐色土 黄褐色土ブロックを微量。  
3 黄褐色土 粘性有り。  
4 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量。  
5 褐色土 黄褐色土ブロックを大量。

- 第10号土壤  
1 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量。  
2 暗褐色土 黄褐色土ブロックを大量。  
3 暗褐色土 黄褐色土ブロックを微量。  
4 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量。  
5 黄褐色土 粘性有り。  
6 暗褐色土 黄褐色土ブロックを微量。  
7 黄褐色土 粘性有り。
- 第11号土壤  
1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、白色バミスを微量。  
2 褐色土 焼土ブロックを少量、炭化物粒子を微量。  
3 褐色土 黄褐色土粒子・白色バミスを微量、焼土粒子を若干。  
4 暗褐色土 黄褐色土ブロックを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 第15号土壤  
1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・焼土ブロックを多量。  
2 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多量。  
3 暗灰褐色土 砂粒を多量。
- 第17号土壤  
1 暗灰褐色土 焼土粒子を少量。  
2 暗灰褐色土 砂粒を少量。
- 第18号土壤  
1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子を微量。  
2 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子を微量。  
3 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 第23号土壤  
1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量、白色バミスを若干。  
2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、褐色砂を微量、白色バミスを若干。
- 第26号土壤  
1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量、白色バミスを若干。  
2 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色バミス・黄褐色砂を微量。  
3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量、白色バミスを若干。  
4 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色砂を微量、白色バミスを若干。
- 第32～34号土壤  
1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。  
2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 第35号土壤  
1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子を微量、炭化物粒子を若干。  
2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・焼土ブロックを微量。

第78図 土壤出土遺物



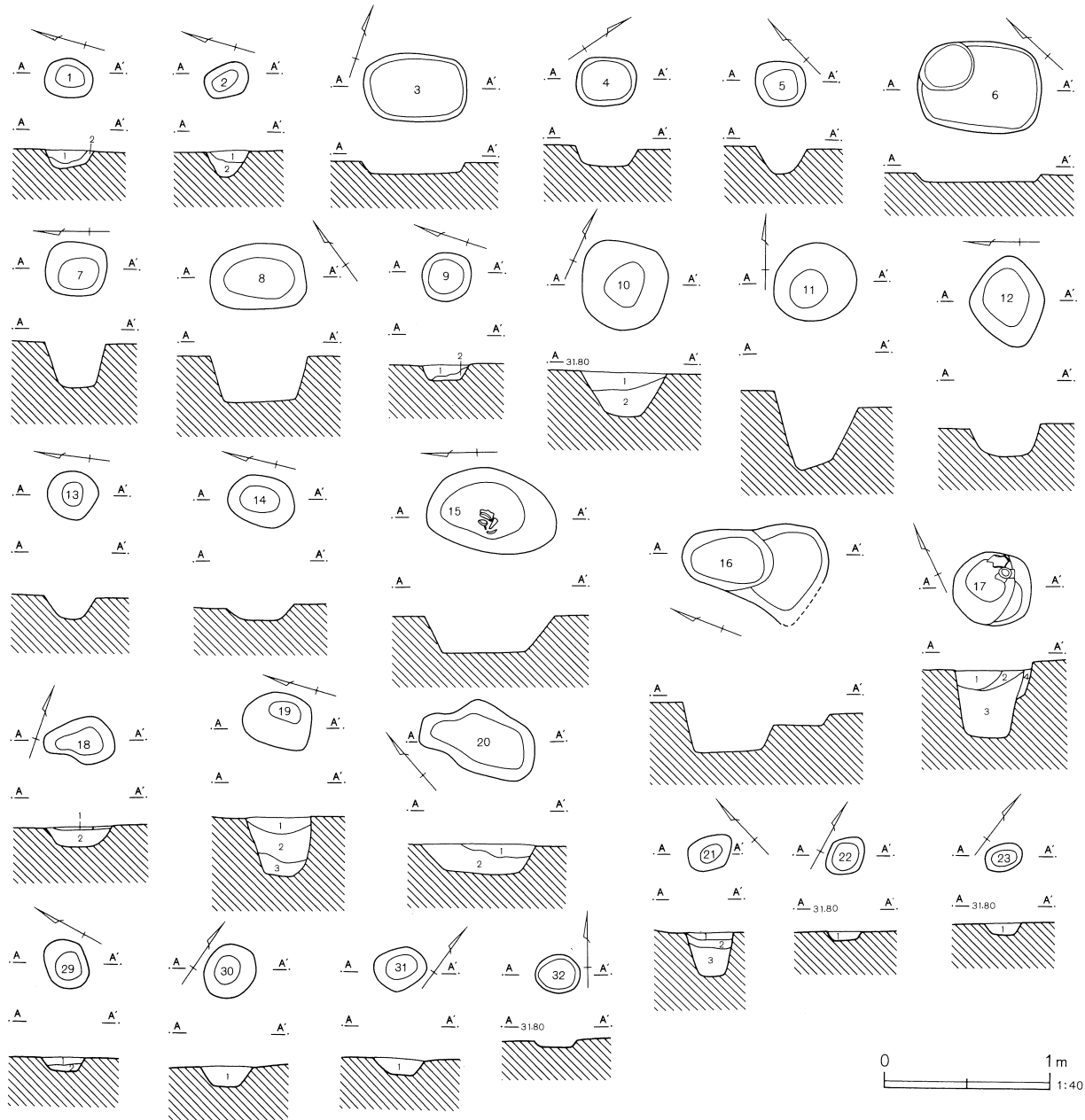
第78図 土壌出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	(3.1)	6.6	C'DGH'	A	橙	15%	SK 3 No. 6
2	壺				C'EH	A	にぶい褐	70%	SK 3 No. 4
3	甕			6.4	BC'DEH	A	橙	50%	SK 3 No. 2、3
4	甕	(19.2)		BC'DEH'	A	浅黄橙	15%	SK11	
5	皿	(18.0)		BC'DH'	A	橙	35%	SK15	
6	埴	(10.4)		BCDGH'	A	橙	25%	SK16	
7	蓋	(16.0)		C'EH'J'	A	灰	10%	SK21 末野産	
8	甕	(20.2)		BC'DG'H'	A	浅黄橙	25%	SK27No. 1	
9	甕			(4.6)	BDFH'	A	にぶい褐	45%	SK27No. 2

第2表 土壌一覧表

番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形態	主軸方位	備考
1	AB13G	0.92	0.60	0.06	長方形	N-51°-W	不明
2	AB13G	1.08	0.50	0.14	長方形	N-76°-E	平安時代
3	AB12G	0.88	0.75	0.37	楕円形	N-1°-W	古墳時代
4	AB13G		0.80	0.15	不明		不明
5	AB12G		1.30	0.16	不明		不明
6	AB12G		1.00	0.08	不明		不明
7	T 6 G	1.30	0.86	0.50	長方形	N-14°-W	平安時代
8	T 7 G		0.75	0.48	不明		平安時代
9	U 7 G	0.76	0.74	0.34	不整円形	N-90°-E	平安時代
10	V 7 G	0.74	0.70	0.61	方形	N-56°-W	出土遺物なし
11	AC12G	0.82	0.56	0.48	長方形	N-15°-W	古墳時代
12							欠番
13	U 7 G		0.56	0.45	円形		平安時代
14	U 7 G		0.60	0.23	不明		平安時代
15	AB11G	1.13	1.00	0.21	不整円形	N-1°-E	平安時代
16	AB11G	0.72	0.60	0.59	不整円形	N-14°-E	古墳時代
17	AA11G	0.62	0.46	0.14	楕円形	N-2°-W	平安時代
18	AG14G		1.25	0.10	楕円形		不明
19	AF14G	0.86	0.63	0.23	長方形	N-50°-E	平安時代
20	AC11G	0.78	0.62	0.10	楕円形	N-82°-E	不明
21	AF13G	1.00	0.91	0.54	不整円形	N-4°-W	平安時代
22	AF13G	0.68	0.55	0.42	楕円形	N-49°-E	不明
23	AF13G	1.20	0.70	0.16	長方形	N-90°-E	不明
24	AF13G	0.65	0.56	0.50	楕円形	N-5°-E	平安時代
25							欠番
26	AF13G	0.88	0.73	0.22	不整円形	N-2°-W	平安時代
27	AF13G	1.06	0.73	0.27	楕円形	N-44°-E	平安時代
28	AF14G	0.80	0.66	0.30	楕円形	N-88°-W	不明
29	AF14G	0.82	0.72	0.24	不整円形	N-40°-W	平安時代
30	AF14G	1.00	0.52	0.57	楕円形	N-57°-E	不明
31							欠番
32	AG14G	0.65	0.52	0.19	不整円形	N-6°-W	平安時代
33	AD13G	0.84	0.45	0.18	長方形	N-48°-E	古墳時代
34	AD13G	0.57	0.50	0.14	円形	N-57°-W	出土遺物なし
35	AF14G		0.82	0.12	不明		平安時代

第79図 ピット



P 1

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子・白色バミスを微量。
- 2 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量。

P 2

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子・白色バミスを微量。
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、白色バミスを若干。

P 9

- 1 暗灰褐色土 焼土粒子を少量。
- 2 暗褐色土 砂粒を微量。

P 10

- 1 暗褐色土 砂粒を微量、焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを若干。
- 2 暗褐色土 砂礫・焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量。

P 17

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子を微量、炭化物粒子を若干。
- 2 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 4 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子を微量、炭化物粒子を若干。

P 18

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子を微量、炭化物粒子を若干。

P 19

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロック・白色バミスを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 2 褐色土 黄褐色土ブロックを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

P 20

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロック・白色バミスを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

P 21

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロック・白色バミスを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 2 褐色土 黄褐色土ブロックを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

P 22

- 1 褐色土 黄褐色土ブロックを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

P 23

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロック・白色バミスを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

P 29

- 1 褐色土 黄褐色土ブロックを微量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
- 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

P 30

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

P 31

- 1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を若干。

e、ピット(第79図)

今回の調査で検出されたピットの総数は27本であった。時代が判別できたのは以下の7本だけで、他の20本は不明である。P1・3が古墳時代後期で、P8・10・11・15・17の5本が平安時代であった。

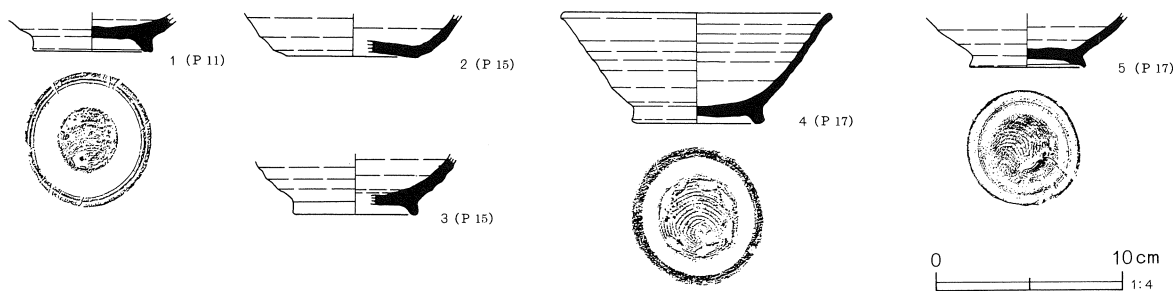
遺物が出土したものは少なく、出土したとしても小破片が多い。実測できた遺物は須恵器だけである。

1はP11から出土した。末野産の高台坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。

2・3はP15から出土した。2の坏は南比企産で、内面に火襷痕が認められる。3の坏は末野産である。2点とも底部の切り離しは回転糸切りである。

4・5はP17から出土した。末野産である。

第80図 ピット出土遺物



第80図 ピット出土土器観察表

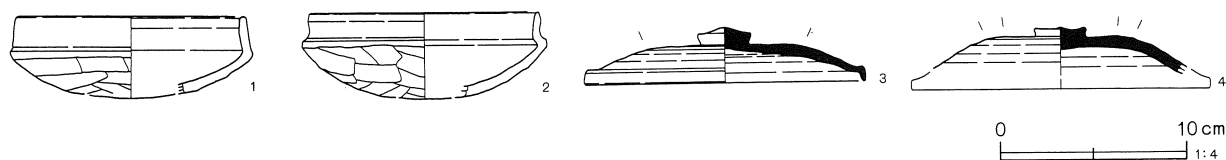
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高台坏			6.4	C'H'J	A	灰	85%	ピット11 末野産
2	坏			(7.0)	ADH'	A	灰	25%	ピット15No.5 内面火襷痕あり 南比企産
3	高台坏			(6.6)	BCDH'	A	灰	35%	ピット15No.1 末野産
4	高台坏	(14.4)	5.8	7.1	C'G'H'I	A	灰	40%	ピット17No.2 末野産
5	高台坏			6.2	C'EH'I'J'	A	灰	65%	ピット17 末野産

f、表採(第81図)

ここに掲載された遺物で、1～3は調査区内から出土したが遺構の所属が明らかでない土器である。4は橋を挟んだ向かいの水田から農作業中に出土したもの

である。3・4は須恵器の蓋で、末野産である。3は焼成があまり良くない。天井部の調整は回転ヘラ削りで、紐はボタン状である。4は口縁部を欠損する。天井肩部にのみ回転ヘラ削り調整を行う。

第81図 表採遺物



第81図 表採土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)			BCDGH'	A	橙	15%	
2	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	橙	40%	
3	蓋	(15.0)	(2.9)		C'EGH'	C	灰黄	40%	末野産
4	蓋				C'EH'I	A	青灰	65%	末野産

### g、鉄製品(第82図)

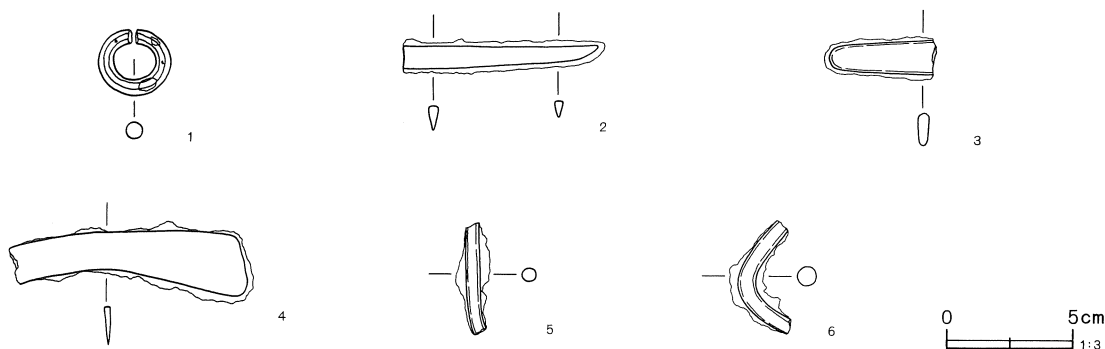
1は金銅製の耳環であるが、金は剥落していた。大きさは長さ2.9cm、幅2.6cm、厚さが0.7cmである。中実で、重さは16.0g。第41号住居跡の覆土から出土した。

2・3は刀子片である。2は刀身片で、茎を欠損する。現存長7.8cm、刃部幅1.0cm、峰の幅0.4cmである。第20号住居跡の覆土から出土した。3は刀身部を欠損した茎片である。現存長4.2cm、茎部幅1.4cm、峰の幅12.5cmで、重さは12.5gであった。第44号住居跡の覆土から出土した。

4は鎌で、刃の先端を欠損している。錆化が著しいため柄の装着部分の形状はよくわからなかった。現存長9.5cm、刃部幅1.5cm、峰の幅0.3cmで、重さは36.1g。第20号住居跡の覆土から出土した。

5・6は用途不明の棒状鉄製品である。5は両端を欠損しており、断面は円形である。紡錘車の軸の可能性も考えられる。現存長4.5cm、径0.6cm、重さは7.5gである。6は大きく湾曲しており、両端を欠損している。断面は円形である。現存長4.5cm、径0.8cm、重さは9.7gである。2点とも第39号住居跡の覆土から出土した。

第82図 鉄製品



第82図 出土鉄製品観察表

番号	種類	大きさ(cm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	耳環	2.9 × 2.6 × 0.7	16.0	第41号住居跡	金銅製
2	刀子	(7.8) × 1.0 × 0.4	(16.3)	第20号住居跡	茎を欠く
3	刀子	(4.2) × 1.4 × 0.5	(12.5)	第44号住居跡	茎片
4	鎌	(9.5) × 1.5 × 0.3	(36.1)	第20号住居跡	刃の先端を欠損する
5	不明	(4.5) × 0.6	(7.5)	第39号住居跡	棒状鉄製品
6	不明	(4.5) × 0.8	(9.7)	第39号住居跡	

### h、石製品(第83図)

1は滑石製の白玉である。造りはやや粗雑で、欠損している。第20号住居跡の覆土から出土したが、本来の所属は1号床下土層と思われる。

2・3は滑石製の紡錘車である。2は造りが丁寧で表面が平滑である。重量感がある。底面には擦痕が認められる。第43号住居跡の床面から出土した。3も造りは丁寧である。半分欠損している。側面には線刻の文字が認められ、「田」と判読できる。上に線が突きだしているため「由」とも判読できるが、意識して引かれたものではないと判断した。欠損した部分にも続けて

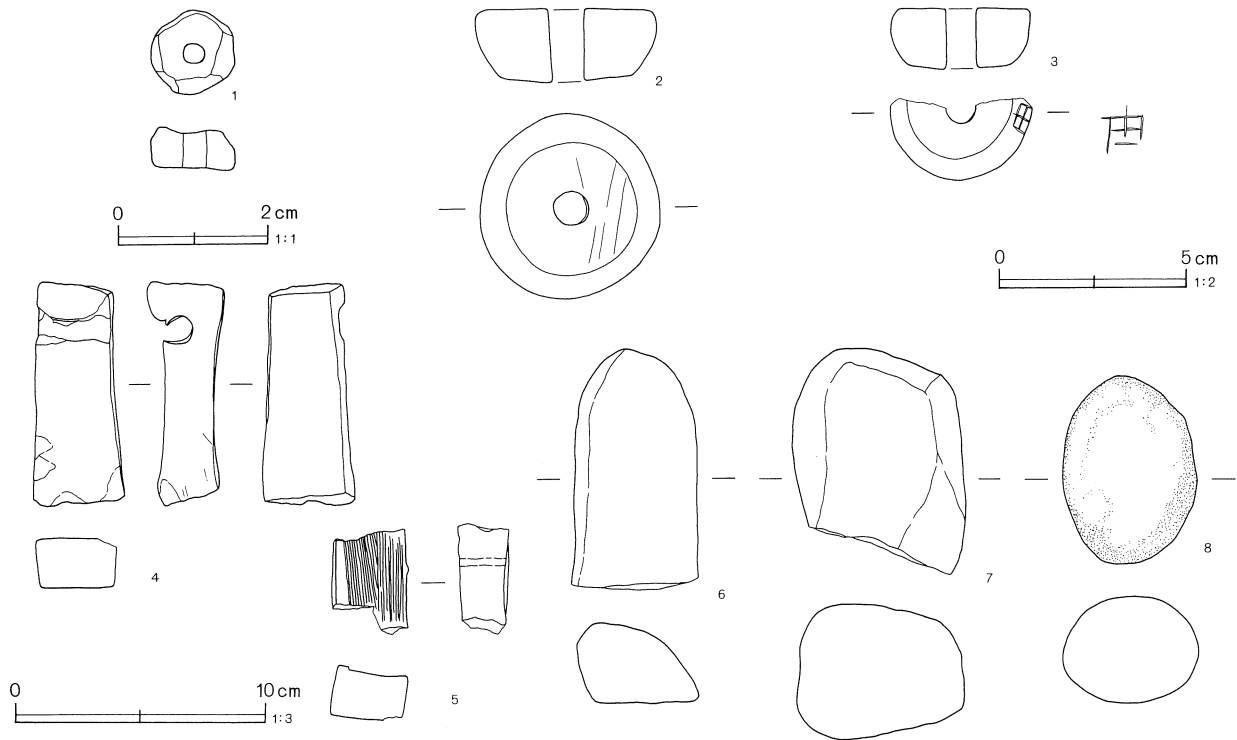
文字が線刻されていたものと思われる。第44号住居跡の覆土から出土した。

4・5は砥石である。4は凝灰岩製の下げ砥で、穿孔部分は欠損している。擦痕は明瞭には認められなかった。第6号住居跡の覆土から出土した。5も凝灰岩製で、大半が欠損している。1面にのみ使用による擦痕が認められる。第36号住居跡から出土した。

6・7は編物石で、第20号住居跡から出土した。

8は磨石と思われる。擦痕は認められなかった。第14号住居跡の床面から出土した。

第83図 石製品



第83図 出土石製品観察表

番号	種類	大きさ(cm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	白玉	1.1 × (0.6)	(1.5)	第20号住居跡	滑石製
2	紡錘車	1.9 × 4.8 × 3.5	75.5	第43号住居跡	滑石製
3	紡錘車	1.6 × (3.7) × (2.8)	(21.3)	第44号住居跡	滑石製 「田」の線刻
4	砥石	8.8 × 3.6 × 2.0	119.0	第6号住居跡	凝灰岩 上部に穿孔
5	砥石	(4.1) × 3.0 × 2.2	(33.8)	第36号住居跡	凝灰岩
6	編物石	9.4 × 4.9 × 3.3	275.2	第20号住居跡	閃緑岩
7	編物石	8.9 × 6.9 × 5.4	472.4	第20号住居跡	砂岩
8	磨石	7.3 × 5.4 × 4.2	208.6	第14号住居跡	多孔質安山岩

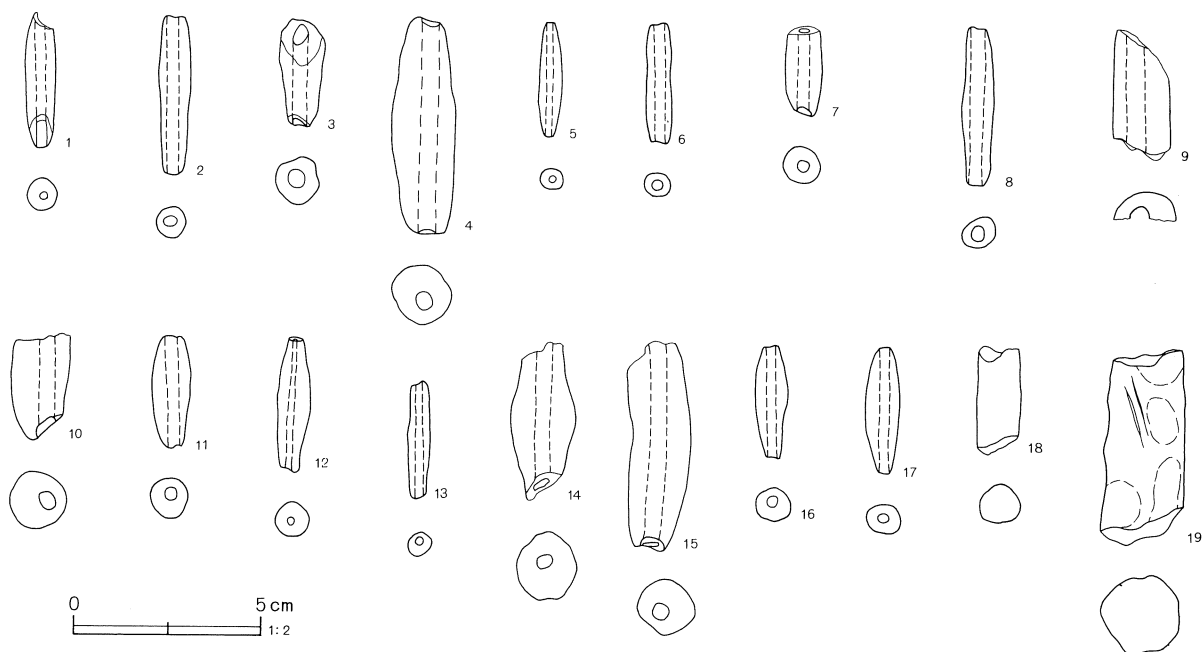
## i、土製品(第84図)

土錘は全部で17点出土した。1軒の住居跡から一番出土したものは第10号住居跡からの4点が最高である。第12・13号住居跡からも5点が出土しているが何れの遺構に伴うものかは不明である。1～17はすべて管状の土錘で、大形のものや小型のものがある。欠損品が多い。大形の中位が膨らむものが主体を

占める。

18・19は用途不明の棒状土製品で、両端を欠損している。土錘の未製品とも考えられる。18は胎土に含有物をほとんど含んでおらず、土錘の製品とは明らかに異質である。第14号住居跡の覆土から出土した。19には指頭圧痕が認められる。第26号住居跡の覆土から出土した。

第84図 土製品



第84図 出土土製品観察表

番号	種類	大きさ(cm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	土 錘	(3.6) × 0.8	(2.1)	第10号住居跡	浅黄橙色
2	土 錘	4.3 × 0.9	2.4	第10号住居跡	にふい褐色
3	土 錘	(2.8) × 1.2	(2.9)	第10号住居跡	にふい橙色
4	土 錘	5.7 × 1.7	15.0	第10号住居跡	にふい褐色
5	土 錘	3.0 × 0.6	1.2	第12・13号住居跡	浅黄橙色
6	土 錘	3.2 × 0.7	1.8	第12・13号住居跡	にふい褐色
7	土 錘	(2.4) × 1.0	(2.9)	第12・13号住居跡	橙色
8	土 錘	4.2 × 0.8	3.1	第12・13号住居跡	黒褐色
9	土 錘	(3.5) × (1.5)	(5.2)	第12・13号住居跡	にふい橙色
10	土 錘	(2.7) × 1.5	(7.0)	第21号住居跡	にふい橙色
11	土 錘	3.0 × 1.0	2.8	第24号住居跡	にふい褐色
12	土 錘	3.1 × 0.9	3.0	第24号住居跡	浅黄橙色
13	土 錘	3.1 × 0.6	1.3	第30号住居跡	浅黄橙色
14	土 錘	(3.2) × 1.7	(11.1)	第36号住居跡	黒褐色
15	土 錘	(5.5) × 1.5	(15.4)	第36号住居跡	にふい褐色
16	土 錘	3.0 × 0.9	2.2	第13号土壌	にふい橙色
17	土 錘	3.3 × 0.9	2.4	AE14グリッド	にふい褐色
18	不 明	(2.9) × 1.2	(3.0)	第14号住居跡	棒状土製品 浅黄橙色
19	不 明	(5.2) × 2.1	(28.2)	第26号住居跡	棒状土製品 橙色



## V 根岸遺跡の調査

### 1 遺跡の概観

根岸遺跡は、櫛引台地寄居面の先端部から妻沼低地にひろがる遺跡である。遺跡の大半を占める台地部と北端の低地部とは遺跡の性格が異なる。遺跡の範囲は9ha以上と南北に広大で、北緯36°11'50"、東経139°18'40"に位置している。本遺跡の範囲内には木の本古墳群第1・2・6号墳が位置している。木の本古墳群は現存している円墳が12基認められるが、かつては約30～40基からなる古墳群を形成していたものと考えられている。古墳群の年代は6～7世紀である。東は宮ヶ谷戸遺跡、南西へ約550mには深谷上杉氏が根城とした疋鼻和城跡などの遺跡が位置する。根岸遺跡は深谷市教育委員会によって台地北端部分が調査されており、縄文時代中期の住居跡2軒、縄文時代中期～後期の土壙21基などがこれまでに検出されている。

今回の調査地点は福川の左岸の沖積地に位置し、本遺跡範囲の最北端にあたる。標高は31.3mで、台地部との比高差は約3mである。調査面積は2,200m<sup>2</sup>であった。調査範囲は福川に沿って東西に長く、発掘調査は橋を挟んで東地区と西地区に分けて行った。今回の報告にあたって2地区で検出された遺構を新しく通し番号にふりなおした。今回の調査区は旧福川の氾濫原であり遺構の検出は困難を極めた。今回検出された遺構で一番古く遡るものが平安時代のものであることから、その時期には河川の埋没が進みこの荒れた土地も可耕地として利用できるまでに落ち着きをもつに至ったものと思われる。時期は若干異なるが、同様の例は北へ約1kmに位置する本郷前東遺跡でも確認されている。しかし平安時代以降も居住地としての痕跡はまったくみられない。

基本土層は第23・24号溝の覆土と共に第91図に示した。現地表面から0.64m下の位置に浅間A軽石層が、1.30m下に浅間B軽石層が確認できた。浅間A軽石層は天明3(1783)年、浅間B軽石層が天仁元(1108)年に浅間山が噴火したときの火山灰層である。浅間B軽石

層上面が今回の遺構確認面であった。また、他地点ではあるが遺構確認面から50～60cm下に榛名山二ツ岳火山灰(FA、6世紀初頭降下)も確認された。

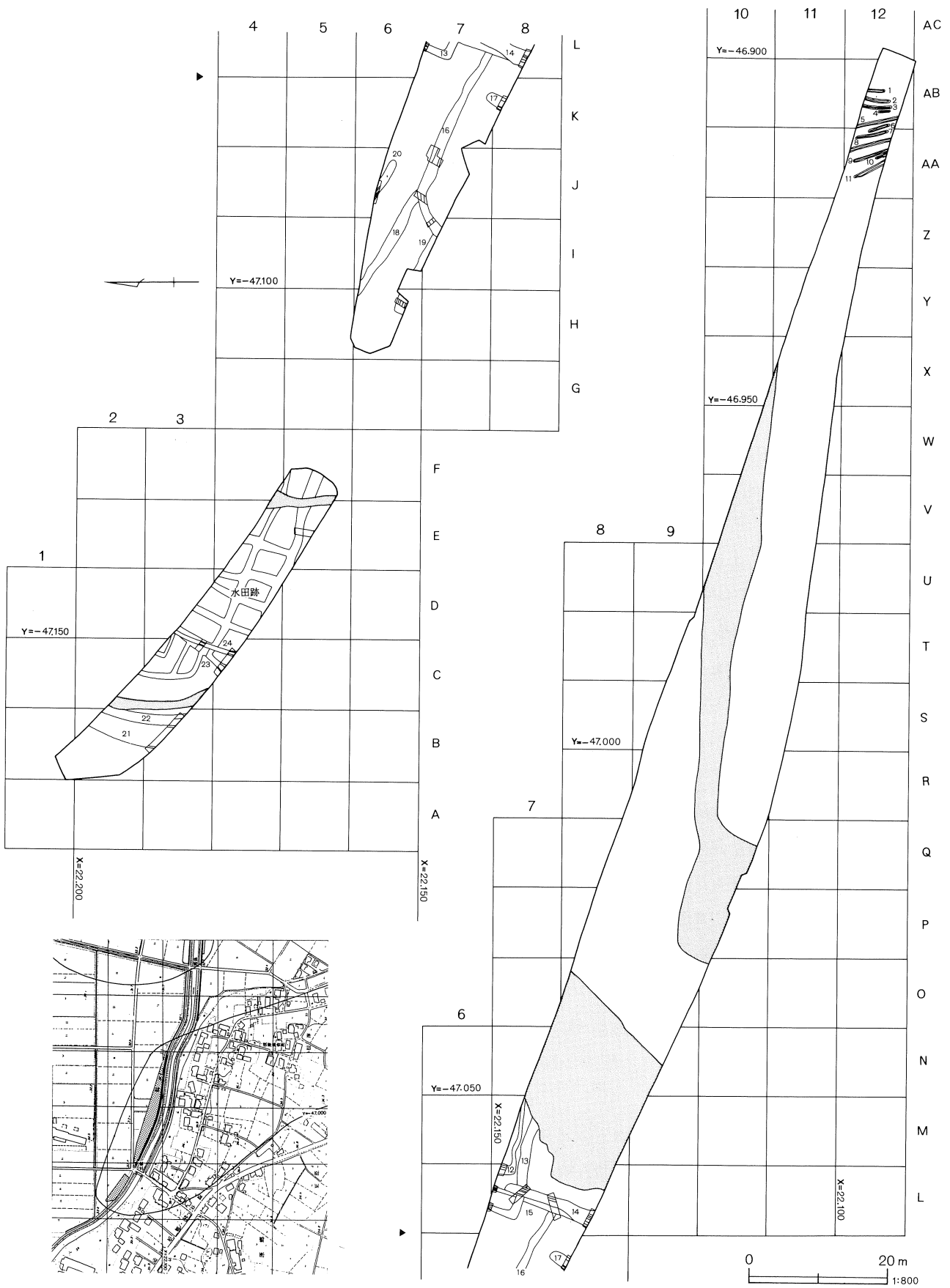
検出された遺構は、中世から近世にかけての溝が24条、平安時代の水田跡1面であった。溝には畝状の遺構である第1～11号溝も含まれている。今回の調査では古墳時代中期以前の遺構・遺物は出土しなかった。

溝は南一北方向に走行するものと、これに直行するものがあつた。第1～11号溝は調査区東側の微高地部分で検出された。約1m前後の間隔で、南一北方向に平行して掘削されていた。形状から畑の畝と考えられた。出土遺物はなかったが、本遺構は覆土の観察などから近世以降のものと考えられる。他の溝も遺物が出土しなかった。そのため各遺構の詳細な時期および性格は不明であるが、基本土層から判断すると中世から近世にかけて掘削されたものと思われる。

水田跡は調査区西側で検出された。旧福川の流路に沿っており、水田面は約5m四方の不整形区画が2列に並んで、総数14枚が検出された。畦畔の検出は遺構確認面を掘り下げ過ぎたため、水田面に沈下した痕跡部分だけが確認できた。調査区壁の断面から高さは0.10m前後であったことがわかった。北側では旧河道の埋没土を一部掘り込んでいた。水田跡からの出土遺物はなかった。本遺構は浅間B軽石層直下から検出されたことから概ね平安時代のものといえる。

根岸遺跡から出土した遺物は土師器の甕1、壺1と第21号溝の上面から出土した板碑だけである。その他に土師器・須恵器・陶磁器片が少量出土したが、大半が旧河道の埋没土中からであり、摩滅が著しく実測は不可能であった。遺構に確実に伴うといえる遺物は出土しなかった。土師器の大形の甕は第16号溝下の旧河道埋没土中から出土した。壺はAA-12グリッドで検出され、胴部上半を欠損している。板碑は緑泥片岩製で、下半を欠損している。

第85図 根岸遺跡全体図



## 2 古墳時代以降の遺構と遺物

### a、溝

#### 第1～11号溝(第86図)

AA-12、AB-12グリッドにかけて検出された。南北は調査区外に延びていたため全体を調査することができなかった。11条の溝が0.07～1.34mの間隔で南—北方向に平行して走っていた。畑の畝と思われたが確認を得ることができなかった。幅25～50cmで、深さは4～28cmとややばらつきがある。形態も調査区外に延びる長いものと1.8m等と短く切れるものがあった。

遺物はまったく出土しなかった。

本遺構の時期は、西に0.80mいった遺構確認面から古墳時代後期の土師器の壺が出土していることから、遺物からは古墳時代後期以降と考えられる。また、覆土の状態からは近世以降と考えられた。

#### 第12号溝(第87図)

L-7、M-7グリッドにかけて検出された。東側を攪乱に壊されており、北と東は調査区外に延びていた。調査区壁から南に走行したのち東に強く屈曲していた。幅1.40m、深さは0.70mであった。

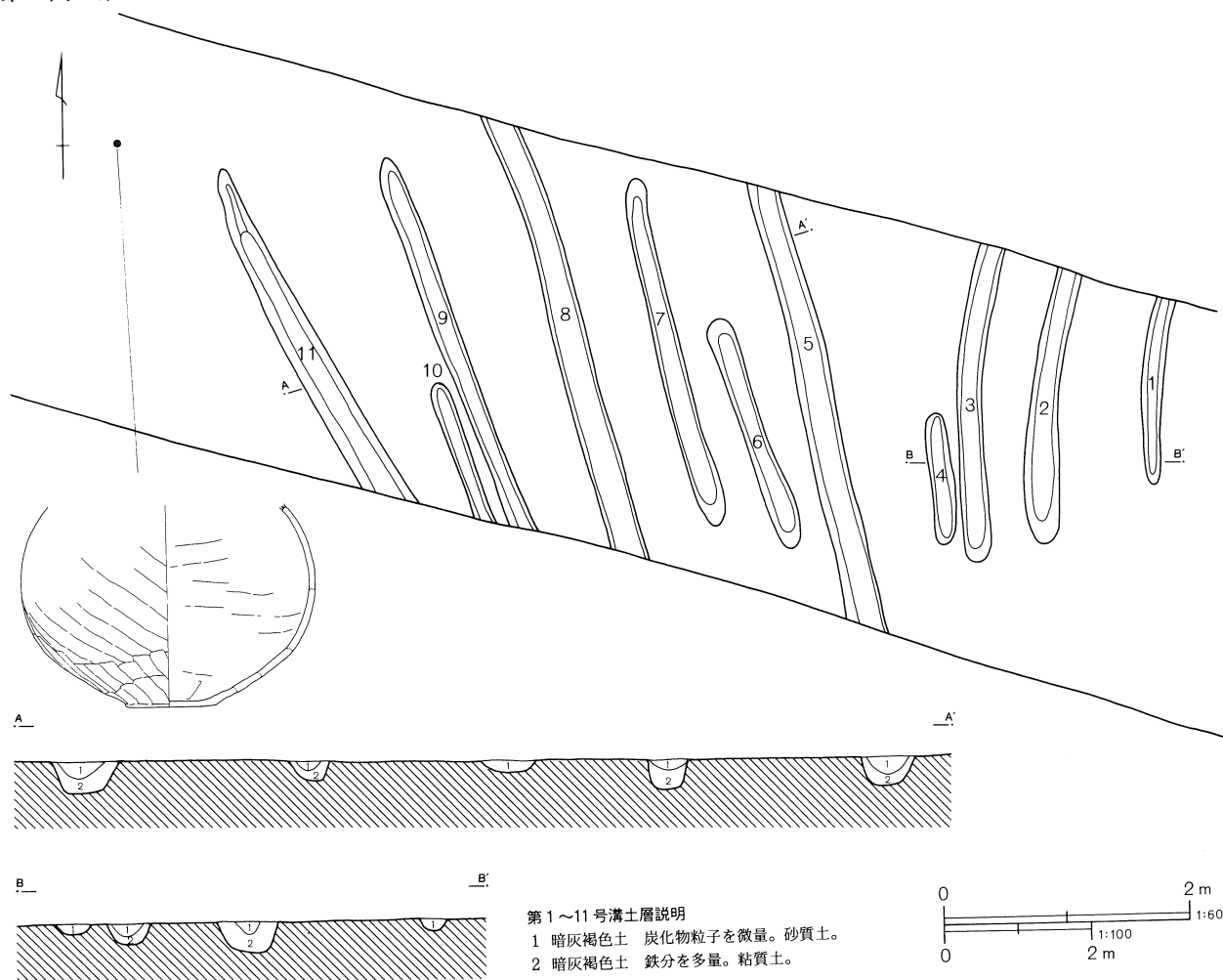
遺物は出土しなかった。

#### 第13号溝(第87図)

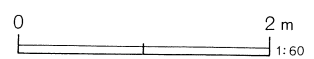
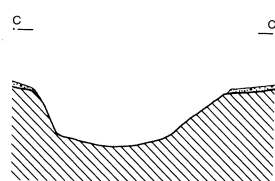
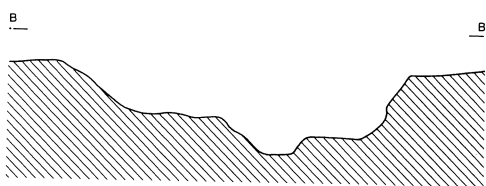
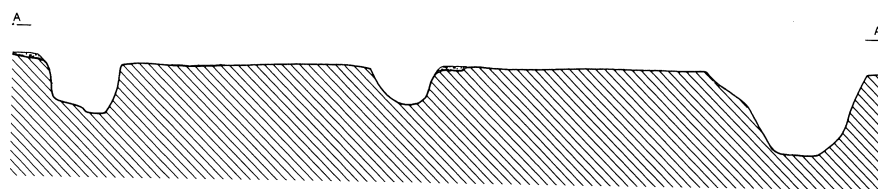
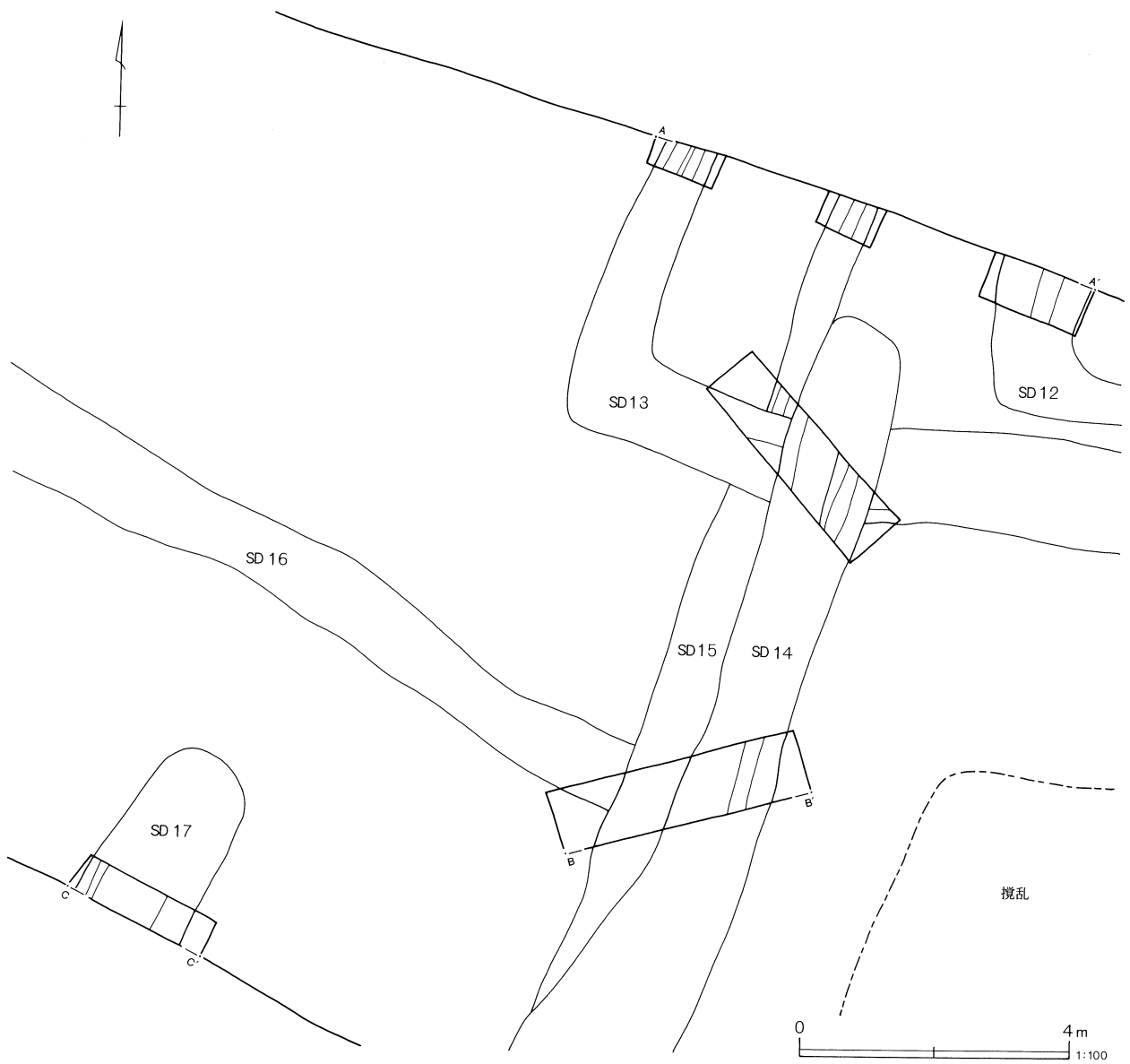
L-7、M-7グリッドにかけて検出された。東側を攪乱に壊されており、北は調査区外に延びていた。第15号溝を切り、第14号溝に切られていた。調査区壁から南に走行したのち東に屈曲し、第12号溝と平行していた。幅0.78m、深さは0.48mであった。

遺物は出土しなかった。

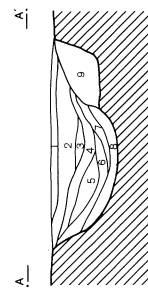
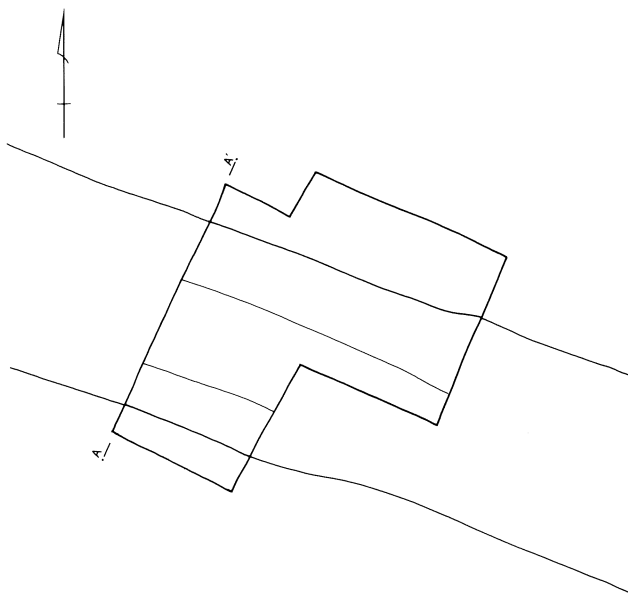
第86図 第1～11号溝



第87图 第12~17号沟

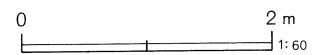


第88図 第16号溝

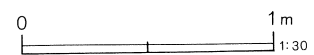
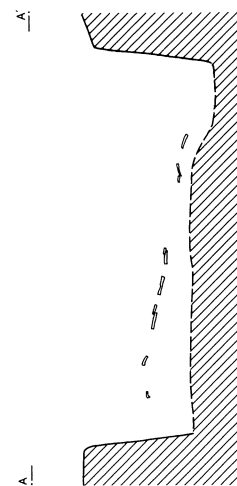
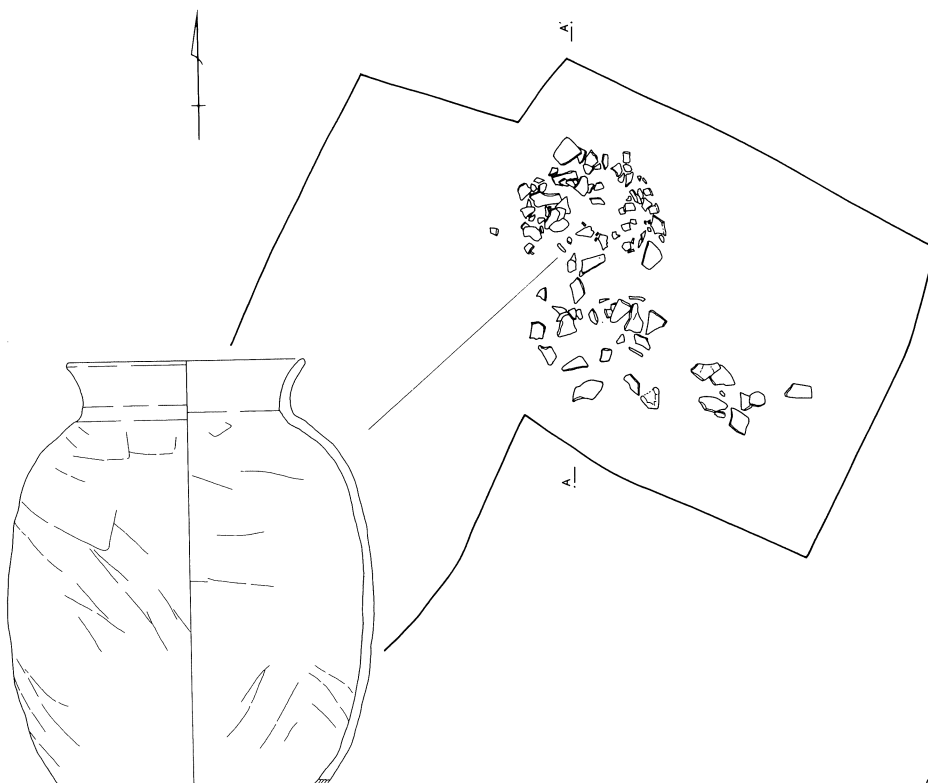


第16号溝土層説明

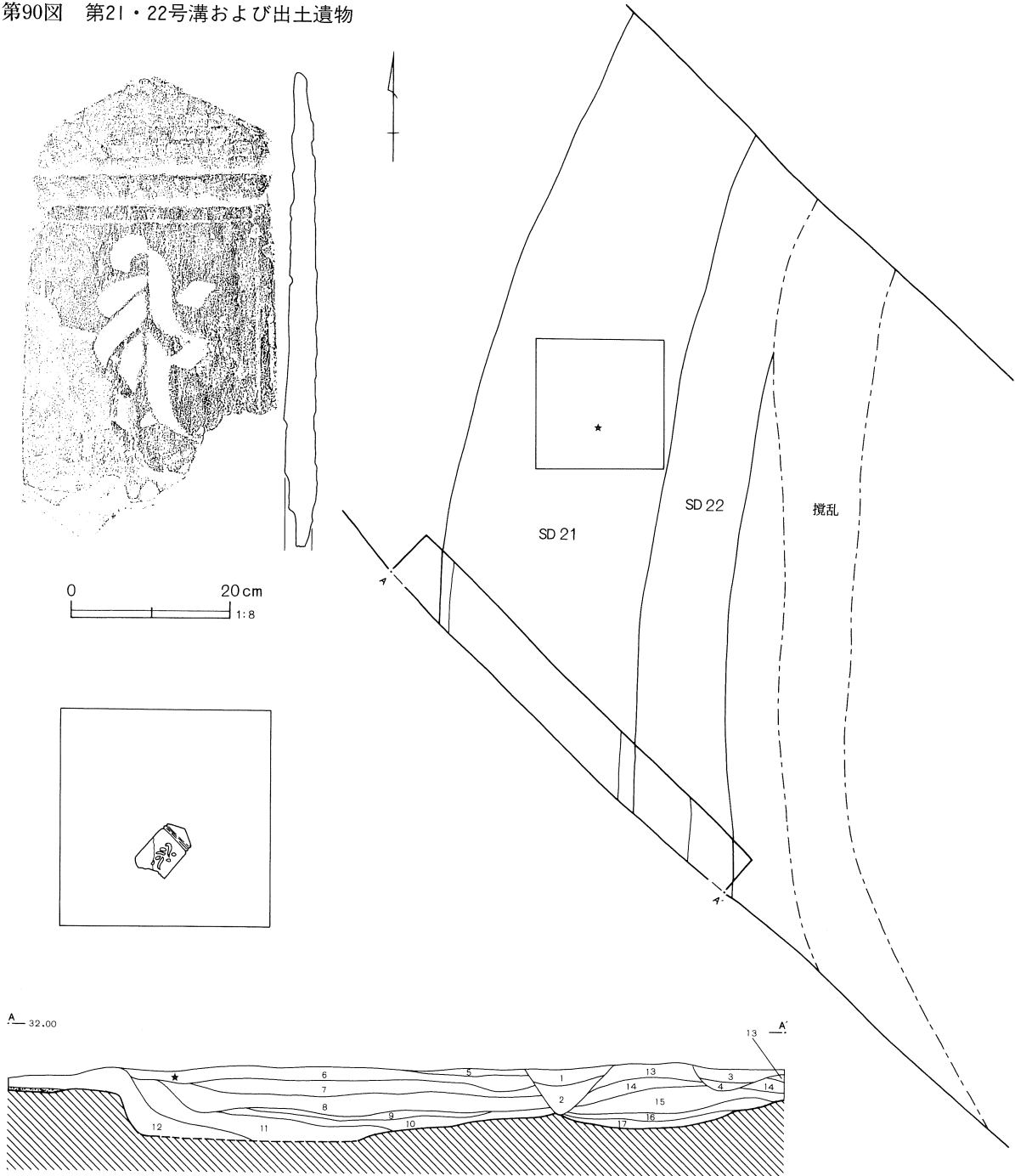
- 1 灰褐色土 鉄分を多量、白色バミスを微量。粘質土。
- 2 暗灰褐色土 鉄分を多量、白色バミスを微量。粘質土。
- 3 暗灰褐色土 粘質土。
- 4 暗灰褐色土 鉄分を少量。シルト質土。
- 5 暗灰褐色土 黄褐色土ブロックを微量。粘質土。
- 6 暗灰色土 粘質土。
- 7 暗灰色土 鉄分を多量。粘質土。
- 8 灰色土 黄褐色土ブロックを微量。粘質土。
- 9 灰褐色土 白色バミスを微量。粘質土。



第89図 第16号溝遺物出土状況

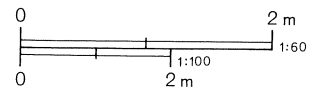


第90図 第21・22号溝および出土遺物



第21・22号溝土層説明

- |                                  |                    |
|----------------------------------|--------------------|
| 1 灰紫色土 粘質土 (近代溝覆土)               | 11 暗灰褐色土 礫を微量。粘質土。 |
| 2 暗灰褐色土 焼土粒子・小礫を微量。シルト質土 (近代溝覆土) | 12 暗灰色土 粘質土。       |
| 3 灰紫色土 粘質土 (近代溝覆土)               | 13 黄灰褐色土 シルト質土。    |
| 4 茶褐色土 鉄分を多量。粘質土 (近代溝覆土)         | 14 灰褐色土 粘質土。       |
| 5 灰紫色土 粘質土。                      | 15 灰褐色土 シルト質土。     |
| 6 暗灰褐色土 鉄分の沈着が認められる。粘質土。         | 16 灰色土 粘質土。        |
| 7 茶褐色土 鉄分を多量。粘質土。                | 17 灰褐色土 シルト質土。     |
| 8 茶褐色土 鉄分を多量。焼土粒子を少量。粘質土。        |                    |
| 9 茶褐色土 小礫を微量。鉄分が帯状に堆積する。砂質土。     |                    |
| 10 灰褐色土 粘質土と砂質土の互層。              |                    |



**第14号溝(第87図)**

L-7・8グリッドにかけて検出された。南側は調査区外に延びていた。第13・15号溝を切っていた。幅2.45m、深さは0.69mであった。

遺物は出土しなかった。

**第15号溝(第87図)**

L-7・8グリッドにかけて検出された。北側は調査区外に延びていた。第16号溝を切り、第13・14号溝に切られていた。幅0.60m、深さは0.35mであった。第14号溝と重複する部分が多かった。

遺物は出土しなかった。

**第16号溝(第87～89図)**

I-7、J-6・7、K-7、L-7グリッドにかけて検出された。南側は調査区外にかかり調査できなかった。第18・19号溝を切り、第15号溝に切られていた。調査区壁から北方向に走行したのち東に緩やかに屈曲していた。幅1.60m、深さは0.53mであった。

遺物は出土しなかった。

ほかに溝下の旧河道の埋没土中から土師器の大形の甕の破片が散乱した状態で出土した。

**第17号溝(第87図)**

K-7・8グリッドにかけて検出された。南側は調査区外に延びていた。幅1.70m、深さは0.62mであった。立ち上がりの肩の部分には浅間B軽石層が認められた。

遺物は出土しなかった。

**第18号溝(第85図)**

H-6、I-6、J-6・7グリッドにかけて検出された。北側は調査区外に延びており、第16号溝に切られていた。北西-南東方向に走行していた。幅1.30m、深さは0.39mであった。

遺物は出土しなかった。

**第19号溝(第85図)**

H-6、I-6・7グリッドにかけて検出された。南側は調査区外にかかるため規模は不明である。第16号溝に切られていた。深さは0.64mであった。

遺物は出土しなかった。

**第20号溝(第85図)**

J-6グリッドで検出された。北側は調査区外に延びていた。幅0.80m、深さは0.30mであった。

遺物は出土しなかった。

**第21号溝(第90図)**

B-2・3グリッドにかけて検出された。北と南は調査区外に延びていた。南-北方向に走行しており、第22号溝を切っていた。幅3.20m、深さは0.45mであった。

遺物は覆土上面から板碑が出土した。板碑は緑泥片岩製で、下半を欠損している。現存長59.2cm、幅31.6cm、厚さは3.7cmである。二条線と杵線が明瞭に認められる。種子は阿弥陀(キリーク)一尊。

**第22号溝(第90図)**

B-2・3、C-2グリッドにかけて検出された。西側を第21号溝に、東側を攪乱に壊されていた。走行方向は第21号溝とほぼ同じくする。幅1.90m、深さは0.40mであった。

遺物は出土しなかった。

**第23号溝(第91図)**

C-3・4グリッドにかけて検出された。南側は調査区外に延び、第24号溝に切られていた。調査区壁から北東方向に走行したのち東に屈曲し、第24号溝と合流していた。幅1.18m、深さは0.13mであった。

遺物は出土しなかった。

**第24号溝(第91図)**

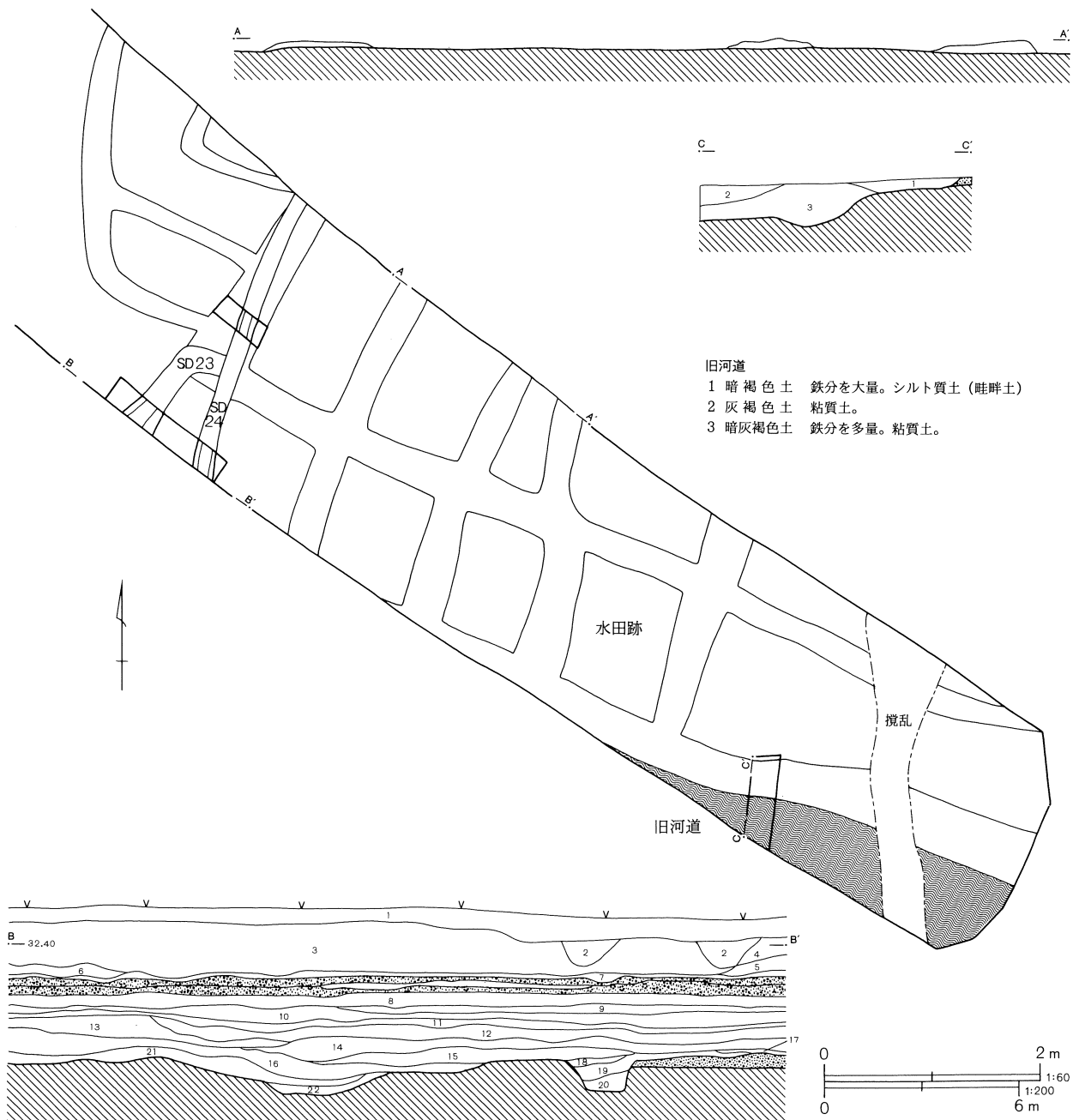
C-3・4、D-3グリッドにかけて検出された。北と南は調査区外に延びていた。南-北方向に走行しており、第23号溝を切っていた。幅0.70m、深さは0.30mであった。

遺物は出土しなかった。

**b、水田跡(第91図)**

C-2～4、D-3・4、E-4・5、F-4・5グリッドにかけて検出され、調査区外の北側に広がっている。東側を攪乱に、西側を第23・24号溝に壊されていた。南側は旧河道の埋没土を掘り込んでいた。

第91図 水田跡 第23・24号溝



第23・24号溝土層説明

- |                       |                               |
|-----------------------|-------------------------------|
| 1 黄褐色土 現耕作土。          | 13 暗黄灰褐色土 鉄分を多量。              |
| 2 暗褐色土 (近代溝覆土)        | 14 暗灰褐色土 鉄分を多量。シルト質土。         |
| 3 暗褐色土 天地返しされた層。      | 16 暗灰褐色土 砂質土と粘質土の互層。          |
| 4 暗褐色土 暗褐色土をブロック状に含む。 | 17 暗灰色土 粘質土。                  |
| 5 灰褐色土 砂礫層。           | 18 暗灰色土 粘質土(第24号溝覆土)          |
| 6 灰紫色土 粘質土。           | 19 黒褐色土 鉄分の沈着層。シルト質土(第24号溝覆土) |
| 7 緑灰褐色土 鉄分の沈着層。粘質土。   | 20 暗黄褐色土 粘質土(第24号溝覆土)         |
| 8 暗灰褐色土 粘質土。          | 21 暗灰褐色土 鉄分を多量。粘質土(第23号溝覆土)   |
| 9 暗黄灰褐色土 鉄分の沈着層。粘質土。  | 22 暗灰色土 粘性が強い(第23号溝覆土)        |
| 11 灰紫色土 粘質土。          |                               |
| 12 暗灰褐色土 鉄分の沈着層。粘質土。  |                               |



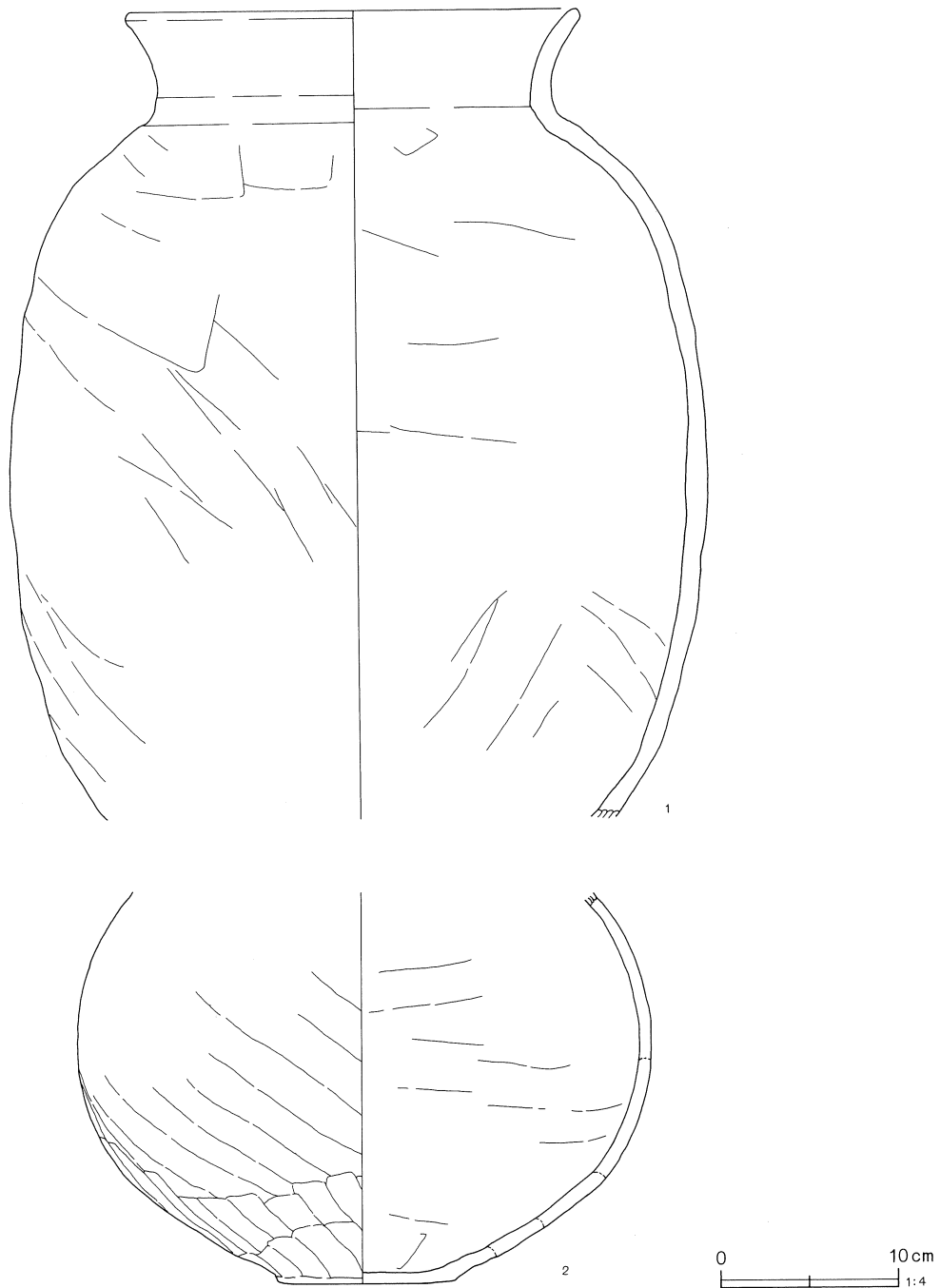
水田跡は浅間B軽石層の直下で検出された。浅間B軽石層は天仁元(1108)年に浅間山が大噴火した時の火山灰層である。水田面は福川の旧河道に沿う形で5～6m四方の不整形の区画が2列に並び、計14枚検出された。一番大きいもので南北8.2m、東西6.7mで、54.9㎡あった。床面はほぼ平坦で、耕作土は確認できなかった。畦畔の検出は水田面に沈下した痕跡部分に

留まった。幅は1.4～3.2mであった。高さは調査区壁の断面から0.10m前後であったことが確認できた。

遺物は出土しなかった。

本遺構の時期は、水田面直上に堆積した浅間B軽石層が認められたことから平安時代末の12世紀初頭以前であり、それからあまり上ることはないと思われる。

第92図 根岸遺跡出土遺物



c、出土遺物(第92図)

本遺跡からは遺構に確実に伴う遺物は出土しなかった。出土した遺物は土師器・須恵器・陶磁器片と板碑である。小破片が多く、実測ができたのは1・2の土師器と板碑だけである。

1は甕で、第16号溝下の旧河道から出土した。推定口径25.6cmで、胎土には角閃石・赤色粒子・微砂粒を

少量含む。焼成は普通で、色調は橙色である。残存率20%。胴部外面は黒く変色している。

2は壺で、AA12グリッドから出土した。肩部から上を欠いている。底径10.0cmで、胎土には赤色粒子・微砂粒を少量含んでいる。焼成は良好で、色調は赤褐色である。残存率60%。胴部外面は黒く変色している。

## VI 八日市遺跡の調査

### 1 遺跡の概観

八日市遺跡は、櫛引台地の崖線下を蛇行して流れる福川に沿った微高地(自然堤防)上から櫛引台地上にかけて位置している。遺跡の範囲は東西に細長く、北緯36°12'05"、東経139°18'05"に位置している。北は古墳～平安時代の集落跡である本郷前東遺跡、新屋敷東遺跡、上敷免遺跡、西へ約40mには城西遺跡、南には鎌倉時代の土壘・空堀が残る幡羅太郎館跡などの遺跡が位置している。また本遺跡範囲内の櫛引台地縁辺部には延喜式内社の楡山神社が所在している。

今回の調査地点は福川左岸の微高地上に位置し、本遺跡範囲の北端にあたる。標高は32.7mで、台地との比高差は約2mであった。調査面積は10,800㎡であった。調査区は東西に細長いため、発掘調査は県道を挟んで東地区と西地区とに分けて行った。県道から西に100mの範囲では攪乱が地山まで及んでいるため遺構は検出することができなかった。

東地区から検出された遺構は、古墳時代後期から平安時代にかけて埋没した旧河道だけであった。地下からの湧水が著しく調査を途中で断念せざるをえなかった。遺物は埋没土中から古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器片が少量出土した。

西地区から検出された遺構は、縄文時代晩期の土壘1基、古墳時代後期・奈良時代の住居跡20軒、土壘10基、旧河道、奈良から平安時代にかけての溝5条、道路跡2ヶ所、中世から近世にかけての土壘11基、溝42条、建物跡1棟であった。

西地区の東側は平安時代の地震による噴砂が著しいため、住居跡には壁面のずれや床面に段差が生じていた。調査区の南側は旧福川の流路にあたっていたために一部の遺構が壊されていた。

縄文時代の土壘は微高地の縁辺部に単独で位置していた。覆土からは加曾利B式の深鉢形土器の口縁部破片と底部が出土した。底部には網代痕が認められる。縄文時代の遺構は本土壘だけであった。

住居跡は微高地を取り巻くように散在していた。遺物がまったく出土しなかった住居跡があるため時期が判断できかねないものもあるが、概ね古墳時代後期か奈良時代に構築されたものと考えられる。古墳時代後期の住居跡は調査区の東半分に、奈良時代の住居跡は西半分に位置する傾向がみられる。

古墳時代後期の第3号住居跡からは土師器を主体に1,000点以上の遺物が出土した。遺物は覆土上層から下層にかけてまんべんなく出土しており、主な出土遺物には須恵器蓋・坏、管玉、紡錘車、土玉がある。須恵器蓋は第1号住居跡からも破片が出土している。

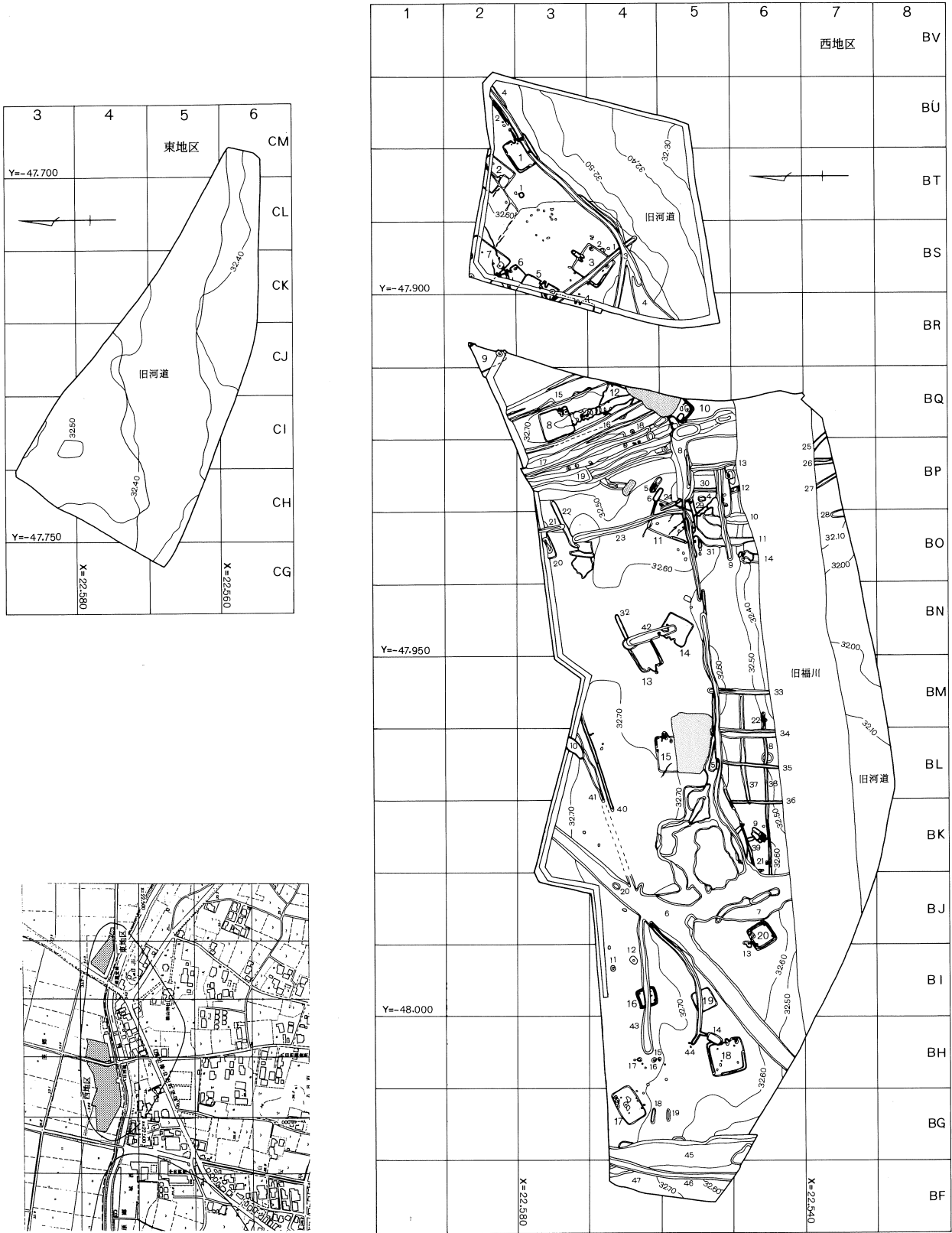
奈良時代の第18号住居跡の床面からは帯金具の鉞尾が1点出土した。概して奈良時代の住居跡からは遺物があまり出土しなかった。

道路跡は調査区西側の東端と西端にそれぞれ検出された。第1号道路跡は、南南東から北北西方向に走行し、古墳時代後期の第8・12号住居跡の上に構築されていた。側溝が両端に検出されたが、西側の溝は後世に数回掘り直されているため、道路跡に伴うものは判別できなかった。硬化面は最大幅4.8mで、波板状の痕跡が検出された。硬化面上には浅間B軽石層が認められた。第2号道路跡は、南から北方向に走行し、東側に側溝が検出された。側溝は幅約7mで、上層には浅間B軽石層が堆積していた。硬化面は検出された幅4.1mで、砂礫・粘土を使って踏み固められていた。また側溝寄りには溝に平行して柵列が検出された。

建物跡は平場と円形に巡る溝から構成されていた。平場にはピットが11本検出され、構造物の支柱であった可能性が考えられた。

旧河道は調査区南端に検出された。調査区東側の第3トレンチの断面には榛名山二ツ岳火山灰(FA)がブロック状に認められた。またBT・BU-3グリッドの範囲から遺物が多量に出土した。石製模造品などが出土していることから河川に関わる祭祀跡と考えられる。

第93図 八日市遺跡全体図



## 2 東地区の調査

### (1) 古墳時代以降の遺構と遺物

#### a、旧河道(第94図)

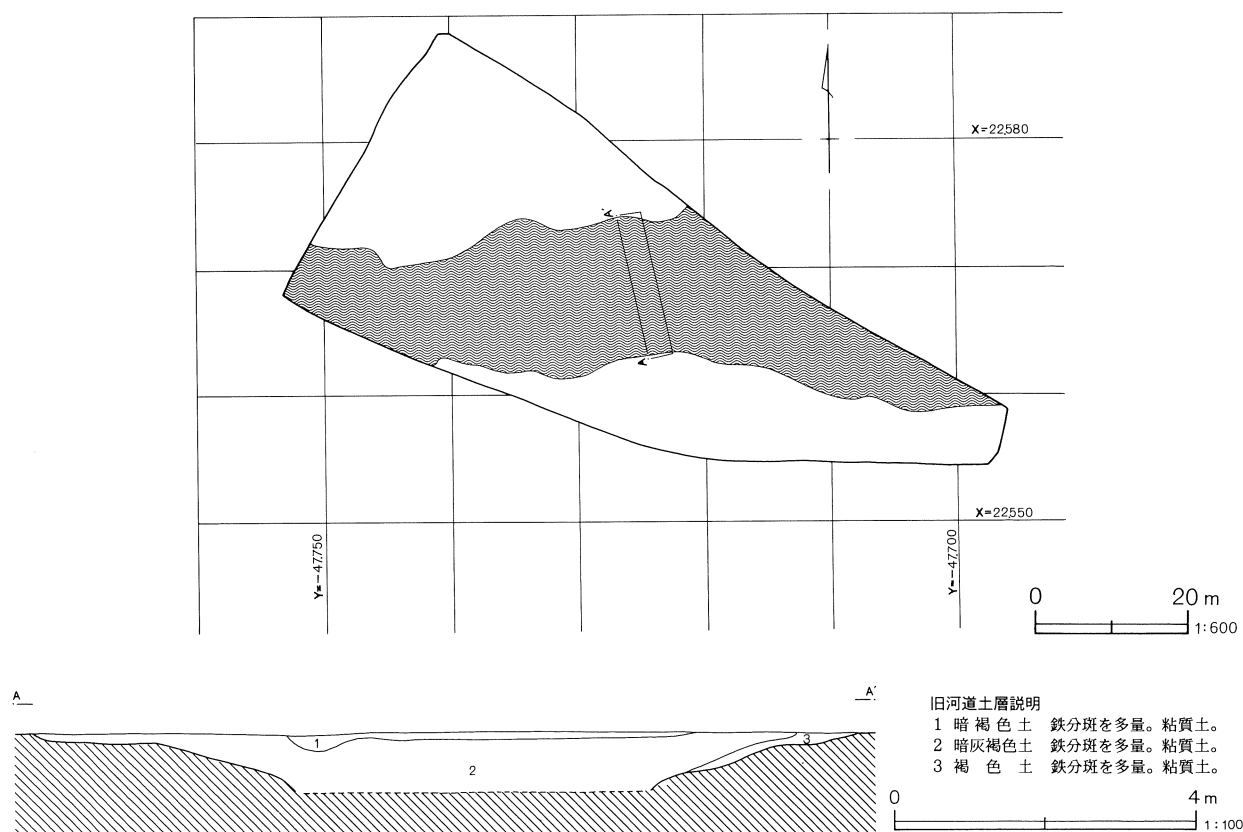
八日市遺跡東地区から検出されたのは旧河道だけであり、他の遺構は全く検出されなかった。旧河道は今回の調査区のほぼ中央を横切るように、CG~CM-4~6グリッドにかけて検出された。調査を行ったのが8月初旬であったため周辺の水田耕作により地下水位が上昇していることから、調査は水が湧きでることが予想された。そのため、調査はまずトレンチを1本設定して深く掘り下げたところ、遺構確認面から1mも掘らないうちに湧水が著しく排水もままならないため調査をその時点で断念せざるを得なかった。東地区は遺構確認面での標高が32.5mであった。

旧河道は幅76~115cmで、深さは不明である。現在の福川の流路から考えて、流れは西→東に向かっていたものと考えられる。河道のプランは幅も一定ではなからかなり蛇行していたことから、流路は度々変化していたと考えられる。東地区にも旧河道が検出されているが、本地区のものとの関係はつかめなかった。

遺物は埋没土上層から古墳時代後期の土師器片や平安時代の須恵器片が出土したが、何れも小破片で図示できる遺物はなかった。

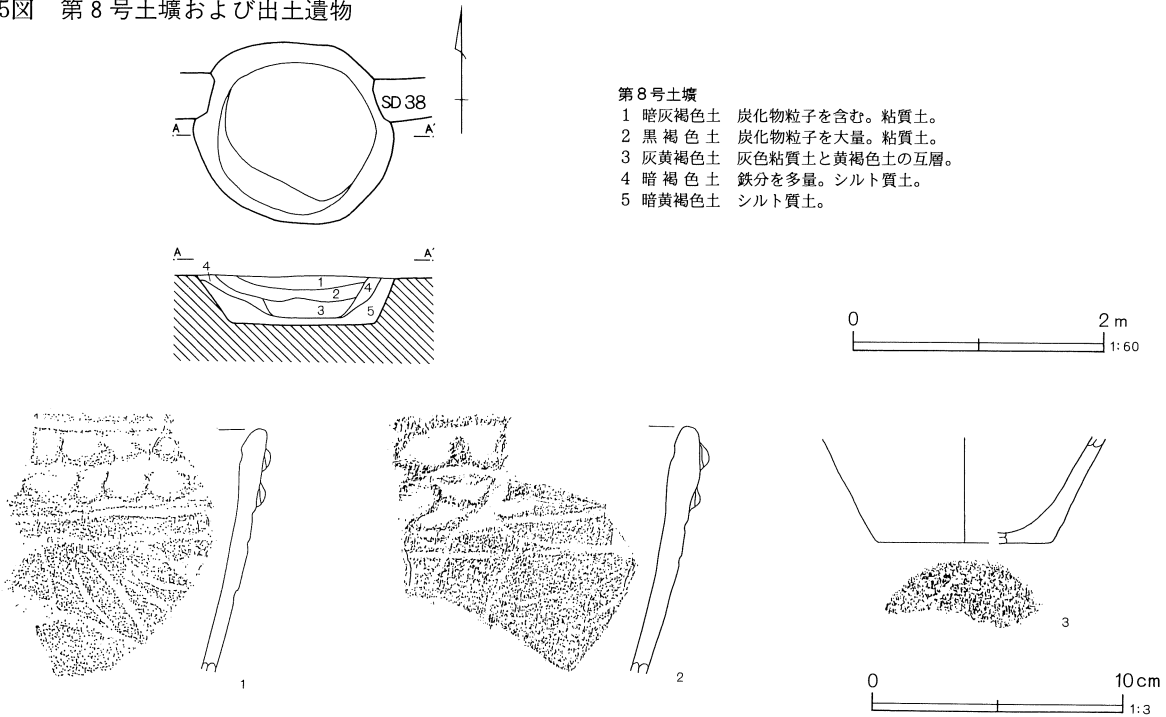
以上のことから東地区で検出された旧河道は福川の旧流路であり、平安時代にはほぼ埋没していたものと考えられる。

第94図 東地区旧河道



### 3 西地区の調査

第95図 第8号土壇および出土遺物



- 第8号土壇
- 1 暗灰褐色土 炭化物粒子を含む。粘質土。
  - 2 黒褐色土 炭化物粒子を大量。粘質土。
  - 3 灰黄褐色土 灰色粘質土と黄褐色土の互層。
  - 4 暗褐色土 鉄分を多量。シルト質土。
  - 5 暗黄褐色土 シルト質土。

#### (1) 縄文時代の遺構と遺物

##### a、土壇

##### 第8号土壇(第95図)

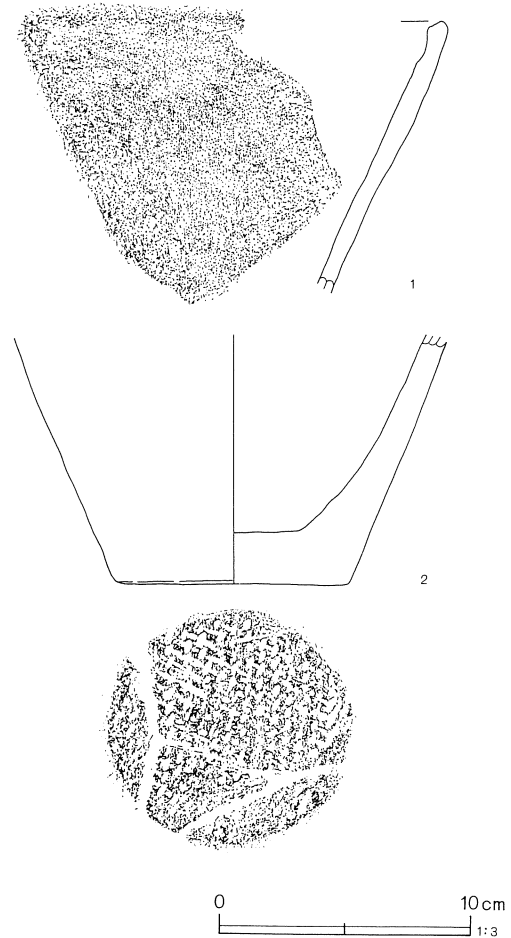
BL-6グリッドで検出された。第38号溝に壁の一部を壊されていた。長軸1.48m、短軸1.44m、深さは0.40mであった。平面形態は円形で、底面は平坦であった。覆土上層には炭化物粒子を多く含む褐色土系の土が堆積していた。

遺物は覆土から加曾利B式の深鉢形土器の口縁部破片と底部破片が出土した。1と2は同一個体と思われる。口縁部上端に隆帯が2段貼付され、隆帯の上に指頭圧痕が施されるものである。隆帯下に横位の沈線が2本と、その下に斜位の沈線が施されている。3は底部に網代痕がわずかに認められる。

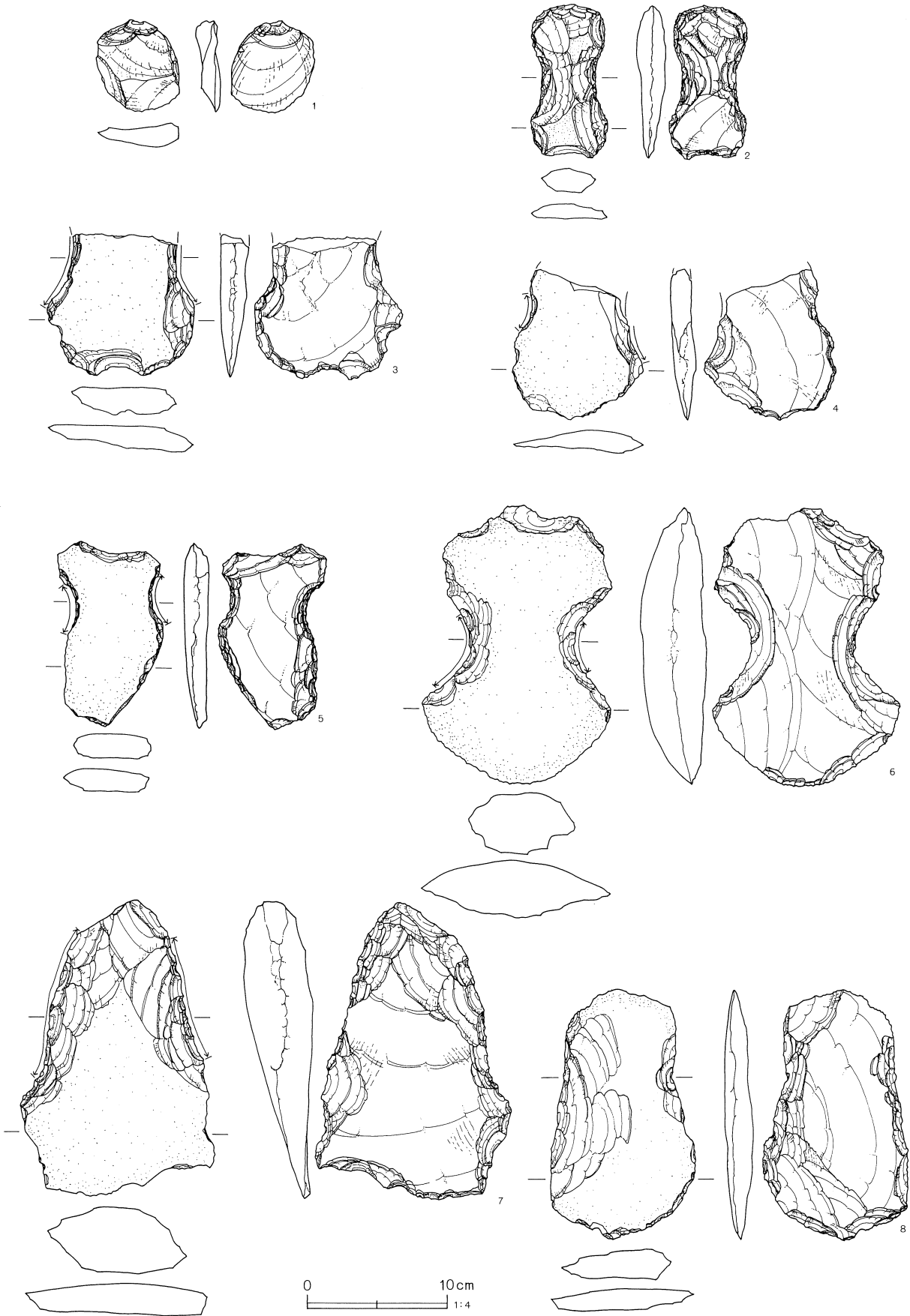
##### b、グリッド出土遺物(第96図)

1・2はBM-7グリッドから出土した。何れも加曾利B式の深鉢形土器である。1は平縁の口縁部破片で無文である。口唇部には平坦面をもち、内面には浅い凹みがある。2は底部に網代痕が認められる。

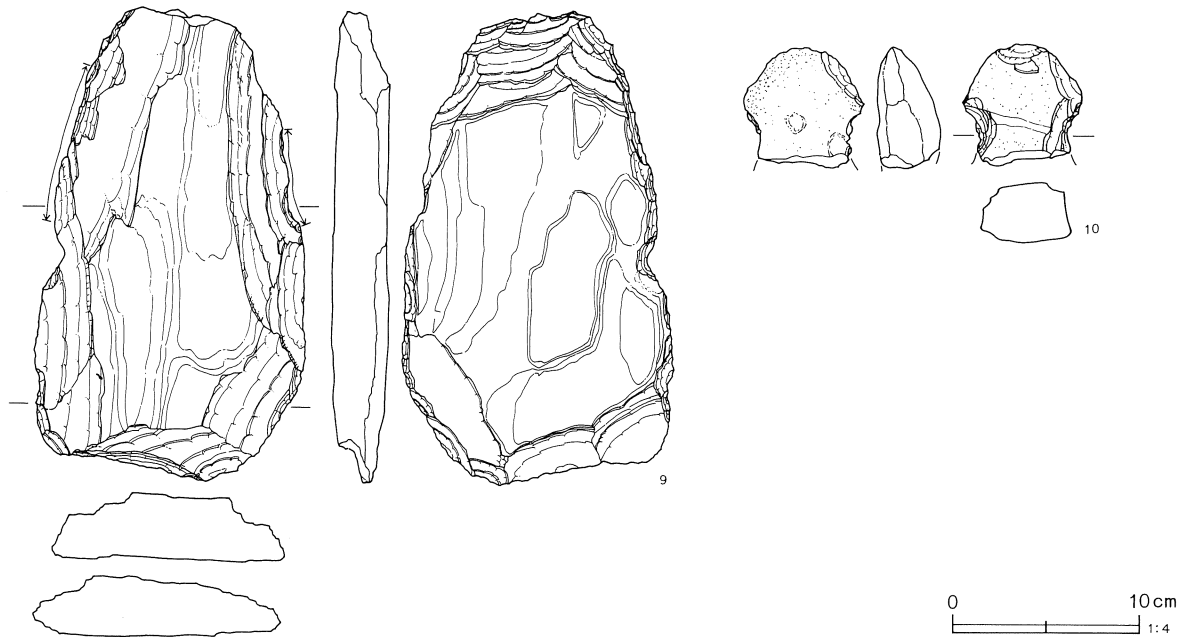
第96図 グリッド出土遺物



第97図 石器(I)



第98図 石器(2)



第97・98図 石器観察表

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	BU3グリッド	削器	4.8	4.3	1.1	35.0	粘板岩	
2	第1号道路跡	打製石斧	7.9	4.0	1.2	55.3	砂岩	
3	BU3グリッド	打製石斧	(7.5)	7.8	1.4	(100.1)	砂岩	
4	第1号建物跡	打製石斧	(7.5)	6.9	1.1	(70.8)	砂岩	
5	第1号建物跡	打製石斧	9.3	5.4	1.2	90.4	砂岩	
6	第1号建物跡	打製石斧	14.5	9.9	3.1	490.5	ホルンフェルス	
7	第1号建物跡	打製石斧	14.8	9.8	3.4	520.2	砂岩	
8	第6号溝	打製石斧	12.8	7.6	1.5	180.6	砂岩	
9	第8号溝	打製石斧	18.3	10.5	2.5	685.6	絹雲母片岩	
10	BS4グリッド	独鈷石	(4.7)	4.6	2.5	(55.9)	砂岩	

c、出土石器(第97・98図)

八日市遺跡西地区からは総数10点の縄文時代の石器が出土した。しかし、出土遺構に伴うものは1点もなく、すべて混入品である。

1は粘板岩製で削器と思われる。横広剥片を素材に用い、粗い刃部加工が施されている。

2～9は打製石斧である。石材は砂岩を用いるものが多く、ホルンフェルス製と絹雲母片岩製が各1点ずつみられる。2は分銅形で、側縁の抉りは小さい。周縁的に入念な調整加工が施され、刃部上に自然面を僅かに残す。3は上半部を欠損しているが分銅形になると思われる。側縁の抉りは小さく、表面には自然面を残す。4は頭部を欠損する。形態は撥形に近くなると

思われる。刃部は裏面からだけ調整され、表面には自然面を大きく残す。5は抉り部が頭部寄りに作られている。表面には自然面を残す。6は大形で、分銅形をしている。表面は自然面を残し、裏面には主要剥離が認められる。側縁には大きな抉り込みが入り、刃部は裏面からのみ調整される。7は形態が撥形に近く、大形である。表面の下部は自然面を残し、裏面には主要剥離が認められる。8は形態が短冊形をする。表面には自然面を多く残す。刃部は丁寧な調整加工が施され円刃に仕上げられる。9は大形で、形態は短冊形をする。周縁的に調整加工が施される。絹雲母片岩製。

10は砂岩製で独鈷石の一部と思われるが、詳細は不明である。



## (2)古墳時代以降の遺構と遺物

## a、住居跡(第99図)

今回の調査区からは住居跡20軒が検出された。その中で完掘できたのは13軒で、重複しているものはほとんどなかった。

住居跡はすべて古墳時代後期から奈良時代にかけてのものであった。第1号道路跡を挟んで東と西に二分できる。東側は6世紀前半の住居跡11軒が位置していた。西側は6世紀前半の第11号住居跡が1軒あるほかは、7世紀後半から8世紀前半にかけての住居跡8軒が位置していた。

遺物は土師器が大量に出土した。第3号住居跡からは特に多く、1,000点を超える遺物が出土した。器種は圧倒的に坏類が多く、図示したものだけでも約300点ある。須恵器は、第1号住居跡から蓋の破片が、第3号住居跡から蓋と坏が一緒に出土した。

土器のほかに鉄製品は、第18号住居跡の床面から帯金具(鉞尾)が出土した。

石製品は第3号住居跡の覆土上層から滑石製の管玉と第5、10号住居跡から砥石がそれぞれ出土した。

土製品は紡錘車が第3、17号住居跡から出土した。第3号住居跡からは他に土玉と環状の用途不明の製品が出土した。

## 第1号住居跡(第100～102図)

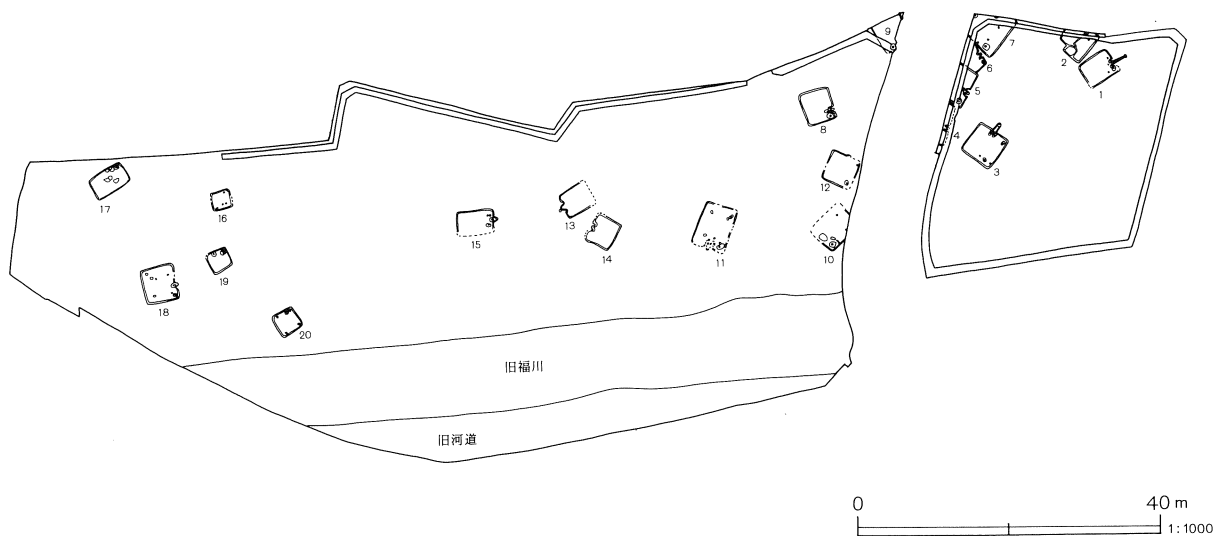
BT-2・3、BU-2・3グリッドで検出された。第3号溝に南側を切られていた。今回の調査区内では一番東に位置しており、北に隣接する第2号住居跡との距離は1.22mであった。東西4.47m、南北3.45m、深さは0.28mで、平面形態は東西に長い長方形をしていた。主軸方位はN-61°-Eである。

床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

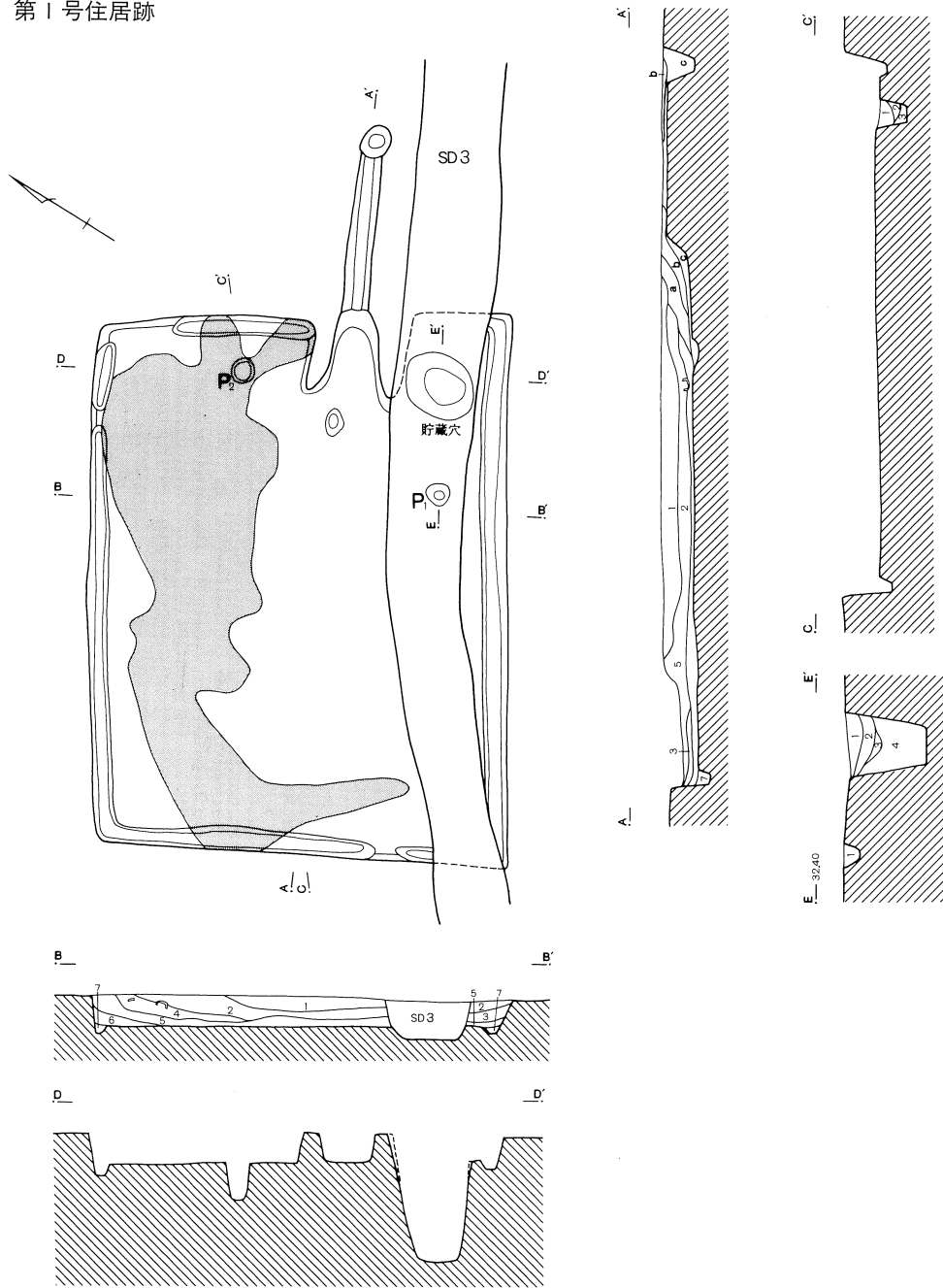
住居跡の北半からは炭化物が検出された。床面から10～15cm浮いており、住居跡全体には拡がっていなかった。埋没の過程で火を焚いたものと思われる。

カマドは東壁やや南寄りに位置していた。第3号溝に右袖の一部を壊されてはいたが、全体的に遺存状態は良好であった。袖は地山の削り出して、内側の壁面は僅かではあったが赤く焼けて焼土化していた。燃烧部は壁外にはあまり突出せず、掘り込みはなかった。奥壁は傾斜をつけて立ち上がり、水平に掘り抜かれた煙道へと至る。煙道は壁外に長く伸び、長さ1.52m、幅0.22m、深さ0.04mであった。煙出口は一段深く掘り込まれていた。また焚口付近には長径23cm、短径16cm、深さ6cmのピット状の浅い落ち込みが確認されたが、用途は確認できなかった。

第99図 西地区住居跡配置図



第100図 第1号住居跡



第1号住居跡土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量、黄褐色土ブロックを微量。
- 2 褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 暗褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 4 暗褐色土 炭化物を多量、黄褐色土粒子・ブロックを少量、焼土粒子を微量。
- 5 淡褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 6 淡褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 7 褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量。

貯蔵穴

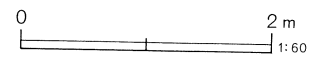
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子・炭化物粒子を少量、焼土粒子を微量。
- 2 褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを少量、炭化物粒子・黄褐色土粒子を微量。
- 4 淡褐色土 黄褐色土粒子・ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

ビット1

- 1 褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を少量。

ビット2

- 1 褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 2 褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土粒子・ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。



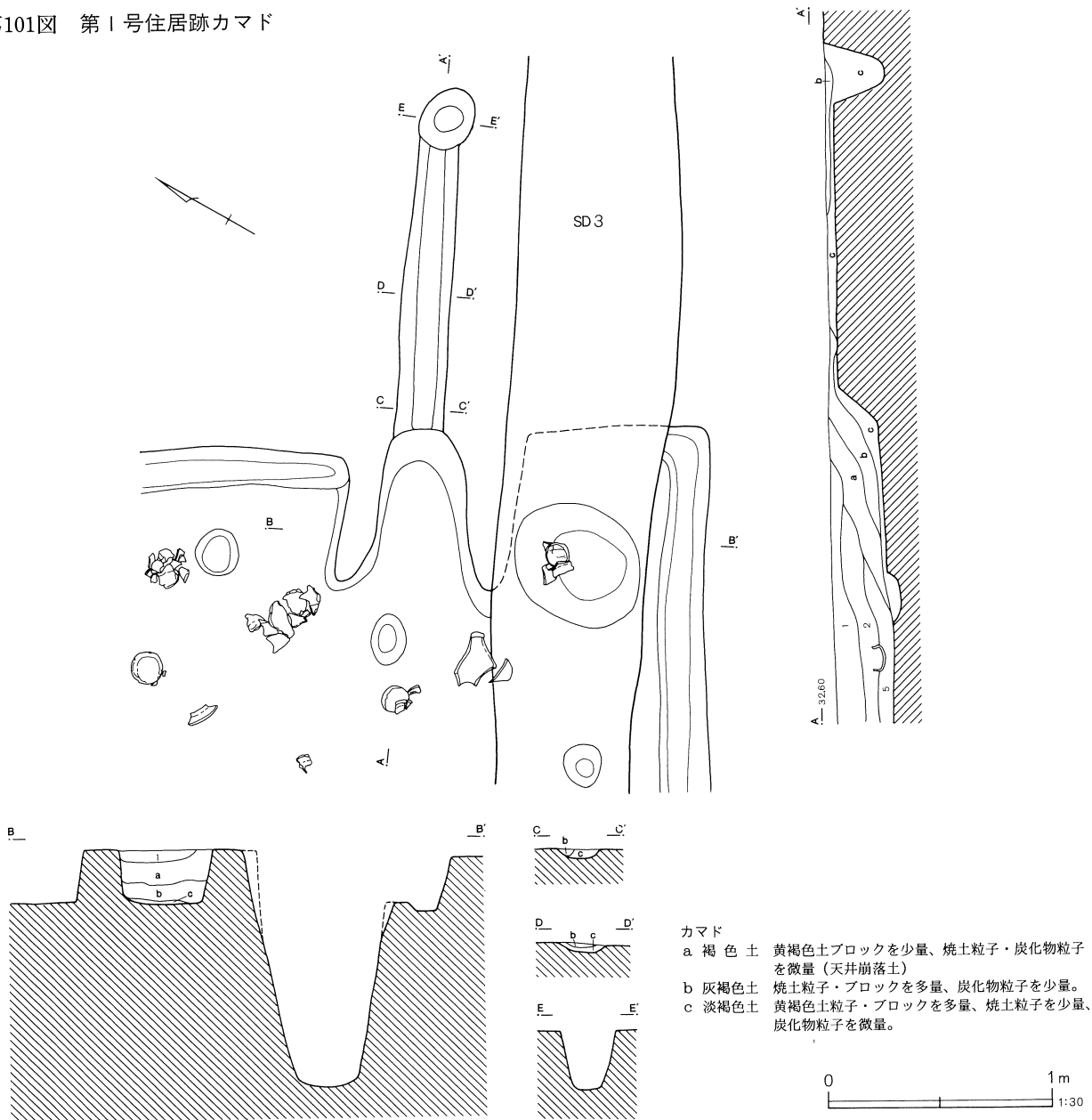
貯蔵穴はカマド右側の南東コーナー部分に位置していた。溝底面での大きさは、長径63cm、短径50cm、深さ68cmであった。覆土全体には焼土粒子、炭化物粒子を含んでいた。貯蔵穴内からは4・16の土師器坏などの遺物が少量出土した。

ピットは2本確認できた。そのうち支柱穴と思われたのがP1であるが、溝に大半を壊されていたため確認することができなかった。各ピットの大きさは、P1が19cm×18cm×12cm、P2が22cm×20cm×25cmであった。

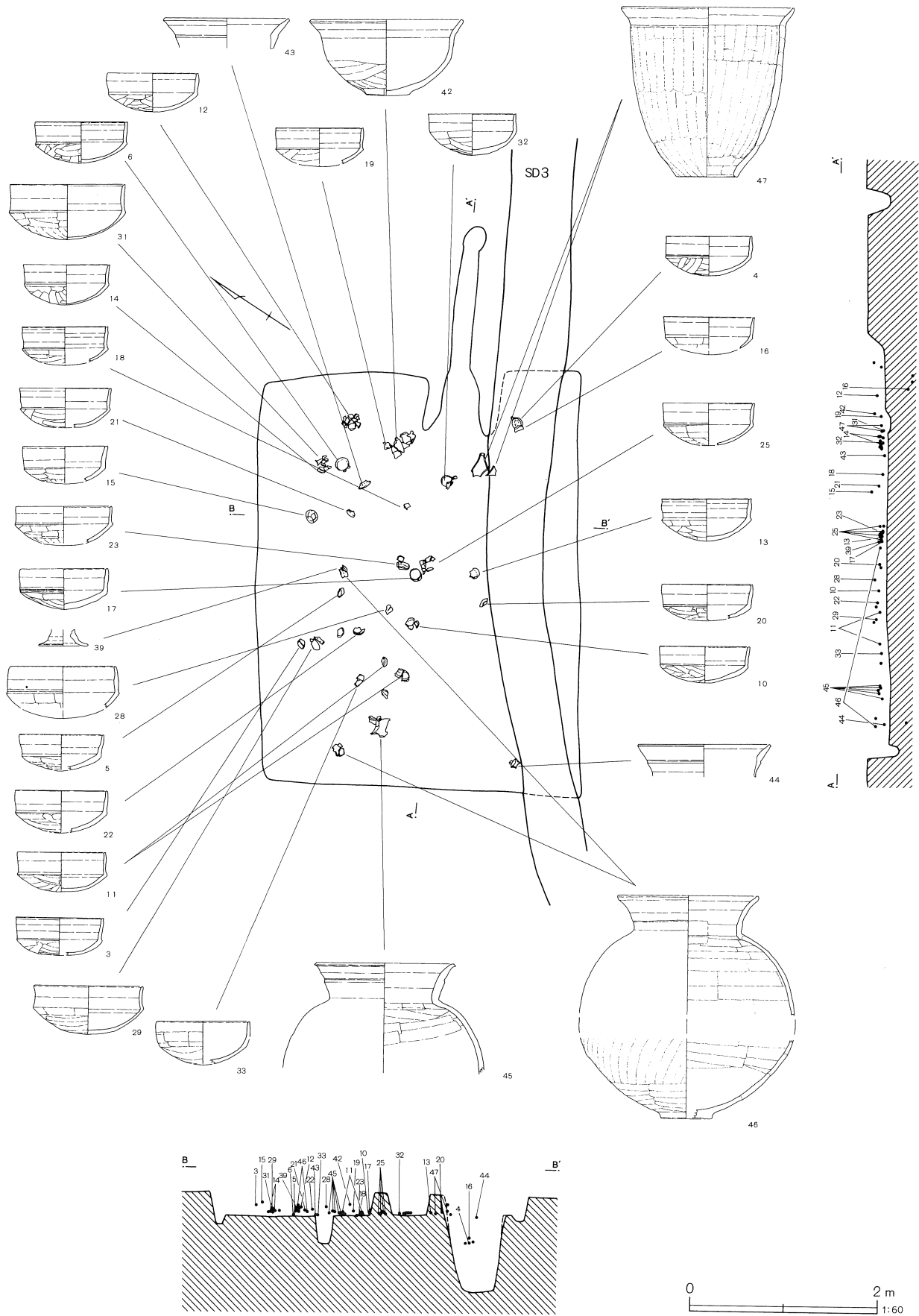
壁溝は幅約16cm、深さ約9cmで、部分的に途切れてはいたがほぼ住居跡内を全周していた。

遺物は床面から多量に出土したが、カマドからはほとんど出土しなかった。出土土器は器面が脆く剥離しており、また煤が付着しているものが多くみられた。1・2は須恵器蓋の小破片で覆土から出土した。焼成は良く、胎土には含有物をほとんど含んでいない。口縁端部には凹状の平坦面をもつ。稜はやや不明瞭である。45の壺は胴部下半を欠損しており器台として転用された可能性も考えられる。

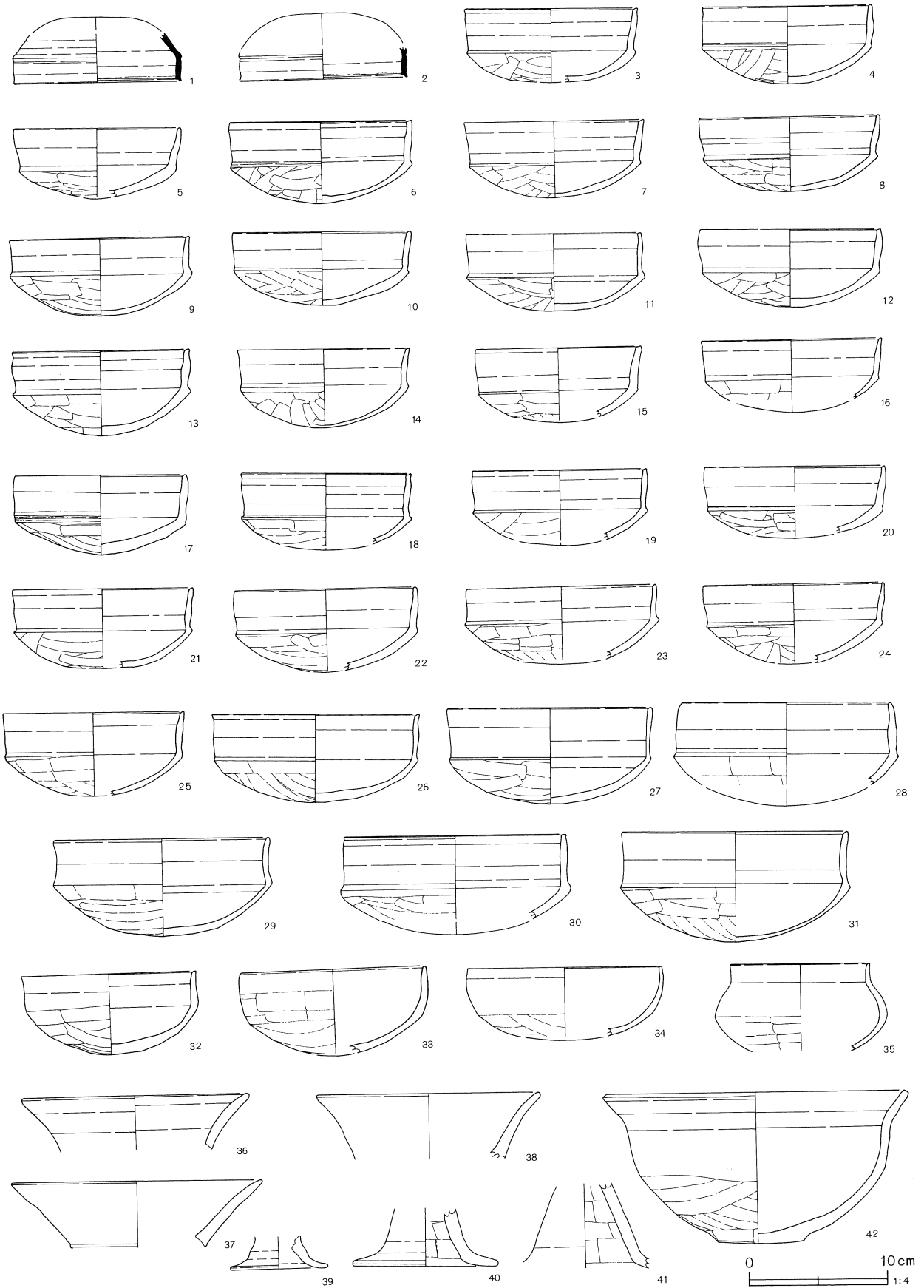
第101図 第1号住居跡カマド



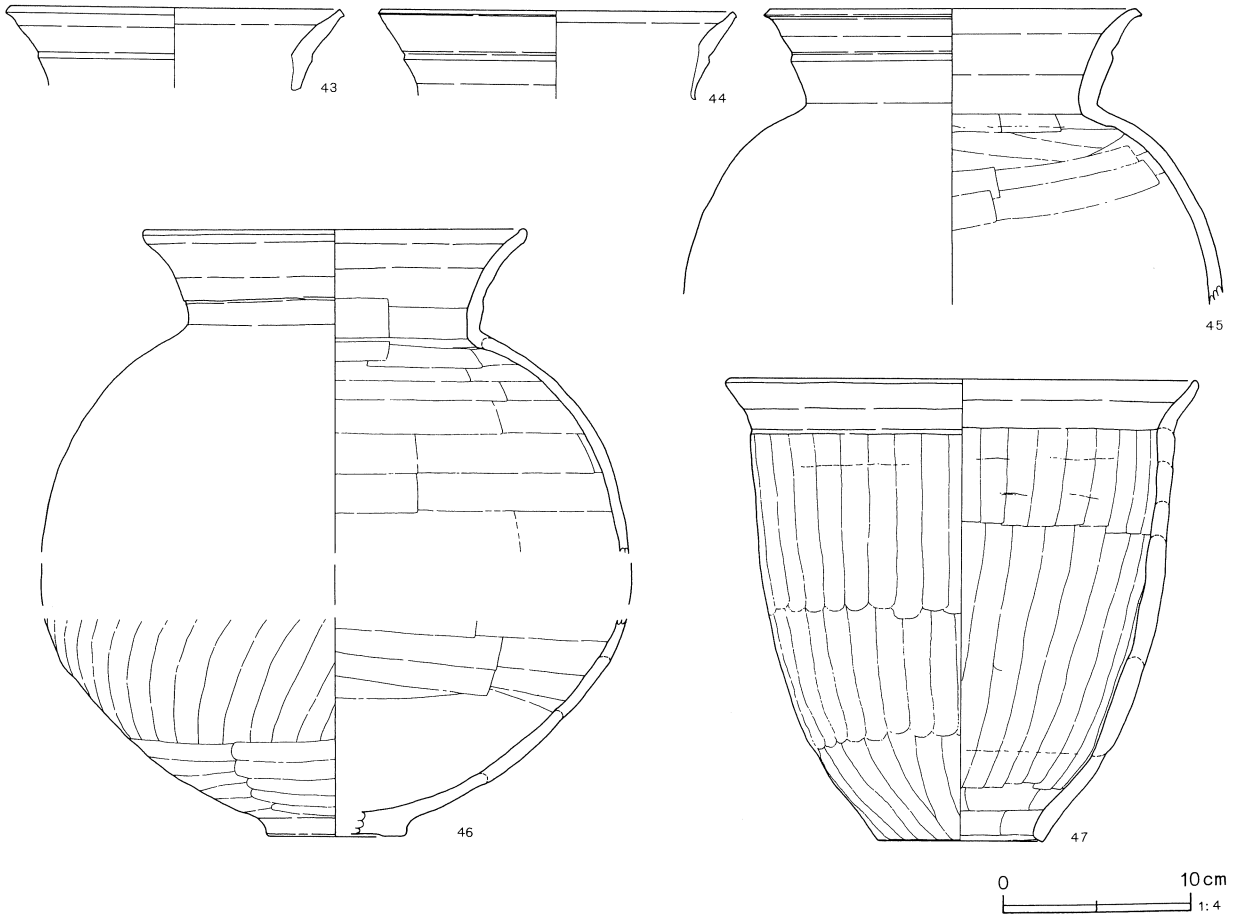
第102図 第1号住居跡遺物出土状況



第103図 第I号住居跡出土遺物(I)



第104図 第I号住居跡出土遺物(2)



第103・104図 第I号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(12.0)			C'G'H'	A	青灰	15%	IV区 群馬産?
2	蓋	(12.0)			C'G'H'	A	淡青灰	10%	IV区 群馬産?
3	坏	(12.4)			BCDGH'	A	橙	30%	No.15 体部外面が黒く変色
4	坏	12.2	5.5		BCDGH'	A	橙	90%	No.46 体部外面は黒く変色 内外面とも煤ける
5	坏	(12.0)			BCDGH'	A	橙	20%	No.20 器面の一部が剥落
6	坏	13.1	5.8		BC'DGH'	A	橙	85%	No.36 体部外面は黒く変色 口縁部は剥落する
7	坏	(13.0)	(5.4)		BC'DGH'	A	橙	30%	I区、II区
8	坏	(13.0)	5.3		C'GH'	A	黄橙	25%	I区 体部外面は煤ける
9	坏	(13.0)	(5.5)		BCDGH'	A	橙	30%	I区、II区
10	坏	12.8	5.2		BCDGH'	A	橙	70%	No.10 内外面とも煤ける 器面の一部が剥落
11	坏	12.6	5.6		BCDGH'	A	橙	70%	No.9、11 器面の一部が剥落する
12	坏	(13.0)	5.6		BC'DGH'	A	黄橙	60%	No.42 体部外面に煤 器面が剥落する
13	坏	(12.8)	6.1		BC'G'H'	A	黄橙	55%	No.30
14	坏	(12.4)	5.6		BCDGH'	A	橙	55%	No.38、39 外面の約1/2は煤ける
15	坏	12.0			BC'DGH'	A	にぶい褐	75%	No.35 内外面とも煤ける
16	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	35%	No.45
17	坏	12.4	5.6		BC'DGH'	A	橙	100%	No.25 内外面とも煤ける
18	坏	(12.2)			BGH'	A	橙	40%	No.32 内外面とも煤ける 器面が剥落している
19	坏	(12.6)			C'G'H'	A	橙	35%	No.43 内外面とも煤ける
20	坏	(13.0)			BCDGH'	A	橙	40%	No.31 内外面とも黒く変色する

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
21	坏	(13.0)			BCDGH'	A	にぶい橙	30%	No33 内外面とも煤ける
22	坏	(13.0)			C'DGH'	A	黄橙	25%	No18 外面は煤ける
23	坏	(13.6)			BCDGH'	A	橙	35%	No24
24	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	35%	III区
25	坏	13.0			BC'DGH'	A	橙	85%	No26~29 体部外面は黒く変色
26	坏	(15.0)	(6.3)		BC'DGH'	A	橙	30%	No48
27	坏	14.8	6.8		BC'DGH'	A	橙	85%	貯蔵穴 内面は煤ける
28	坏	(15.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	No19
29	坏	(15.6)	6.9		H'	A	橙	50%	No16 外面に煤が付着
30	坏	(16.0)			BC'DGH'	A	橙	35%	II区、III区
31	坏	(16.4)	7.8		BCDGH'	A	橙	30%	No41
32	坏	12.6	5.8		BC'DGH'	A	橙	100%	No53 体部外面は黒く変色
33	坏	(13.4)			BC'DGH'	A	浅黄橙	40%	No12 外面の一部が黒く変色
34	坏	(14.0)			BCDGH'	A	橙	20%	西ベルト
35	椀	(10.0)			BC'DG'H'	A	にぶい橙	15%	貯蔵穴
36	高坏	(16.4)			BC'DGH'	A	橙	35%	IV区
37	高坏	(18.0)			BC'DGH'	A	黄橙	20%	II区
38	高坏	(16.0)			BC'DGH'	A	黄橙	15%	西ベルト
39	高坏			(7.0)	BC'DGH'	A	橙	40%	No22
40	高坏			(10.4)	BC'DGH'	A	橙	40%	III区 柱状部外面はわずかに煤ける
41	高坏				C'GH'	A	橙	25%	I区
42	鉢	22.0	10.8	6.2	BDGH'	A	橙	70%	No44 口縁部は剥落する
43	壺	(18.0)			BC'DGH'	A	橙	25%	No34 外面は黒く変色する
44	壺	(19.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	No1
45	壺	20.0			'BCDGH'	A	橙	50%	No3~7
46	壺	20.4		(7.4)	BC'DGH'	A	浅黄橙	35%	No13, 14, 21 口縁部内面に煤が付着
47	甌	(25.0)	(24.3)	(8.8)	BCDGH'	A	橙	35%	No54, 55 外面は煤ける

## 第2号住居跡(第105図)

BT-2グリッドで検出された。排水溝掘削のため住居跡の一部を壊してしまった。北側は調査区外に延びており、全体を調査することはできなかった。本住居跡は遺構確認段階では2軒の住居跡が重複しているものと考えられた。しかし調査を進めた結果、噴砂の影響を受け壁が大きくずれた1軒の住居跡であることが確認された。壁は住居跡のほぼ中心を境に南北方向に90cmずれていた。東半分を基準にした大きさは、南北4.54m、東西4.20m、深さは0.24mで、平面形態は方形に近いものと思われる。主軸方位はN-40°-Eである。

覆土は噴砂による断裂が生じていたが、4層からなる自然堆積であった。住居跡の覆土にあたるのは1~4層である。全体に焼土粒子、炭化物粒子を含んでいるが、特に4層中には多く含まれていた。

床面も噴砂の影響を受けて段差が生じ、住居跡中央から東側と西側では高低差が5~10cm程あった。また南壁中央の一段隆起した部分には、地下から噴き上げられた小礫と砂が確認された。

カマドは調査区外にかかるため右袖だけが検出された。北壁のほぼ中央に位置していると思われる。右袖は地山の削り出して、内側の壁面は僅かに赤く焼けていた。6層は右袖の一部が噴砂に壊された層である。燃焼部は噴砂があったため確認することができなかった。カマド右側北東コーナー部分の床面直上には厚さ14cmの灰層が確認された。他の部分は噴砂によって北に大きくずらされていると思われる。

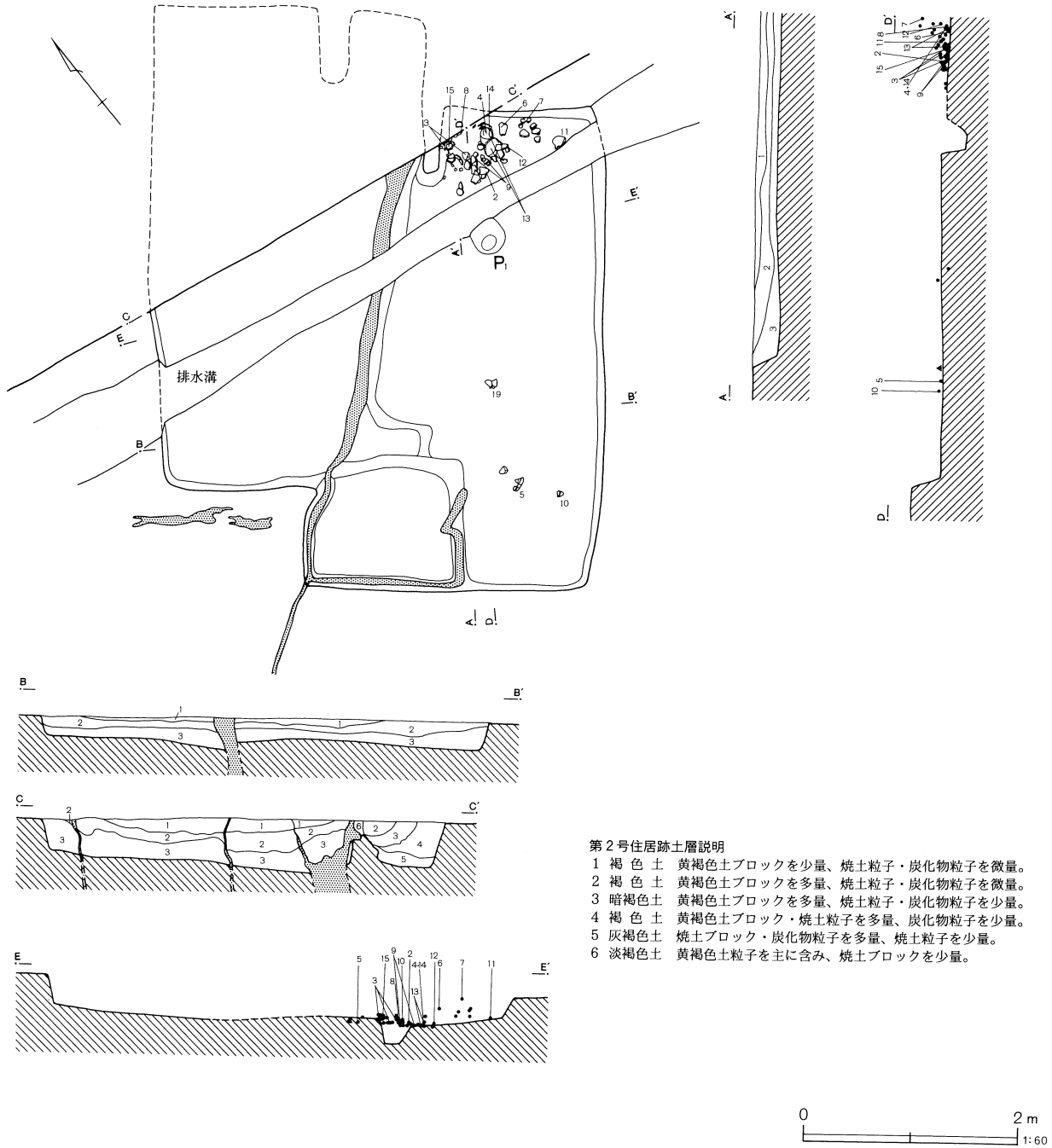
ピットは1本確認できた。主柱穴と思われるが、他の柱穴は確認できなかった。P1の大きさは、径が30cm、深さが23cmであった。

貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物はカマド右側の床面から2・4・6・9・11～13の土師器の坏、14の椀、15の埴、16の甕がまとめて出土した。3・11・13・16の土器には煤が付着して

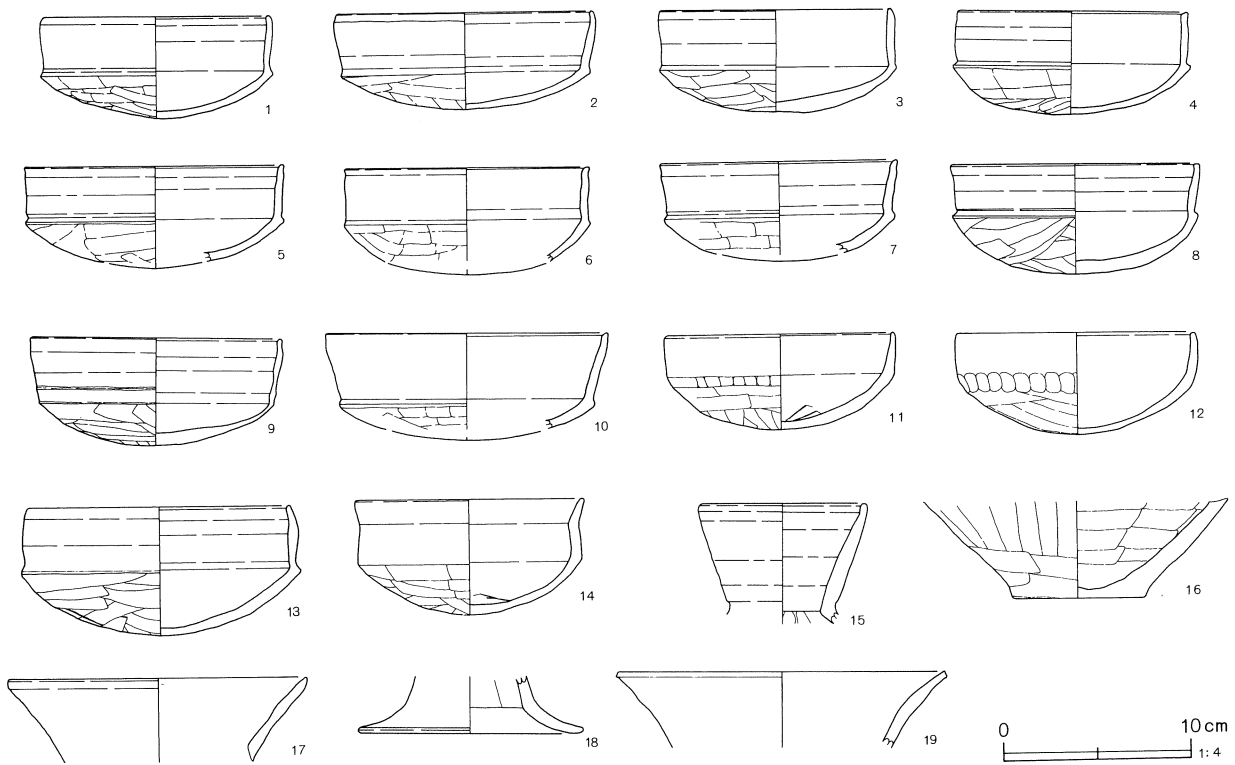
いる。11・12の坏は、口縁部と体部の境に指頭瓦痕が施される。また、南側の床面からも5・10の坏と19の壺が出土した。何れも残存率は低い。

第105図 第2号住居跡





第106図 第2号住居跡出土遺物



第106図 第2号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	5.4		BC'DGH'	A	橙	40%	II区
2	坏	(13.6)	5.1		BC'DG'H'	A	橙	35%	No.26
3	坏	12.2	5.4		BC'DG'H'	A	橙	80%	No.15、28、29 体部外面に煤付着
4	坏	12.2	5.5		BC'DG'H'	A	橙	80%	No.13
5	坏	(13.8)			BC'DGH'	A	橙	35%	No.2 体部外面は黒く変色
6	坏	(13.0)			C'DGH'	A	橙	20%	No.12
7	坏	(12.6)			BCDH'	A	黄橙	20%	No.6
8	坏	13.2	5.8		BC'DGH'	A	橙	75%	No.41
9	坏	(13.4)	5.7		BC'H'	A	橙	60%	No.21、23
10	坏	(15.0)			BC'DGH'	A	橙	10%	No.1
11	坏	(12.0)	5.0		BC'DG'H'	A	にふい橙	20%	No.5 内面全体に煤が付着する
12	坏	(12.6)	5.4		BC'DG'H'	A	橙	35%	No.17
13	坏	13.8	6.8		BC'DH'	A	橙	75%	No.16 体部外面は煤ける 剥落が著しい
14	碗	12.1	6.1		BC'DG'H'	A	橙	80%	No.13 内外面ともに煤が付着
15	埴	(9.0)			DGH'	A	浅黄橙	10%	No.37
16	甕			7.0	BDGHI	A	明赤褐	60%	No.4 外面に煤が付着
17	高坏	(16.0)			BC'DG'H'	A	明赤褐	15%	II区
18	高坏	(12.0)			C'DGH'	A	黄橙	15%	拡張部
19	壺	(17.6)			BC'GH'	A	橙	20%	I区

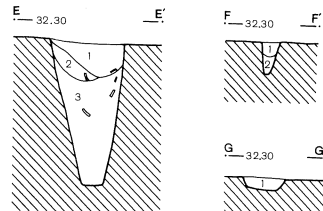
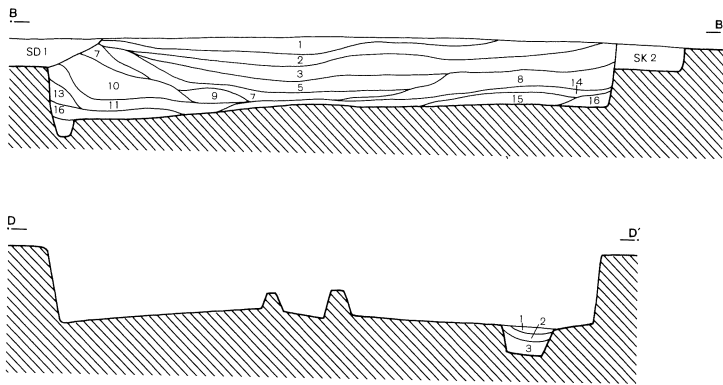
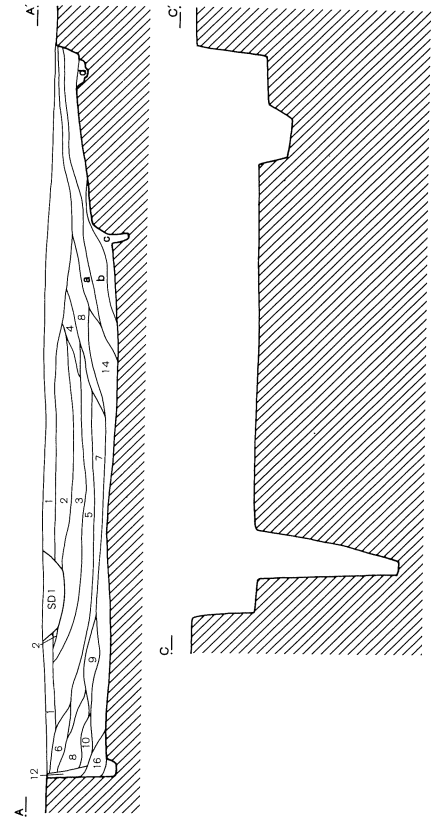
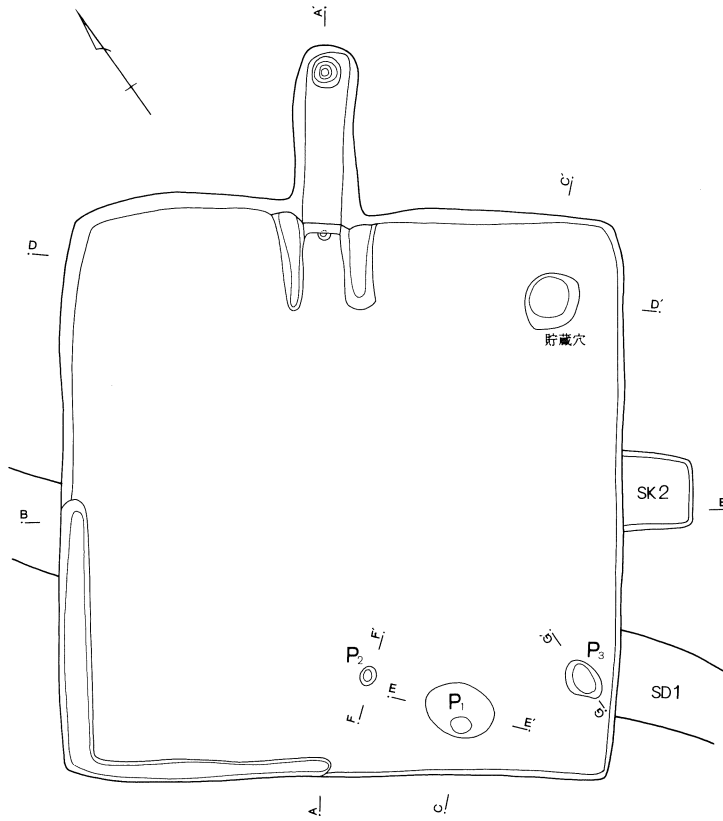
第3号住居跡(第107~111図)

BS-3・4グリッドで検出された。第2号土壇を切り、第1号溝に南側を切られていた。すぐ西には第4号住居跡が隣接していた。噴砂の影響はまったくみられなかった。南北4.71m、東西4.46m、深さは0.54m

で、平面形態は方形をしていた。遺構確認面からの掘り込みも深く、遺存状態は良好であった。主軸方位はN-35°-Eである。

床面はやや起伏が目立ち、中央部周辺は壁際と比べ若干高くなっていた。壁は垂直に立ち上がる。

第107図 第3号住居跡



第3号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、白色バミスを微量。
- 2 灰黄褐色土 焼土粒子・白色バミスを微量。
- 3 灰黄褐色土 シルト質土。
- 4 暗褐色土 焼土粒子を多量。
- 5 灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量。
- 6 暗灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 7 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量。
- 8 灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量。
- 9 黄灰褐色土 黄褐色土ブロックを多量。
- 10 灰褐色土 炭化物粒子を多量。
- 11 暗灰色土 粘質土。粘性強い。
- 12 暗灰色土 粘質土。粘性強い。
- 13 暗灰色土 炭化物粒子を少量。
- 14 灰色土 粘質土。粘性強い。
- 15 灰黄褐色土 灰色粘質土と黄褐色土の互層。
- 16 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックを少量。

貯蔵穴

- 1 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、炭化物粒子を少量、焼土粒子を微量。
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 3 黄褐色土 黄褐色土を主体とし、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

ビット1

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック・炭化物粒子を少量、焼土粒子を微量。

ビット2

- 1 暗褐色土 炭化物粒子を多量、焼土粒子・黄褐色土粒子を少量。
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

ビット3

- 1 黄褐色土 黄褐色土を主体とし、焼土粒子・炭化物粒子を微量。



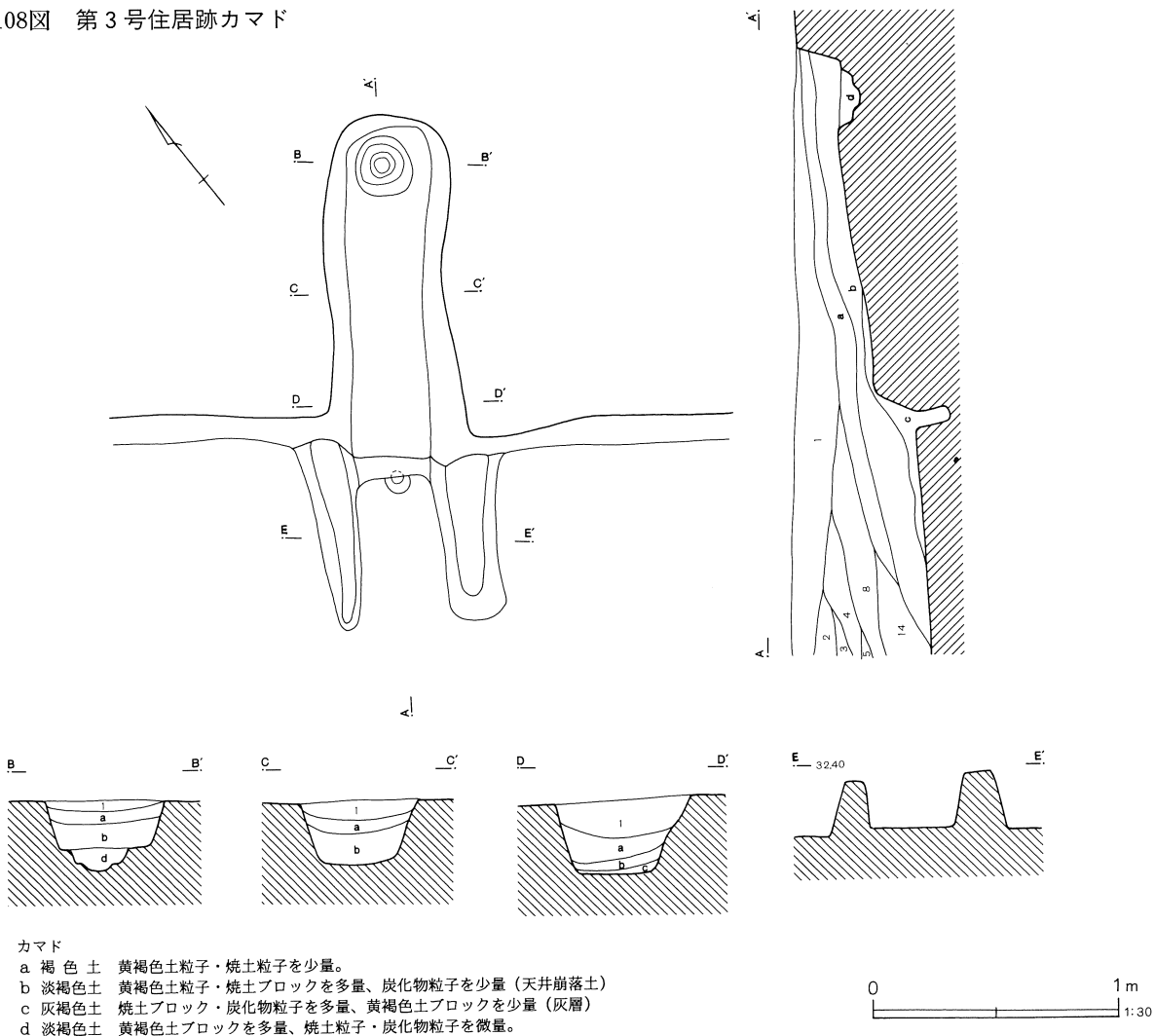
カマドは北壁やや西寄りに位置していた。袖は地山の削り出して、内側の壁面は僅かに赤く焼けていた。燃焼部は住居跡壁の内側でおさまり、掘り込みはなかった。最下層には厚さ3cm程の灰層があった。その灰層の上には天井部分が崩落したと思われる黄褐色土粒子、焼土ブロックを多量に含んだ淡褐色土が堆積していた。奥壁部分には小ピットが検出された。ピットの大きさは、径10cm、深さ15cmで、煙道方向に向かって斜めに掘り込まれていた。覆土には灰が堆積していたことからカマド作業時のものである。土製支脚の代わりに棒状のものを埋め込んで、土器を掛けるために用いられた可能性も考えられるが、詳細は不明である。煙道は緩やかな傾斜をつけて掘り抜かれており、壁外に長く延びていた。長さ1.38m、幅46cm、深さが25cm

であった。煙出口には径24cm、深さが8cmの浅いピットが掘られていた。

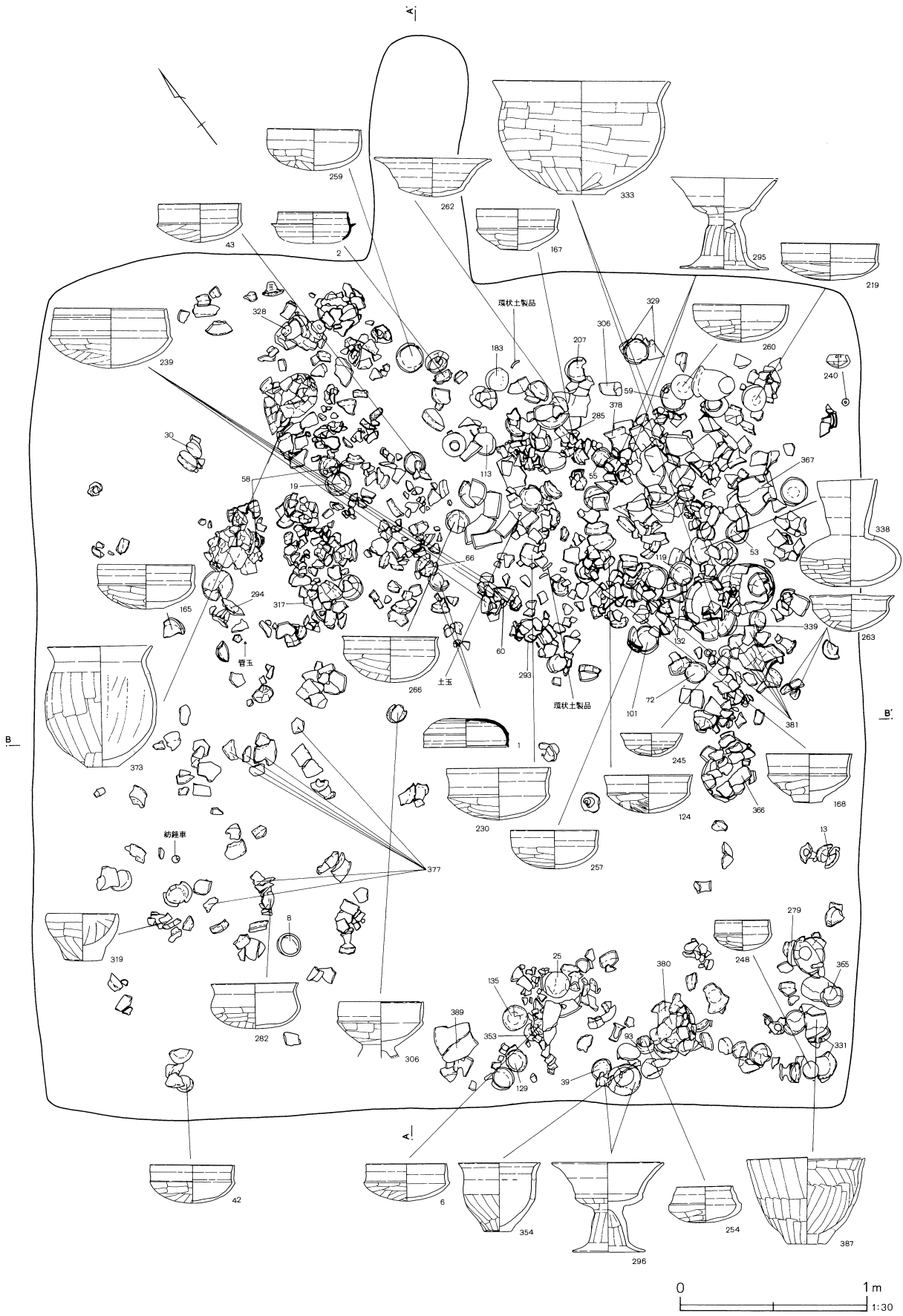
貯蔵穴は北東コーナー部に位置していた。大きさは長径50cm、短径43cm、深さが20cmであった。平面形態は円形で、掘り込みはあまり深くなかった。覆土には焼土粒子・炭化物粒子を含んでいた。

ピットは3本確認できた。3本とも南東コーナー部分に位置しており、他の部分では確認できなかった。各ピットの大きさは、P1が56cm×41cm×112cm、P2が16cm×13cm×26cm、P3が34cm×26cm×10cmであった。すべてのピットには柱穴の痕跡が検出されなかった。P1は掘り込みも深く、主柱穴であると考えられる。覆土には炭化物粒子を含み、また遺物も少量出土した。P2・3は形状から柱穴とは考えにくい。P3

第108図 第3号住居跡カマド



第109図 第3号住居跡遺物出土状況(1)



は位置及び斜位に掘られていたことから、入口施設との関連性が考えられる。

壁溝は幅約26cm、深さ約13cmで、南壁と西壁の一部に巡っていた。

南西コーナー周辺の床面から15~20cm浮いた所からは炭化物粒子が多量に検出された。本遺構全体には広がらずに部分的であり、焼土は伴っていなかった。埋没の過程で炭化物を廃棄した層と思われる。

遺物は覆土上面から床面にかけて大量の遺物が出土した。ドットで取り上げた遺物だけでも1,114点を数えた。特に遺物が集中していたのは住居跡の北半で、住居跡堆積土量よりも遺物量の方が遥かに多いような状況であった。出土遺物はその出土状況によって大きく3つのブロックに抽出することができる。

一つは、住居跡北半分に集中するブロックで、覆土上面から床面付近に至るまで多くの遺物が出土した。本遺構に伴うものはほとんど無いと思われる。遺物は土師器が大量に出土している。土師器は坏類がもっとも多く、甕・甑などの大形品も一部みられる。また須恵器の蓋と坏が覆土上層から出土している。2点とも欠損部分が多く、残存率は低い。土器の他には滑石製の管玉、土玉、環状土製品が出土している。

一つは、住居跡南東コーナー周辺に集中するブロックで、甕・甑・坏などの日常生活に供された土器が一括して出土している。遺物はほぼ床面の直上から出土しており、本遺構に直接伴うものである。第1号溝に掘り込まれていた部分であるため、溝に壊されて残存率のよくない土器が一部にある。

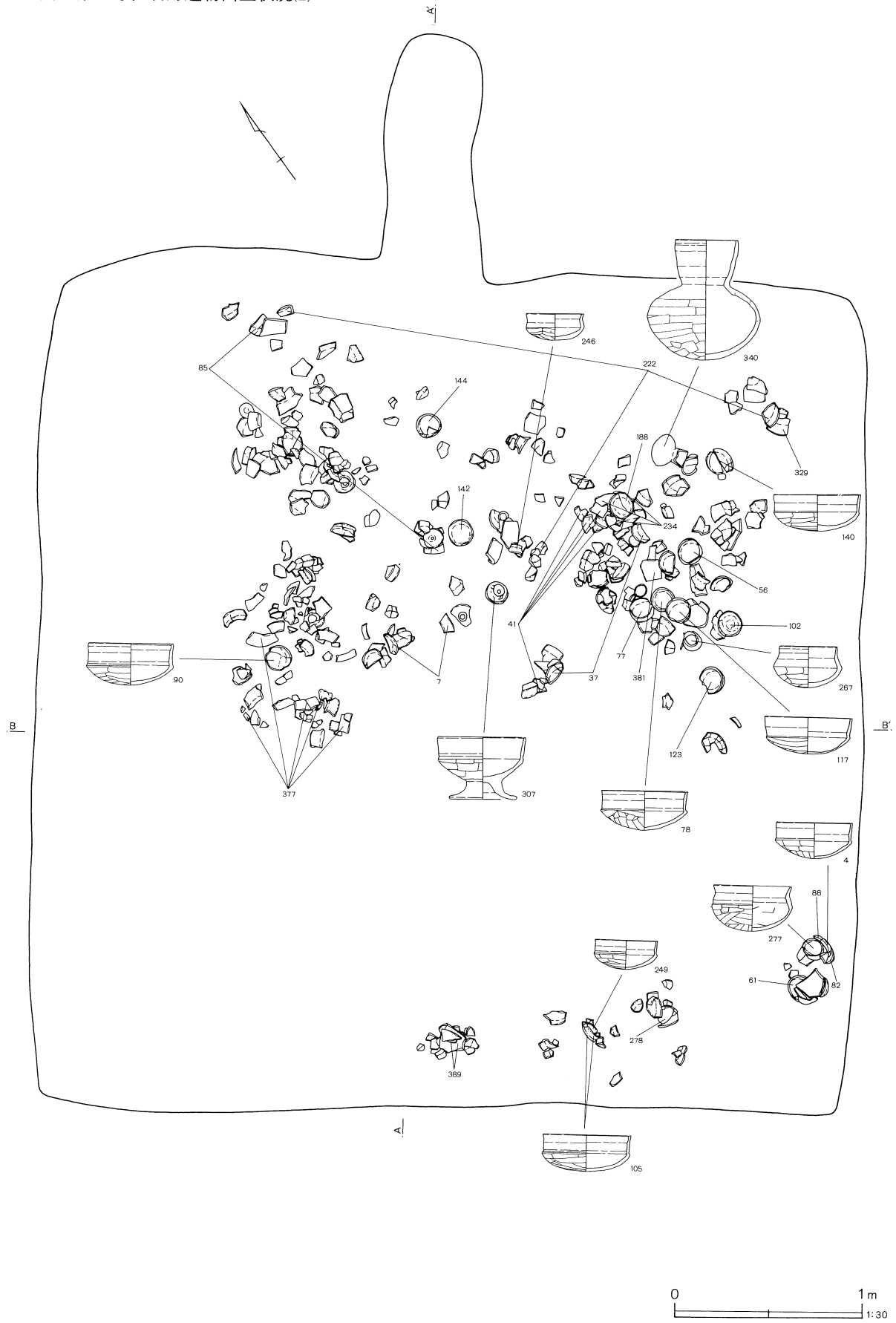
もう一つは、住居跡南西コーナーに集中するブロックで、床面から浮いていた遺物が多く、埋没の過程で流れ込んだものと思われる。坏や高坏などの小形品が多くみられる。土器のほかには土製の紡錘車が出土している。

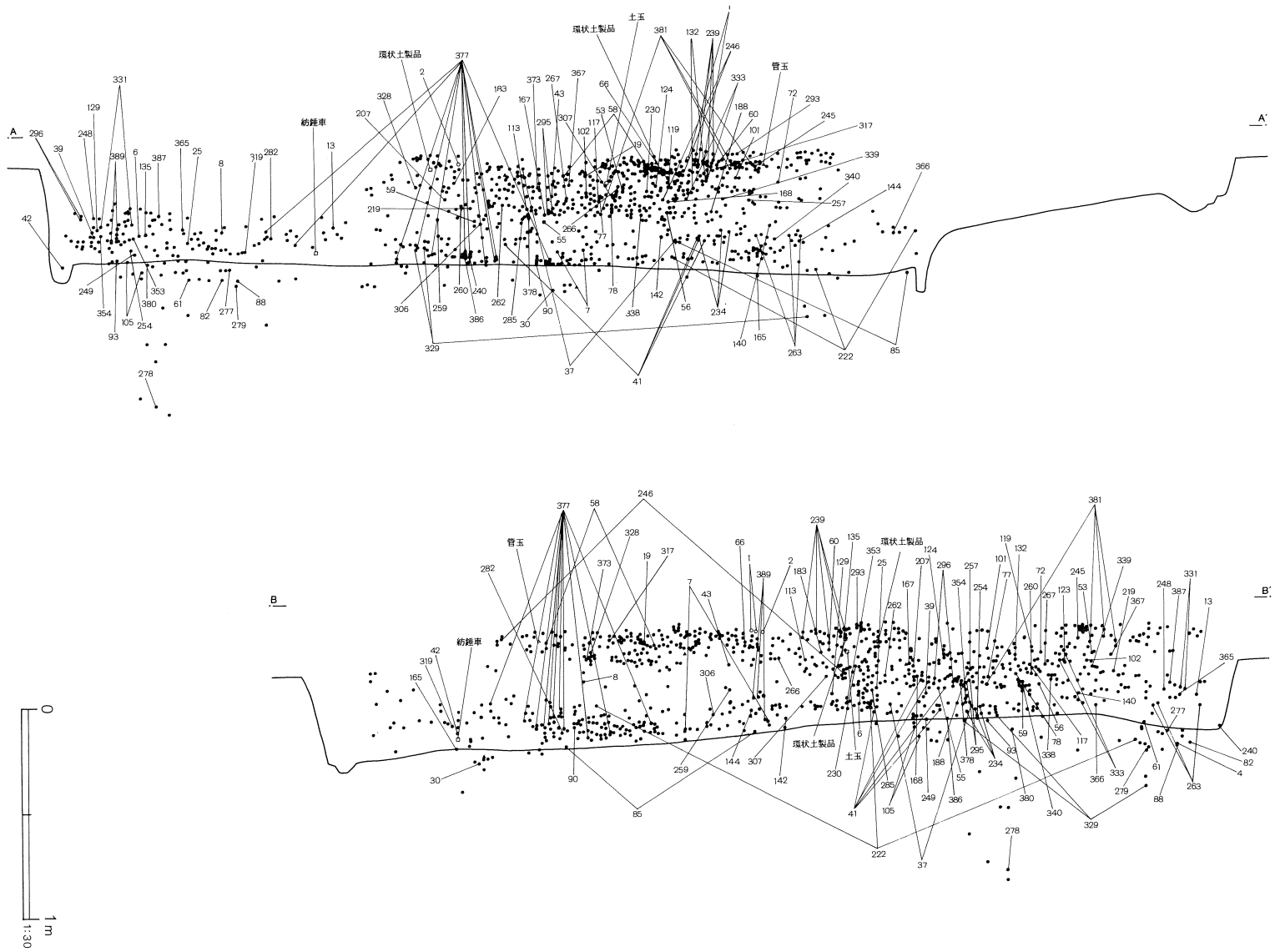
カマドからは遺物がほとんど出土しなかった。カマド右側の覆土中からは土製支脚の破損品が出土している。貯蔵穴、ピット1、ピット3からは土師器片が少量出土したのみである。

1・2は須恵器である。1は蓋で、天井部上半は3段のヘラケズリ、それ以外の部分にはロクロナデ調整が施される。天井部はやや扁平で、口縁端部は凹み外傾する。口縁部と天井部との境の稜は明瞭である。2は坏で、底部を欠損しており残存率は低い。体部下半はヘラケズリ、それ以外の部分にはロクロナデ調整が施される。口縁部は内傾し、端部には浅い凹みのある平坦面をもつ。体部は深く、丸味をもつものと考えられる。横方向に突出した受け部をもち、端部はやや丸くなっている。1・2とも焼成は良好で、色調は灰白色か灰色をしている。胎土には黒色微粒子を少量含んでいるが緻密である。

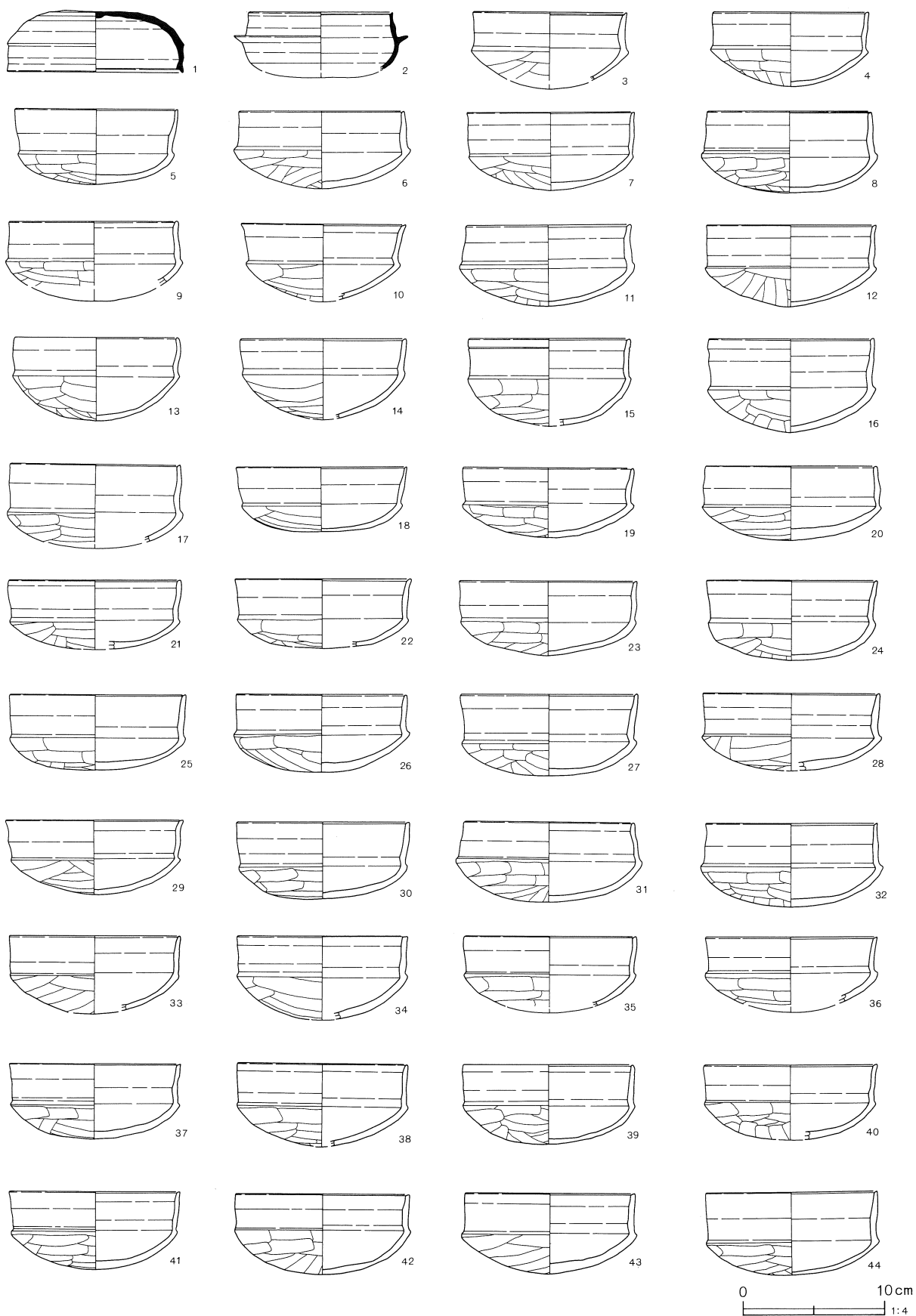
3~239・245~250・252~262は坏である。小形のもの(245~250・252~254、口径が10cm未満)と中形のもの(3~150・167・168・255~258、口径が10cm以上13cm未満)と大形のもの(151~166・169~239・259~262、口径が13cm以上)に分けられる。中形と大形の坏は口縁部が直線的に立ち上がり、端部に平坦面をもつものが多くみられる。坏の大半は摩滅が著しいため口唇部は丸くなってしまい、凹みの有無については判別できないものが多くあった。煤が付着しているものは少量認められた。胎土は大半の坏に角閃石・石英・赤色粒子が含まれており、焼成は良好であった。124は体部外面に多数の擦切痕があり、器面は凸凹である。擦切痕は体部全般にみられるが、体部と口縁部を画する部分だけは通常のヘラケズリ調整が1段施されている。163~168は底部を有する坏である。163~168の底部はあまり明瞭ではない。165は高台状の底部を切り離した後、底部は未調整のままである。166は切り離した後、底部に再調整のヘラケズリが施される。167と168は高台状の底部が残ったものである。体部はヘラや指頭によるナデ調整で、ヘラケズリは施されていない。254・261は底部に焼成後穿孔されている。262は高坏の脚部分を欠いた形をしている。底部はヘラケズリ調整によって丁寧丸く仕上げられており、整形段階から意識して作られたものと思われる。口縁部のヨコナデ調整などは高坏のそれと変わりはない。

第110図 第3号住居跡遺物出土状況(2)





第112図 第3号住居跡出土遺物(1)

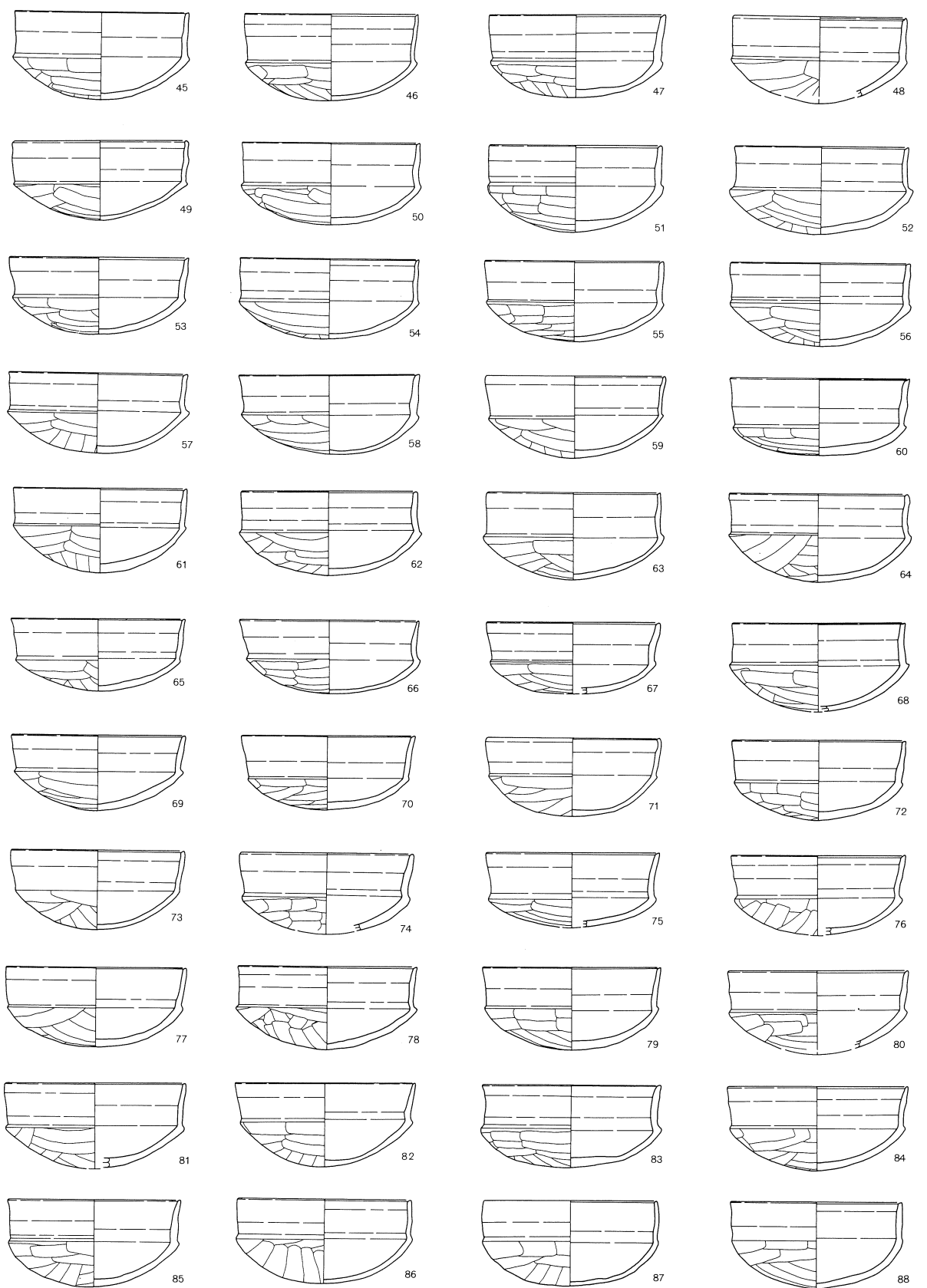




第112~124図 第3号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	12.3	4.2		C'H'J'	A	灰白	80%	No.305、306 群馬産？
2	坏	(10.0)			C'H'J'	A	灰	25%	No.525 群馬産？
3	坏	(10.8)			BC'DG'	A	黄橙	20%	カマド
4	坏	11.0	5.2		BC'D	A	橙	95%	No.794
5	坏	(11.4)	(5.3)		BC'D	A	橙	35%	No.696、1027、1082
6	坏	11.6	5.4		BC'DGH'	A	橙	100%	No.146
7	坏	11.8	5.5		BCDGH'	A	橙	100%	No.859、860
8	坏	11.6	5.7		BC'DG'H'	A	橙	100%	No.44
9	坏	11.8			BCDGH'	A	橙	80%	No.49
10	坏	(11.6)			BC'D	A	橙	25%	No.1057
11	坏	11.6	5.7		BC'DG'H'	A	橙	80%	No.827、1029 底部外面は黒く変色
12	坏	(11.8)	(5.7)		BC'D	A	橙	40%	No.64
13	坏	11.4	5.8		BC'DGH'	A	橙	95%	No.88
14	坏	(11.6)			BC'D	A	橙	30%	No.802
15	坏	(11.4)			BC'DG	A	黄橙	30%	No.943 体部外面は煤ける
16	坏	(11.6)	6.5		BC'DG'H'	A	橙	60%	No.967 体部外面は黒く変色
17	坏	(11.8)			BC'DG'	A	橙	35%	No.899、902
18	坏	(12.0)			BC'DG	A	橙	25%	No.396
19	坏	12.0	4.9		BCDGH'	A	橙	95%	No.442
20	坏	(12.0)	5.2		BC'DGH'	A	橙	50%	No.128
21	坏	(12.0)			BC'DG'H'	A	橙	20%	III区下層
22	坏	(12.4)			BC'DH'	A	橙	50%	I区
23	坏	(12.4)	(5.2)		BC'D	A	橙	25%	No.567、568
24	坏	(12.0)	(5.6)		BC'DG'H'	A	橙	45%	I区下層
25	坏	12.4	5.3		BC'D	A	橙	100%	No.151 底部外面は黒く変色
26	坏	12.0	5.4		BC'DG'H'	A	橙	70%	No.1095
27	坏	(12.4)	(5.7)		BC'DG'H'	A	橙	45%	No.1060、1062、1063
28	坏	(12.4)			BC'DG'	A	浅黄橙	40%	II区下層
29	坏	12.4	5.2		C'DG	A	橙	80%	No.692、693
30	坏	12.2	5.3		BC'DG'H'	A	橙	70%	No.387 体部外面は黒く変色
31	坏	(12.0)	(5.6)		BC'DG'H'	A	橙	60%	I区
32	坏	(12.0)	5.8		BC'DG'	A	黄橙	45%	No.1044 体部外面は黒く変色
33	坏	(12.0)			BC'DG'H'	A	橙	30%	I区
34	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	No.660
35	坏	(12.0)			BCDG	A	橙	20%	覆土
36	坏	(12.0)			BC'DG'	A	橙	15%	No.437 体部外面は黒く変色
37	坏	12.0	5.3		BC'DG	A	橙	95%	No.788、1037
38	坏	(12.0)			BC'D	A	橙	15%	No.236
39	坏	12.0	5.6		B'CDGH'	A	橙	100%	No.131 外面に黒斑
40	坏	(12.2)			BC'G'	A	橙	35%	No.218
41	坏	12.0	5.4		C'DG'	A	橙	90%	No.1030、1031、1034、1035、1071
42	坏	12.2	5.6		BC'DG'H'	A	橙	100%	No.41
43	坏	12.0	5.6		BC'DGH'	A	橙	100%	No.542
44	坏	(12.0)	(5.8)		BC'DG'	A	橙	45%	No.889
45	坏	(12.0)	(6.0)		BC'D	A	橙	45%	No.337、338
46	坏	(12.0)	(6.0)		BC'DH'	A	橙	50%	No.764、774、778、1027、1083
47	坏	12.2	5.7		BC'DG'H'	A	浅黄橙	80%	No.38
48	坏	(12.0)			BC'DH'	A	橙	20%	I区
49	坏	12.2	5.5		BC'DG	A	黄橙	55%	No.1047、1054、1058
50	坏	(12.3)	5.7		BC'DGH'	A	浅黄橙	75%	No.624
51	坏	12.0	6.0		BC'DG'H'	A	橙	60%	No.1114 体部外面は黒く変色
52	坏	(12.0)	(6.0)		BC'DGH'	A	橙	50%	No.1009
53	坏	12.4	5.3		BCDG'H'	A	橙	100%	No.779

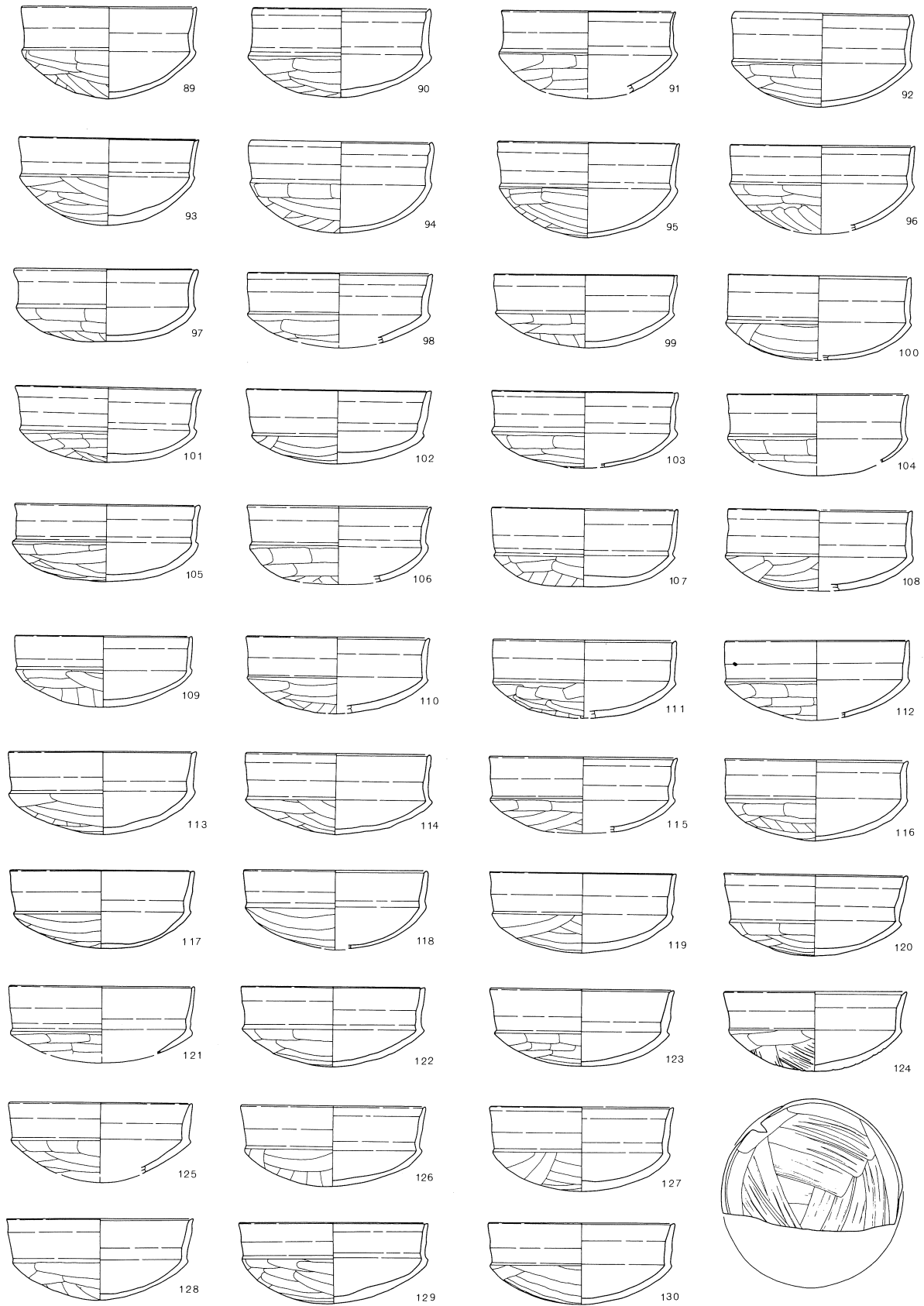
第113图 第3号住居跡出土遺物(2)



0 10cm  
1:4

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
54	坏	(12.4)	(5.5)		C'DG	A	浅黄橙	50%	No748
55	坏	12.4	5.6		BC'DG'H'	A	橙	100%	No763
56	坏	12.4	5.8		BC'DG'	A	橙	100%	No1018
57	坏	12.3	5.6		BC'D	A	橙	90%	No661
58	坏	12.4	5.5		BC'DG'H'	A	橙	90%	No374, 441
59	坏	12.4	5.7		BC'DGH'	A	橙	80%	No739
60	坏	12.4	5.3		BC'DG'H'	A	橙	95%	No300
61	坏	12.0	5.9		BC'DG'H'	A	橙	100%	No799
62	坏	12.2	(5.8)		BCDG	A	橙	60%	No685 体部外面は黒く変色
63	坏	(12.0)	(6.0)		BC'D	A	橙	40%	IV区
64	坏	12.4	6.1		BC'DG'	A	橙	90%	覆土
65	坏	12.1	5.0		BC'DGH'	A	橙	95%	No595
66	坏	12.4	5.1		BC'DGH'	A	橙	95%	No330
67	坏	(12.0)			BC'DG	A	黄橙	20%	I区下層
68	坏	(12.0)			BC'DG'	A	橙	20%	I区覆土 体部外面は黒く変色
69	坏	(12.0)	(5.2)		BC'DGH'	A	橙	25%	No750
70	坏	(12.0)	(5.1)		BC'DG	A	にふい橙	30%	No1052
71	坏	(12.0)	(5.4)		BC'DG'	A	にふい橙	40%	No67
72	坏	12.0	5.5		BC'DG'	A	橙	100%	No224
73	坏	(12.0)	(5.5)		BC'DG'	A	橙	25%	No97
74	坏	(12.0)			BCDG'H'	A	浅黄橙	20%	No47
75	坏	(12.0)			BCDH'	A	橙	20%	III区
76	坏	(12.0)			BC'DG'H'	A	橙	25%	III区
77	坏	12.4	5.5		BC'DG'H'	A	橙	95%	No993
78	坏	12.4	5.7		BCDGH'	A	にふい橙	95%	No995 外面は黒く変色
79	坏	12.4	5.7		BC'DGH'	A	橙	85%	No608
80	坏	(12.4)			BC'D	A	橙	40%	IV区上層
81	坏	(12.4)			BC'DG'	A	橙	45%	No406
82	坏	12.4	5.8		BC'DGH'	A	橙	100%	No795
83	坏	12.4	5.7		BC'DG'	A	黄橙	60%	No576
84	坏	(12.4)	(5.8)		BC'DG	A	橙	25%	No1020
85	坏	12.0	6.0		BC'D	A	橙	85%	No980, 1076
86	坏	(12.0)	(5.8)		BC'DG	A	橙	35%	No113
87	坏	(12.0)	(5.8)		BC'D	A	橙	40%	No101
88	坏	12.0	6.0		BC'DG'H'	A	橙	95%	No794
89	坏	(12.0)	(6.3)		BC'DG	A	黄橙	45%	No528 体部外面は黒く変色
90	坏	(12.2)	6.1		BC'DG'H'	A	橙	65%	No888
91	坏	(12.0)			BCDH'	A	橙	15%	No43
92	坏	(12.2)	6.4		BC'DG'	A	浅黄橙	70%	No1、2 内面全体が煤ける
93	坏	12.4	6.0		BC'DG'	A	橙	95%	No127
94	坏	(12.4)	(6.2)		BC'DG'	A	橙	60%	No120
95	坏	(12.4)	(6.5)		BC'DG'	A	にふい橙	40%	No987
96	坏	(12.6)			BC'DG'H'	A	橙	20%	No164
97	坏	(12.6)	(4.9)		BC'DG'H'	A	浅黄橙	40%	No58, 59 体部外面は黒く変色
98	坏	(12.6)			BC'DH'	A	橙	30%	No584, 588
99	坏	12.6	5.0		BC'DG'	A	橙	75%	No1041 体部外面は黒く変色
100	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	橙	35%	No721
101	坏	12.8	5.1		BC'DGH'	A	浅黄橙	95%	No219
102	坏	12.8	5.0		BC'DG'H'	A	橙	95%	No989 外面に煤が付着
103	坏	(12.8)			BC'D	A	橙	35%	No1056
104	坏	(12.6)			BC'D	A	橙	30%	No339
105	坏	12.8	5.3		BC'DG'	A	橙	95%	No807, 808
106	坏	(12.6)			BC'DG	A	橙	30%	No345
107	坏	(12.8)	(5.3)		BC'D	A	橙	60%	No133, 136

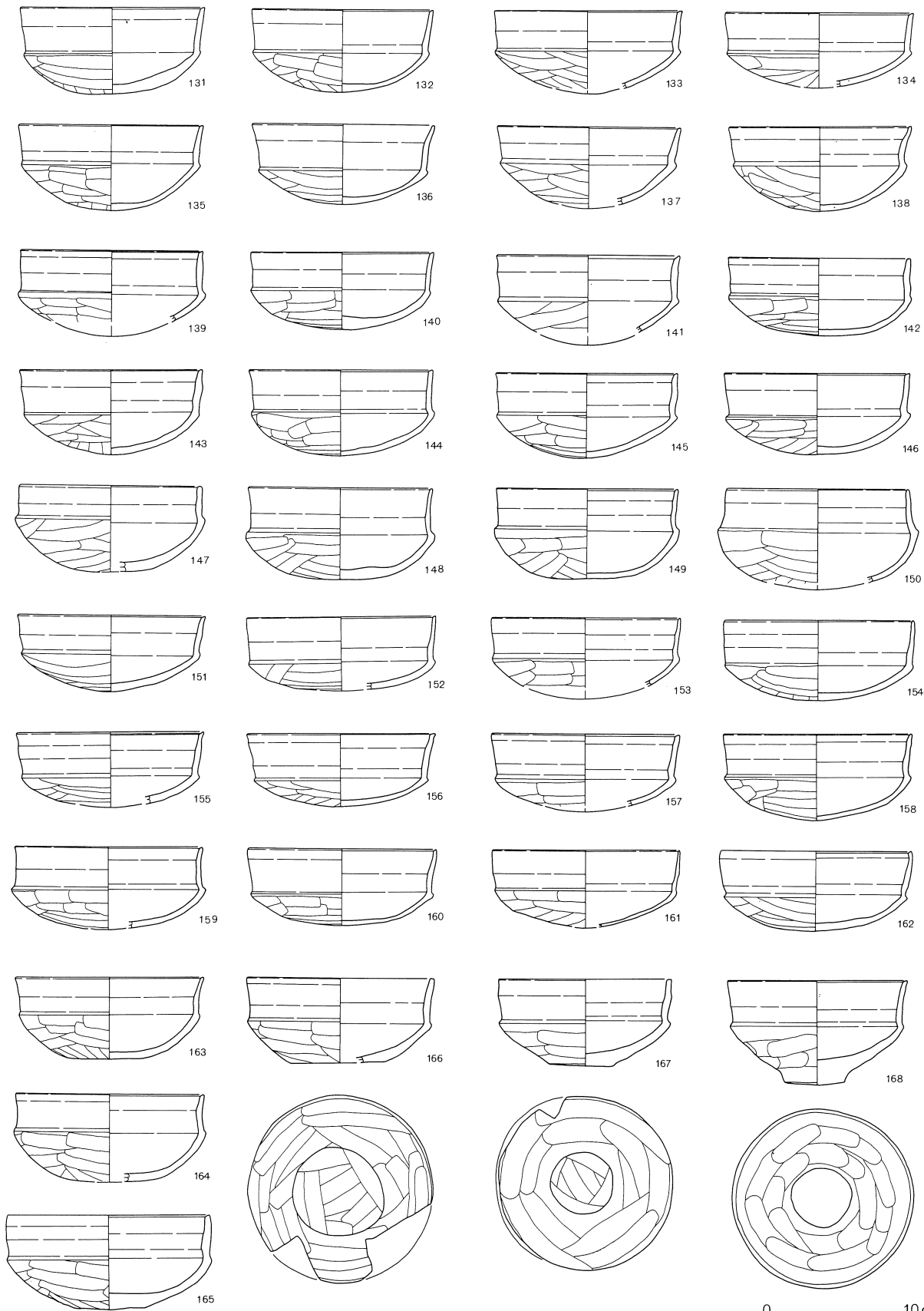
第114图 第3号住居跡出土遺物(3)



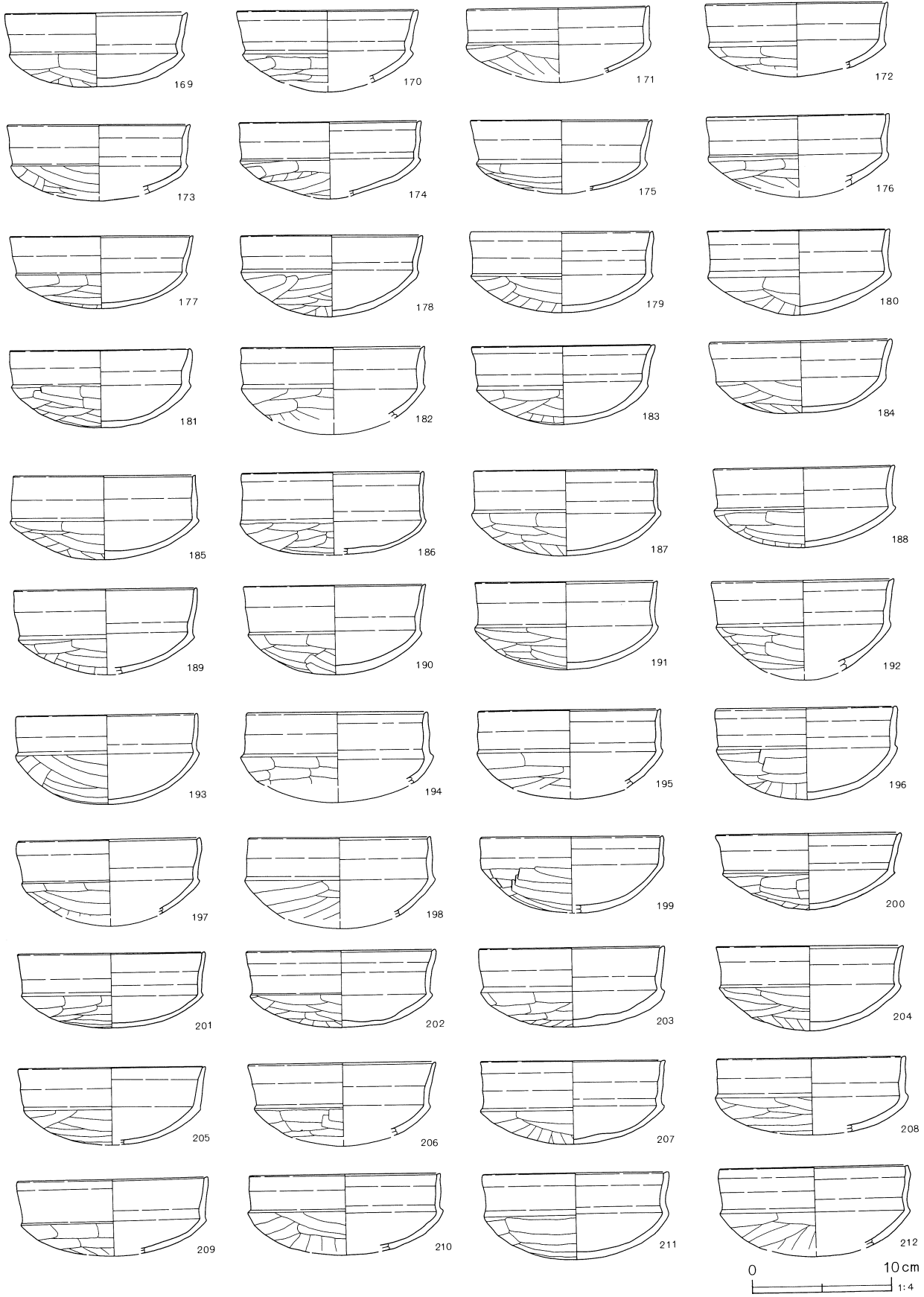
0 10cm  
1:4

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
108	坏	(12.6)			BCDG'	A	にふい橙	40%	No.904 内面全体が煤ける
109	坏	(12.0)	(4.9)		BC'DG'	A	橙	20%	No.742
110	坏	(12.6)			BC'DG'H'	A	橙	25%	No.1023
111	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	橙	40%	No.1075
112	坏	(12.6)			BC'G	A	橙	20%	II区一括
113	坏	12.9	5.7		BC'DG'H'	A	にふい橙	95%	No.585
114	坏	(12.6)	(5.5)		BC'DGH'	A	橙	70%	No.412, 839
115	坏	(12.8)			BC'DGH'	A	橙	35%	No.597
116	坏	(12.6)	(5.5)		BC'DG'H'	A	橙	55%	No.952, 953
117	坏	12.8	5.3		BC'DG'	A	浅黄橙	85%	No.991
118	坏	(12.6)			BC'DG'	A	橙	30%	No.114
119	坏	(12.8)	5.5		BC'DH'	A	橙	80%	No.662
120	坏	(12.6)	(5.5)		BC'D	A	浅黄橙	50%	No.206
121	坏	(12.6)			BC'D	A	橙	35%	I区、III区
122	坏	(12.6)	(5.5)		BC'DG	A	橙	40%	No.789
123	坏	12.7	5.3		BC'DGH'	A	橙	90%	No.988 底部外面は黒く変色
124	坏	(12.6)	(5.4)		BC'DG	A	橙	60%	No.645
125	坏	(12.6)			BC'D	A	橙	25%	II区
126	坏	12.6	5.5		BCDG	A	橙	60%	No.580
127	坏	12.6	5.8		BC'DG'	A	橙	95%	No.569
128	坏	(12.8)	5.5		BC'DG	A	橙	50%	No.307, 308
129	坏	12.9	5.7		BC'D	A	橙	95%	No.72
130	坏	(12.8)	(5.6)		BC'DGH'	A	橙	40%	No.214
131	坏	12.8	6.0		BC'DG'	A	橙	90%	No.144, 145, 809
132	坏	12.6	5.7		BC'DG	A	橙	95%	No.667, 668
133	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	浅黄橙	40%	No.651
134	坏	(13.0)			BC'DG	A	橙	25%	No.642
135	坏	12.8	5.9		BC'DG'	A	橙	100%	No.73
136	坏	(12.6)	(5.5)		BC'H'	A	橙	40%	No.377, 515 体部外面は黒く変色
137	坏	(12.6)			BC'DG'H'	A	橙	30%	No.1107, 1108
138	坏	12.6	5.8		BC'DGH'	A	橙	90%	No.797, 798
139	坏	(12.6)			BC'DG'	A	橙	20%	I区
140	坏	12.6	5.3		BC'DG'H'	A	橙	85%	No.1017
141	坏	(12.6)			BC'DG'H'	A	橙	20%	I区
142	坏	12.6	5.4		BC'DG'H'	A	橙	90%	No.851
143	坏	12.6	5.8		BC'DG	A	浅黄橙	80%	No.30, 45, 48
144	坏	12.7	5.9		BC'DGH'	A	橙	95%	No.977
145	坏	12.6	5.8		BC'DG'	A	橙	85%	No.110
146	坏	12.9	5.6		BC'DGH'	A	橙	80%	No.686
147	坏	(12.6)			BCDG	A	橙	20%	I区
148	坏	(12.8)	(6.3)		BC'DG'H'	A	浅黄橙	40%	III区下層 体部外面は黒く変色
149	坏	(12.6)			BC'DG'H'	A	橙	40%	No.857, 928 内面全体が煤ける
150	坏	(12.6)			BC'DG'H'	A	橙	15%	カマド
151	坏	(13.0)	(5.2)		BC'DH'	A	橙	45%	No.348
152	坏	(13.0)			BC'DH'	A	にふい橙	30%	No.429 体部外面は黒く変色
153	坏	(13.0)			BC'D	A	橙	15%	II区
154	坏	13.0	5.6		BC'D	A	浅黄橙	85%	II区 体部外面は黒く変色
155	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	橙	15%	III区
156	坏	(13.0)	(5.0)		BC'DG'	A	橙	25%	I区
157	坏	(13.0)			BC'D	A	橙	20%	No.855
158	坏	(13.0)	(5.9)		BC'DG	A	橙	40%	No.313
159	坏	(13.0)			BC'DG'	A	橙	30%	No.939
160	坏	(13.0)	(5.3)		BC'DG'	A	橙	30%	No.420
161	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	橙	30%	No.112

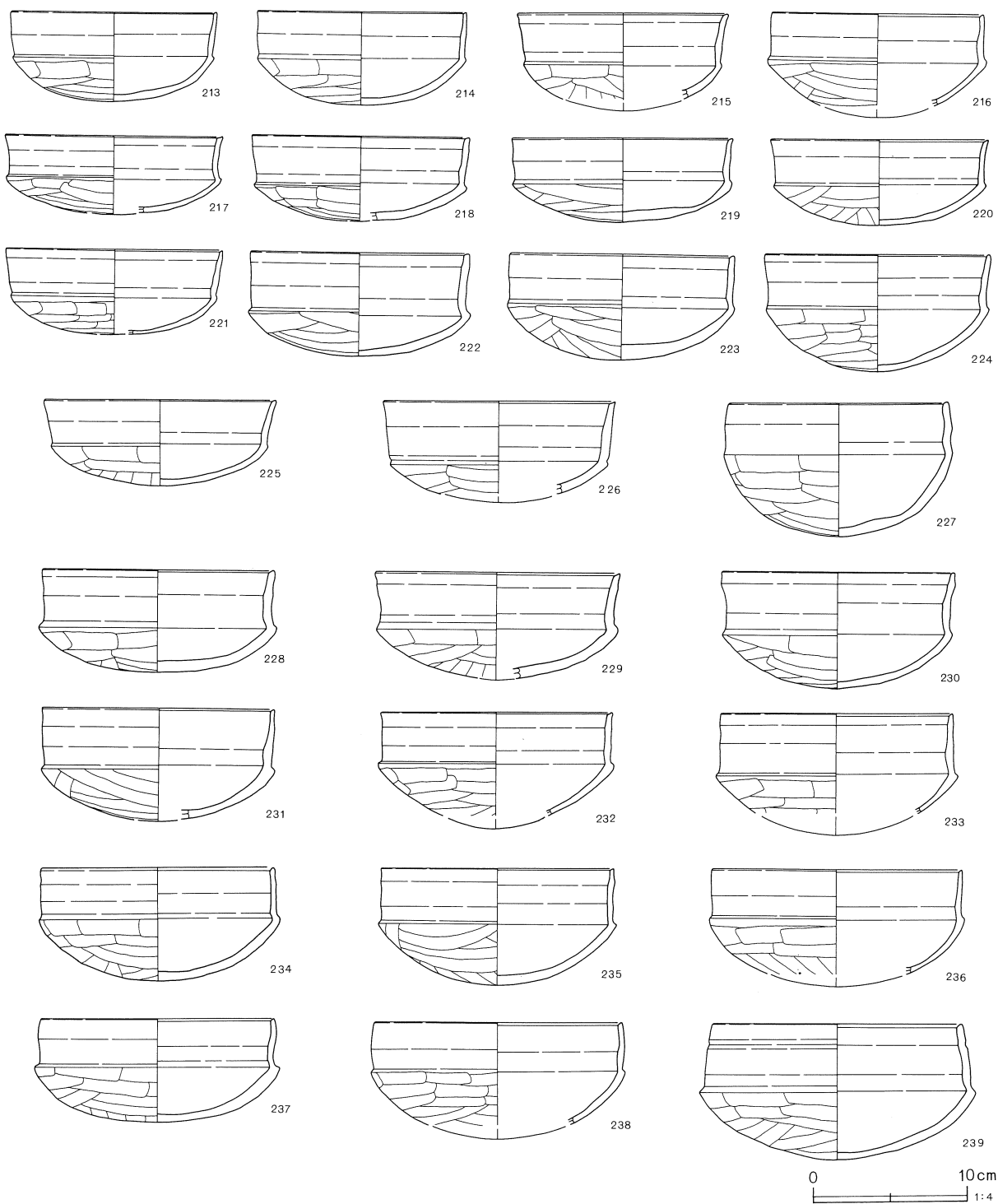
第115図 第3号住居跡出土遺物(4)



第116図 第3号住居跡出土遺物(5)



第117図 第3号住居跡出土遺物(6)

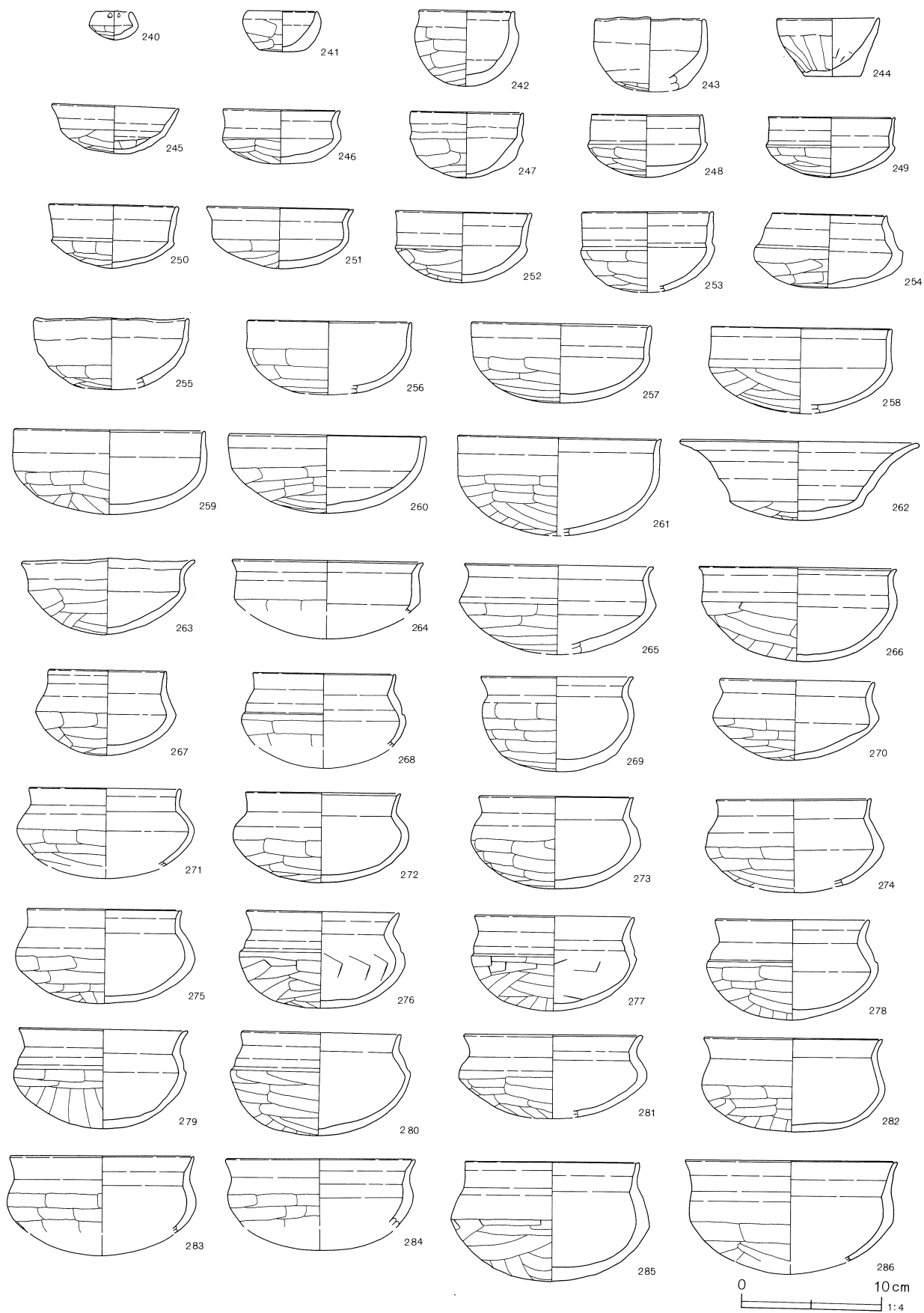


番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
162	坏	(13.0)	(5.5)		BC'DH'	A	橙	45%	I区上層
163	坏	(13.0)	5.6		BC'DG'H'	A	橙	60%	覆土 体部外面は黒く変色
164	坏	(13.0)			BC'DG'	A	橙	40%	No.493、494
165	坏	(14.0)	(6.6)		BC'DH'	A	橙	50%	No.360
166	坏	(13.0)	(5.9)	6.4	BC'DG	A	橙	70%	No.373、506 底部外面は黒く変色
167	坏	(12.0)	(6.0)	4.4	BC'DG'	A	橙	70%	No.582 底部外面は黒く変色
168	坏	12.4	7.2	4.1	BC'DG'H'	A	橙	95%	No.647



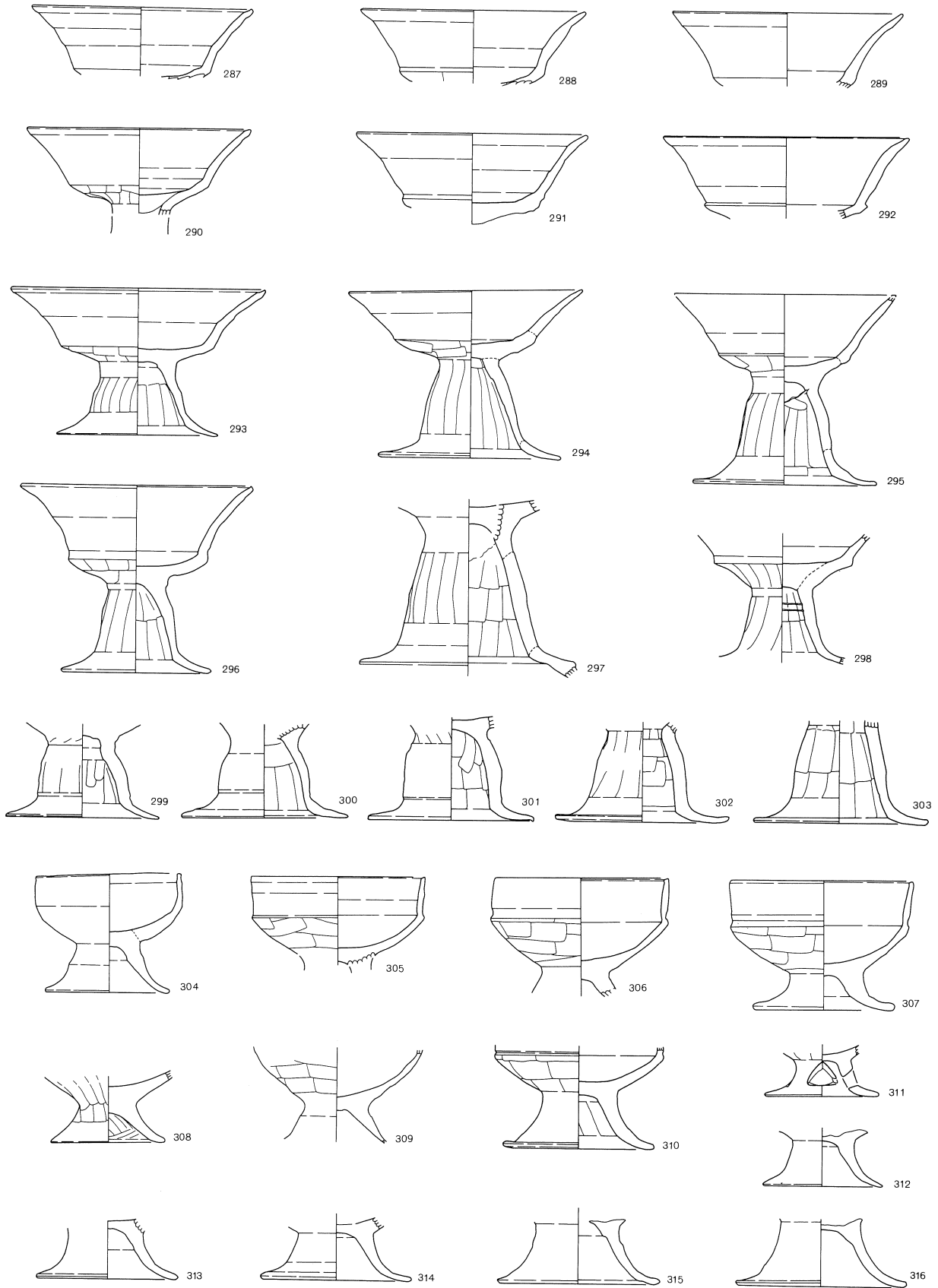
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
169	坏	(13.0)	(5.2)		BC'DG	A	橙	20%	No.947
170	坏	(13.0)			BC'DG'	A	橙	30%	覆土
171	坏	(13.0)			BC'DG	A	橙	20%	I区
172	坏	(13.0)			BC'DG	A	橙	15%	No.35
173	坏	(13.0)			BC'DG'	A	橙	25%	No.768
174	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	橙	35%	No.340 外面に煤が付着
175	坏	(13.0)			BC'D	A	橙	40%	No.393
176	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	30%	No.777
177	坏	(13.0)			BC'DG	A	橙	35%	No.751 体部外面は黒く変色
178	坏	13.0	5.8		BC'DG	A	黄橙	90%	No.71
179	坏	(13.0)	5.8		BC'D	A	橙	60%	No.445
180	坏	(13.0)	(6.0)		BCDGH'	A	橙	25%	No.669 体部外面は黒く変色
181	坏	(13.0)	(5.5)		BC'DG'	A	橙	40%	No.150
182	坏	(13.0)			BC'DG'	A	浅黄橙	15%	No.1039
183	坏	13.1	5.6		BC'DGH'	A	橙	100%	No.531
184	坏	(13.0)	(5.1)		BC'DG'	A	橙	20%	II区
185	坏	(13.0)	(5.9)		BC'DG'	A	にふい橙	40%	カマド
186	坏	13.0			BC'D	A	橙	55%	No.1066~1068,1071
187	坏	(13.0)	(6.0)		BC'DH'	A	橙	50%	No.354, 894 体部外面は黒く変色
188	坏	13.0	5.7		BC'DH'	A	橙	90%	No.1032
189	坏	(13.0)			C'DG'	A	橙	35%	No.175
190	坏	(13.0)	(6.3)		C'DGH'	A	橙	50%	No.997~999
191	坏	13.0	6.2		BC'DG	A	橙	70%	No.261
192	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	橙	20%	No.39
193	坏	(13.0)	6.3		BC'DG'	A	橙	50%	No.89, 116
194	坏	(13.0)			C'DG'	A	橙	20%	No.864
195	坏	(13.0)			BC'D	A	橙	15%	No.513
196	坏	(13.0)	6.5		BC'DGH'	A	橙	35%	覆土
197	坏	(13.0)			BC'D	A	橙	30%	II区下層
198	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	橙	30%	III区下層 体部外面は黒く変色
199	坏	(13.0)			BC'DG	A	橙	40%	No.616
200	坏	(13.2)	(5.4)		BC'DG	A	橙	50%	No.267 体部外面は黒く変色
201	坏	(13.4)	(5.3)		BCD	A	橙	50%	No.621, 635
202	坏	13.6	5.5		BC'D	A	橙	100%	No.719
203	坏	(13.2)	5.6		BC'DH'	A	橙	75%	No.99
204	坏	(13.2)	(6.0)		BC'DG'	A	橙	35%	No.235
205	坏	(13.4)			BC'DGH'	A	橙	30%	No.221
206	坏	(13.4)			BC'DG'H'	A	赤褐	30%	No.856, 1086
207	坏	13.2	5.9		BC'DG'H'	A	橙	90%	No.570
208	坏	(13.4)			C'DG'H'	A	にふい橙	15%	No.453
209	坏	(13.6)			BC'DG'	A	橙	20%	No.856
210	坏	(13.6)			BC'D	A	橙	15%	No.601
211	坏	(13.2)	6.1		BC'GH'	A	橙	75%	No.769
212	坏	(13.4)			BC'DG'	A	橙	15%	I区
213	坏	13.4	5.8		BC'DG'H'	A	橙	80%	No.1111 体部外面は黒く変色
214	坏	(13.4)	6.0		BC'DG'H'	A	橙	50%	No.31~33
215	坏	(13.6)			BC'DG	A	橙	35%	No.765, 1087
216	坏	13.6			BC'D	A	橙	50%	No.805, 810
217	坏	(14.0)			C'DG'	A	橙	40%	No.691
218	坏	(14.0)			BC'DG'	A	黄橙	25%	No.656
219	坏	14.2	5.4		BCDGH'	A	橙	100%	No.745
220	坏	(14.0)	(5.5)		BC'D	A	浅黄橙	35%	No.732, 735 体部外面は黒く変色
221	坏	(14.0)			BC'D	A	橙	30%	No.1089
222	坏	14.2	6.6		BC'DG'	A	橙	80%	No.841, 938, 1072

第118图 第3号住居跡出土遺物(7)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
223	坏	(14.4)	6.8	3.4	BC'DGH'	A	橙	50%	No.946
224	坏	(14.4)	7.5		BC'DG'H'	A	橙	55%	No.629、1090、1091、1093 体部外面は黒く変色
225	坏	(15.0)	(5.5)		BC'DH'	A	にふい橙	25%	No.431、432 体部外面は黒く変色
226	坏	(15.0)			BC'DG'H'	A	橙	20%	No.649
227	坏	(14.0)	8.5		BC'DG'	A	黄橙	45%	No.163、165
228	坏	(15.0)	(6.6)		BC'DG	A	橙	30%	No.458
229	坏	(15.8)			BC'DG	A	橙	35%	No.1002、1014
230	坏	(15.0)	7.5		BC'DG	A	橙	40%	No.621
231	坏	(15.0)			BC'D	A	橙	20%	No.260
232	坏	(15.0)			BC'DG'H'	A	橙	25%	No.522
233	坏	(15.0)			BC'DG	A	橙	25%	カマド
234	坏	(15.0)	(7.3)		BC'DGH'	A	橙	75%	No.1088、1097、1099
235	坏	(15.0)	(7.5)		BC'DG'	A	橙	75%	No.555
236	坏	(16.0)			BC'DG	A	橙	20%	No.157
237	坏	(15.0)	6.7		BC'DH'	A	橙	65%	No.996
238	坏	(16.0)			BC'D	A	橙	30%	No.804
239	坏	(16.0)	(7.7)		BDG	A	明赤褐	45%	No.288、290~294
240	ミニチュア	2.5	2.0		BC'DG'	A	橙	100%	No.787 体部外面は黒く変色
241	ミニチュア	5.0	2.9		BC'DG'	A	橙	100%	No.408
242	ミニチュア	6.8	5.3		BC'DH'	A	浅黄橙	70%	No.676
243	鉢	(7.9)			BC'DH'	A	橙	70%	No.683
244	鉢	(7.3)	(4.1)		BC'DG'	A	橙	90%	No.978
245	坏	8.9	3.4		BC'GH'	A	橙	95%	No.254
246	坏	8.2	3.8		BC'DGH'	A	橙	85%	No.368、836
247	坏	(8.0)	(4.6)		BC'DGH'	A	橙	30%	No.705
248	坏	7.8	4.4		BC'DG	A	橙	100%	No.106 体部外面に黒斑
249	坏	9.0	4.2		BC'DG'	A	橙	100%	No.806
250	坏	(9.2)	(4.5)		BC'DG'	A	橙	50%	No.1103
251	碗	(10.4)	(4.3)		BC'DG'H'	A	にふい橙	35%	No.215
252	坏	9.6	5.0		BC'DG'H'	A	橙	95%	No.118、1100
253	坏	9.2			BC'GH'	A	浅黄橙	65%	No.69、155
254	坏	8.1	5.3		BC'DH'	A	橙	95%	No.126
255	坏	(11.0)			BCDGH'	A	橙	25%	No.380
256	坏	(11.6)			BC'DG'H'	A	橙	15%	III区
257	坏	12.8	5.6		BC'DG'H'	A	橙	95%	No.220
258	坏	(12.8)		BC'DG'H'	A	橙	45%	No.465、467	
259	坏	13.6	6.0	BC'DG'H'	A	黄橙	95%	No.521	
260	坏	14.0	5.6	BC'DG'H'	A	橙	100%	No.738	
261	坏	(14.4)		C'DG'	A	にふい橙	50%	No.586、587 底部は焼成後穿孔	
262	坏	17.0	5.5	BCDG'H'	A	橙	95%	No.574 坏部外面は黒く変色	
263	坏	12.2	5.4	BC'D	A	橙	90%	No.631~633 体部外面は黒く変色	
264	碗	(13.6)		BCDG	A	黄橙	25%	南ベルト	
265	碗	13.4		BC'D	A	橙	50%	No.171	
266	碗	14.0	6.5	BC'DGH'	A	明褐	90%	No.557 内外面ともわずかに煤ける	
267	碗	8.3	6.0	BC'DH'	A	橙	95%	No.992	
268	碗	(10.0)		BC'DG'	A	橙	15%	No.826	
269	碗	10.8	6.8	BC'DG'H'	A	橙	100%	No.124	
270	碗	11.0	5.7	BC'DG'	A	橙	90%	No.1022、1023	
271	碗	10.8		BC'DG'	A	にふい橙	70%	No.710、713、714	
272	碗	(11.0)	6.4	BC'DG	A	橙	85%	No.526	
273	碗	11.0	6.5	BC'DG'	A	橙	75%	No.603	
274	碗	11.0		BCDGH'	A	橙	65%	No.484、582、640	
275	碗	10.9	6.7	BC'D	A	橙	90%	No.740	
276	碗	10.9	6.8	BCDGH'	A	にふい褐	90%	No.50	

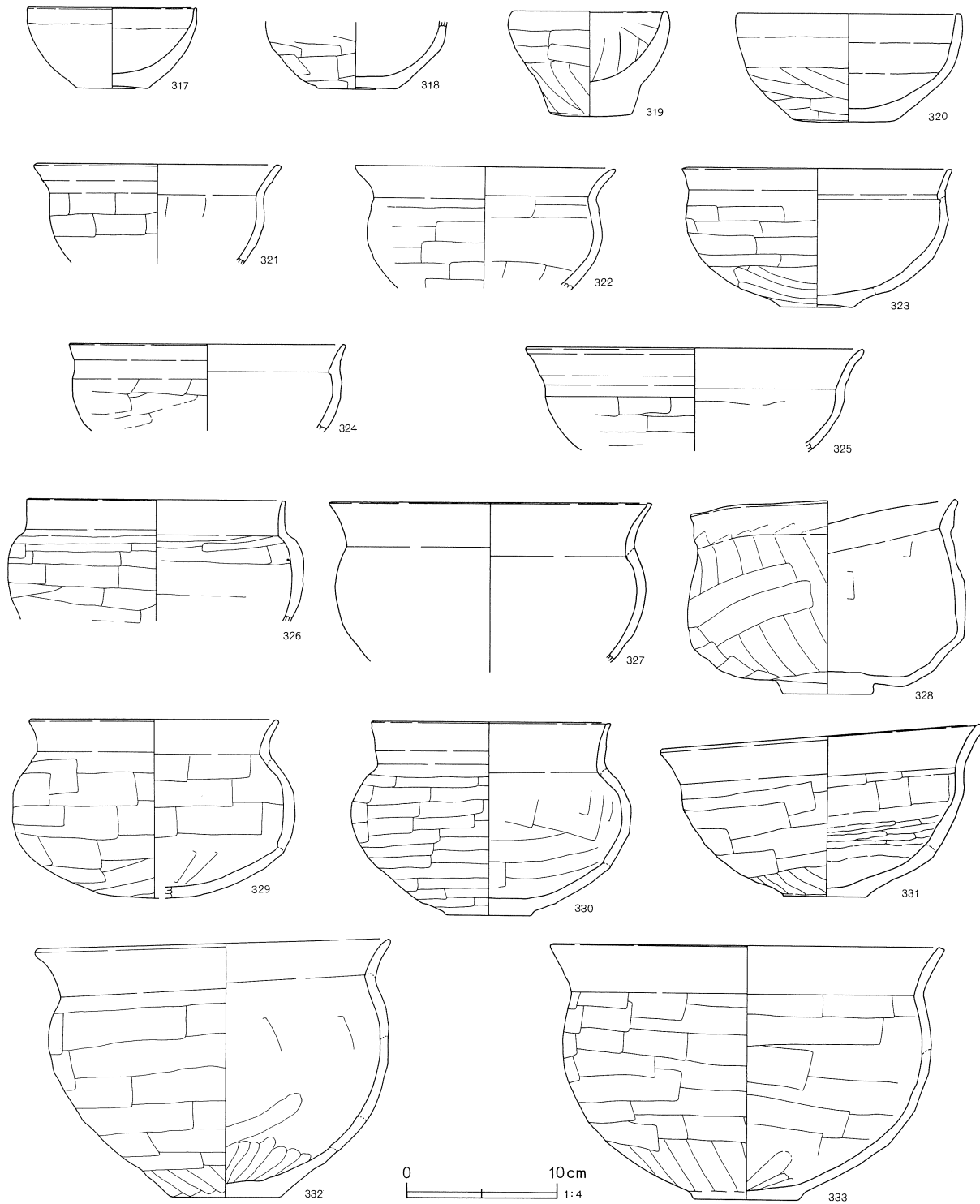
第119图 第3号住居跡出土遺物(8)



0 10cm  
1:4

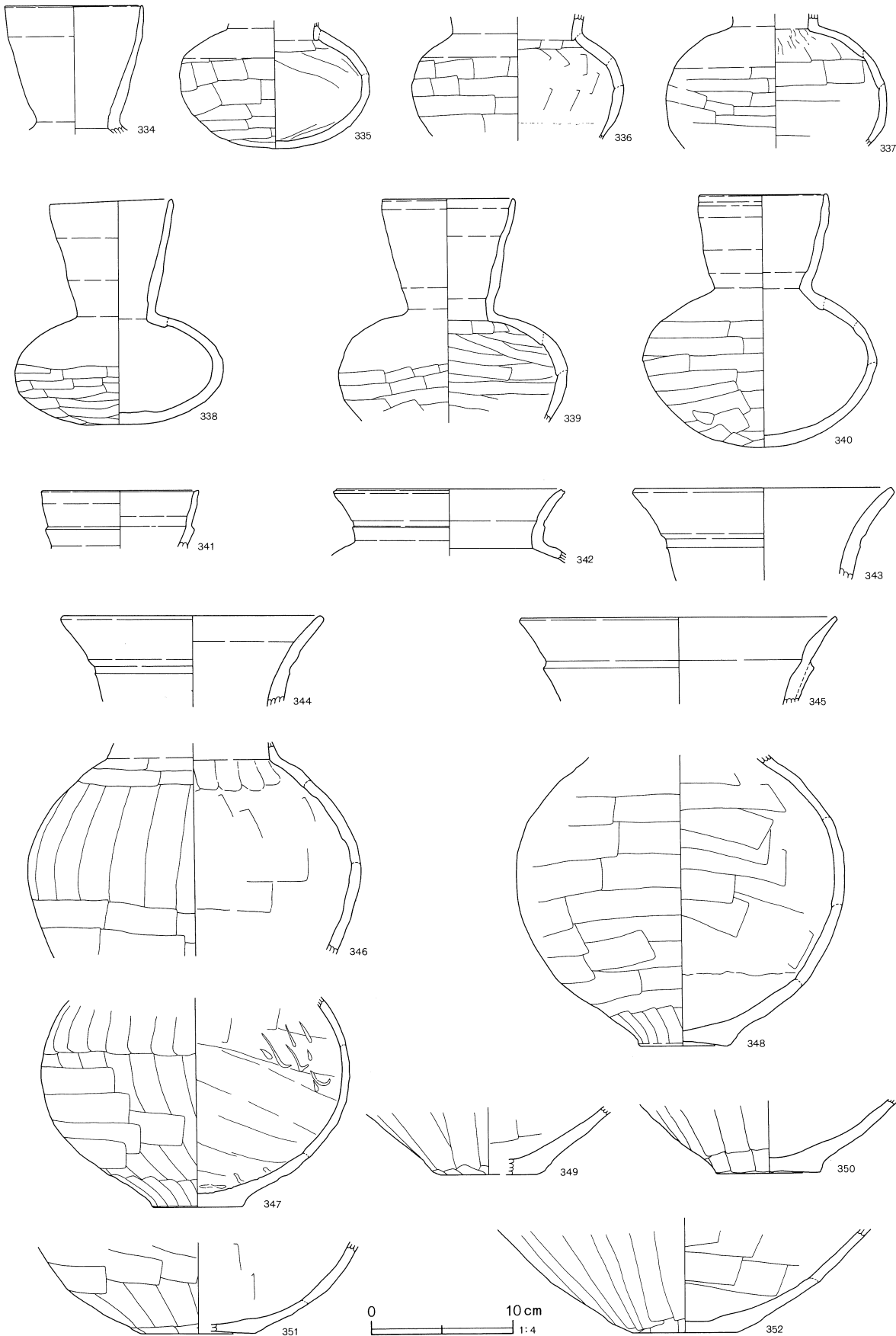
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
277	椀	11.3	6.7		BC'DG'H'	A	橙	95%	No.792
278	椀	10.9	7.1		BC'DG'	A	橙	100%	No.108, 1113
279	椀	12.0	7.1		BC'D	A	橙	95%	No.94
280	椀	11.4	7.3		BC'DG	A	橙	95%	No.125
281	椀	(12.6)			BC'DGH'	A	浅黄橙	40%	No.929 体部外面は黒く変色
282	椀	12.8	6.7		BC'DG'	A	橙	80%	No.51
283	椀	(13.0)			C'DG	A	橙	35%	II区
284	椀	(13.4)			BC'D	A	にぶい橙	25%	I区
285	椀	12.4	8.4		BC'DGH'	A	橙	95%	No.615 外面に煤が附着
286	椀	(15.0)			BC'G	A	橙	15%	No.772
287	高环	15.4			BCDH'	A	橙	90%	No.913, 921, 949, 964
288	高环	15.8			CDH'	A	橙	65%	No.61
289	高环	16.0			BC'DG'H'	A	橙	80%	IV区下層
290	高环	15.6			BCDH'	A	橙	95%	No.363
291	高环	16.2			C'DH'	A	黄橙	80%	No.115
292	高环	(17.6)			BCDG'H	A	橙	25%	No.37
293	高环	(17.7)	(10.2)	(11.2)	BCG'H'	A	橙	45%	No.385, 881, 892
294	高环	16.3	11.9	12.8	BCDH'	A	浅黄橙	60%	No.362
295	高环	(15.4)	(13.3)	12.8	BCDH'	A	橙	80%	No.761, 762
296	高环	16.2	13.1	10.5	BC'DH'	A	橙	80%	No.129, 130
297	高环				C'H'	A	明赤褐	50%	I区上層
298	高环				BCDFGH'	A	橙	60%	No.54
299	高环			10.6	BCDEGH'	A	橙	80%	No.919
300	高环			11.6	CDFG'H'	A	橙	85%	No.83
301	高环			11.6	BCDFH'	A	橙	85%	No.529
302	高环			12.0	C'DH'	A	橙	75%	No.252
303	高环			12.2	BCDFGH'	A	浅黄橙	100%	No.511
304	高环	10.1	8.3	8.7	BDEH'	A	橙	90%	No.505
305	高环	12.1			C'DH'	A	黄橙	60%	No.419
306	高环	12.1			BCDGH'	A	橙	55%	No.63
307	高环	12.7	9.0	9.8	C'DGH'	A	橙	85%	No.830
308	高环			8.0	CDGH'	A	橙	80%	No.933, 1084
309	高环				BCDGH'	A	橙	50%	No.887
310	高环			10.6	BC'DH'	A	橙	80%	No.658
311	高环			(8.0)	BC'DG'	A	橙	45%	IV区上層
312	高环			8.3	BC'DG'H'	A	橙	95%	No.966
313	高环			9.9	BC'DG'H'	A	橙	90%	I区
314	高环			10.6	BCDEG'H'	A	橙	80%	No.828
315	高环			11.3	BCDGH'	A	橙	85%	No.848
316	高环			11.8	BC'DFH'	A	橙	65%	No.835
317	鉢	(11.0)	5.3	4.6	C'DG	A	橙	35%	No.400
318	鉢			5.1	BC'DEGH'	A	橙	50%	No.177
319	鉢	(10.0)	(6.9)	5.4	BC'DG'	A	黄橙	65%	No.32
320	鉢	14.6	7.2		BC'DH'	A	黄橙	100%	No.701 外面と口縁部内面に煤が附着
321	鉢	(16.1)			CDFGH'	A	橙	40%	No.934, 935
322	鉢	(17.0)			BCDFGH'	A	橙	25%	No.862
323	鉢	(17.6)	(9.0)	(4.6)	BC'DH'	A	橙	30%	No.85, 825
324	鉢	(18.0)			BC'DH'	A	橙	20%	II区上層
325	鉢	(22.0)			BC'DFH'	A	橙	10%	No.982
326	鉢	(16.8)			C'DH'	A	橙	25%	No.392
327	鉢	(21.0)			C'DGH'	A	橙	15%	No.695
328	鉢	17.4	12.6	5.7	BCDEGH'	A	黄橙	70%	No.504
329	鉢	16.3	11.7	5.8	BC'H'	A	橙	40%	No.625, 628, 1102
330	鉢	15.6	12.6	5.6	BC'H'	A	橙	75%	No.577, 589, 591, 592, 974, 976, 1033, 1042

第120図 第3号住居跡出土遺物(9)

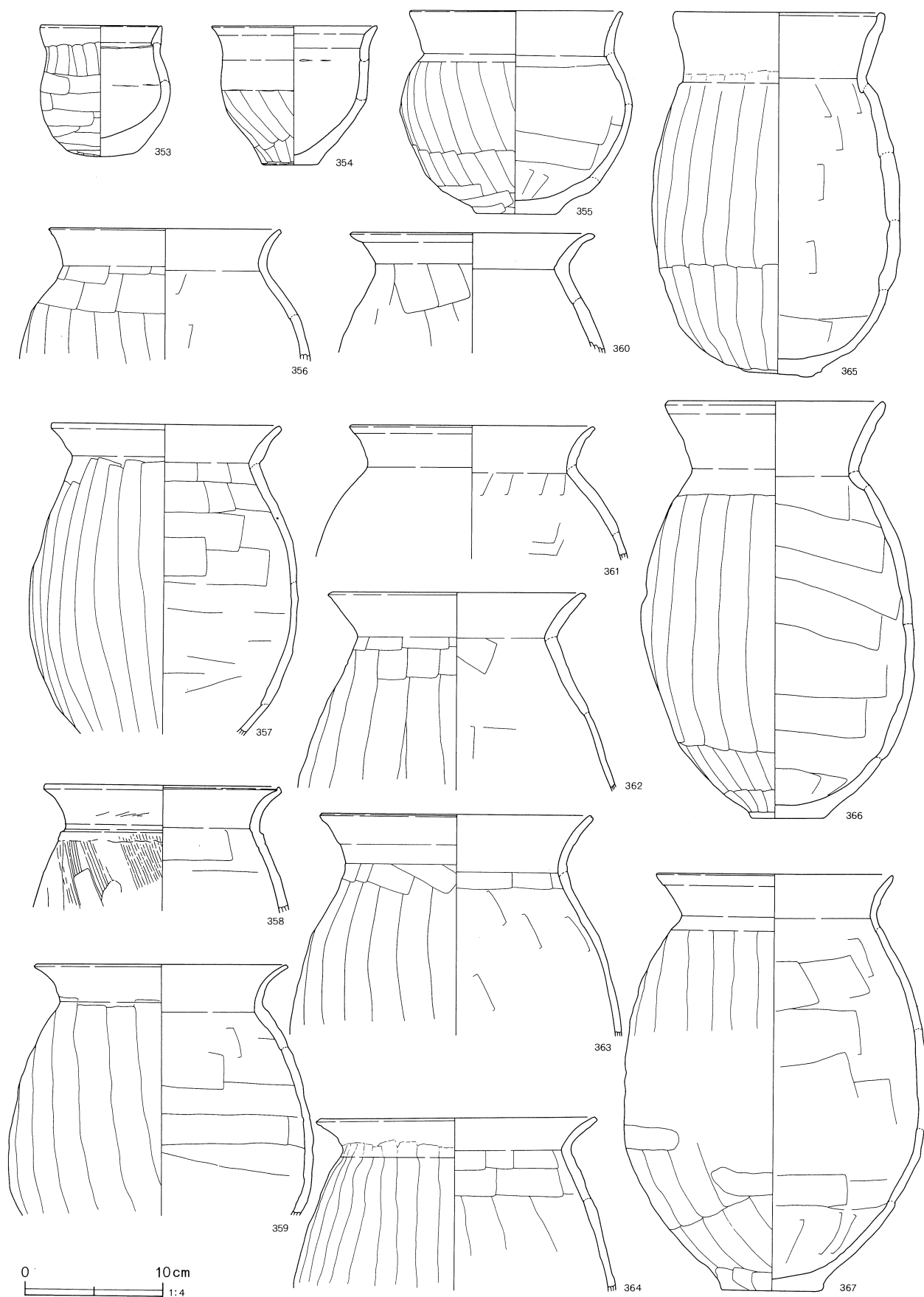


番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
331	鉢	21.1	16.4	5.6	CDEH'	A	橙	95%	No.104, 105
332	鉢	23.3	16.9	7.5	C'H'	A	橙	75%	No.346, 398, 617, 618
333	鉢	25.6	16.7	7.0	BCDFG	A	橙	80%	No.678, 679
334	埴	9.7			BCDG'H'	A	黄橙	80%	No.299, 636, 672
335	埴				BC'DEGH'	A	橙	100%	No.536
336	埴				BCDH'	A	橙	60%	No.341, 375, 443, 472, 844, 847
337	埴				BC'DEGH'	A	橙	45%	No.382, 384, 867

第121図 第3号住居跡出土遺物(10)

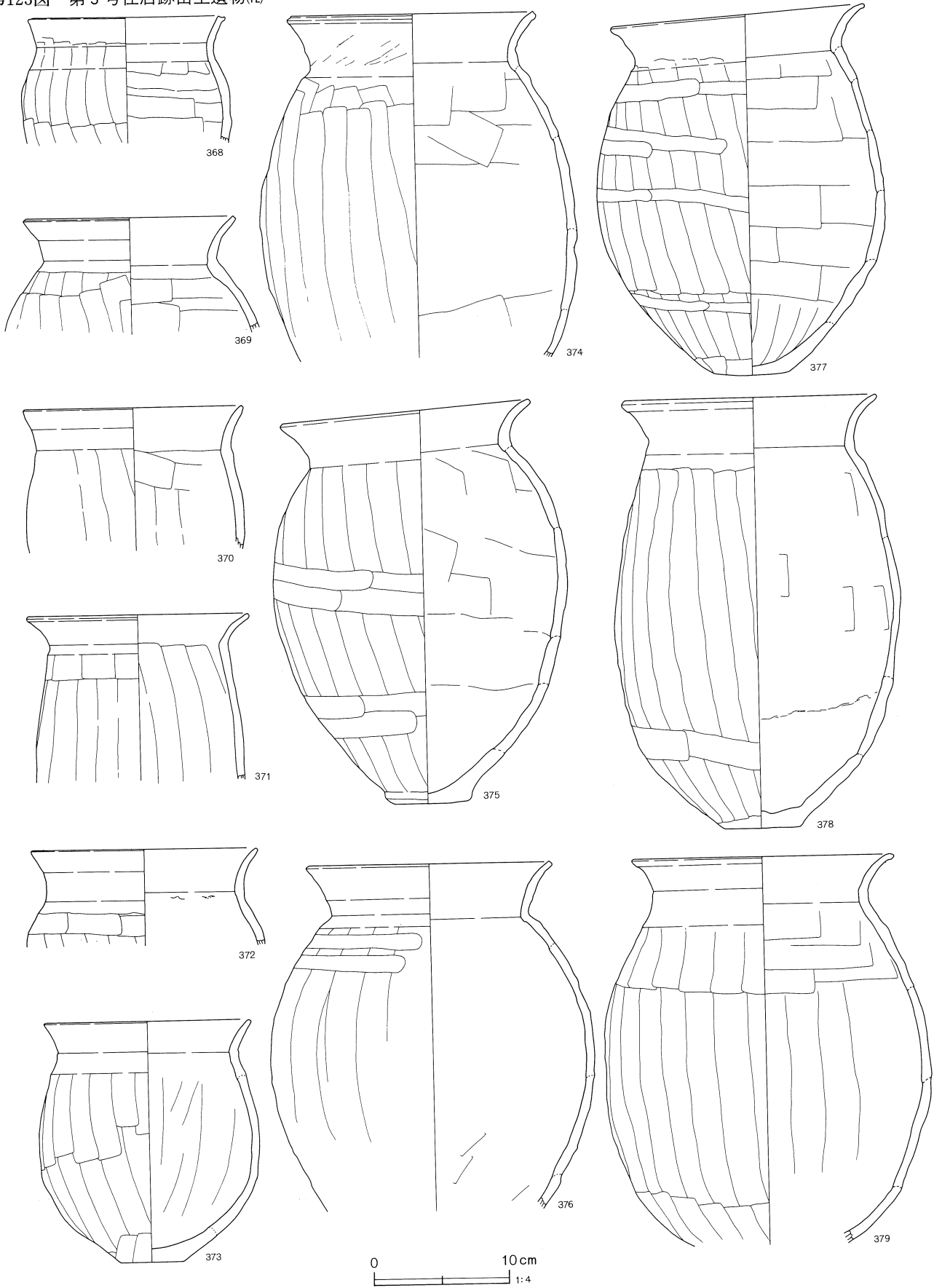


第122図 第3号住居跡出土遺物(II)

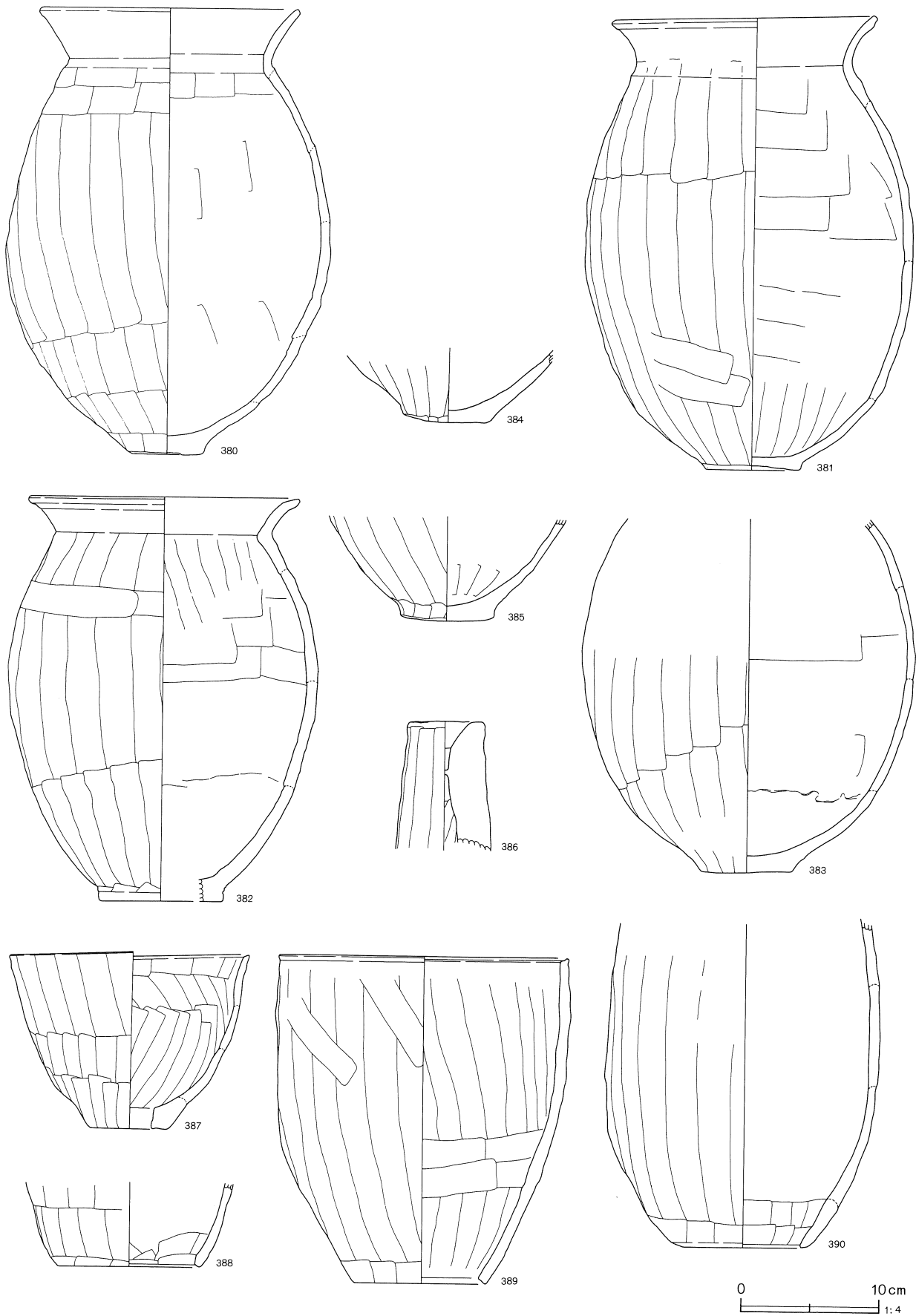




第123図 第3号住居跡出土遺物(12)



第124図 第3号住居跡出土遺物(13)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
338	埴	8.6	15.6		BCDH'	A	橙	100%	No689
339	埴	9.2			BCDG'H'	A	橙	90%	No680
340	埴	8.9	17.5		BC'DH'	A	橙	95%	No1021
341	壺	(11.0)			BC'DG	A	橙	15%	No399
342	壺	(16.2)			BCDH'	A	橙	25%	No727
343	壺	(18.2)			BCDH'	A	橙	20%	No516
344	壺	(18.4)			BC'DH'	A	橙	35%	No173, 174
345	壺	(22.2)			C'DGH'	A	橙	20%	No831
346	壺				BDH'	A	橙	45%	No791, 793, 796, 803, 1110, 1112
347	壺			(6.2)	BC'DH'	A	橙	35%	No486, 487
348	壺			6.2	C'DG	A	橙	60%	No485, 497, 571, 572, 575, 579, 970, 971, 973
349	壺			(6.6)	C'DEGH'	A	橙	35%	I区上層
350	壺			7.3	C'DFH'	A	橙	65%	No418, 565
351	壺			(8.0)	C'FH'	A	橙	20%	No1073
352	壺			(7.3)	BC'DH'	A	黄橙	25%	No13, 865
353	甕	(8.6)	9.4	4.8	BC'DH'	A	黄橙	90%	No147
354	甕	11.8	10.0	4.0	BCDH'	A	橙	95%	No132
355	甕	15.4	14.6	6.0	C'EH'	A	橙	85%	No743
356	甕	(16.8)			BC'DE	A	浅黄橙	25%	IV区上層
357	甕	16.6			BC'DEG'H'	A	黄橙	95%	No737
358	甕	(17.1)			C'DEFH'	A	橙	20%	No366
359	甕	(18.4)			CDEH'	A	浅黄橙	50%	No876, 879
360	甕	(17.6)			BC'DEH'	A	橙	20%	No409
361	甕	(17.7)			BC'DH'	A	橙	20%	No470
362	甕	(18.7)			CDEH'	A	にふい橙	30%	No359, 367
363	甕	(19.7)			BDEH'	A	橙	25%	No502
364	甕	(20.2)			BC'DH'	A	黄橙	45%	No709, 722, 723
365	甕	15.3	26.0	5.1	BCDH'	A	橙	90%	No95
366	甕	15.8	29.9	5.1	BC'DEH'	A	橙	85%	No238
367	甕	17.1	29.7	7.2	BC'DEH'	A	浅黄橙	65%	No776
368	甕	14.4			CDH'	A	橙	60%	No690, 1003, 1004
369	甕	(15.4)			BC'EH'	A	にふい褐	30%	No945
370	甕	(16.0)			BDEH'I	A	浅黄橙	15%	II区
371	甕	(16.2)			BC'DEH'	A	浅黄橙	15%	I区
372	甕	(16.4)			C'DFH'	A	橙	20%	No191
373	甕	15.1	12.5	4.6	BCDEH'	A	橙	55%	No472
374	甕	18.3			BCDEH'	A	橙	90%	No773
375	甕	18.3	29.2	6.3	BC'DEH'	A	橙	80%	No477
376	甕	18.0			BC'EFH'	A	橙	50%	No223, 243~251, 256, 778~783, 1007 385と同一個体
377	甕	18.7	26.7	5.6	C'EGH'	A	浅黄橙	65%	No17~22, 29, 52, 866, 874, 875, 883, 892
378	甕	18.6	31.3	5.6	BC'DEH'	A	橙	95%	No766
379	甕	19.2			BC'DEH'	A	橙	75%	No687
380	甕	18.7	31.5	5.4	BCDFH'	A	黄橙	80%	No123
381	甕	19.1	32.5	7.0	BCDEH'	A	黄橙	80%	No256~258, 659, 1043
382	甕	19.5	28.7	(8.6)	BCDEH'	A	浅黄橙	60%	No405
383	甕			(6.5)	BCDEH'	A	橙	35%	No502
384	甕			6.3	BC'DH'I	A	橙	55%	No652
385	甕			6.6	BC'EFH'	A	橙	45%	覆土 376と同一個体
386	支脚				BC'D	A	にふい橙	80%	No623
387	甕	17.0	12.6	5.4	BCDH'	A	橙	100%	No98
388	甕			(10.2)	C'DEGH'	A	浅黄橙	25%	No154, 156
389	甕	20.7	23.3	9.5	BCDGH'	A	橙	70%	No66, 814, 815
390	甕			8.6	CDFGH'	A	橙	45%	No91

240～244はミニチュア土器である。240は須恵器坏身の模倣と思われる、口縁部上端に焼成前の穿孔がみられる。孔は図の正面に1個所明瞭に認められる。反対側は孔が貫通しておらず、内面から穿孔しようとしているが途中でやめている。

251・263～286は椀である。椀は、口縁部が短く屈曲するもの(263～266)と口縁部はやや長く、直線的に外に開くもの(251・263・267～286)がある。後者はまた胴部上位に稜をもつもの(268・276～280)と稜をもたないもの(251・263・267・269～275・281～286)に細分できる。266・285には煤が付着する。

287～316は高坏である。和泉式の高坏の系譜を引くもの(287～303)と須恵器を模倣したと考えられるもの(304～316)がある。304は粘土素地自体は砂粒を多く含む粗いものであるが、きめ細かい粘土を表面に塗布することによって器面が滑らかな土器に仕上げられている。坏部は塗料が剥けており粘土素地が露出しているため、脚部とはまったく別の土器にみえる。311は脚部の破片で、正三角形の透し孔が1個所だけ認められる。透かしの位置から四方透かしと思われる。

317～333は鉢である。小形のもの(317～320)と中形のもの(321～331)と大形のもの(332・333)がある。小形の鉢は底部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がり、明瞭な口縁部をもたない。320は口縁部内面と外面に多量の煤が付着している。328は口縁部の歪みが著しく、不安定である。

334～340は罎である。胴部が球形をするもの(335～337・339・340)と算盤玉形をするもの(338)がある。外面は胴部上半から底部にかけてヘラケズリ調整が施される。

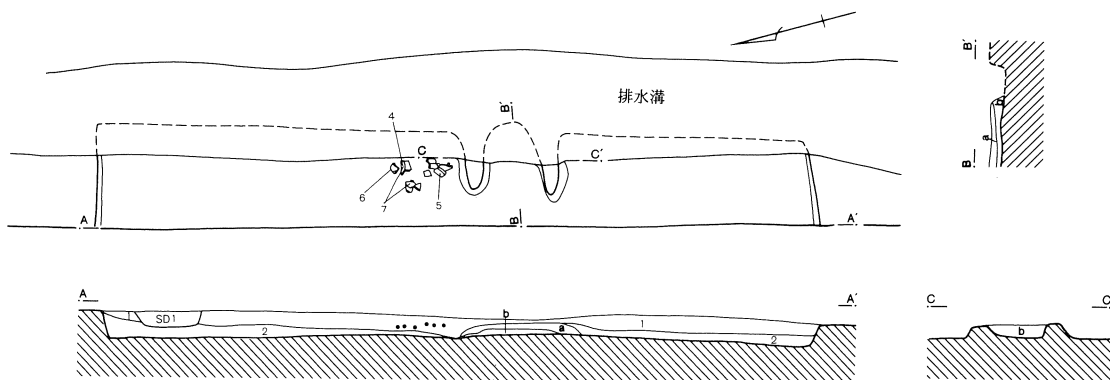
341～352は壺である。欠損品が多く、完形品は1点もなかった。341は小形の壺の破片と思われる。

353～385は甕である。壺と比べ出土量も多く、完形品もみられる。甕の大半は長胴で、胴部中位が膨らむ形をしている。371は破片であるが胴部があまり膨らまない形になると思われる。刷毛目調整のものが1点だけ認められる。

386は支脚である。下半部を欠損している。

387～390は甗である。389は砲弾形をしている。口縁端部には凹みのある平坦面をもつ。

第125図 第4号住居跡

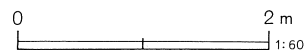


第4号住居跡土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。  
 2 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

カマド

- a 褐色土 黄褐色土・焼土ブロックを多量、炭化物粒子を少量(天井崩落土)  
 b 暗灰褐色土 焼土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を少量(灰層)



第4号住居跡(第125図)

BR-3・4、BS-3グリッドで検出された。西側は調査区外に大きく延びるため全体を調査することができなかった。また、東壁部分は排水溝の掘削のため壊してしまった。第1号溝が北側の覆土を掘り込んでいた。すぐ北には第5号住居跡が位置していたが、重複はしていなかった。南北5.81m、深さ0.20mで、主軸方位はN-100°-Eである。

覆土は2層からなる自然堆積で、焼土粒子、炭化物粒子を微量に含んでいた。

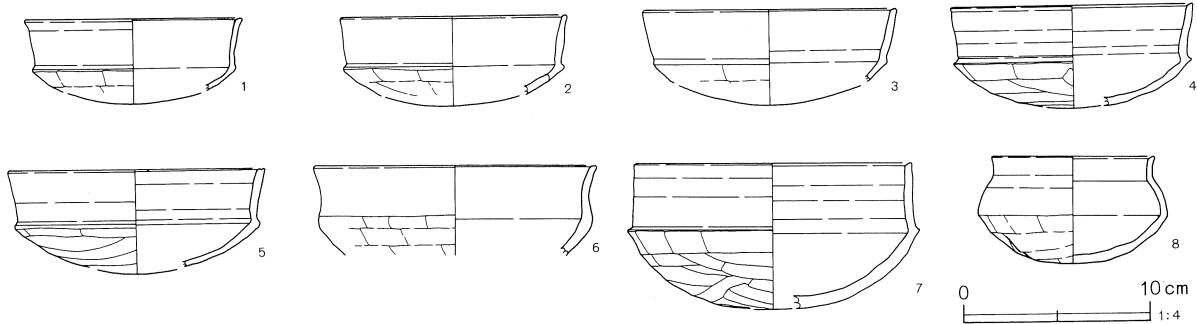
床面はほぼ平坦であった。

カマドは東壁やや南寄りに位置していた。両袖と燃焼部の一部が検出された。袖は地山の削り出しであった。燃焼部は掘り込みがなく、最下層には厚さ4~10cmの灰層があった。その上層には天井部の崩落土と思われる地山のブロック土を多量に含んだ褐色土が堆積していた。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

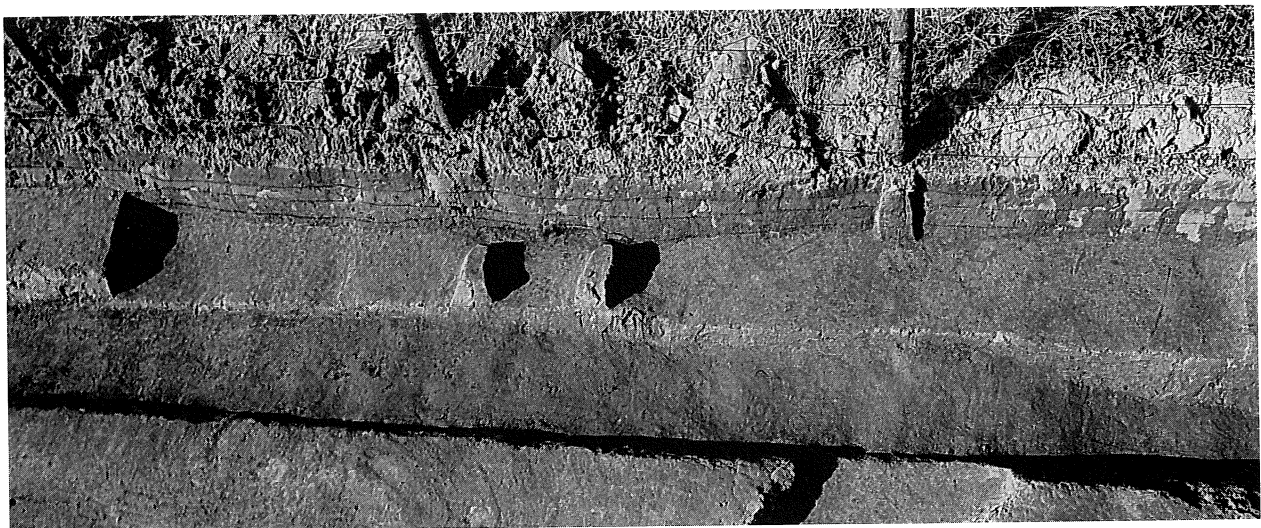
遺物はカマドの左側からまとまって出土した。出土層位は覆土1層で、床面から僅かに浮いていた。

第126図 第4号住居跡出土遺物



第126図 第4号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.6)			BC'DG'H'	A	浅黄橙	15%	I区
2	坏	(12.0)			BC'DG'H'	A	にふい褐	15%	I区
3	坏	(13.4)			C'GH'	A	黄橙	10%	II区
4	坏	(12.8)			C'DGH'	A	にふい橙	25%	No 2
5	坏	(13.6)			C'DGH'	A	橙	20%	No 5
6	椀	(15.0)			BC'DGH'	A	明赤褐	15%	No 1
7	坏	(14.6)			BC'G'H'	A	にふい橙	20%	No 2、3 体部外面は煤ける
8	椀	(8.6)	5.6		C'H'	A	橙	70%	I区



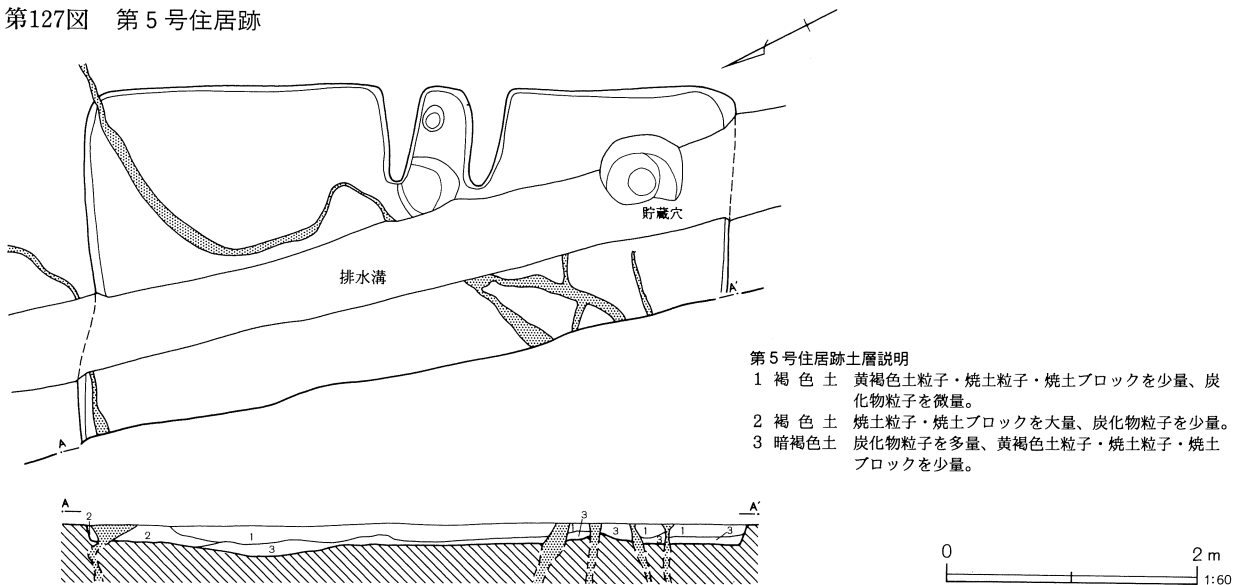
第5号住居跡(第127~129図)

BR-3、BS-3グリッドで検出された。西側は調査区外に延びていたため全体を調査することができなかった。また、排水溝掘削のために床面の一部を壊してしまっ。北に隣接する第6号住居跡の覆土を掘り込んで構築されていた。本遺構は東西方向に走る噴砂の影響で壁面のずれや床面に段差が生じており、遺存状態は悪かった。南北5.00m、深さは0.15mで、主軸

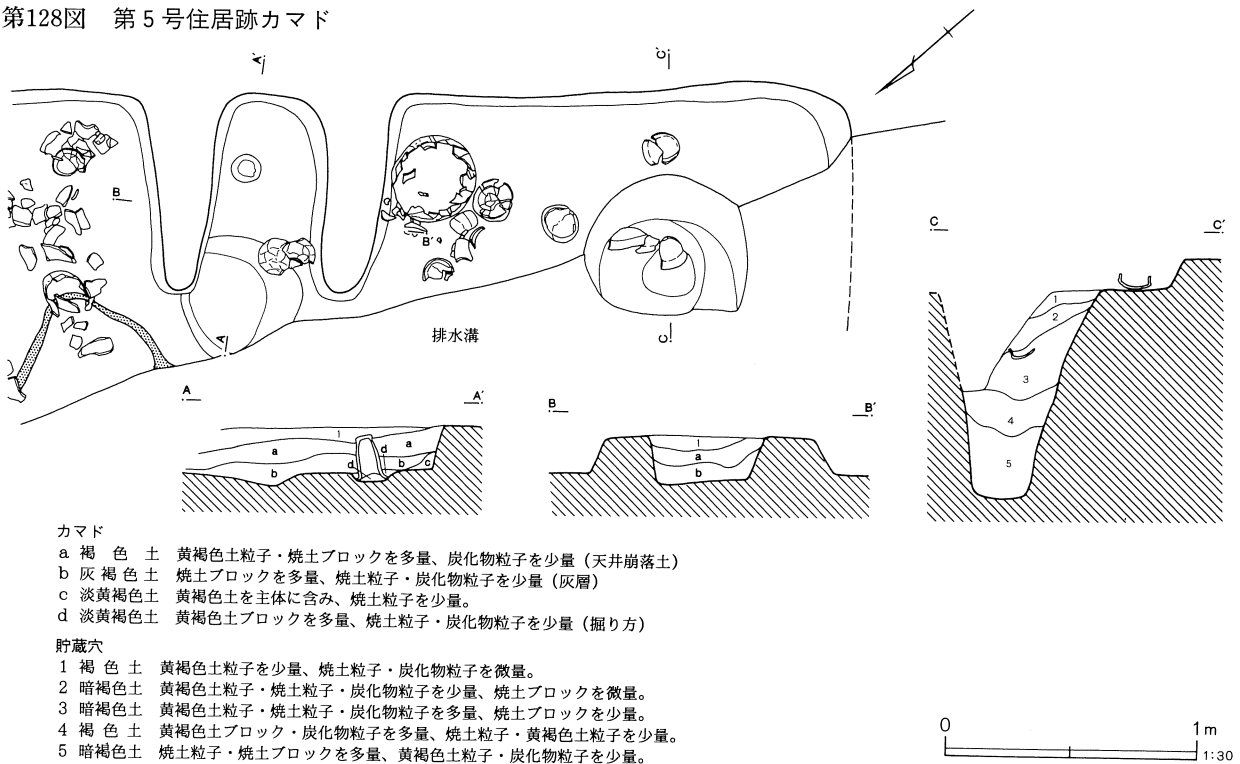
方位はN-118°-Eである。

覆土は3層からなる自然堆積と思われる。住居跡全体にわたって床面上には炭化物粒子、焼土粒子、焼土ブロックが確認された。そのことから本遺構は焼失住居である可能性が考えられる。本遺構周辺には住居跡が集中していることから、新居を構築する際に本住居跡を人為的に焼いたことも考えられる。覆土全体には焼土粒子、焼土ブロック、炭化物粒子がみられた。

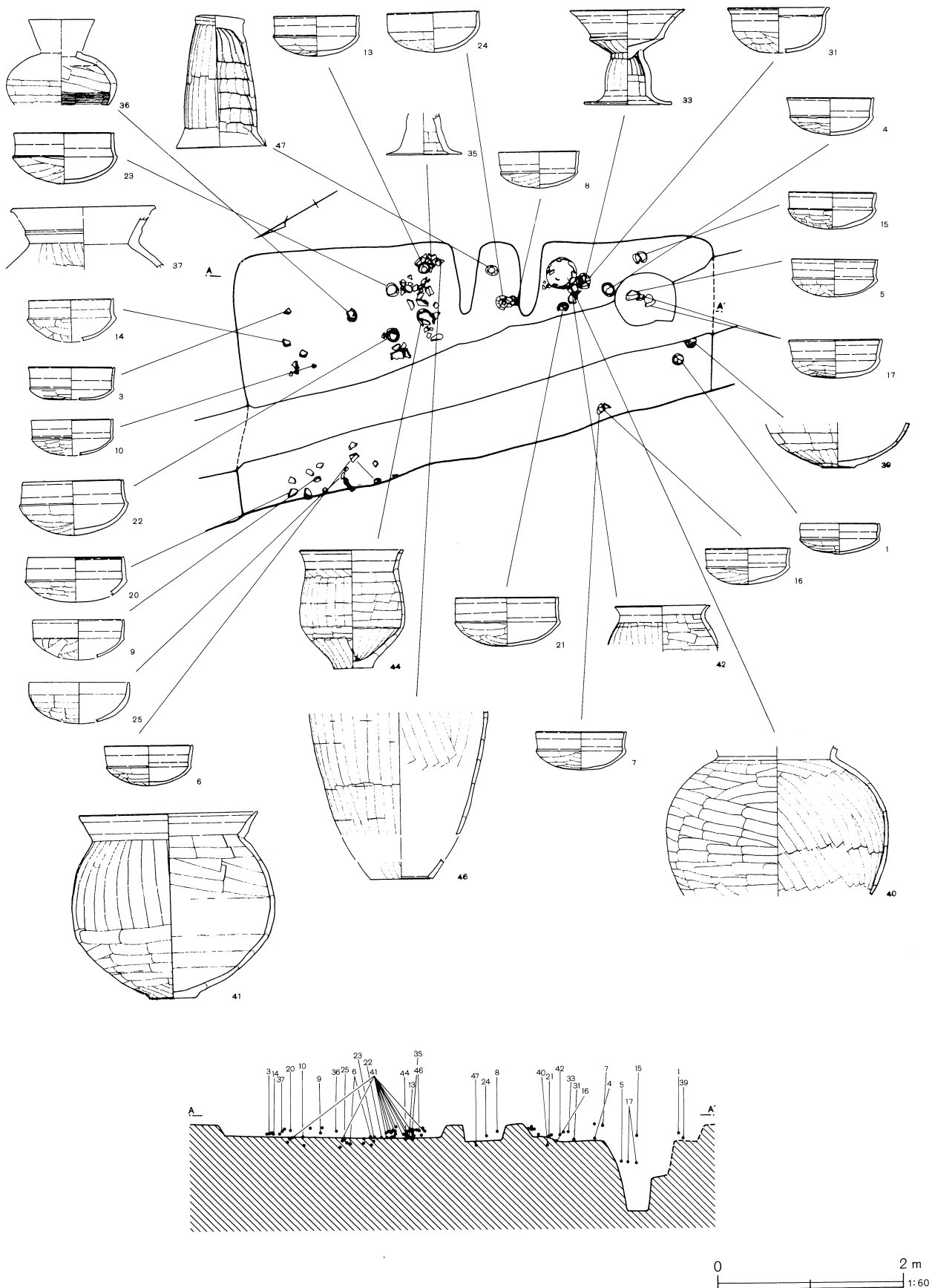
第127図 第5号住居跡



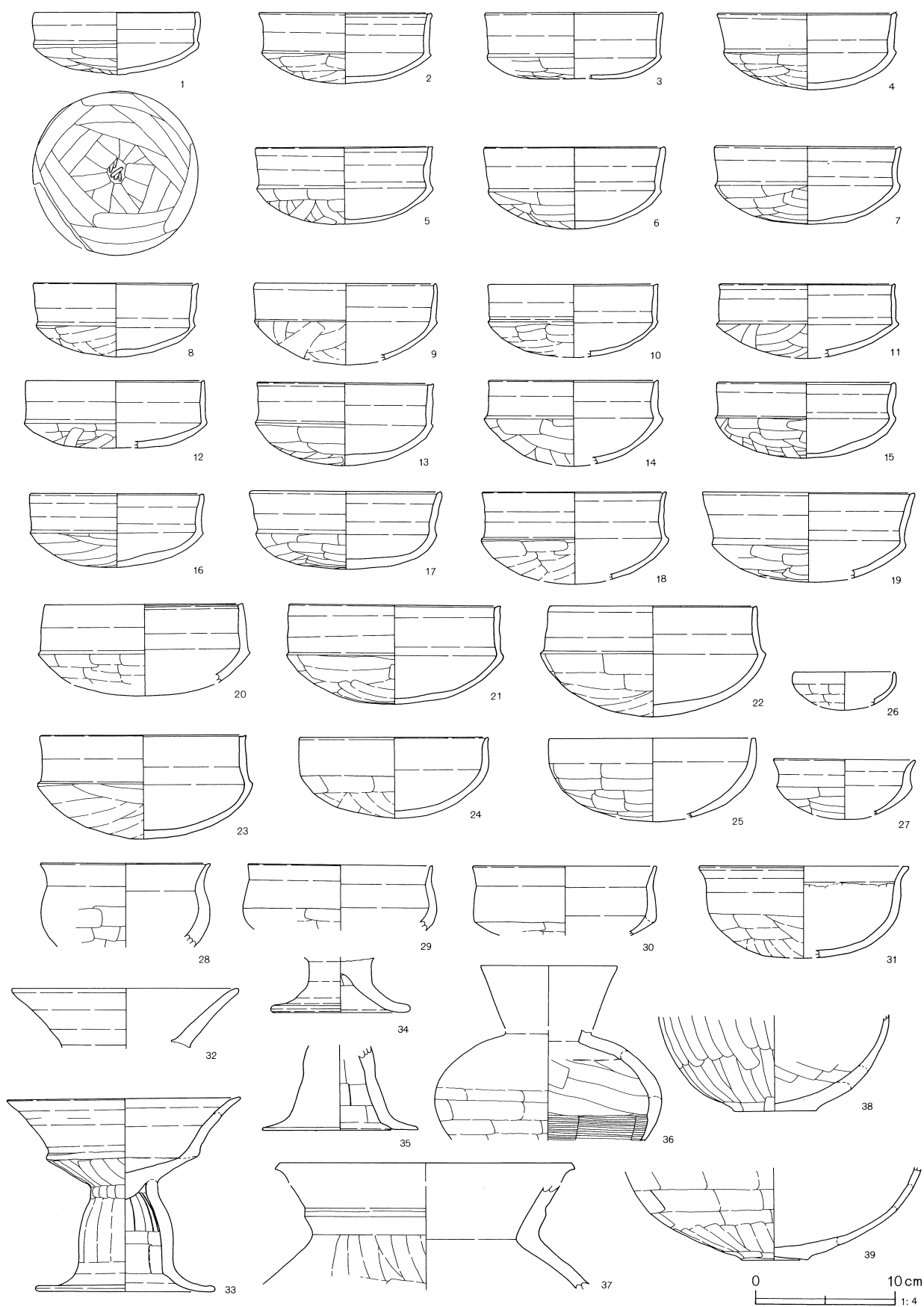
第128図 第5号住居跡カマド



第129図 第5号住居跡遺物出土状況

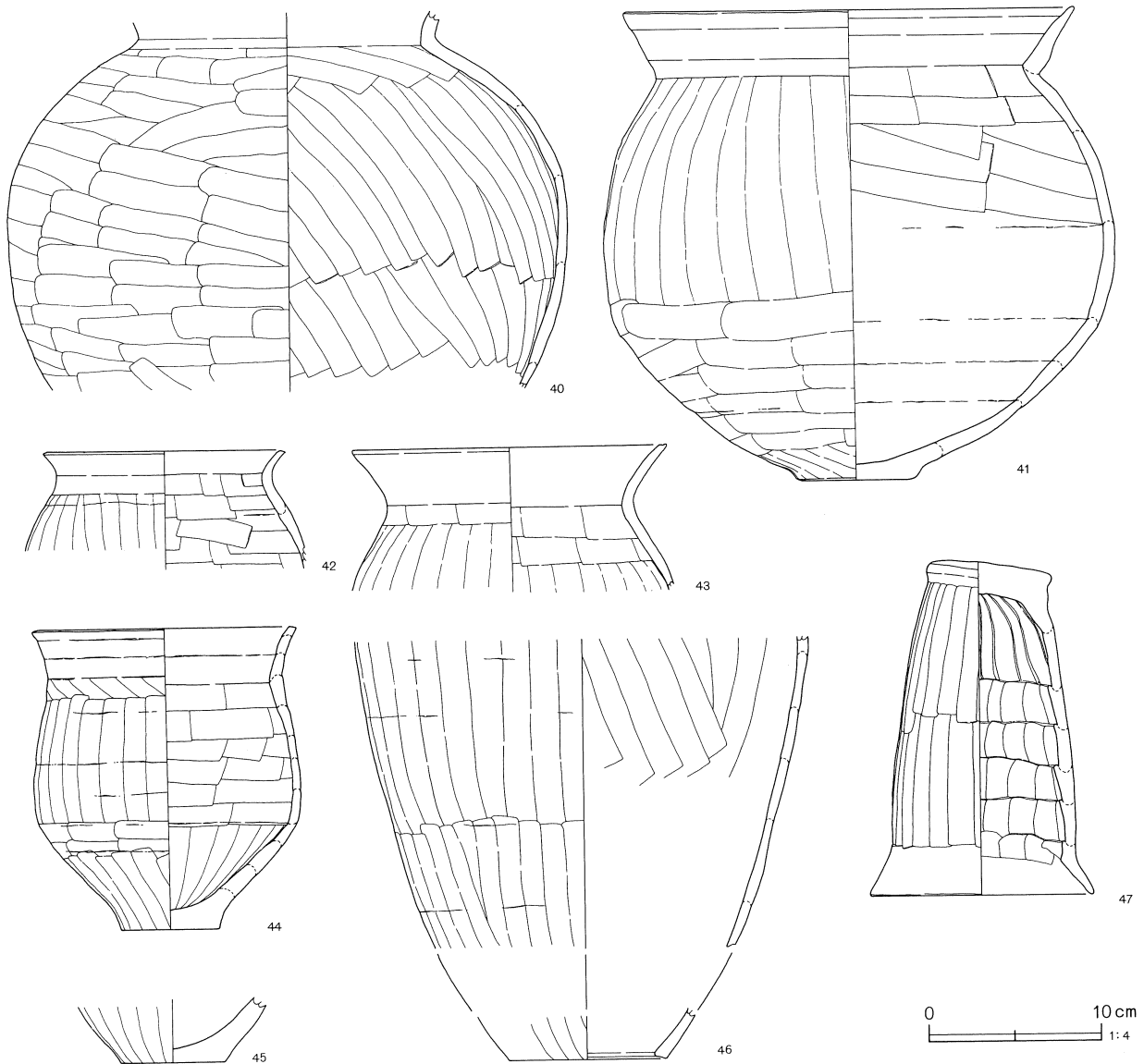


第130図 第5号住居跡出土遺物(I)





第131図 第5号住居跡出土遺物(2)



床面は噴砂により段差が生じていた。特にカマド右側周辺で顕著であった。壁面は北壁にズレが認められたが、東・南壁には噴砂の影響はみられなかった。

カマドは東壁やや南寄りに位置していた。袖は地山の削り出しで、内側の壁面は僅かに赤く焼けていた。燃烧部は壁外には延びず、焚口に浅いピット状の掘り込みが認められた。奥壁寄りには土製の支脚が検出された。支脚は径19cm、深さ5cmの小ピットに納められた後、地山の土で裾部を埋め込まれ固定されていた。位置は左寄りで、燃烧部中央に向けて僅かに斜位に置かれていたようである。

貯蔵穴は南東コーナー部分に位置しており、排水溝により東側の一部が壊されていた。検出された大きさは、長径66cm、短径56cm、深さ83cmであった。

柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物はカマド周辺の床面直上から多量に出土した。カマド右側からは40の胴部下半を欠損した壺が出土した。器台として転用されたものと思われる。1の坏は底面が凸状になっている。これは周辺からのヘラケズリ調整によって粘土の余剰が生じてできたもので、未調整である。そのため接地面は不安定である。

ほかに凝灰岩製の砥石が1点が出土した。

第130・131図 第5号住居跡出土土器観察表

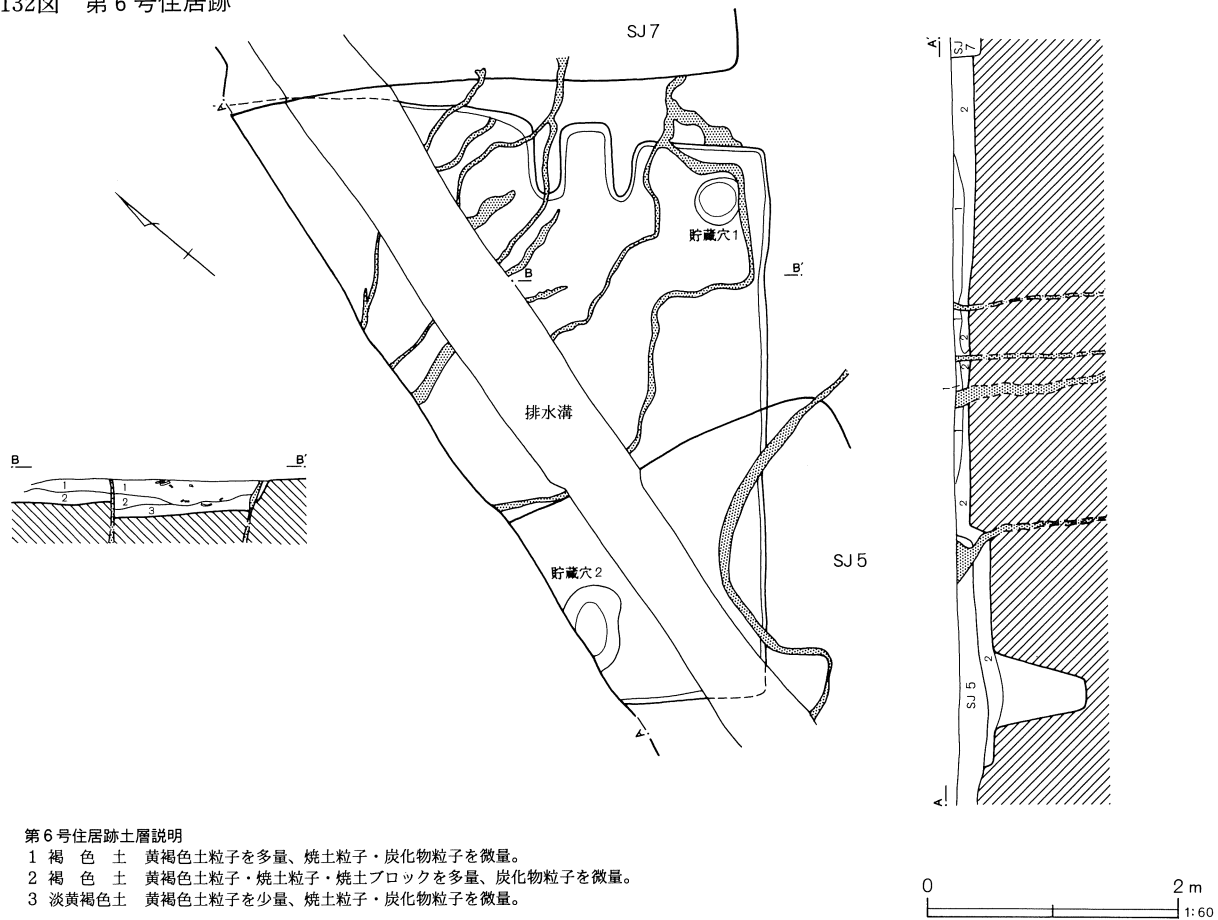
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.4	4.4		BCDGH'	A	橙	85%	No.67
2	坏	12.2	5.0		BDGH'	A	浅黄橙	100%	II区
3	坏	(12.6)	(4.7)		C'DGH'	A	橙	15%	No.2
4	坏	12.6	5.5		BCDGH'	A	橙	95%	No.59 内面は煤ける
5	坏	12.5	5.4		BCDGH'	A	明赤褐	95%	No.61 外面の一部は黒く変色
6	坏	(12.8)	5.8		BC'DGH'	A	橙	45%	No.72, 82 体部外面は黒く変色
7	坏	13.2	5.5		BCDGH'	A	にふい橙	90%	No.68
8	坏	(11.6)	(5.3)		BCDGH'	A	橙	55%	No.44
9	坏	(12.8)			BCDGH'	A	橙	25%	No.87 体部外面は黒く変色
10	坏	(12.0)			C'GH'	A	橙	30%	No.9
11	坏	(12.4)			BC'DGH'	A	橙	25%	I区
12	坏	(12.6)			BCDGH'	A	黄橙	15%	拡張部 体部外面は黒く変色
13	坏	12.4	5.8		BC'DGH'	A	にふい橙	95%	No.45 外面は黒く変色
14	坏	(12.0)			BCDGH'	A	橙	30%	No.4
15	坏	12.6	5.3		BC'DGH'	A	橙	95%	No.60 内外面とも黒く変色
16	坏	12.3	5.2		BC'DGH'	A	浅黄橙	90%	No.54, 68 外面はわずかに煤ける
17	坏	(13.6)	5.5		BC'DGH'	A	橙	65%	No.63, 64
18	坏	(13.0)			C'GH'	A	黄橙	30%	カマド
19	坏	(15.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	覆土
20	坏	(14.0)			BCDGH'	A	橙	20%	No.96
21	坏	(15.0)	7.0		GH'	A	浅黄橙	70%	No.58 外面底部は黒く変色
22	坏	14.6	7.8		BCDGH'	A	橙	100%	No.16
23	坏	14.6	7.3		BC'GH'	A	浅黄橙	95%	No.21 内外面ともわずかに煤ける
24	坏	13.4	5.7		BC'DGH'	A	橙	95%	No.45 内面に付着物あり
25	坏	(14.6)			BC'DGH'	A	橙	30%	No.78
26	坏	(7.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	拡張部
27	椀	(10.0)			BC'DGH'	A	黄橙	20%	覆土
28	椀	(12.0)			BC'DEH	A	黄橙	10%	II区
29	椀	(13.0)			BCDGH'	A	橙	10%	覆土
30	椀	(13.0)			BCDGH'	A	橙	15%	拡張部
31	椀	14.8			BC'DH'	A	橙	85%	No.53 体部内外面は煤ける
32	高坏	(16.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	貯蔵穴
33	高坏	16.5	13.7	12.7	BC'DGH'	A	橙	90%	No.46, 52, 53
34	高坏			(9.8)	BCDGH'	A	橙	60%	拡張部
35	高坏			(11.0)	BCDH'	A	橙	20%	No.65
36	埴				BC'DH'	A	浅黄橙	35%	No.14
37	壺				BCDGH'	A	橙	15%	No.8
38	壺			5.8	BC'DGH'	A	橙	70%	I区 外面底部は黒く変色
39	壺			(4.8)	BC'DGH'	A	黄橙	30%	No.66 底面は黒く変色
40	壺				BC'GH'	A	橙	65%	No.46 外面はわずかに煤ける
41	壺	26.0	26.7	6.8	BCDGH'	A	橙	60%	No.7, 17~22, 27~35, 41, 62 底面は黒く変色する
42	甕	(14.0)			BCDGH'	A	明赤褐	20%	No.57 外面全体は煤ける
43	甕	(18.0)			BGH	A	橙	20%	貯蔵穴
44	甕	(15.2)	(17.1)	5.6	BC'DH'	A	橙	70%	No.38
45	甕			(6.0)	BC'GH'	A	橙	20%	II区
46	甗			(9.0)	BCDGH'	A	橙	20%	No.34, 65 内面に多量の煤が付着
47	支脚	6.9	19.2	12.8	BCDH'	A	橙	100%	No.43 内外面ともわずかに煤ける

第6号住居跡(第132~134図)

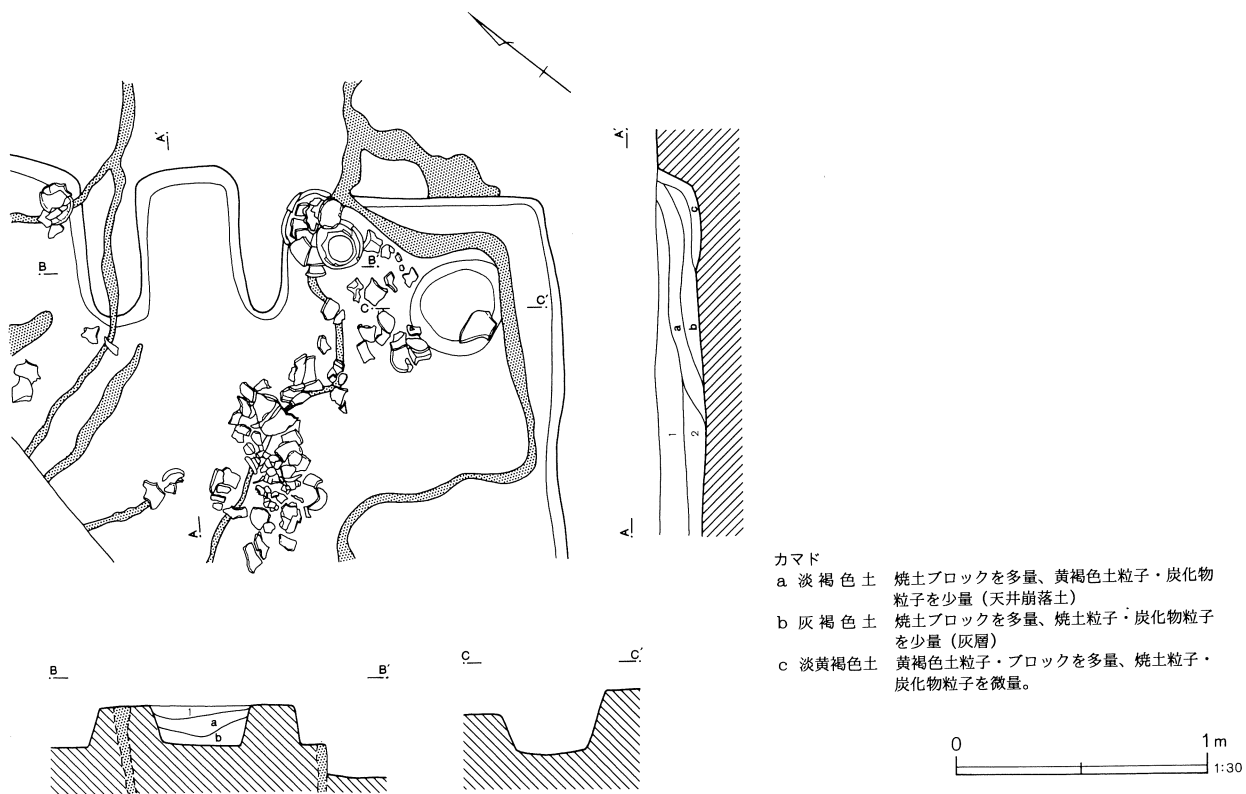
BS-2・3グリッドで検出された。西壁は調査区外にかかるため調査することができなかった。また本遺

構のほぼ中央を排水溝掘削のために壊してしまった。南半部を第5号住居跡に、北壁の一部を第7号住居跡に壊されていた。本住居跡は第5号住居跡同様に東西

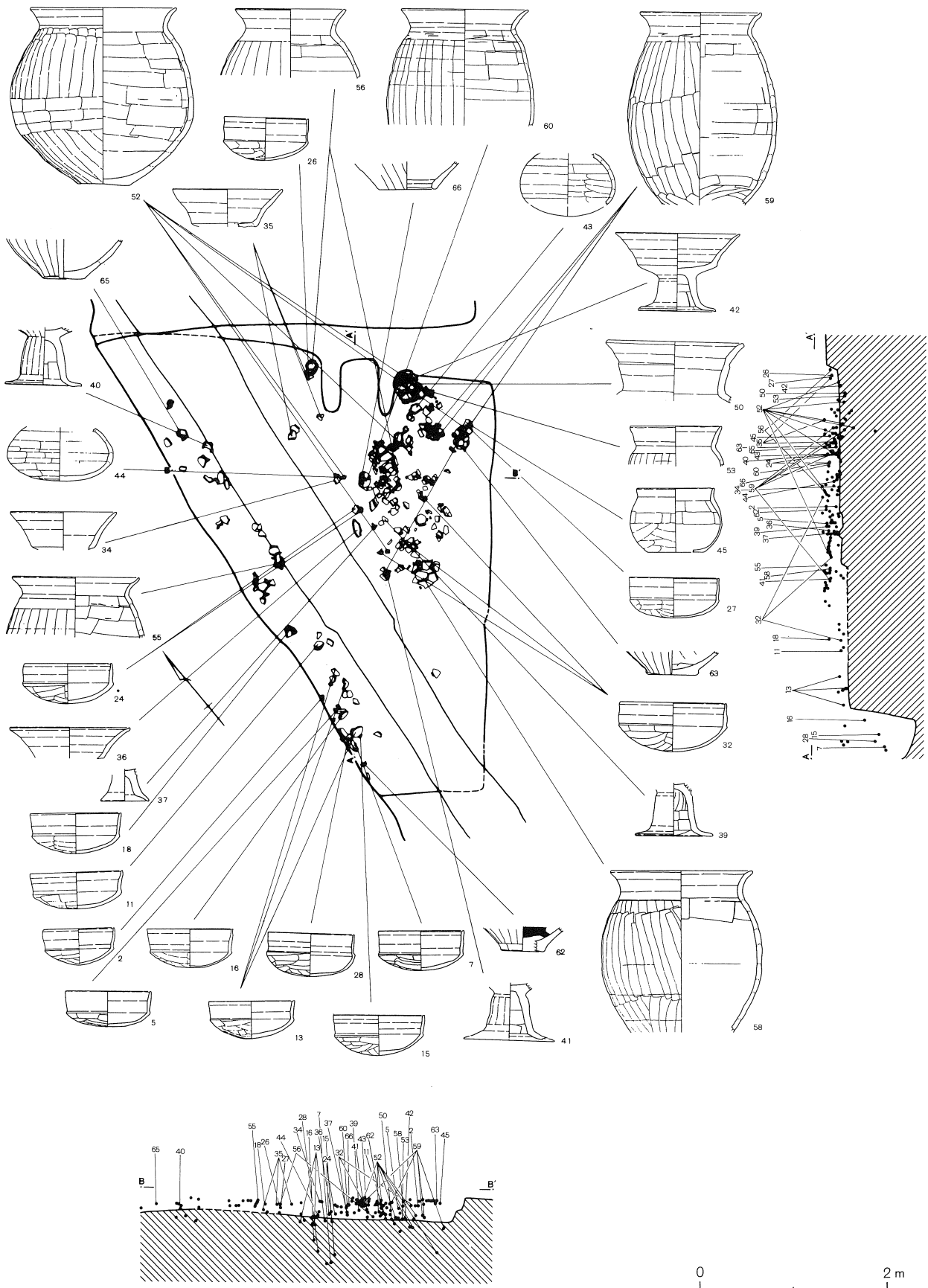
第132図 第6号住居跡



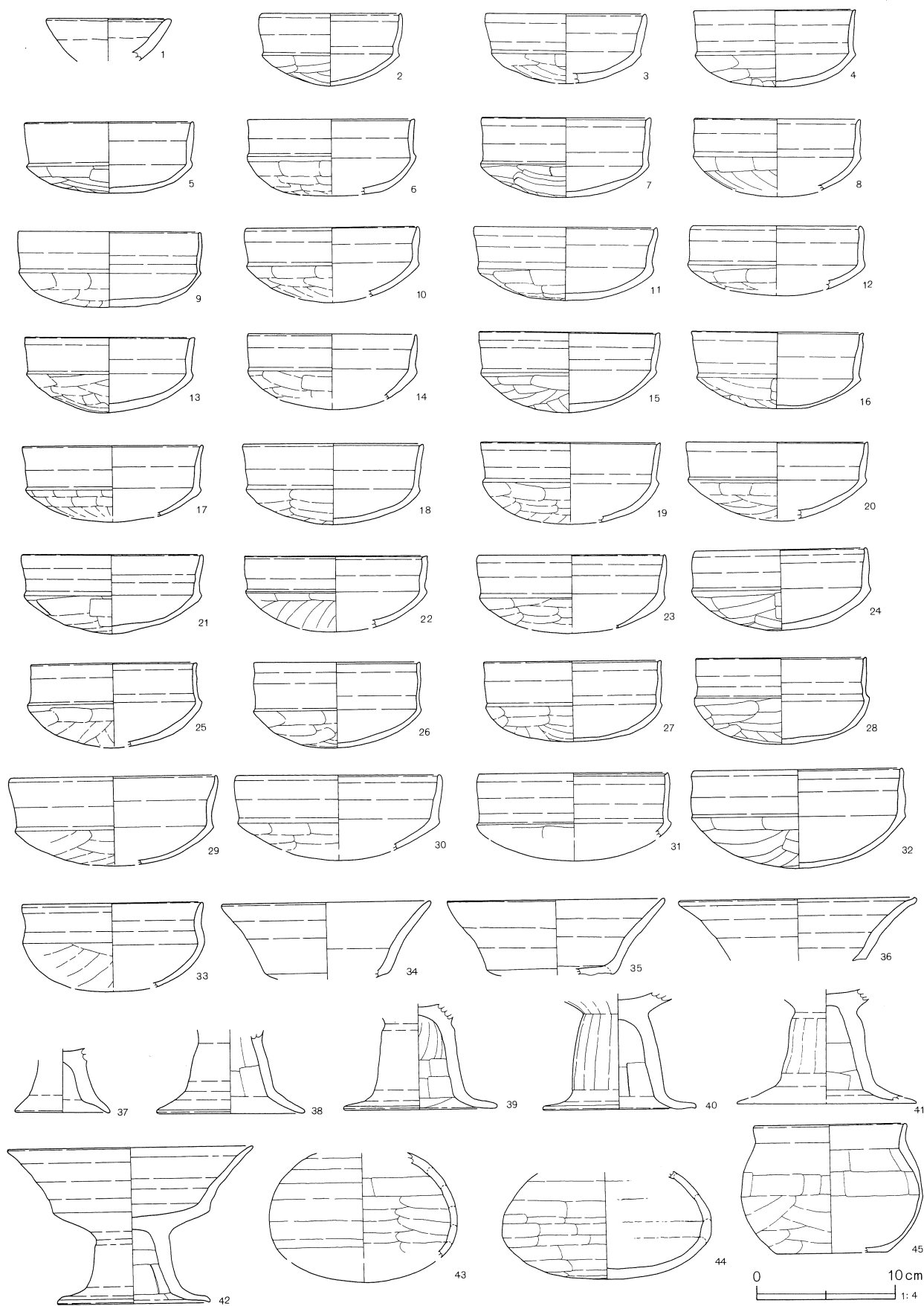
第133図 第6号住居跡カマド



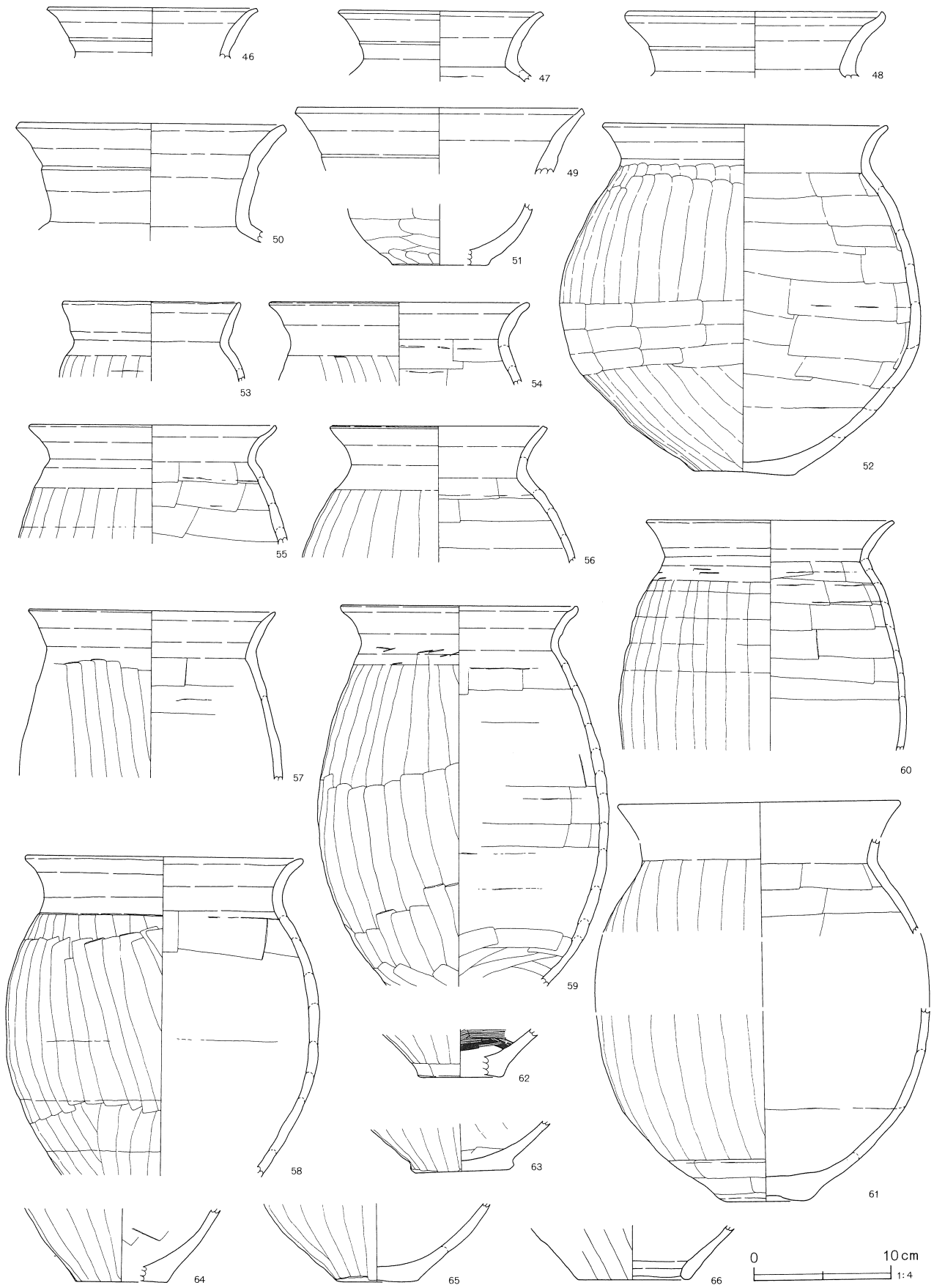
第134图 第6号住居跡遺物出土状況



第135図 第6号住居跡出土遺物(1)



第136图 第6号住居跡出土遺物(2)



方向に無数に走る噴砂によって遺存状態は悪かった。南北4.60m、深さは0.12mで、主軸方位はN-48°-Eである。

覆土は3層からなる自然堆積であった。2層には焼土粒子、焼土ブロックを多量に含んでいた。

床面は噴砂の影響で10~15cmの段差が生じており、住居跡の南東部分が一段低くなっていた。また、カマド左の壁面は北東方向に約30cm大きくずれていた。

カマドは北壁東寄りに位置していた。左袖部分には噴砂が走行していたが、遺存状態は良好であった。袖は地山の削り出して、壁面は僅かに赤く焼けていた。燃焼部は住居跡壁外に延びず、掘り込みはなかった。下層には厚さ3~10cmの灰が堆積していた。

貯蔵穴は南北にそれぞれ1基ずつ確認できた。貯蔵穴1は北東コーナー部分に位置していた。大きさは、

長径40cm、短径36cm、深さが24cmで、平面形態は円形をしていた。遺物は土師器片が少量出土した。貯蔵穴2は南壁やや中央寄りに位置しており、長径67cm、短径46cm、深さが70cmであった。平面形態は楕円形であった。遺物は1・7・15・28・31などの完形および破片の坏が多く出土した。

柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は床面から多量の土器が出土した。坏は住居跡南半に集中していた。2・17・22・27には煤が内外面に付着している。貯蔵穴2から出土した28は、器表面の約1/3が剥落しており、その部分にも多量の煤が付着している。北半には高坏、壺、甕が多くみられる。50の胴部を欠損した壺は、口縁部を床面に伏せた状態で出土した。倒立した状態で器台に転用したものと思われる。

第135・136図 第6号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(9.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	貯蔵穴1
2	坏	(10.0)	(5.1)		C'GH'	A	橙	30%	No.92 外面と口縁部内面は煤ける
3	坏	(11.6)			BCDGH'	A	黄橙	15%	No.97 体部外面は黒く変色
4	坏	(11.6)	(5.5)		BC'DGH'	A	橙	20%	拡張部 体部外面は黒く変色
5	坏	(12.2)	5.0		BC'DGH'	A	橙	75%	No.87 体部外面は黒く変色
6	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	浅黄橙	20%	拡張部
7	坏	12.2	5.6		BCDGH'	A	橙	95%	貯蔵穴1 No.3 体部外面は黒く変色
8	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	No.97
9	坏	(13.0)	(5.4)		BC'DGH'	A	橙	35%	II区
10	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	橙	25%	IV区
11	坏	(13.2)	(5.1)		BCDGH'	A	橙	25%	No.98
12	坏	(12.0)			BCDGH'	A	橙	20%	No.143 体部外面は黒く変色
13	坏	(12.2)	5.3		BC'DGH'	A	橙	70%	No.89, 91, 95
14	坏	(12.0)			C'GH'	A	橙	30%	II区
15	坏	13.0	5.7		BCDGH'	A	橙	100%	貯蔵穴1 No.1 体部外面は黒く変色
16	坏	12.2	5.4		BCDGH'	A	橙	100%	No.85 体部外面は黒く変色
17	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	30%	I区 外面はわずかに煤ける
18	坏	(13.0)	(5.7)		BC'DGH'	A	橙	20%	No.129
19	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	拡張部
20	坏	(13.0)			BCDGH'	A	橙	15%	南ベルト
21	坏	(13.0)	(5.6)		BC'DGH'	A	橙	20%	139
22	坏	(13.2)			BC'DGH'	A	橙	20%	No.77 内外面とも煤ける
23	坏	(13.6)			BC'DGH'	A	橙	45%	I区、II区
24	坏	(12.4)	5.8		BC'DGH'	A	橙	60%	No.32, 33
25	坏	(12.0)			BCDGH'	A	橙	30%	No.149 体部外面の一部は黒く変色
26	坏	(12.0)	6.0		BC'DGH'	A	橙	70%	No.46
27	坏	(12.8)	(5.7)		BCDGH'	A	橙	40%	No.52 体部外面は煤ける
28	坏	12.2	6.1		BCDGH'	A	橙	100%	貯蔵穴1 No.2 外面は多量の煤が付着
29	坏	(15.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	No.62, 77

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
30	坏	(15.0)	7.0	7.0	BC'DGH'	A	橙	20%	No.150	
31	坏	(13.6)			BC'DGH'	A	橙	15%	貯蔵穴 1	
32	坏	(15.0)			BCDGH'	A	橙	65%	No.26、80、99	
33	椀	(13.0)			BC'DGH'	A	黄橙	15%	南ベルト	
34	高坏	(15.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	No.40	
35	高坏	15.6			BC'DGH'	A	橙	80%	No.43、44、47	
36	高坏	(17.0)			BC'DGH'	A	黄橙	30%	No.34	
37	高坏				(6.8)	BC'DGH'	A	橙	85%	No.78
38	高坏				(10.6)	BC'DGH'	A	橙	25%	貯蔵穴 1
39	高坏				(11.0)	BC'DGH'	A	橙	95%	No.76 裾部内面には多量の煤が付着
40	高坏		(11.0)	BC'DGH'	A	橙	85%	No.147		
41	高坏			BCDGH'	A	橙	85%	No.107		
42	高坏	(17.6)	(11.0)	(11.0)	BC'DGH'	A	橙	60%	No.116 外面には多量の煤が付着	
43	柑				BC'DGH'	A	橙	30%	No.13	
44	柑				BC'DGH'	A	橙	25%	No.41	
45	壺	(11.0)	(9.1)	(7.8)	BC'DGH'	A	橙	30%	No.55 底部外面は黒く変色	
46	壺	(15.4)			BC'DGH'	A	橙	30%	No.35	
47	壺	(15.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	拡張部	
48	壺	(19.0)			BCDGH'	A	橙	20%	II区	
49	壺	(21.0)			BCDGH'	A	橙	20%	No.142	
50	壺	19.6			BC'DGH'	A	橙	95%	No.118	
51	壺			(7.0)	BC'DGH'	A	明赤褐	15%	北ベルト	
52	壺	20.8	25.1	7.4	BC'GH'	A	橙	95%	No.4、11、50、81、122、124、127、128	
53	甕	(13.0)			BC'DGH'	A	黄橙	35%	No.120 外面はわずかに煤ける	
54	甕	(19.0)			BC'DGH'	A	にぶい橙	20%	No.105	
55	甕	(18.0)			BC'DEGH'	A	黄橙	35%	No.136	
56	甕	(15.8)			BC'GH'	A	にぶい橙	55%	No.46、49	
57	甕	(18.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	No.12	
58	甕	(20.2)			BC'EH'	A	橙	40%	No.102 外面の一部は黒く変色する	
59	甕	17.2			C'EH'	A	にぶい褐	70%	No.2、71、109、125、126 内外面とも少量の煤が付着	
60	甕	18.0			BC'EGH'	A	灰白	70%	No.16 外面は少量の煤が付着	
61	甕			7.0	C'EGH'	A	浅黄橙	30%	No.5、30、83、84、123 外面の一部は黒く変色	
62	甕			(6.2)	BC'DGH'	A	橙	30%	No.72	
63	甕			(7.6)	BC'DEGH'	A	灰白	40%	No.53 外面は煤ける	
64	甕			(6.6)	BC'DGH'	A	橙	20%	No.132	
65	甕			6.0	BC'DGH'	A	橙	35%	No.148	
66	甗			(8.0)	BC'DGH'	A	橙	15%	No.16 外面は黒く変色	

### 第7号住居跡(第137図)

BS-2グリッドで検出された。調査区外にかかるため全体を調査することができなかった。また、調査当初に掘削した排水溝のために床面の一部を壊してしまった。第6号住居跡を切って構築しており、噴砂の影響で南・東壁は歪んでいた。南北6.08m、深さが0.13mであった。主軸方位はN-43°-Eである。

床面は平坦であった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは調査区壁面の観察から北壁に位置することが判明した。覆土の2・3層がカマド覆土にあたり、

3層が灰層になるものと思われる。

貯蔵穴は南東コーナー部分に位置していた。長径85cm、短径66cm、深さ102cmで、平面形態は長方形をしていた。遺物はあまり出土しなかった。

ピットは3本確認できた。そのうち主柱穴と思われるのがP1・2である。P3は位置から主柱穴とは考えにくい。各ピットの大きさは、P1が24cm×29cm、P2が24cm×16cm、P3が25cm×32cmであった。

カマド・壁溝は検出できなかった。

遺物は少量の土器が床面から浮いて出土した。



第137図 第7号住居跡



第7号住居跡土層説明

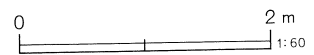
- 1 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 褐色土 焼土ブロックを多量、黄褐色土ブロック・炭化物粒子を少量。
- 3 淡灰褐色土 灰・焼土ブロック・炭化物粒子を多量、焼土粒子を少量。
- 4 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 5 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土ブロックを少量、炭化物粒子を微量。
- 6 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を少量。

貯蔵穴

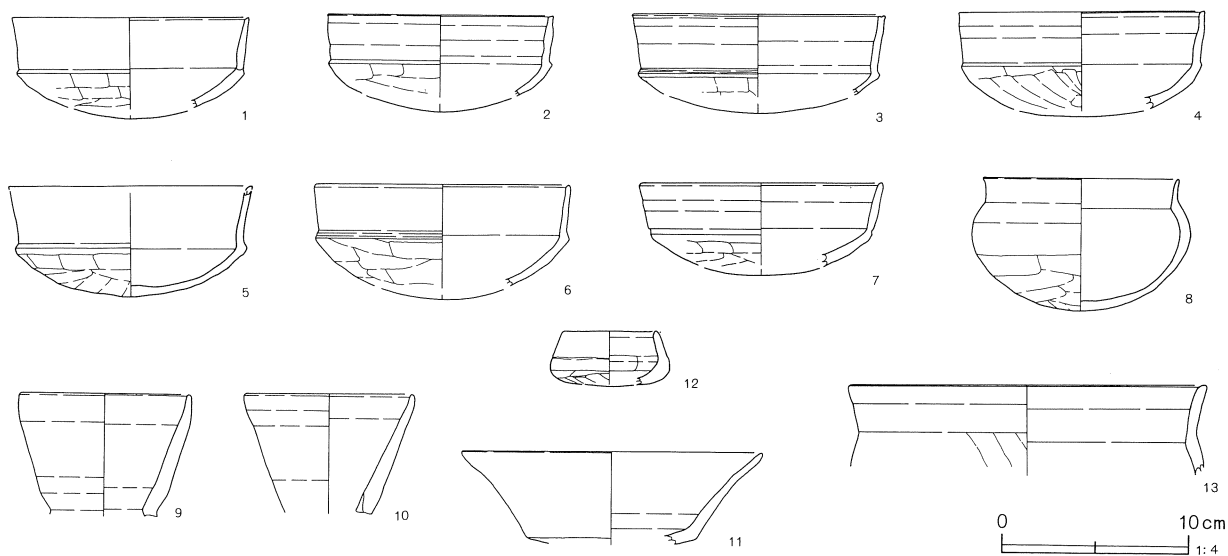
- 1 褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 2 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 3 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 4 褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 5 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子を少量、炭化物粒子を微量。

ピット3

- 1 褐色土 黄褐色土ブロックを少量、黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、黄褐色土粒子を少量、炭化物粒子を微量。



第138図 第7号住居跡出土遺物



第138図 第7号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	坏	(12.6)	7.0		C'DH'	A	橙	15%	覆土	
2	坏	(12.0)			BC'DH'	A	浅黄橙	15%	No.9	
3	坏	(13.4)			BC'DG'H'	A	橙	10%	拡張部	外面わずかに煤ける
4	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	黄橙	15%	No.5	
5	坏				C'DGH'	A	橙	30%	No.1	
6	坏	(13.4)			BC'DH'	A	黄橙	20%	No.11	
7	坏	(13.0)			C'DGH'	A	橙	15%	貯蔵穴	
8	碗	10.4			BC'DH'	A	橙	80%	No.2~4	
9	埴	9.0			BC'DGH'	A	橙	20%	No.10	
10	埴	(9.0)			BC'DG'H'	A	浅黄橙	15%	東ベルト	
11	高坏	(16.0)			BC'DH'	A	橙	10%	貯蔵穴	
12	ミニチュア	(5.0)			C'DG'H'	A	浅黄橙	20%	覆土	
13	甔	(19.0)			C'DGH'	A	橙	10%	覆土	

第8号住居跡(第139・140図)

BP-3、BQ-3グリッドで検出された。第1号道路跡の硬化面直下に位置していたため、遺存状態はあまり良くなかった。東西3.78m、南北4.14m、深さ0.10mで、平面形態は方形であった。主軸方位はN-72°-Eである。

覆土は第1号道路跡の硬化面下ということで踏み固められており、覆土中層にまで及んでいた。住居跡は2層からなる自然堆積であった。

床面は道路跡の影響で僅かに起伏が目立った。壁は緩やかに立ち上がる。

カマドは東壁南寄りに位置していた。袖は地山の削り出しであった。燃焼部は壁外に延びず、浅い掘り込みが確認された。下層には厚さ3~6cmの灰層があっ

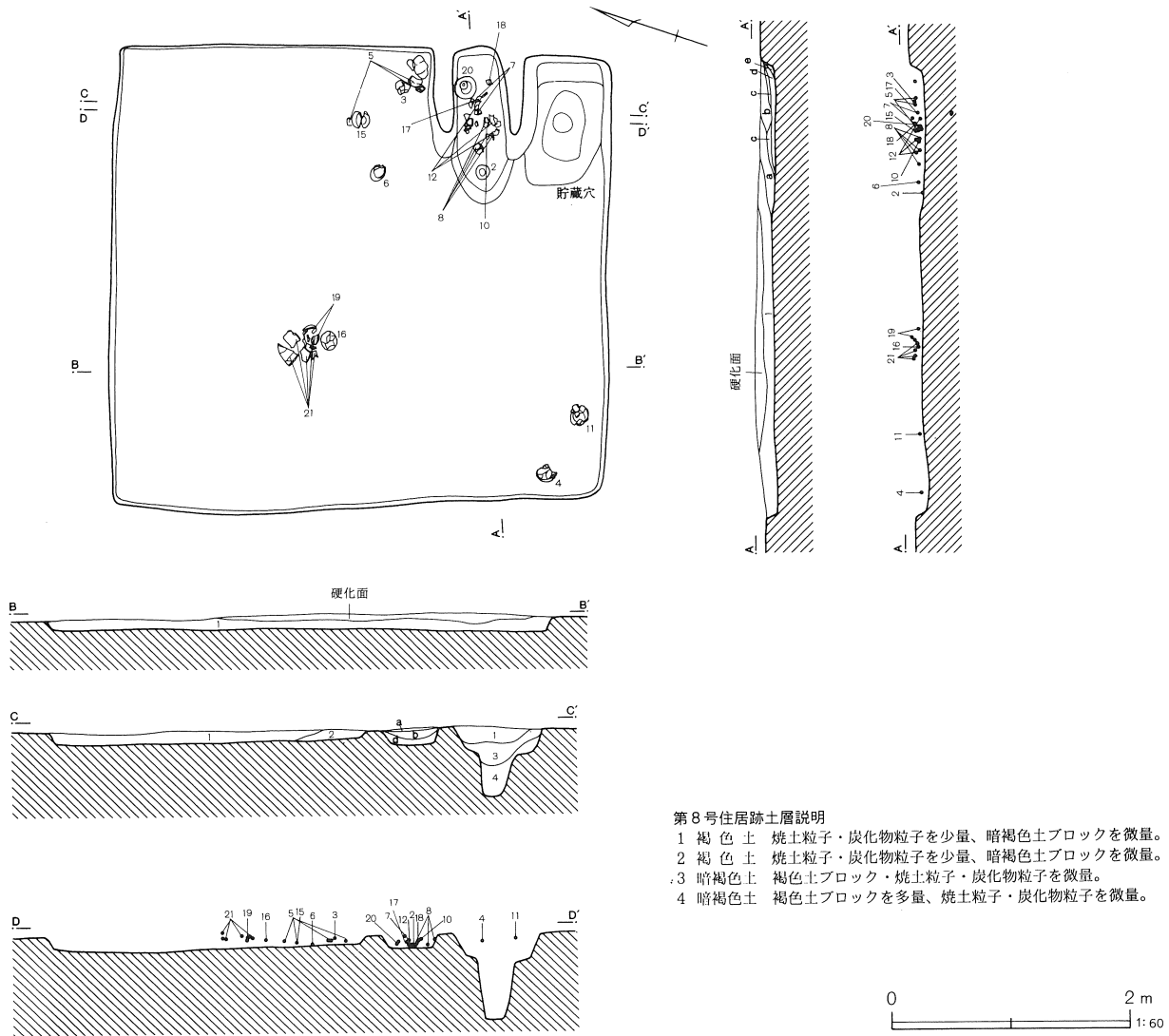
た。カマド内からは多くの遺物が出土した。奥壁に近い所の灰層の上から土師器の高坏が倒立した状態で出土した。支脚に転用されたもので、位置は燃焼部左寄りであった。器面がそれほど脆くなっていないことから、あまり火熱を受けていないものと思われる。

貯蔵穴はカマド右側の南東コーナー部に位置していた。大きさは、長径86cm、短径55cm、深さが59cmで、平面形態は長方形をしていた。遺物は1の土師器の坏が出土した。

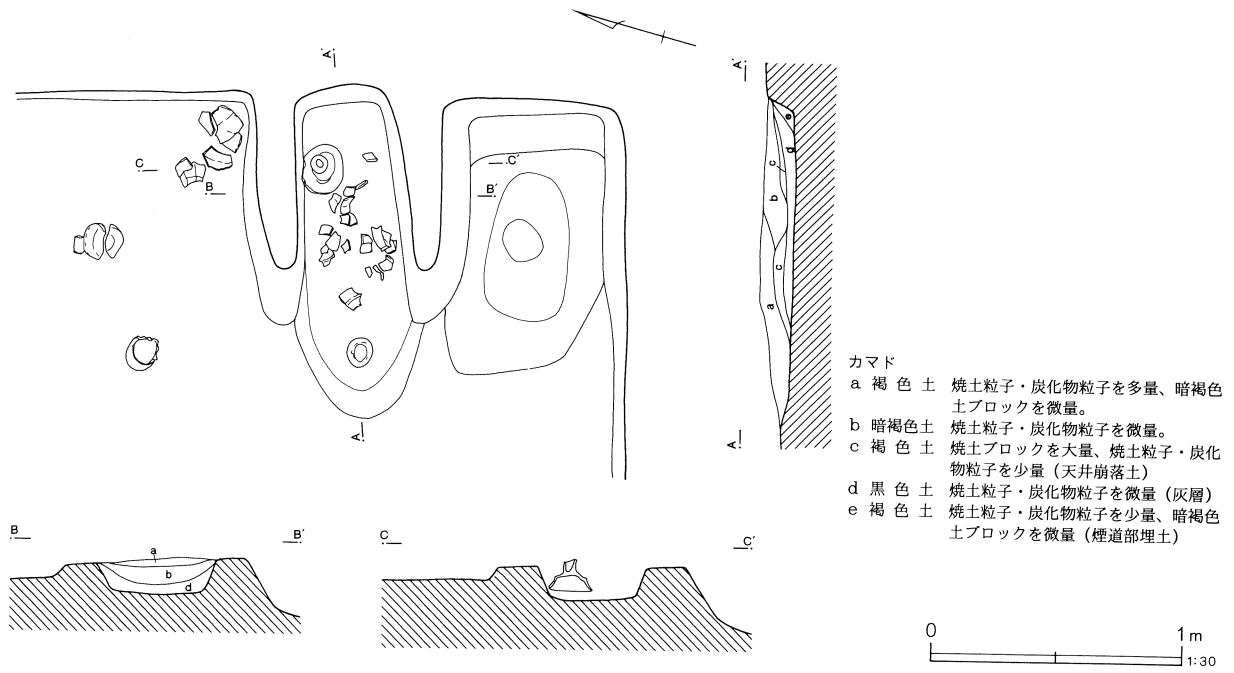
柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物はカマド燃焼部とカマド左側の床面から集中して出土した。21の高坏は推定口径が25.0cmと大形である。坏部内外面には煤が付着している。今回の調査で出土した大形の高坏はこの1点だけである。

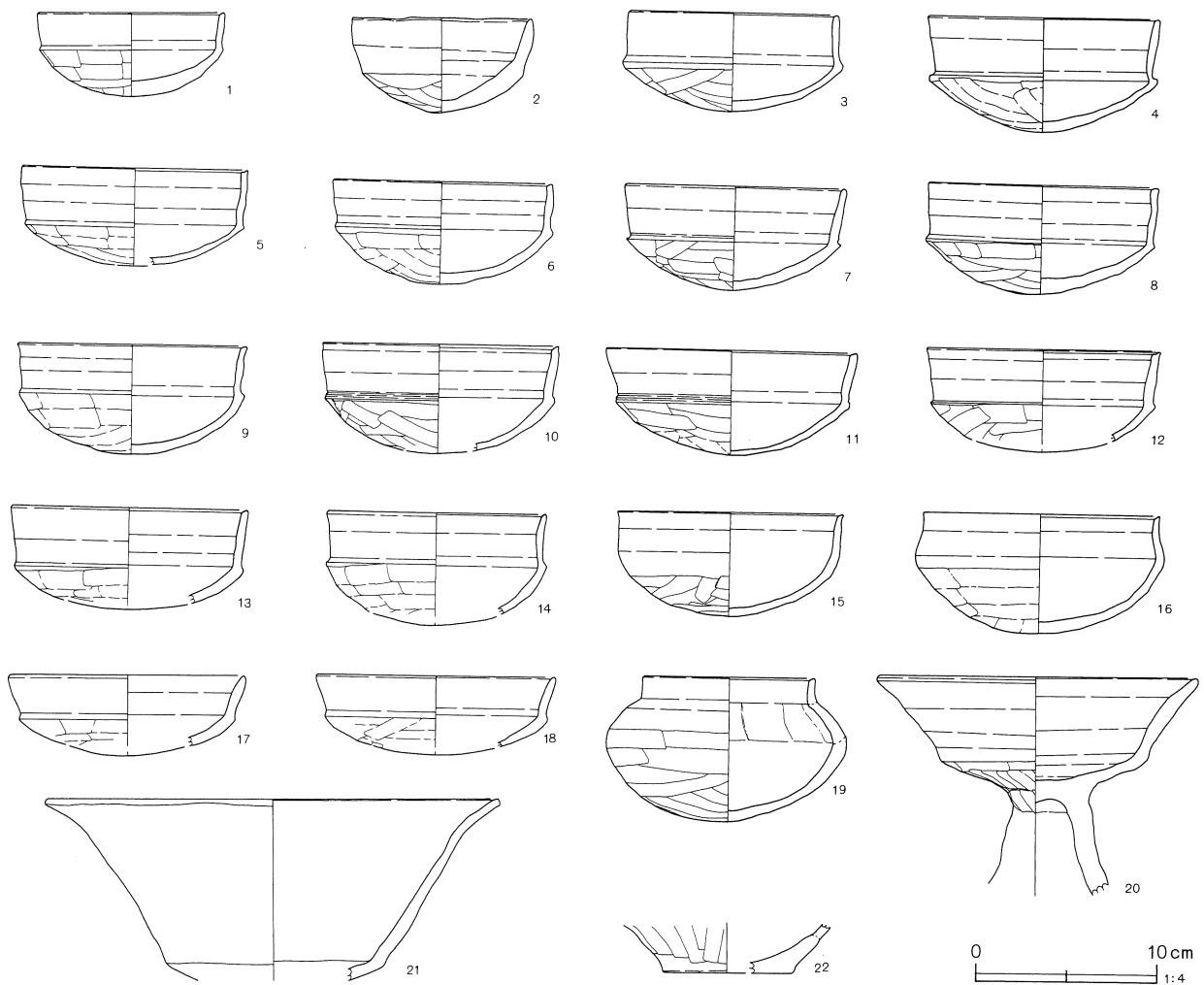
第139図 第8号住居跡



第140図 第8号住居跡カマド



第141図 第8号住居跡出土遺物



第141図 第8号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.2	4.5		BC'DH'	A	橙	80%	貯蔵穴
2	坏	9.8	5.1		BC'DGH'	A	橙	100%	No.10
3	坏	(11.4)	(5.3)		BC'DGH'	A	橙	25%	No.6
4	坏	12.6	6.2		BC'H'	A	浅黄橙	80%	No.2 外面の剥落が著しい
5	坏	12.4			BC'DG'H'	A	橙	55%	No.4、7、8
6	坏	12.2	5.5		BC'GH'	A	橙	100%	No.3
7	坏	(12.0)	(5.6)		BC'GH'	A	橙	20%	No.17、19
8	坏	12.6	5.9		BCG'H'	A	橙	80%	No.11、14~16
9	坏	(12.6)	5.9		BC'DG'H'	A	橙	45%	II区
10	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	20%	No.13
11	坏	(13.8)	5.7		BC'H'	A	橙	75%	No.1
12	坏	(12.8)			BC'DH'	A	黄橙	30%	No.14、16、20 外面に煤が付着
13	坏	(13.0)			C'DH'	A	黄橙	25%	III区
14	坏	(12.0)			BC'DG'H'	A	橙	25%	I区
15	坏	12.4	5.6		BC'DGH'	A	橙	100%	No.5
16	坏	13.0	6.4		BC'DG'H'	A	橙	90%	No.31
17	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	15%	No.19
18	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	15%	No.21
19	椀	(9.4)	(7.8)		BC'DGH'	A	浅黄橙	90%	No.29、30
20	高坏	17.6			BC'DGH'	A	橙	95%	No.22
21	高坏	(25.0)			BDH'	A	橙	75%	No.23、25~28 内外面に煤が付着
22	甕			(7.0)	C'DH'	A	橙	55%	I区、III区 外面に煤が付着

第9号住居跡(第142図)

BQ-2、BR-2グリッドで検出された。住居跡の大半が調査区外にかかるため、調査ができたのは全体の約1/3であった。西側は排水溝掘削のために一部を壊してしまった。検出できたのはカマドから西壁に至る部分で、全体の規模および平面形態は不明である。主軸方位はN-53°-Eである。

カマドは北壁西寄りに位置していたと思われる。検出できたのは袖と燃焼部の一部だけであった。袖は地

山の削り出しであった。燃焼部は僅かに掘り込まれており、焚口部には浅いピット状の落ち込みがあった。

貯蔵穴は南東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径74cm、短径60cm、深さが103cmで、平面形態は楕円形をしていた。覆土全体に焼土粒子、炭化物粒子を微量に含んでいた。

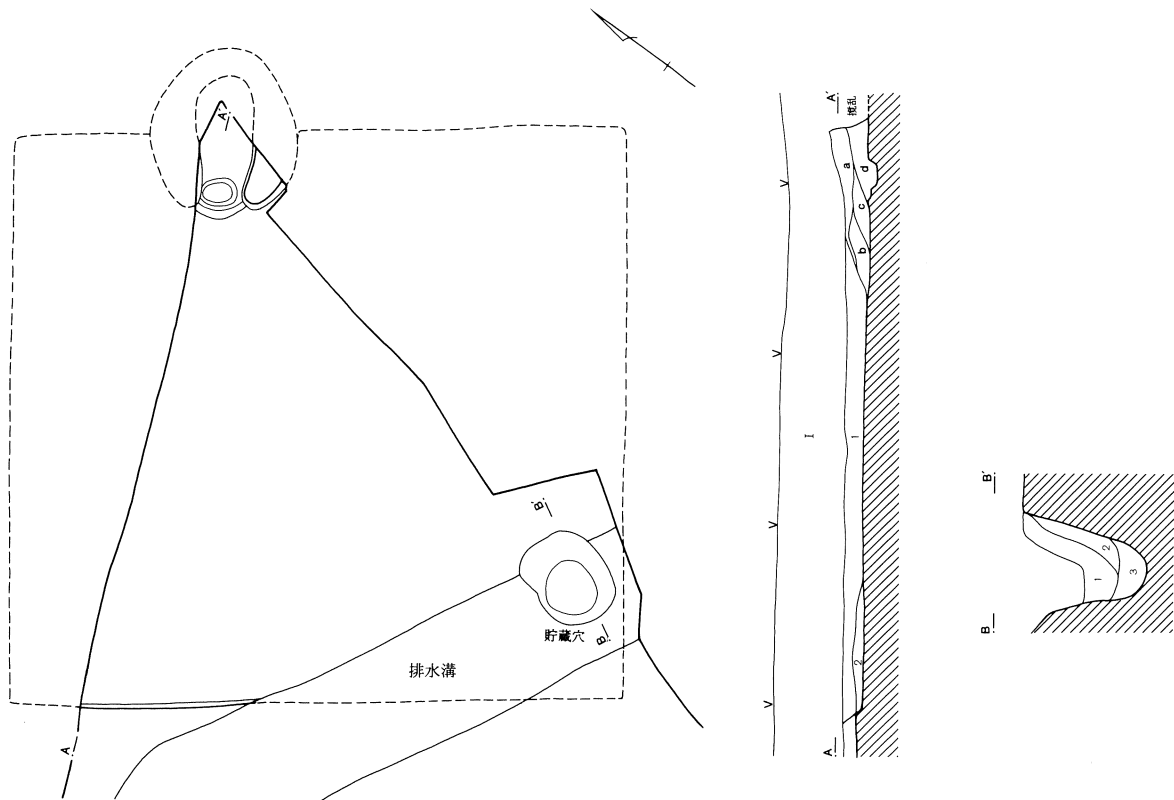
柱穴・壁溝は検出できなかった。

遺物は覆土と貯蔵穴から少量出土した。1の土師器の坏は小形で、やや粗製である。

第143図 第9号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.0)	(3.3)		BC'DG'H'	A	浅黄橙	15%	覆土
2	坏	11.8	5.4		BC'GH'	A	浅黄橙	60%	貯蔵穴
3	坏	(12.0)			C'DGH'	A	橙	20%	覆土
4	坏	(12.6)			BC'H'	A	橙	55%	貯蔵穴
5	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	橙	20%	覆土
6	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	15%	貯蔵穴
7	坏	(13.0)			C'DGH'	A	にぶい橙	20%	覆土
8	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	15%	貯蔵穴
9	坏	(13.0)			BC'DG'H'	A	橙	15%	貯蔵穴
10	柑	(8.8)			BC'DG'H'	A	橙	20%	覆土
11	壺			(6.0)	BC'GH'	A	灰白	35%	覆土
12	甕			(5.0)	DGH	A	橙	20%	覆土
13	甕			6.2	BHI	A	明赤褐	60%	貯蔵穴

第142図 第9号住居跡



第9号住居跡土層説明

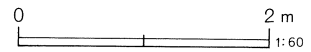
- I 灰褐色土 表土  
 1 灰黄褐色土 白色パミス・焼土粒子・炭化物粒子を微量。  
 2 黄褐色土 暗褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を微量。

カマド

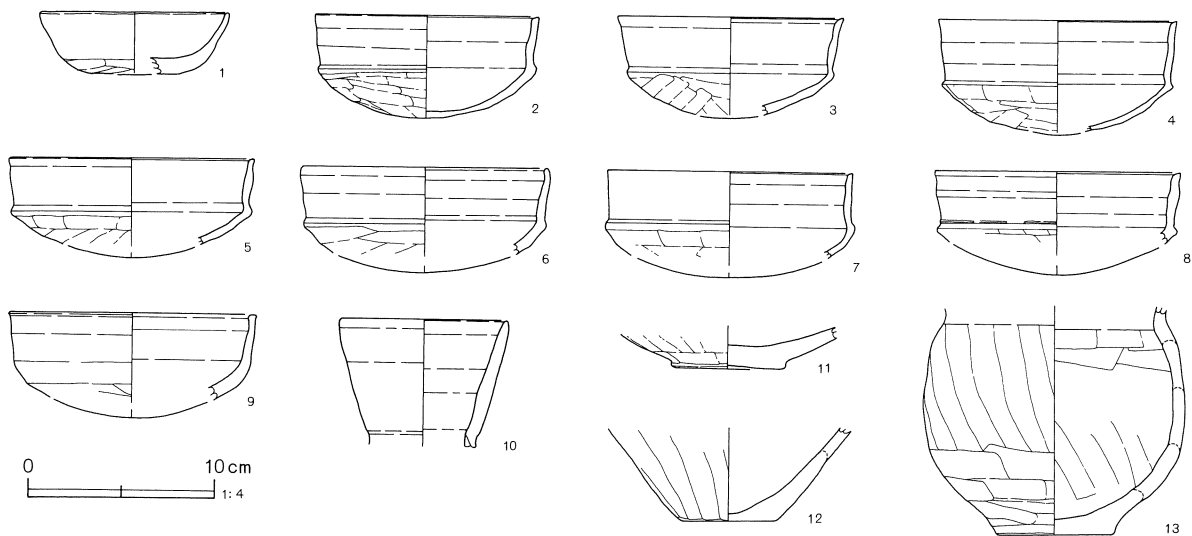
- a 褐色土 暗褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を微量。  
 b 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量、暗褐色土ブロックを微量。  
 c 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を大量、灰を微量。  
 d 黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・焼土ブロックを微量。

貯蔵穴

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。  
 2 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。  
 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。



第143図 第9号住居跡出土遺物



第10号住居跡(第144・145図)

BQ-4・5グリッドで検出された。東側は調査区外にかかるため全体を調査することができなかった。西側の約1/3は第8号溝および攪乱によって壊されており、遺存状態は悪かった。南北5.14m、東西推定3.75m、深さは0.15mであった。平面形態は南北に長い長方形をしていたと思われる。主軸方位はN-44°-Eである。

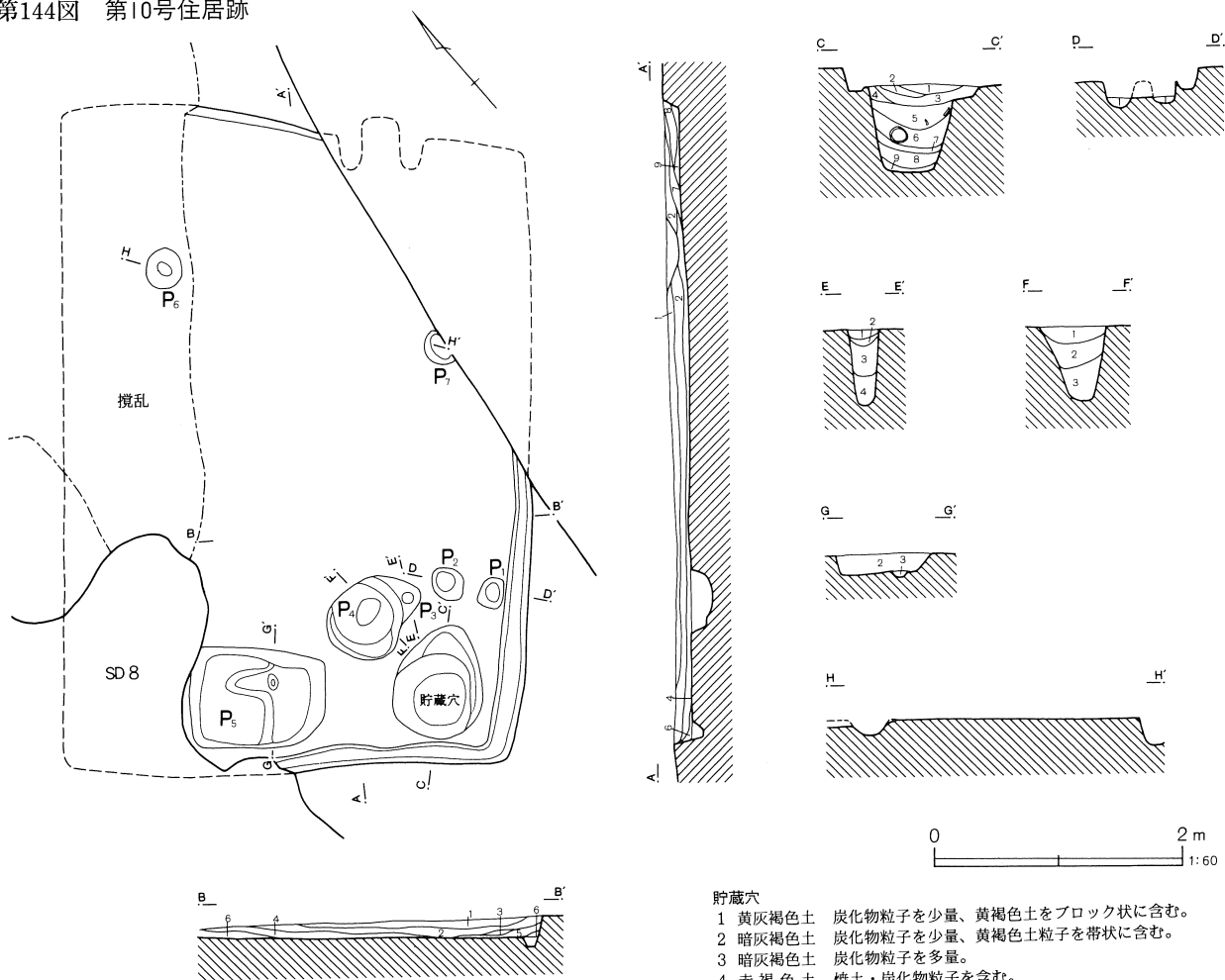
覆土は6層からなる自然堆積であった。1～6層が

住居跡覆土にあたる。2層には多量の焼土粒子と帯状に堆積した炭化物が認められた。住居跡埋没の過程で火を焚いた痕跡と思われる。本遺構自体は焼失住居ではない。

床面はほぼ平坦であった。壁は垂直に立ち上がる。

カマドは調査区東壁の断面観察によって住居跡北壁東寄りに位置していたことが分かった。調査区外になるため袖も検出できなかった。カマドの覆土は7～9層にあたる。9層が灰層になるものと思われる。

第144図 第10号住居跡



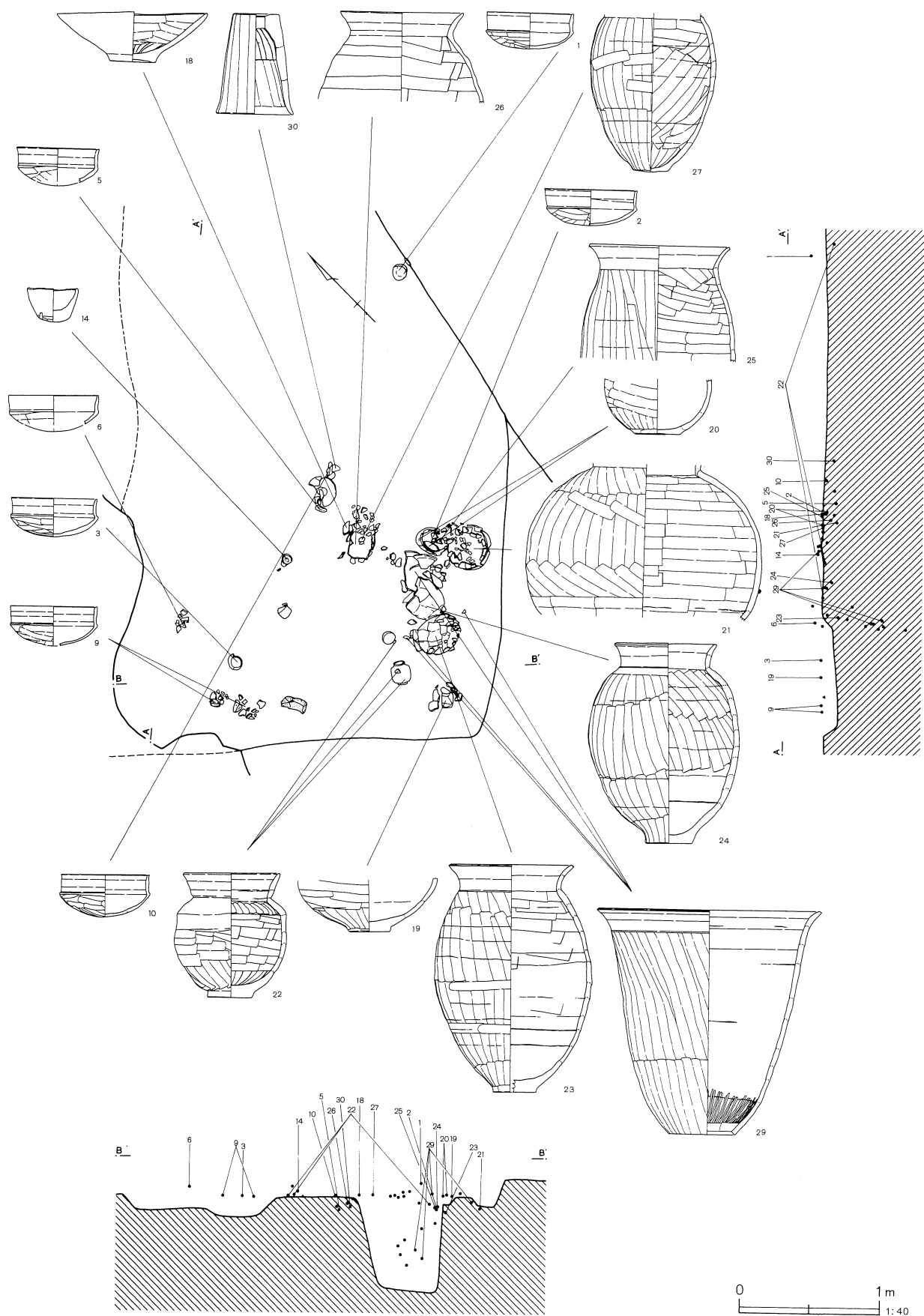
第10号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 2 暗灰褐色土 焼土粒子を多量。炭化物が帯状に堆積する。
- 3 黒褐色土 炭化物粒子を大量。
- 4 暗黄褐色土 灰色粘質土と黄褐色土の互層。
- 5 赤褐色土 焼土を含む。
- 6 黄褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- 7 暗灰褐色土 焼土粒子を少量。炭化物を含む粘質土がブロック状に堆積。
- 8 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 9 灰色土 灰を含む粘土。

貯蔵穴

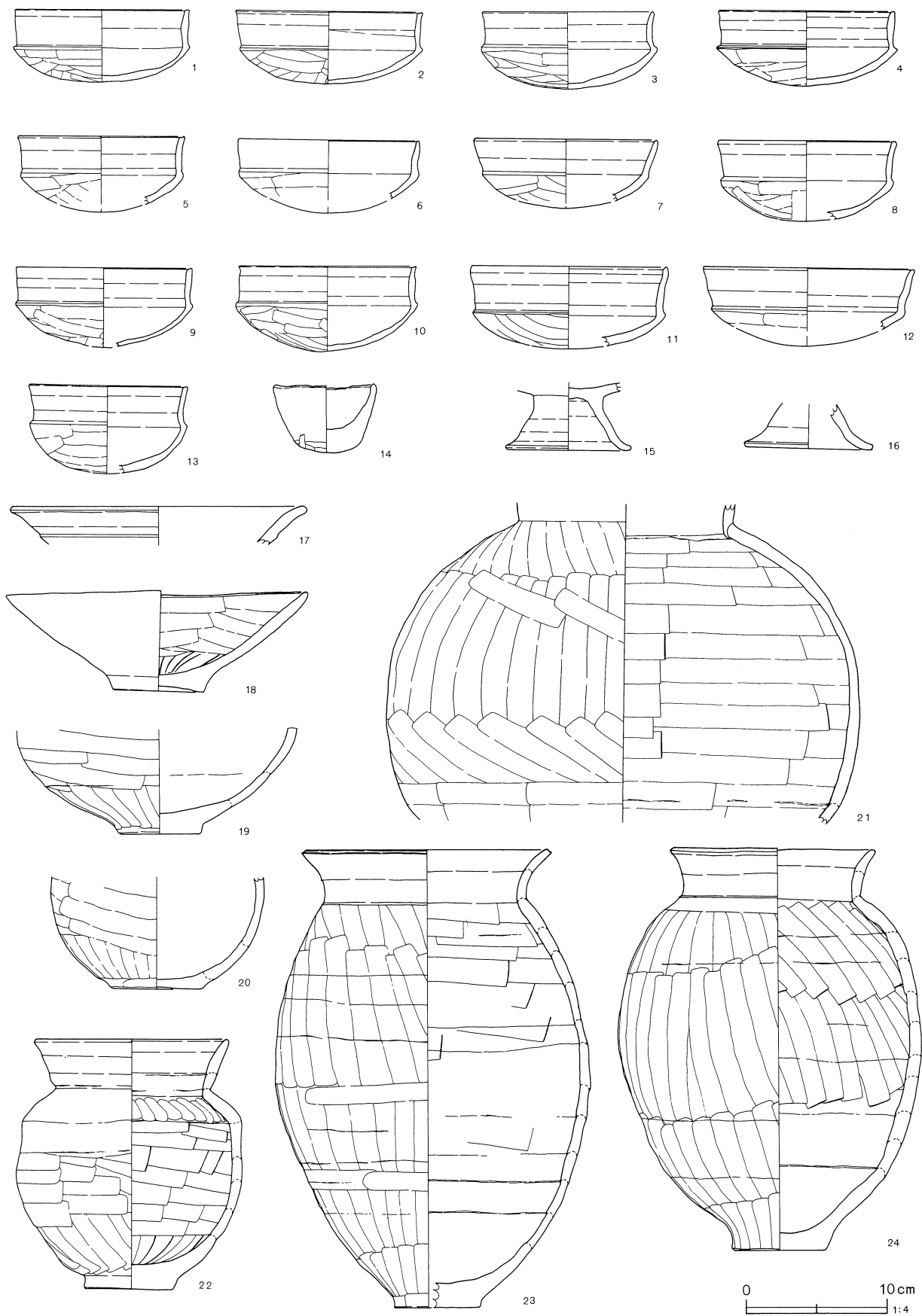
- 1 黄灰褐色土 炭化物粒子を少量、黄褐色土をブロック状に含む。
- 2 暗灰褐色土 炭化物粒子を少量、黄褐色土粒子を帯状に含む。
- 3 暗灰褐色土 炭化物粒子を多量。
- 4 赤褐色土 焼土・炭化物粒子を含む。
- 5 暗褐色土 炭化物粒子を少量。
- 6 暗褐色土 炭化物粒子を少量、黄褐色土をブロック状に含む。
- 7 黒褐色土 炭化物粒子・炭化物を大量。
- 8 灰色土 炭化物粒子を微量。
- 9 灰色土 炭化物粒子を少量。
- ビット1・2・3
  - 1 灰褐色土 炭化物粒子を少量。
  - 2 暗褐色土 炭化物粒子を多量。
  - 3 暗褐色土 炭化物粒子を少量。
- 4 暗黄褐色土 粘質土。
- ビット4・5
  - 1 暗褐色土 焼土粒子を少量、炭化物粒子を微量。
  - 2 暗褐色土 炭化物粒子を少量。
  - 3 暗黄褐色土 炭化物粒子を微量。

第145図 第10号住居跡遺物出土状況

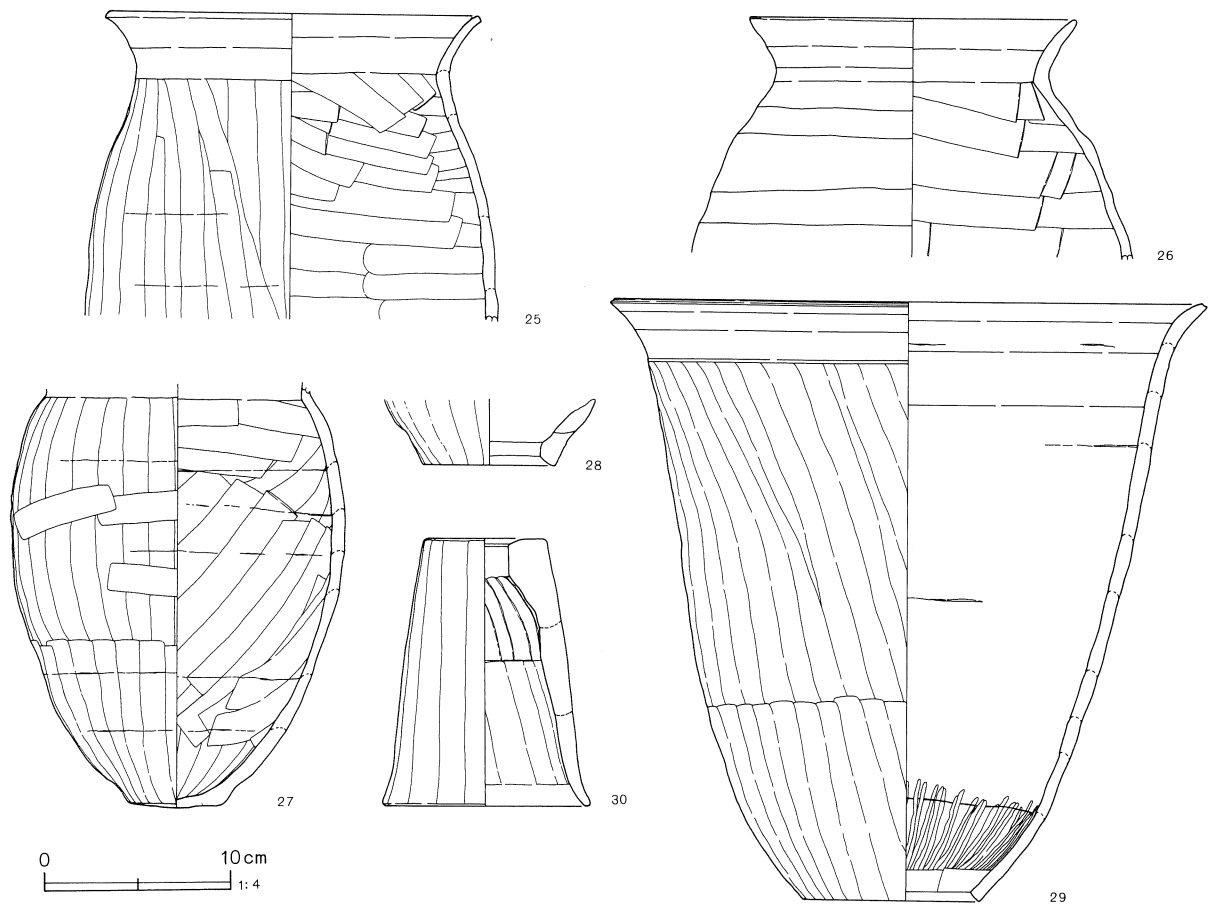




第146図 第10号住居跡出土遺物(1)



第147図 第10号住居跡出土遺物(2)



貯蔵穴は南東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径92cm、短径72cm、深さが67cmで、平面形態は楕円形をしていた。覆土全体には炭化物粒子が認められた。また覆土下層の7層中には大量の炭化物が検出された。この炭化物は棒状木材を並べた貯蔵穴の蓋材である可能性が高いと思われる。6層から出土した22の土師器の小形甕は、その蓋材の上に置かれていたものが蓋材の腐食とともに貯蔵穴内に落ち込んだものと考えられる。

ピットは7本確認できた。そのうち支柱穴と思われるのがP 2・6・7である。4本柱と思われるが、残りの1本は確認することができなかった。各柱穴の大きさは、P 2が25cm×22cm、P 6が30cm×10cm、P 7が28cm×23cmであった。他のピットは南壁周辺に集中していた。各ピットとも平面形態および形状がまちまちであり、性格は不明である。

壁溝は幅約20cm、深さ約8cmで、南壁と東壁に巡っていた。西壁については不明である。

遺物は住居跡南半部に集中して出土した。土器の大半が床面直上からの出土であった。1～3・5・8～10・13の土師器坏には内外面に煤が付着している。また3・9は二次的火熱を受けて、器面の一部が剥落している。18・19の壺は胴部下半から上を欠損しているが、割れ口部分は摩滅して丸くなっていることから鉢に転用されたものと思われる。2点とも内面には煤が付着する。21の壺は口縁部と胴部下半を欠いている。器台として転用されたものと思われる。甕の多くは器面に煤が付着している。26の甕は横方向にヘラナデ調整が施され、器面が平滑である。27は胴部下半がかなり火熱を受けているため器面が脆くなっている。30の土製支脚は火を受けた影響は認められない。

ほかに凝灰岩製の砥石が床面から1点出土した。

第146・147図 第10号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.4	5.1		BCDGH'	A	橙	100%	No.2 内外面とも煤が <sup>3</sup> 付着
2	坏	13.2	5.1		BC'DGH'	A	橙	95%	No.21 外面の全体が煤ける
3	坏	12.1	5.4		BC'DGH'	A	橙	95%	No.10~12 体部外面体に煤
4	坏	12.6	5.4		C'DGH'	A	浅黄橙	95%	覆土 外面の一部は黒く変色
5	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	にふい橙	20%	No.34 内外面とも煤が <sup>3</sup> 付着
6	坏	(13.0)			C'DGH'	A	橙	20%	No.9
7	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	20%	覆土
8	坏	(12.8)			BC'DG'H'	A	にふい橙	35%	覆土 内外面に煤が <sup>3</sup> 付着
9	坏	(12.6)			C'DGH'	A	橙	40%	No.11,12 口縁部外面は煤ける
10	坏	12.6	5.9		BCDGH'	A	橙	100%	貯蔵穴 内外面全体に煤が <sup>3</sup> 付着
11	坏	(13.7)			C'DGH'	A	にふい橙	15%	覆土
12	坏	(15.0)			DG'H'	A	黄橙	15%	ピット3
13	坏	(11.4)			C'DGH'	A	橙	25%	覆土 体部内面に多量の煤
14	ミニチュア	7.3	4.8		BC'DGH'	A	橙	100%	No.5 焚割れ
15	高坏			(8.8)	BC'DH'	A	橙	50%	覆土
16	高坏			(9.0)	BC'DGH'	A	にふい橙	15%	覆土
17	壺	(21.0)			C'DH'	A	橙	25%	覆土
18	壺			6.4	BC'DGH'	A	橙	95%	No.3,4,30 内面には多量の煤が <sup>3</sup> 付着
19	壺			5.8	BC'DGH'	A	橙	80%	No.14 内面には煤が <sup>3</sup> 付着
20	壺			6.6	BC'DGH'	A	浅黄橙	65%	No.22,24 底部から体部外面にかけて黒く変色
21	壺				C'DGH'	A	橙	80%	No.23
22	甕	13.6	17.4	6.2	BC'EH	A	橙	95%	貯蔵穴No.1,2,6~9 内外面とも煤ける
23	甕	17.6	31.9	(6.1)	BCDH'	A	にふい褐	90%	No.16 内外面とも煤ける
24	甕	(14.5)	(28.2)	6.8	BEH	A	橙	85%	No.19 内面は多量の煤が <sup>3</sup> 付着
25	甕	(20.0)			C'EGH	A	橙	65%	No.21
26	甕	(17.4)			DGH	A	浅黄橙	30%	No.30
27	甕			(5.0)	BEH	A	橙	55%	No.30,33
28	甗			(7.0)	C'DH'	A	橙	20%	覆土
29	甗	(31.6)	(31.5)	9.3	BDGH'	A	橙	55%	No.16,18,20,貯蔵穴No.5~7
30	支脚	(6.6)	14.0	(11.0)	C'DGH'	A	橙	40%	No.36

## 第11号住居跡(第148・149図)

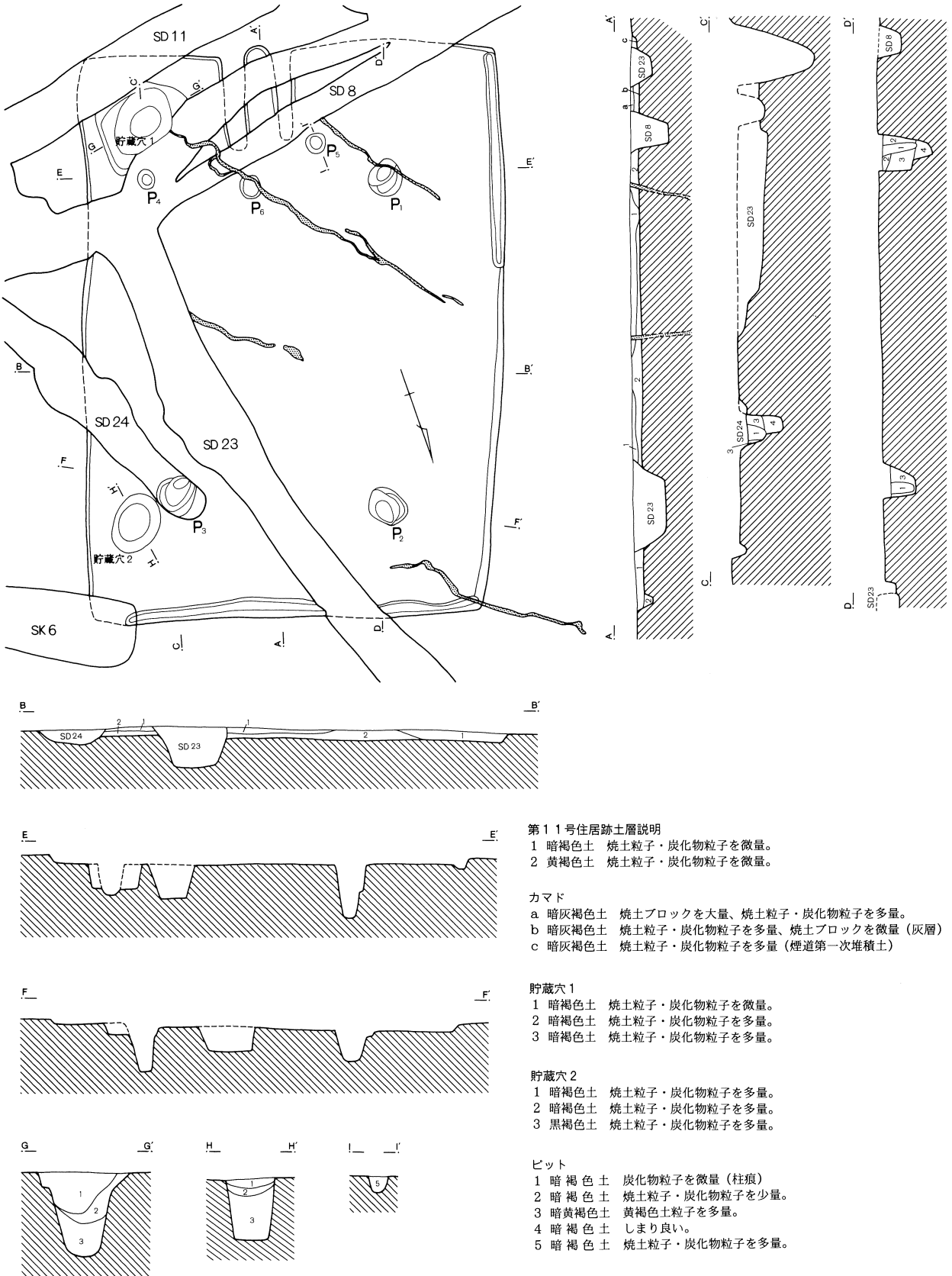
BO-4・5、BP-4・5グリッドで検出された。第8・11・23・24号溝、第6号土壇に各部分を壊されており、遺存状態はあまり良くなかった。また住居跡内を走行している噴砂の影響で南壁と東壁は僅かに歪んでいた。南北5.83m、東西4.40m、深さが0.10mで、平面形態は南北に長い長方形をしていた。主軸方位はN-161°-Wである。

覆土は2層からなる自然堆積であった。焼土粒子、炭化物粒子を微量に含んでいた。

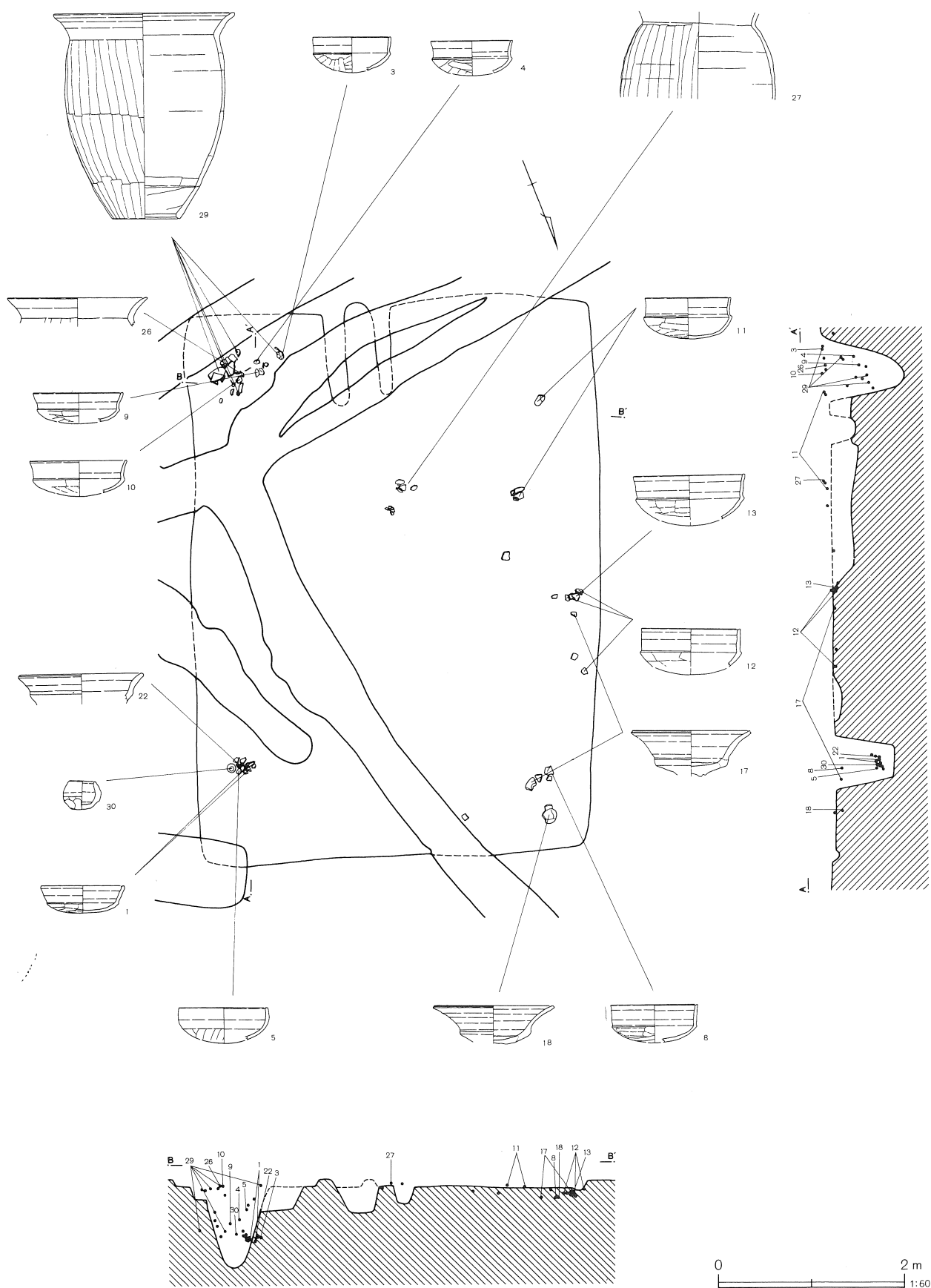
カマドは南壁やや東寄りに位置していた。後世の溝に大部分を壊されていたため遺存状態が悪く、検出できたのは僅かであった。袖は地山の削り出して、内側の壁面は赤く焼けていた。燃焼部は掘り込みがないも

のと思われる。住居跡壁外には延びず、下層には厚さ5cmの灰層があった。カマドからは遺物がほとんど出土しなかった。

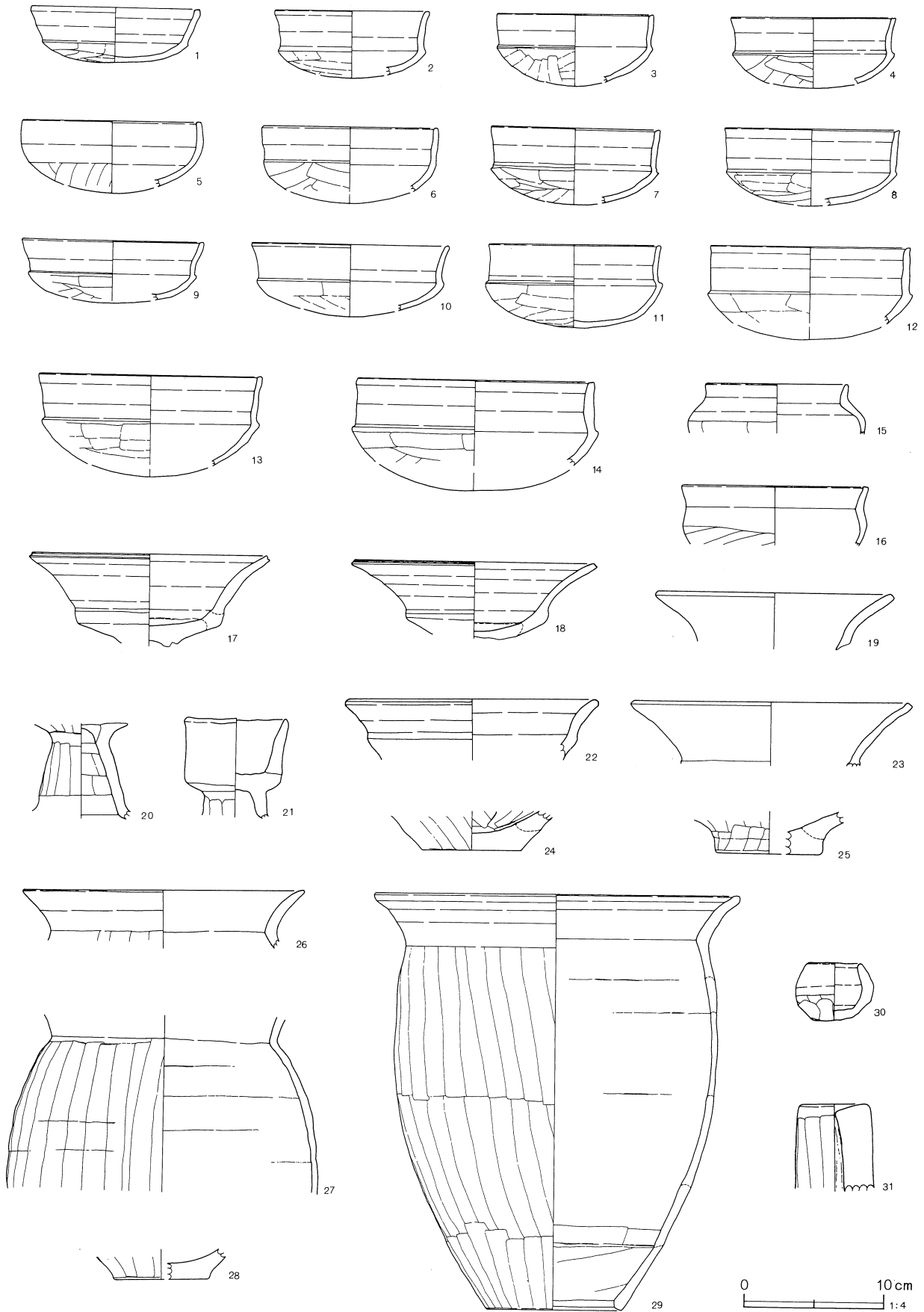
貯蔵穴は住居跡の南と北に各1基ずつ確認できた。貯蔵穴1は南東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径98cm、短径推定80cm、深さが87cmであった。平面形態は長方形に近く、上部にはテラス状の段が掘り込まれていた。覆土2・3層には焼土粒子、炭化物粒子を多量に含んでいた。遺物は上面から2層にかけて多くの土器が出土した。貯蔵穴2は北東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径62cm、短径48cm、深さが63cmで、平面形態は楕円形をしていた。覆土全体に焼土粒子、炭化物粒子を多量に含んでいた。遺物は3層から少量出土した。



第149図 第11号住居跡遺物出土状況



第150图 第II号住居跡出土遺物



ピットは6本確認できた。そのうち支柱穴がP1・2・3・4の4本である。各柱穴の大きさは、P1が38cm×58cm、P2が41cm×36cm、P3が40cm×49cm、P4が18cm×5cmであった。後世の溝に大部分を壊されていたP4を除き、他の3本には柱穴の痕跡が確認された。柱の径は11~15cmで、円柱であった。支柱穴以外のピット2本はカマド近辺に位置していた。大きさは、P5が20cm×17cm、P6が22cm×4cmで、性格は不明である。

壁溝は幅約15cm、深さ約9cmで、西壁の一部と北壁に巡っていた。

遺物は住居跡西側の床面と貯蔵穴から集中して出土

した。西壁寄りの床面直上からは8・11~13の土師器の坏、17・18の高坏が出土した。高坏は何れも脚部を欠損している。貯蔵穴1からは3・4・9・10の坏、26の甕、29の甗、31の支脚が出土した。どれも残存率は低い。9の坏は体部外面に煤が付着している。貯蔵穴2からは1・5~7の坏、22の壺、30のミニチュア土器が出土した。5の坏は外面全体に煤が付着している。30は口縁部外面と内面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ調整が施される。21の土器は特異な器形をしており、作りはやや粗雑である。脚部は20のような長脚のものがつくと思われる。

第150図 第11号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	(3.9)		BC'GH'	A	橙	20%	No.42, 43
2	坏	(11.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	覆土
3	坏	(11.0)			C'GH'	A	橙	20%	No.31
4	坏	(11.8)			BC'DGH'	A	橙	40%	No.34
5	坏	(12.6)			C'DGH'	A	橙	20%	No.41 外面全体が煤ける
6	坏	(12.6)			CG'H'	A	橙	30%	貯蔵穴2
7	坏	(12.0)			C'DGH'	A	橙	20%	貯蔵穴2
8	坏	(12.4)	(5.4)		BC'DGH'	A	橙	35%	No.4
9	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	15%	No.35 体部外面は煤ける
10	坏	(14.0)			BCDGH'	A	橙	10%	No.29
11	坏	12.3	5.9		BC'DGH'	A	黄橙	75%	No.14, 15
12	坏	(14.2)			BCDGH'	A	橙	30%	No.5, 9, 11
13	坏	(16.0)			BC'DG'H'	A	橙	10%	No.8
14	坏	(16.6)			BC'DH'	A	橙	25%	覆土
15	碗	(10.0)			C'DGH'	A	黄橙	30%	覆土
16	碗	(13.2)			BC'H'	A	橙	25%	覆土
17	高坏	(17.1)			BCDH'	A	橙	50%	No.3, 7
18	高坏	17.4			BCDH'	A	橙	80%	No.2
19	高坏	(17.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	覆土
20	高坏				BC'DGH'	A	黄橙	85%	覆土
21		(7.0)			C'DGH'	A	黄橙	65%	覆土
22	壺	(18.0)			BDH	A	にぶい褐	10%	No.40
23	壺	(20.0)			BCDGH'	A	橙	15%	貯蔵穴1
24	壺			(7.0)	BC'DGH	A	浅黄橙	15%	覆土
25	壺			(7.6)	BC'DH	A	橙	30%	覆土
26	甕	(20.0)			BC'EH	A	浅黄橙	10%	No.28
27	甕				BC'DHI'	A	橙	20%	No.17
28	甕			(6.8)	BC'DEH	A	にぶい橙	45%	覆土
29	甗	(26.0)	(29.2)	(9.6)	C'GH'	A	橙	40%	No.24~27, 50 外面の一部が黒く変色する
30	ミニチュア	3.7	4.1	3.1	C'GH'	A	橙	100%	No.38
31	支脚				BCGH'	A	にぶい橙	25%	貯蔵穴1

第12号住居跡(第151・152図)

BQ-4グリッドで検出された。第1号道路跡の硬化面直下に位置していたため、遺存状態はあまり良くなかった。第16号溝が南西隅の住居跡覆土を掘り込んでいた。また、北と南東部分は攪乱および第15号溝によって壊されていた。南北3.90m、東西4.10m、深さが0.26mで、平面形態は方形をしていた。主軸方位はN-25°-Eである。

覆土は第1号道路跡硬化面下のため踏み固められており、よく締まっていた。硬化面造成のために床面まで掘り込まれていた部分があった。住居跡は6層からなる自然堆積で、覆土全体に焼土粒子、炭化物粒子を含んでいた。北東部分の最下層には厚さ3cm程の灰が

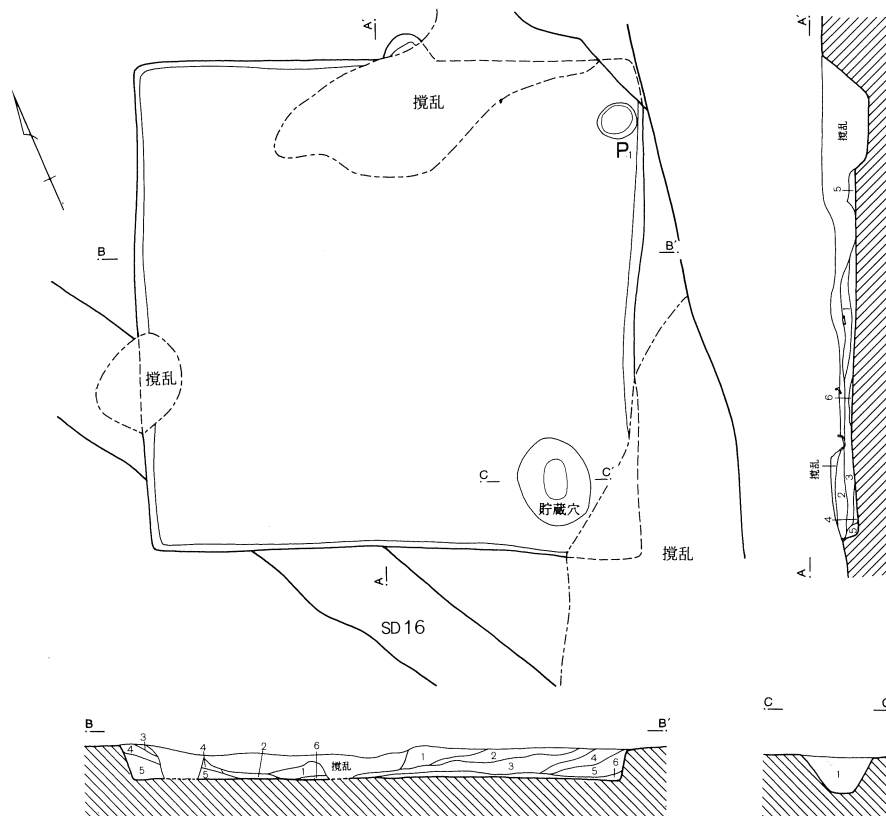
認められた。

床面はほぼ平坦であった。

カマドは北壁ほぼ中央に位置していた。攪乱によって大部分を壊されていたため、検出できたのは燃焼部の奥壁部分だけであった。カマド覆土の観察はできなかった。燃焼部は壁外に少し延びるもので、あまり赤く焼けていなかった。カマドからは遺物がまったく出土していない。

貯蔵穴は南東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径68cm、短径58cm、深さ29cmであった。平面形態は楕円形をしており、覆土には焼土粒子、炭化物粒子を微量に含んでいた。遺物は覆土から土師器が少量出土した。

第151図 第12号住居跡



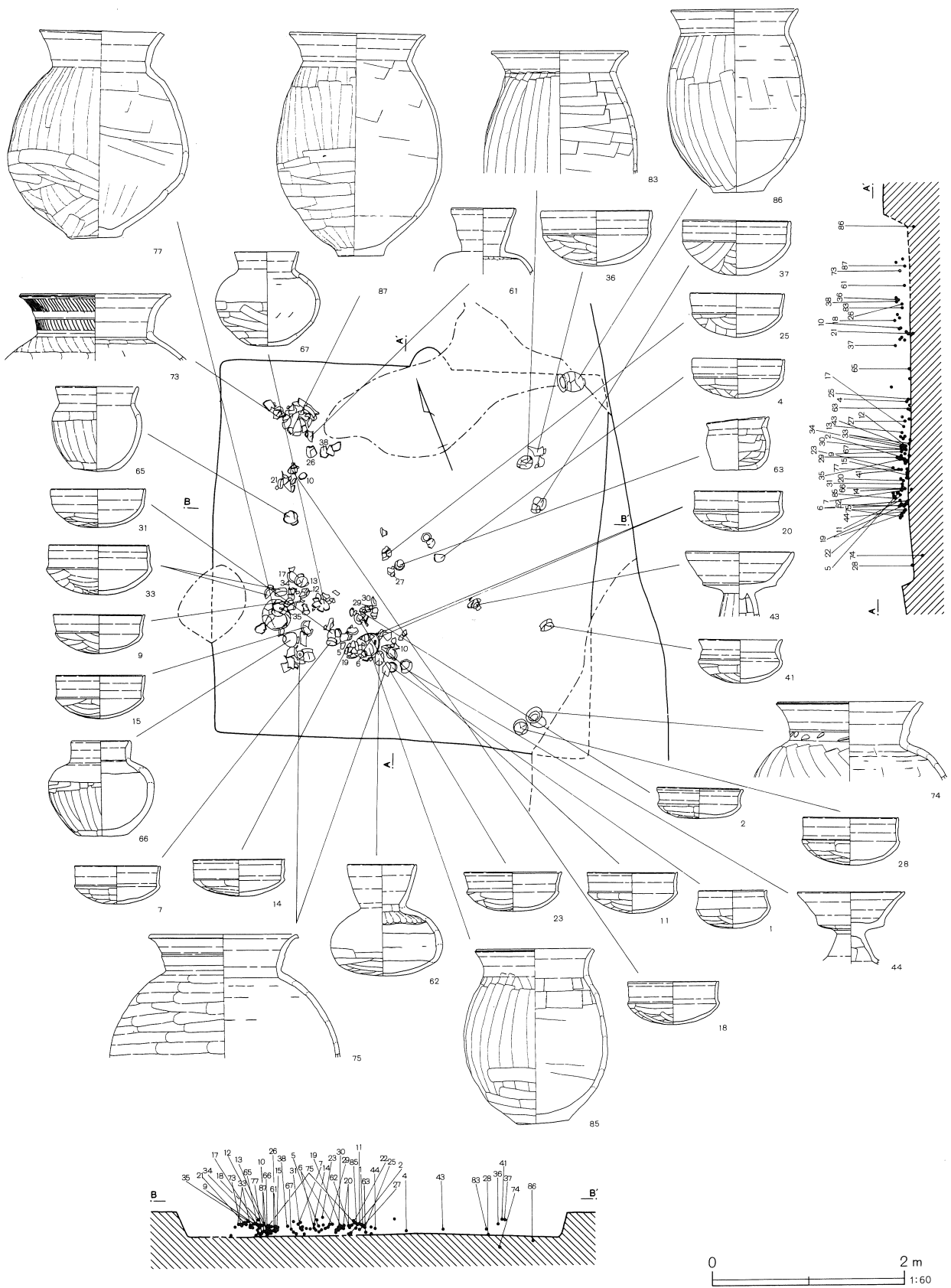
第12号住居跡土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
  - 2 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
  - 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
  - 4 淡褐色土 黄褐色土ブロックを主体に含み、焼土粒子・炭化物粒子を若干。
  - 5 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
  - 6 淡灰褐色土 灰・炭化物粒子を多量、黄褐色土ブロック・焼土ブロックを少量。
- 貯蔵穴
- 1 淡褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

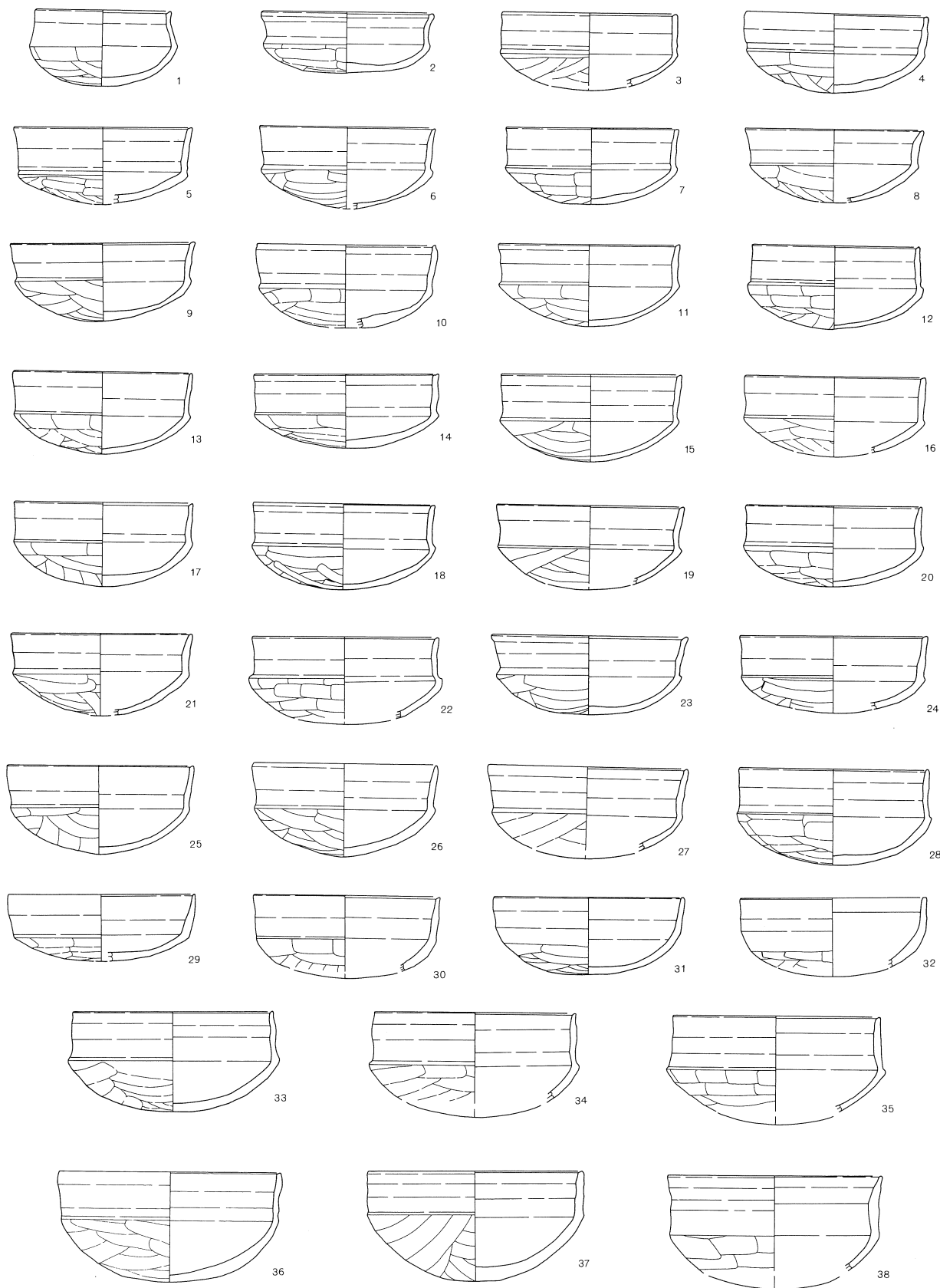
0 2 m  
1:60



第152図 第12号住居跡遺物出土状況



第153图 第12号住居跡出土遺物(1)

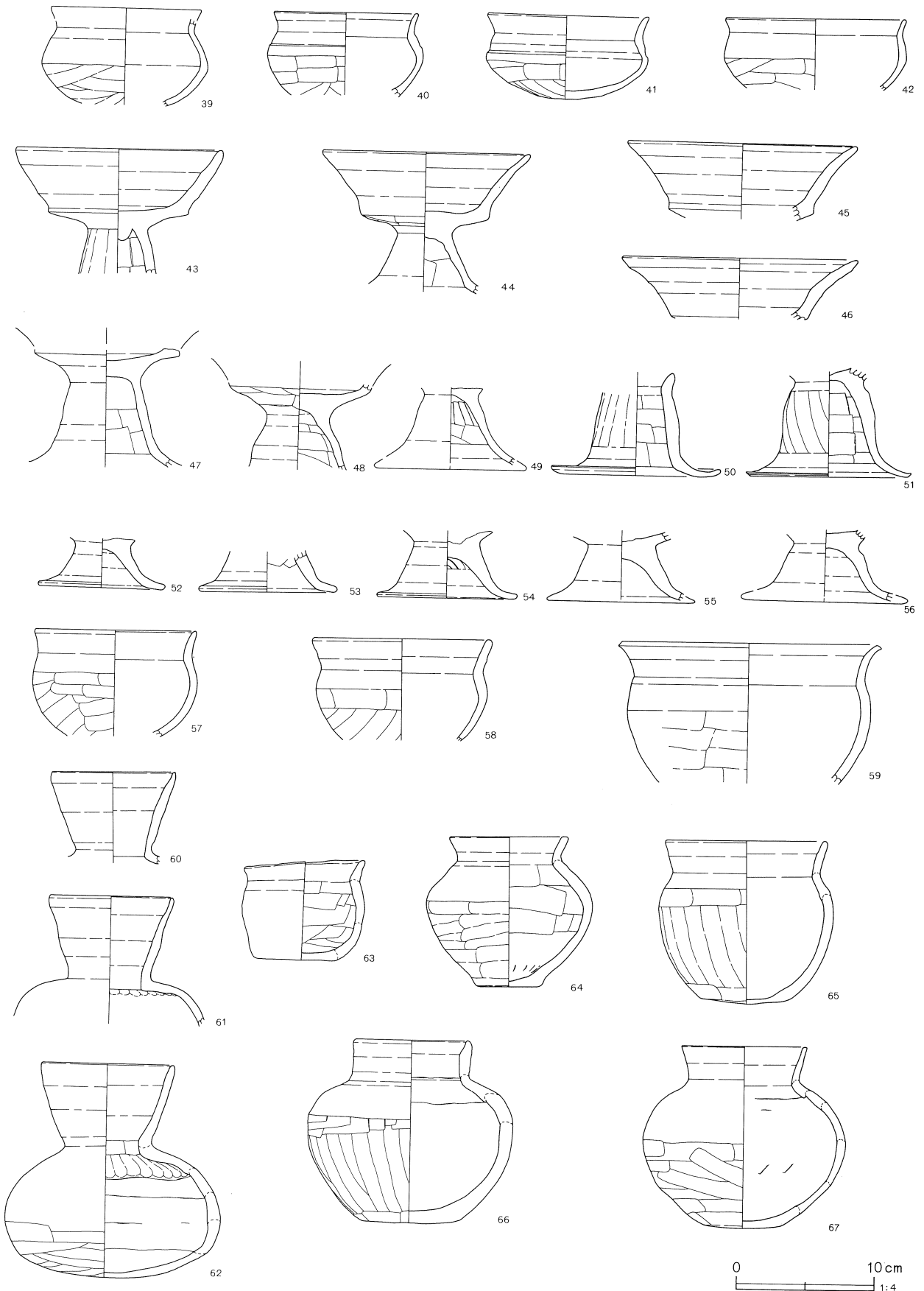


0 10 cm  
1:4

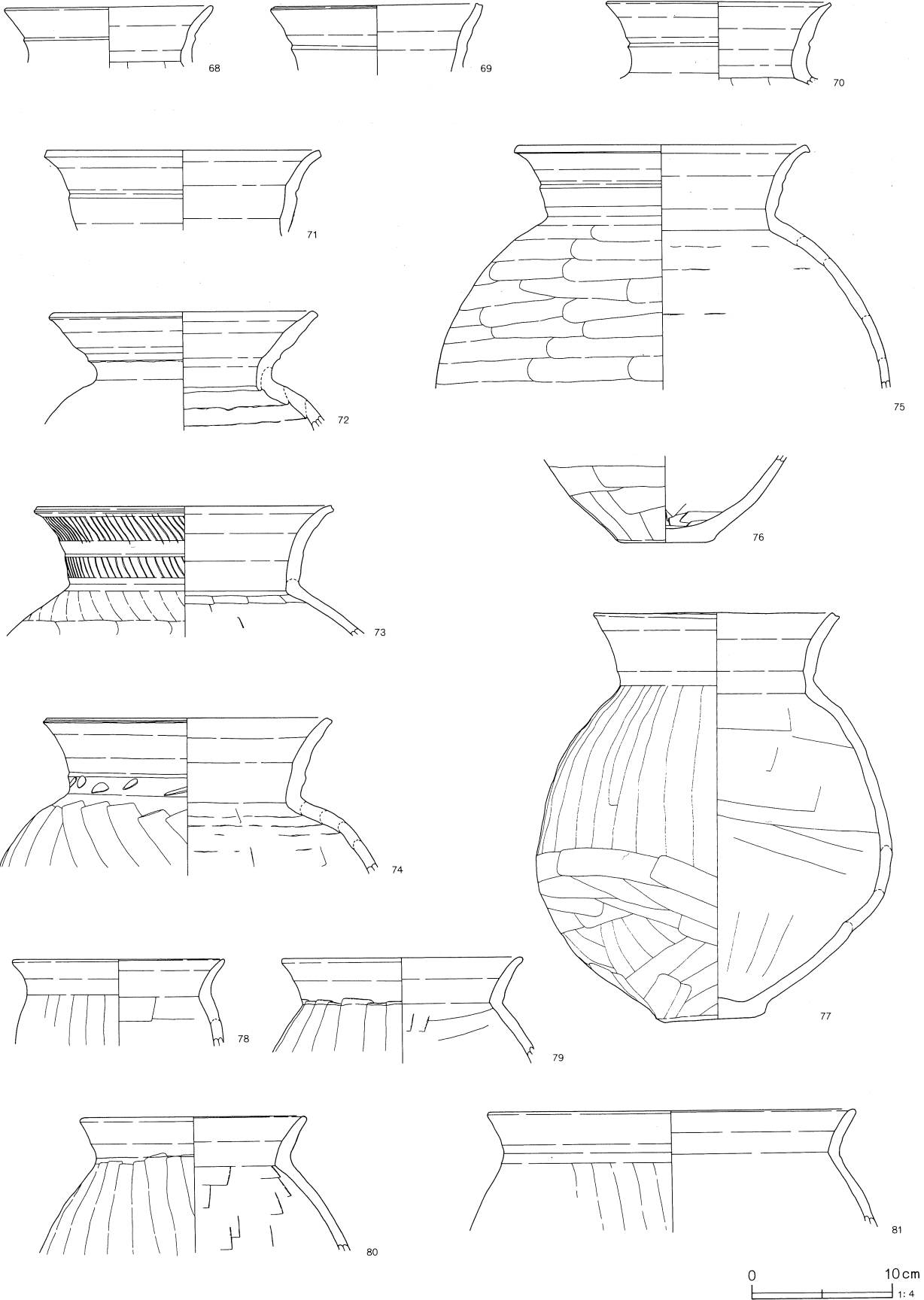
第153~156図 第12号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	9.4	5.2		BC'DGH'	A	橙	100%	No.2
2	坏	(12.0)	4.2		BC'DGH'	A	橙	35%	No.38
3	坏	(12.0)			BC'GH'	A	黄橙	20%	II区 外面は黒く変色
4	坏	(12.6)	(5.4)		BC'DGH'	A	橙	40%	No.70 外面は黒く変色
5	坏	(12.4)			BC'DGH'	A	橙	20%	No.20
6	坏	(12.2)			BC'DGH'	A	橙	40%	No.15、18
7	坏	(12.0)	5.2		BCDGH'	A	橙	30%	No.27
8	坏	(12.4)			BC'DGH'	A	橙	20%	IV区
9	坏	12.8	5.4		BC'DGH'	A	黄橙	90%	No.95 体部内面は黒く変色
10	坏	(12.4)			C'DGH'	A	橙	30%	No.50
11	坏	12.6	5.6		BC'H'	A	橙	90%	No.5
12	坏	(11.6)	5.7		BC'DGH'	A	橙	40%	No.101 外面は黒く変色
13	坏	(12.4)	5.6		BC'DGH'	A	橙	85%	No.94
14	坏	12.8	5.1		BC'DGH'	A	橙	90%	No.18
15	坏	12.4	6.0		BC'DGH'	A	橙	85%	No.82
16	坏	12.5			BC'DGH'	A	橙	70%	III区
17	坏	(12.4)	5.8		BCDGH'	A	橙	80%	No.92 体部外面は黒く変色
18	坏	12.6	5.9		C'GH'	A	黄橙	70%	No.48 内外面とも煤ける
19	坏	(13.0)			BCDGH'	A	橙	25%	No.18
20	坏	(12.2)	5.6		BC'DGH'	A	橙	45%	No.11、12 外面は黒く変色
21	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	橙	35%	No.42
22	坏	(13.0)			BCDGH'	A	黄橙	20%	No.10
23	坏	(13.6)	5.4		BCDGH'	A	橙	50%	No.30
24	坏	(13.0)			C'DH'	A	にふい橙	15%	覆土 内外面とも煤ける
25	坏	(13.0)	(6.1)		BC'GH'	A	黄橙	30%	No.63
26	坏	(12.8)	6.4		C'DGH'	A	橙	50%	No.53 体部外面は黒く変色
27	坏	(14.0)			BCDGH'	A	黄橙	25%	No.65
28	坏	13.2	6.6		BC'GH'	A	橙	95%	No.104 外面は黒く変色
29	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	No.35
30	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	にふい橙	25%	No.34 外面は黒く変色
31	坏	13.2	5.3		BC'DH'	A	にふい橙	80%	No.28 内面には多量の煤が付着
32	坏	(13.0)			BCDH'	A	橙	20%	覆土
33	坏	13.8	6.9		BC'DGH'	A	橙	95%	No.89、91
34	坏	(14.0)			BC'DGH'	A	橙	25%	No.96
35	坏	(14.4)			BC'DGH'	A	橙	25%	No.87
36	坏	(15.4)	7.6		BC'DGH'	A	橙	70%	No.109
37	坏	(15.0)	7.6		BC'DGH'	A	橙	50%	No.107
38	坏	(15.0)			C'GH'	A	橙	25%	No.56
39	碗				BC'DGH'	A	橙	25%	覆土
40	碗	(10.4)			BC'DGH'	A	橙	25%	II区
41	碗	(11.6)	6.0		BCDGH'	A	橙	45%	No.106 外面は黒く変色
42	碗	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	東ベルト
43	高坏	15.0			BC'DGH'	A	橙	75%	No.71
44	高坏	(15.0)			BC'DGH'	A	橙	80%	No.1
45	高坏	(16.6)			BC'DGH'	A	橙	45%	No.39
46	高坏	(17.0)			BC'DGH'	A	橙	30%	覆土
47	高坏				BC'DGH'	A	橙	75%	No.69
48	高坏				BC'DGH'	A	橙	70%	南ベルト
49	高坏				BC'DGH'	A	黄橙	75%	No.62
50	高坏			(12.2)	BC'DGH'	A	橙	75%	II区
51	高坏			(12.0)	BC'DGH'	A	明赤褐	70%	覆土
52	高坏			9.2	BC'DGH'	A	橙	90%	南ベルト
53	高坏			(10.0)	BCDGH'	A	橙	30%	II区

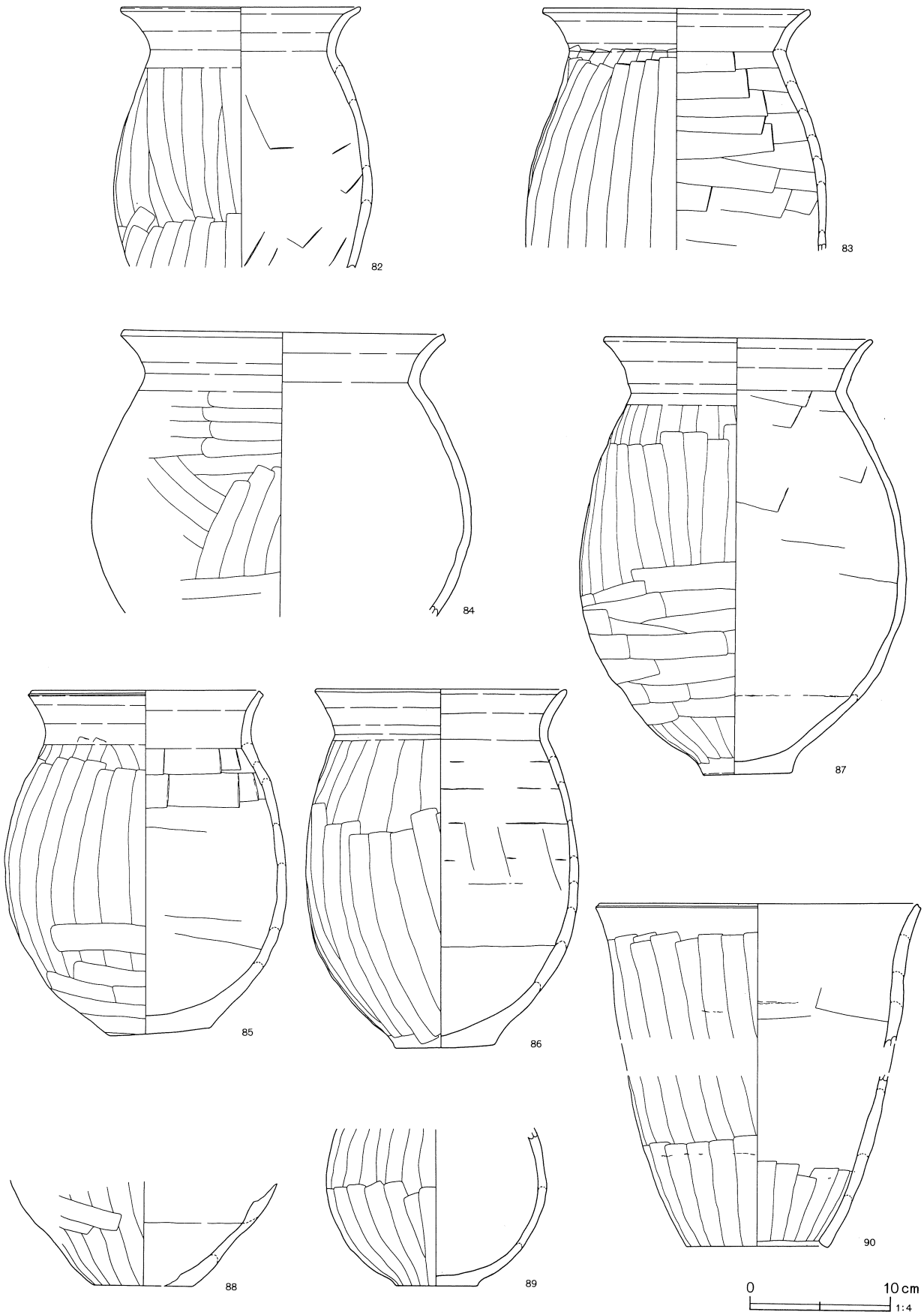
第154図 第12号住居跡出土遺物(2)



第155図 第12号住居跡出土遺物(3)



第156图 第12号住居跡出土遺物(4)



ピットは1本確認できた。北東コーナー隅に位置しており、大きさは32cm×29cm×7cmであった。支柱穴になるかは確認できなかった。

壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土から床面に至るまで多量の土器が出土した。覆土上層の土器は硬化面の直下にあたるため、検出した時には粉々に割れていた。床面直上から出土した土器は南西寄りに集中しており、遺存状態は良かった。坏の1・2・5～7・9～15・17・19・20・23・29～31・33～35の22点がその範囲に集中していた。31の内面は煤が多量に付着している。18・24の坏も内外

面に煤が付着する。一方、甕は住居跡の北側に多くみられた。86は北東コーナーに横倒しになった状態で出土した。胴部下半外面には付着物が認められる。内面には輪積み痕が明瞭である。貯蔵穴からは28の坏と74の壺が出土した。74の壺は本来は貯蔵穴の上に据え置かれていたものと思われる。72～75の壺は、何れも胴部下半が欠損している。74以外は残存率が低い器台として転用された可能性が高い。72・73は外面に多量の煤が付着している。73の口縁部外面にはほぼ等間隔の斜位の暗文が2段施されている。74は頸部外面にヘラ状工具による圧痕が不規則に巡っている。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
54	高坏			10.2	BCDGH'	A	橙	90%	No.77, 78
55	高坏				BC'DGH'	A	にふい橙	55%	II区
56	高坏				BC'DGH'	A	橙	55%	II区
57	鉢	(11.6)			BC'DGH'	A	黄橙	25%	No.103
58	鉢	(13.0)			C'GH'	A	にふい橙	15%	I区 外面には少量の煤が付着
59	鉢	(19.0)			C'GH'	A	にふい橙	15%	III区 外面は煤ける
60	埴	9.0			BC'DGH'	A	橙	90%	No.102
61	埴	(8.8)			BC'DGH'	A	橙	60%	No.57
62	埴	(9.6)	15.4		C'GH'	A	橙	85%	No.4
63	壺	8.6	7.3	6.0	BC'DH'	A	橙	100%	No.66
64	壺	(8.6)	(10.8)	4.6	C'GH'	A	橙	45%	南ベルト
65	壺	(11.6)	(11.7)	6.4	BC'DGH'	A	橙	50%	No.41 底部外面は黒く変色
66	壺	8.0	13.1	6.8	BCDGH'	A	橙	100%	No.84
67	壺	(9.0)	(13.0)	5.4	BC'H'	A	橙	50%	No.72 底部外面は黒く変色
68	壺	(14.8)			C'GH'	A	浅黄橙	45%	IV区
69	壺	(15.0)			BC'GH'	A	橙	75%	No.7
70	壺	(16.0)			BC'DGH'	A	橙	45%	No.47
71	壺	(19.6)			BC'GH'	A	橙	20%	No.80
72	壺	(19.0)			BC'DGH'	A	にふい橙	15%	I区 外面に多量の煤
73	壺	(21.0)			BC'DGH'	A	橙	35%	No.60 外面には多量の煤が付着
74	壺	20.2			BC'DH'	A	黄橙	80%	No.105
75	壺	(20.8)			C'GH'	A	橙	25%	No.3, 79
76	壺			7.0	BC'GH'	A	橙	55%	貯蔵穴
77	壺	17.3	18.8	7.8	BC'DGH'	A	黄橙	95%	No.88 内外面の一部は黒く変色
78	甕	(15.0)			C'H	A	にふい褐	15%	覆土
79	甕	(17.0)			BC'DH'	A	橙	15%	IV区
80	甕	(16.0)			BC'FGH'	A	橙	20%	No.54
81	甕	(26.0)			BCDGH'	A	黄橙	10%	西ベルト
82	甕	(17.0)			BC'H	A	浅黄橙	70%	II区
83	甕	19.0			BC'DGH'	A	橙	70%	No.108
84	甕	(23.0)			C'EH	A	橙	15%	No.77, 81
85	甕	16.6	24.1	7.0	BC'EGH	A	橙	90%	No.14 外面は黒く変色
86	甕	17.8	25.1	7.0	BC'GH	A	にふい褐	100%	No.110 胴部外面は黒く変色
87	甕	19.0	30.8	6.5	BC'DGH	A	黄橙	95%	No.58
88	甕			(7.0)	BC'H	A	浅黄橙	20%	IV区 外面全体は煤ける
89	甕			5.8	BC'EH	A	にふい橙	55%	No.17
90	甗	(23.0)		(10.0)	BCDGH'	A	橙	15%	II区

第13号住居跡(第157図)

BM-4・5、BN-4・5グリッドで検出された。第42号溝に東壁を壊されていた。東西3.51m、南北3.37m、深さは0.08mであった。平面形態は東西に長い長方形をしていたと思われる。主軸方位はN-122°-Wである。

覆土は3層からなる自然堆積であった。

床面はほぼ平坦であった。

カマドは西壁やや南寄りに位置していた。袖は地山の

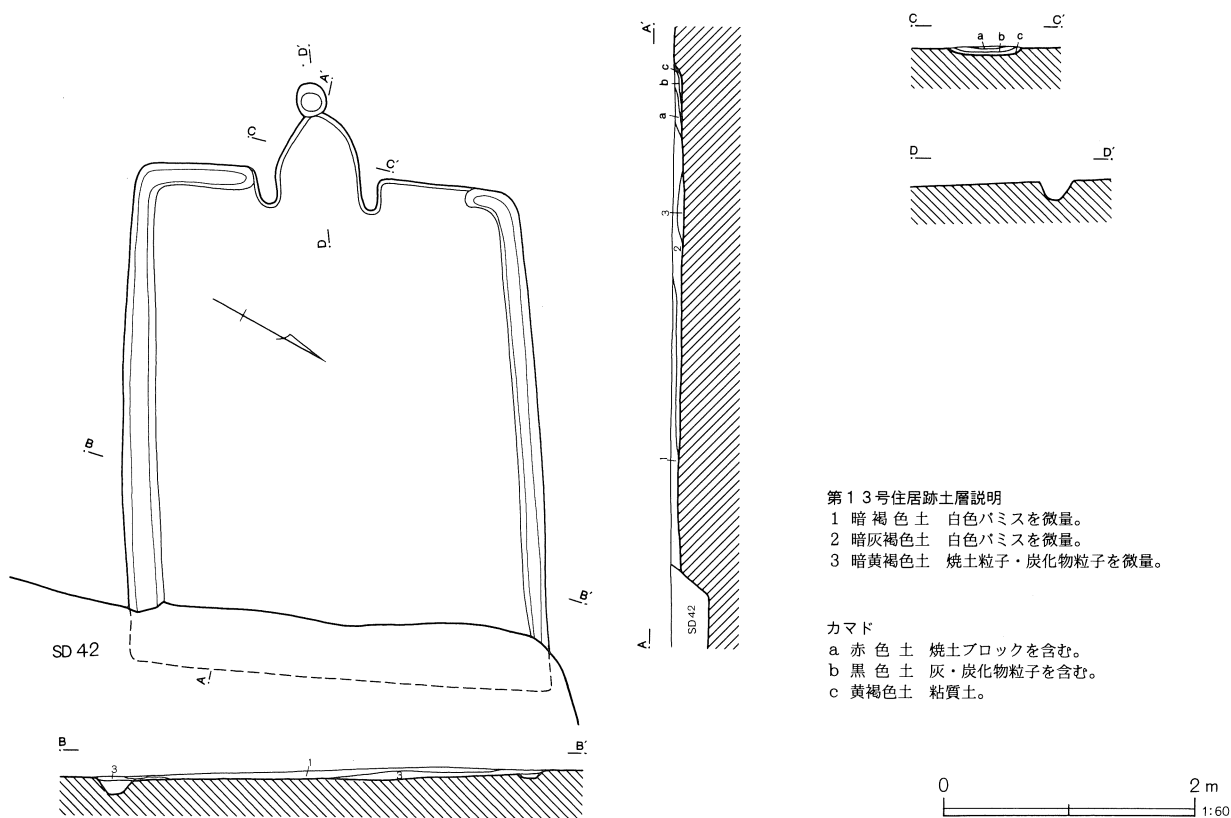
の削り出しであった。燃焼部は僅かに壁外に延び、掘り込みはなかった。下層には厚さ1cmの灰層が認められた。煙道部分には25cm×15cmのピットがあったが、本遺構に伴うものかは確認できなかった。

壁溝は幅約26cm、深さ約3cmで、西壁カマド右側の部分を除き全周していた。

柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は覆土から土師器片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

第157図 第13号住居跡



- 第13号住居跡土層説明
- 1 暗褐色土 白色バミスを微量。
  - 2 暗灰褐色土 白色バミスを微量。
  - 3 暗黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。

- カマド
- a 赤色土 焼土ブロックを含む。
  - b 黒色土 灰・炭化物粒子を含む。
  - c 黄褐色土 粘質土。

0 2 m  
1:60

第14号住居跡(第158図)

BN-4・5グリッドで検出された。第42号溝に北西コーナー部分を壊されていた。北へ1.5mの場所には第13号住居跡が隣接していた。東西3.55m、南北3.89m、深さが0.07mで、平面形態は方形をしていた。主軸方位はN-60°-Wである。

覆土は3層からなる自然堆積であった。

床面はほぼ平坦であった。

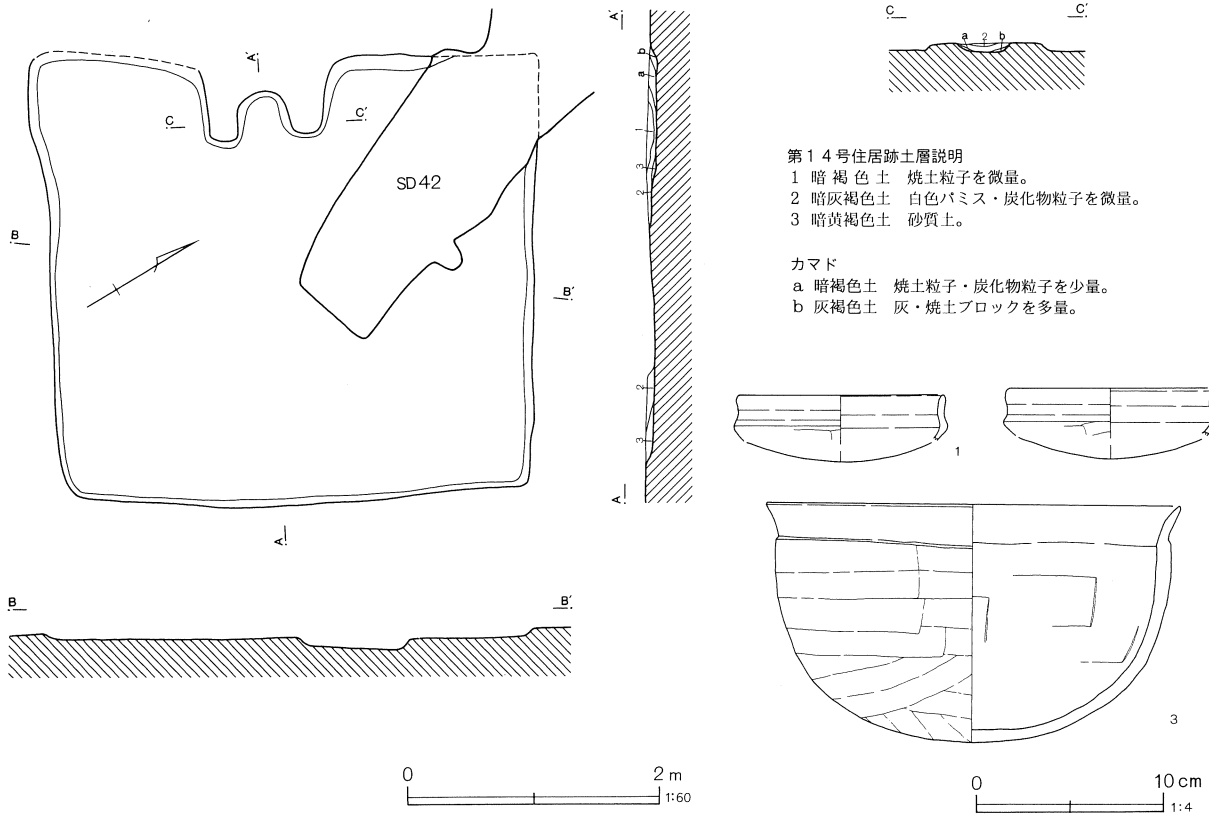
カマドは西壁やや南寄りに位置していた。袖は地山の削り出しであった。燃焼部は住居跡壁の内側で納まり、掘り込みは認められなかった。最下層には厚さ1cmの灰層があった。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土から1・2の土師器の坏、床面から3の鉢が出土した。何れも残存率は低い。1と2は同一個体の可能性がある。3は内面全体に煤が付着する。



第158図 第14号住居跡および出土遺物



第14号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 焼土粒子を微量。
- 2 暗灰褐色土 白色パミス・炭化物粒子を微量。
- 3 暗黄褐色土 砂質土。

カマド

- a 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- b 灰褐色土 灰・焼土ブロックを多量。

第158図 第14号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.0)			BC'DH'	A	浅黄橙	10%	覆土
2	坏	(11.0)			BC'DH'	A	橙	10%	覆土
3	鉢	(22.0)	(12.5)		BCH'	A	橙	45%	No.1 内面全体が煤ける

第15号住居跡(第159図)

BL-4・5グリッドで検出された。南側は攪乱によって壊されていたが、貯蔵穴の位置から考えると住居跡は南にそれほど延びないと思われる。東西4.63m、南北2.65m、深さが0.11mで、平面形態は東西に長い長方形をしていた。主軸方位はN-83°-Eである。

カマドは東壁やや北寄りに位置していた。燃烧部は掘り込みがなく、袖は確認できなかった。

貯蔵穴はカマド右側に位置していた。大きさは、長径50cm、短径40cm、深さが27cmであった。

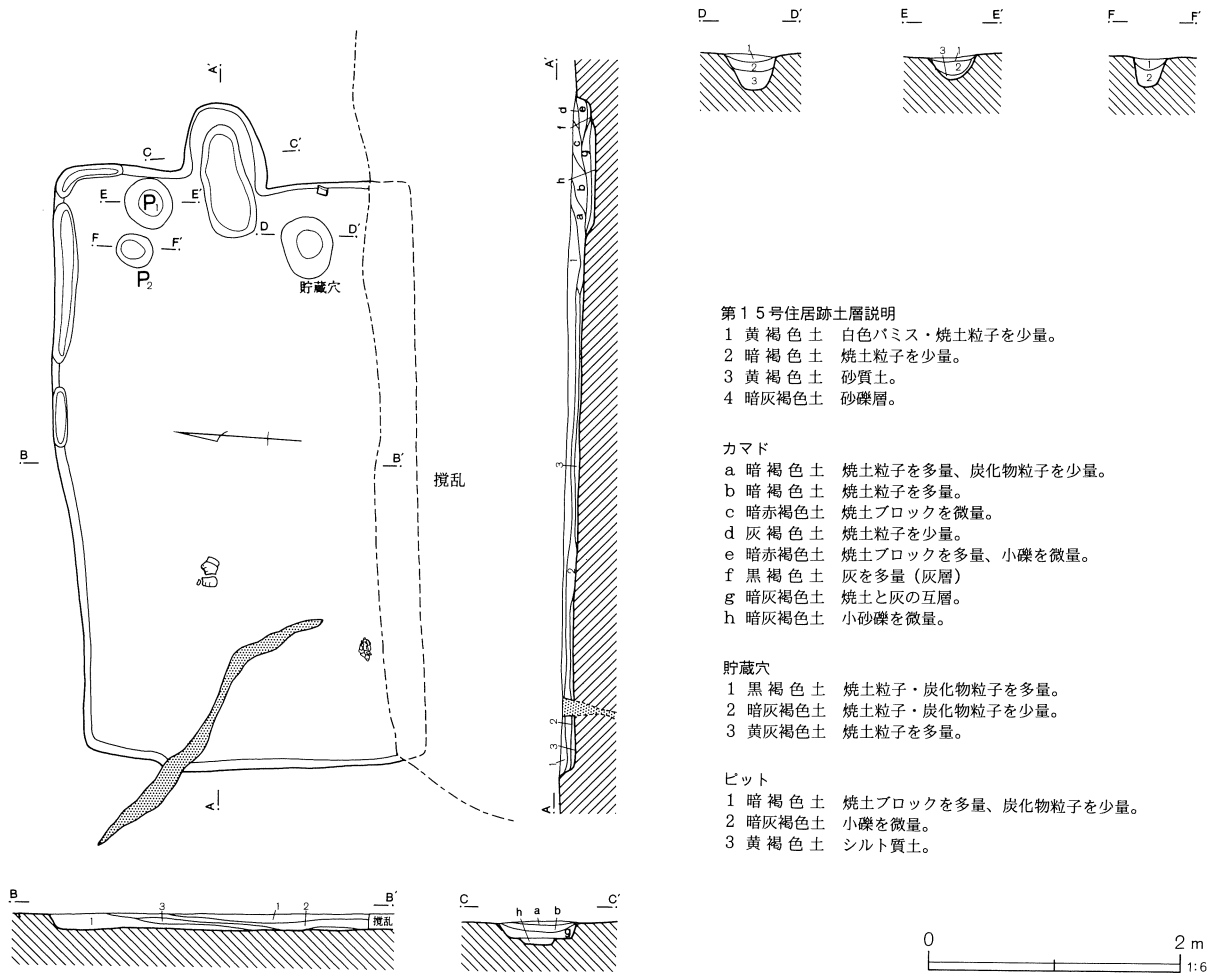
ピットはカマド左側に2本確認できた。P2は主柱穴の可能性はある。

壁溝は幅約18cm、深さ2cmで部分的に巡っていた。

遺物は床面から土師器片が少量出土したが、図示できるものはなかった。



第159図 第15号住居跡

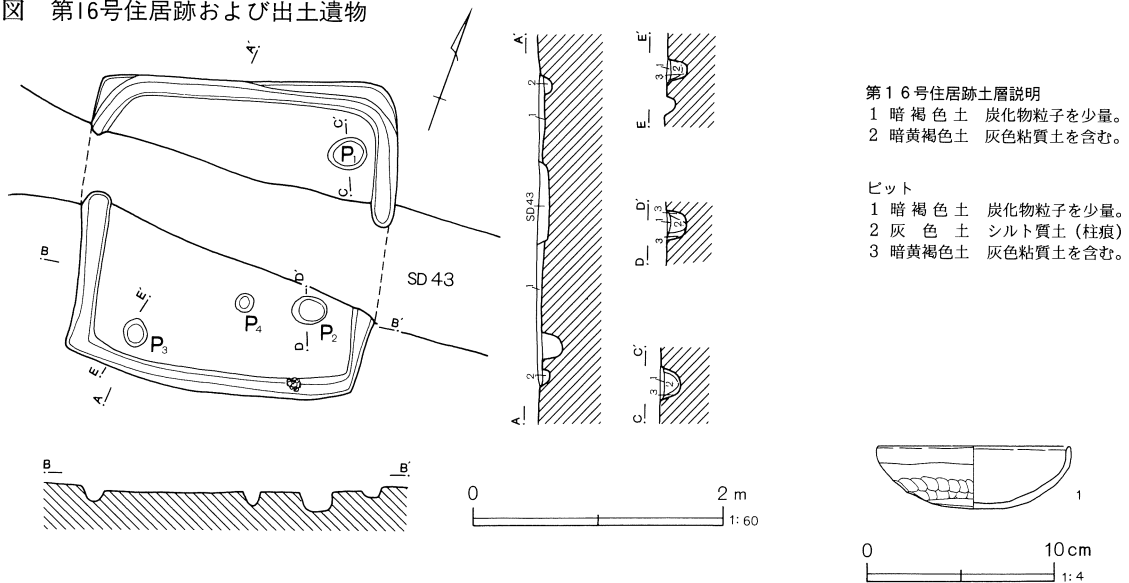


第16号住居跡(第160図)

BI-4グリッドで検出された。遺構確認段階で床面が露出しており、遺存状態は良くなかった。第43号溝

に住居跡中央部分を壊されていた。南北2.50m、東西2.41m、深さ0.04mで、平面形態は方形をしていた。主軸方位はN-10°-Wである。

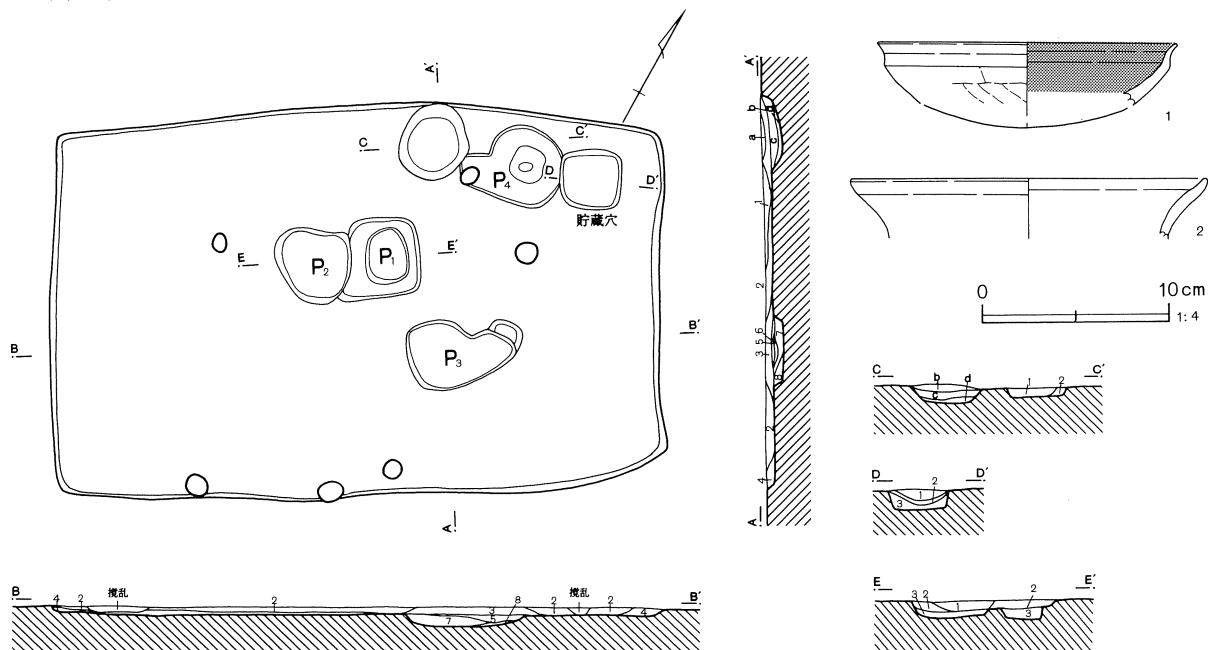
第160図 第16号住居跡および出土遺物



ピットは4本確認できた。そのうち支柱穴はP1・2・3である。大きさは、径が20~26cm、深さが16cmであった。3本ともに柱穴の痕跡が確認された。

壁溝は幅約16cm、深さ約5cmで、第43号溝に壊された部分を除いて全周していた。

第161図 第17号住居跡および出土遺物



第17号住居跡土層説明

- 1 暗黄褐色土 黄褐色土粒子を多量。
- 2 暗黄褐色土 炭化物粒子を少量。
- 3 灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量。
- 4 暗黄褐色土 炭化物粒子を少量。
- 5 暗黄褐色土 焼土粒子をブロック状に含む(ピット3覆土)
- 6 灰色土 灰を含む(ピット3覆土)
- 7 暗灰褐色土 炭化物粒子を微量(ピット3覆土)
- 8 暗灰褐色土 炭化物粒子を少量(ピット3覆土)

カマド

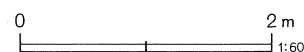
- a 赤褐色土 焼土ブロックを多量。
- b 暗灰褐色土 炭化物粒子を少量。
- c 暗灰褐色土 炭化物粒子を少量。
- d 暗黄褐色土 炭化物粒子を微量。

貯蔵穴

- 1 黒褐色土 炭化物粒子を多量、焼土粒子を少量。
- 2 赤褐色土 焼土を含む。
- 3 暗黄褐色土 炭化物粒子を少量。

ピット1~4

- 1 暗褐色土 炭化物粒子を少量。
- 2 暗黄褐色土 シルト質土。
- 3 灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量。



第17号住居跡(第161図)

BG-4、BH-4グリッドで検出された。攪乱によって床面の一部が壊されていた。南北3.09m、東西4.93m、深さが0.08mで、平面形態は東西に長い長方形をしていた。主軸方位はN-27°-Wである。

カマドは北壁やや東寄りに位置していたが、覆土の一部と円形の掘り方が検出されただけであった。

貯蔵穴は北東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径48cm、短径46cm、深さが14cmであった。

ピットは4本確認できたが、どれも支柱穴とは考え

カマド・貯蔵穴は確認できなかった。

遺物は壁溝内から1の土師器の坏が出土した。口径10.3cm、器高3.3cmで、完形である。胎土に角閃石・石英・微砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色をしている。

にくい。P1・2の最下層には焼土粒子、炭化物粒子を多量に含んでいた。壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土およびピットから土師器片が少量出土した。1は坏である。推定口径16.0cmで、胎土には角閃石・石英・微砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は橙色である。残存率10%。内面には黒色処理が施されている。2は甕の口縁部である。推定口径19.0cmで、胎土には角閃石・微砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色である。残存率10%。

ほかに土製の紡錘車が1点出土した。

第18号住居跡(第162図)

BH-5・6グリッドで検出された。第14号土壇に壊されていた。東西4.56m、南北4.87m、深さが0.05mで、主軸方位はN-80°-Eである。

カマドは東壁やや南寄りに位置していた。袖は地山の削り出しであった。燃焼部は壁外に僅かに延び、掘り込みは浅かった。下層には灰層が認められた。

貯蔵穴は南東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径78cm、短径41cm、深さが30cmであった。2層底面には炭化材が带状に認められた。その炭化材は貯蔵穴の蓋材であった可能性が考えられる。

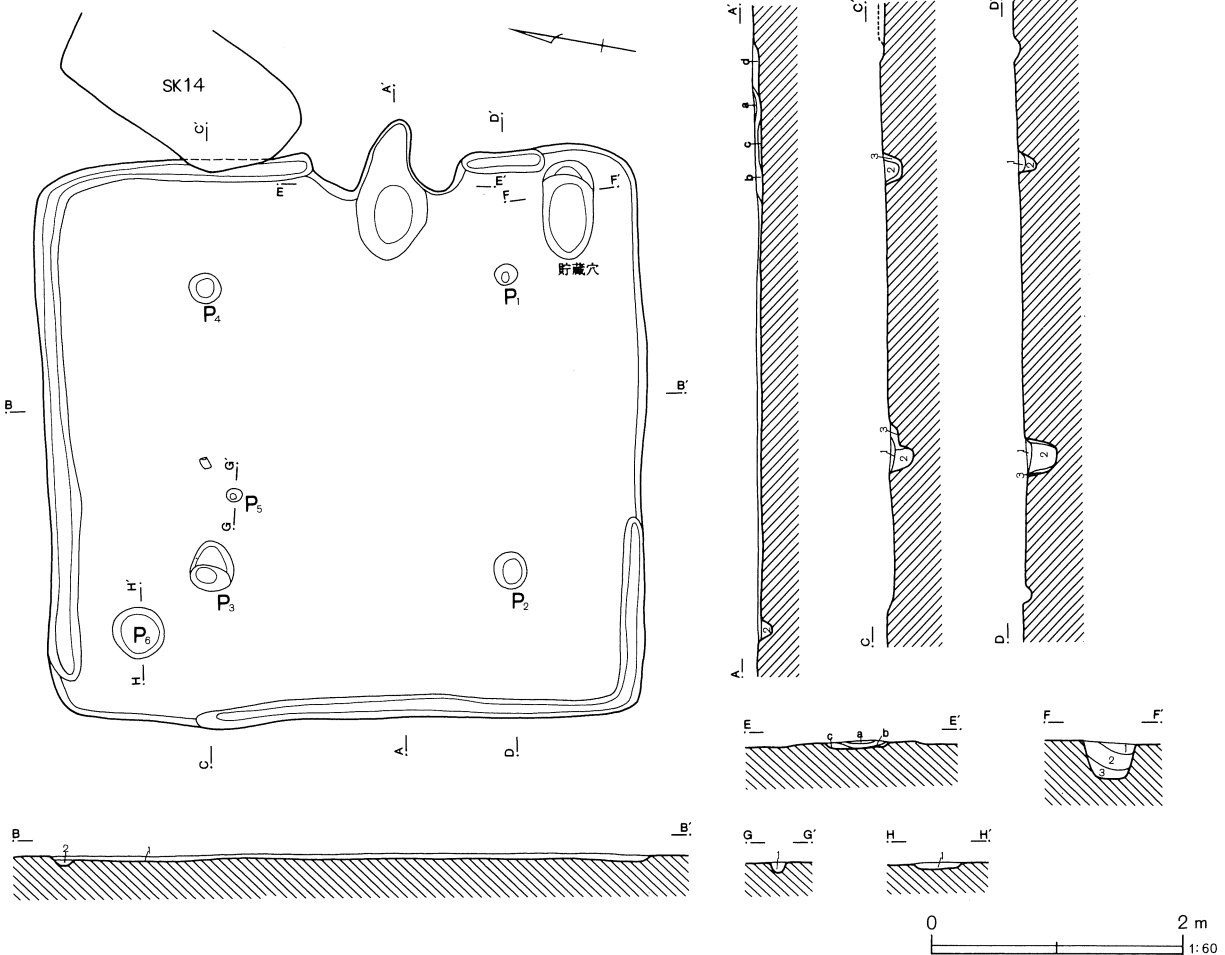
壁溝は幅約18cm、深さ約8cmで、南壁の一部を除きほぼ全周していた。

ピットは6本確認できた。そのうち主柱穴がP1・2・3・4の4本であった。4本ともに柱穴の痕跡が確認された。柱の径は12~22cmで、円柱であった。

遺物は床面および貯蔵穴から少量出土した。1は土師器坏で、貯蔵穴から出土した。推定口径11.0cmで、胎土には角閃石・石英・微砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は橙色である。残存率10%。内面には放射状の暗文が認められる。

ほかに床面から帯金具の鉞尾が出土した。

第162図 第18号住居跡および出土遺物



第18号住居跡土層説明

- 1 暗黄褐色土 暗灰色粘質土を微量。
- 2 暗褐色土 黄褐色土を微量。

カマド

- a 赤褐色土 焼土粒子を多量。
- b 暗灰色土 (灰層)

- c 灰色土 灰と焼土の互層。

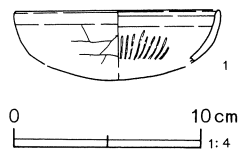
- d 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量。

貯蔵穴

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 2 暗黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。炭化材が底面に带状に堆積。
- 3 暗褐色土 炭化物粒子を少量。

ピット

- 1 暗褐色土 炭化物粒子を少量。
- 2 黄褐色土 粘質土(柱痕)
- 3 黄褐色土 シルト質土。



第19号住居跡(第163図)

BI-5グリッドで検出された。第44号溝に切られていた。南北2.77m、東西2.85m、深さが0.11mで、方形をしていた。主軸方位はN-25°-Wである。

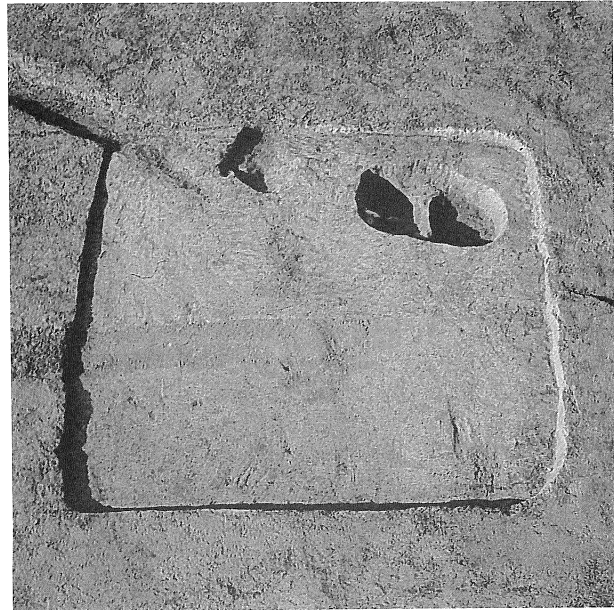
カマドは北壁やや西寄りに位置していたが、検出てきたのは灰層の一部と楕円形の掘り方だけであった。

貯蔵穴は北東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径60cm、短径48cm、深さが16cmであった。

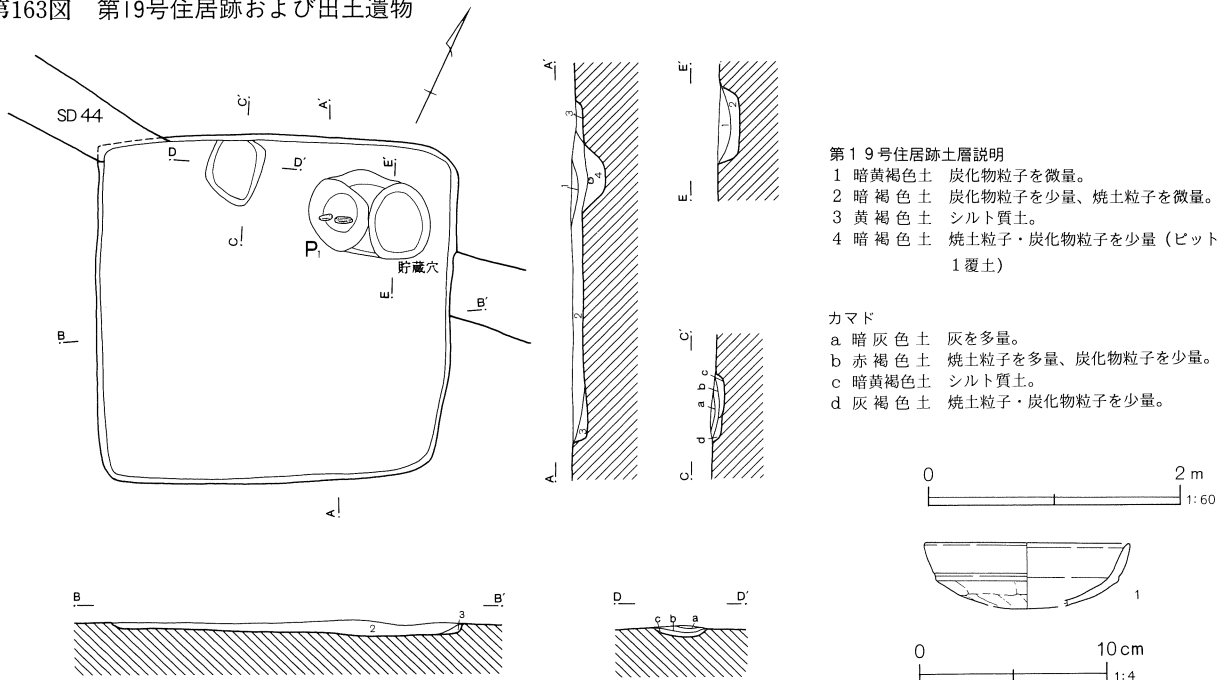
ピットは貯蔵穴の左に1本確認できた。

1は土師器の坏である。推定口径11.0cmで、胎土には角閃石・石英・微砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は黄橙色である。残存率15%。

ほかにP1から安山岩の編物石が2点出土した。



第163図 第19号住居跡および出土遺物



第20号住居跡(第164図)

BI-6、BJ-6グリッドで検出された。規模は南北3.16m、東西3.14m、深さが0.16mで、平面形態は方形をしていた。主軸方位はN-24°-Wである。

カマドは北壁やや東寄りに位置していた。袖は確認できなかった。燃焼部は壁外には延びず、浅い楕円形の掘り込みがあった。下層には灰層が認められた。

ピットは4本が確認できた。何れも住居跡の四隅に位置していた。主柱穴はP2-4の3本で、覆土断面

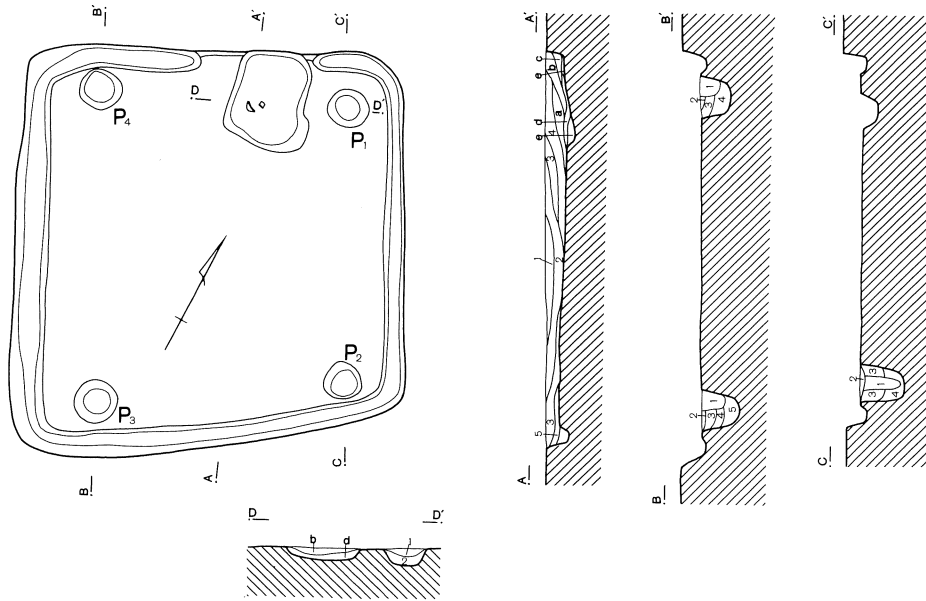
には柱穴の痕跡が確認された。柱の径は12~16cmであった。P1は覆土1層に帯状に堆積した炭化物粒子が確認されたことから貯蔵穴と考えられた。

壁溝は幅約27cm、深さ約7cmで、カマド部分を除き全周していた。

遺物は覆土から土師器片が少量出土した。1の坏は内面に黒色処理が施されている。2・3の坏は内面が摩滅しているため暗文は確認できなかった。

ほかに安山岩の編物石が出土した。

第164図 第20号住居跡



第20号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 白色バミス・炭化物粒子を少量。
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 3 暗黄褐色土 黄褐色土をブロック状に含む。
- 4 暗灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 5 暗灰褐色土 炭化物粒子を帯状に含む。

カマド

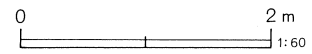
- a 赤褐色土 焼土粒子を多量、焼土ブロックを微量。
- b 赤褐色土 灰と焼土の互層。
- c 黒褐色土 灰を多量（灰層）
- d 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多量。
- e 灰色土 灰を多量。

貯蔵穴

- 1 暗褐色土 炭化物粒子を帯状に含む。
- 2 暗黄褐色土 粘質土。

ビット

- 1 暗褐色土 炭化物粒子を少量（柱痕）
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 3 暗黄褐色土 粘質土。
- 4 灰褐色土 粘質土。



第165図 第20号住居跡出土遺物



第165図 第20号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.0)			C'DH'	A	橙	20%	覆土 内面黒色処理
2	坏	(12.4)			BC'DH'	A	橙	25%	覆土
3	坏	(16.0)			BC'DH'	A	橙	10%	覆土



## 溝・土壙・ピット(第166図)

八日市遺跡西地区からは住居跡以外にも道路跡・建物跡・溝・土壙・ピット等の遺構が多数検出された。個別に述べるには紙数にも限りがあるため、この項では溝・土壙・ピットについての概要をまとめて述べることにする。

溝は総数47条が検出された。この中には道路跡の側溝5条が含まれている。道路跡の側溝では浅間A軽石層、浅間B軽石層が確認されている。

残りの溝42条は中世から近世にかけて掘削されたものである。第40・41・43号溝の覆土には浅間A軽石層が確認された。それ以外の溝については時期および性格を明らかにすることはできなかった。

本時期の溝からは遺物が出土したものは少なく、出土した遺物も他遺構からの流れ込みが多い。

遺物は古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器および近世の陶磁器が少量出土した。図示できたのは土師器ミニチュア環、須恵器甕、灰釉陶器の高台杯、長頸壺の4点だけである。ほかに第41号溝の覆土から刀子2点と釣針1点、第18号溝の覆土から磨石1点、第8号溝の覆土から土製紡錘車1点が出土した。第8号溝から出土した土製の紡錘車は古墳時代後期の第10号住居跡からの流れ込みと思われる。

土壙は古墳時代後期・奈良時代のものと思われるのが10基、中世以降のものが11基検出された。遺物が出土した土壙は数少なく、時期が明確にできたものはほとんどない。古墳時代後期・奈良時代とした土壙も時期が下る可能性がある。

平面形態は円形で小形のもの(第11・12・15・16・17・22号土壙)、長方形で小形のもの(第2・4・21号土壙)、長方形で大形のもの(第3・5・6・14・18・19号土壙)、楕円形・不整形にするもの(第7・13・20号土壙)、その他(第9・10号土壙)に分類できる。

第7号土壙の断面には柱穴の痕跡が確認された。

土壙から出土した遺物は土師器・須恵器の小破片が少量あるが、図示できる遺物はなかった。

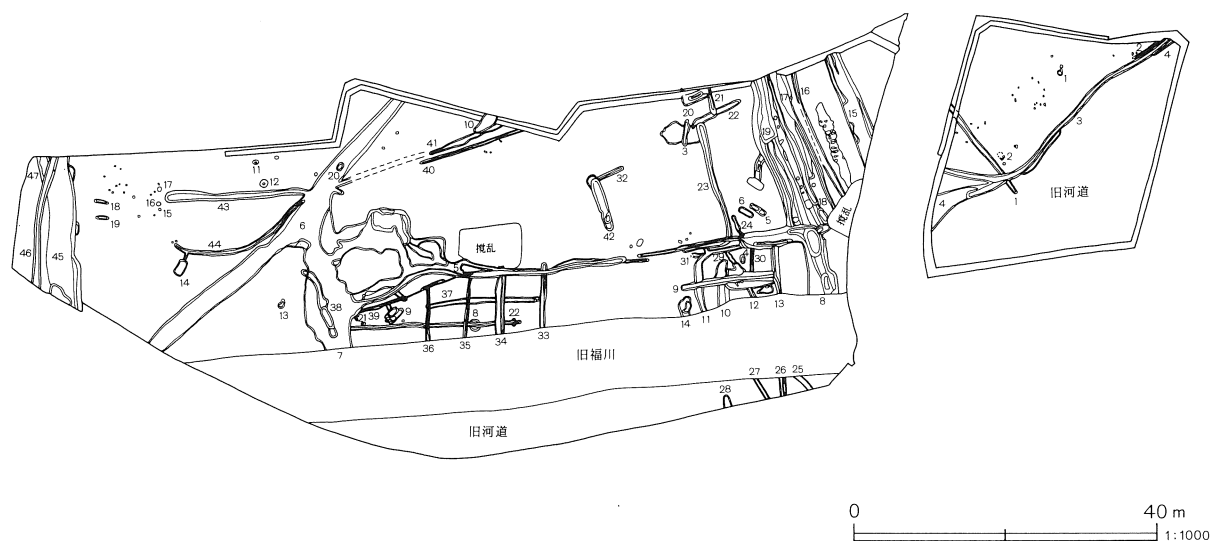
ピットは古墳時代後期のピット群が14本、近世以降のもの52本が検出された。

ピット群はピット14本がほぼ円形に巡っていた。平地式の建物跡の可能性も考えられる。

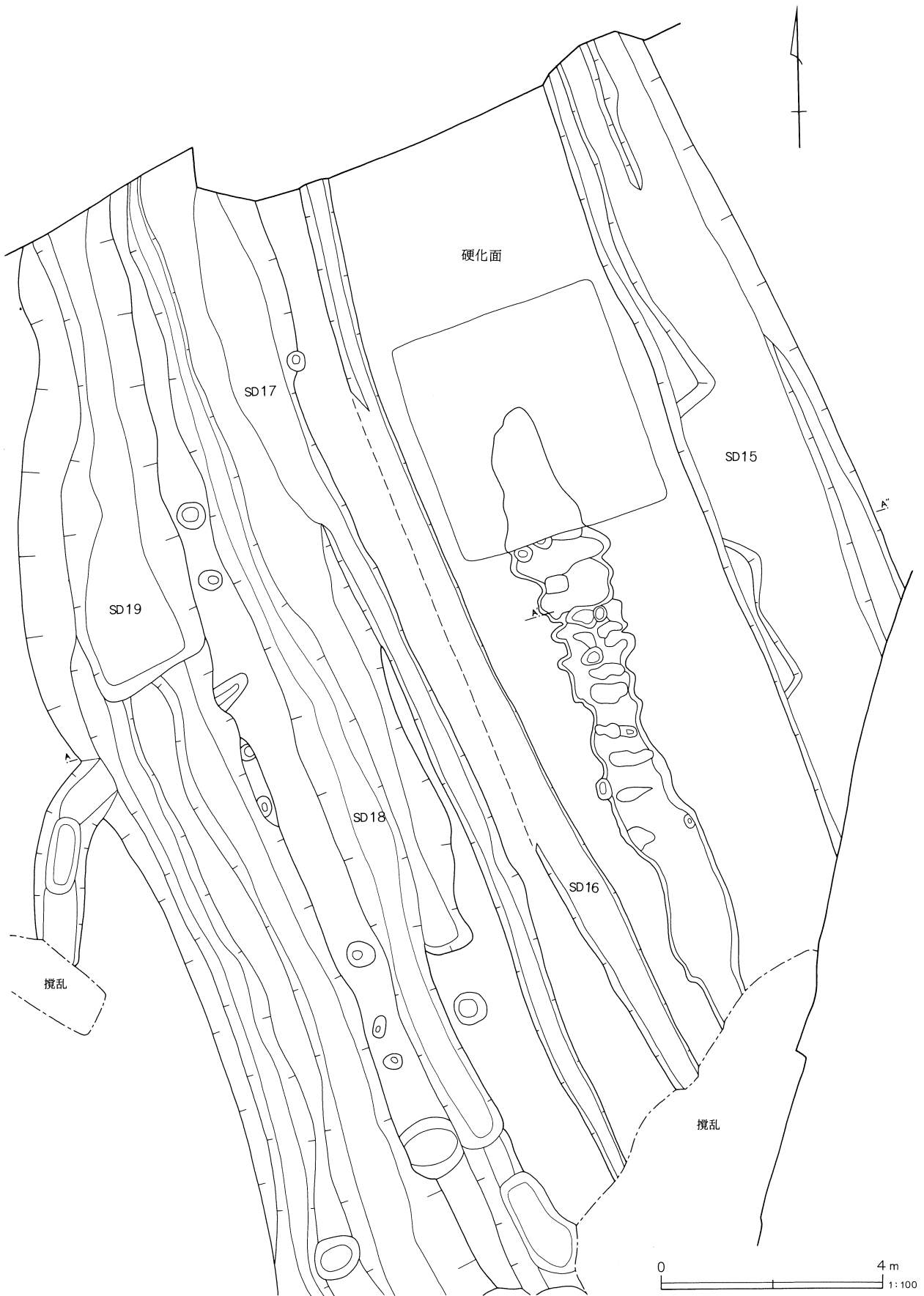
近世以降のP30・32・33～38の断面には柱穴の痕跡が確認されたが、性格はわからなかった。

遺物はピット群(P1～14)から土師器片が少量出土した。図示できたのはP8から出土した壺とP12から出土した甕だけである。他のピットからは遺物がまったく出土しなかった。

第166図 西地区溝・土壙・ピット配置図



第167图 第1号道路迹 第15~19号沟(I)





## b、道路跡

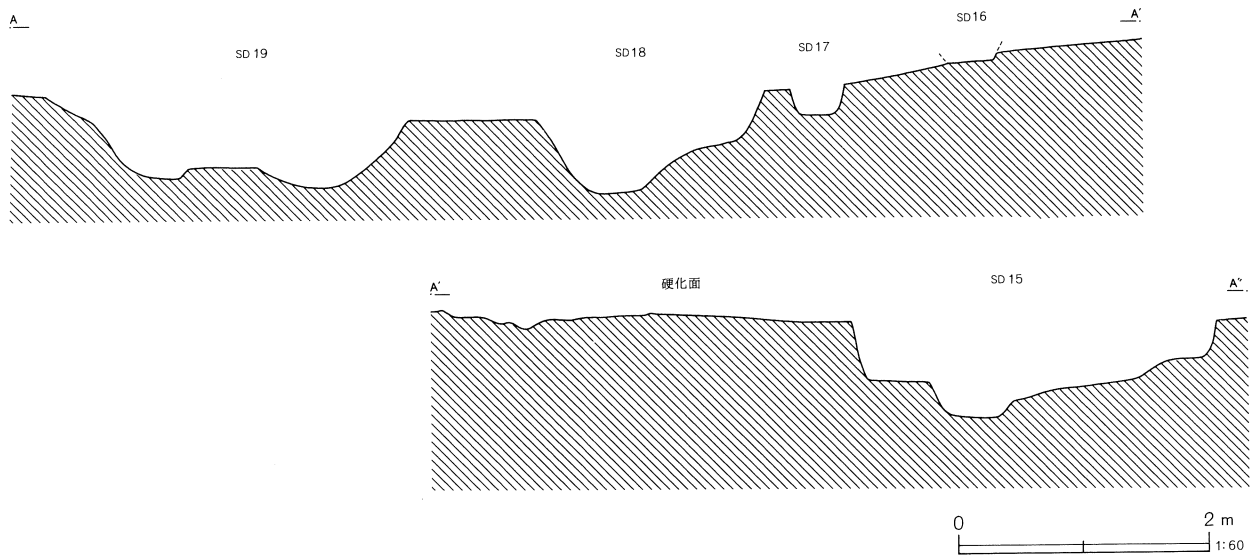
## 第1号道路跡(第167・168図)

BP-3~5、BQ-2~4グリッドにかけて検出された。南と北は調査区外に延びるため調査ができなかった。硬化面は古墳時代後期の第8・12号住居跡の上に構築されており、西側の側溝は中世から近世にかけての溝によって壊されていた。

側溝は東西両側に検出されたが、後世に幾度となく掘り直されていたため、覆土の観察からもどの溝が本遺構に伴うものかは確認できなかった。東側の第15号溝は最低3回掘り直されていたことが確認され、覆土の最上層には浅間A軽石層が認められた。また西側の第18・19号溝も数回掘り直されていた。第16・17号溝は形態から側溝となる可能性は低いものと思われる。

硬化面は全長16.2m、最大幅が4.8mで、直線を維持しながら南南東から北北西方向に走行していた。両側溝間の心々距離は、側溝が不明であるため測定不可能である。硬化面はやや中央部が高く、非常に固かった。硬化面の上には踏み固められた砂礫が多く確認された。

第168図 第1号道路跡 第15~19号溝(2)



## 第2号道路跡(第169~171図)

BF-4~6、BG-4~6グリッドにかけて検出された。西側の側溝は調査区外にかかるため検出できなかった。

この砂礫を分析にかけたところ、浅間B軽石層が含まれていることが判明した。その分析の結果から浅間B軽石層の降下以前にはすでに硬化面は形成されており、また踏み固められていたことから降下後にも利用していたことが考えられる。

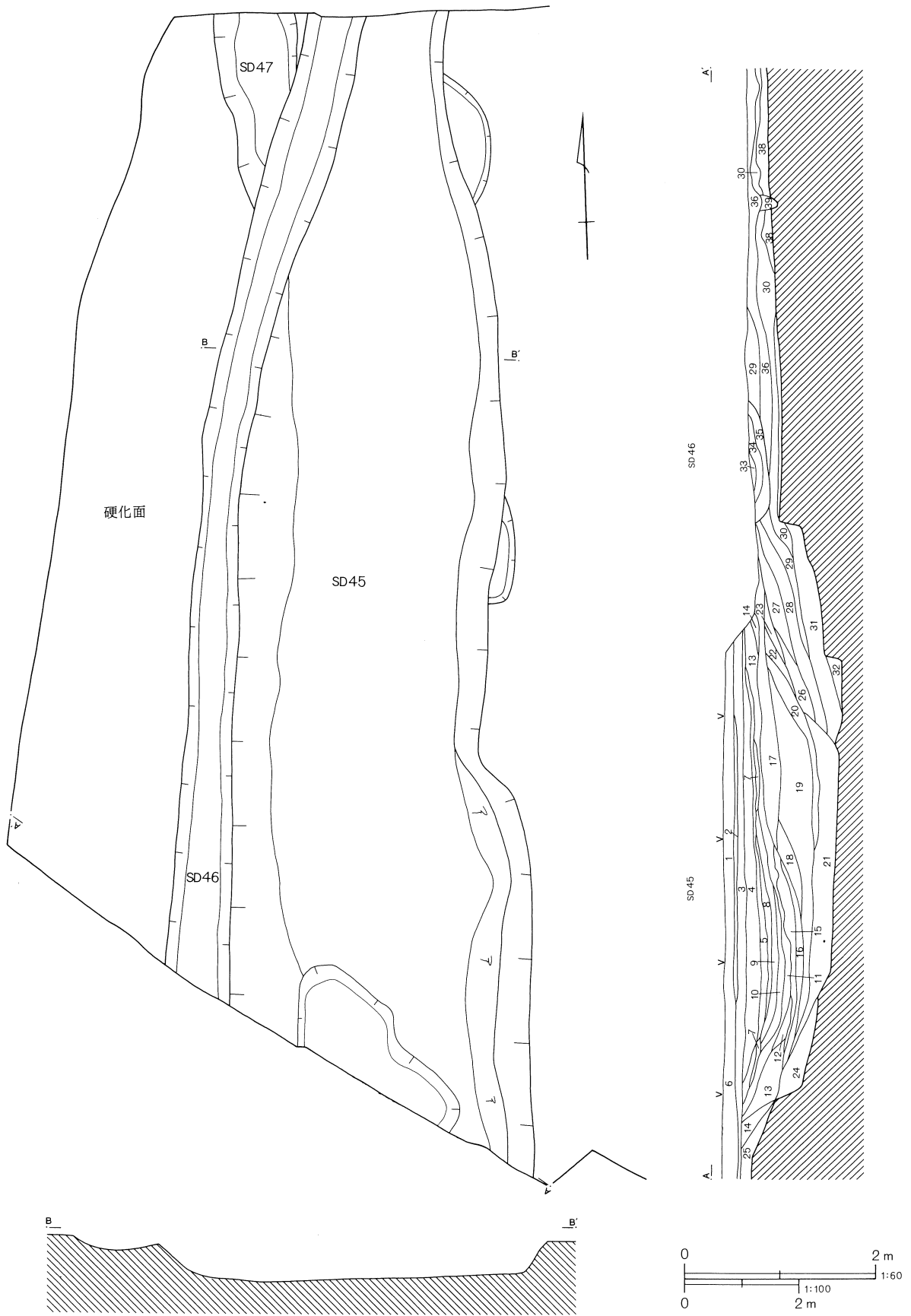
また硬化面の中央部分には幅0.72~1.90m、長さが11.5mの波板状の痕跡が調査区北に延びていた。

遺物は1の須恵器甕の底部破片が硬化面上から出土したが、本遺構に確実に伴うかは不明である。ほかにも須恵器の小破片が少量出土しているが、図示できるものではなかった。

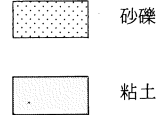
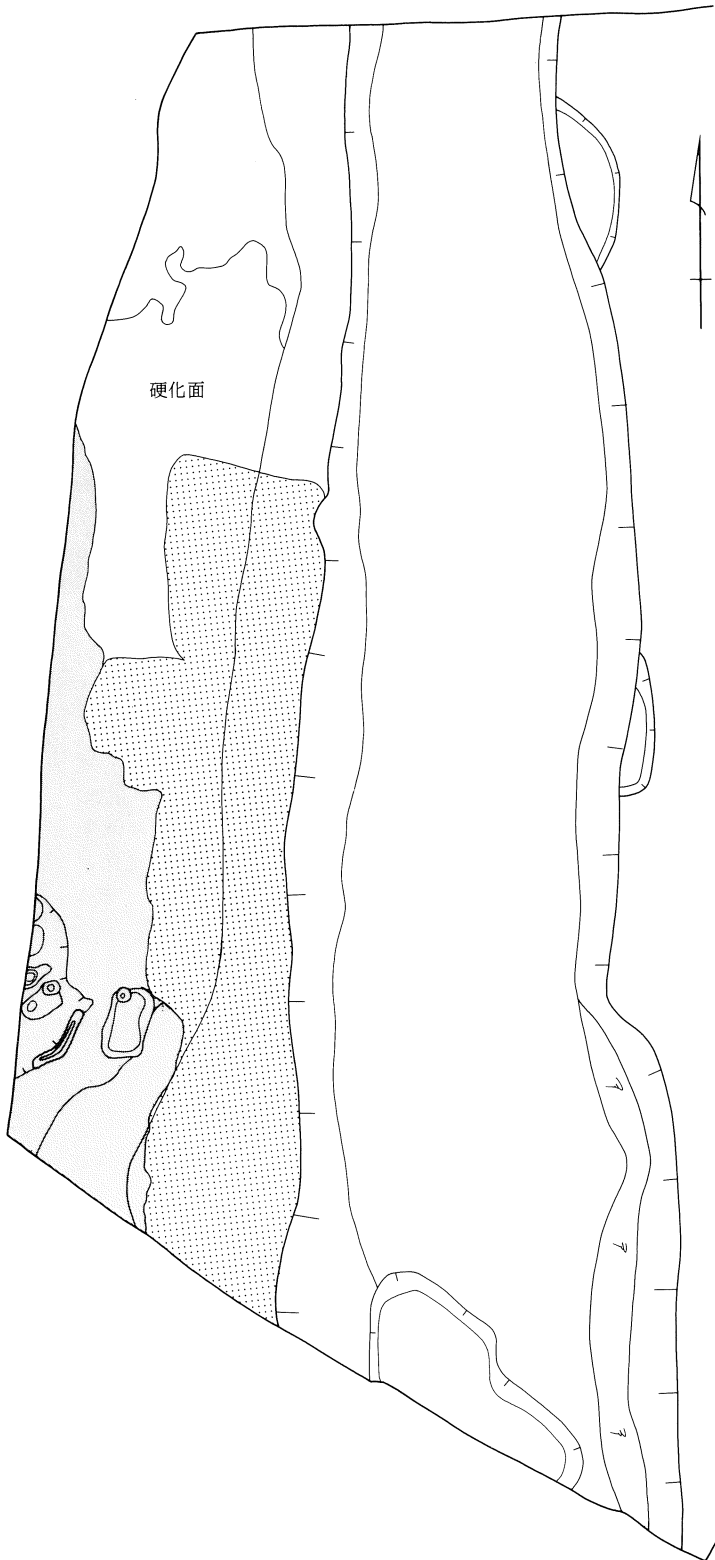
余談ではあるが近所の古老の話では、本遺構の硬化面に当たる位置には圃場整備が行われる以前まで明戸薬師堂の集落まで延びる道が存在し、また西側の側溝に当たる部分は凹地となっており小川が流れていたということであった。その事から考えると、本遺構は古代から延々と近代に至るまで道として利用されていたことが推定される。

側溝は第45~47号溝がそれに当たり、新旧関係は45→47→46の順である。第45号溝は最低3回の掘り直しを確認されたことから、本遺構は5回以上にわたって整備・縮小が行われたことが考えられる。道路が構築

第169図 第2号道路跡(1) 第45~47号溝



第170図 第2号道路跡(2)

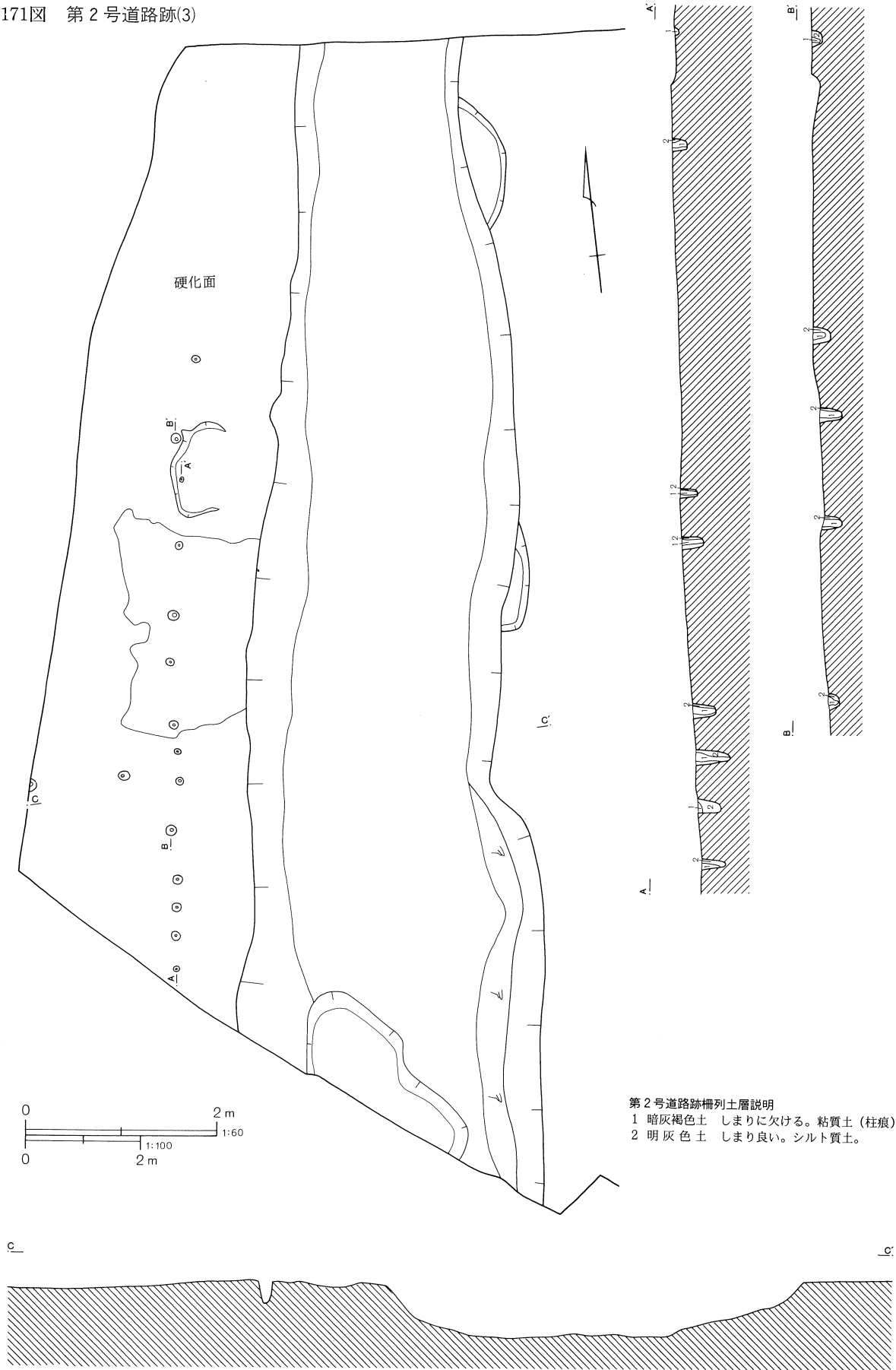


第45～47号溝土層説明

- 1 緑灰褐色土 浅間Aを微量。粘質土(耕作土)
- 2 黄褐色土 シルト質土(耕作土床上)
- 3 灰紫色土 浅間Aを微量。粘質土。
- 4 暗灰褐色土 褐色土粒子をブロック状に含む。シルト質土。
- 5 灰色土 白色粘土を微量。粘性強い。
- 6 暗灰褐色土 褐色土と灰色粘質土の互層。シルト質土。
- 7 暗灰色土 灰色粘質土に浅間Bを多量含む。砂質土。
- 8 黒褐色土 灰色粘質土・白色粘質土・灰の互層。
- 9 明灰褐色土 浅間B軽石層。砂質土。
- 10 黒色土 炭化物粒子を多量。粘質土。
- 11 暗灰色土 黒色土と灰色粘土の攪拌層。粘質土。
- 12 暗灰色土 粘質土。
- 13 暗灰褐色土 暗灰色粘質土・褐色砂質土を微量。シルト質土。
- 14 黄灰褐色土 黄褐色土をブロック状に含む。粘質土。
- 15 灰色土 鉄分沈着あり。シルト質土。
- 16 灰色土 粘性強い。
- 17 明灰褐色土 鉄分を少量。シルト質土。
- 18 灰褐色土 灰色粘質土に細砂粒を多く含む。シルト質土。
- 19 灰褐色土 鉄分の沈着。砂質土。
- 20 灰色土 粘質土。
- 21 灰色土 粘質土。
- 22 明灰褐色土 鉄分を多量。砂質土。
- 23 灰黄褐色土 鉄分の沈着層。シルト質土。
- 24 暗灰褐色土 黄褐色土をブロック状に含む。粘質土。
- 25 黄褐色土 灰色粘質土に黄褐色土粒子を大量に含む。粘質土。
- 26 暗灰褐色土 暗灰色粘質土・黄褐色土粒子を微量。粘質土。
- 27 暗灰褐色土 鉄分の沈着層。シルト質土。
- 28 暗灰褐色土 粘質土。
- 29 灰褐色土 鉄分の沈着層。砂質土。
- 30 灰褐色土 小砂礫を含む。シルト質土。
- 31 暗灰色土 粘性強い。
- 32 黄灰色土 シルト質土。
- 33 明灰褐色土 浅間B軽石層。砂質土(第46号溝覆土)
- 34 黒褐色土 炭化物粒子を多量。粘質土(第46号溝覆土)
- 35 灰褐色土 小砂礫を含む。砂質土(第46号溝覆土)
- 36 鉄褐色土 鉄分を大量、黄褐色土粒子をブロック状に含む。
- 37 鉄褐色土 細砂礫層
- 38 黄褐色土 粘質土
- 39 暗灰褐色土 シルト質土。ややしまりに欠ける(ビット覆土)



第171図 第2号道路跡(3)



された当初の側溝は、幅が約6.7mで第45号溝が当たる。その後、第45号溝の断面からは側溝が外側に移動していったことがわかる。そのことは路面の拡大と結びつくのかは西側の側溝が検出できなかったため不明である。最終的には再び内側に移行し、側溝の幅は狭くなる。第45・46号溝の覆土上層には浅間B軽石層が認められることから、浅間B降下時期には道路としての機能は失われていたことが考えられる。

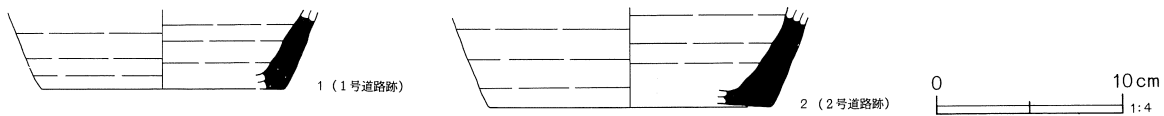
硬化面は全長17.2m、検出された幅が4.1mで、直線を維持しながら南から北方向に走行していた。硬化面は調査区の西壁際がやや高く、全体的に凹凸が著しかった。硬化面の上には砂礫および粘土が踏み固められていた。路肩部分には砂礫が、中央部分には粘土が充填されており、硬化面の維持を考えた上での分別と考えられる。粘土部分には小ピットを伴う浅い落ち込み

が確認されたが、波板状の痕跡になるかは確認できなかった。その砂礫と粘土を掘り下げると、硬化した面がもう1面確認された。その面を精査したところ側溝寄りに柵列が検出された。そのことからこの下の面も硬化面として機能していたことが考えられる。

柵列は硬化面の側溝寄りに1列検出されたが、北側には続いていなかった。ほぼ一直線に並んでおり、柱穴は総数16本が確認できた。各柱穴の大きさは、径が8～19cm、深さが12～38cmで、平面形態は円形をしていた。覆土の断面には柱穴の痕跡が確認された。柱の径は5～9cmで、円柱であった。

遺物は2の須恵器甕の底部破片が第45号溝の覆土から出土した。他にも須恵器の小破片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

第172図 第1・2号道路跡出土遺物



第172図 道路跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕			(13.0)	C'EG'H'	A	灰	10%	第1号道路跡 末野産
2	甕			(15.0)	C'DG'H'	A	灰	15%	第2号道路跡 末野産

c、建物跡

第1号建物跡(第173図)

BJ-5・6、BK-4～6、BL-5にかけて検出された。第7号溝を切り、第5・36・39号溝に切られていた。北側の溝部分は攪乱が著しかった。

建物跡はほぼ円形に巡る溝とそれに囲まれた平場とから成る。本遺構の性格はわからなかった。

溝は平面的には不整形円形をしており、幅1.27～3.08m、深さ0.06～0.73mとばらつきがあった。溝底面からは加工痕の見られる角閃石安山岩が多量に検出されたが、何に使用されたのかは不明である。周辺に存在

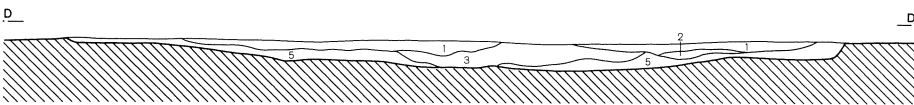
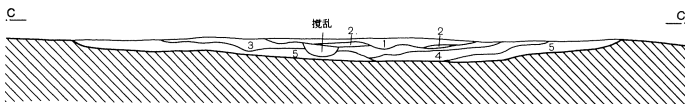
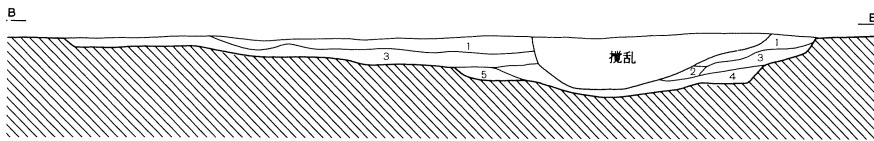
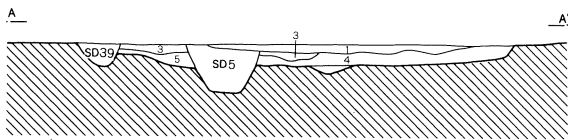
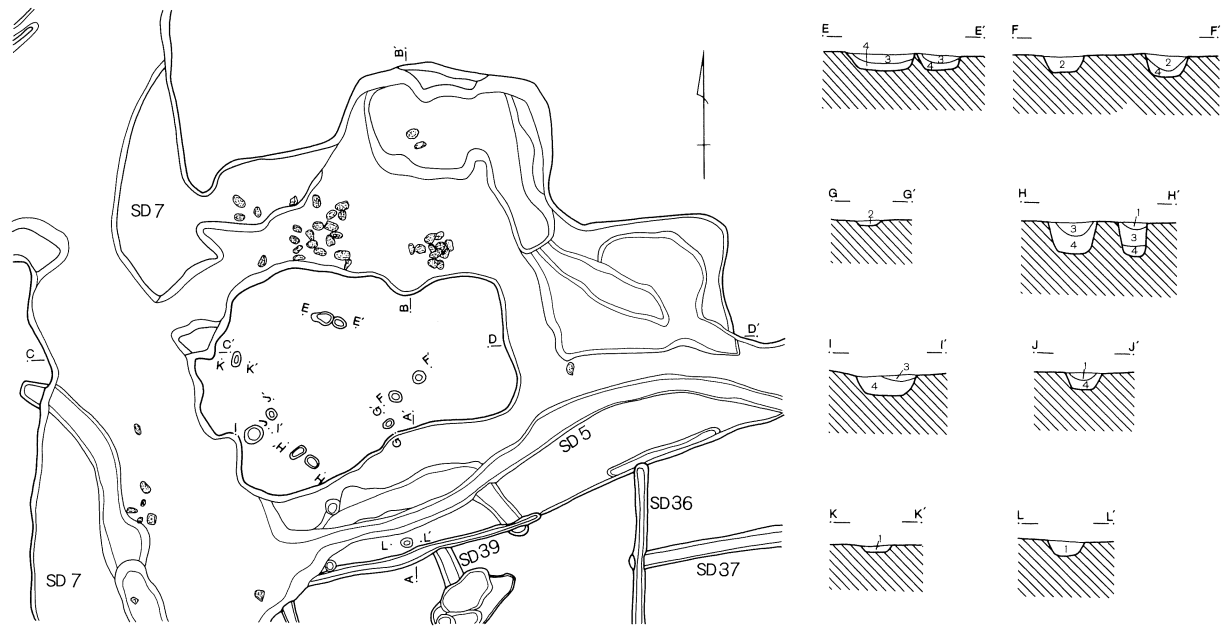
した古墳の石室の石材であった可能性も考えられる。

平場は東西に長い不整形をしており、ほぼ平坦であった。平場の西寄りにはピットが11本確認された。各ピットの大きさは、径15～29cm、深さが9～45cmであった。平面形態は円形または楕円形をしていた。ピットは建築物の支柱であった可能性が考えられた。

本遺構は溝の覆土の状態から近世以降に構築されたものと思われる。

遺物は縄文時代の石器などが溝の覆土から出土したが、本遺構に伴うような遺物は出土しなかった。

第173図 第1号建物跡

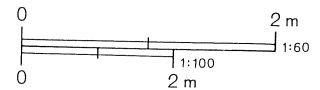


第1号建物跡土層説明

- 1 灰黄褐色土 暗褐色粘質土に砂粒・白色火山灰粒子を微量。
- 2 明灰色土 白色粘質土を帯状に含む。
- 3 灰褐色土 粘質土。
- 4 黄灰褐色土 粘質土。
- 5 灰褐色土 粘質土。

ピット

- 1 暗灰色土 白色バミスを微量。粘質土。
- 2 暗灰褐色土 白色バミスを微量。粘質土。
- 3 灰黄褐色土 白色バミスを微量。シルト質土。
- 4 暗褐色土 砂質土。



d、溝(第174~177図)

今回の調査で検出された溝の総数は47条で、道路跡の側溝も数に含まれている。概要については前述したので、ここでは代表的なものについて記載する。

第3号溝(第174図)

BR-4、BS-4、BT-3・4、BU-2・3グリッドにかけて検出された。第1号住居跡・第4号溝を切っていた。幅0.70m、深さが0.43mであった。

調査区の微高地に沿って西-北東に走行していた。遺物は出土しなかった。

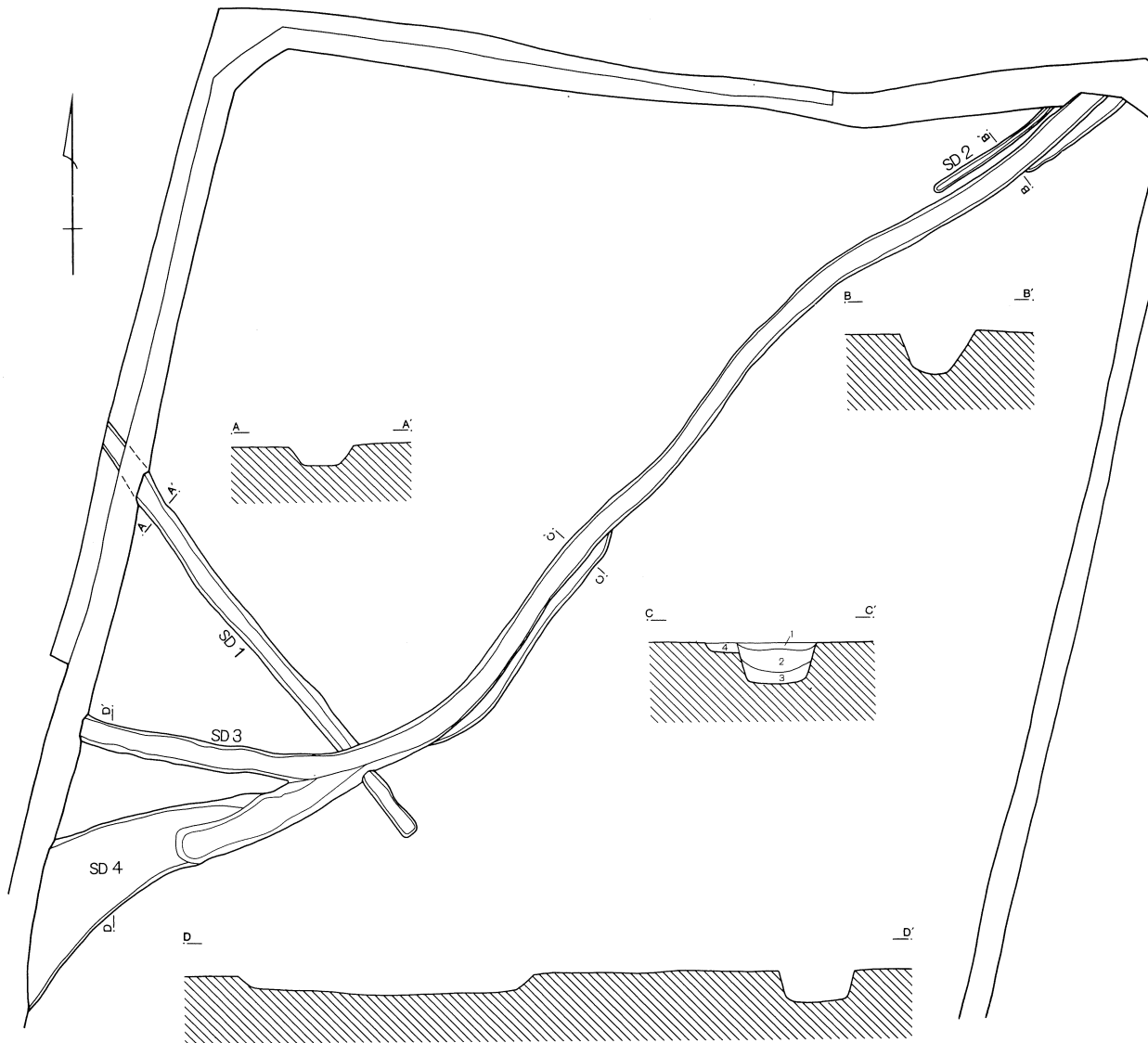
第40号溝(第176図)

BK-4、BL-3・4、BM-3グリッドにかけて検出された。幅0.35m、深さが0.05mであった。北東-南西方向に走行し、第41号溝と平行していた。

覆土には浅間A軽石層が確認された。

遺物は出土しなかった。

第174図 溝(I)

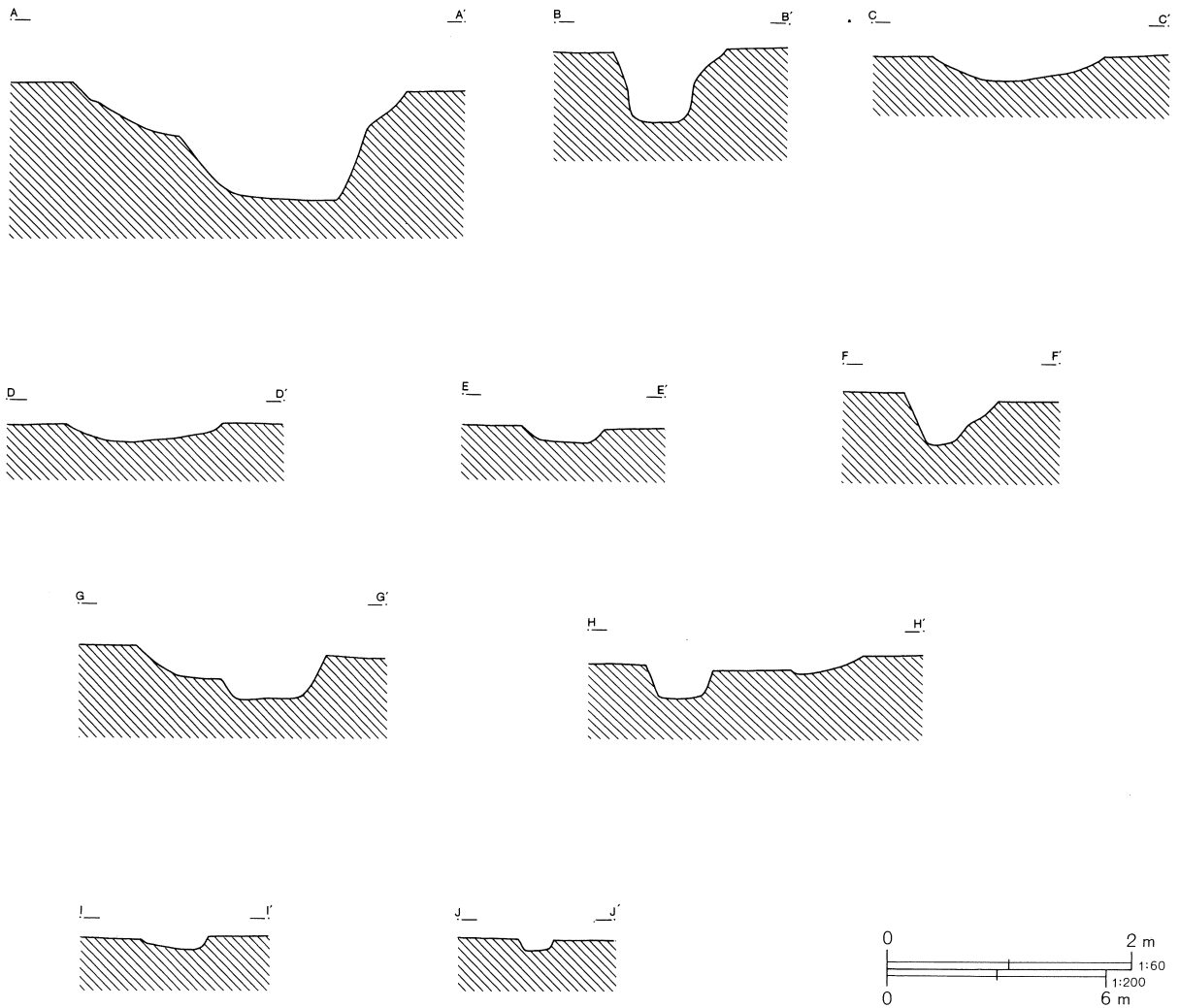
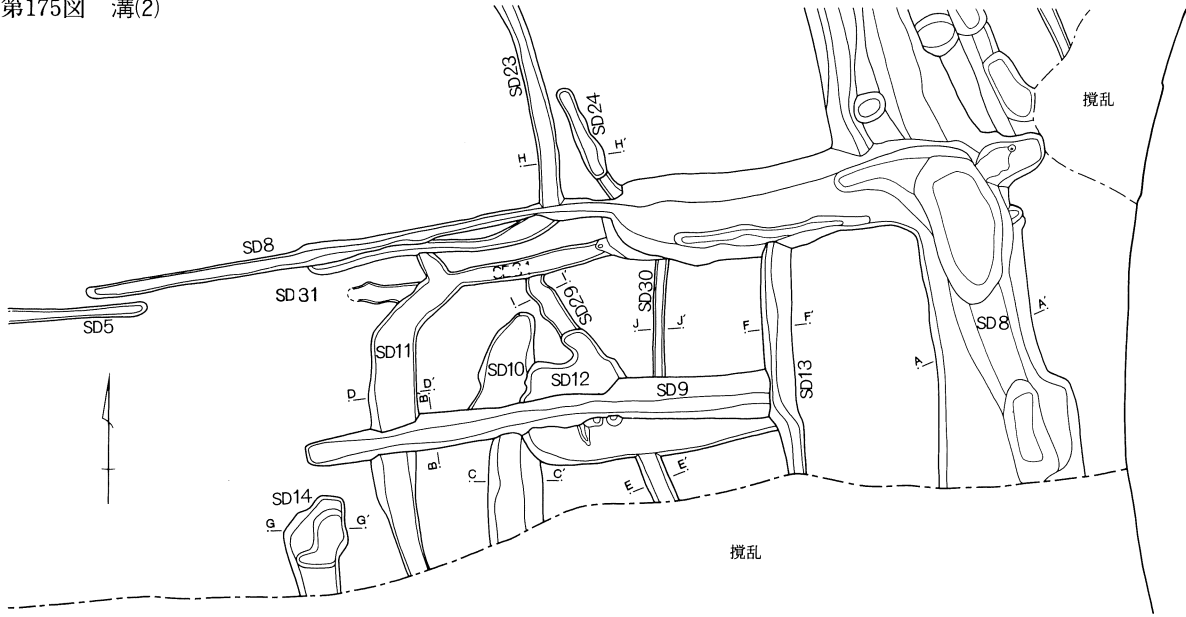


第3・4号溝土層説明

- 1 淡褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 淡褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 4 褐色土 黄褐色土ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量(第4号溝覆土)

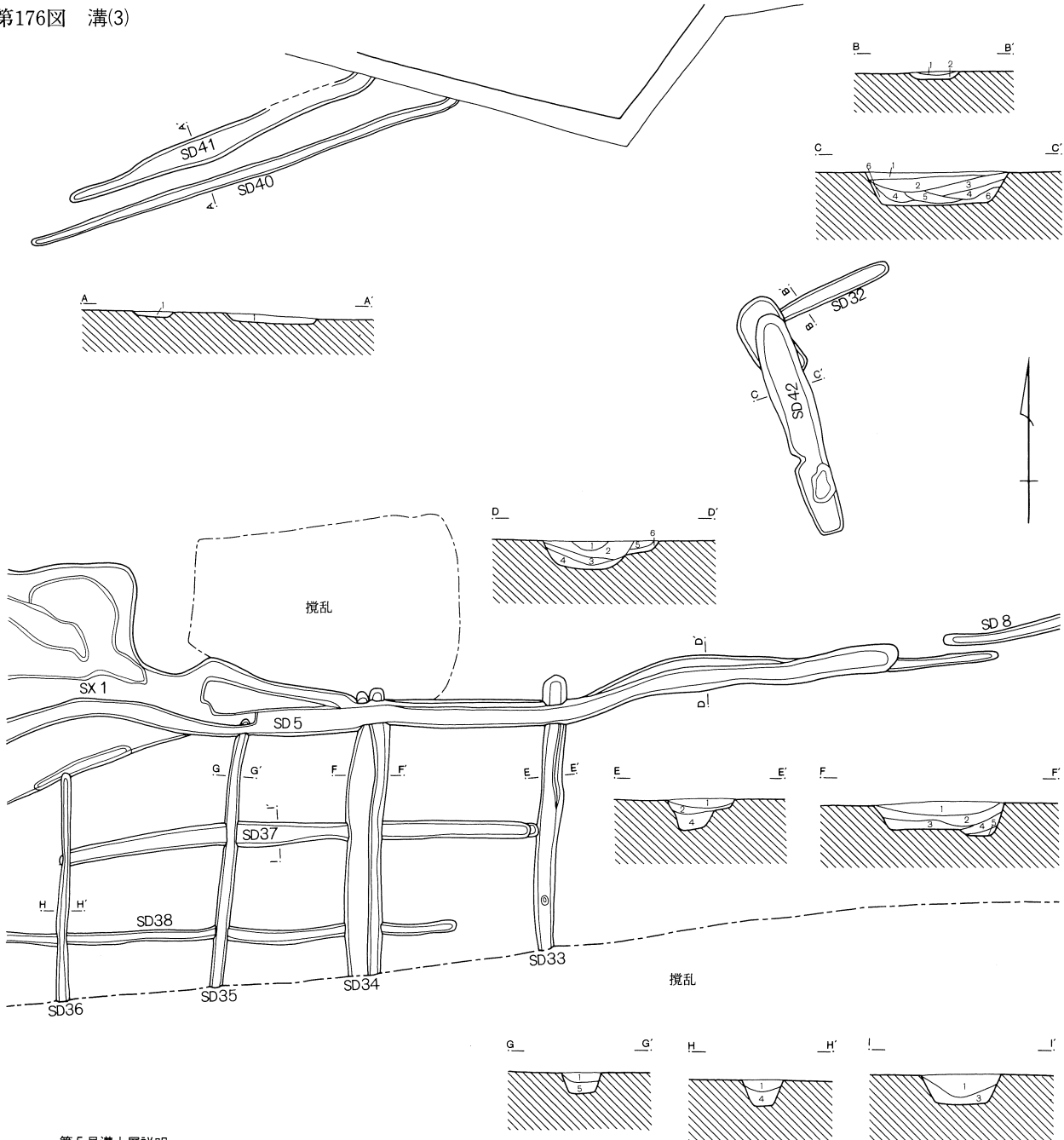


第175图 溝(2)





第176図 溝(3)



第5号溝土層説明

- 1 黄褐色土 白色バミスを微量。砂質土。
- 2 灰褐色土 白色バミスを微量。粘質土。
- 3 暗灰褐色土 白色バミスを微量。シルト質土。
- 4 灰色土 灰色粘質土と黄褐色土の互層。
- 5 暗褐色土 白色バミスを含む。粘質土。
- 6 黄褐色土 鉄分が沈着する。砂質土。

第32号溝土層説明

- 1 灰褐色土 白色バミスを含む。シルト質土。
- 2 黄褐色土 鉄分が沈着する。砂質土。

第33～37号溝土層説明

- 1 暗灰褐色土 白色バミス・焼土粒子を微量。シルト質土。
- 2 灰褐色土 底面に鉄分が沈着する。粘質土。
- 3 暗黄褐色土 暗灰色粘質土と黄褐色土の互層。
- 4 暗灰褐色土 鉄分が沈着する。粘質土。
- 5 暗黄褐色土 小砂礫を微量。粘質土。

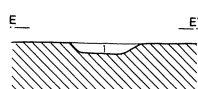
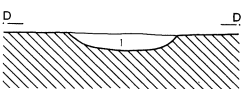
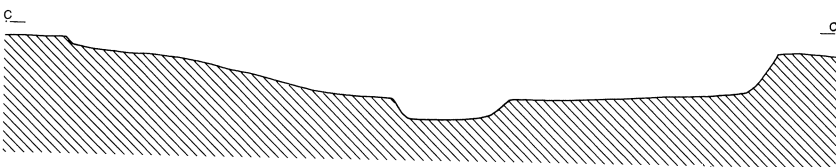
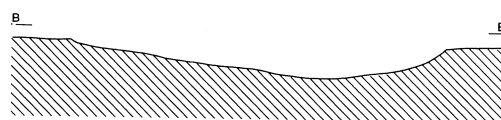
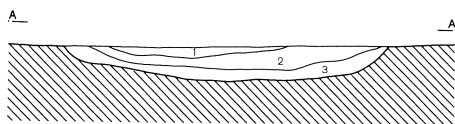
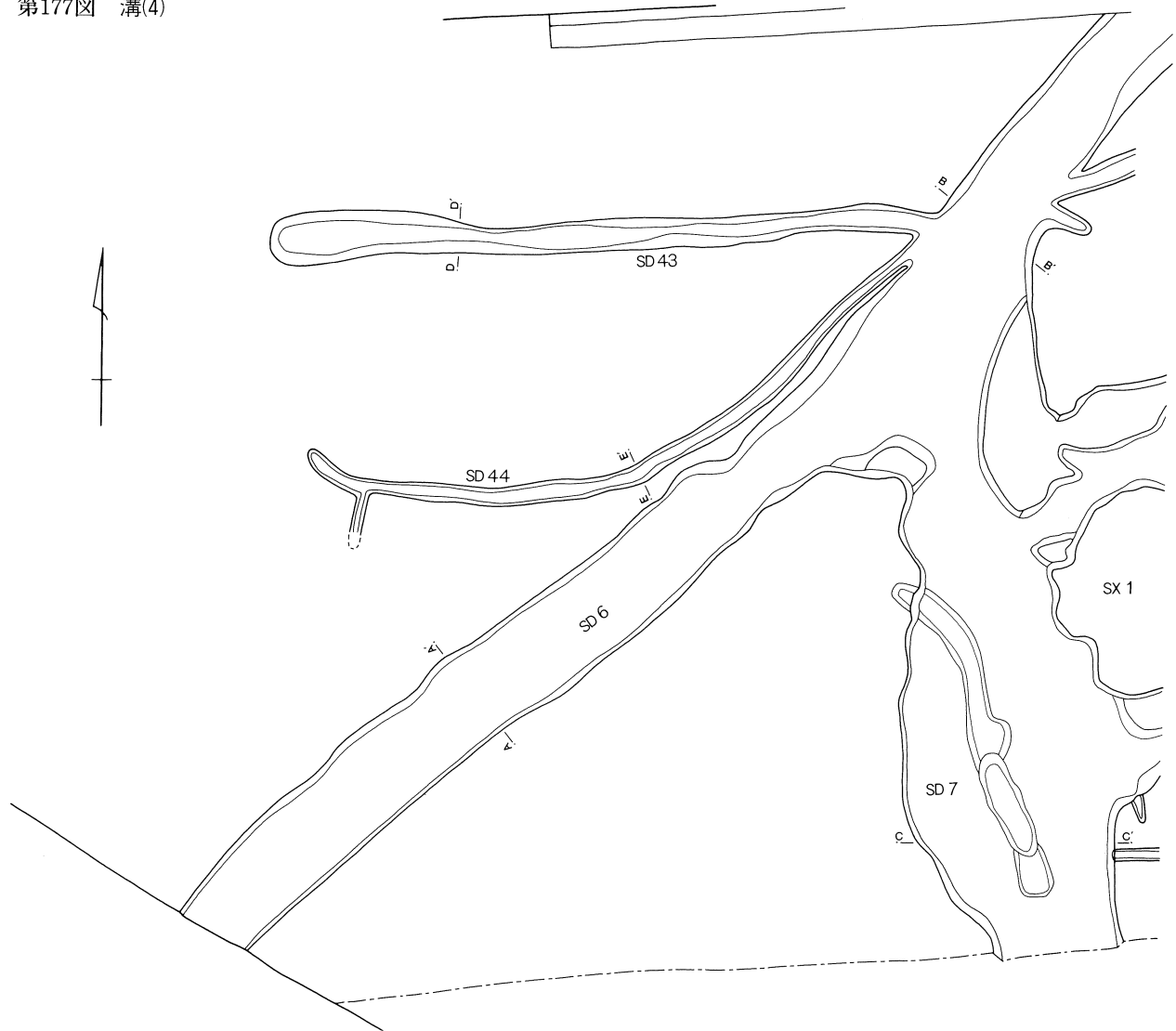
第40・41号溝土層説明

- 1 緑灰褐色土 浅間Aを微量。

第42号溝土層説明

- 1 黄褐色土 小砂礫を微量。
- 2 灰褐色土 鉄分多量、白色粘質土を微量。シルト質土。
- 3 暗灰褐色土 遺物を微量。粘質土。
- 4 暗灰褐色土 暗灰色粘質土に黄褐色土を土ブロック状に含む。
- 5 赤褐色土 鉄分非常に多い。砂質土。
- 6 暗黄褐色土 底面に鉄分沈着。シルト質土。

第177図 溝(4)



第6号溝土層説明

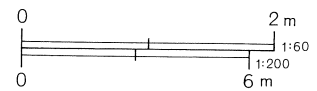
- 1 黄灰褐色土 灰色粘質土に黄褐色土をブロック状に含む。
- 2 黒褐色土 砂・火山灰粒子・黄褐色土ブロックを微量。粘質土。
- 3 暗灰色土 粘質土。

第43号溝土層説明

- 1 緑灰褐色土 浅間Aを微量。シルト質土。

第44号溝土層説明

- 1 暗褐色土 炭化物粒子を少量。粘質土。



溝出土遺物(第178図)

溝からは土師器・須恵器・灰釉陶器・近世陶磁器などが出土したが、図示できたのは4点だけである。

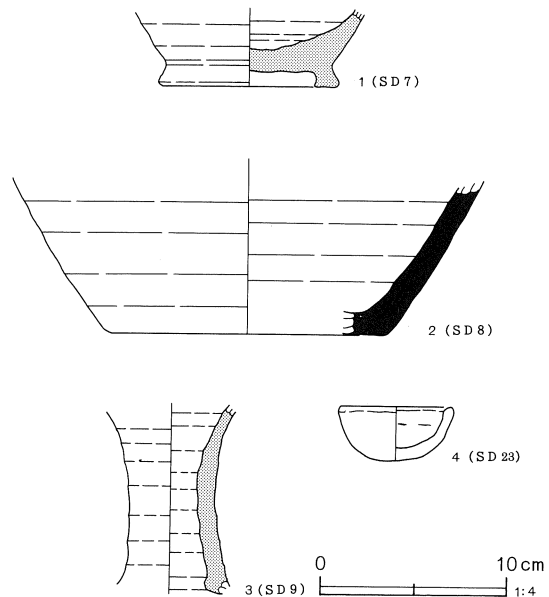
1は灰釉陶器の高台坏である。推定底径9.6cmで、胎土には石英・黒色粒子を少量含む。焼成は良好で、色調は灰白色をしている。底部内面と高台部外面の一部にだけ釉がかかる。残存率45%。第7号溝の覆土から出土した。

2は須恵器の甕である。推定底径15.0cmで、胎土には長石・赤色微粒子・微砂粒・小石を少量含む。焼成は良好で、色調は灰色をしている。残存率20%。末野産。第8号溝の覆土から出土した。

3は灰釉陶器の長頸壺である。口縁部が欠損している。胎土には白色微粒子・黒色微粒子を少量含む。焼成は良好で、色調は灰白色をしている。残存率80%。第9号溝の覆土から出土した。

4は土師器のミニチュア土器である。推定口径6.2cm、推定器高2.9cmで、胎土には角閃石・石英・赤色微

第178図 溝出土遺物

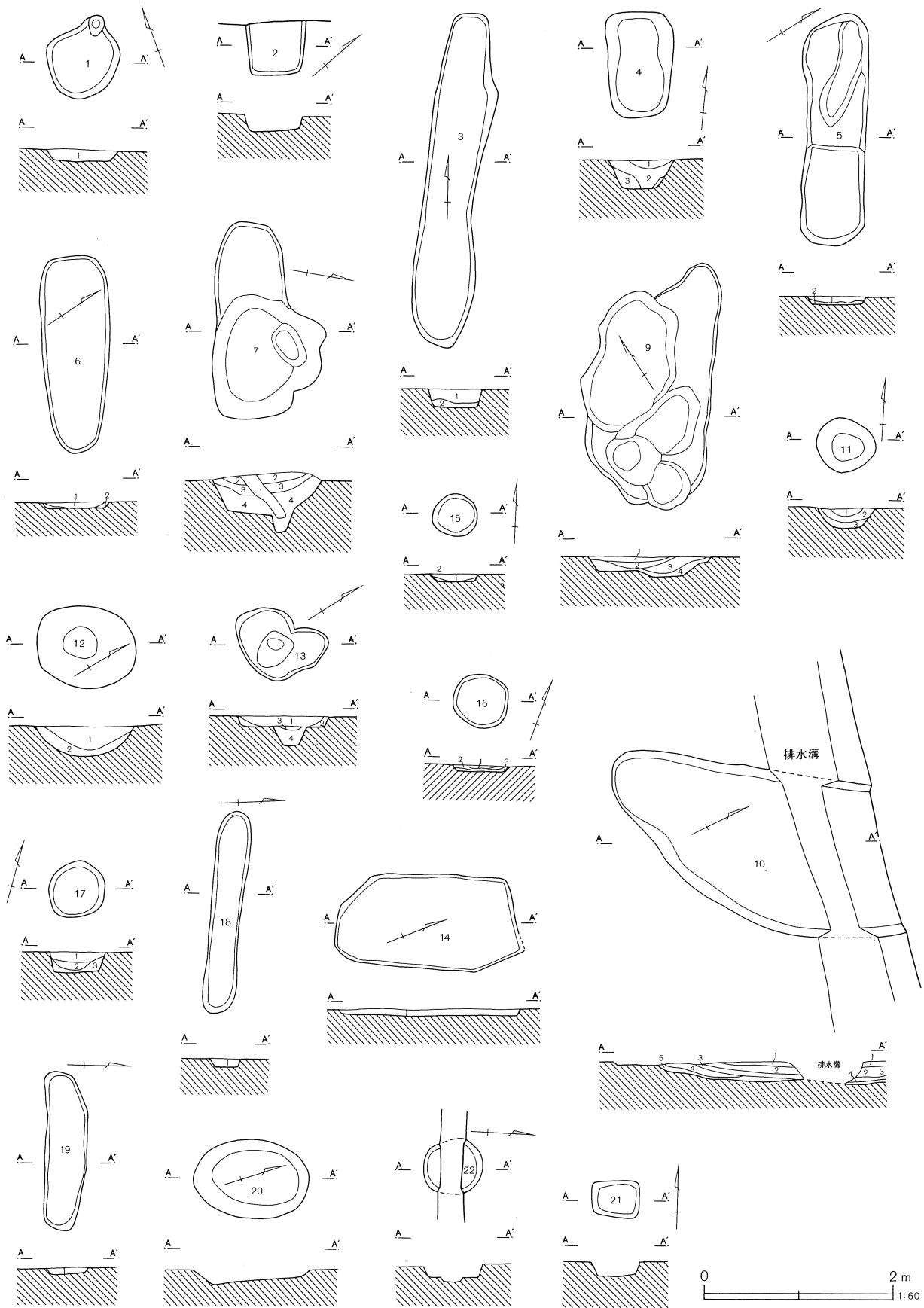


粒子を微量含む。焼成は良好で、色調は橙色をしている。残存率45%。内外面ともにナデ調整。第23号溝の覆土から出土した。

第3表 土壌一覧表

番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形態	主軸方位	備考
1	BT 3 G	0.90	0.75	0.12	不整円形	N-31°-E	出土遺物なし
2	BS 4 G		0.63	0.19	不明	N-51°-W	出土遺物なし
3	BO 3・4 G	3.48	0.67	0.20	長方形	N-8°-E	不明
4	BP 5 G	1.11	0.72	0.30	長方形	N-7°-W	不明
5	BP 4・5 G	2.43	0.70	0.08	長方形	N-55°-W	奈良時代
6	BP 4・5 G	2.05	0.72	0.06	長方形	N-61°-W	奈良時代
7	BP 5・6 G	2.05	0.12	0.56	楕円形	N-79°-E	奈良時代
8	BL 6 G	1.48	1.44	0.40	円形	N-90°-E	縄文時代
9	BK 6 G	2.62	1.38	0.21	不整形	N-50°-E	奈良時代
10	BL 3 G		1.65	0.20	不明	N-44°-E	奈良時代
11	BI 4 G	0.63	0.58	0.22	円形	N-88°-W	古墳時代
12	BI 4 G	1.07	0.86	0.31	円形	N-45°-E	奈良時代
13	BJ 6 G	0.82	0.80	0.30	楕円形	N-46°-E	出土遺物なし
14	BH 5 G	1.92	0.98	0.60	長方形	N-14°-E	奈良時代
15	BH 4 G	0.48	0.45	0.60	円形	N-82°-E	古墳時代
16	BH 4 G	0.58	0.55	0.60	円形	N-78°-E	出土遺物なし
17	BH 4 G	0.62	0.58	0.21	円形	N-29°-E	奈良時代
18	BG 4 G	2.11	0.36	0.80	長方形	N-80°-W	出土遺物なし
19	BG 5 G	1.66	0.44	0.70	長方形	N-90°-E	出土遺物なし
20	BJ 4 G	1.20	0.83	0.15	楕円形	N-22°-E	出土遺物なし
21	BK 6 G	0.50	0.40	0.15	長方形	N-90°-E	出土遺物なし
22	BM 6 G	0.63	0.56	0.16	円形	N-4°-W	出土遺物なし

第179图 土壤



## e、土壙(第179図)

今回の調査で検出された古墳時代以降の土壙の数は21基であった。概要については前述したので、ここでは代表的な土壙についてのみ個別に記載した。

## 第7号土壙(第179図)

BP-5・6グリッドで検出された。長軸2.11m、短軸1.20m、深さが0.65mで、楕円形をしていた。

覆土の断面には柱穴の痕跡が確認されたが、土壙と

## 第1号土壙

1 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、黄褐色土粒子を少量。

## 第3号土壙

1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を若干。  
2 黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量、砂を若干。

## 第4号土壙

1 暗黄褐色土 黄褐色土粒子を多量、砂質土。  
2 暗褐色土 炭化物粒子を微量、粘質土。  
3 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量。

## 第5・6号土壙

1 炭褐色土 白色バミスを微量、粘質土。  
2 暗黄褐色土 黄褐色土粒子を多量。

## 第7号土壙

1 暗褐色土 粘質土(柱痕)  
2 暗褐色土 鉄分を含む。粘質土。  
3 暗灰褐色土 粘質土。  
4 黄灰褐色土 シルト質土。

## 第9号土壙

1 暗褐色土 白色バミスを含む。砂質土。  
2 灰褐色土 白色バミスを含む。粘質土。  
3 暗灰褐色土 鉄分を多量、粘質土。  
4 暗灰褐色土 鉄分が沈着する。砂質土。

## 第10号土壙

1 灰褐色土 白色バミスを微量、粘質土。  
2 暗灰色土 鉄分を多量、粘質土。  
3 黒褐色土 暗灰色粘質土に炭化物が帯状に堆積。  
4 暗褐色土 シルト質土。  
5 暗黄褐色土 砂質土。

しての性格は不明である。

遺物は土師器片が2点出土した。

## 第16号土壙(第179図)

BH-4グリッドで検出された。大きさは、長軸0.58m、短軸0.55m、深さが0.06mであった。平面形態は円形で、底面は平坦であった。

覆土の2層には炭化物粒子を多量に含んでいた。

遺物は出土しなかった。

## 第11号土壙

1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量、粘質土。  
2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、粘質土。  
3 暗褐色土 シルト質土。

## 第12号土壙

1 暗褐色土 焼土粒子を少量、粘質土。  
2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量、粘質土。

## 第13号土壙

1 暗褐色土 白色バミスを微量、粘質土。  
2 暗黄褐色土 黄褐色土粒子を多量。  
3 暗黄褐色土 黄褐色土をブロック状に含む。  
4 暗黄褐色土 シルト質土。

## 第14号土壙

1 暗褐色土 白色バミスを微量、粘質土。

## 第15号土壙

1 暗褐色土 白色バミスを微量。  
2 暗黄褐色土 シルト質土。

## 第16号土壙

1 暗褐色土 焼土粒子を多量、砂質土。  
2 暗褐色土 炭化物粒子を多量、シルト質土。  
3 暗黄褐色土 シルト質土。

## 第17号土壙

1 暗灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量、粘質土。  
2 暗褐色土 炭化物粒子を少量、粘質土。  
3 暗黄褐色土 シルト質土。

## 第18・19号土壙

1 暗褐色土 黄褐色土をブロック状に含む。

## f、ピット(第180・182・183図)

今回の調査で検出されたピットの総数は66本であった。概要については前述したので、ここでは代表的なものについてのみ個別に記載した。

## ピット群(P1~14・第180図)

BS-3、BT-3グリッドにかけて検出された。ピット14本が円形に巡っていた。平地式の建物跡とも考えられたが、ピットの配置が不規則であり、また柱穴の痕跡が1本も検出されず確証を得られなかった。ここでは性格不明のピット群として報告することにした。

各ピットの大きさは、径0.13~0.32m、深さ0.10~0.35mとばらつきがあった。平面形態は円形または楕

円形をしており、P5・6とP9・10は一部重複していた。

覆土には焼土粒子、炭化物粒子を多量含んでいた。

遺物はP1・3・5~8・10~13から土師器片が少量出土した。その中で図示できたものは1の壺の胴部と2の甕の底部だけである。

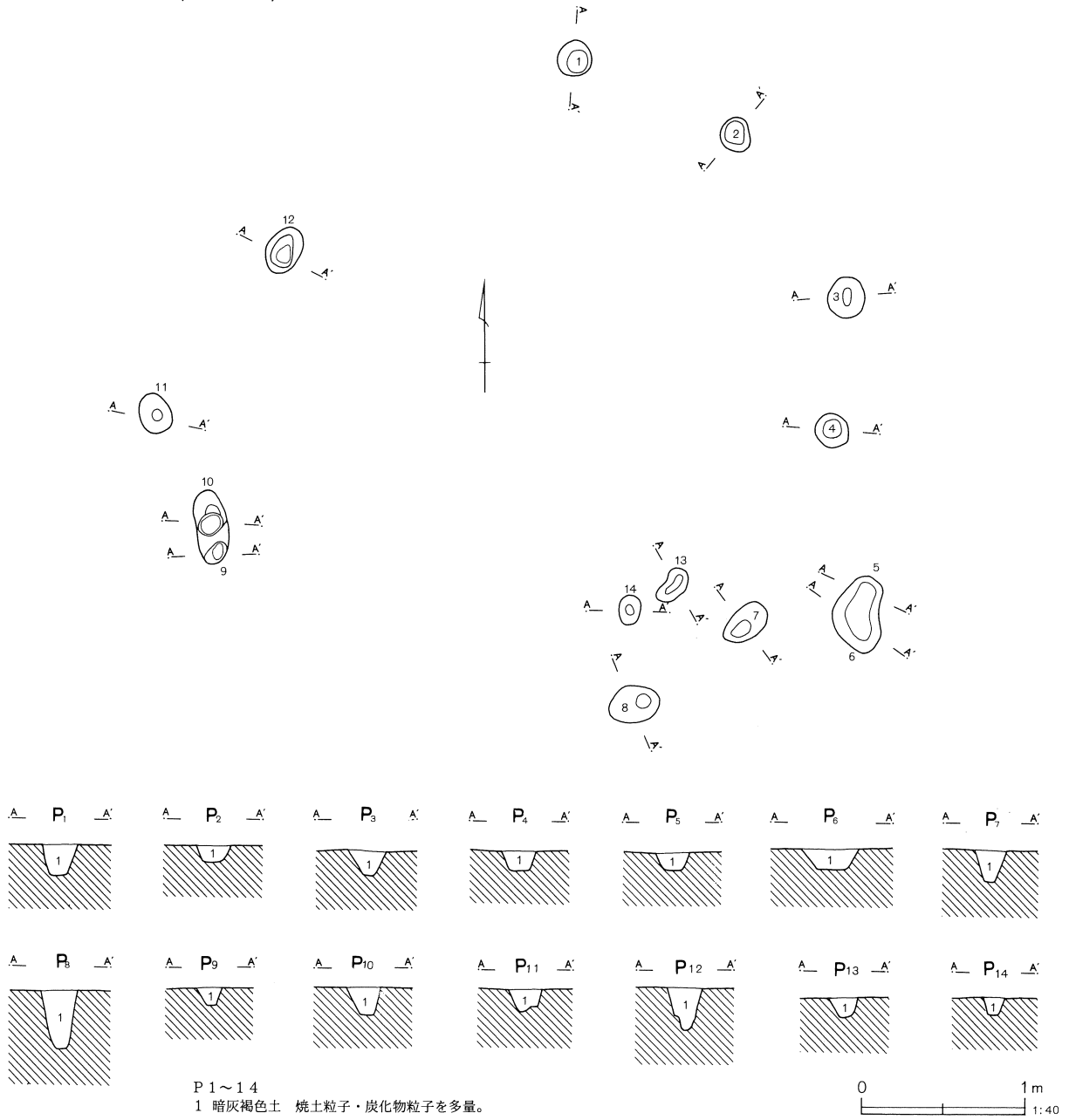
## ピット34(第182図)

BO-5グリッドで検出された。大きさは、長径0.38m、短径0.32m、深さが0.13mで、円形をしていた。

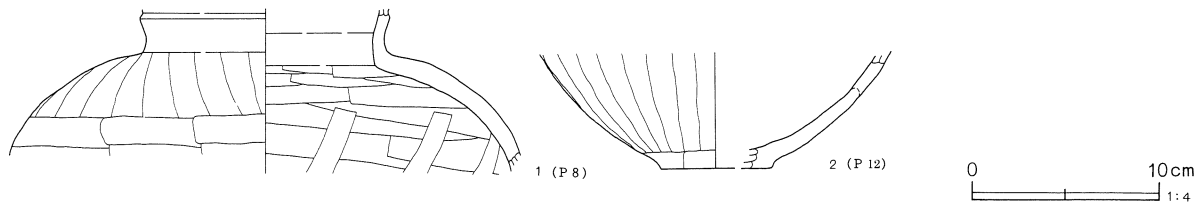
覆土の断面には柱穴の痕跡が確認されたが、性格は不明である。同様のピットはP33・35~38がある。

遺物は出土しなかった。

第180図 ピット群(P1~14)



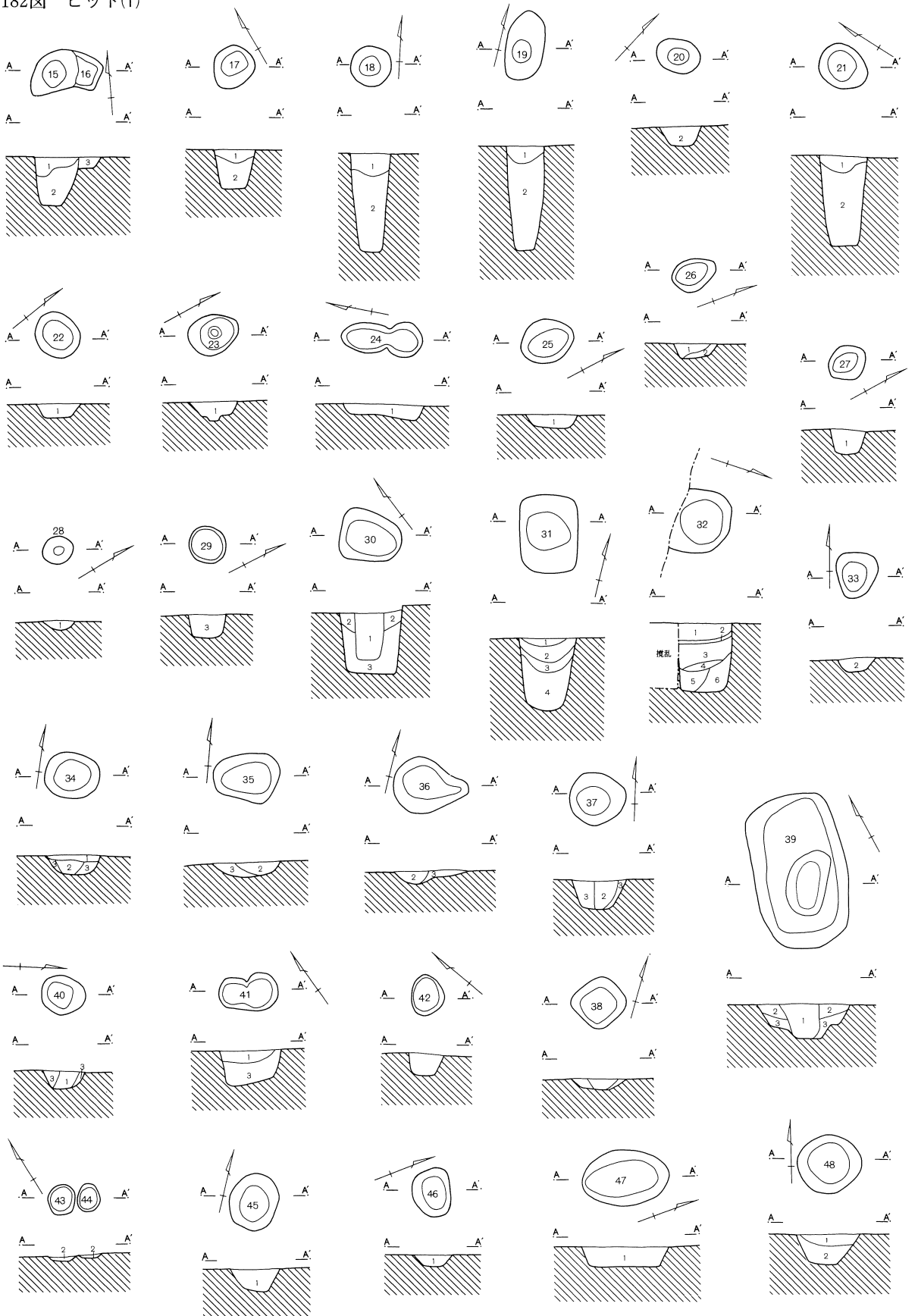
第181図 ピット群出土遺物



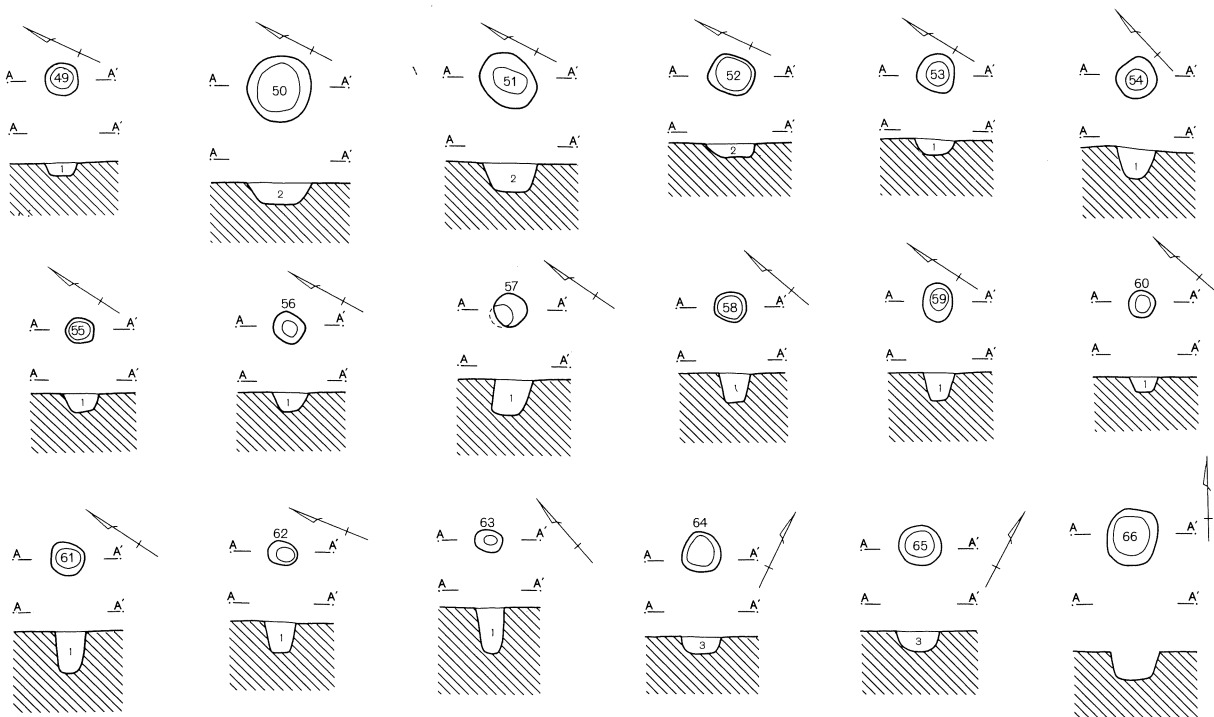
第181図 ピット群出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺				BC'DGH'	A	橙	25%	ピット8
2	甕			(6.0)	BCDGH	A	明赤褐	15%	ピット12

第182図 ピット(1)



第183図 ピット(2)



P 15・16

- 1 褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 淡褐色土 黄褐色土ブロックを多量、黄褐色土粒子を微量。

P 17～21

- 1 淡褐色土 黄褐色土粒子を微量、炭化物粒子を若干。
- 2 褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

P 22～29

- 1 褐色土 黄褐色土ブロックを少量、白色バミスを微量。
- 2 淡黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量。
- 3 褐色土 黄褐色土ブロックを少量。

P 30

- 1 灰褐色土 粘質土(柱痕)
- 2 灰褐色土 鉄分を含む。シルト質土。
- 3 黄灰色土 しまり良い。シルト質土。

P 31

- 1 暗灰褐色土 鉄分を多量、白色バミスを微量。シルト質土。
- 2 暗灰色土 粘質土。
- 3 暗灰色土 粘質土。
- 4 灰褐色土 粘質土。

P 32

- 1 灰色土 粘質土。
- 2 黒色土 炭化物を含む。
- 3 灰色土 粘質土。
- 4 暗灰色土 粘質土。
- 5 暗灰色土 粘質土(柱痕)
- 6 灰色土 シルト質土。

P 33～38

- 1 鉄褐色土 鉄分を多量。砂質土。
- 2 暗灰色土 粘質土(柱痕)
- 3 黄灰色土 シルト質土。

P 39・40

- 1 暗褐色土 鉄分を微量。粘質土。
- 2 暗褐色土 黄褐色土を微量。粘質土。
- 3 暗黄褐色土 シルト質土。

P 41～44

- 1 暗黄褐色土 シルト質土。
- 2 暗褐色土 焼土粒子を多量、炭化物粒子を少量。砂質土。

P 45～47

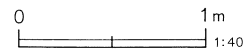
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量。粘質土。

P 48

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 2 暗黄褐色土 黄褐色土粒子を微量。

P 49～65

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。粘質土。
- 2 暗黄褐色土 ややしまりに欠ける。シルト質土。
- 3 暗緑褐色土 白色バミスを微量。粘質土。



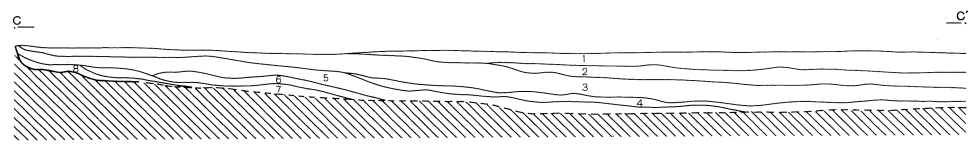
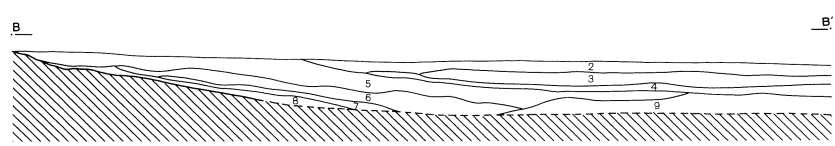
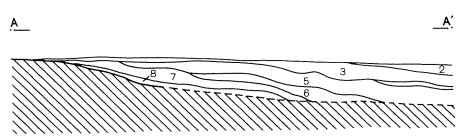
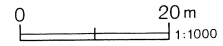
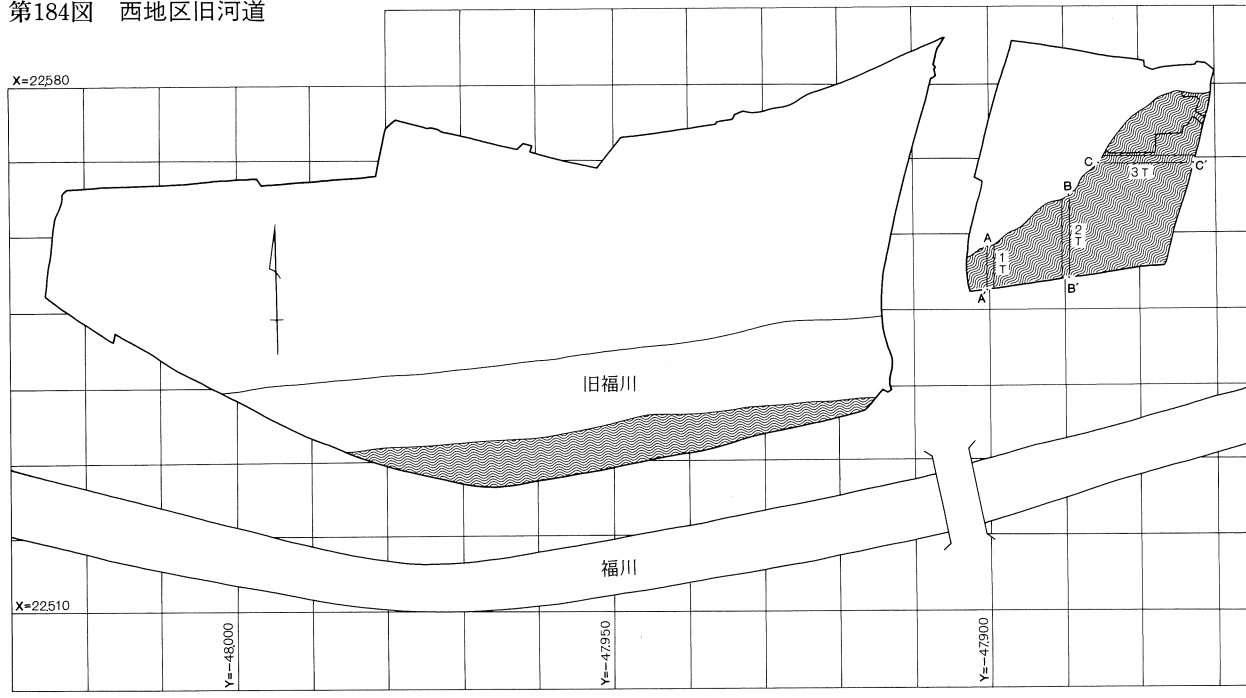
g、旧河道(第184～186図)

本調査区西側のBJ-7、BK・BL・BM-7・8、BN・BO・BP・BQ-7と東側のBR-5、BS-4・5、BT-3～5、BU-2～5にかけて検出された。現在の福川の流路からは北に約10～30mの所に位置してい

た。また福川が河川改修される以前の旧流路が北側に検出されており、一部が重複していた。八日市遺跡付近の現在の福川は櫛引台地の崖線に沿って蛇行しながら西から東に向けて流れている。しかし旧福川は現在の流路よりも低地部寄りに流れていたことがわかった。



第184図 西地区旧河道



- 旧河道
- 1 褐色土 鉄分斑を多量、焼土粒子・炭化物粒子を少量（遺物を微量含む）
  - 2 暗褐色土 鉄分斑を多量、砂を少量、焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量（遺物を少量含む）
  - 3 黒褐色土 鉄分斑を多量、焼土粒子を少量・炭化物粒子を少量炭化物を帯状に含む（遺物を多量含む）
  - 4 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。FAをブロック状に微量。
  - 5 褐色土 鉄分斑を多量、焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを少量。
  - 6 暗褐色土 鉄分斑を多量、白色バミスを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
  - 7 褐色土 鉄分斑を多量、黄褐色土粒子を少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
  - 8 褐色土 鉄分斑・黄褐色土粒子・ブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
  - 9 灰褐色土 鉄分斑を多量、炭化物粒子を微量。



調査は調査区東側にトレンチを3本設定して埋没状態を確認しようとしたが、遺構確認面から80cm程掘り下げたところで湧水が著しく河床面まで達することはできなかった。またBT-3、BU-3グリッドにかけて土師器片が少量露出していたため部分的に掘り下げたところ、土器が多量に出土したため範囲を拡大して調査を行った。

旧河道は調査区の南端に検出されており、南側が調査区外にかかるため川幅を確認することはできなかった。

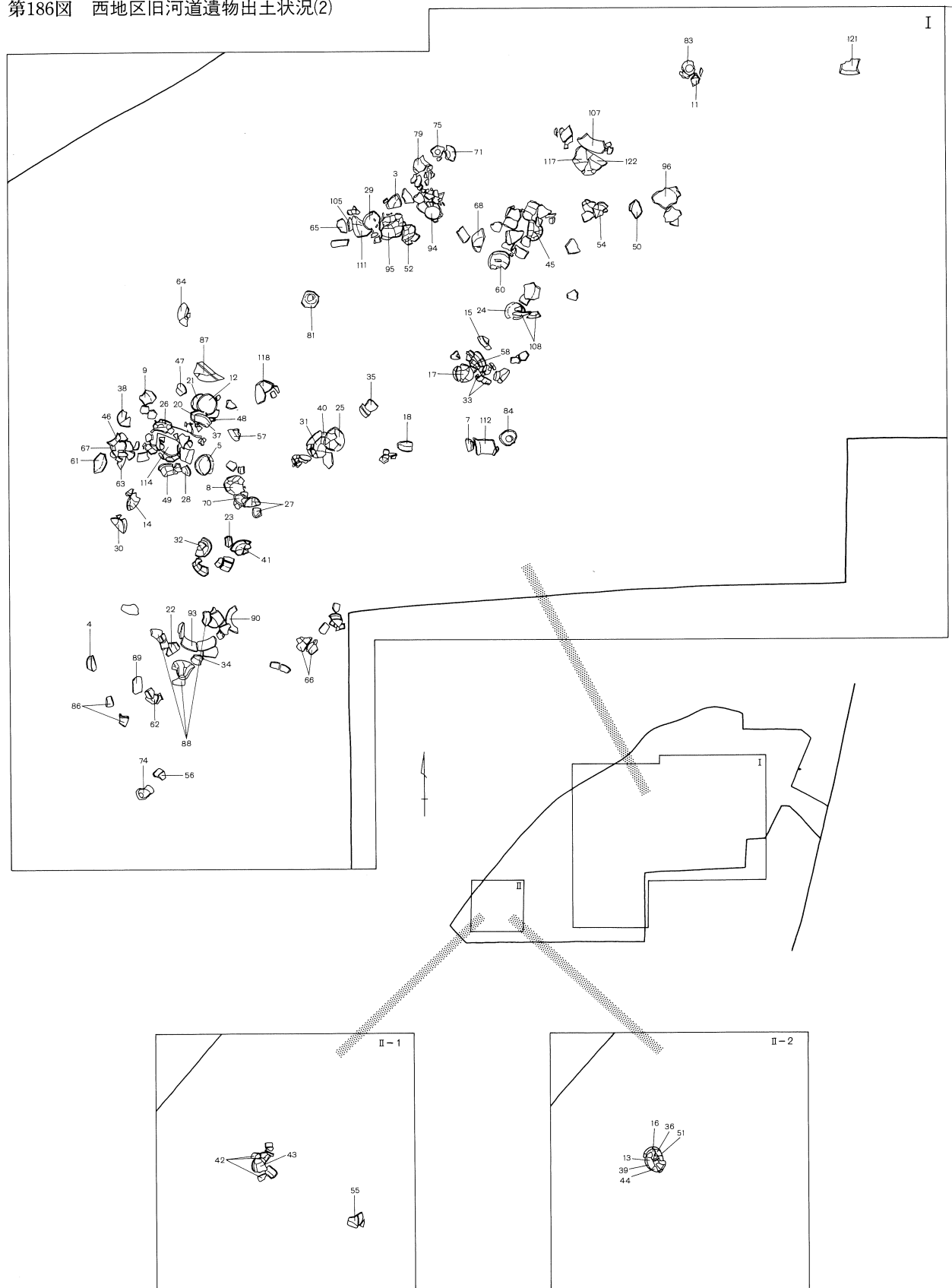
旧河道の流路は現在の福川と同様に西から東に向けて流れていたものと思われ、調査区東側では微高地に沿って大きく北東方向に蛇行していた。八日市遺跡東地区で検出された旧河道との関係はよくわからなかった。

埋没土は確認できた範囲内では9層に分層できた。全体に鉄分斑を多量に含んでいた。4層からは榛名山二ツ岳火山灰であるFAが確認された。FAの降下年代は6世紀初頭に比定され、本地域の鍵層となっている。

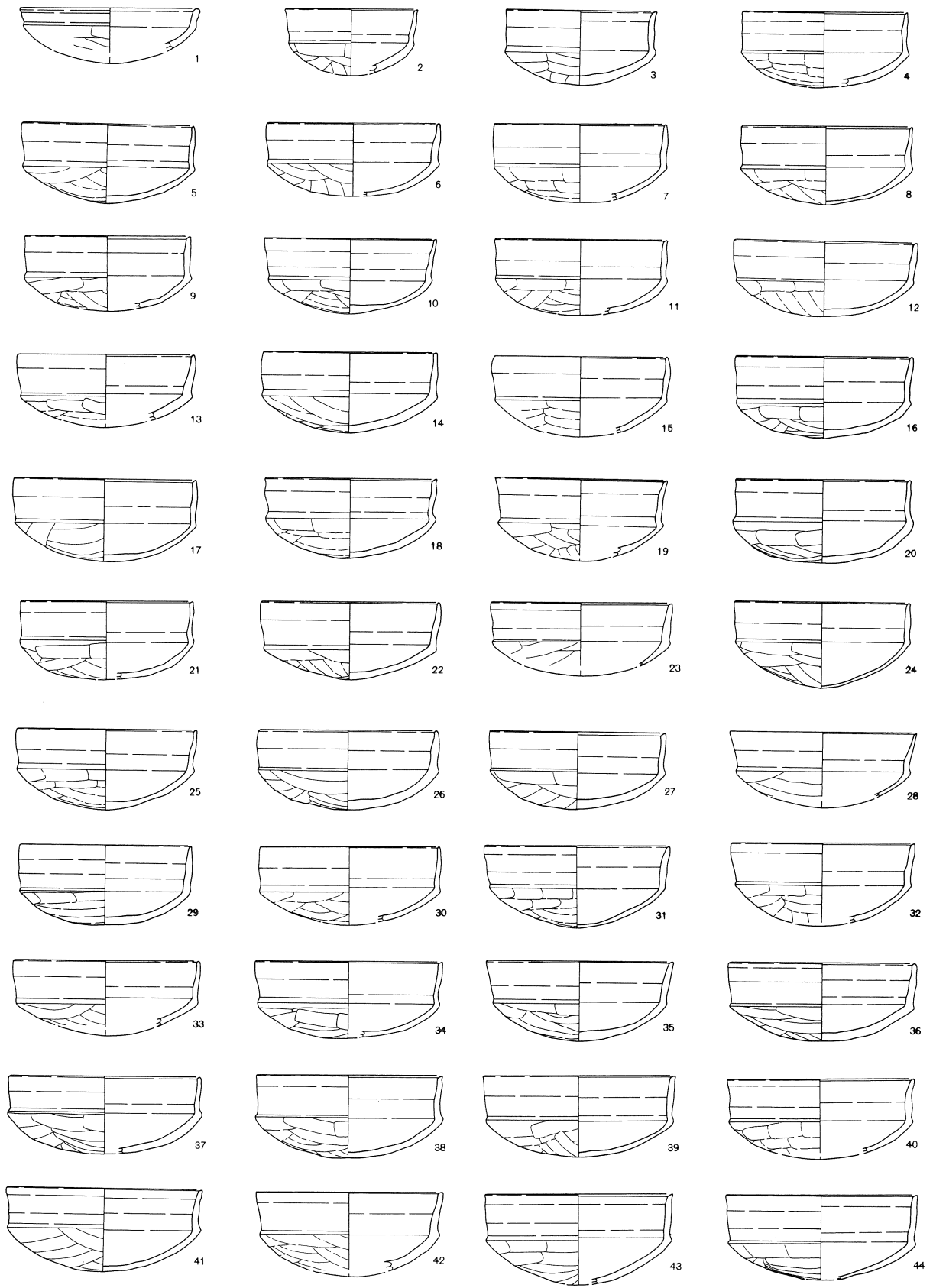
第185図 西地区旧河道遺物出土状況(1)



第186図 西地区旧河道遺物出土状況(2)



第187图 西地区旧河道出土遗物(I)

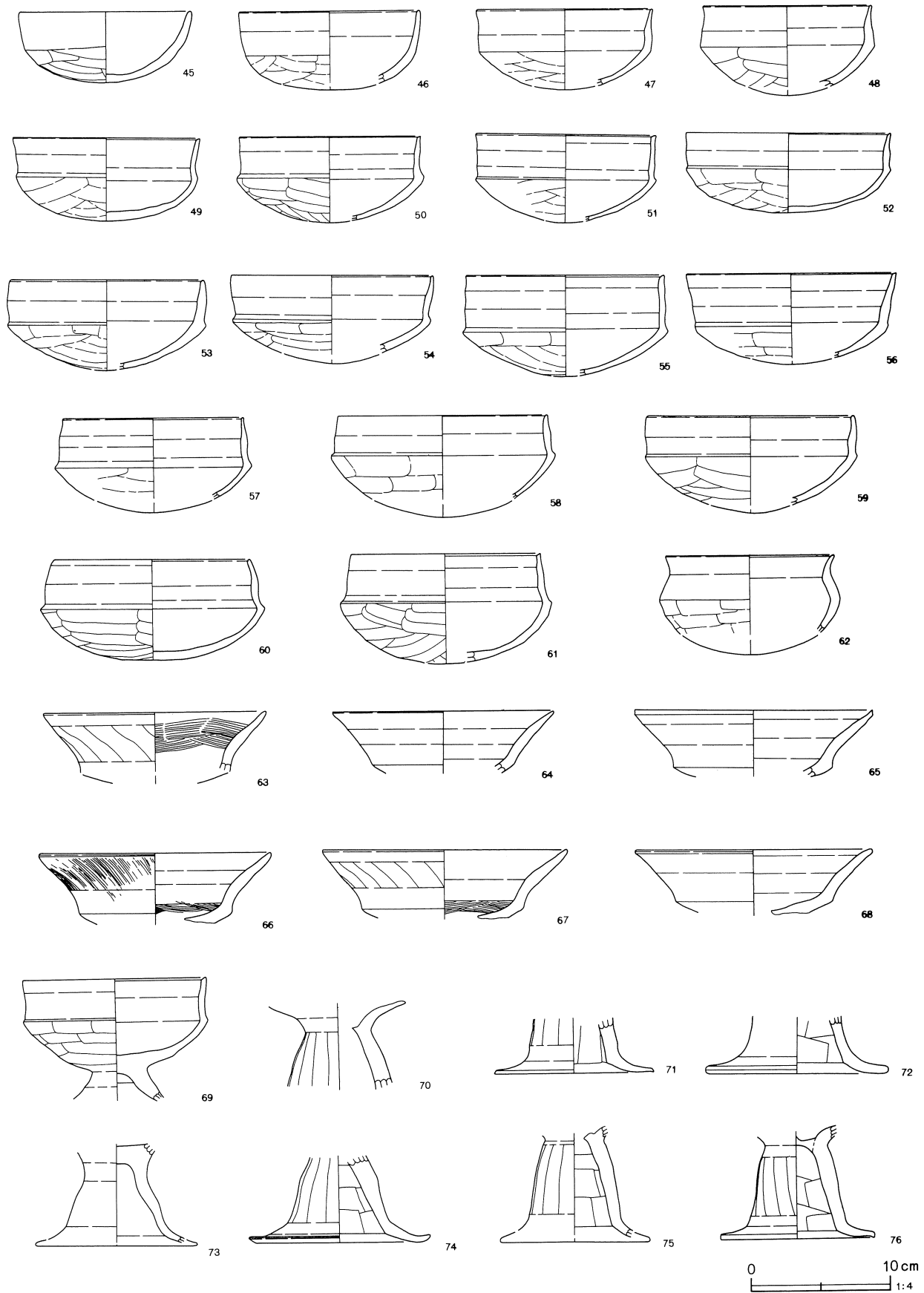


0 10 cm  
1:4

第187～190図 旧河道出土土器観察表

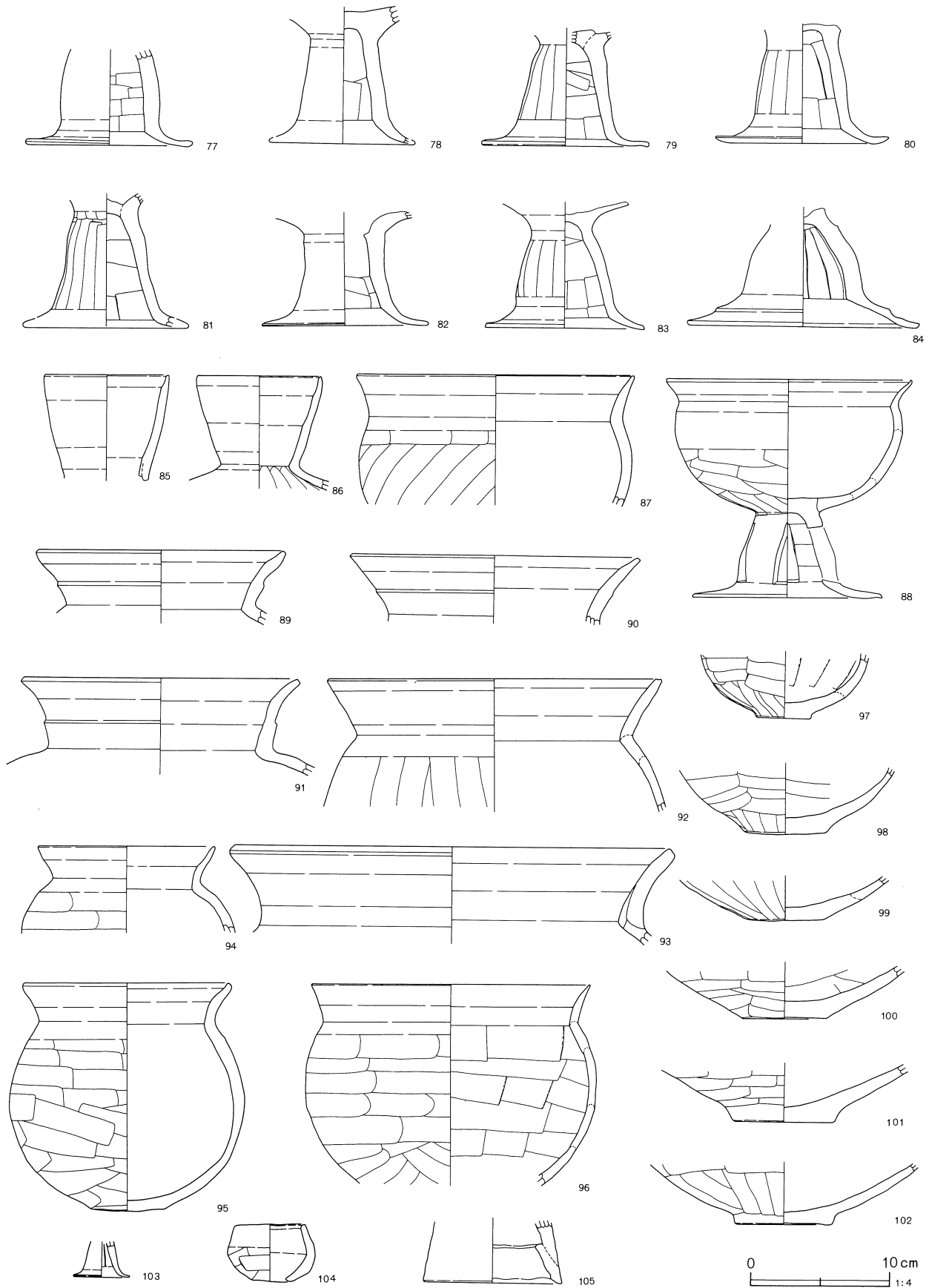
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.5)			BC'DH'	A	橙	10%	包含層
2	坏	(9.2)			BC'DGH'	A	橙	25%	BU 3 G
3	坏	(10.6)	(5.1)		BC'DGH'	A	にふい橙	50%	BUNo.66
4	坏	(11.6)			BC'DGH'	A	橙	30%	BTNo. 9
5	坏	11.9	5.4		BC'DGH'	A	橙	95%	BUNo.115 外面体部は黒く変色
6	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	橙	25%	BU 1 G
7	坏	(12.0)			BC'G	A	橙	25%	BUNo.96
8	坏	(11.8)	(5.4)		BC'DGH'	A	橙	55%	BUNo.112
9	坏	(11.6)			BC'DGH'	A	橙	25%	BUNo.138
10	坏	(12.0)	(5.2)		BC'DGH'	A	橙	30%	包含層
11	坏	(12.0)			BC'GH'	A	橙	25%	BUNo. 2
12	坏	12.8	5.2		BC'DGH'	A	橙	100%	BUNo.119
13	坏	(12.4)			BCDGH'	A	黄橙	20%	BTNo.12
14	坏	(12.0)	(5.5)		BCDGH'	A	橙	35%	BUNo.146
15	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	橙	25%	BUNo.82
16	坏	12.4	5.6		BCGH'	A	橙	95%	BTNo.13 体部外面は黒く変色
17	坏	12.7	5.7		BC'DGH'	A	黄橙	95%	BUNo.89
18	坏	(12.0)	5.5		C'GH'	A	橙	40%	BUNo.97
19	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	浅黄橙	30%	旧河 2 トレ
20	坏	(12.2)	5.7		BC'DGH'	A	橙	45%	BUNo.118
21	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	橙	30%	BUNo.120
22	坏	(12.6)	(5.3)		BC'DGH'	A	黄橙	20%	BUNo.163
23	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	橙	15%	BUNo.150
24	坏	12.2	5.9		BC'DGH'	A	橙	90%	BUNo.80
25	坏	12.4	5.5		BCDGH'	A	橙	95%	BUNo.101
26	坏	(12.4)	5.5		BC'DGH'	A	橙	60%	BUNo.133 体部外面は黒く変色
27	坏	(12.2)	5.3		BC'H'	A	橙	60%	BUNo.114
28	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	BUNo.131
29	坏	(12.0)	5.5		BC'GH'	A	橙	70%	BUNo.71
30	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	橙	30%	BUNo.147
31	坏	(13.0)	(5.6)		C'GH'	A	橙	30%	BUNo.180
32	坏	(12.8)			BC'DGH'	A	橙	50%	BUNo.151
33	坏	(12.8)			C'GH'	A	橙	45%	BUNo.85、86
34	坏	(13.0)			BCDGH'	A	橙	25%	BUNo.161 体部外面は煤ける
35	坏	(13.0)	(5.5)		BC'DGH'	A	橙	40%	BUNo.100
36	坏	13.0	5.3		BC'DGH'	A	橙	55%	BTNo.13 体部外面は黒く変色
37	坏	(13.2)			BC'DGH'	A	橙	35%	BUNo.117
38	坏	(13.0)	(5.6)		BC'DGH'	A	橙	45%	BUNo.139
39	坏	(13.4)	(5.6)		BC'DH'	A	橙	20%	BTNo.12
40	坏	(13.0)			BC'DG	A	橙	30%	BUNo.180
41	坏	(13.6)	5.7		BCDGH'	A	橙	60%	BUNo.149
42	坏	(13.0)			BC'DH'	A	橙	45%	BTNo. 2 ~ 5
43	坏	(13.0)			BCDH'	A	橙	25%	BTNo. 3
44	坏	(13.4)			BCDGH'	A	橙	60%	BTNo.12 体部外面は黒く変色
45	坏	12.4	5.0		BC'DGH'	A	橙	80%	BUNo.179
46	坏	(13.0)			BCDGH'	A	黄橙	25%	BUNo.140
47	坏	(12.6)			BC'DGH'	A	浅黄橙	15%	BUNo.116
48	坏	(12.0)			BC'DGH'	A	浅黄橙	35%	BUNo.127
49	坏	(13.4)	(5.9)		BC'DGH'	A	橙	50%	BUNo.130
50	坏	(13.0)			BC'DG	A	橙	20%	BUNo. 8
51	坏	(13.0)			BCDGH'	A	橙	15%	BTNo.11
52	坏	(14.6)	(5.7)		BCDGH'	A	橙	40%	BUNo.65
53	坏	(14.0)			C'GH'	A	橙	25%	BT 4 G、BU 1 G

第188图 西地区旧河道出土遗物(2)



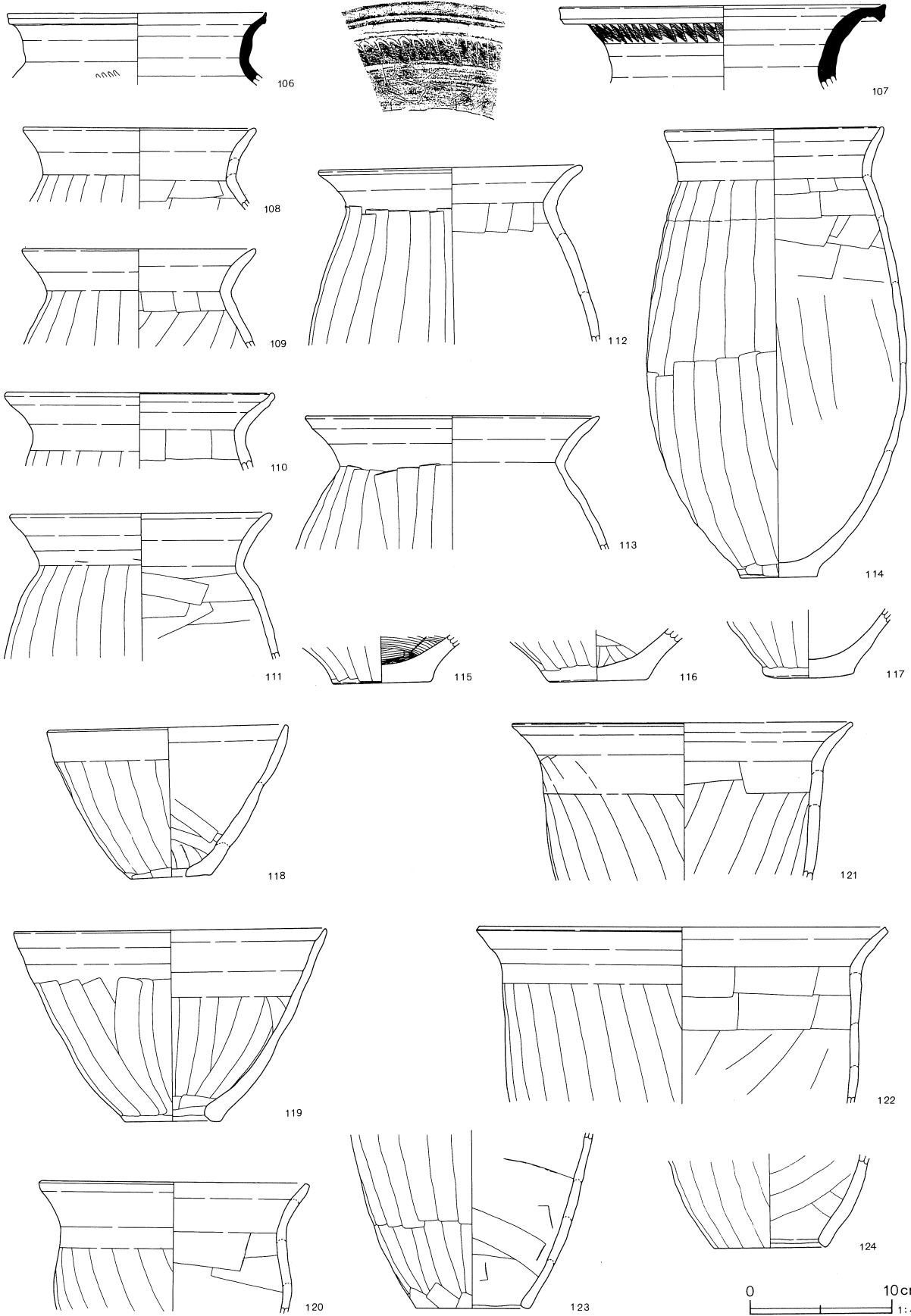
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
54	坏	(14.4)			BC'DGH'	A	橙	25%	BUNo.22
55	坏	(14.2)			BC'DGH'	A	黄橙	25%	BTNo. 1
56	坏	(15.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	BUNo.172
57	坏	(13.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	BUNo.108
58	坏	(15.0)			BCDGH'	A	橙	30%	BUNo.83
59	坏	(15.0)			BCDGH'	A	橙	30%	BU 3 G
60	坏	(14.0)	(7.1)		BC'DGH'	A	浅黄橙	70%	BUNo.41 外面はわずかに煤ける
61	坏	(13.6)			BC'DGH'	A	橙	40%	BUNo.145
62	椀	(12.0)			BC'DGH'	A	浅黄橙	20%	BUNo.169
63	高坏	(16.0)			BC'DH'	A	にふい橙	20%	BUNo.143
64	高坏	(16.0)			BC'DG	A	橙	35%	BUNo.105
65	高坏	(17.0)			BC'DH'	A	橙	20%	BUNo.69
66	高坏	(16.6)			BC'DGH'	A	浅黄橙	55%	BUNo.175
67	高坏	17.6			BC'DGH'	A	浅黄橙	80%	BUNo.141
68	高坏	(17.0)			BC'DGH'	A	橙	15%	BUNo.43
69	高坏	13.2			BC'DGH'	A	橙	95%	BUNo. 4
70	高坏				BC'DH'	A	橙	50%	BUNo.111
71	高坏			(11.4)	BC'DGH'	A	橙	40%	BUNo.47
72	高坏			(13.0)	BC'H'	A	浅黄橙	25%	旧河 3 トレ
73	高坏				BC'DGH'	A	黄橙	55%	BU 1 G 外面には煤が付着
74	高坏			(13.0)	BC'G	A	橙	40%	BUNo.173
75	高坏				BC'DGH'	A	橙	95%	BUNo.48
76	高坏			(11.0)	BC'DH'	A	橙	30%	BT 4 G
77	高坏			(12.0)	BC'DGH'	A	橙	30%	旧河 3 トレ
78	高坏				BC'DGH'	A	にふい橙	75%	旧河 2 トレ
79	高坏			(12.0)	BC'DGH'	A	橙	85%	BUNo.50
80	高坏			12.4	BC'DGH'	A	橙	80%	旧河 2 トレ
81	高坏				BC'DGH'	A	橙	90%	BUNo.103
82	高坏			(12.0)	BC'DGH'	A	橙	70%	包含層、BU 1 G
83	高坏			11.4	BC'DGH'	A	橙	90%	BUNo. 2
84	高坏			(16.6)	BC'DGH'	A	橙	75%	BUNo.92
85	埴	8.8			BC'D	A	橙	95%	旧河 2 トレ
86	埴	8.8			BC'DGH'	A	橙	70%	BUNo.10、171
87	鉢	(20.0)			BC'DGH'	A	橙	25%	BUNo.106
88	脚付椀	(17.4)	(15.5)	(13.4)	BC'D	A	浅黄橙	50%	BUNo.157、164、166 透かしは 4 方と思われる
89	壺	(18.0)			BC'DG	A	橙	20%	BUNo.167
90	壺	(20.8)			BCDGH'	A	黄橙	35%	BUNo.160
91	壺	(20.0)			BC'G	A	橙	15%	旧河 2 トレ
92	壺	(24.0)			BC'DH'	A	橙	15%	包含層
93	壺	(32.0)			BC'DH'	A	橙	60%	BUNo.155、156
94	壺	12.8			BC'DH'	A	橙	60%	BUNo.62
95	壺	(15.0)	(16.2)	(5.2)	BC'DGH'	A	橙	45%	BUNo.67
96	壺	(20.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	BUNo. 7
97	壺			(4.0)	BC'H'	A	暗褐	45%	旧河 2 トレ
98	壺			(6.0)	BC'DH'	A	浅黄橙	25%	旧河 2 トレ
99	壺			5.6	BC'DGH'	A	橙	90%	BU 3 G
100	壺			6.0	BC'DGH'	A	橙	40%	BUNo. 4
101	壺			7.2	BC'DG	A	橙	55%	旧河 2 トレ
102	壺			7.0	BC'DG	A	黄橙	45%	旧河 2 トレ
103	ミニチュア			(4.0)	C'G'	A	にふい褐	40%	旧河 1 トレ
104	ミニチュア	5.0	4.1		BC'DGH'	A	橙	100%	旧河 2 トレ 焼成後底部穿孔
105	支脚			(10.0)	BC'DGH'	A	橙	25%	BUNo.70
106	甕	(18.0)			BC'H'	B	灰褐	15%	包含層 わずかにタタキ目がのこる
107	甕	(23.0)			C'EH'	A	灰白	40%	BUNo.10

第189图 西地区旧河道出土遗物(3)





第190図 西地区旧河道出土遺物(4)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
108	甕	(16.4)			BC'DGH'	A	にふい褐	40%	BUNo77、79
109	甕	(16.4)			C'EH	A	にふい橙	20%	BU 3 G 外面全体に煤が付着
110	甕	(19.0)			BC'DGH'	A	橙	30%	BU 1 G
111	甕	(18.4)			BC'DEH	A	橙	30%	BUNo74
112	甕	(18.6)			BC'EGH	A	橙	25%	BUNo93
113	甕	(20.6)			BC'DH	A	灰白	60%	BT 4 G、BU 1 G
114	甕	15.4	31.0	5.4	BC'DH	A	にふい褐	60%	BUNo128 内外面とも煤が付着
115	甕			(7.0)	BC'EH	A	黄橙	50%	包含層
116	甕			(7.0)	BC'EH	A	橙	30%	BUNo 2
117	甕			6.2	BC'DGH'	A	橙	90%	BUNo11
118	甕	17.2	10.5	5.6	BCDH'	A	橙	90%	BUNo104
119	甕	(22.0)	(13.3)	(6.8)	BC'H'	A	橙	20%	旧河 1 トレ
120	甕	(19.0)			BC'G'	A	にふい橙	15%	包含層
121	甕	(24.0)			BC'DGH'	A	橙	25%	BUNo 1
122	甕	(29.0)			BC'G	A	橙	20%	BUNo 9
123	甕			8.0	BC'DH	A	灰褐	70%	BU 1 G 外面は煤が付着
124	甕			(80)	BC'DH'	A	橙	20%	BU 3 G

FAは褐色土中にブロック状になって微量含まれていた。この4層中からは遺物がほとんど出土しなかったが、上層の3層中からは多量の遺物が出土した。その3層中には焼土粒子、炭化物粒子を少量、炭化物が帯状に含まれていたが、火を使用したような痕跡は認められなかった。

遺物は1層から3層にかけて多量に出土した。その多くはBT-3、BU-3グリッドの3層中からの出土であった。遺物は土師器が大半で、須恵器甕の口縁部破片が2点だけ出土した。

遺物の出土状況を見ると、東側に集中する広範なブロックIと西側の土師器坏だけが出土したブロックIIに分けられる。ブロックIには坏、壺、甕などの器種がまんべんなくみられ、旧河道の肩部に沿った5m×5m程の範囲内に集中して出土した。ブロックIIは土師器坏が1ヶ所に重なって出土した。調査で確認できたのは上から順に42・43・13・44・39・36・51・16の8個体で、他にも周辺には坏の破片が数個体分散していた。一番下から出土した16の坏の中からは滑石製の白玉が6点出土した。

以上のブロックIIでの坏の出土状況や滑石製模造品の出土などから、城北遺跡などで確認されたような河川に関わる祭祀跡と考えられる。

出土した土器は残存率が悪く、完形になるものはほとんど無い。

1～61は土師器の坏である。1は口縁部が短く外傾し、端部外面が僅かに肥厚する。模倣坏と比べ全体的に器壁が厚い。2～44・49～61は模倣坏で、摩滅が著しく遺存状態は良くない。34・60は体部外面に煤が付着している。45・46は体部と口縁部の境に明瞭な稜をもたない。

63～84は高坏である。須恵器を模倣したと考えられるもの(69)が1点だけで、和泉式の高坏の系譜を引くもの(63～68・70～84)が主体を占める。63・66・67の坏部にはハケメ調整が施される。

88は脚付の椀である。二等辺三角形の透し孔が現状では2箇所認められる。透かしの位置から四方透かしと思われる。

103・104はミニチュア土器である。103は高坏で、坏部が欠損している。104は坏で、底部は焼成後に穿孔されている。

106・107は須恵器甕である。106は胴部外面に平行タタキ目が僅かに認められる。107は口縁部外面に櫛描き波状文が1段施されている。

108～117は甕である。109は外面全体に、114は内外面にそれぞれ煤が付着している。

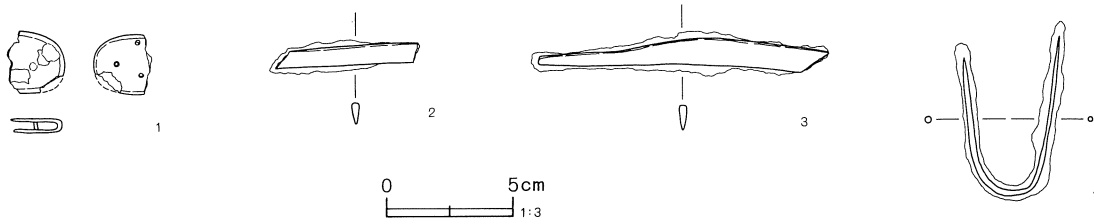
h、鉄製品(第191図)

1は帯金具である。銅製の鉞尾で、帯との付け根部分を僅かに欠損している。先端部は丸く弧状につくられ、形状は横長の半円形をしている。鋳は3ヶ所に認められる。現状では帯幅と鉞尾の長さは1:1で同じである。漆が全面に付着している。第18号住居跡の床面から出土した。

2・3は刀子片である。2は刀身片で、刃部のほぼ半分と茎部を欠損しているため全体の形状は不明である。3は切先部分を欠損している。全体に錆化が著しい。形状は緩やかに湾曲しており、関をもたない。2点ともに第41号溝の覆土から出土した。

4は釣針と思われるが、錆化が著しく細部については不明瞭である。第41号溝の覆土から出土した。

第191図 鉄製品



第191図 出土鉄製品観察表

番号	種類	大きさ(cm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	帯金具	(2.3)×2.4×0.6	(3.9)	第18号住居跡	鉞尾 銅製
2	刀子	(5.7)×0.8×0.3	(8.0)	第41号溝	刀身片
3	刀子	(11.6)×1.1×0.3	(20.6)	第41号溝	先端を欠く
4	釣針	6.3×3.6×0.3	16.2	第41号溝	

i、石製品(第192図)

1～6は滑石製の白玉である。1・3・6は一部を欠損しており、1の欠損部分は摩滅している。つくりは粗雑なものが多い。旧河道BT3グリッドの16の土師器坏の中から6点がまとまって出土した。

7・8は滑石製の管玉である。2点とも大形で、細長い形状をしている。7は片面穿孔で、つくりは丁寧である。第3号住居跡の覆土上層から出土した。8は片面穿孔である。残存状態があまり良くない。旧河道第3トレンチから出土した。

第192図 出土石製品観察表

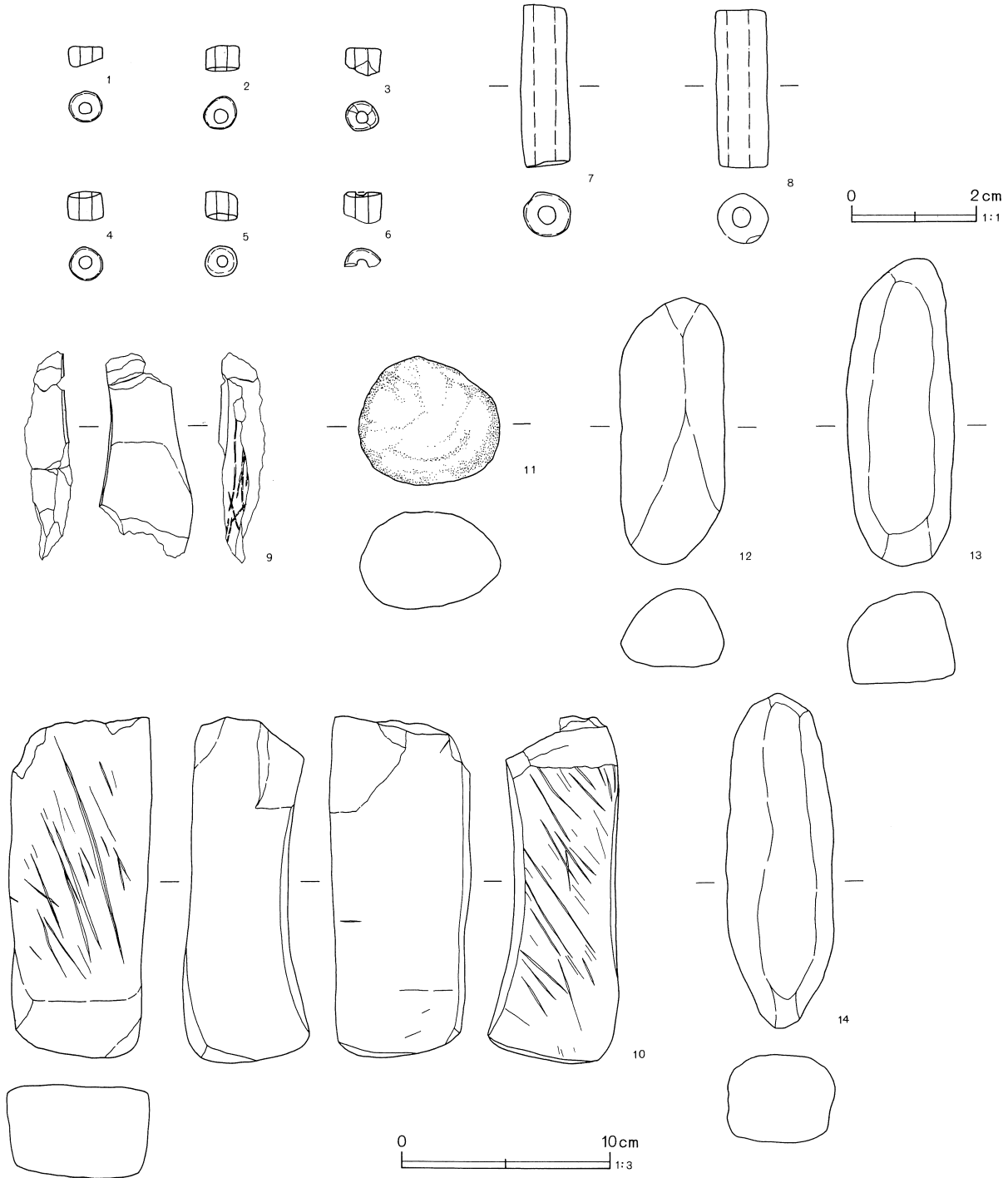
番号	種類	大きさ(cm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	白玉	0.5×(0.3)	(0.3)	旧河道BT3グリッド	滑石製
2	白玉	0.5×0.4	0.3	旧河道BT3グリッド	滑石製
3	白玉	0.5×(0.4)	(0.2)	旧河道BT3グリッド	滑石製
4	白玉	0.5×0.5	0.3	旧河道BT3グリッド	滑石製
5	白玉	0.5×0.4	0.2	旧河道BT3グリッド	滑石製
6	白玉	(0.6)×(0.5)	(0.2)	旧河道BT3グリッド	滑石製
7	管玉	2.6×0.8	2.7	第3号住居跡	滑石製
8	管玉	2.5×0.8	2.9	旧河道3トレンチ	滑石製
9	砥石	(10.0)×4.5×(2.2)	(66.0)	第5号住居跡	凝灰岩
10	砥石	(16.0)×6.5×4.3	(780.3)	第10号住居跡	凝灰岩
11	磨石	6.1×6.8×4.5	112.6	第18号溝	多孔質安山岩
12	編物石	12.7×4.9×3.6	403.0	第19号住居跡	安山岩
13	編物石	14.6×5.1×4.3	521.2	第19号住居跡	安山岩
14	編物石	15.9×5.1×4.1	513.1	第20号住居跡	安山岩

9・10は凝灰岩製の砥石である。9は大部分が剥離欠損しており、2次の火熱を受けた可能性が考えられる。側面の1面にのみ擦痕が認められる。第5号住居跡の覆土から出土した。10は上端部を僅かに欠損している。3面に使用による擦痕が認められる。第10号住居跡の床面から出土した。

11は磨石と思われる。擦痕は認められなかった。第18号溝の覆土から出土した。多孔質安山岩製。

12～14は編物石である。12・13は第19号住居跡のP1から、14は第20号住居跡の覆土からそれぞれ出土した。安山岩。

第192図 石製品



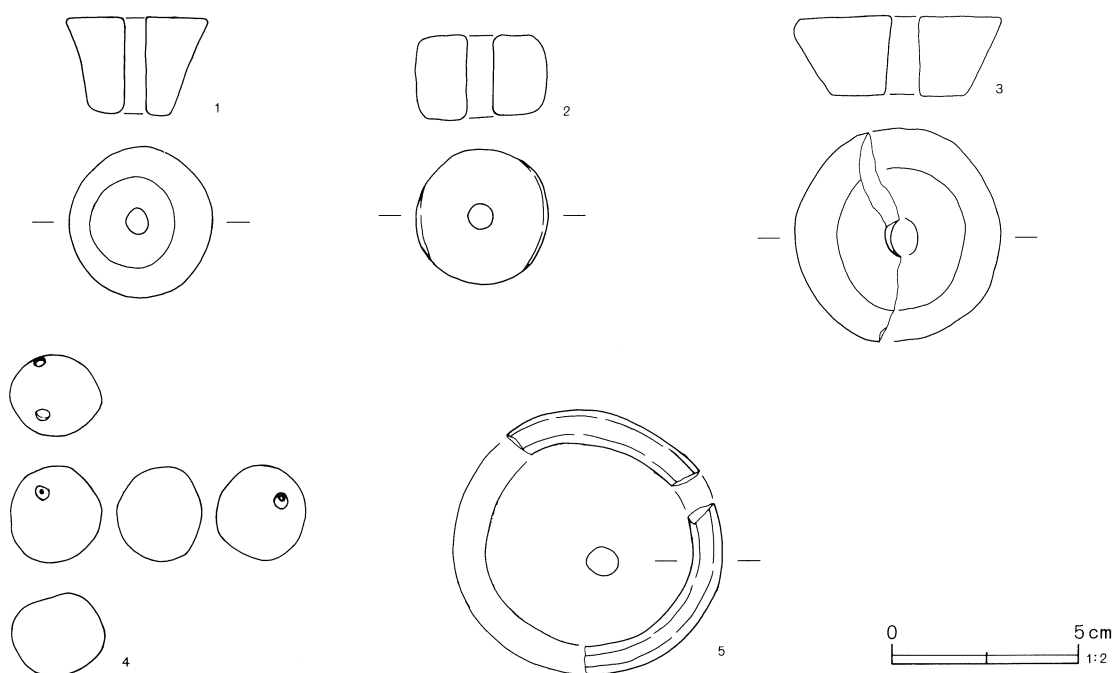
j、土製品(第193図)

1～3は紡錘車である。八日市遺跡西地区から出土した紡錘車は全て土製で、石製のものは出土しなかった。1は高さがあり、やや不整形である。第3号住居跡の覆土下層から出土した。2は重量感がある。第17号住居跡から出土した。3は全体の約1/3を欠損している。第8号溝からの出土であるが、第10号住居跡から流れ込んだ可能性が高い。

4は土玉である。穴が2ヶ所に穿たれているが貫通はしていない。穴の深さは5mm前後と浅く、先端のやや尖った棒状の工具によって突き刺しただけである。穴の径は4mmと小さい。第3号住居跡の覆土上層から出土した。

5は用途不明の環状の土製品である。全体の約1/2を欠損している。つくりは丁寧である。第3号住居跡の覆土上層から出土した。

第193図 土製品



第193図 出土土製品観察表

番号	種類	大きさ(cm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	紡錘車	2.5 × 3.8 ・ 2.2	34.6	第3号住居跡	橙色
2	紡錘車	2.2 × 3.5	36.3	第17号住居跡	橙色
3	紡錘車	2.1 × (5.5) ・ (3.4)	(28.3)	第8号溝	にぶい褐色
4	土玉	2.4 × 2.2	11.6	第3号住居跡	橙色 穴は貫通していない
5	環状土製品	(7.0) × 0.9	(11.7)	第3号住居跡	橙色

## VII 城西遺跡の調査

### 1 遺跡の概観

城西遺跡は、櫛引台地の縁辺部を蛇行して流れる福川に沿って位置している。城西遺跡の範囲は遺跡の大半を占める櫛引台地部と僅かに北は妻沼低地にかかっており、北緯36°12'05"、東経139°17'50"に位置している。遺跡は台地部と低地部とでは性格が異なる。本遺跡は木の本古墳群の西縁にもあたり、周辺には3基の古墳が現存している。県道を挟んで東には八日市遺跡、本郷前東遺跡などの古墳時代の集落跡が、北西約100mには室町時代に築造された皿沼城跡、南西480mには康正2(1456)年に深谷上杉氏の四代当主房憲が築城した深谷城跡などの遺跡がある。また南西38mの所には平安時代の創建と伝えられる瑠璃光寺が位置している。本遺跡が所在する城西という小字名は、南東約200mに位置する幡羅太郎館跡に由来するものと考えられている。

今回の調査を行った地点は、福川右岸の櫛引台地上と左岸の微高地(自然堤防)上の2地点で、どちらも本遺跡範囲の北端にあたる。台地上を東地区、微高地上を西地区と分けて調査を行った。調査面積は2地区あわせて7,600m<sup>2</sup>であった。

東地区は調査区の東端および西端に谷状の浅い落ち込みがあることから、舌状に伸びた台地先端部に立地しているものと思われる。標高は33.5mで、低地部との比高差は0.5m前後であった。

検出された遺構は、縄文時代前期の土壇2基、縄文時代中期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡3軒、近世の溝2条であった。

縄文時代の第1号住居跡は農道下に延びていたため全体を調査できなかった。覆土からは縄文時代中期後葉の加曾利EⅢ式の深鉢形土器片が多く出土した。第1号土壇は集石土壇であり、覆土上層に径4cm前後の小礫が多量に認められた。土壇は2基ともに縄文時代前期末葉の緒磯式と思われる土器片が出土したが、小破片であるため詳細な時期は判別できない。

古墳時代後期と思われる第3号住居跡も同様に、詳細な時期を判断できる遺物は出土しなかった。

平安時代の第2号住居跡の床面からは内面に漆状の物質が付着した土師器坏が出土した。第4号住居跡の覆土からは須恵器坏を中心に多量の土器が出土しており、その中に墨書土器が1点みられる。南比企産の須恵器高台坏で、底部外面に墨書が認められる。墨書は「願惠」(僧侶の名前)もしくは「願思」(願文)と判読できる。また墨書の下には「×」のヘラによる記号も認められる。第4号住居跡から出土した須恵器23点の産地別での内訳は、南比企産14点(61%)、末野産9点(39%)で、南比企産の須恵器が優勢であった。第5号住居跡は拡張を行っており、刀子・鎌などの鉄製品が拡張後の住居跡から出土した。

溝は2条検出されたが、覆土の観察から近世に開削されたものと思われる。

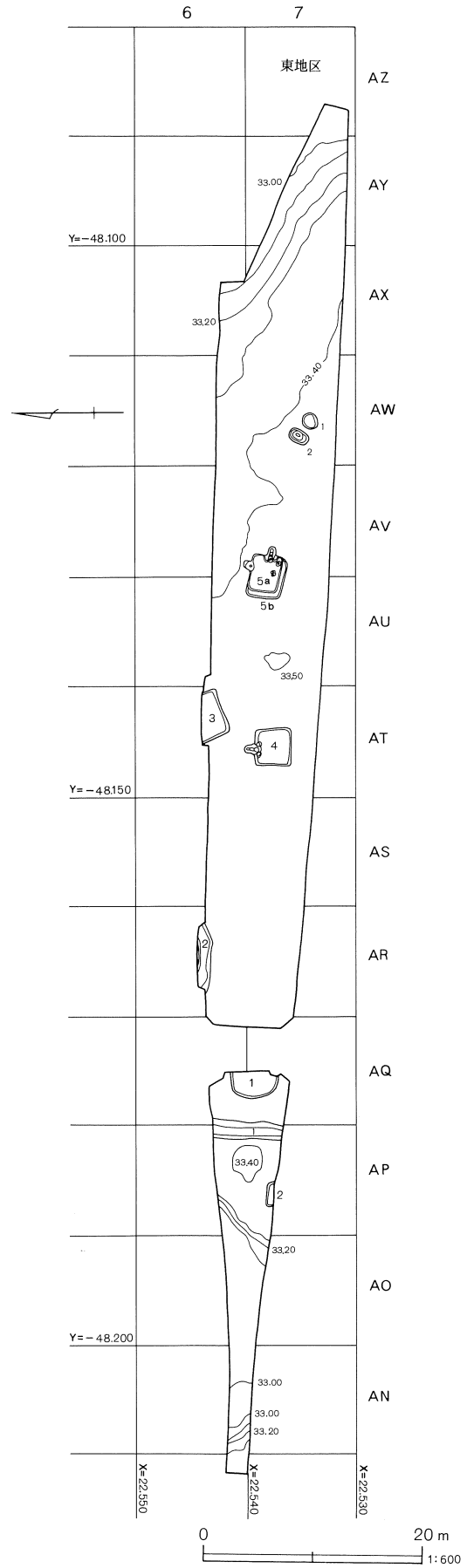
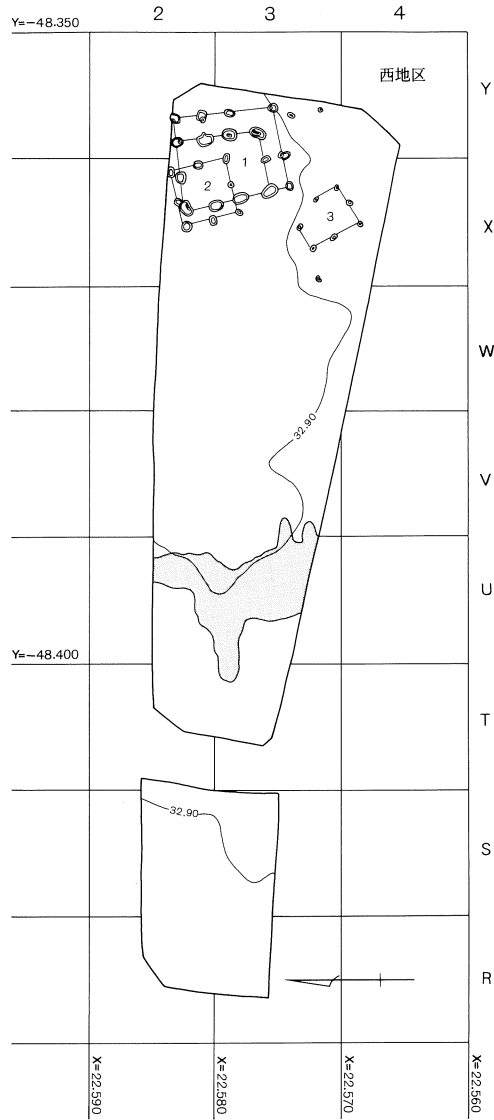
西地区の地形は平坦で、標高は32.9mであった。櫛引台地との比高差は約1mを測る。

検出された遺構は、平安時代の掘立柱建物跡3棟、ピットが3本であった。調査区の西側からは遺構・遺物がまったく検出されなかった。そのことから、本遺跡の低地部での西限を確認したことになり、遺跡は東に大きく広がるものと思われる。

第1号掘立柱建物跡は3間×2間で、東面と南面に庇柱を備えていた。遺物は須恵器坏が2点と土師器甕が1点出土した。他の2棟は、第2号掘立柱建物跡が2間×2間、第3号掘立柱建物跡が2間×1間で、第1号掘立柱建物跡と比べると規模が小さい。遺物は出土しなかった。柱穴の痕跡は第1・2号掘立柱建物跡に確認された。

ピットは調査区東際に2本検出されているが、1本には柱穴の痕跡が確認されたことから、掘立柱建物跡の柱穴である可能性が高い。調査区外にも数棟存在しており、群を構成していたことも考えられる。

第194図 城西遺跡全体図



## 2 東地区の調査

### (1) 縄文時代の遺構と遺物

#### a、住居跡

#### 第1号住居跡(第195図)

AQ-6・7グリッドで検出された。東側は調査区外にかかるため全体の約1/2を調査することができなかった。今回の調査で検出された縄文時代の住居跡はこの1軒だけであった。規模は南北4.30m、深さが0.33mで、平面形態は円形をしていたと思われる。

覆土は3層からなる自然堆積であった。1層の褐色土中には焼土粒子、炭化物粒子を少量含んでいた。

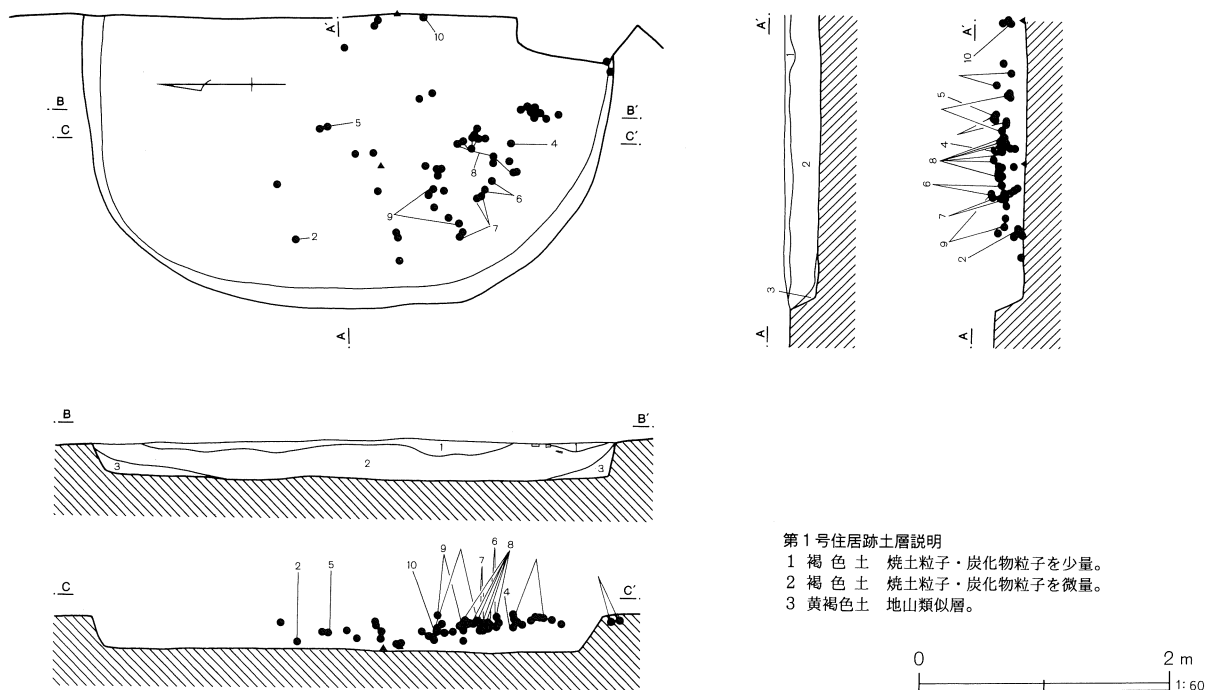
床面はほぼ平坦であった。

炉・柱穴などの施設は何等検出できなかった。

遺物は覆土から土器片が約70点出土したが、接合率が悪く形になるものはなかった。

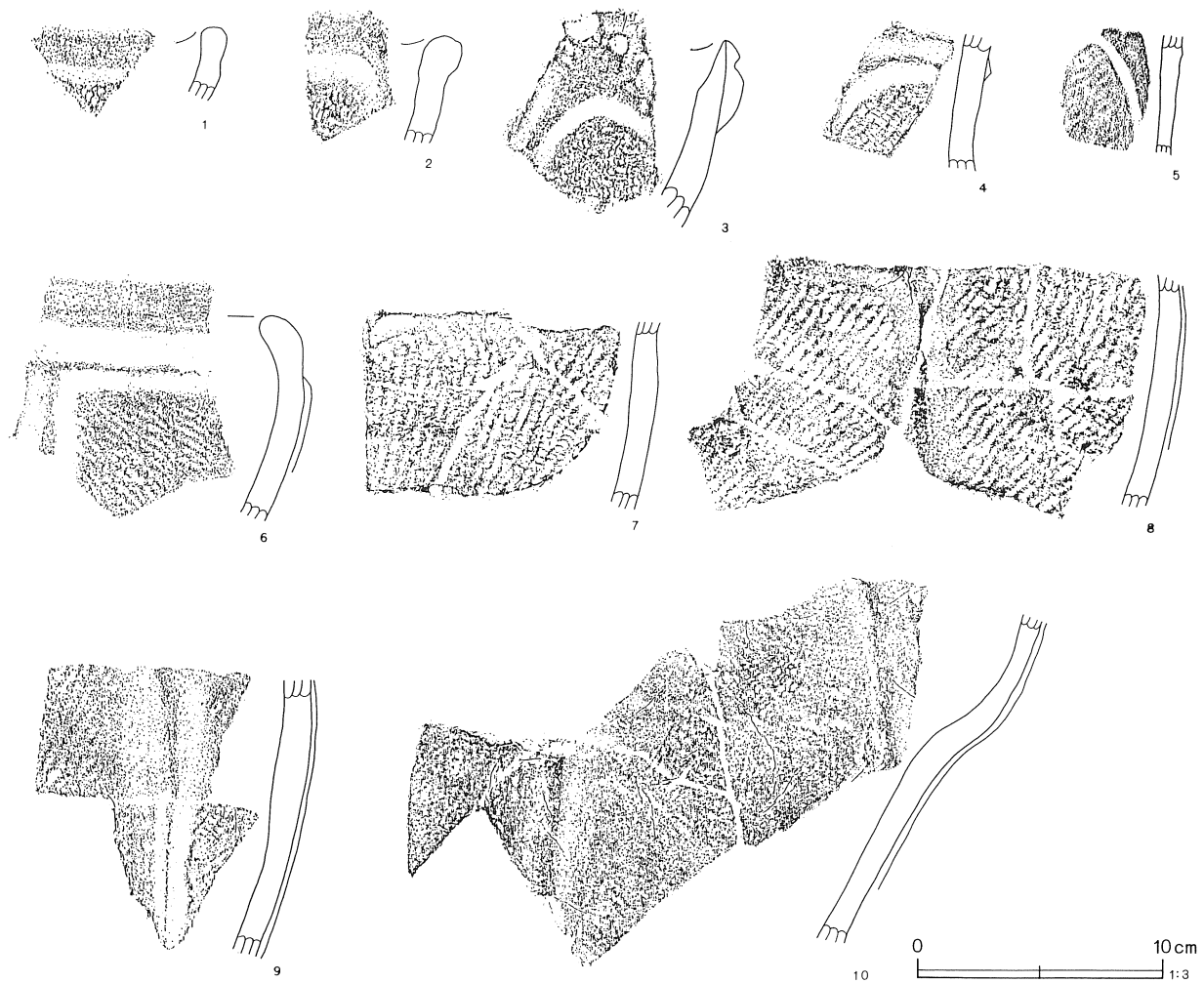
1～10は加曾利EⅢ式の深鉢形土器である。全体に摩滅が著しく、地文の縄文は不明瞭である。1～3は口縁部破片で、緩やかな波状口縁を呈するものと思われる。3は口縁隆帯上に円形の刺突が施されている。4・5は胴部破片である。6～10はキャリパー形土器の同一個体と思われる。6は平縁の口縁部で、僅かに内湾している。7～10は胴部で、縄文地に隆帯の懸垂文が認められる。

第195図 第1号住居跡





第196図 第1号住居跡出土遺物



b、土壇

第1号土壇(第197図)

AW-7グリッドで検出された。集石土壇であった。規模は長軸1.30m、短軸1.06m、深さが0.32mで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-70°-Eである。覆土上層の1層中に集石が認められた。

遺物は諸磯式と思われる土器片が出土したが、小破片のため図示することができなかった。

第2号土壇(第197図)

AW-7グリッドで検出された。規模は長軸1.66m、短軸1.00m、深さが0.62mで、平面形態は楕円形をしていた。主軸方位はN-27°-Eである。

遺物は第1号土壇同様に諸磯式と思われる土器片が出土したが、小破片のため図示できなかった。

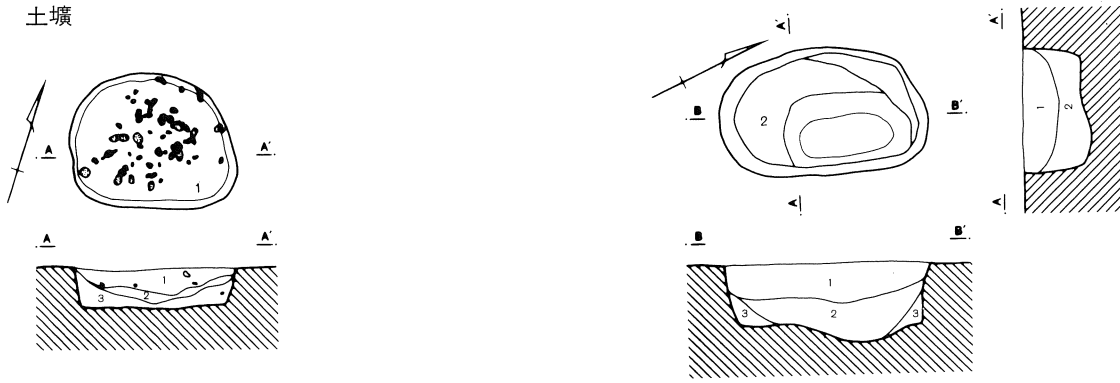
c、出土石器(第198図)

城西遺跡東地区からは局部磨製石斧1点と打製石斧が2点の総数3点の石器が出土した。しかし縄文時代の遺構に伴うものは1点もなく、全て後世の遺構に流れ込んだものである。

1は粘板岩製の局部磨製石斧である。頭部と刃部に調整加工が施されている。刃部には特に丁寧である。

2・3は砂岩製の打製石斧である。2は分銅形で、頭部の一部を欠損している。側縁の抉りは小さく、表面には自然面を残す。周縁的に入念な調整加工が施され、裏面には主要剥離が認められる。3は上半部を欠損している。形態は撥形をしていたと思われる。刃部には丁寧な調整加工が施され、ほぼ円刃に仕上げられている。

第197図 土壌

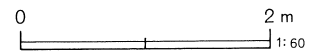


第1号土壌

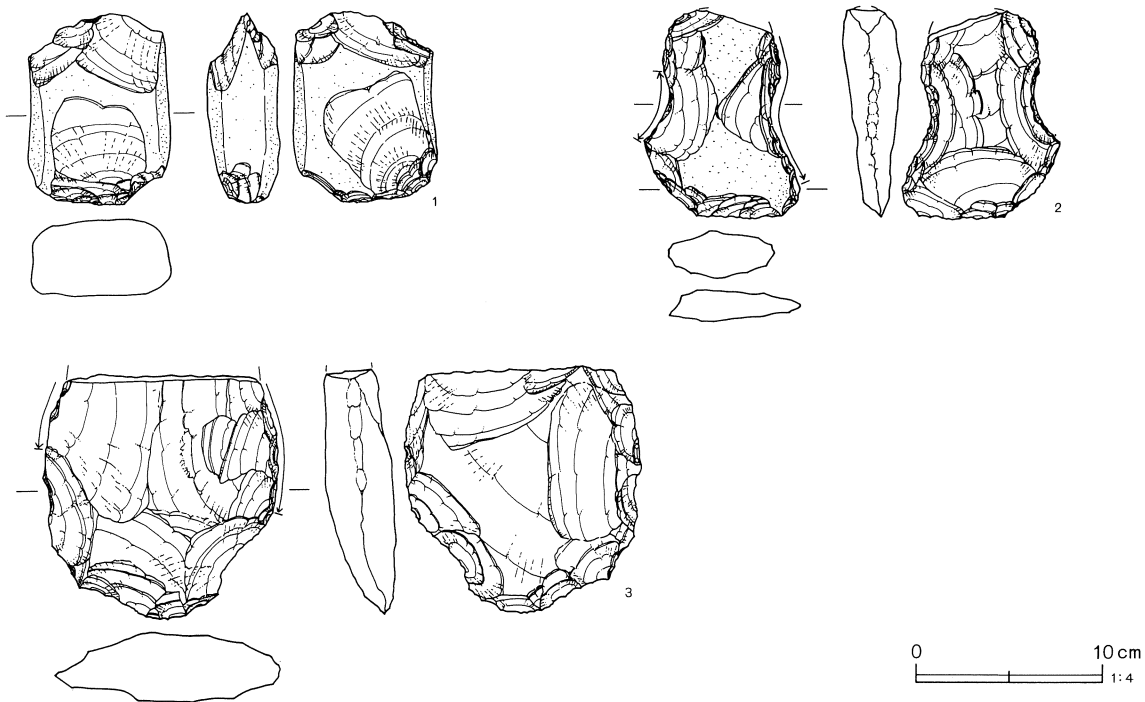
- 1 褐色土 礫を多量、焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量。
- 2 暗褐色土 礫・白色バミスを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 黄褐色土 礫・白色バミスを少量。

第2号土壌

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを少量。
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色バミスを微量。
- 3 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を微量。



第198図 石器



第198図 石器観察表

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	第2号溝	局部磨製石斧	(7.5)	5.4	3.0	(195.3)	粘板岩	
2	第4号住居跡	打製石斧	(8.5)	9.1	2.6	(310.1)	砂岩	
3	第2号溝	打製石斧	(8.1)	5.3	1.8	(120.6)	砂岩	

(2)古墳時代以降の遺構と遺物

a、住居跡

第2号住居跡(第199図)

AP-7グリッドで検出され、今回の調査区の中では一番西側に位置していた。住居跡の大半が調査区外に延びていたため、検出できたのは北壁部分だけであっ

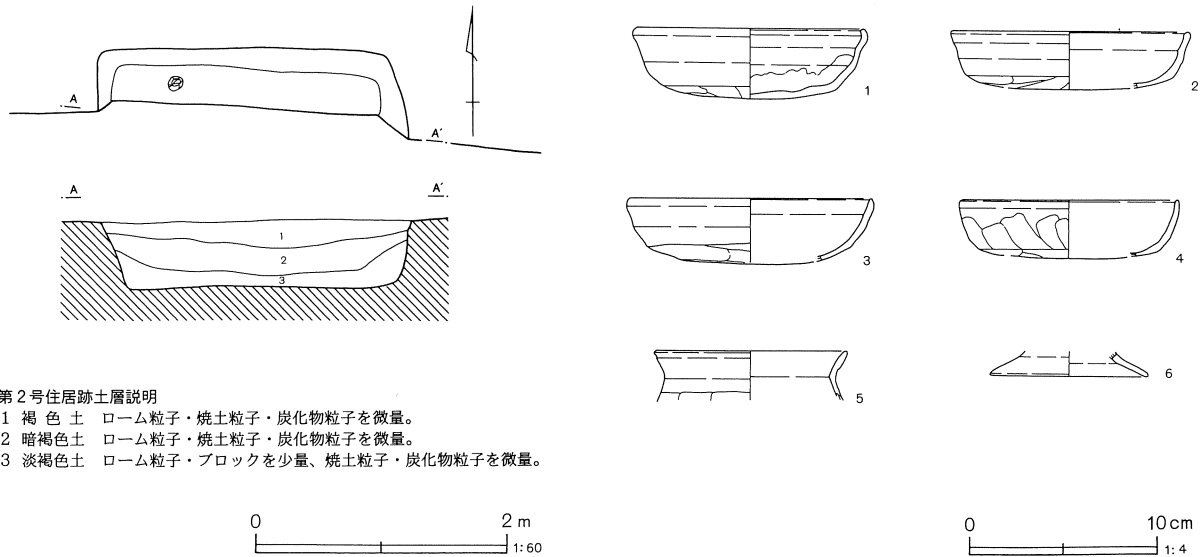
た。規模は東西2.42m、深さが0.50mであった。

覆土は3層からなる自然堆積であった。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

遺物は床面直上から1の土師器の坏が出土した。内面全体には漆状の物質が付着している。

第199図 第2号住居跡および出土遺物



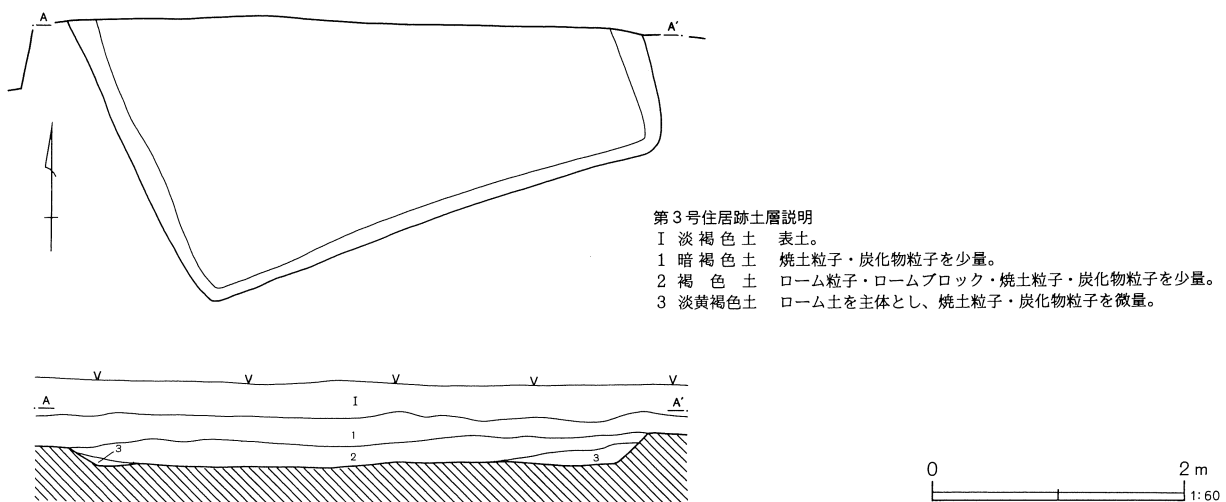
第2号住居跡土層説明

- 1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 淡褐色土 ローム粒子・ブロックを少量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

第199図 第2号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.0	3.7		BC'DH'	A	橙	95%	No.1 内面に漆状の物質が付着
2	坏	(12.4)			BC'DH'	A	黄橙	35%	覆土
3	坏	(12.8)			BC'DH'	A	黄橙	20%	覆土
4	坏	(11.4)			BC'DGH'	A	橙	20%	覆土
5	甕	(10.2)			C'DH'	A	橙	15%	覆土 内外面とも煤ける
6	甕			(8.4)	C'DH'	A	橙	20%	覆土

第200図 第3号住居跡



第3号住居跡土層説明

- I 淡褐色土 表土。
- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 3 淡黄褐色土 ローム土を主体とし、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

## 第3号住居跡(第200図)

AT-6グリッドで検出された。北側は調査区外に延びていたため、全体を調査することができなかった。

規模は東西4.18m、深さが0.23mであった。

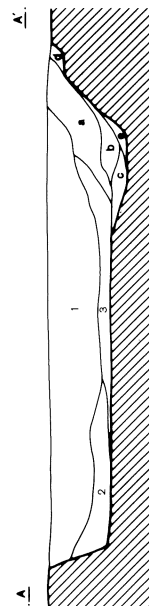
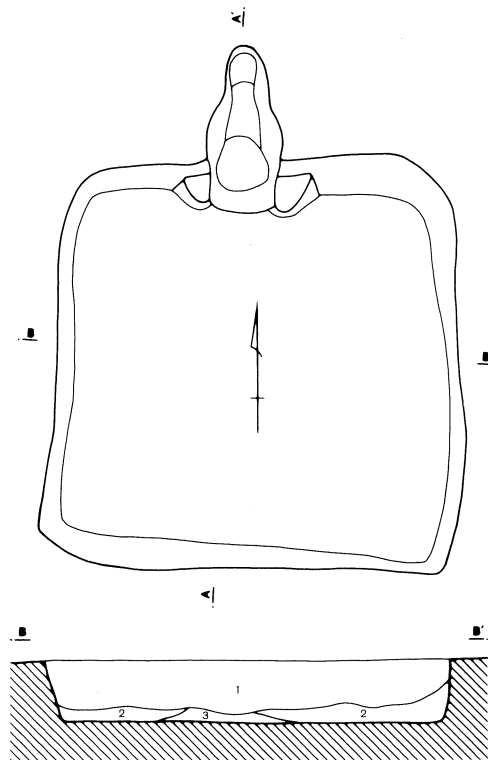
覆土は3層からなる自然堆積であった。

床面はほぼ平坦であった。

カマド・柱穴・貯蔵穴・壁溝は今回の調査では検出できなかった。

遺物は床面から土師器の甕の胴部片などが少量出土したが、図示できるものはなかった。

## 第201図 第4号住居跡



第4号住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 褐色土 ロームブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量、ロームブロックを微量。

0 2 m  
1:60

## 第4号住居跡(第201図)

AT-7グリッドで検出された。北へ約2mの所には第3号住居跡、東へ約12mには第5号住居跡が位置していた。規模は南北3.30m、東西3.26m、深さが0.53mであった。平面形態は方形をしていた。主軸方位はN-2°-Wである。

覆土は3層からなる自然堆積であった。最下層の3層には焼土粒子、炭化物粒子が多量に含まれていた。

床面は平坦であった。

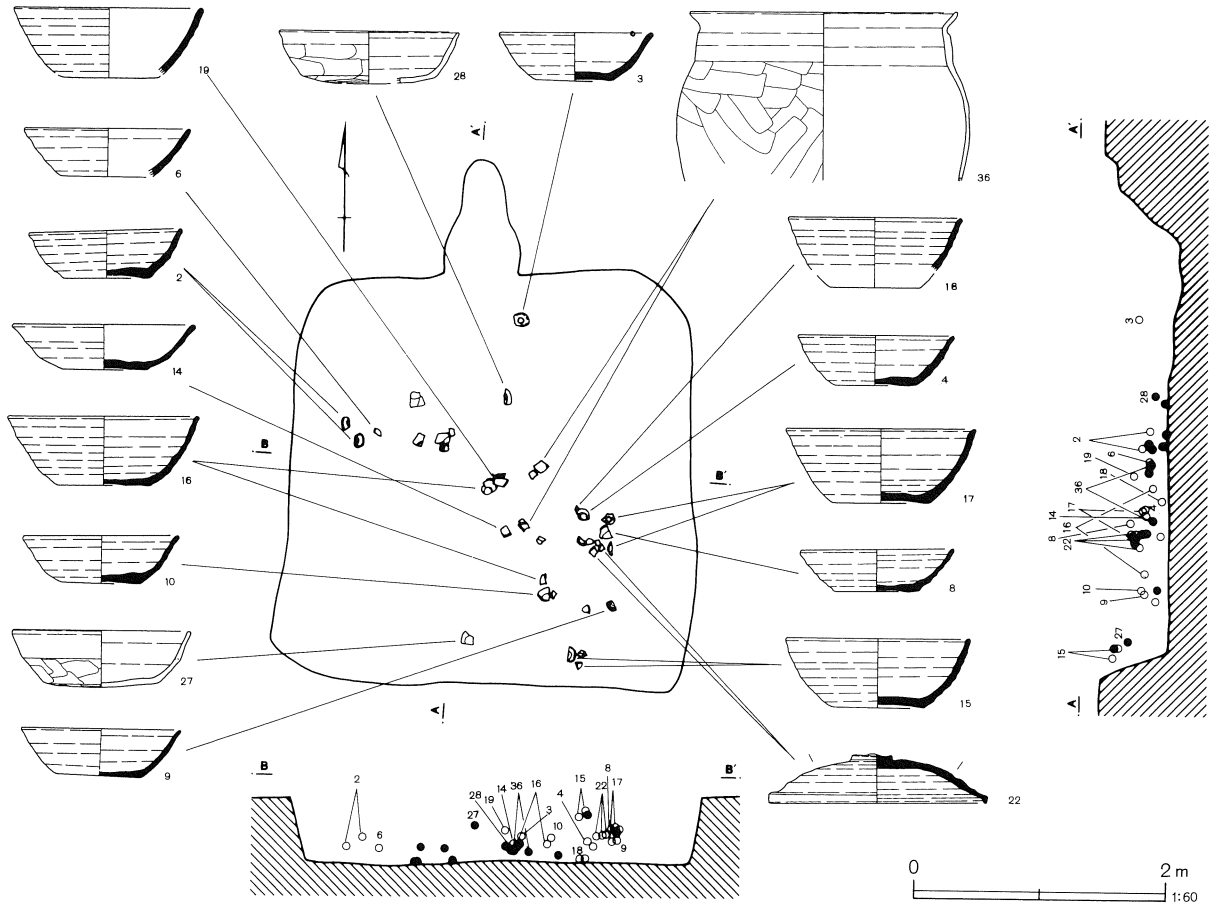
カマドは北壁やや西寄りに位置していた。袖は地山の削り出して、内側の壁面はあまり赤く焼けていなかった。燃烧部は壁外に長く伸び、浅い掘り込みがあった。最下層には厚さ5~25cmの灰層が認められた。燃

烧部奥壁は傾斜をつけて立ち上がり、ほぼ平坦に掘り抜かれた煙道へと至る。煙道は長さが28cmで、燃烧部に比べ短かった。遺物はほとんど出土しなかった。

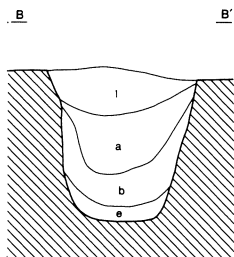
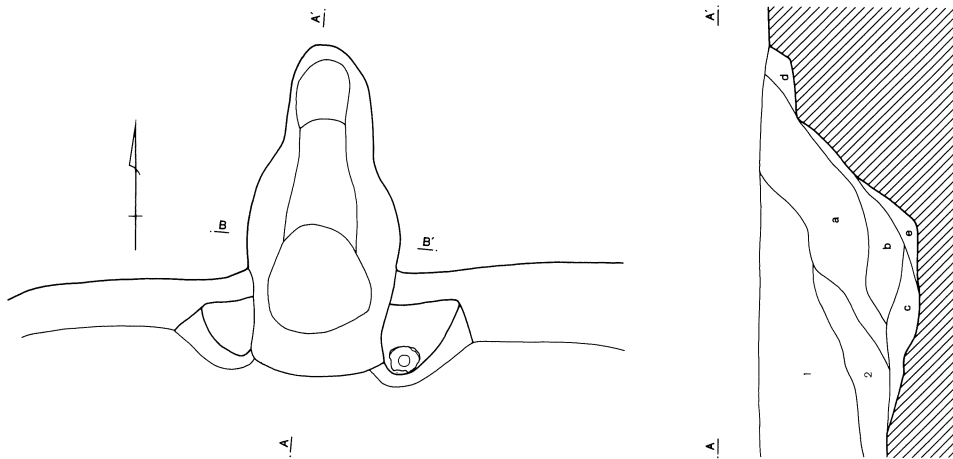
柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土1層中から多く出土した。出土状況を見ると大半の土器が住居跡の外側から流れ込んだ様相を示していた。そのことから遺構としては確認できなかったが、棚状施設の存在も考えられる。1~23は須恵器で、その内訳は末野産が9点、南比企産が14点である。末野産の須恵器は焼成があまり良くない。1の高台坏は底部外面に墨書が認められた。墨書は「願恵」もしくは「願思」と読める。また墨書の下に「×」のヘラ記号が認められる。南比企産。

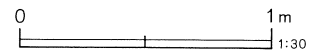
第202図 第4号住居跡遺物出土状況



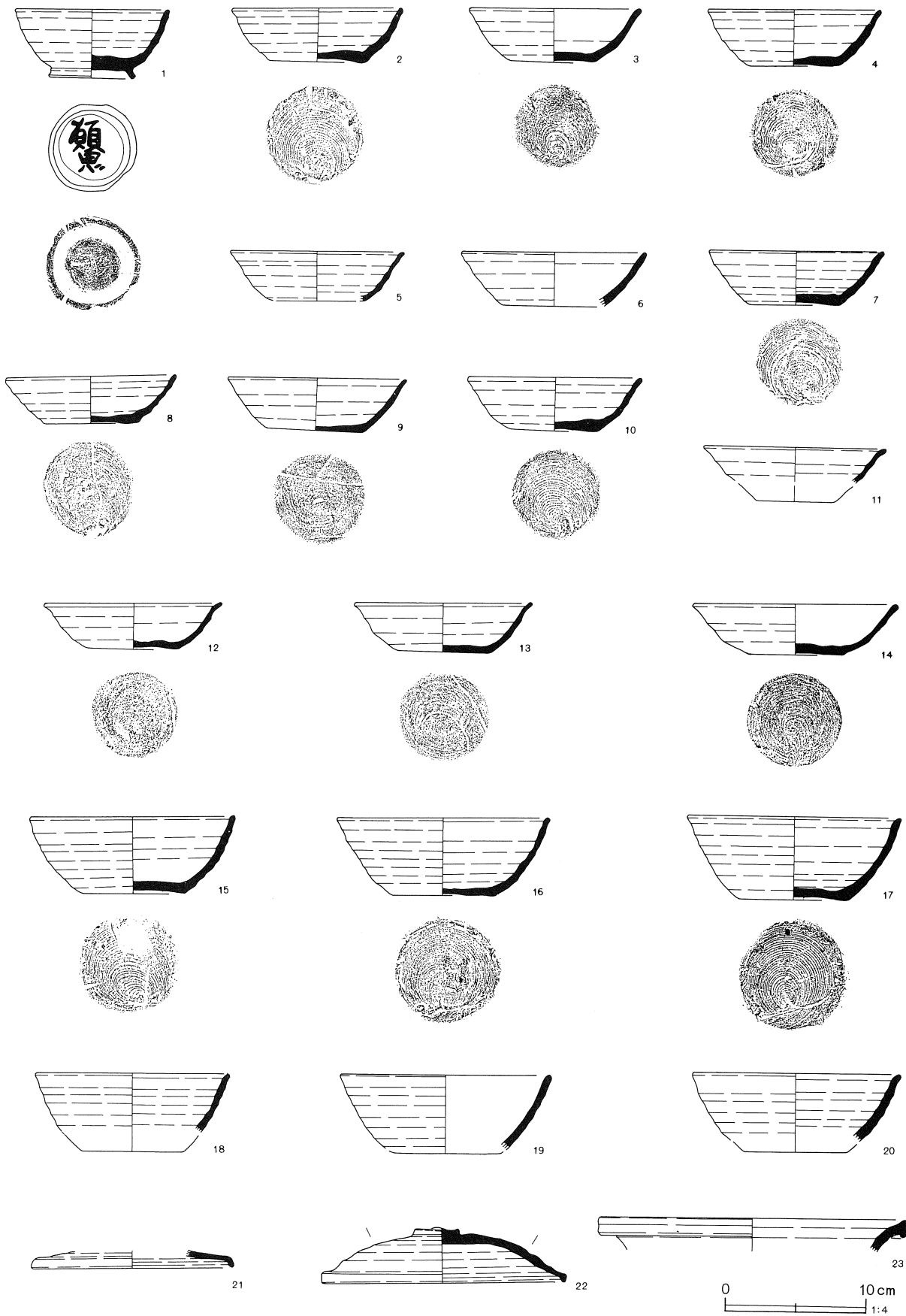
第203図 第4号住居跡カマド



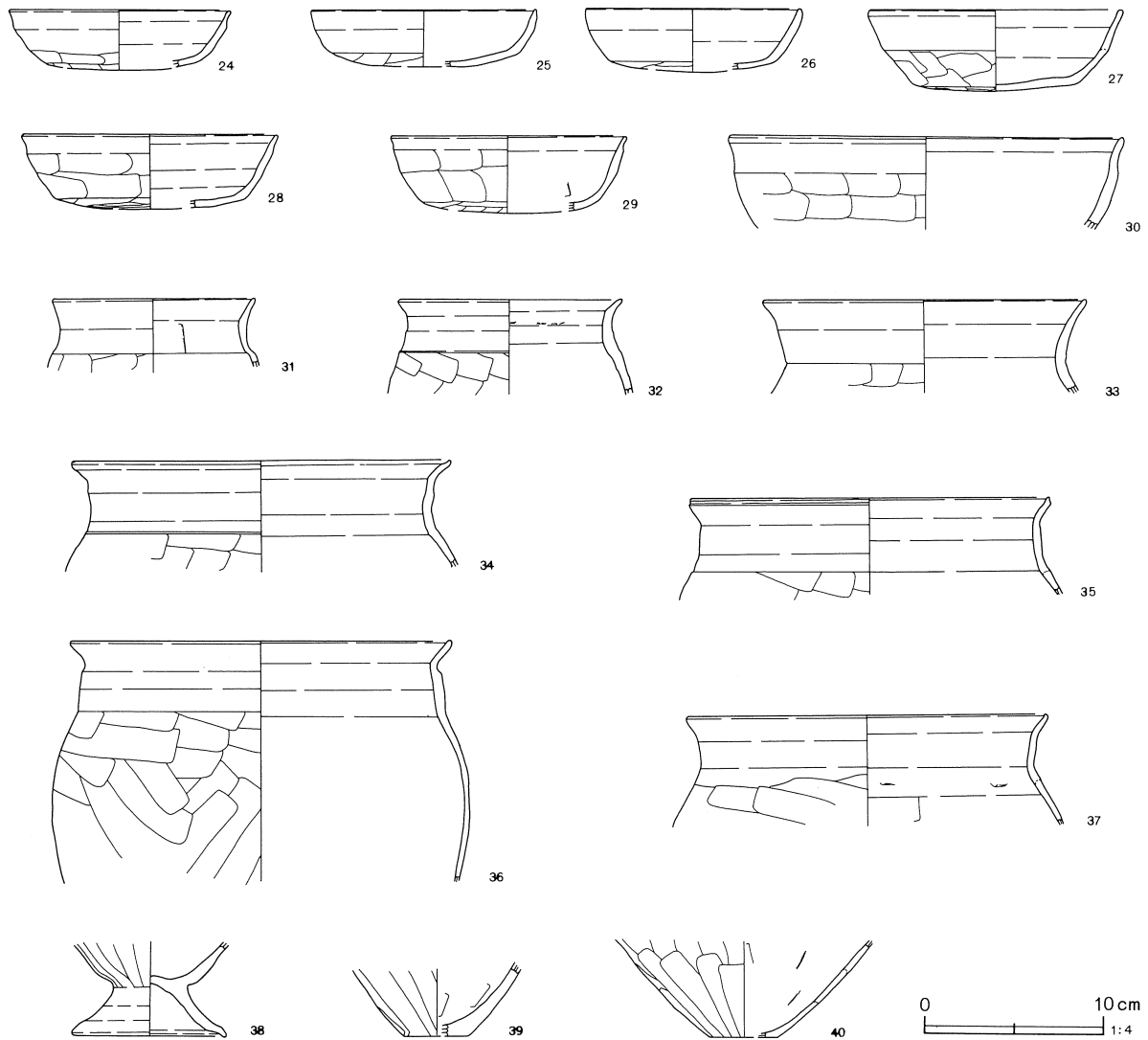
- カマド
- a 褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を多量（天井崩落土）
  - b 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量、ロームブロックを若干。
  - c 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を多量（灰層）
  - d 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を少量（使用時煙道口堆積土）
  - e 褐色土 ロームブロックを多量、焼土粒子・炭化物粒子を少量（掘り方）



第204図 第4号住居跡出土遺物(1)



第205図 第4号住居跡出土遺物(2)

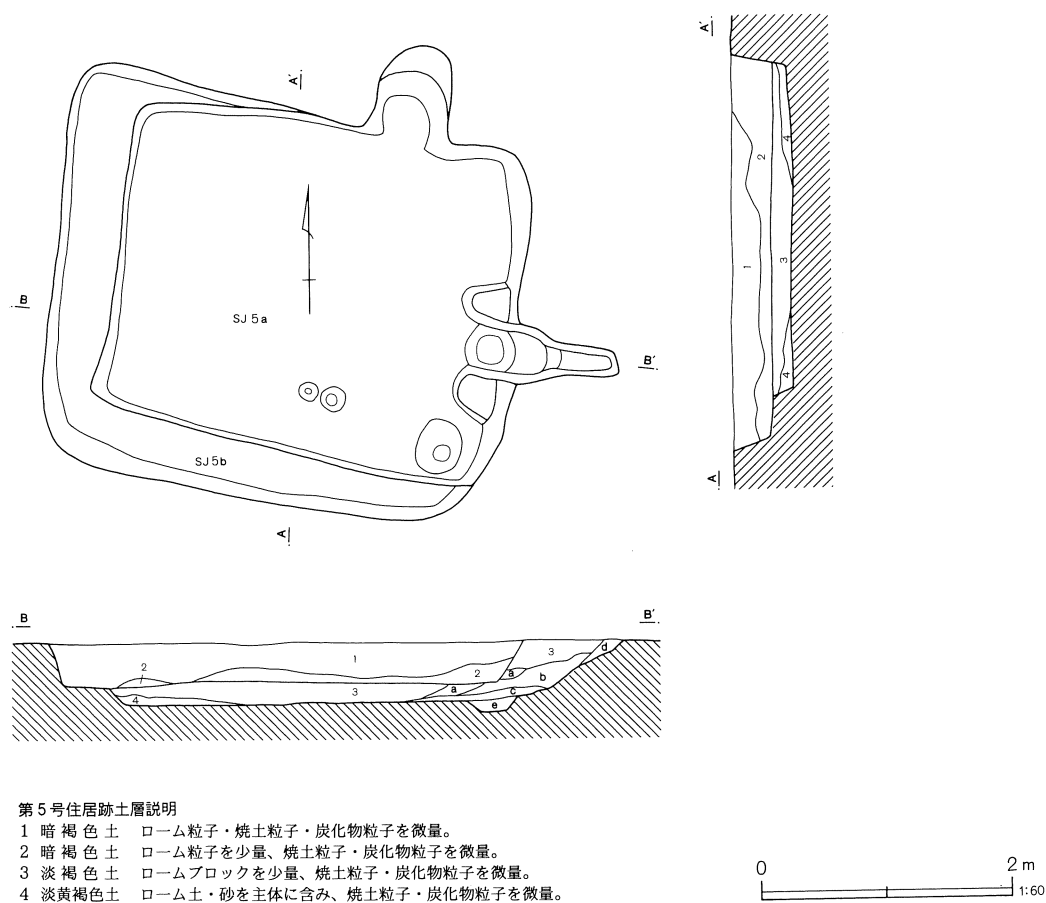


第204・205図 第4号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.8)	4.8	6.2	AC'H'	A	灰褐	35%	I区 底部に墨書、窠記号あり 南比企産
2	坏	12.0	3.8	6.9	AC'DI	A	灰	95%	No.4、5 南比企産
3	坏	12.1	3.7	5.8	AC'DEH'	A	にぶい褐	85%	No.1 南比企産
4	坏	12.2	4.0	6.0	AC'DGH'	D	浅黄橙	80%	No.18 南比企産
5	坏	(12.2)			C'H'I	A	灰白	35%	I区、II区、III区 末野産
6	坏	(12.9)	(3.8)	(7.0)	AC'DH'	A	にぶい褐	20%	No.6 南比企産
7	坏	12.1	3.8	6.3	ADEI	A	灰黒	100%	III区 南比企産
8	坏	11.9	3.4	6.6	C'EH'IJ	C	灰白	60%	No.21 末野産
9	坏	12.4	3.9	6.5	C'DEH'I	D	にぶい褐	80%	No.30 末野産
10	坏	12.0	3.8	6.1	C'DH'I	A	灰	70%	No.32 末野産
11	坏	(13.0)			C'H'I	A	灰	10%	II区、III区 末野産
12	坏	12.3	3.2	6.0	C'EH'IJ	D	にぶい褐	85%	No.29 末野産
13	坏	12.5	3.5	6.4	C'EH'I	D	にぶい褐	70%	II区、III区、IV区 末野産
14	坏	(14.2)	(3.5)	6.7	C'DH'	D	にぶい褐	35%	No.15 末野産
15	坏	14.2	5.4	7.1	AC'H'	A	灰	60%	No.24、35、37 火襷痕あり 南比企産
16	坏	14.9	5.4	7.3	AC'DH'I	A	灰	85%	No.13、33 南比企産
17	坏	15.0	5.8	7.5	ACEH'	A	灰	90%	No.1～3、20、23 南比企産

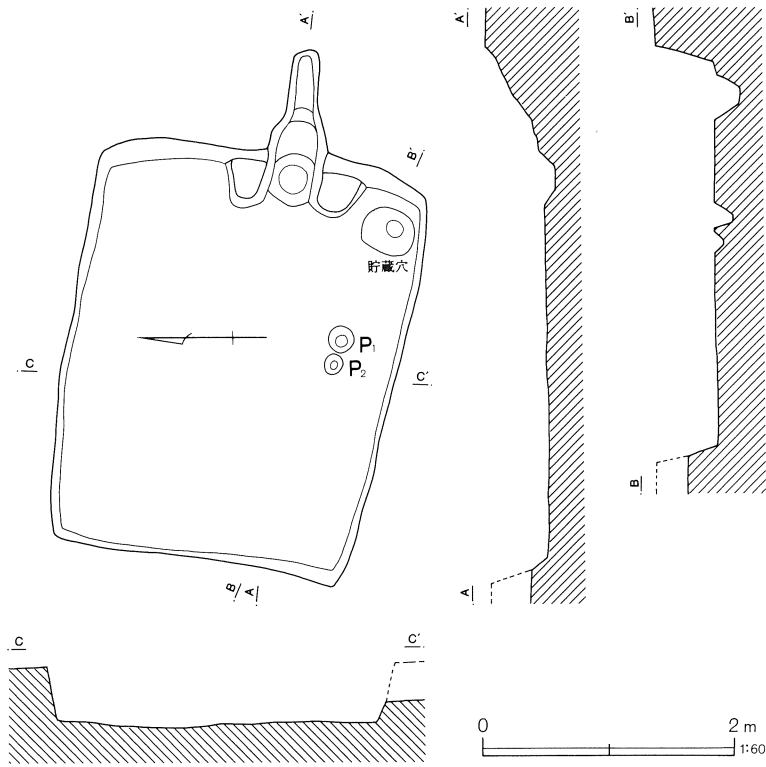
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
18	坏	(13.6)			AH'	A	灰	15%	No.19 南比企産
19	坏	(14.6)			ABC'DH'	C	灰白	35%	No.12 南比企産
20	坏	(14.6)			AC'DH'	A	灰白	20%	I区、II区 南比企産
21	蓋	(14.2)			AC'DH'	D	にぶい褐	10%	II区 南比企産
22	蓋	(17.2)	(3.9)		C'H'J	A	灰	50%	No.25~27 未野産
23	甕	(21.6)			AC'H'	A	灰黒	5%	II区 南比企産
24	坏	(12.2)			BC'DEH'	A	黄橙	45%	I区、II区
25	坏	(12.2)			BC'DFH'	A	橙	20%	覆土
26	坏	(12.0)			BC'DFH'	A	橙	15%	II区
27	坏	13.8	4.5		BC'DH'	A	黄橙	70%	No.38
28	坏	(13.8)	(4.1)		BC'DFH'	A	橙	35%	No.2
29	坏	(13.0)			BC'DFH'	A	橙	15%	III区
30	鉢	(22.0)			BC'DH'	A	橙	15%	II区 口縁部は煤ける
31	甕	(11.1)			BC'DEH'	A	橙	30%	II区
32	甕	(12.2)			BC'DFH'	A	橙	45%	II区
33	甕			8.6	BC'DGH'	A	黄橙	60%	I区、II区
34	甕	(17.8)			BC'DEH'	A	橙	15%	II区
35	甕	(20.0)			BC'DGH'	A	にぶい橙	20%	II区
36	甕	(21.0)			BC'DGH'	A	橙	20%	IV区
37	甕	(19.8)			BC'DGH'	A	黄橙	20%	覆土
38	甕	(21.0)			BC'DEH'	A	黄橙	25%	No.11、16
39	甕			(3.6)	C'DEH'	A	にぶい褐	30%	II区 外面は煤ける
40	甕			(3.8)	BC'DGH'	A	にぶい褐	20%	IV区

第206図 第5号住居跡

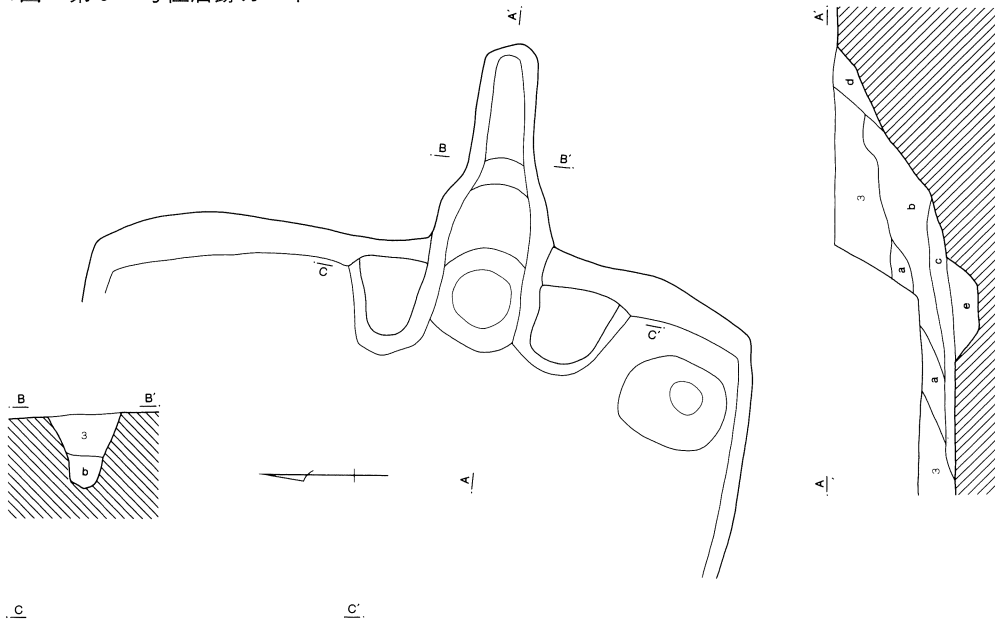




第207図 第5 a号住居跡

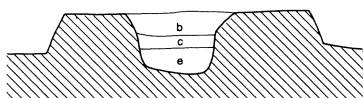


第208図 第5 a号住居跡カマド



第5 a号住居跡カマド

- a 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を微量。
- b 淡黄褐色土 ローム土を大量、焼土粒子・焼土ブロックを少量(天井崩落土)
- c 淡黄褐色土 ローム粒子を少量、焼土ブロック・炭化物粒子を微量(灰層)
- d 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を微量。
- e 淡黄褐色土 ローム土を多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量(掘り方)



0 1 m  
1:30

第5号住居跡(第206図)

AU-7、AY-7グリッドで検出された。今回の調査区内では一番東側に位置していた。本遺構は新旧のカマドと床面が検出されたため、拡張を行っていたことが判明した。以下、住居跡個別について述べる。

第5 a号住居跡(第207・208図)

拡張前段階の住居跡である。規模は東西3.34m、南北2.72m、深さが0.48mで、平面形態は東西に長い長方形をしていた。主軸方位はN-100°-Eである。

カマドは東壁やや南寄りに位置していた。袖は地山の削り出しで、内側の壁面は赤く焼けていた。燃焼部

は壁外に延び、掘り込みはなかった。最下層には厚さ4~7cmの灰層が認められた。燃焼部奥壁は開きながら立ち上がり、煙道に至る。煙道は長さ45cmで、きつい傾斜をつけて掘り抜かれていた。

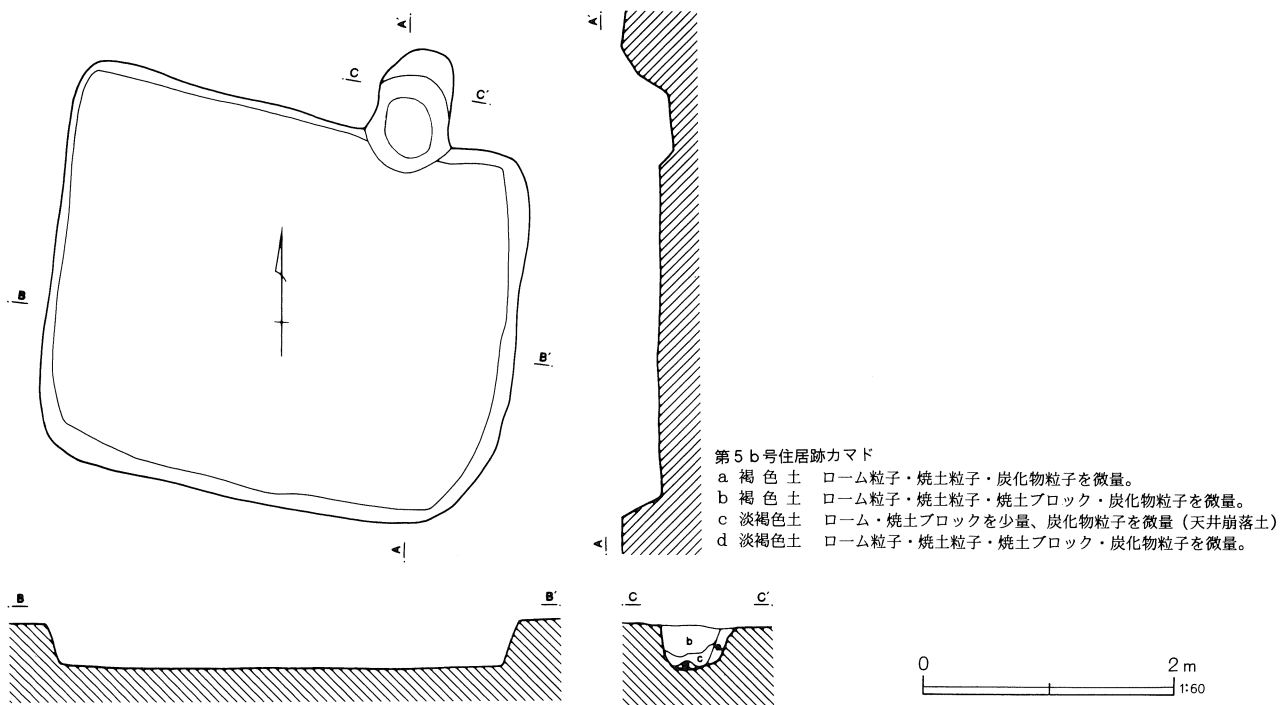
貯蔵穴は南東コーナー部分に位置していた。大きさは、長径42cm、短径35cm、深さが20cmであった。

ピットは南壁寄りに2本確認できた。何れも支柱穴になるかは確認できなかった。

壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土から僅かに土師器片が出土したが、図示できるものはなかった。

第209図 第5 b号住居跡



第5 b号住居跡(第209図)

第5 a号住居跡の拡張後の住居跡である。南壁と西壁を約40cm拡張し、床面を14~18cm埋めて構築されていた。またカマドを北向きに作り替えていた。規模は南北3.13m、東西3.78m、深さ0.30mで、平面形態は方形に近かった。主軸方位はN-10°-Eである。

カマドは北壁東寄りに位置していた。袖は確認できなかった。燃焼部は壁外に長く延び、壁面が僅かに赤

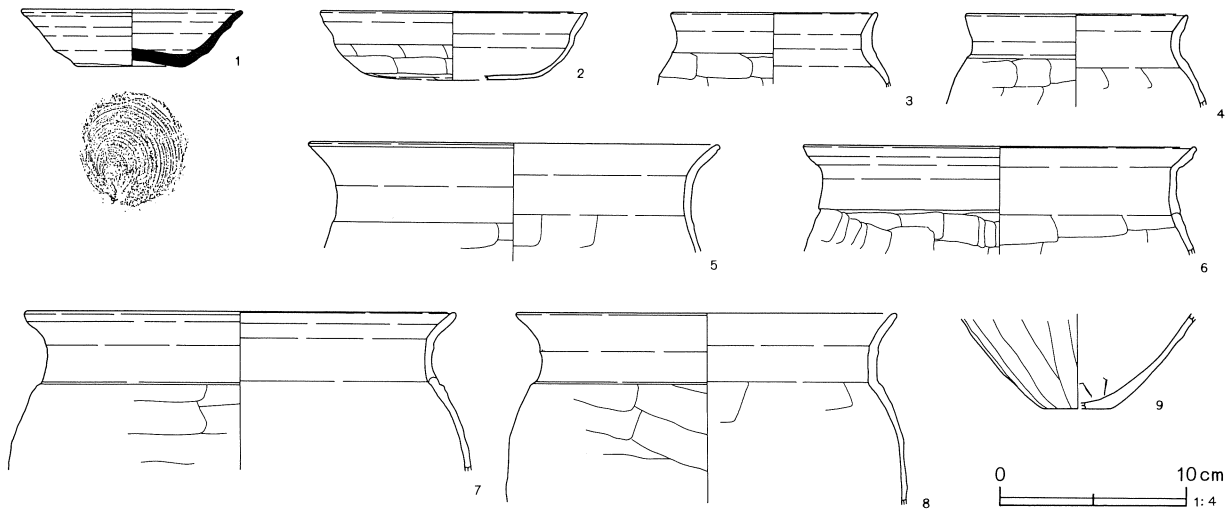
く焼けていた。灰層は認められなかった。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は覆土および床面から少量出土した。1の須恵器の坏は、底部の切り離しは回転糸切りである。末野産。4・5の土師器の甕は、器面に煤が僅かに付着している。どれも残存率は低い。

ほかに床面から刀子と覆土から鎌と棒状の鉄製品がそれぞれ出土した。

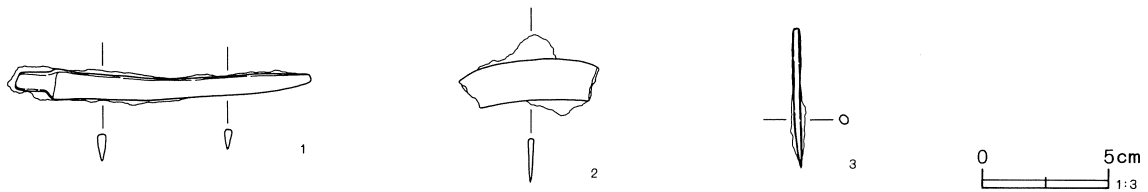
第210図 第5 b号住居跡出土遺物



第210図 第5 b号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.6)	(3.0)	5.8	C'H'IJ'	A	灰	40%	No.4 末野産
2	坏	(14.0)	(3.6)		BC'D	A	黄橙	20%	Ⅲ区、Ⅳ区
3	甕	(10.8)			C'DH'	A	黄橙	20%	Ⅳ区
4	甕	(11.8)			BC'DH'	A	にふい褐	20%	Ⅳ区 口縁部内外面は煤ける
5	甕	(20.7)			BC'DGH'	A	黄橙	15%	Ⅳ区 内面は煤ける
6	甕	(21.8)			BC'DFH'	A	橙	20%	Ⅳ区
7	甕	(23.0)			BC'DH'	A	にふい褐	10%	Ⅳ区
8	甕	20.2			BC'DH'	A	にふい橙	40%	Ⅳ区
9	甕			(3.8)	BC'DGH'	A	橙	25%	Ⅲ区

第211図 鉄製品



b、鉄製品(第211図)

城西遺跡東地区からは3点の鉄製品が出土した。すべて第5 b号住居跡からの出土である。

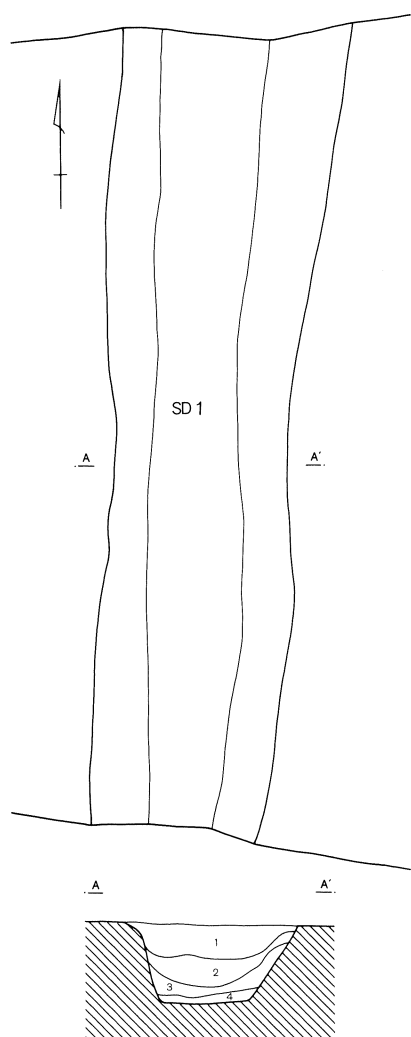
1は刀子である。ゆるやかな両関をもち、切先は丸くなっている。茎部の錆化が著しい。長さ11.9cm、刃部幅1.0cm、茎部幅0.7cm、峰の幅0.3cmである。

2は鎌で、刃部先端および柄装着部を欠損している

ため詳細は不明である。現存長5.7cm、刃部幅1.6cm、峰の幅0.2cmである。

3は用途不明の棒状鉄製品である。上端を欠損している。断面は円形で、先端はかなり尖っている。鉄製紡錘車の軸棒の可能性が考えられる。現存長5.6cm、径0.3cmである。

第212図 第1・2号溝



第1号溝土層説明

- 1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 淡褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 4 黄褐色土 ローム土を主体とする。

c、溝

第1号溝(第212図)

AP-6・7、AQ-6・7グリッドにかけて検出された。南北両側は調査区外に延びていたため調査ができなかった。幅1.77m、深さが0.62mで、南-北方向に走行していた。

遺物はまったく出土しなかった。

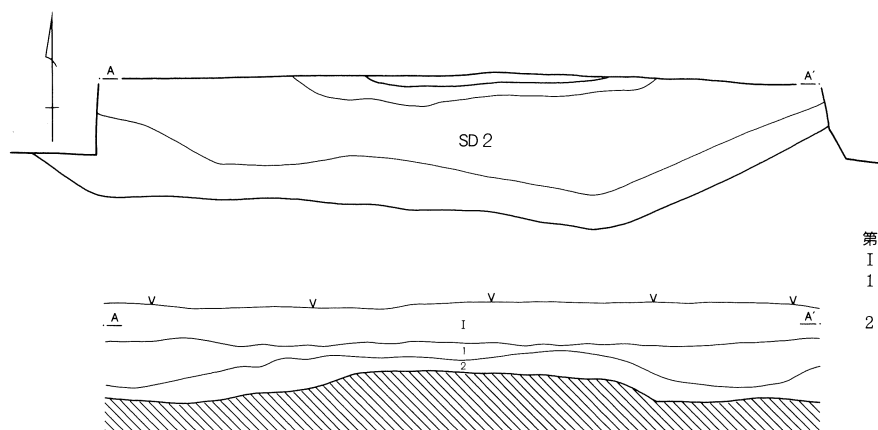
覆土の状態から近世に開削されたものと思われる。

第2号溝(第212図)

AR-6グリッドで検出された。北側は調査区外に延びていたため調査ができなかった。本遺跡内は木の本古墳群の西縁にあたるため古墳の周溝である可能性が考えられたが、覆土の観察からは古墳とは考えられなかった。幅1.14m、深さが0.18mであった。調査区壁から南東方向に走行したのち、北東方向に緩やかに屈曲していた。

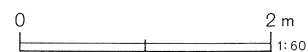
本遺構に伴う遺物は出土せず、覆土から縄文時代の石斧が2点出土した。

覆土の状態から近世に開削されたものと思われる。



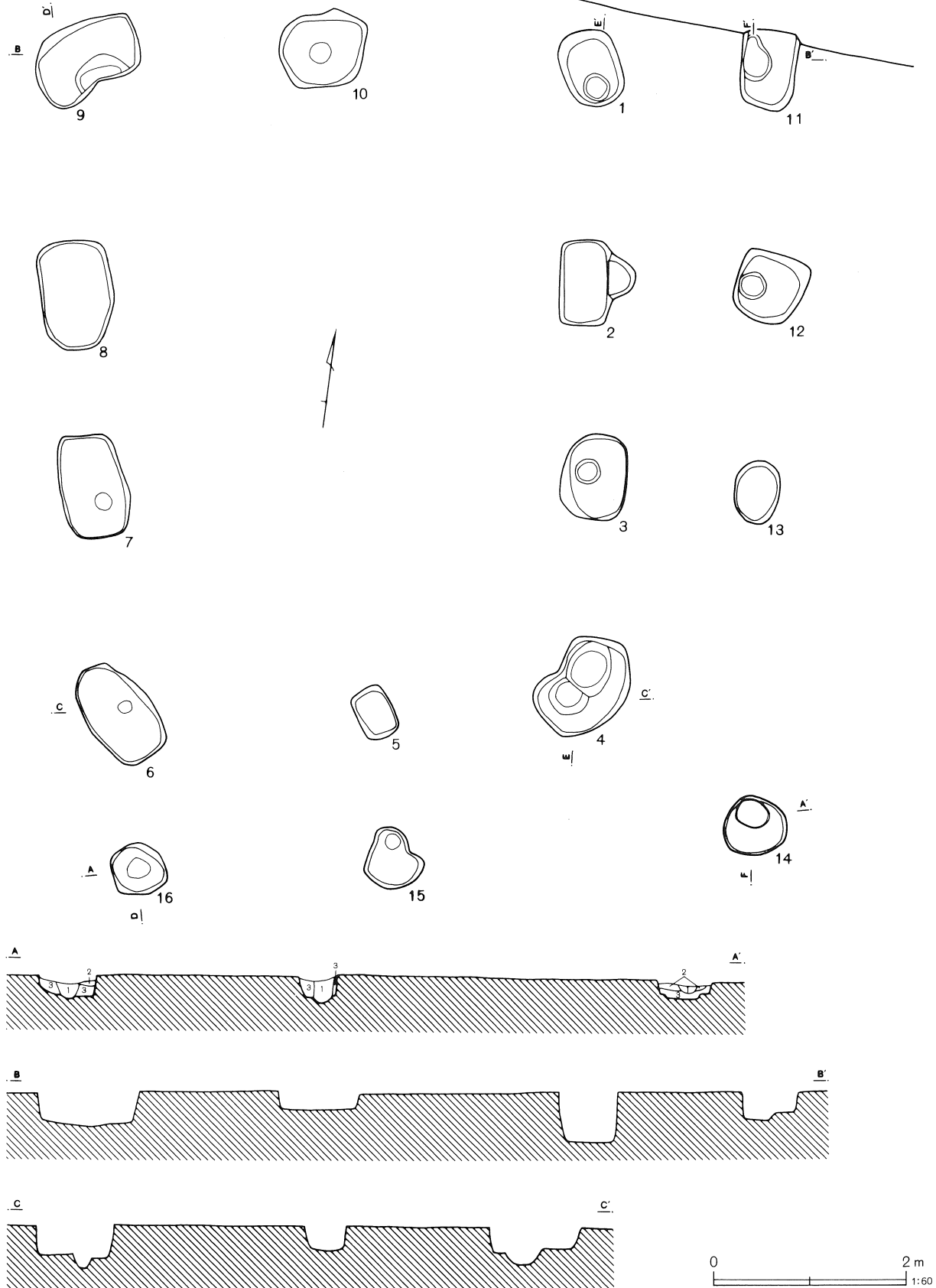
第2号溝土層説明

- I 淡褐色土 表土
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 2 淡黄褐色土 ローム土を主体とし、焼土粒子・炭化物粒子を微量。

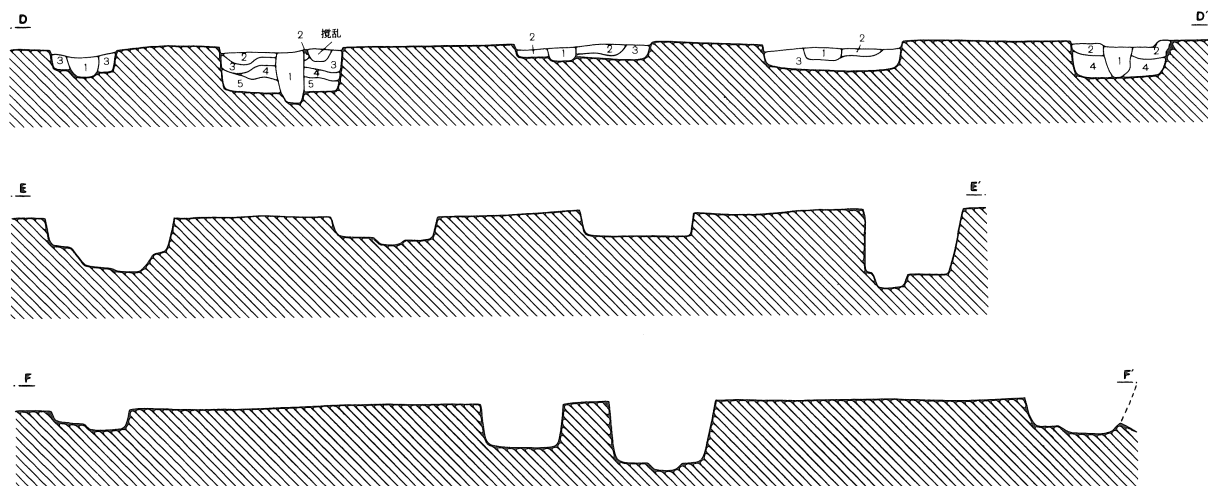


### 3 西地区の調査

第213図 第I号掘立柱建物跡(I)



第214図 第1号掘立柱建物跡(2)

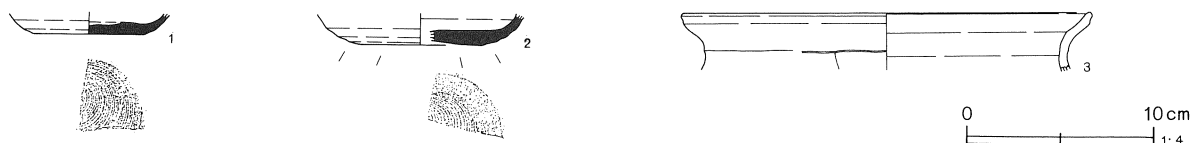


第1号掘立柱建物跡土層説明

- 1 褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量(柱痕)
- 2 淡褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 3 淡黄褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。
- 4 褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量。
- 5 淡黄褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子・炭化物粒子を微量。



第215図 第1号掘立柱建物跡出土遺物



第215図 第1号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏			(6.4)	AC'H'	A	灰	25%	ビット11
2	坏			(6.0)	G'H'J'	A	灰	25%	ビット9
3	甕	(21.5)			BC'DH'	A	橙	10%	ビット4

(1)平安時代の遺構と遺物

a、掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第213・214図)

X-2・3、Y-2・3グリッドで検出された。第2号掘立柱建物跡を切っていた。北側は排水溝の掘削のためP11の一部を壊してしまった。規模は3間×2間で、東面と南面に底柱を備えていた。身舎部分の規模は、桁行7.80m、梁行6.18mで、底部分を含めると南北9.14m、東西が8.05mであった。主軸方位はN-13°-Wである。

覆土の断面には柱穴の痕跡が16本すべてに確認できた。土層では1層が柱痕にあたる。

柱穴の平面形態は楕円形または長方形をしていた。身舎部分の柱穴の大きさは、径が38~115cm、深さが14~52cmとばらつきがあった。P1・4・6の隅の3本は他と比べ掘り方が深くなっていた。底柱は、径が47~82cm、深さが18~58cmを測った。柱の径は21~30cmで、円柱であった。柱間の距離は、桁行1.72~2.06m、梁行2.11~2.71mを測った。

遺物はP9・11から1・2の須恵器坏の底部破片とP4から3の土師器甕の口縁部破片が出土した。1は南比企産で、底部の切り離しは回転糸切りである。2は末野産で、底部周辺にヘラケズリが施される。

第2号掘立柱建物跡(第216図)

X-2・3、Y-3グリッドで検出された。第1号掘立柱建物跡に切られていた。規模は2間×2間で、桁行5.00m、梁行が5.03mであった。主軸方位はN-13°-Wである。

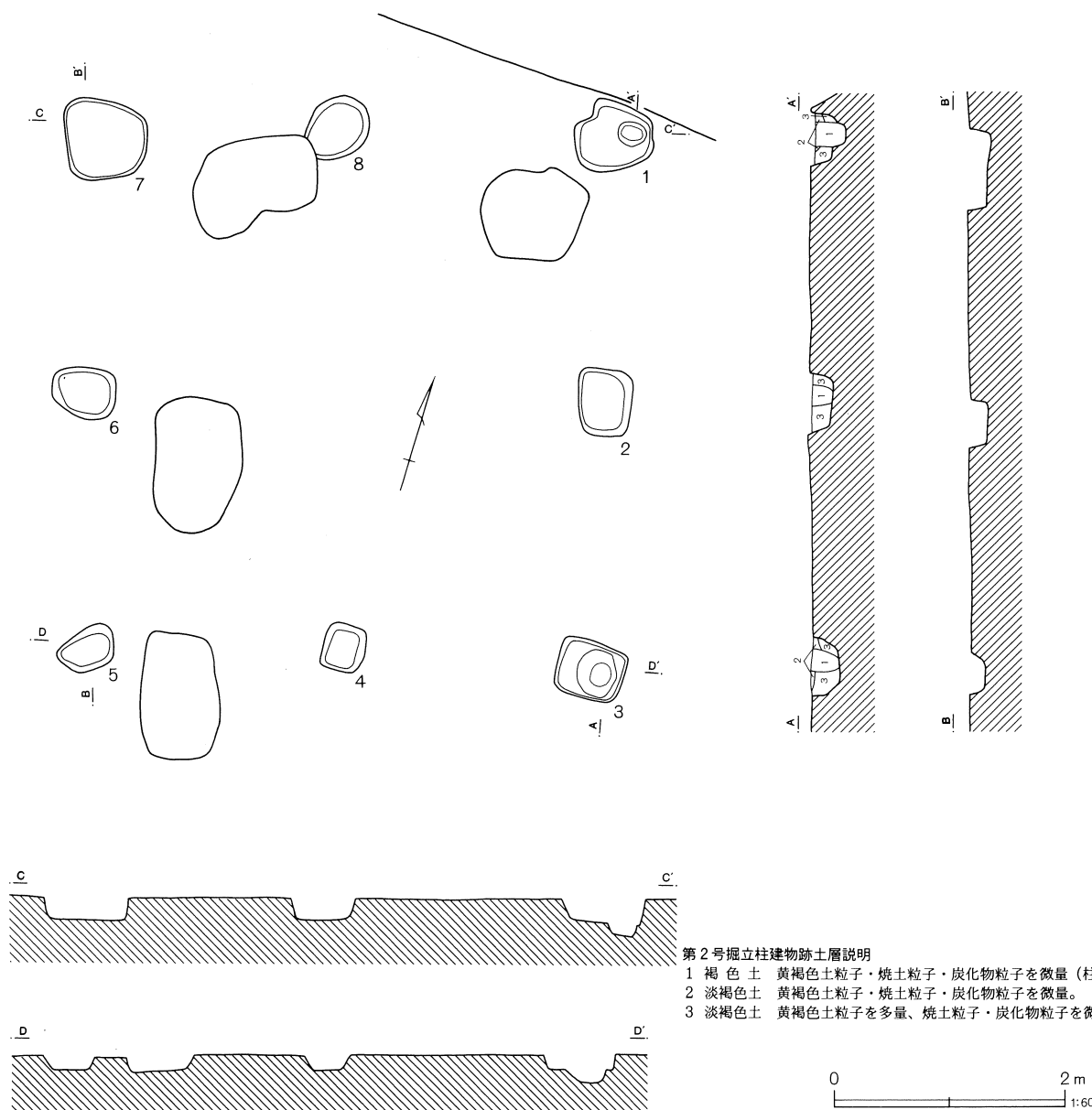
覆土の断面には柱穴の痕跡が8本すべてに確認できた。掘り方の埋土である3層中には地山の土である黄褐色土粒子が多量に含まれていた。

柱穴の平面形態は楕円形または長方形をしていた。

各柱穴の大きさは、P1が $68\text{cm} \times 62\text{cm} \times 31\text{cm}$ 、P2が $59\text{cm} \times 48\text{cm} \times 22\text{cm}$ 、P3が $60\text{cm} \times 51\text{cm} \times 24\text{cm}$ 、P4が $41\text{cm} \times 38\text{cm} \times 13\text{cm}$ 、P5が $53\text{cm} \times 35\text{cm} \times 13\text{cm}$ 、P6が $56\text{cm} \times 45\text{cm} \times 18\text{cm}$ 、P7が $72\text{cm} \times 69\text{cm} \times 20\text{cm}$ 、P8が $57\text{cm} \times 50\text{cm} \times 19\text{cm}$ で、東側の柱穴の掘り方がやや深くなっていた。柱の径は16~20cmで、円柱であった。柱間の距離は、桁行2.07~2.25m、梁行2.04~2.29mを測り、ほぼ同間隔であった。

遺物は出土しなかった。

第216図 第2号掘立柱建物跡



## 第3号掘立柱建物跡(第217図)

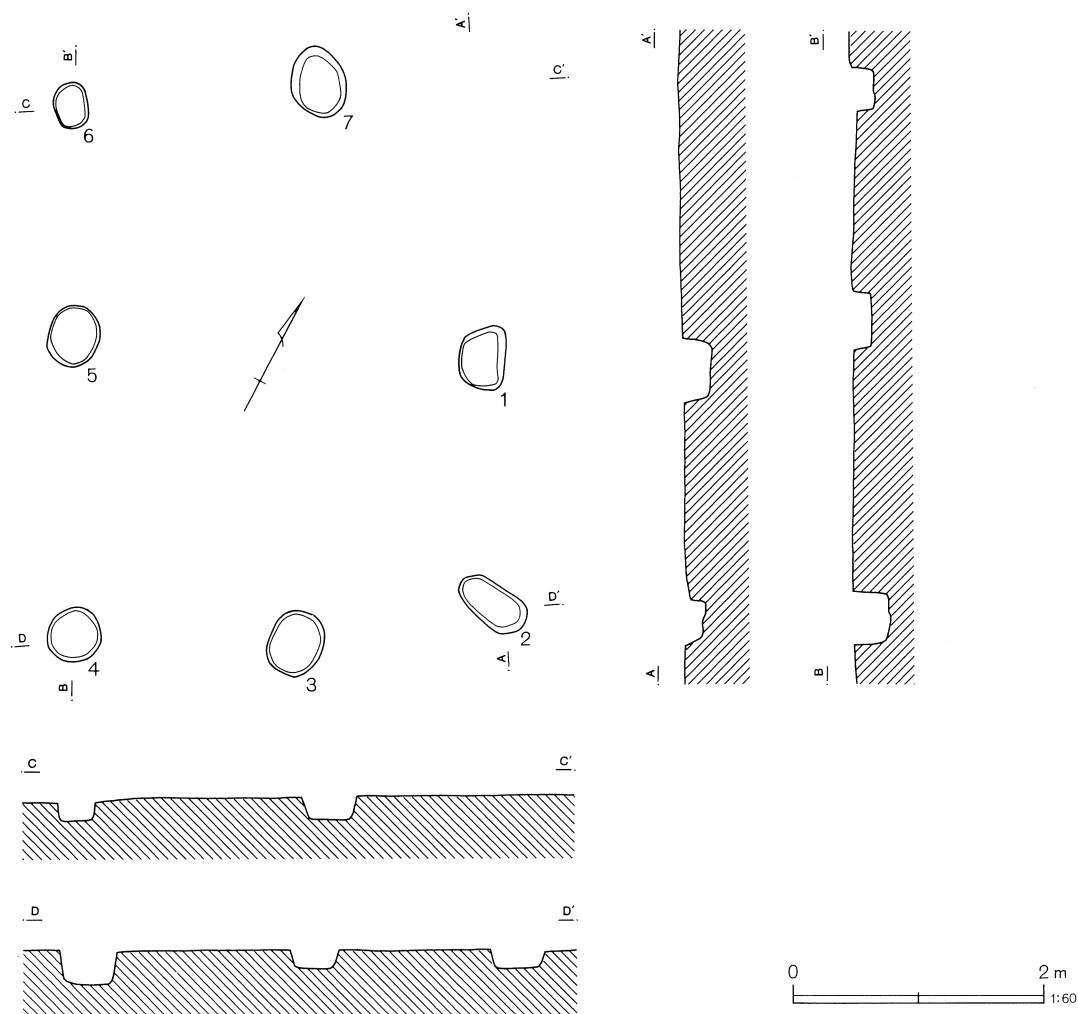
X-3・4グリッドで検出された。第1・2号掘立柱建物跡の南西側に隣接して構築されていた。北東の隅柱は確認できなかった。規模は2間×1間で、桁行4.61m、梁行3.87mであった。主軸方位はN-30°-Wである。

覆土の断面観察からは柱穴の痕跡は確認できなかった。覆土には黄褐色土ブロックを多量に含んでいた。

柱穴の平面形態は円形または楕円形をしていた。各柱穴の大きさは、P 1が $\phi$ 52cm×37cm×25cm、P 2が $\phi$ 61cm×30cm×14cm、P 3が $\phi$ 52cm×43cm×16cm、P 4が $\phi$ 43cm×43cm×27cm、P 5が $\phi$ 50cm×36cm×16cm、P 6が $\phi$ 38cm×28cm×20cm、P 7が $\phi$ 58cm×45cm×20cmで、底面はほぼ平坦に掘られていた。

遺物は出土しなかった。

第217図 第3号掘立柱建物跡



## b、ピット

城西遺跡西地区からはピットが計3本検出された。ピット1は単独で位置しており、性格は不明である。ピット2・3は調査区外に延びる掘立柱建物跡の柱穴の可能性が考えられる。

## ピット1(第218図)

X-3グリッドで検出された。規模は長径0.38m、短径0.20m、深さが0.08mで、平面形態は楕円形をしていた。

遺物は出土しなかった。



ピット 2 (第218図)

Y-3グリッドで検出された。規模は長径0.41m、短径0.30m、深さが0.05mで、平面形態は楕円形をしていた。

覆土の観察はできなかった。

遺物は出土しなかった。

ピット 3 (第218図)

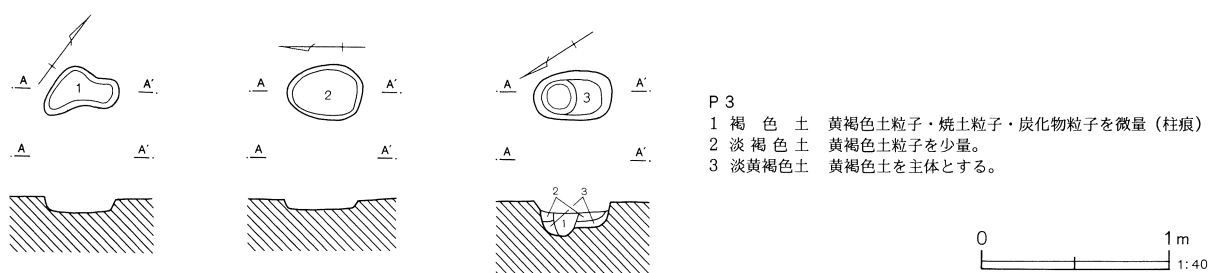
Y-3グリッドで検出された。規模は長径0.43m、

短径0.26m、深さが0.18mで、平面形態は楕円形をしていた。

覆土の断面には柱穴の痕跡が確認できた。土層では1層がそれにあたる。掘立柱建物跡の柱穴の可能性が考えられるが、西側は調査区外にかかるため確認することができなかった。

遺物は出土しなかった。

第218図 ピット

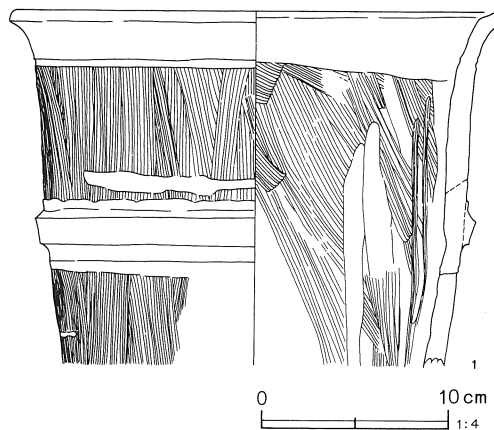


c、表採 (第219図)

ここに掲載した円筒埴輪は、城西遺跡東地区の調査区から南に約10m行った農道に露出していた。城西遺跡は木の本古墳群の西縁にもあたり、古墳が多数存在していた場所である。現在では墳丘を残す古墳は12基しか残存していない。本遺跡周辺の楡引台地上にも削平された古墳が数基存在する可能性が考えられる。

円筒埴輪は、外面は縦方向のハケメ、内面は斜位のハケメのち縦位のナデ調整が施される。突帯は台形をしている。焼成は良好で、色調は橙色である。

第219図 表採



## VIII 結語

### 1. 宮ヶ谷戸遺跡

宮ヶ谷戸遺跡からは以下の遺構が検出された。

古墳時代後期	住居跡	18軒
	土壙	4基
奈良時代	住居跡	6軒
平安時代	住居跡	20軒
	土壙	16基
	掘立柱建物跡	1棟
中・近世	土壙	12基
	溝	1条
時期不詳	住居跡	2軒

住居跡は総数46軒が検出された。調査区西の福川の旧河道の氾濫原にあたる地点では住居跡が散在しているが、調査区東の狭い微高地部分では重複が著しい。集落はこの微高地を中心に大きく南北に拡がりをもつものと思われる。

以下、時代別に遺構・遺物などについて述べることにする。

古墳時代後期の住居跡は18軒検出され、第2・4・5・9・14・16・18・19・21・22・23・25・26・31・32・34・41・46号住居跡が該当する。

今回調査を行った地点で一番古い住居跡は第14号住居跡である。出土遺物から模倣坏の出現前段階に位置付けられる。攪乱によって遺構の1/2が壊されていたため、カマドの有無を確認することはできなかった。貯蔵穴内から出土した外面にハケメ調整が施される壺は、その出土状況から貯蔵穴に器台として据え置かれたものと考えられる。

他に器台として転用された可能性があるものは、第14号住居跡の6、第16号住居跡の43の壺がある。

カマドの支脚でも、第16号住居跡の38の小形壺が転用されていた。第26号住居跡の4の台付鉢の脚部も支脚に転用されていた可能性がある。

古墳時代の須恵器は第16号住居跡から礎が1点出土しているのみで、他には破片さえ確認できなかった。

住居跡の主軸、カマドの方位については規則性が認められなかった。

奈良時代の住居跡は第6・7・8・10・20・42号住居跡の6軒が検出された。遺構は微高地部分の西に集中して検出された。古墳時代後期・平安時代と比べ遺構数は大きく減少する。

第10号住居跡はやや古相で、内面に暗文が施される坏・皿がまとまって出土した。

実測を行った須恵器は10点で産地別での内訳は、末野産5点(50%)、南比企産2点(20%)、不明が3点(30%)である。

住居跡の主軸は、第6・7・10・20号住居跡がN-42°~72°-Eの範囲内で、カマドを北東に向ける。

平安時代の住居跡は20軒が検出されており、第1・11・12・13・15・17・24・27・28・29・30・35・36・37・38・39・40・43・44・45号住居跡である。微高地部分の南東に集中しており、重複が激しい。

住居跡の主軸は、第40・45号住居跡の2軒を除くとN-43°~68°-Eの範囲内に全ておさまる。

実測を行った須恵器は110点で産地別での内訳をみると、末野産87点(79%)、南比企産18点(16%)、不明5点(5%)で、末野産の須恵器が全体の8割弱と圧倒的に多いことがわかる。第35・36号住居跡に限ると南比企産が全体の26%とやや突出している。

特筆される遺物として、線刻を有する石製紡錘車が第44号住居跡の覆土から出土した。側面に「田」の字が刻まれている。「田夫」の可能性が考えられる。

第3・33号住居跡の2軒は、遺物がほとんど出土していないため時期を決定することができなかった。

掘立柱建物跡は、遺物が出土していないため時期を判断しかねるが、第31号住居跡の覆土を壊して構築していることから概ね平安時代の所産と考えられる。

## 2. 根岸遺跡

根岸遺跡からは以下の遺構が検出された。

平安時代	水田跡	
中・近世	溝	24条

住居跡などの生活の痕跡は何等検出されなかった。

水田跡は調査区の西側で検出され、北に拡がりをもつものと思われる。南側には隣接する福川の旧河道が検出されたが、旧河道の堆積土を切って畦畔が形成されており、土層断面からも水田が作られた時には旧河道はすでに埋没していたことがわかった。

耕作面の直上には浅間B軽石層が堆積しており、浅間山の噴火により使用を断念せざるをえなかったものと推測される。

水田跡の時期は、軽石層が洪水などの影響で後世に

流れ込んだ可能性もないとは言いきれないが、概ね11世紀末から12世紀初頭のものと考えられる。

また本遺跡から北へ約800mの新屋敷東・本郷前東遺跡からも浅間山B軽石層に覆われた水田跡が検出されており、本遺構と同様の状況を示している。

溝については出土遺物も皆無で、時期および性格を明らかにすることはできなかった。その多くは用・排水路として機能していたものと思われる。また調査区東端で検出された11条の溝は、その形態から畑作による畝跡の可能性が考えられる。覆土の状態から本遺構は近世以降と推定される。

以上のことから根岸遺跡における低地部分には、福川の氾濫原のため居住するには適した場所ではなく、平安時代に至って農耕技術の発展と共に生産域として利用され始めたことが今回の調査で判明した。

## 3. 八日市遺跡

八日市遺跡で検出された遺構は以下の通りである。

### 【東地区】

平安時代	旧河道	
------	-----	--

### 【西地区】

縄文時代晩期	土壇	1基
古墳時代後期	住居跡	12軒
	土壇	2基
奈良時代	旧河道	
	住居跡	8軒
奈良～平安時代	土壇	8基
	道路跡	2ヶ所
中・近世	溝	5条
	(道路跡の側溝を含む)	
	建物跡	1棟
中・近世	溝	42条
	土壇	11基

本遺跡においては古墳時代後期の第3号住居跡から大量の遺物が出土したことが注目に値する。

実測を行った個体数だけでも394点(石・土製品を含む)を数えた。実測不可能であった遺物も考慮すると500個体を超える遺物が出土したことになる。出土遺物の大半は土師器であり、その他には須恵器2点、管玉1点、土製紡錘車1点、土玉1点、環状土製品1点が出土している。

第3号住居跡から出土した土器のうち実測個体総数390点における器種別での内訳は、以下の通りである。土師器坏が圧倒的に多く255点(65.4%)を数える。坏は模倣坏が主体を成す。大きさは、小形(口径が10cm未満)、中形(10cm以上13cm未満)、大形(13cm以上)のものがある。口縁部は内傾、直立、外傾するものがあるが、外傾するものがやや多くみられる。口縁部に段を有するものは1点も認められない。また口縁部と体部に明瞭な稜をもたず、体部が球形のもの(255～261)が僅かに認められる。坏を見る限りでは時間差はそれほどないものと思われる。

以下の器種においてはそれほど大きな個体差は見られない。椀が24点(6.2%)、高坏が30点(7.7%)、鉢が

19点(4.5%)、甕が33点(8.5%)、壺が12点(3.1%)である。さらに出土個体数が少ないものとして、埴が7点(1.2%)、甗が4点(1.0%)、支脚が1点(0.3%)、ミニチュアが3点(0.8%)、須恵器が2点(0.5%)ある。

その中で完形品の占める割合は、総数29点で、僅かに全体の7.4%である。このことから完形品の占める比率は極めて低いことがわかる。

同様の遺物出土状況を示した好例として本遺跡の北西約200mに位置する上敷免遺跡A区の第1号住居跡が挙げられる。

当遺構からも覆土全体にわたり大量の遺物が出土している。主な出土遺物は土師器で、他に須恵器の破片および土玉・白玉各2点がある。

実測土器の個体総数は311点を数え、その内訳は坏が155点(49.8%)で他を凌駕しており、椀が15点(4.8%)、高坏が57点(18.3%)、甕が51点(16.4%)、壺が

5点(1.6%)、甗が6点(1.9%)、鉢が14点(4.5%)、甗が1点(0.3%)、埴が2点(0.6%)、支脚が3点(1%)、手捏が1点(0.3%)出土している。

住居跡廃絶後において大量の遺物が出土する理由として、以下の3点のことが考えられる。

- ① 土器の貯蔵を目的としたもの
- ② 住居跡廃絶後における集落内祭祀
- ③ 住居跡廃絶後の遺物の遺棄(廃棄)

①については完形品が全体の約7%と極めて少量であり、僅かではあるが煤が付着している土器が出土していることから貯蔵を目的としたとは考えにくい。

②についても管玉・白玉などの石・土製品が出土しているものの積極的に祭祀といえる根拠がない。また祭祀に関連した遺物もないことから可能性は低い。

以上の結果も踏まえ、土器の残存率の低さや遺物の出土状況からも考えると本遺跡においては③の住居跡廃絶後の遺物の遺棄(廃棄)としての可能性が高い。

## 4. 城西遺跡

城西遺跡からは以下の遺構が検出された。

### 【東地区】

縄文時代前期	土壌	2基
中期	住居跡	1軒
古墳時代後期	住居跡	1軒
平安時代	住居跡	3軒
近世	溝	2条

### 【西地区】

平安時代	掘立柱建物跡	3棟
	ピット	3本

本遺跡で特筆されることとして平安時代の第4号住居跡から墨書土器が1点出土したことが挙げられる。

須恵器高台付坏の墨書土器が出土した第4号住居跡は、出土した遺物から9世紀後半と考えられる。遺物は須恵器を主体にして多量の土器が覆土の上層から出土した。墨書土器は正確な出土地点をおさえることができなかったが、カマドの右側周辺から出土した。

高台付坏は残存率35%で、胎土に白色針状物質、白色微粒子を含む。焼成は良好である。南比企産。墨書された部位は底部外面で、調整は回転ヘラケズリである。また墨書の下に「×」のヘラ記号も認められる。

墨書が不明瞭であるため2通りの読み方ができる。

- 1、「願思」(願ヒ思フ…願文の意味)
- 2、「願恵」(僧侶の名前カ?)

宗教関連の墨書土器としては「寺」「○○寺」「大佛」「僧」などが確認されているが、人名としての僧侶の名前が書かれた土器は全国を見渡しても類例がほとんど知られていない。

本遺跡の南西38mの場所には平安時代に創建されたと伝えられる瑠璃光寺が位置しており、墨書が僧侶の名前であったとするならば当寺との関連性が強く考えられる。

\*墨書土器の解釈については宮瀧交二氏に御教示を頂いた。

## 5. 八日市遺跡の道路跡について

### (1) 八日市遺跡の古代道路跡

八日市遺跡西地区から道路跡2ヶ所とそれに伴う側溝がそれぞれ検出された。

第1号道路跡は調査区の東側で検出された。硬化面は古墳時代後期の第8・12号住居跡の埋没後に構築しており、全長16.2m、最大幅が4.8mであった。直線を維持しながら南南東から北北西方向に走行し、非常に堅固で中央部分がやや高かった。

側溝は東西両端に検出されたが、後世に幾度となく掘り返されていたため道路跡に伴うものを明確にすることは困難であった。そのため、検出された硬化面の幅がそのまま当時の道路跡の幅であるかどうかは不確定である。第15号溝の覆土最上層には浅間A軽石層が認められている。

硬化面上には浅間B軽石層が認められ、砂礫と共に良く踏み固められていた。中央部分には波板状の痕跡が検出された。幅0.72～1.90m、長さが11.5mで、調査区外に延びていた。

第2号道路跡は調査区の西端で検出され、西側の側溝は調査区外にかかるため調査はできなかった。東側の側溝の土層堆積状態から、数度の整備・縮小が行われていたようである。

硬化面は全長17.2m、幅が4.1mで、第1号道路跡と同様に中央部分がやや高くなるものと思われる。走行方向は南からほぼ真北を向く。全体的に凹凸が著しく、砂礫・粘土で踏み固められていた。路肩部分には砂礫、中央部分には粘土が充填されている。粘土部分には小ピットを伴う浅い落ち込みが確認された。

その下にはもう一面の硬化面が検出され、柵列と考えられる小ピットが1列確認された。ピットはほぼ一直線に並び、覆土断面には柱穴の痕跡が認められた。

側溝は東側に3条の溝が検出された。道路構築段階には第45号溝が伴い、第47号溝がそれに続き、廃絶段階のものでは第46号溝が相当する。第45・46号溝の覆土上層からは浅間B軽石層が認められ、当時においては側溝としての機能を失っていたことが考えられる。

### (2) 県内で検出された古代の道路跡

#### d. 所沢市東の上遺跡 (第221・223図)

遺跡は武蔵野台地上に島状に突出する狭山丘陵の東側末端の八国山を南に臨む位置に立地する。丘陵直下には柳瀬川が流れ、遺跡の南で北東に流れを変えたのち荒川に合流している。

第36次調査で検出された道路跡は、全長が約100mで、両側に幅・深さ約1mの側溝を伴い、両側溝間心々距離が約12mであった。硬化面は幅3～5mで、波板状の痕跡が確認されている。

出土遺物等から、築造時期は7世紀第3四半期で、廃絶されたのが9世紀代と考えられている。

#### e. 川越市女堀II遺跡 (第221・223図)

本遺跡は、入間川と小河川である小畔川が合流する地点の狭い入間台地上に位置する。周辺には弥生～平安時代にわたる大規模集落である霞ヶ関遺跡など、弥生時代後期以降の遺跡が数多く知られる。

16世紀前半以前と考えられる幅8～9m、深さ約3m、全長420mの直線的な堀が検出されている。女堀と呼ばれるその堀の東側の土塁の下から、古代道路跡の東側溝と考えられる溝が検出された。群馬県境町の例が示すように、堀は西側溝であったものが後世に灌溉用水路として新たに掘削されたものであると考えられている。古代道路跡の側溝であった場合には、道路跡の硬化面の幅は10～12mで、東の上遺跡で検出されたものと類似する。

#### n. 熊谷市横間栗遺跡 (第222・223図)

遺跡は、利根川によって形成された沖積地である妻沼低地の自然堤防上に位置し、八日市遺跡から東に約4km、南東約2.7kmには式内社の奈良神社がある。

検出された道路状遺構は古墳時代に属する可能性が高いとされ、他に古墳時代の遺構としては前期の住居跡1軒、後期の溝7条が検出されている。

硬化面については確認されていないが、波板状の痕跡が検出されており、浅い溝状遺構の両側にピットがほぼ直線的に並んでいる。遺物は出土していない。

(3) 第1・2号道路跡の年代

道路跡から出土した遺物はほとんどなかった。出土した土器も小片であり、時期を判別できるものは皆無に等しい。実測可能であったのは第172図に示した須恵器甕の底部破片のみである。

1は硬化面上から出土しているが、第1号道路跡に伴うものかは判断しかねる。2は東側溝である第45号溝の覆土から出土した。何れも末野産である。

2点ともにおおよそ9世紀代と思われる。然しながら須恵器は小破片であり、また出土位置を正確におさえることができなかったため、道路跡の時期をこれらの土器だけで決定することは困難である。

次に、検出された遺構の配置及び重複関係から古代道路跡の時期を考えてみたい。

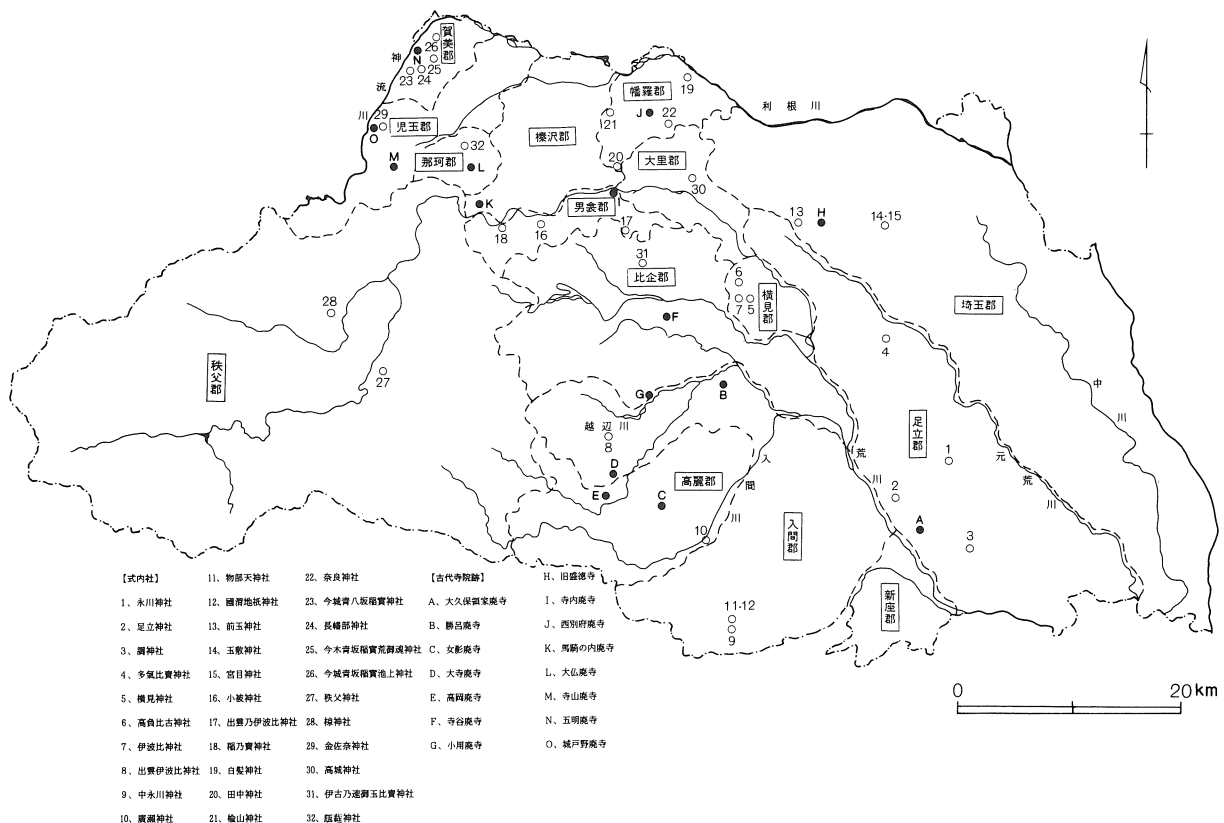
第1号道路跡は、硬化面が古墳時代後期の住居跡上に構築されており、第8・12号住居跡とも6世紀前半を下らないものと考えられる。そのことから築造時期は、住居跡の埋没期間を考慮に入れて、6世紀後半か

ら7世紀前半以降と考えられる。廃絶時期は、硬化面を覆う砂礫に浅間B軽石層が認められることから、天仁元(1108)年以降の12世紀前半代が与えられる。

第2号道路跡については、他の遺構との重複関係がまったくない。そのため、道路跡周辺の遺構の配置などから時期を考えてみたい。

本遺構の東側には帯金具(蛇尾)を出土した第18号住居跡など7世紀後半から8世紀前半にかけての住居跡8軒が集中している。古墳時代後期6世紀前半の住居跡は第11号住居跡が最も近接するものである。このことから住居跡の配置を考えた場合、本道路跡の築造時期は7世紀後半の前後の時期と考えられる。道路跡が先に築造されたのであったのなら、7世紀第3四半期を与えても良く、そうすると東の上遺跡で検出されたものとほぼ同時期に築造されたことになる。廃絶時期は、東側溝である第45・46号溝の覆土上層から検出された浅間B軽石層から、第1号道路跡と同様の12世紀前半代が与えられる。

第220図 埼玉県式内社・古代寺院跡分布図



第221図 道路跡関連の主な遺跡(1)



- |           |          |
|-----------|----------|
| a、武蔵国府推定地 | f、霞ヶ関遺跡  |
| b、武蔵国分寺跡  | g、若葉台遺跡  |
| c、將軍塚     | h、山田遺跡   |
| d、東の上遺跡   | i、宮町遺跡   |
| e、女堀II遺跡  | j、南比企窯跡群 |

式内社・古代寺院跡の記号は第220図に同じ

(4)第1・2号道路跡と東山道武蔵路

前項で述べた東の上遺跡と女堀II遺跡で検出された古代の道路跡は、東山道武蔵路と推定されている。

東山道武蔵路とは、武蔵国が東山道から東海道に所属替えとなる宝亀二(771)年以前の国府へと通じる官道である。本項では八日市遺跡で検出された古代道路跡と東山道武蔵路との関係について考えてみたい。

東山道の所属替えについての記述は『続日本紀』宝亀二(771)年10月己卯(27日)条に次のように書かれている。

「太政官奏す。武蔵国は山道に属すと雖も、兼ねて海道を承く。公使繁多にして祇供堪へ難し。其の東山の駅路は上野国新田駅より下野国足利駅に達す。此れ便道なり。而るに枉げて上野国邑楽郡より五ヶ駅を経て武蔵国に到り、事畢つて去る日、又同道を取りて下野国に向ふ。今東海道は相模国夷参駅より下総国に達す。その間四駅にして往還便近なり。而るに此を去り彼に就くこと損害極めて多し。臣等商量するに東山道を改めて東海道に属せば、公私所を得て人馬息することあらんと。奏可す。」

東山道武蔵路のルートについては本本(1992)や酒井(1993)が推定しており、両氏ともほぼ同一ルートを考えている。そのルートとは、武蔵国府—東の上遺跡—鎌倉街道堀兼道—(入間川)—女堀II遺跡—勝呂廃寺—(荒川)—奈良神社—妻沼町台—(利根川)—新田駅・足利駅を結ぶラインとなる。

以上のルートであったと仮定した場合、本遺跡で検出された古代道路跡はルートから西に約4kmずれていることになる。そのことから東山道武蔵路の支道としての可能性が考えられる。地図を眺めると、東山道武蔵路のルートと考えられている東松山市古凍(k)から分岐し、7世紀前半に位置付けられる寺谷廃寺(F)、式内社伊古乃速御玉比賣神社(31)、出雲乃伊波比神社(17)、最盛期が9世紀後半と考えられ「大里郡」と書かれた平瓦が出土した寺内廃寺(I)、そして荒川を渡河した地点には式内社田中神社(20)、さらに楡山神社(21)を抜け、群馬県伊勢崎に向かうほぼ一直線の道路

が認められる(第221・222図)。この道路に沿って古代の寺院跡・式内社が並ぶことから、古代道路跡の名残りとして考えることも可能であろう。

また陸上交通の重要な問題として、利根川を渡河する際には、近世にその利用が確認されている高島の渡しを使っていたであろうことが推測される。

#### (5)まとめ

以上のことから、八日市遺跡で検出された2本の古代道路跡は、おおよそ同時期に利用されていたことが考えられる。そのルートは、古代寺院跡・式内社が沿道に並ぶ東松山古凍(郡衙推定地)―上野国佐位駅間と推定した。現時点においては、本ルート上には古代道路跡が検出されていないが、これからの調査で発見される可能性が考えられる。荒川の北には標高77mの残丘状の小丘陵である観音山、さらに群馬県に目を向ければ標高1,828mの赤城山がほぼ正面に見渡すことができる。これらの山は、直線的な道路を計画・敷設するためには絶交の目標物であったに違いない。

推定したルートが、東山道武蔵路そのものなのか、あるいはその支道であるのかは、後者の可能性がかなり高い。それでは何故この道が必要になったのであろうか。宝亀二年以前の時代に東山道を利用するにあたっては、上野国新田駅なり下野国足利駅に出て武蔵国府に向かったものと思われる。しかし、国府に向かうために推定したルートを利用した場合には、新田駅を利用したよりも約6～7km程の近道になる。現代のように自動車でも利用すれば10分弱の距離でも、当時の人々にとってはとても長く感じられたことであろう。以上のことから、本遺跡で検出された古代道路跡の敷設目的は、武蔵国府に向かうためのショートカット(近道)と考えられる。

最後に、筆者の浅学のため道路跡が2ヶ所検出された問題点、道路の構造、古代の交通制度などについても十分な考察を加えることができなかつたことを反省したい。今後の古代道路跡調査の成果を踏まえて、改めて稿を草したい。

第222図 道路跡関連の主な遺跡(2)

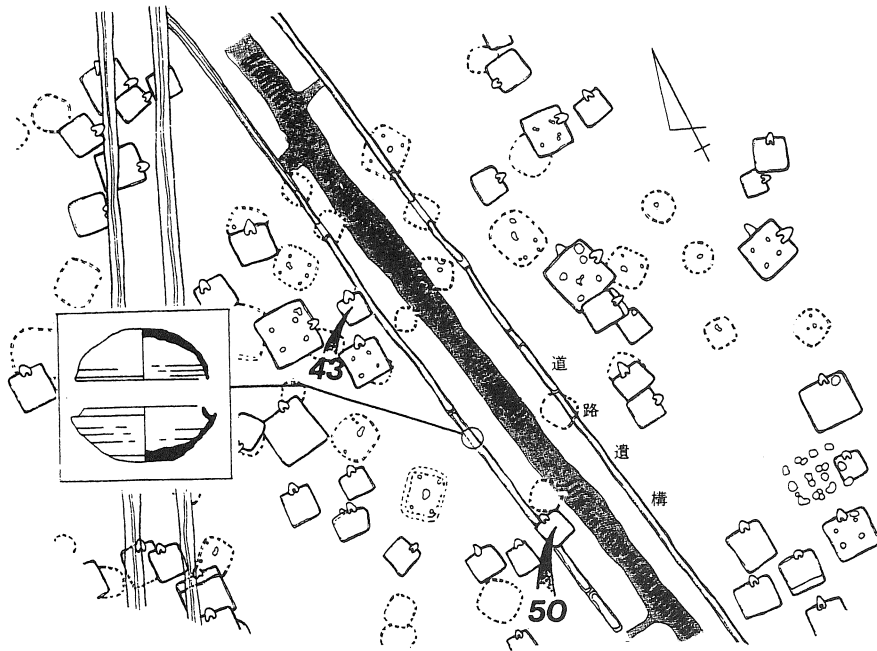


- |               |          |
|---------------|----------|
| k、古凍(比企郡衙推定地) | q、下新田遺跡  |
| l、山王裏遺跡       | r、市宿通遺跡  |
| m、大谷瓦窯跡       | s、大東遺跡   |
| n、横間栗遺跡       | t、矢ノ原遺跡  |
| o、寺井廃寺        | u、十三宝塚遺跡 |
| p、下原宿遺跡       |          |

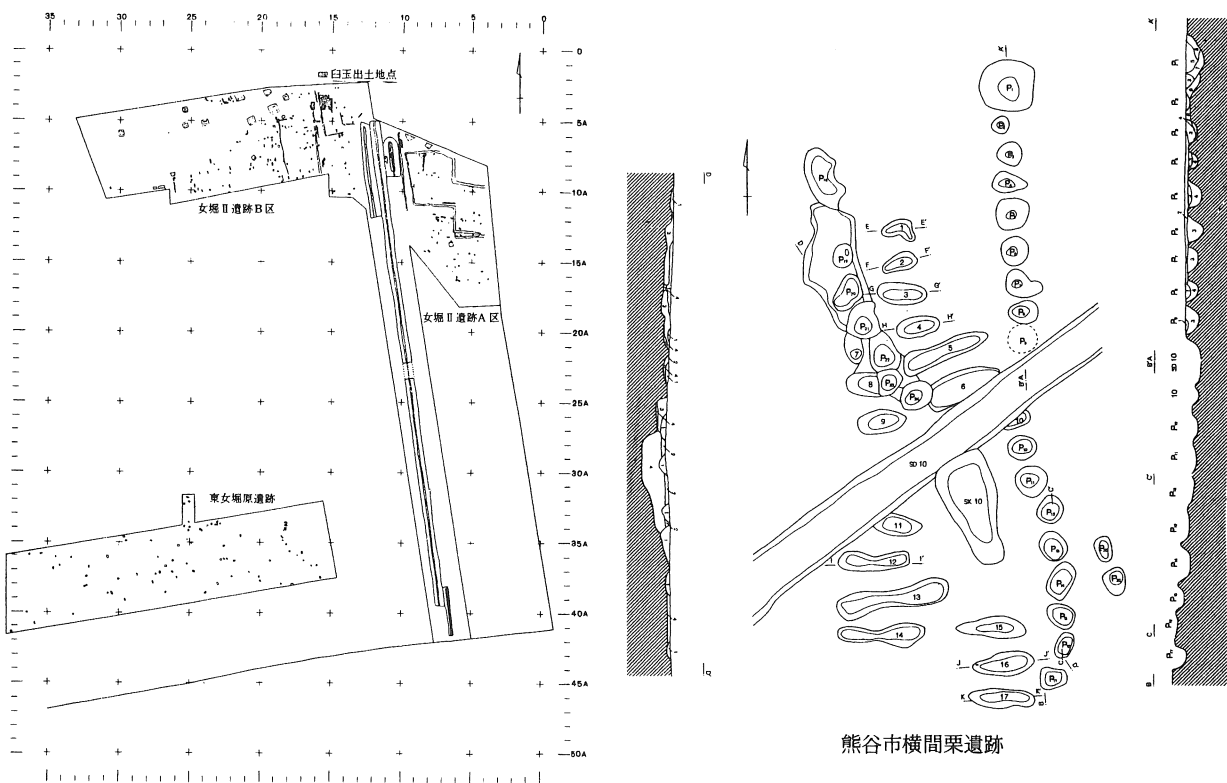
式内社・古代寺院跡の記号は第220図に同じ



第223図 道路跡集成図



所沢市東の上遺跡



川越市女堀II遺跡

熊谷市横間栗遺跡

# 引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸 一歴史時代編Ⅱ一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- 飯田充晴・粕谷吉一 1990 「所沢市東の上遺跡の調査」『第23回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他
- 飯田充晴 1994 「埼玉県東の上遺跡の道路遺構」『季刊考古学』第46号 雄山閣
- 磯崎 一 1985 『新田裏・明戸東・原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
- 伊藤廉倫・小宮俊久 1992 『下新田遺跡』 山武考古学研究所
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸 一古墳・歴史時代編Ⅰ一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 井上尚明 1994 『光山遺跡群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集
- 岩瀬 譲 1991 『樋詰・砂田前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第102集
- 岩瀬 譲 1995 『前・居立』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集
- 大屋道則 1994 『清水上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集
- 小笠原好彦1990 『勢多唐橋 橋にみる古代史』 六興出版
- 岡本健一・西井幸雄・金子直行 1993 『谷津・二反田・下向山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第131集
- 小野義信 1987 『女堀Ⅱ・東女堀原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第68集
- 川口 潤 1989 『本郷前東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集
- 木戸春夫 1995 『根絡・横間栗・関下』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集
- 木下 良 1985 「古代的地域計画の基準線としての道路」『交通史研究』第14号 交通史研究会
- 木下 良 1990 「日本古代道の道幅と構造 一発掘の成果から一」『交通史研究』第24号 交通史研究会
- 木下 良 1992 「下新田遺跡で検出された古代道路の性格について」『下新田遺跡』 山武考古学研究所
- 木本雅康 1992 「宝亀2年以前の東山道武蔵路について」『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会
- 黒坂禎二 1989 『上組Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集
- 黒坂禎二 1995 『向山／上原／向原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集
- 劔持和夫 1993 『ウツギ内・砂田・柳町』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集
- 劔持和夫 1995 『森下・戸森松原・起会』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第148集
- 古池晋禄 1992 『根岸遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
- 木暮仁一・須田 茂 1984 「上野国新田駅とその周辺の東山道について」『群馬県史研究』19 群馬県史編さん委員会
- 小島弘義 1986 「古代相模国出土の墨書土器」『國學院大學考古学資料館紀要』第2輯
- 埼玉県 1931 『埼玉縣史』第2巻 奈良平安時代
- 埼玉県史編さん室 1982 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』
- 埼玉県立歴史資料館 1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』
- 酒井清治 1993 「武蔵国内の東山道について 一特に古代遺跡との関連から一」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 国立歴史民俗博物館
- 坂井 隆 1989 「東山道・あずま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴 一上野地方の陸上交通史序論一」『研究紀要』6 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂爪久純・小宮俊久 1992 「古代上野国における道路遺構について」『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会
- 佐藤美智男1979 「五箇駅地名説の再検討 一古代東山道の一問題一」『交通史研究』第四号 交通史研究会
- 澤出晃越 1985 『上敷免遺跡(第2次) 上敷免北遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 早田 勉 1991 「浅間火山の生い立ち」『佐久考古通信』No.53 佐久考古学会

- 高橋 学 1986 「秋田県内出土の墨書土器集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号
- 瀧瀬芳之 1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
- 瀧瀬芳之・山本 靖 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 田名網宏 1969 『古代の交通』 吉川弘文館
- 田中広明 1992 『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 田中広明 1995 「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向 ―群馬・埼玉県を中心にして―」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 西口壽生 1993 「飛鳥・藤原宮跡の墨書土器」『月刊文化財』11月号 文化庁文化財保護部
- 西口正純 1994 『矢島南遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第149集
- 芳賀善次郎1978 『旧鎌倉街道 探索の旅』上道編 さきたま双書
- 服部敬史 1995 「東国における古墳時代須恵器生産の特質」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 平川 南 1991 「墨書土器とその字形―古代村落における文字の実相―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 国立歴史民俗博物館
- 平川 南 1993 「土器に記された文字」『月刊文化財』11月号 文化庁文化財保護部
- 堀口万吉・角田史雄・町田明夫・昼間 明 1985 「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の『噴砂』について」『埼玉大学教養部紀要（自然科学篇）』第21巻
- 堀口万吉 1986 「埼玉県北部でみられる古代の噴砂について」『歴史地震』第2号 東京大学地震研究所
- 村田章人 1993 『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集
- 森田 悌 1988 『古代の武蔵』 吉川弘文館
- 森田 悌 1992 『古代東国と大和政権』 新人物往来社
- 山川守男 1995 『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集
- 吉沢幹夫 1984 「宮城県出土の墨書土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第10巻

# IX 附編

## 1、埼玉県深谷市八日市遺跡の火山灰分析

古環境研究所

### 1. はじめに

八日市遺跡西地区における発掘調査では良好な土層断面が作成されるとともに、テフラ層が検出された。そこで地質調査を行い本遺跡の土層の層序についての記載を行うとともに、テフラ検出分析を合わせて行ってすでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの検出同定を試みることにした。調査分析の対象とされた地点は、第45号溝、第46号溝、第15号溝、第1号道路跡硬化面の4地点である(第1図)。

### 2. 土層の層序

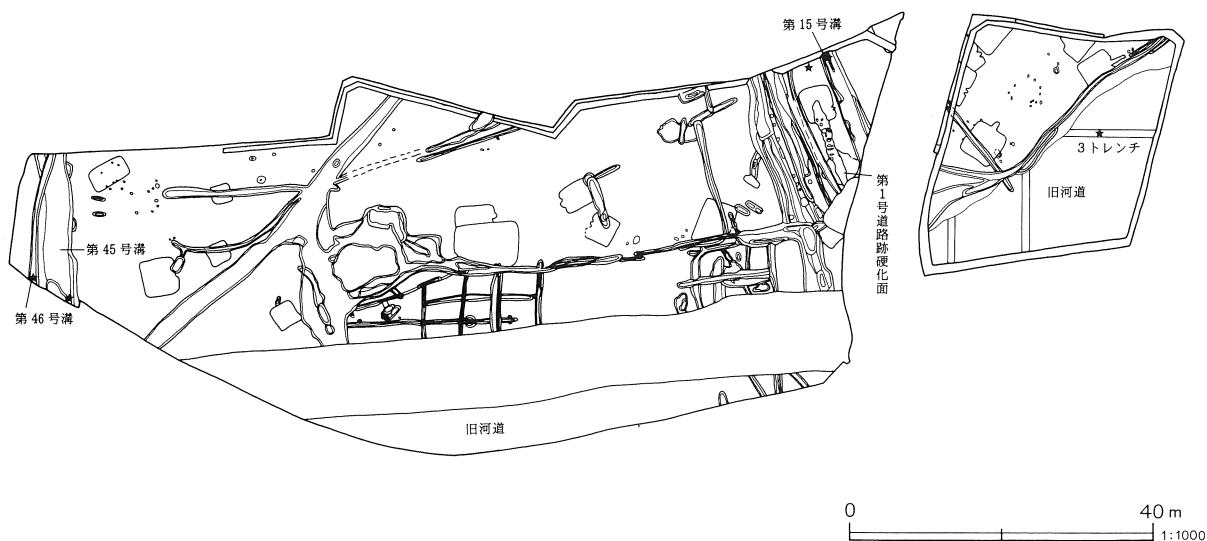
#### (1) 第45号溝

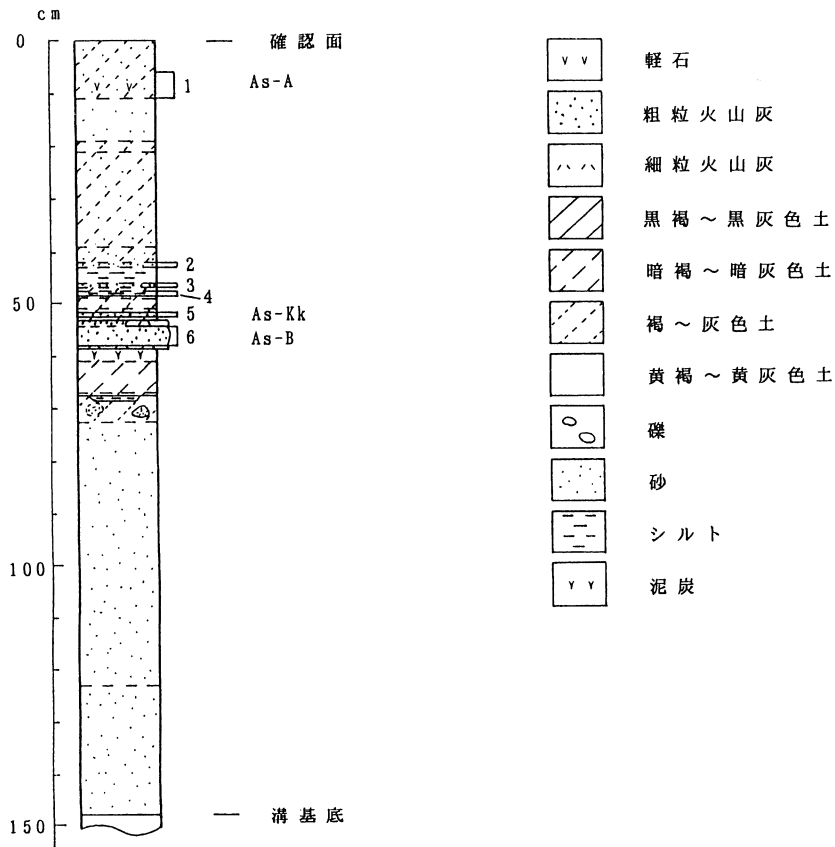
この溝の覆土は、下位より灰色砂層(層厚23cm)、淘汰の良い灰色砂層(層厚51cm)、黄灰色砂層のブロック混じり灰色土(層厚4cm)、黄白色シルト層(層厚0.3cm)、暗灰色土(層厚0.5cm)、黄灰色砂層のブロック混

じり暗灰色土(層厚6cm)、黒泥層(層厚2cm)、成層したテフラ層、暗褐色土(層厚0.2cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚0.5cm)、黒褐色土(層厚0.1cm)、褐灰色土(層厚2cm)、黒色土(層厚0.3cm)、黄白色シルト層(層厚0.4cm)、黒灰色土(層厚0.5cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚0.8cm)、細かく成層した灰色シルト層(層厚3cm)、褐色砂質土(層厚0.8cm)、灰色粘質土(層厚3cm)、砂混じり灰色土(層厚18cm)、砂混じり褐灰色土(層厚2cm)、黄灰色土(層厚8cm)、白色軽石混じり灰色土(層厚11cm、軽石の最大径2mm)の連続が認められた(第2図)。

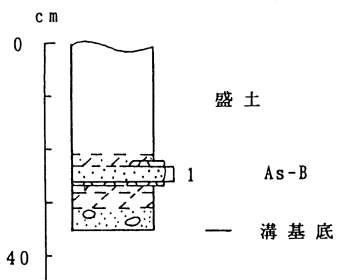
これらのうち成層したテフラ層は、下位より褐色スコリア層(層厚0.4cm、スコリアの最大径3mm)、褐色粗粒火山灰層(層厚4cm)、桃色がかかった褐色細粒火山灰層(層厚0.8cm)の連続から構成されている。このテフラ層は1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅

第1図 試料採取位置図

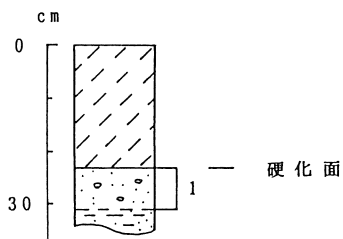




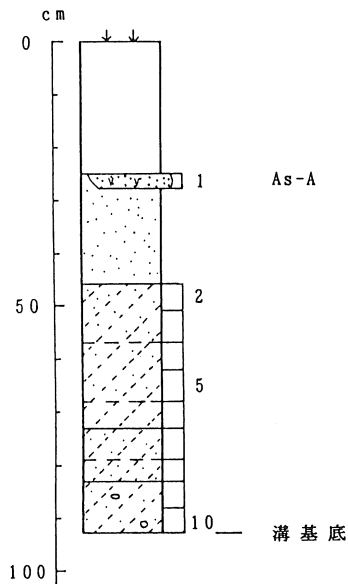
第2図 八日市遺跡 S D45グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



第3図 八日市遺跡 S D46グリッドの土層柱状図



第5図 八日市遺跡 第1号道路跡の土層柱状図



第4図 八日市遺跡 S D15グリッドの土層柱状図

間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に同定される可能性が考えられた。またその上位の青灰色細粒火山灰層は、層相から1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと推定される浅間-粕川テフラ層(As-Kk, 早田, 1991, 未公表資料)に同定される可能性が考えられた。

#### (2) 第46号溝

この溝の覆土は、下位よりれき混じり灰色砂層(層厚4cm, れきの最大径38mm)、暗灰褐色土(層厚3cm)、黒褐色土(層厚1cm)、成層したテフラ層、暗灰色砂質土(層厚0.6cm)、盛土(層厚71cm)の連続が認められた(第3図)。これらのうち成層したテフラ層は、下位より褐色スコリア層(層厚0.4cm, スコリアの最大径3mm)、褐色粗粒火山灰層(層厚3cm)、桃色がかった褐色細粒火山灰層(層厚0.6cm)の連続から構成されている。このテフラ層はAs-Bに同定されると推定された。

#### (3) 第15号溝

この溝の覆土は、下位よりれきおよび砂混じり灰色土(層厚10cm, れきの最大径9mm)、灰色砂質土(層厚4cm)、褐灰色砂質土(層厚6cm)、灰色土(層厚5cm)、灰褐色砂質土(層厚11cm)、砂混じり灰色土(層厚11cm)、黄灰色砂層(層厚18cm)、白色軽石に富む灰色土(層厚3cm)、作土(層厚25cm)から構成されている(第4図)。

#### (4) 第1号道路跡硬化面

ここでは黄灰色砂質シルト層の上位に、下位より円れき混じり灰褐色粗粒火山灰層(層厚8cm, れきの最大径56mm:硬化面)、暗灰色作土(層厚23cm)が認められた(第5図)。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

地質調査時に4地点から採取された14点と、発掘調査担当者により採取された4点の合計18点の試料についてテフラ検出分析を行い示標テフラとの同定を試みることにした。分析の手順は次の通りである。

1) 試料10gを秤量。

2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

3) 80°Cで恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

#### (2) 分析結果

##### 1) 第45号溝

テフラ検出分析の結果を第1表に示す。ここでは試料番号6に比較的良好に発泡した淡褐色軽石が多く認められた。軽石の最大径は1.8mmである。また細粒火山灰層として認められた試料番号5にも、比較的良好に発泡した淡褐色の細粒軽石(最大径1.2mm)が比較的多く含まれている。さらに試料番号1には、よく発泡した灰白色軽石(最大径2.2mm)が比較的多く認められた。

##### 2) 第46号溝

粗粒火山灰層として認められた試料番号1には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石(最大径3.1mm)が多く含まれている。

##### 3) 第15号溝

ここでは、試料番号1によく発泡した灰白色軽石(最大径3.4mm)が多く認められた。これより下位の試料中では、淡褐色の軽石(最大径1.9mm)が少量ずつ検出され、とくに多く含まれる層準は検出されなかった。

##### 4) 第1号道路跡硬化面

試料番号1には、比較的良好に発泡した淡褐色の軽石(最大径3.2mm)が比較的多く含まれている。

##### 5) 預かり試料 試料番号1(第45号溝第9層)

この試料には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石(最大径7.1mm)が多く含まれている。

##### 6) 預かり試料 試料番号2(第15号溝覆土)

この試料にも、比較的良好に発泡した淡褐色軽石(最大径2.9mm)が多く含まれている。

##### 7) 預かり試料 試料番号3(第15号溝覆土)

この試料には、よく発泡した灰白色軽石(最大径3.2mm)が多く含まれている。

##### 8) 預かり試料 試料番号4(旧河道3T第4層)

ここには、あまり発泡のよくない細粒の白色軽石(最大径1.0mm)が少量含まれている。

第1表 八日市遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
SD45	1	++	灰白	2.2
	2	+	淡褐	1.7
	3	++	淡褐	5.2
	4	++	淡褐	2.1
	5	++	淡褐	1.2
	6	+++	淡褐	1.8
-----				
SD46	1	+++	淡褐	3.1
-----				
SD15	1	+++	灰白	3.4
	3	+	淡褐	1.6
	5	+	淡褐	1.9
	7	+	淡褐	1.5
	8	+	淡褐	1.6
	10	+	淡褐	1.3
-----				
第1号道路跡	1	++	淡褐	3.2
-----				
SD45	1* <sup>1</sup>	+++	淡褐	7.1
SD15	2* <sup>1</sup>	+++	淡褐	2.9
SD15	3* <sup>1</sup>	+++	灰白	3.2
旧河道3トレ	4* <sup>1</sup>	++	白	1.0

++++:とくに多い, ++++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない.  
 最大径の単位は, mm, \*1:発掘調査担当者により採取された試料.

第2表 八日市遺跡の屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	gl (n)	opx ( $\gamma$ )	ho (n <sub>2</sub> )
SD45	5	opx, cpx, mt	1.509-1.525	1.707-1.711	—
	6	opx, cpx, mt	1.521-1.532	1.707-1.710	—
-----					
SD15	1	opx, cpx, mt	1.507-1.514	1.707-1.710	—
-----					
旧河道3トレ	4	ho, opx, mt	1.502-1.504	1.709-1.712	1.672-1.680

屈折率の測定は, 位相差法 (新井, 1972) による.

#### 4. 屈折率測定

##### (1) 測定試料と測定方法

地質調査とテフラ検出分析により3層のテフラ層と3種類の軽石が検出された。3種類の軽石は、発泡のよい灰白色の軽石、比較的発泡のよい淡褐色軽石、そして発泡のあまりよくない白色軽石である。実際には比較的発泡のよい淡褐色軽石を含むテフラ層が2層あることから、全体として4層のテフラが検出されたことになる。そこで4層のテフラについて、屈折率測定を行って、よりよい精度で噴出年代が知られている示標テフラとの同定を行うことになった。測定の対象となった試料は、第45号溝試料番号6と5、第15号溝試料番号1、そして預かり試料のうちの試料番号4(旧河道3T)の4試料である。屈折率の測定は、位相差法(新井, 1972)による。

##### (2) 測定結果

屈折率の測定結果を第2表に示す。第45号溝試料番号6には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラス(n)と斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、各々1.521-1.532、1.707-1.710である。第45号溝試料番号5にも、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラス(n)と斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、各々1.509-1.525、1.707-1.711である。

また第15号溝の試料番号1には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラス(n)と斜方輝石( $\gamma$ )の屈折率は、各々1.507-1.514と1.707-1.710である。さらに預かり試料番号4(旧河道3T)には、角閃石、斜方輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラス(n)、斜方輝石( $\gamma$ )、角閃石(n2)の屈折率は、各々1.502-1.504、1.709-1.712、1.672-1.680である。

#### 5. 考察—示標テフラとの同定と遺構の構築年代について

第45号溝試料番号6のテフラ層は、層相、軽石の岩相、重鉱物組成、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、As-Bに同定される。またその上位にある試料番号5のテフラ層は、層位、層相、軽石の岩相、重鉱物

組成、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、As-Kkに同定される。

また第15号溝の試料番号1のテフラ層は、層相、軽石の岩相、重鉱物組成、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A)に同定される。さらに預かり試料のため、産出状況など不明な点もあるものの、預かり試料番号4(旧河道3トレンチ)に含まれる軽石の岩相や含まれる重鉱物の種類、さらに火山ガラス、斜方輝石、角閃石の屈折率などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ層(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来するテフラ粒子が多く含まれているものと考えられる。

第45号溝および第46号溝は、覆土中にAs-Bが認められたことから、その構築年代は1108(天仁元)年以前と推定される。また、第15号溝については、覆土中にAs-Aが検出されたことから、その構築年代は1783(天明3)年以前と推定される。また第1号道路跡硬化面の土層中には、As-B起源の軽石が含まれていたことから1108(天仁元)年以降と考えられる。

#### 6. まとめ

八日市遺跡西地区において地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定の結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間—粕川テフラ(As-Kk, 1128年)、浅間A軽石(As-A, 1783年)が検出された。また榛名二ツ岳渋川テフラ層(Hr-FA, 6世紀初頭)に由来するテフラ粒子も検出された。これらのテフラとの層位関係から、第45号溝および第46号溝の構築年代は1108(天仁元)年以前、第15号溝は1783(天明3)年以前と推定された。また第1号道路跡の硬化面の形成は、1108(天仁元)年以降と考えられた。



## 引用文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p41-52.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.

## 2、出土土器の胎土分析

(株)第四紀地質研究所 井上 巖

### X線回折試験及び化学分析試験

#### 1 実験条件

##### 1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

##### 1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40Kv, Current: 30 mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5SEC。

##### 1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15KV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

#### 2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の

各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバーライト (Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

##### 2-1 組成分類

###### 1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第2図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo, Mi, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) * 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第2図に示す通りである。

###### 2) Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム

第3図に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch)の内、

a) 3成分以上含まれない

b) Mont, Chの2成分が含まれない  
 c) Mi, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。  
 菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば $Mo / (Mo + Ch) * 100$ と計算し、Mi, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1~7は、Mo, Mi, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMo, Mi, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第3図に示す通りである。

## 2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分は、X線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、陶磁器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラス

の単位面積が広く、ガラスは発泡している。

b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

c) 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

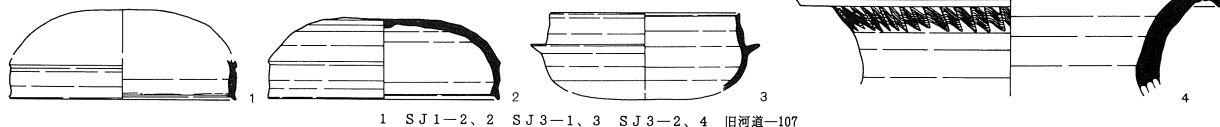
以上のI~Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

## 3) 化学分析結果の取り扱い

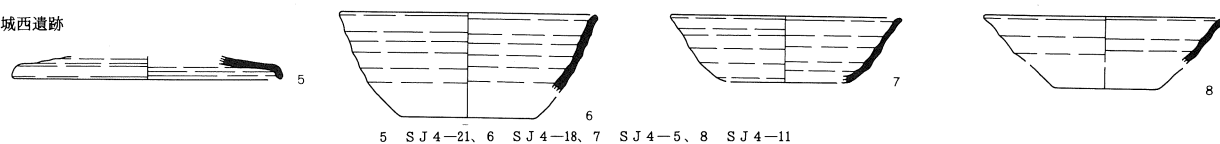
化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO, K<sub>2</sub>O-CaOの各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

## 第1図 胎土分析試料

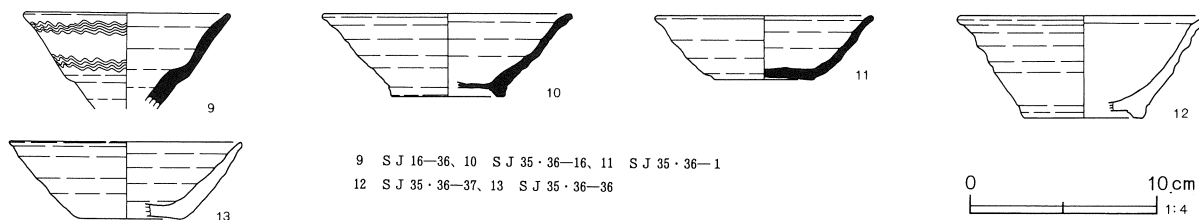
八日市遺跡



城西遺跡



宮ヶ谷戸遺跡



第1表 胎土性状表-1

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物															備考
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス	
福川-1	F		14	20						3538	75	98	107				96			蓋-須恵器-八日市
福川-2	F		14	20						1878	104	986	239	94			214			蓋-須恵器-八日市
福川-3	F		14	20						1856	80	936	225				199			坏-須恵器-八日市
福川-4	F		14	20						2145	131	335	109				91			甕-須恵器-八日市
福川-5	F		14	20						2857	202	191								蓋-須恵器 (南比企)-城西
福川-6	F		14	20						1722	113	941	55							坏-須恵器 (南比企)-城西
福川-7	F		14	20						2819	100	304	96				85			坏-須恵器 (末野)-城西
福川-8	F		14	20						2136	66	584	107				99			坏-須恵器 (末野)-城西
福川-9	F		14	20						3006	86	313	92				96			ハソウ-須恵器-宮ヶ谷戸
福川-10	F		14	20						1759	236	375	89				170			坏-須恵器 (末野) -宮ヶ谷戸
福川-11	F		14	20						1710	87	296	78				67			坏-須恵器 (末野) -宮ヶ谷戸
福川-12	C		7	9		280	142	220		2246	802									坏-須恵器 (末野) -宮ヶ谷戸
福川-13	A		5	20			85			1520	1214	246								坏-須恵器 (末野) -宮ヶ谷戸
森下-1	F		14	20						2550	159	132	85				115			甕-須恵器
森下-2	F		14	20						2413	179	261	62							甕-須恵器
森下-3	F		14	20						1907	148	202	70				72			甕-須恵器
森下-4	F		14	20						3267	198	155	92				152			甕-須恵器
光山-1	F	I	14	20						2305	97	124	140				134			坏-須恵器 (東海?) 7 C M
光山-3	F	I	14	20						2162	90	1326	190				155			坏-須恵器-鳩山 8 C E
坂東山西-7	F		14	20						3514	88	156	119							坏-平安-東金子
坂東山西-8	F		14	20						2498	85	181	88							坏-平安-東金子
坂東山西-9	F		14	20						1566	96	151	166				175			坏-平安-東金子
稲荷前-1	F		14	20						3360	229	621	108							
稲荷前-2	F		14	20						2912	258	552	75							
稲荷前-3	F		14	20						3007	197	650	95				96			
稲荷前-4	F		14	20						3810	150	222								
稲荷前-5	F		14	20						2123	205	1146	115				113			
稲荷前-6	F		14	20						3581	115	829	184				166			
稲荷前-7	F		14	20						3327	158	245	84							
稲荷前-8	F		14	20						4012	115	817	180				95			
稲荷前-9	F		14	20						3012	109	941	109				110			
稲荷前-10	F		14	20						3318	225	224	62							
稲荷前-11	F		14	20						3328	163	946	90				84			
稲荷前-12	F		14	20						2507	142	1289	147				152			
稲荷前-13	F		14	20						3705	230	592	69				67			
稲荷前-14	F		14	20						2541	256	832	171				167			
稲荷前-15	F		14	20						2388	117	954	204				219			
稲荷前-16	F		14	20						3186	777									
稲荷前-17	F		14	20						2002	160	257								

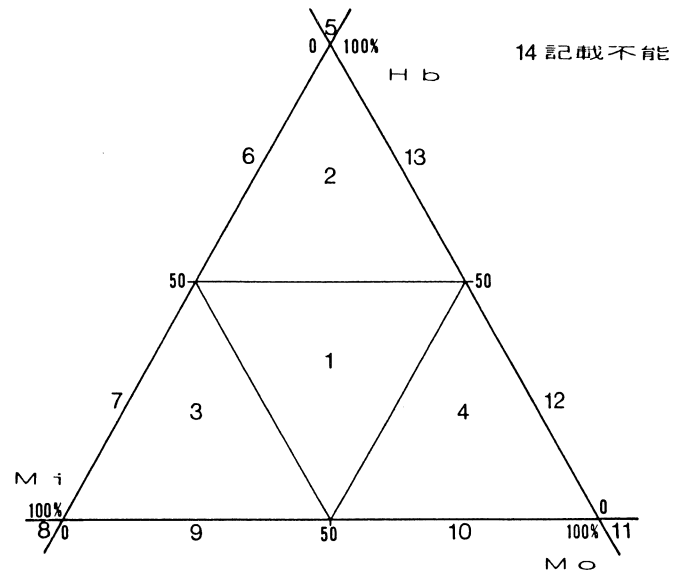
第1表 胎土性状表-2

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														備考	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au		ガラス
稲荷前-18	F		14	20						1372	123	956	224				198			
稲荷前-19	F		14	20						1967	887	141	77							
稲荷前-20	A		5	20				134		3113	197									
稲荷前 (A) -21	A		5	20				67		2354	191	213								坏
稲荷前 (A) -22	F		14	20						2183	130	1025	159				180			坏
稲荷前 (A) -23	A		5	20				83		3468	438	226								坏
稲荷前 (A) -24	F		14	20						3340	166	940	60							坏
稲荷前 (A) -25	F		14	20						2966	113	285								坏
稲荷前 (A) -26	F		14	20						2649	163	280								蓋
稲荷前 (A) -27	F		14	20						2882	147	205								坏
稲荷前 (A) -28	A		5	20				71		3231	203	509	58							坏
稲荷前 (A) -29	A		5	20				70		3280	354	224								坏
稲荷前 (A) -30	A		5	20				70		3432	287	201								坏
稲荷前 (A) -31	F		14	20						3052	191	1135	79				72			坏
稲荷前 (A) -32	A		5	20				92		2966	501									坏
稲荷前 (A) -33	F		14	20						3462	161	283								坏
稲荷前 (A) -34	F		14	20						3194	138	1200	104				98			坏
稲荷前 (A) -35	F		14	20						3308	134	633	73				73			坏
稲荷前 (A) -36	F		14	20						2799	107	154	125				112			坏
鳩山窯址-1	F	I	14	20						3189	174	949	162				221			坏—須恵器、8 C L
鳩山窯址-2	F	I	14	20						1766	108	563	219				213			坏—須恵器、8 C E
鳩山窯址-3	F	I	14	20						1612	160	472	218				179			坏—須恵器、8 C E~8 C M
鳩山窯址-4	F	III	14	20						3448	231	185								坏—須恵器、8 C L~9 C E
鳩山窯址-5	F	III	14	20						3143	279	199								坏—須恵器、8 C M~8 C L
鳩山窯址-6	F	I~II	14	20						3188	171	196								碗—須恵器、8 C L
鳩山窯址-7	F	I~II	14	20						2781	188	386	82				82			蓋—須恵器、8 C L
鳩山窯址-8	F	I	14	20						3154	275	276	70							坏—須恵器、8 C M~8 C L
鳩山窯址-9	F	III	14	20						2413	174	217	83							坏—須恵器、8 C E
鳩山窯址-10	F	I	14	20						2617	121	980	139				120			坏—須恵器、9 C E
鳩山窯址-11	F	I	14	20						1731	107	815	209				183			蓋—須恵器、8 C M~8 C L
鳩山窯址-12	F	III	14	20						3507	325	214								坏—須恵器、8 C M~8 C L
鳩山窯址-13	F	I	14	20						2624	325	1029	145				135			坏—須恵器、8 C L
鳩山窯址-14	F	I	14	20						2389	137	1221	128				110			坏—須恵器、8 C L
鳩山窯址-15	F	I	14	20						1666	92		300				259			坏—須恵器、8 C L
鳩山窯址-16	F	III	14	20						2764	452	278								坏—須恵器、8 C L
鳩山窯址-17	F		14	20						4384	340	205								坏—須恵器、8 C L
鳩山窯址-18	F		14	20						2985	132	822	164				143			坏—須恵器、8 C L
鳩山窯址-19	F		14	20						2427	111	221	74							坏—須恵器、9 C M
鳩山窯址-20	F		14	20						3025	85	1090	121				108			坏—須恵器、8 C L

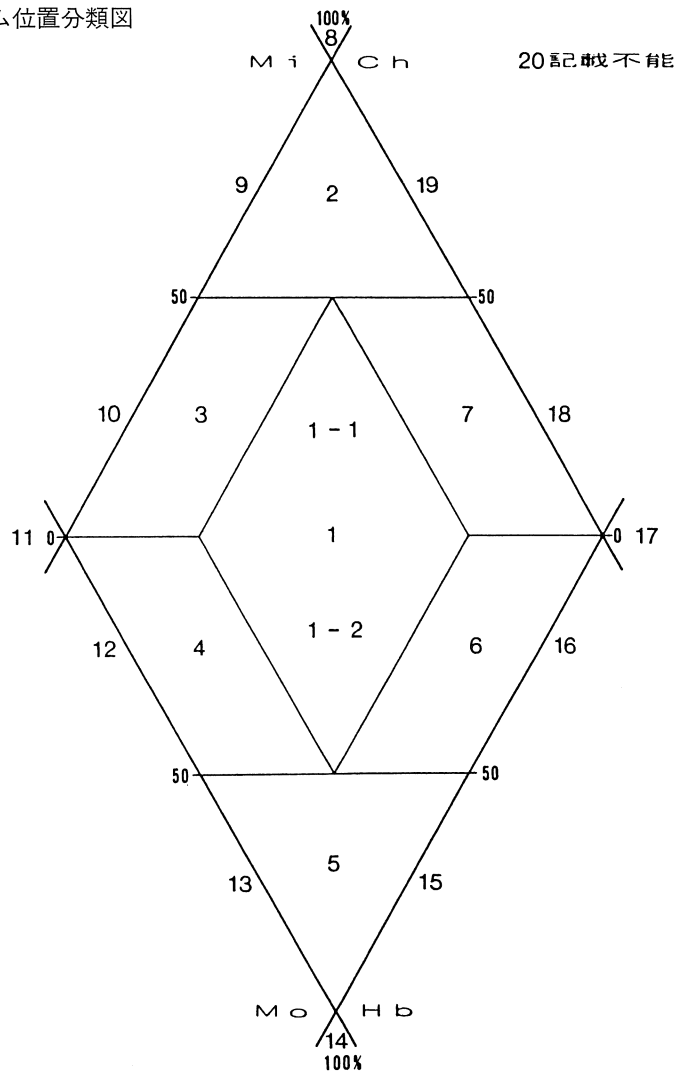
第1表 胎土性状表-3

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物															備考
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス	
鳩山窯址-21	F		14	20						2539	216	234	73							坏-須恵器、9 C M
桜沢-1	D	III	7	20		154	130			2240	543	95								坏10 C E
桜沢-2	F	I ~ II	14	20						1700	329	138								皿10 C E
桜沢-3	F	II	14	20						1221	200	302	41							高台付坏10 C E
上敷免-61	F		14	20						540	487	823								須恵器
上敷免-62	F		14	20						1271	981	242								須恵器
上敷免-63	F		14	20						1069	497	196								須恵器
上敷免-64	B		6	20		121	190			1550	357	87								須恵器
上敷免-65	E		8	20		83				1326	705	190	67							須恵器
上敷免-66	D		7	20		99	56			1923	432	114								須恵器
上敷免-67	F		14	20						1919	204	192								須恵器
上敷免-68	F		14	20						1804	160	196	88							須恵器
上敷免-69	D		7	20		86	62			2666	844	104								須恵器
上敷免-70	A		5	20			88			1184	1185	238								須恵器
金井窯址-1	F		14	20						2817	218	833	125							須恵器、蓋
金井窯址-2	D		7	20		95	79			4027	541									須恵器、蓋
金井窯址-3	F		14	20						2571	170	818	132	195						須恵器、蓋
金井窯址-4	F		14	20						2373	110	1091	173	169						須恵器、坏身
金井窯址-5	F		14	20						2457	106	1004	202			178				須恵器、盤
金井窯址-6	F		14	20						3678	108	880	195							須恵器、大甕
金井窯址-7	F		14	20						3682	102	799	164							須恵器、大甕
金井窯址-8	F		14	20						4004	92	1032	143							須恵器、大甕
金井窯址-9	F		14	20						2606	101	739	201							須恵器、大甕
金井窯址-10	F		14	20						2314	93	1128	174							須恵器、大甕
金井窯址-21	F		14	20						2439	73	773	177			148				須恵器、蓋
金井窯址-22	F		14	20						1896	93	706	182			176				須恵器、蓋
金井窯址-23	F		14	20						2324	101	317	145			139				須恵器、坏
金井窯址-24	B		6	20		96	97			1690	559	154								須恵器、坏
金井窯址-25	D		7	20		71	71			2377	368	128								須恵器、坏
秋間-1	F		14	20						3152	91	535	169							須恵器、坏
秋間-2	F		14	20						1696	102	312	101			84				須恵器、坏
秋間-3	F		14	20						3775	76	934	110	88						須恵器、坏
秋間-4	F		14	20						5116	66		68							須恵器、坏
秋間-5	E		8	20		175				3944	164					154				須恵器、坏

第2図 三角ダイヤグラム位置分類図



第3図 菱形ダイヤグラム位置分類図



### 3 X線回折試験結果

#### 3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表に示すように、周辺あるいは関連する遺跡から出土した遺跡も記載してある。これら全体に対するタイプ分類を行い、A～Fの6タイプに分類された。宮ヶ谷戸・八日市・城西遺跡に対しては統一的に福川遺跡という名称を使用した。

福川遺跡と森下遺跡から出土した土器はA、C、Fの3タイプである。

Aタイプ：Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。福川-13の土器。

Bタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。福川-12の土器。

Fタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。高温焼成により、鉱物が分解してガラスに変化したもの。福川-12・13を除くすべて。

以上の結果から明らかな様に、福川、森下各遺跡から出土した須恵器のほとんどは高温焼成されたものである。このため本来の鉱物はガラスに変わっている。

#### 3-2 石英(Qt)―斜長石(Pl)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。

第4図Qt―Pl図(総合)に示すように、土器はI～IVの4グループと“その他”に分類された。Pl(斜長石)の強度が $200$ 以下の領域でグループを形成するのは高温

焼成された土器で、 $200$ 以上の領域に分布する土器は焼成ランクが高くないものである。

Iグループ：福川遺跡から出土した坏が集中し、稲荷前、上敷免東、鳩山窯址の土器と混在する。福川遺跡のなかの宮ヶ谷戸、八日市、城西遺跡の末野タイプの坏が含まれる。

IIグループ：鳩山窯址、稲荷前の土器が集中する。このグループには藤岡市の金井窯址の須恵器も集中している。森下遺跡の甕も混在する。

IIIグループ：稲荷前の土器が集中し、鳩山窯址の土器が共存する。城西の坏、宮ヶ谷戸の甕、森下の甕が混在する。

IVグループ：稲荷前の土器が集中し、八日市の蓋が混在する。秋間の坏と金井窯址の土器も混在する。

“その他”：Plの強度が $200$ 以上の領域には上敷免の土器が多く分布する。上敷免の土器はQt(石英)の強度が $2000$ 以下の領域に分布する。桜沢窯址の土器はPlの強度が $200\sim 600$ の範囲で、Qtが $2500$ 以下の領域で分布する。鳩山窯址と稲荷前の土器のうち、焼成ランクの低いものはPlの強度が $200$ 以上で、Qtの強度が $2000$ 以上の領域に分布する。

以上の結果から明らかな様に、各グループは遺跡毎に特性がでている。

第5図には福川遺跡の土器と森下遺跡の土器だけを記載した。

Iグループ：八日市の坏・蓋・甕、城西の坏で末野タイプ、宮ヶ谷戸の坏で末野タイプ、森下の甕で構成される。このグループには末野タイプの土器が集中する。

IIグループ：森下の甕が集中する。

IIIグループ：城西の南比企タイプと末野タイプの坏と宮ヶ谷戸の甕、森下の甕で構成され







る。

IVグループ：八日市の坏だけが含まれる。

“その他”：宮ヶ谷戸—12・13は末野タイプの坏でPIの強度が高く、異質である。

#### 4 化学分析結果

化学分析は第2表化学分析表に示すように、福川、森下遺跡出土土器と周辺の遺跡及び関連する遺跡の土器の分析値を記載してある。分析は10成分で、分析結果に基づいて、SiO<sub>2</sub>—Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>—MgO図、K<sub>2</sub>O—CaO図を作成し、検討した。

##### 「4—1 SiO<sub>2</sub>—Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の相関について」

第6図SiO<sub>2</sub>—Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図には福川と森下遺跡の土器、第7図SiO<sub>2</sub>—Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図は総合図として作成した。

第7図に示すように、A—A'線を境として大きく2分され、更にI～VIIIの8グループと“その他”に分類された。

A—A'線より左側の領域には上敷免、桜沢の土器と福川の土器がI～IVの4グループに分れて分布し、右側の領域には稲荷前、鳩山窯址、福川の土器及び藤岡市の金井窯址、安中市の秋間窯址の土器V～VIIIの4グループに分れて分布する。左側の領域をA、右側の領域をA'とする。

##### —A領域—

Iグループ：桜沢窯址の土器で構成される。

IIグループ：福川のうち宮ヶ谷戸の末野タイプの土器と森下の甕が集中する。

IIIグループ：上敷免の土器で構成される。

IVグループ：上敷免の土器で構成される。

##### —A'領域—

Vグループ：藤岡市の金井窯址の土器が集中する。

VIグループ：鳩山窯址の土器が集中し、稲荷前の土器も共存する。福川の城西遺跡の末野タイプの土器が集中する。

VIIグループ：稲荷前の土器が集中し、福川—1の八日市の蓋が混在する。

VIIIグループ：稲荷前の土器が集中し、鳩山窯址の土器が混在する。福川—6の城西遺跡の南比企タイプが混在する。

“その他”：福川—3の八日市遺跡の坏と5の城西遺跡の南比企タイプの蓋はどのグループにも属さず、異質である。

第6図に示すように、福川と森下の土器はIIグループとVIグループに集中する。IIグループには宮ヶ谷戸の末野タイプの土器と森下の甕が集中する。VIグループには城西遺跡の末野タイプと宮ヶ谷戸の土器が集中する。福川—2・3・4・5の4個はI～VIIIのどのグループにも属さず、異質である。

##### 「4—2 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>—MgOの相関について」

第8図Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>—MgO図(福川他)、第9図Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>—MgO図(総合)に示すように、土器はI～VIIIの8グループと“その他”に分類された。

Iグループ：金井窯址の土器が集中し、福川—2・4、鳩山窯址、稲荷前の土器が混在する。

IIグループ：福川と森下の土器が共存し、上敷免、稲荷前、坂東山西の土器が混在する。

IIIグループ：稲荷前と鳩山窯址の土器が集中し、福川の土器が混在する。

IVグループ：福川と稲荷前の土器が共存する。

Vグループ：鳩山窯址の土器が集中し、稲荷前の土器が共存する。

VIグループ：稲荷前の土器が集中し、鳩山窯址の土器が共存する。

VIIグループ：上敷免の土器が集中し、福川と森下の土器が混在する。

VIIIグループ：桜沢の土器だけで構成される。

“その他”：上敷免の土器は8グループに属さないものがあり、異質である。福川—3・9もどのグループにも属さず異質。

第8図に示すように福川の土器はI～IVとVIIの5グループ

プと“その他”に分類された。Iグループには八日市の土器、IIグループには城西の末野タイプの土器と森下の甕、IIIグループには城西の南比企と末野タイプの土器、IVグループには宮ヶ谷戸、八日市、城西、森下の土器が混在する。VIIグループには宮ヶ谷戸の末野タイプの土器と森下の甕が混在する。“その他”の3は八日市の坏、9は宮ヶ谷戸の甕で、異質である。

#### 「4-3 K<sub>2</sub>O—CaOの相関について」

第10図K<sub>2</sub>O—CaO図(福川他)、第11図K<sub>2</sub>O—CaO図(総合)に示すように、土器はI～Vの5グループと“その他”に分類された。

Iグループ：鳩山窯址の土器が集中し、稲荷前の土器が共存する。福川と金井窯址の土器が混在する。

IIグループ：稲荷前の土器が集中し、福川の土器が混在する。

IIIグループ：鳩山窯址と稲荷前の土器が集中し、金井窯址の土器が共存する。福川の土器が混在する。

IVグループ：上敷免と桜沢窯址の土器が集中する。

Vグループ：福川と森下の土器が集中し、上敷免と稲荷前の土器が混在する。

“その他”：CaOが1.5%以上の領域には上敷免の土器が分布し、明らかに異質である。福川—12・13もCaOの値が1.0%以上の領域にあり、異質。福川—9はK<sub>2</sub>Oが3%以上と高く異質である。

第10図で明らかな様に、Iグループには八日市の土器と城西の土器、IIグループには城西、IIIグループには城西と宮ヶ谷戸、Vグループには森下の甕と宮ヶ谷戸・八日市・城西の土器が分布し、どのグループにも属さない土器

は9の宮ヶ谷戸の甕、12と13の宮ヶ谷戸の末野タイプの坏で、異質である。

#### 5 まとめ

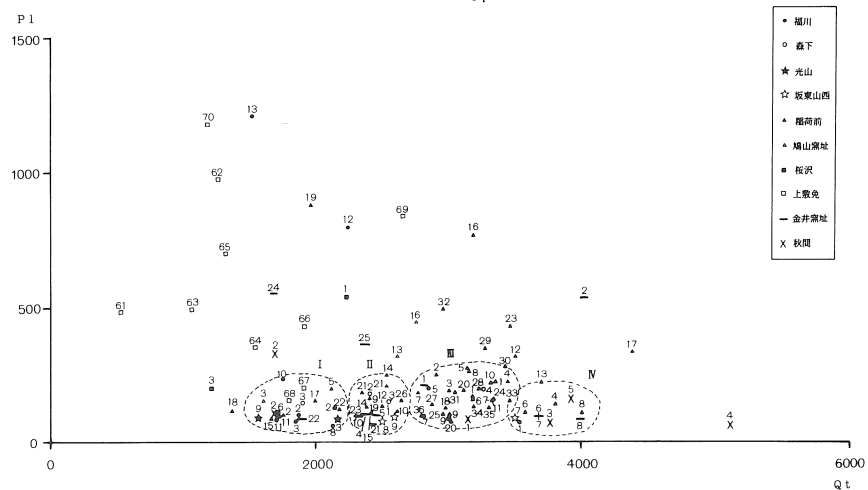
1) 土器胎土のタイプ分類は福川遺跡と福川遺跡に関連する遺跡の土器全体で行った。その結果A～Fの6タイプに分類された。最も多いFタイプは高温焼成のために本来の鉱物変質してガラスになったものである。A～Eのタイプは焼成ランクが低く、鉱物が残ったものである。A～Eのタイプは非常に少ない。

2) Qt—Plの相関によれば、Plの強度が200以下の領域に福川、鳩山窯址、稲荷前、金井窯址の土器が分布し、稲荷前と鳩山は共存して3グループに分れる。上敷免と桜沢窯址の土器はPlの強度が200以上の領域に分散して分布し、明瞭に分れる。Iグループには福川の末野タイプの坏が集中する。IIIグループには宮ヶ谷戸と城西の土器が分布する。“その他”の福川—12・13は宮ヶ谷戸の末野タイプの坏でPlの強度が高く異質である。

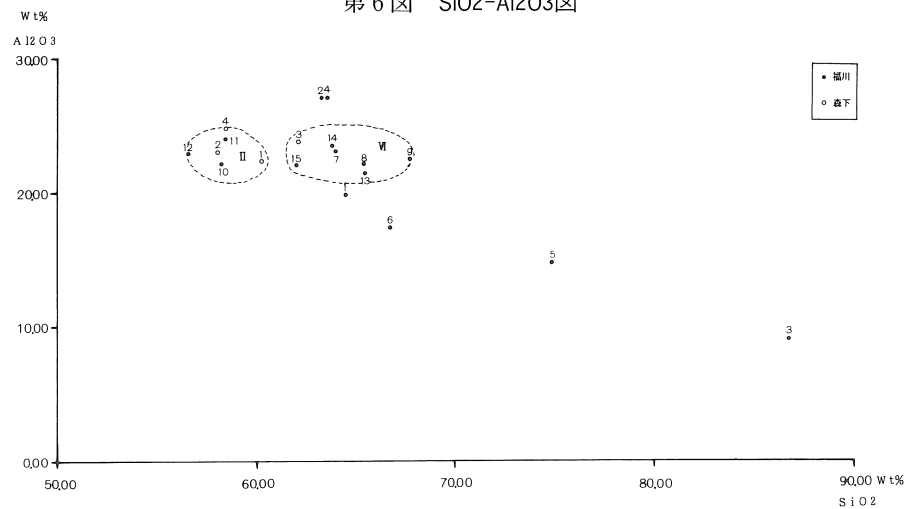
3) SiO<sub>2</sub>—Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の相関では、A—A'線の左側のA領域と右側のA'領域に分れ、A領域には桜沢窯址、上敷免、福川の一部が分布し、A'領域の鳩山窯址、稲荷前、金井窯址の土器とは明瞭に分れる。A'領域のなかでは稲荷前、鳩山窯址の土器は混在してグループを形成するが金井窯址の土器は独自のグループを形成する。A'領域のなかで福川の土器は鳩山窯址と稲荷前の土器と共存する。Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>—MgOの相関でも同じ傾向が認められる。金井窯址の土器は独自のグループを形成し、上敷免の土器はグループ外、稲荷前と鳩山窯址は共存してグループを形成する。福川の土器は鳩山窯址と稲荷前の土器と共存するものと分れてグループを形成するものとに分れる。

K<sub>2</sub>O—CaOの相関では、桜沢窯址と上敷免の土器はCaOの高い領域に分布し、明瞭に鳩山窯址と稲荷前の土器とは分れる。

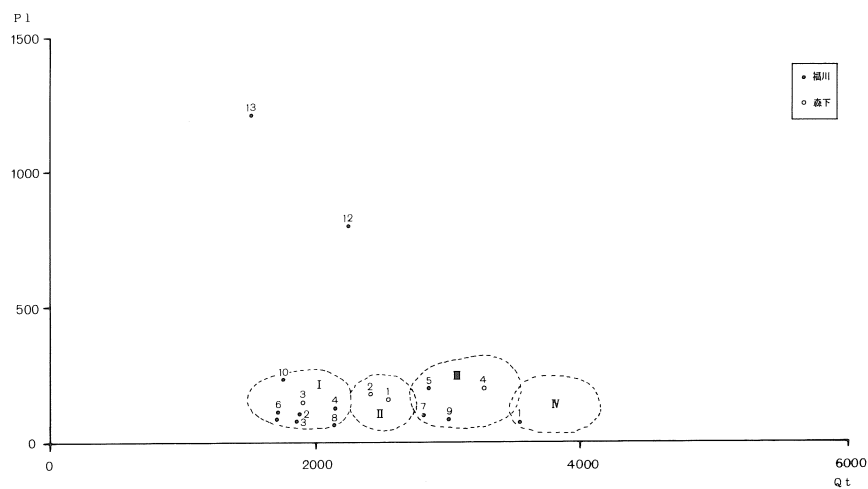
第4図 Qt-Pl図



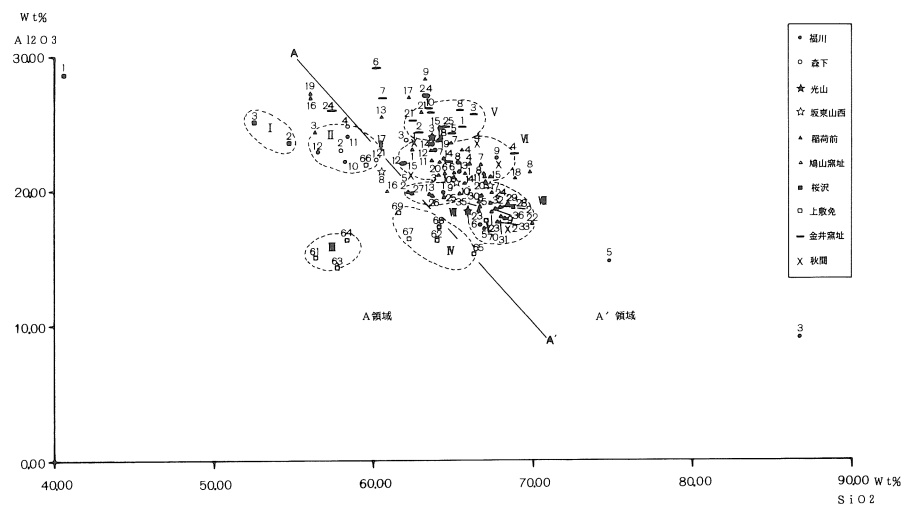
第6図 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図



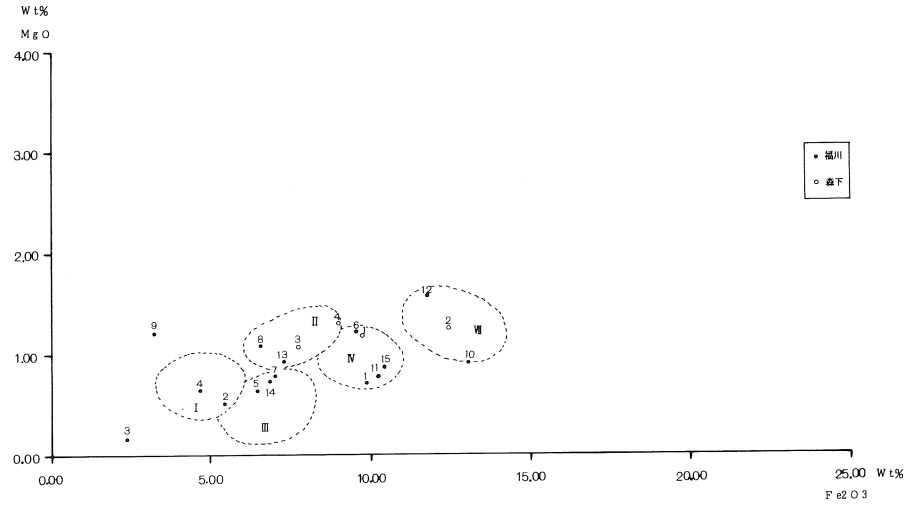
第5図 Qt-Pl図



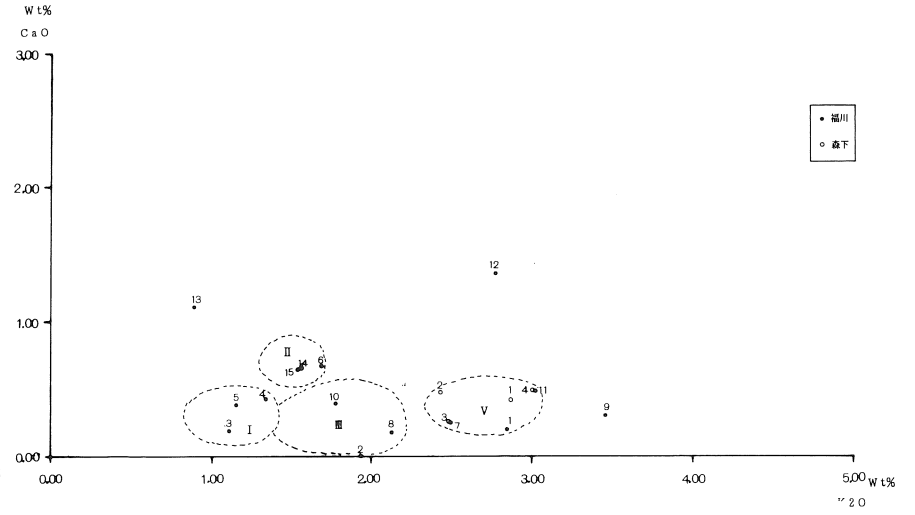
第7図 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図



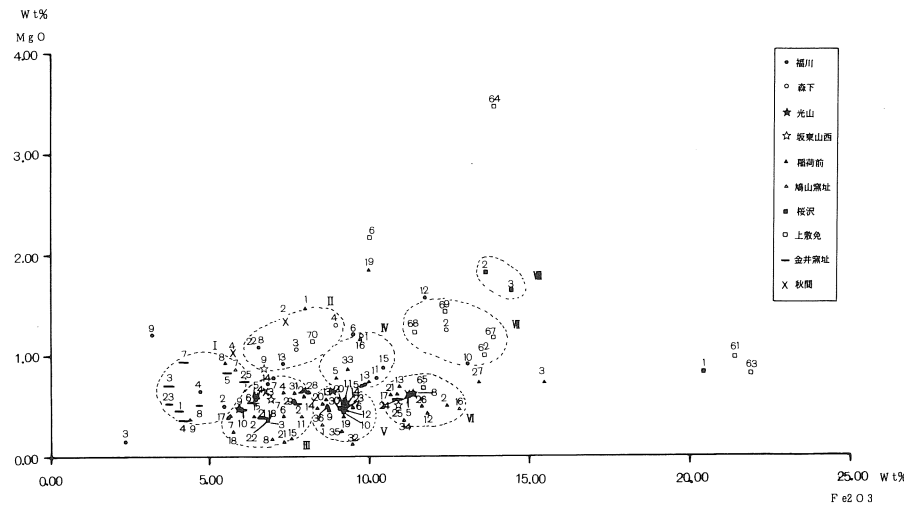
第8図 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO図



第10図 K<sub>2</sub>O-CaO図



第9図 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO図



第11図 K<sub>2</sub>O-CaO図

